中臣祓を註解し、以て神道の奥義を闡明したるもの。著者晩年の作なりと云ふ。

◎山崎嘉の傳は『垂加文集』の下にあり。

なかとみのはらひふうそくわんき
中臣祓風水草管窺 寫一卷
玉木 正英

山崎嘉の『中臣祓風水草』を更に註釋したるものにして、單に『風水草管窺』として行はるゝもあり。享保四年己亥(一七一九)八月の奥書、同五年庚子三月の自跋等あり。

◎玉木正英の傳は『玉籤集』の下にあり。

なかとみのはらひみづほせう
中臣祓瑞穗抄 二卷 出口 延佳

中臣祓の講義なり。後西院天皇の萬治二年己亥(一六五九)伊勢の八木但州といふ人の爲に說きたるものなりと云ふ。

◎出口「度會」延佳の傳は『伊勢太神宮神異記』の下にあり。

なかとみのはらひもろはぐさ
中臣祓諸葉草 寫二卷

中臣祓の註釋なり。元祿二年己巳(一六八九)七月、鵜飼之の序に「垂加翁かつて風水草をあらはして以て之れが祕を啓く、實に後世に功あり。今雲窗博く古書に據りてまた此編をのぶ。旁通の功夫發明するところ多し。蓋延喜式にのするところの大祓の微意に因て諸葉草を以てこれに名づく」云々と記せり。

なかとみのよごと
中臣壽詞 寫一卷

賴長の『古記別記』『康治元年十一月大嘗會記』の中なる中臣壽詞を抄錄したるものなり。

なかとみふ
中臣譜 寫一卷

古事記、書紀、姓氏錄等より、天御中主命より十代天津兒屋根命二十一世可多能祐大連までを抄出したるものなり。

なかはらけいづ
中原系圖 寫一卷

中原氏は本姓十市宿禰なり。本系は太宰少典從五位下勝夏より、彼十代にして、周防守親敎の子孫に至る。『續群書類從』卷百六十五、系圖部六十に收む

なかはらもろさみき
中原師富記 寫一卷 中原 師富

此の書は一名『大外記師富記』の下に解題せり。

なかはらもろひさのき
中原師尙記 寫一卷 中原 師尙

仁平三年癸酉(一一五三)五月の、著者の日記なり。著者中原師尙は、大外記なり。

ながびつ
長櫃 一卷 閑齋

著者嘗て古郷吉備より出でて奥州に遊行し、還るさの土産にとて、諸家の贈句を集めたり。文化十四年丁丑(一八一七)飯津倉李人の跋あり。

なかふみしふ
仲文集 一卷 仲文

此の書は著者の歌集にして、俳諧體のもの多し。

ながまさき
長政記 寫一卷 黑田 一成

筑前大守黑田長政が戰功忠烈の一端を略記したるもの。長政の歿後、其の家臣睡鷗なして錄せしめたるものにて、一言を錯らず、且諸書記に載するところと比較するに差異するところなく眞の實記なりとて、元祿五年壬申(一六九二)貝原篤信の奥書なり。

◎黑田一成は、本姓は加藤にして、初め三左衞門と稱し、中間業作と稱し、祝髮して睡鷗と號せり。幼より黑田長政に仕へて、武事にならひ、驍勇にして戰功ありし人なり。

なかむらかずうぢのき
中村一氏記 寫一卷 中村 一氏

天正十年壬午(一五八二)以後の戰爭雜事を記したるものなり。『續群書類從』卷五百九十四、合戰部第二十四に收む。

◎中村一氏は初め孫平次と稱し、從五位下に敍し、式部少輔に任ぜらる。天正五年吉吉秀吉に屬して、堀尾吉晴と兵に大阪一向徒を討ち、應軍功ありたれば、秀吉岸和田城を授く。爾來戰爭に寧日なく、同十八年秀吉の小田原征伐に拔群の統あり、遂に駿河に封ぜられて十四萬石を受く、慶長三年戊戌(一五九八)七月擢でられて中老職となり、天下の政治に參預す、翌て秀吉薨し、一氏もまた病に罹るに慶長五年の秋、德川家康東征して駿府に入るに際し、後事を託して、遂に發す。一源心と法名し、大

ながまさき
長政記 寫一卷 黑田 一成

筑前大守黑田長政が戰功忠烈の一端を略記したるもの。長政の歿後、其の家臣睡鷗なして錄せしめたるものにて、一言を錯らず、且諸書記に載するところと比較するに差異するところなく眞の實記なりとて、元祿五年壬申(一六九二)貝原篤信の奥書なり。

◎黑田一成は、本姓は加藤にして、初め三左衞門と稱し、中間業作と稱し、祝髮して睡鷗と號せり。幼より黑田長政に仕へて、武事にならひ、驍勇にして戰功ありし人なり。

なかむらかずうぢのき
中村一氏記 寫一卷 中村 一氏

天正十年壬午(一五八二)以後の戰爭雜事を記したるものなり。『續群書類從』卷五百九十四、合戰部第二十四に收む。

◎中村一氏は初め孫平次と稱し、從五位下に敍し、式部少輔に任ぜらる。天正五年吉吉秀吉に屬して、堀尾吉晴と兵に大阪一向徒を討ち、應軍功ありたれば、秀吉岸和田城を授く。爾來戰爭に寧日なく、同十八年秀吉の小田原征伐に拔群の統あり、遂に駿河に封ぜられて十四萬石を受く、慶長三年戊戌(一五九八)七月擢でられて中老職となり、天下の政治に參預す、翌て秀吉薨し、一氏もまた病に罹るに慶長五年の秋、德川家康東征して駿府に入るに際し、後事を託して、遂に發す。一源心と法名し、大

ながまさき
長政記 寫一卷 黑田 一成

筑前大守黑田長政が戰功忠烈の一端を略記したるもの。長政の歿後、其の家臣睡鷗なして錄せしめたるものにて、一言を錯らず、且諸書記に載するところと比較するに差異するところなく眞の實記なりとて、元祿五年壬申(一六九二)貝原篤信の奥書なり。

◎黑田一成は、本姓は加藤にして、初め三左衞門と稱し、中間業作と稱し、祝髮して睡鷗と號せり。幼より黑田長政に仕へて、武事にならひ、驍勇にして戰功ありし人なり。

なかむらしんたいき
中村進退記 寫一卷

元祿二年己巳(一六八九)六月、土佐國山内大膳亮領地三萬石召上げられ、大膳亮父子、遠州濱松城主青山下野守へ預けらるゝ時の記錄を集めたるもの。『續群書類從』に收めらる。

ながもときやうき
長基卿記 寫一卷

延慶二年己酉(一三〇九)十月二十一日の大嘗會御覩の記なり。本書は『群書類從』本により、『延慶二年大嘗會御覩記』の下にも出せり。著者長基は時に正三位たりき。今その詳傳を知り難し。

なかやどり
中やどり 一冊

鴨前の中澤及び涼菟等の編述せる俳句集にて、寶永二年乙酉(一七〇五)京都にて出版したるもの也

なかやまけき
中山家記 寫一卷

新作大臣大將雜例、大判事明世大饗記、大饗具調進物事、大饗編目、室町家大饗事等を輯錄したるものなり。

なかやまでらいゆき
中山寺來由記 寫一卷

攝州河邊郡紫雲山中山寺の由來を略記したるも

龍院と號す。

なかむらしんたいき
中村進退記 寫一卷

元祿二年己巳(一六八九)六月、土佐國山内大膳亮領地三萬石召上げられ、大膳亮父子、遠州濱松城主青山下野守へ預けらるゝ時の記錄を集めたるもの。『續群書類從』に收めらる。

ながもときやうき
長基卿記 寫一卷

延慶二年己酉(一三〇九)十月二十一日の大嘗會御覩の記なり。本書は『群書類從』本により、『延慶二年大嘗會御覩記』の下にも出せり。著者長基は時に正三位たりき。今その詳傳を知り難し。

なかやどり
中やどり 一冊

鴨前の中澤及び涼菟等の編述せる俳句集にて、寶永二年乙酉(一七〇五)京都にて出版したるもの也

ながらのやまかぜ
長等山風 寫五卷 伴 信友

大友天皇の事績を記したるもの。此の天皇の事績「日本書紀」には洩れたるを、德川光圀の「大日本史」には、別に「大友天皇紀」を撰びて皇統に竝てしとも、其の引證記述に省略する所ありとて、本書を作りて之を補ひたるものなり。

◎伴信友の傳は『古事遺傳考』の下にあり。

なきさのたま
奈岐左の玉 一卷 木村 孔恭

古來寄貝を詠じたる古歌等を引て考證したるもの。安政四年丁巳(一八五七)の刊行に係れり。

◎木村孔恭の傳は『一角纂考』の下にあり。

なきさのたま
渚の玉 五卷

三代集秀歌、對類和歌、三諦、七喩、十如是、二十八品の歌、いろは四十七首、撰歌合、曙夕暮百首、大社奉納三十一字等、種々の歌を拾集したるもの。題號は龜鳥藥に「伊勢の海の清き渚の鹽がひになのりそやうまん貝やひろはん玉やひろはん」といへるによりて名けたるなるべし。寶永四年丁亥(一七〇七)出版す。

なきさのにしき
渚の丹敷 二卷 曾 永年

『續群書類從』卷八百〇二、釋家部第八十七に收む。

介類の解説にして、着色圖を插入す。享和三年癸亥〔一八〇三〕の作にかゝる。著者曾永年は別に「春の七草」の著あり。

なぎなた

長刀　一册

俳諧の集なり。何時何人が編輯したるものなるか、明記なくて知りがたし。

なぐさのはまづと

なぐさの濱づと　本邦一卷

本居大平

寛政六年甲寅〔一七九四〕十月、宣長翁に從ひて紀伊國を遊歷して京都に出で、十二月に至りて江戸に歸りたる時の紀行和歌を集錄したるもの。卷末に「此紀行をなぐさのはまづとと名つけて、心なきあまりしはざもかきつめて、見れはなぐさの濱つとぞかし、大平」と記せり。

◎本居大平の傳は「古學要」の下にあり。

なぐさめぐさ

慰草　八卷　松永貞德

徒然草の註釋なり。林道春の「野槌」に基き、其の上に各段の大意を概括して記したるものなり。慶安五年壬辰〔一六五二〕の自跋あり。

◎松永貞德の傳は「歌林雜話」の下にあり。

なぐさめぐさ

なぐさめ草　一卷　僧　正徹

應永二十五年戊戌〔一四一八〕秋七月十八日、書き記したる紀行文なり。「群書類從」卷三百三十四、紀行部第八に收む。

◎正徹の傳は「草根和歌集」の下にあり。

なことむすびのもとゐ

名言結本末　本邦一卷　五十嵐篤好

言語に本末ある事を說明し、言語を內言、外言等に分ちて、外言の「ゆかしし」は來なりと說く類なり。天保十一年庚子〔一八四〇〕の作なり。

◎五十嵐篤好の傳は「新器測量法」の下にあり。

なごやかつせんき

名古屋合戰記　一卷

永正中、織田信秀、今川氏の鎭城名古屋城を謀奪する始末を記せり。「續群書類從」卷五百九十九、合戰部第二十九にも收めたり。

なごやのにつき

名古屋の日記　本邦一卷　本居大平

本居宣長が名古屋なる門弟の請に應じ、手挌庭及び稻懸大平を伴ひて、伊勢の松坂より彼の地に趣きたる時の日記にして、此の三人をはじめ門人數名の和歌をも多く輯錄したり。

◎本居大平の傳は「古學要」の下にあり。

なごやまちなみき

名古屋町並記　本邦一卷

尾張名古屋町の來歷變遷の記なり。奥書に「此の書寬延三年〔一七五〇〕名古屋町名の來由を尋ねられし時書上しまゝを取集め寫せしものなり」云々とあり。

なしもとしふ

梨本集　一卷　戶田茂睡

歌學の書にて、近體の小點の詞、よむまじき詞などいひ傳へたる詞どもを擧げて考論したる者なり。

◎戶田茂睡の傳は「梨の一本」の下にあり。

なすき

那須記　本邦八卷　大金重賴

始祖藤權守貞信が、陸奥國白河郡八溝山の鬼神を退治したる賞によりて、下野國那須の守護を得てより、數代慶長五年庚子〔一六〇〇〕天下太平の後四千石を賜りし事までの歷代事實を記せり。延寶六年戊午〔一六七八〕高梨菜の序あり。

◎大金重賴は對馬守と稱す、本書は其の裔大金重貞が祖先重賴の稿を保存せるものなり。

なすくひさし

茄子喰さし　一册　鈴木信房

本書は著者の俳句の集なり。貞享比の作なるべし。

◎鈴木信房は京の俳諧者なり。初、松永貞德の門に入り、後、高瀨梅盛の弟子となれり。

なすけいづ

那須系圖　本邦一卷

天智天皇の二年己巳〔一三二九〕十月十三日始めて藤原姓を賜りし大織冠鎌足を祖として、寬永元年甲子〔一六二四〕正月朝日秀康の命を以て美濃守に任ぜられたる與一資重その妹某までを列れ記せり。「續群書類從」卷百四十九、系圖部第四十四にあり。同卷に收めたる一本は、同鎌足より出でて、同資重に至り次に「寬永十六年死子孫斷滅」と記せり

なすさんなんせんはつけい

那須山溫泉八景　本邦一卷　室井敷馬

下野國那須山溫泉の八景を錄し、明心越禪師の詩を載せたり。該八景は、茶臼嶽峠、六橋浴槽、白川晴嵐、八溝淺雲、那須野原、殺生石巢、關山曉日、溫泉明神等なり。立原萬の跋あり。著者室井敷馬は上州那須溫泉明神の祠官なり。

なすしふいき

那須拾遺記　本邦十五卷　木曾　武元

大金重貞の「那須記」に遺脫せるものを拾集し、古老の傳說、近來視聽の奇事異說等並の來由、名所舊蹟の古事、物產の變遷等を詳錄したるもの。十五卷十二册に寫す。末に享保十八年癸丑〔一三九三〕の自序、同二十年貿辶海の跋、延享三年丙寅〔一四〇六〕木々堂散人の跋等あり。

◎木曾武元は下野國那須郡湯津上村の人にして、臨川亭と號せり。

なすのこぐさうひ

那須國造碑　本邦一卷

下野國那須郡湯津上景里なる那須國造古碑の寫にて、字數百五十二字あり。撰初打碑の寫を掲げ、諸家の考及び釋文等を掲げたり。享和三年癸亥〔一四六三〕寫本の奥書あり。

なすのこぐさうひかう

那須國造碑考　本邦一卷　武井驥

下野國那須郡湯津上村なる國造碑〔黑俗筮石碑といふ〕な考證したるもの。同碑は元祿四年辛未〔一六九一〕水戶義公、封を加へ、小堂を立てて保存せるが、高四尺、莖石は濶一尺六寸五分、銘は八行十九字、郡て百五十二字あり、考古の料たるべし。著者武井驥は長沼藩の人にして、字を千里といふ。別著に「刻向新序纂註」あり。

なすのこぐさうひしやぐぶん

那須國造碑釋文　本邦一卷　新井君美

下野國那須郡湯津上村なる、同古碑文を註解したるもの。七册に收む。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

なちのしらいと

那智白絲　五卷　高井伴寬

新船兵司那智の狩に白狐を射ることより、其の報讐の顚末を筆錄したる復讐奇話の小說なり。光格天皇の文化五年戊辰〔一八〇四〕の自序あり。墨子、白絲を見て悲む。其の或は黃にすべく或は綠にすべきが爲めなり、本書もまた讀者の心の或は善たるべく、或は惡たるべきを思ひて此の白絲の名を撰びたりとなり。

◎高井伴寬の傳は「孝子敎鈔解」の下にあり。

なちのみやまでくだのたき

那智御山手管瀧　五卷　江島屋其碩

遠藤盛遠が出家の後、那智の瀧にて苦行を修めし時の事を仕組みし狂言にて自笑と共編するところなり。享保十八年癸丑〔一七三三〕の作。同年八文字屋にて出版す。

◎江島屋其碩の傳は「其碩諸國物語」の下にあり。

なつぐさ

夏草　一卷　伊勢貞丈

武家故實の書にて、例の「四季草」の一也。步射部十一條、騎射部十三條、追加一條、凡て二十五條あり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

なつごろも

夏衣　一卷　尙白

著者の俳句集なり。南部への紀行なり。元祿二年己巳〔一六八九〕九月の編にかゝる。

◎尙白は江州大津の俳人にして、名を三益といひ、木翁と號せり。初、不卜の弟子となり、後、芭蕉の門に學べり、享保二年丁酉〔一七一七〕七月十九日歿す、年七十三。

なつごろも

夏衣　一卷　各務　支考

木曾路より、三越を行脚したる時の俳句集なり。寬永五年戊子〔一七二八〕出版す。近年發行の俳諧文庫第八編「支考全集」の中にも收めたり。

◎各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

なつのつき
夏の月　一卷　一定
雨イ、琴化、嵐笑、その他數十家の俳諧を集めたるものなり。寶永二年乙酉〔二三六五〕京都にて出版し、寛政二年庚戌〔二四五〇〕再版せり。著者一定は筑前國の俳人なり。

なとりがは
名取川　四册
四季の發句集なり。延寶七年己未〔二三三九〕正月上旬の編輯にかゝる。

なゝくさかう
七草考　一卷　北野菊塢
本書は其の內題「秋野七草考」の下に解題したり。

なゝくさのかう
な、くさの考　寫本一卷　阿部照任
水蘄、薺、鼠麴艸、蘩縷、黃瓜菜、菘及び萊菔の釋名性能等を考證したるもの。「みそのや」に收めらる。
◉阿部照任の傳は「上晉本草」の下にあり。

なゝせがは
七瀨川　一册　不知
著者の俳句集なり。元祿五年壬申〔二三五二〕の編にかゝる。

なにはかゞみ
難波鑑　六卷　一無軒道冶
此の書は一名「難波名所蘆分舟」の下に解題す。

なにはきうちかう
難波舊地考　一卷　荒木田久老
難波の高津宮、長柄宮、長柄橋等の事を、舊記諸書に引徵して考說したるものなり。光格天皇の寛政十一年己未〔二四五九〕大阪旅寓中の著なり。翌十二年出版す。
◉荒木田久老の傳は「萬葉考槻の落葉」の下にあり

なにはきくものがたり
浪華菊物語　寫本一卷
大阪城內にて淀君に仕へたる菊女といふが、大阪落城當時の狀況を、語りたるを筆記したる者なり。

なにはきよく
難波曲　一册　自問
俳句の集にして、元祿五年壬申〔二三五二〕正月の編なり。著者自問は大阪の人なり。

なにはぐさ
浪華草　寫本一卷
攝津國の名所舊蹟を郡別に略記したるものにて、第一より第十二〔郡數に〕分つ。卷首に古語を引て國の名義を說き、卷尾に國中十二郡の總高各郡の高別、村數等を記せり。

なにはぐさ
難波草　四册　藤田不三
宜休と共に作れる俳諧の集なり。寛文十一年辛亥〔二三三一〕七月成る。

なにはこくし
浪速國誌　寫本二卷
攝津國各郡の名所舊蹟神社佛閣産物、又は種々の風俗故實等をば、現況に徵し舊記に證して、記述考說したるものなり。

なにはごけふき
浪華五俠記　寫本一卷
雁金文七、雷庄九郎、布袋市右衞門、極印千右衞門、庵の平右衞門と云へる浪華の俠客五人が、元祿十五年壬午〔二三六二〕處刑せられし始末を記したるものなり。

なにはざくら
難波櫻　一册　水田西吟
俳諧集「庭竈卄日」の後集なり。貞享中の編なるべし。著者水田西吟のことは「蟲味集」の下にあり。

なにはじやうこづせつ
浪速上古圖說　一卷　中村直躬
神武天皇の御代より、應神天皇の御代に至る地圖と、仁德天皇より安閑天皇に至る地圖とに分ちて、浪速の沿革等を考證したるものなり。寛政七年乙卯〔二四五五〕村田春海の序ありて、同十二年出版せり。著者中村直躬は攝津國兵庫の人なり。

なにはじやうせんき
浪速城戰記　寫本五卷　萬年頼方
二階堂行憲

本書は別掲「難波戰記」と題するものと同本なり。

なにはたいじこかひやくしゆ
浪速大寺古歌百首　一卷
大寺は卽ち四天王寺の事なり。卷首に同寺の圖と略緣起とを掲げ、聖德太子以下歷代歌人の詠みて、同寺に關係せる歌百一首を載せたり。

なにはづあしのはなし
浪華津蘆話　寫本五卷
天保八年丁酉〔二四九七〕に於ける大鹽平八郎の爭亂に關する雜事を輯錄したるものなり。同じき天保年の自序あれど姓名を記さず。大本五册に作れり。

なにはづるあとおひ
難波鶴跡追　一卷　芦雪
浪華の地誌「蘆分鶴」と同體にて、第一の始より第二百五十九の終りまで諸役人姓氏所在、御城代より諸大名屋敷所付、諸船役人所付、諸國船印付、天滿總代付、諸問屋付、諸商人、諸國飛脚宿、運賃駄賃、諸藝師の姓氏所在、諸職人數、諸商賣買幾百種を記載せり。延寶七年己未〔二三三九〕版刻の小本にかゝる。著者芦雪は浪華の人なり。

なにはのいへづと
浪華の家づと　一卷　竹窓老人
菓子類を圖記したるもの。いちご餅より茄子餅に至る百二十六種の圖を示し、又た干菓子、衣かけ、形物、あるへい、蒸菓子、粽、掉物、水菓子、饅頭、砂糖漬等に分類して、各其の價値を附記したるもの。天保七年丙申〔二四九六〕の刊刻なり。

なにはのかぜ
浪花の風　一卷　久須美祐雋
浪華の風土を記したるもの。卷首に「此の編は素より世教の一助ともなるべき事にもあらず、また視聽の益を得べきものにもあらざれども、少しく暇あるまに〳〵、市中の有樣など、見聞に及びしことを、筆に任せて書き付けぬれば、此の儘、紙魚の棲となさんも本意なしとて、其のまゝに難波の風と題して、此の地また見ぬ孫兒等が、後の語り草とはなしぬ」とて、次に安政三年丙辰〔二五一六〕正月二十二日起筆とあり。「溫知叢書」の第七編に收む。
◉久須美祐雋は德川幕下の士にして、佐渡守と稱す、最初目付より、先手を歷、安政年中大阪の町奉行に任ぜらる、時に年六十歲なりきと。

なにはひじき
浪速祕事記　寫本二十八卷　荒井保惠
卷一太閤治世、朝鮮征伐根元、三好秀次任關白、石田三成立身等の目より、卷二十八國松最後、上總介忠輝御勘氣、天下泰平、駿河大納言殿譜等に至る數十目より成る。著者の與書に、文化十二年乙亥〔二四七五〕函館の廳所にありて官暇これを編輯し、翌年五月六日筆を收めたりとあり。二十八卷十四册に寫す。

なにはぶつさんくわいもくろく
浪華物產會目錄　一卷　戶田齋
寶暦十一年辛巳〔二四二一〕大阪に於て、自ら開設したる物產會の陳列品を目錄したるものなり。
◉戶田齋は備前の人、齋宮と稱し、旭山、無悶子、百卉園等の號あり。少にして鍼術を學び、後ち醫を志し、また本草學を研究す。大阪に出でて開業し最も治痢の術に長じ、診を請ふもの常に絕えず、人と爲り狷介にして、診察料の如きも厚ければ辭し、患者死すれば受けざりきといふ。著書は本書の外に、非藥選、醫學名數、病名補遺、小成汲錄、文念錄、救生堂圖史等あり。

なにはふなぢのき
難波船路記　二卷　芳野倫閑
上卷は筑紫平戶の故宅を立つに始まり、備後阿伏兎觀音に終り、下卷は備後鞆浦より兵庫港に着するに至る海路の眺望、寄港の名所古蹟を記せり。延寶七年己未〔二三三九〕の作なり。

なにはべんけい
難波辨慶　一册　遠舟
著者の俳諧集なり。其の編輯せし年時を明記せず。
◉遠舟は俳諧者にして、東流軒と號し、八重ひとへ、遠州千句附等の著もあり。

なにはまる
難波丸　一册　賀子
俳句の集にて、元祿五年壬申〔二三五二〕の編輯にかゝるものなり。
◉賀子は大阪の俳人にして、紅葉庵の別號あり。著書は本書の外に、蓮の實、山海集等あり。

なにはまるかうもく
難波丸綱目 七巻 **志田垣與助**
大名より、下諸商人に至るまで、其の姓名、住地、家紋、其の他等を記したるもの。延享四年丁卯(一七四七)の凡例に「此の書は國花萬葉記の内、攝津國の部にて、第六の巻より、是れを上下して四冊とし、上の二冊大阪の諸品を委しく改正して顧したるものなれば、增補難波丸綱目と名付け、又堺の津は攝泉の間に跨りたる地なれば、和泉の國をも交へて、全部七巻とす」云々とあり。著者志田垣與助は增榮と字す。浪華の書工なり。

なにはみやげ
難波みやげ 五巻 **木下 希聲**
内題には「淨瑠璃評註」と題して、淨瑠璃の本文を指挿大書して、細字もて評註を低書したるもの。巻一に御所櫻堀川夜討於朝天神記。巻二に北條時頼記、並に雪の段、安倍宗任松浦落。巻三に大内裏大友眞鳥。巻四に國性爺合戰、刈萱桑門、筑紫の輝。巻五に蘆屋道滿大内鑑大塔宮曦鎧等を掲げ、各淨瑠璃の最初に、一書の梗概を紹介せり。元文三年戊午(一七三八)の自序あり。
◎木下希聲の傳は「客館瑠璃集」の下にあり。

なにはめいしょあしわけぶね
難波名所蘆分舟 六巻 **僧 道冶**
大阪地誌にて、一名を「大阪鑑」また「難波鑑」といふ。第一巻難波の事より始り、第六巻崇禪寺に終る凡七十二項、神社佛閣名所舊蹟を記し、各略圖を掲げたり。六巻六冊に發行す。延寶八年庚申(一六八〇)の自序、釋盤溪の跋あり。
◎道冶は一無軒と號す。紀陽藤原氏の家に生れ、初は國君に仕へしが不幸にして南山に浮浪し、醫を北京養壽院道作に學び、著書には「道念集」といふもの十册あり。仁和寺宮の執奏にて天盃に備へたりといふ。

なにはらんしやうき
浪速濫觴記 寫 五巻
第一巻元和元年乙卯(一六一五)大阪御平均御譜の後松平下總守離散の町人を召返し地所渡地子銀上納の事より。大阪三組總年寄の事を主として古今の沿革等を記せり。寛延三年庚午(一七五〇)の事實をも擧げたり。

なのはな
菜の花 一册 **水田 西吟**
著者の俳句集なり。元祿五年壬申(一六九二)の編。
◎水田西吟のことは「醜味集」の下にあり。

なのりしなん
名乘指南 一巻 **黑河 春村**
此の書は一名「名字指南」といふ題の下に解題す。

なのりてかがみ
名乘手鑑 一巻
本邦人の姓名用字を、いろは順に列挙し、各字の下に一種の變體字五行說の性とを記せり。元祿四年辛未(一六九一)改版したる横綴本なり。

なはしろみづ
苗代水 五册 **富尾 似船**
俳句の集なり。編輯の年月は明記なけれど、元祿年中のものなるべし。
◎富尾似船の傳記は「堀川の水」の下にあり。

なはすだれ
繩すだれ 二册 **野上 昨非**
俳句の集なり。年月は記されど、元祿年中のものなるべし。
◎野上昨非のことは「かなしみの巻」の下にあり。

なべしまけぐんとうき
鍋島家軍功記 寫 一巻
鍋島加賀守直茂が、天文七年戊戌(一五三八)十月二十八日に誕生して、元和四年戊午(一六一八)六月三日の卒去までの所々陣身の軍功を覺書したるものなり。嘉永三年の寫本によりて、內務省の謄寫せる本に據る。

なほべへぐんき
直家軍記 寫 一巻
備前國宇喜田家の遺臈より、和泉守直家一生の事歷を記し、天正九年辛巳(一五八一)二月十四日、五十三歳にて卒去せるまでの事を記せり。

なほかひまんびつ
直養漫筆 寫 二巻 **西田 直養**(ナホカヒ)
國史國語等に關する假名文の隨筆にして、考古博識の資料となるべきふし多し。天保九年戊戌(一八三九)正月以後の筆記に係る。「輪池叢書」に收む。
◎西田直養の傳は「金石年表」の下にあり。

なほびのたま
直毘靈 一巻 **本居 宣長**
皇國の道といふことを論述したるもの。「古事記傳」初巻の附錄なりしを、別に刻して單行本となしたるなり。
◎本居宣長の傳は「古事記傳」の下にあり。

なましな
男信 三巻 **僧 義門**
漢字の韻に、「ン」と「ム」との區別あることを考論したるもの。書名は、最初上野國利根郡の鄕名「奈萬之奈」に、「男信」の字をあて用ひたるにつきて、「ン」と「ム」との區別に考へ起したるより、其の緣によりて此の書に名けたるものなり。或は「奈萬之奈」の字を表題としたるもあり。天保六年乙未(一八三五)六月の作。同十三年出版す。
◎義門の傳は「活語指南」の下にあり。

なましなしつぎ
男信質疑 寫 一巻 **關藤 政方**(マサミチ)
前掲「男信」の中なる不審疑問の條々を記述したるものなり。天保十二年辛丑(一八四一)の編なり。
◎關藤政方の傳は「聲調編」の下にあり。

なましなみにつき
那馬餘昧日記 寫 二巻 **松本 文雅**
江戸より甲斐に遊べる時の紀行文なり。孝明天皇の文久元年辛酉(一八六一)の自序、及びさゝのや翁の端書等あり。
◎松本文雅は江戸の俳人なり。蓮之の子にして松本を氏とす。

なみあひき
浪合記 寫 一巻
南朝の皇子宗良親王、御子尹良親王の傳記なり。信濃國伊奈郡の旅合(今浪合に作る)に七年給ひたるより、地名をとりて書名としたるなり。「信濃宮傳」と互に詳略あり、併せ見るべし。

なみきのおもば
雙樹の落葉 二巻 **名島 桃源**
此の書は一名を「晤語」といふ。依て該下に解題す。

なみまつ
並 松 一册 **溝口 竹亭**
俳句の集にて、寶永三年丙戌(一七〇六)京都の出版なり。
◎溝口竹亭のことは「をだまきの」下にあり。

なむはいかい
南無俳諧 一巻 **各務 支考**
諸國俳諧を撰集する不公平を難して、自家の句集を示したるものなり。寶永四年丁亥(一七〇七)出版。近年發行の俳諧文庫第八編「支考全集」の中にも收めたり。
◎各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

ならくわりんおんうたあはせ
奈良花林院歌合 寫 一巻
此の書は奈良花林院の歌合にして、基俊の判なり。

ならしば
奈良柴 寫 一巻 **原 盛和**
淨瑠璃三味線の根元を記し、芝居の沿革、役者の評等を述べたるものなり。文久三年癸亥(一八六三)「蕪百十種」の中に收む。
◎原盛和は武夫と稱し三味線の名人にして寶永の頃より天下に鳴りし人なり。著書は本書の外に「隣痴絃一巻あり。

ならねんだいき
奈良年代記 寫 一巻
淳和天皇の天長二年乙巳(八二五)二月五日與福寺西金堂へ觀音像を安置せるより、天慶二年己亥(九三九)三月、東海東山北陸等に將門の逆亂起りしまでの年代記なり。巻端闕けたり。「續群書類從」巻八百六十、雜部第十に入る。

ならのつまで
楢之爪手 五册 **揖取 魚彦**
我が古言を纒錐して、五七黃顱に排列し、一々說明例證したるものなり。嘉永四年辛亥(一八五一)加納諸平の序を附して、同年版行す。
◎揖取魚彦の傳は「古言梯」の下にあり。

ならのみやこおほえづ
奈良都大繪圖 寫 一舖

東上水谷を限り、西舟橋町を限り、南竹花町を限り、北京口を限りて、山芝、池川、道筋、町、屋形、入箇村領界の類を彩色を以て區別せり。

ならのみやこせうゑづ

奈良都小繪圖　木一鋪

東春日山を限り、西油阪を限り、南竹花町を限り、北京口を限り、山芝、池川、道筋、町家等を着色して區別せり。

ならみやげ

奈良土産　三巻

今春、觀世、二流の謠百番に雜註を加へて文句の可否を論じたるものなり。上巻高砂より小鍛冶に至る三十二番、中巻竹生島より道明寺に至る三十二番、下巻白樂天より、放生川に至る三十六番あり。貞享四年丁卯(二三四七)二月の自序あれど姓名を記さず。同年出版す。

ならめいしよやへざくら

奈良名所八重櫻　十二巻

大久保秀興

奈良の名所を採して考證したる名所記なり。

ならやまごりようひかう

椎山御陵碑考　木一巻　藤井　貞幹

大和國添上郡奈保山〔縦日本紀には椎山に作り、延喜式には楢山に作る〕なる元明天皇の御陵碑を考證したるもの。碑圖を掲げ、「續日本紀」、「東大寺要錄」等を引證して考論す。明和七年庚寅(二四三〇)六月二十二日の末記あり。

◎藤井貞幹の傳記は「逐號年表」の下にあり。

ならやましふえふ

楢山拾葉　七巻　石川　清民

里村昌琢の「類字名所和歌集」に漏れたるものを拾集したるものなり。有季が楢葉の誇によりて書名を成せりといふ。萬治三年庚子(一六六〇)楢鼎、書木親宣等の漢文序あり。七巻二册に發行す。

なりすけわうき

業資王記　木一巻　業資

著者の日錄にして、建暦元年辛亥(一八七一)の記なり。「史籍年表」には、正治元年己亥(一八九九)、建仁三年癸亥(一二〇三)、建暦元年辛亥(一二一一)同二年、建保六年戊寅(一二一八)等の下に掲げたり。今存するところは殘闕のものなるべし。

◎業資は仲資王の子にして、建久九年戊午(一一九八)神祇伯に任じ、從三位に進み、承久四年壬午(一二二二)薨ず。年三十九。

なりたけいつ

成田系圖　木一巻

藤原氏鎌倉の孫武藏守基忠より、文祿慶長の頃に至る系圖なり。「續群書類從」卷百六十二、系圖部第五十七に收めたり。

なりたけぶんげんちやう

成田家分限帳　木一巻

武藏國埼玉郡行田の城主成田氏の分限にて、家門十一人、譜代一千百七十二人、藏米七十八人扶持方十九人の人限を記し、末に同家系を附す。天正十年壬午(一五八二)の奥書あり。本書の一本には、「右分限帳、天正之本書者、天明六年丙午正月、江戸大火之節、於神田明神下焼失。依之以武州熊谷宿布施田氏之本、令書寫者也。布施田氏者山城守長章之子孫也。寛政六年甲寅(一七九四)六月、成田下總守長泰十代吉田隆見窓元維」と奥書せり。

なりたさんけいき

成田參詣記　五巻　中路　定得

此の書は次掲「成田名所圖會」と同書なり。

なりためいしよづゑ

成田名所圖會　五巻　中路　定得

先づ江戸より參詣の道にあたる名所舊蹟を記し、次に成田山各部の現狀故實等を考證記述せり。內題には「成田參詣記」と云へり。本書は父定俊の遺稿を補成したるものなりといふ。嘉永七年甲寅(一八五一)四月照嶽の序あり。安政五年戊午(一八五八)刻成す。

なりつぐきやうのしふ

濟繼卿集　木一巻　姉小路濟繼

著者の家集なり。但、本書には冷泉爲廣の歌多く雜れりと云ふ。

なりみちきやうくでんにつき

成通卿口傳日記　一巻　藤原　成通

蹴鞠口傳の書にて、木のものにたつ事、人數の事、上まりの事、初度の鞠の事等より、盛長鞠あしなさらしたる事に至る三十箇條あり。卷末に「建久六年(一一九五)十月二十六日、賜鎌倉殿右大將御本書畢。末代規模物也、可祕藏之、努不可他見、鎌倉若宮別當法眼定曉記之」と記せり。「群書類從」卷三百五十四、蹴鞠部中に收む。

◎藤原成通の傳は「三十箇條式」の下にあり。

なりみちきやうしふ

成通卿集　一巻　藤原　成通

著者の和歌百首を雜載す。「群書類從」卷二百三十八、和歌部第九十三に收む。

◎藤原成通の傳は「三十箇條式」の下にあり。

なるとにつき

鳴門日記　木一巻　三宅　興道

著者が其の小君井伊氏の柩に從ひ、尾州宮より、美濃路を經て兵庫より船に乘りて、阿州に歸る時の日記なり。「鳴門」は領內の地名なるが故に取りたるなり。天明六年丙午(一七八六)の自序及び同藩志耕といふもの、跋あり。

◎三宅興道の傳は「小春日記」の下にあり。

なるとのちうじやうものがたり

鳴門中將物語　一巻

鳴門中將と云へるが其の君のために寵愛せられしことを記したる物語なり。一名を「なよ竹物語」とも云へるは、この中の詞にも見へ、又た御歌に、「あだに見しゆめかうつつかなよ竹の、おきふしわぶるこひぞくるしき」などあるによりて名つけしなるべし。著作の年代は詳ならざれども、此の物語の末の調に後嵯峨院云々とあるより見れば、院崩御の後遠からぬうちに作られたるなるべしと云ふ。

なるとのちうじやうものがたりかうしやう

鳴門中將物語考証　一巻　岸本由豆流

「鳴門中將物語」の年代及び文句に就ての考證を記したるもの。文化十四年丁丑(一八一七)の著なり。

◎岸本由豆流の傳は「古今和歌集標註」の下にあり。

なるべし

南留別志　木五巻　荻生　茂卿

文字音訓または事物の名儀等を考證解釋したるもの。毎條の後に「なるべし」の語を置きて、斷言せず書名の出づる所以なり。本書を取したる者に富士谷成章の「非南留別志」あり、參看して利あるべし。寶暦十一年辛巳(一七六一)宇惠の序あり、同人の校訂にて、文政十一年戊子(一八二八)出版す。「百家說林」にも收め、又活版に附し單行したるもあり。

◎荻生茂卿の傳は「靈園總錄」の下にあり。

なわけいづ

名和系圖　木一巻

遠祖行盛より、寛永以後伯耆十左衞門長盛の子弟に至る數十代を系圖す。「續群書類從」卷百三十五、系圖部第三十收む。

なわしきじ

名和氏紀事　二巻　門脇　重綾

上巻には名和長年一族の事績を記し、下巻には名和氏系譜及びそれに關する考說を記したり。文久二年辛酉(一八六二)の自跋、會澤安、堀照明等の序、飯田年平の跋等あり。此の書は固幡尚德館の藏版にかゝる。

◎門脇重綾は伯耆國の神官なり。敎部大丞從五位に任ぜらる。

なんきつめいしよ

南越名所　木一巻

越前國の名所を擧して各由來を記し、古歌二三首宛を每條下に引例せり。

なんかいかいふ

南海介譜　木二巻　小原　桃洞

南海に產出する介蟲の名稱、紋理、形狀等を圖說したるものにして、記述頗る詳悉せり。天保年間の著作なるべしと云ふ。

◎小原桃洞の傳は「紀州產物志」の下にあり。

なんかいきぶん

南海紀聞　木五巻　青木　輿勝

寶暦年間、薩泊の運船漂流して、渤泥「ぼるね」諸島に到りて、後歸來したる永夫孫太郎の談話を筆記したるものにて、同島及び近邊の風俗物產等を記せり。

◎青木輿勝の傳は「答問十策」の下にあり。

なんかいぎよふ

南海魚譜　木一巻　小原　桃洞

南海産の水族五百四十九種を解説したるもの。即ち淡水屬四十二種、同種異屬七十一種、鹹水屬百六十一種、同種異屬二百七十二種を輯錄し、其の解說叮嚀詳悉なり。天保年間の著述なるべしと云ふ。

◎小原桃洞の傳は「紀州產物志」の下にあり。

なんかいさう　南海草　一卷　龍　公美

著者が南游の詩文稿にて、安永五年丙申(一七七六)の自序、北山彭の序、同六年役觀の序、男世文、島山輔世の跋等ありて、翌七年出版す。

◎記公美の傳は「草廬文集」「初編」の下にあり。

なんかいざつし　南海襍志　本二卷　松岡　敏

上卷は土佐國巡歷の紀行。下卷は同國の東寺、西寺、五臺山、汲江寺、桂濱、朶門、源希義墓、紀貫之國府古墟等の記、並に谷一齋、近藤洞窟、谷秦山、中山高陽、丁南洋、北原紫理等の傳を載錄したり。渓文なり「土佐國群書類從」に收めたり。著者松岡敏は土佐の國の人にして、欲訥と字せり。

なんかいしけつ　南海詩訣　一卷　祇園　瑜

詩學に關する記述なり。天明七年丁未(一七八七)江村綬、孫長幹、河合離の序、筱田愿道の跋を附して同年出版す。

◎祇園瑜の傳は「一夜百首」の下にあり。

なんかいしはふ　南海詩法　本二卷　祇園　瑜

著者の詩語「詩學逢原」と「南海詩訣」とを合寫したるもの。一名を草に「詩學逢原」ともいへり。そは最初に同書を掲げたればなるべし。

◎祇園瑜の傳は「一夜百首」の下にあり。

なんかいしふ　南海集　本二卷　祇園　瑜

著者の詩集なり。序跋なく編年を記さず二卷一册に寫傳す。

◎祇園瑜の傳は「一夜百首」の下にあり。

なんかいせんせいしふ　南海先生集　五卷　祇園　瑜

著者南海の詩集なり。元文元年丙辰(一七三六)田中由恭の序、安永六年丁酉(一七七七)伊藤長堅の序、同八年己亥葛張の序あり、天明四年甲辰(一七八四)出版す。

◎祇園瑜の傳は「一夜百首」の下にあり。

なんかいだうきのくにしんめいちやう　南海道紀伊國神名帳　本一卷

名草郡に八十九社、伊都郡に十九、那賀郡に二十九、海部郡に十、有田郡九、日高郡に十二、牟婁郡に二十二社を列舉す。寛政十年戊午(一七九八)紀伊國府名草郡二田村、隣於府中村、府中著往昔州所治處也。然見宮府之書已、今也應稽先生説、以家藏書、謄寫以贈焉」といふ。

なんかいつうき　南海通記　五卷　香西　成資

前述「南海治亂記」に附して、「南海王制考」五册を掲げ、「南海通記」と名けたるものなり。寶永二年乙酉(一七〇五)竹田定直の序あり。

◎香西成資の傳記は「南海治亂記」の下にあり。

なんかいはふき　南海包譜　三卷　村瀨　敬之

紀州の產物柑橘類を寫錄圖說したるものなり。文政元年戊寅(一八一八)の作にかゝる。慶應元年乙丑(一八六五)紀伊の人山中信古といふもの增訂せり。著者村瀨敬之は紀伊の人なり。

なんきじんじやろく　南紀神社錄　本二卷

紀伊國南方なる名草郡、海部郡、那賀郡、伊都郡、日高郡中の神社を列舉して、各由來緣起等を筆述したるものなり。

なんきふうがしふ　南紀風雅集　三卷　伊藤　弘朝

足利將軍戰爭の事より。豐臣太閤四國を服するに至る二百餘項、皆南海の治亂を輯す。竹田定直の序文あり。編年詳ならず。

◎香西成資は讃岐の士臣にて小早川能久に從ひて武田流の兵法を學び、後小畑景寔の門に入りて兵學免許を得たる人なりと云ふ。本書の外に武田兵術文稿及び南海通記等あり。

紀州一國に關する詩を集めたるもの、文化十年癸酉(一八一三)古賀穀の序、川合衡の序あり、同年出版す。

◎伊藤弘朝は儒者園鳴の孫にして、海藏と字し、海嶠と號す。父祖に襲ぎて紀州藩の儒臣たり。

なんきめいしやうりやくし　南紀名勝略志　本六卷

卷一に名草、卷二に海部、卷三に那賀、伊都、卷四に有田、日高、卷五、六に牟婁郡を掲げ、各故事を詳錄せり。

なんきめいしやうし　南紀名勝志　本二册

紀伊國の名勝地志にして、海部郡に雜浦より月輪山禪定寺に至る四十六箇所。那賀郡に岩手里より蜘蛛里に至る六十七。伊都郡に萩原村より學文路村の石に至る三十。名草郡に阿備伯原より笹薬松に至る六十二。有田郡に綠鹿山より笠石に至る四十三。日高郡に鹽屋村より屈石に至る百六十箇所。一國七郡に凡て四百四十九箇の勝を列舉せり。

なんきよはくらいしふ　難舉白集　三卷　尋　舊　坊

豐臣勝後の家集舉白集に載せたる歌の難すべきものを抄出して喃序したるもの。慶安三年庚寅(一六五〇)二月の著なり。

なんきよほくらいしふ　南去北來集　一卷　僧　臥佛

元祿九年丙子(一六九六)の秋以下、敎律道儒四宗の學を立てんために、諸方に行化したる時の詩偈を集めたるものなり。元祿十四年の自序、翌十五年野梅子の跋あり。

なんきろくぐんし　南紀六郡志　本八卷　畔田　伴存

紀伊國七郡の中、牟婁郡を除き、日高、伊都、有田、名草、海部、那賀、六郡の產物に關する實見記なり。石、海產、石樹、菌石、水、火、花草、藥草、鹿草、濕草、蔓草、水草、苔、蛍木、水藻、木、竹、果、蔬、穀、蟲、造釀、蔬、海藻、菌、羽蟲、甲蟲、水蟲、龍蛇、獸、鳥、水禽、諸禽獸等に分類せり。

◎畔田伴存の傳は「水族志」の下にあり。

なんくわくしよかん　南郭書簡　本一卷　服部　元喬

著者が宇佐美惠といふものに與へたる書簡なり。書中專ら惠の編したる「護園錄稿」の事をいへり。末に惠の答書を附載す。

◎服部元喬の傳は「大東世語」の下にあり。

なんくわくせんせいぶんせんせうげん　南郭先生文筌小言　一卷　服部　元喬

文章作法の上につきて助語法を論じたるものなり。末に當時流行せる虛氏の助語法を辨ぜり。門人源君獄の跋あり。享保十九年甲寅(一七三四)の版。

◎服部元喬の傳は「大東世語」の下にあり。

なんくわくぶんしふ　南郭文集　四十卷　服部　元喬

著者の漢文集。享保七年壬寅(一七二二)平野玄申の序、同八年本多忠統の序、同九年望月三英の序、同十年物茂卿の序、その他の序跋ありて、同十二年刊行せらる。初編より四編に至り、二十八册にして行る。卷末に源頼順の撰せる「南郭墓碑」を載す。

◎服部元喬の傳は「大東世語」の下にあり。

なんけいしぶにへん　南溪集二編　七卷　僧　日綱

著者の詩文集。卷一、二、三、四に詩を、卷五に文を收め、別に附錄二卷あり。文化五年戊辰(一八〇八)倉橋後の序、同六年馬杉圭一の序あり。七卷三册に版刻す。

◎日綱は京師本國寺の塔頭蓮景院の院主にして、知嵐と稱せり。文化五年戊辰(一八〇八)入寂す。

なんけいそしやう　難經疏證　二卷　多紀　元胤

贅書「黄帝八十一難経」を註釋考證したるものなり。文政二年己卯(一八一九)の凡例あり。
◎多紀元胤の傳は「醫雅」の下にあり。

なんこうき　南江記　一套　速水　春暁

楠公父子君臣、一族國門の勤王殉國、忠孝義烈の事績を詳記したるものなり。楠氏の家系より、正行の討死に至る二百餘條に記す。文化六年己巳(一八〇九)馬淵定安の序あり。明治十七年一册に活刷す。
◎速水春暁は平安(一説に大阪)の書家にして、彦三郎と稱し恒章といふ。浮世畫を以て著名なり。文政六年癸未(一八二三)七月十日歿せり。

なんこうさわ　南向茶話　一卷　酒井　忠昌

徳川氏入國以來、江戸の地理の變遷して不審なることを問答に託して記したるものなり。寛政二年庚戌(一七九〇)杏花園寫本の奥書ありて「雨石十種」の中に收む。同卷には同浪考もあり。

なんこうさんだいき　楠公三代記　二十二卷　畠山　雅興

本書は原名「三楠實錄」の下に解題す就て見るべし

なんごかう　難語考　三卷　橘　守部

解し難き古語を拾輯して考證解釋したるもの。一名を「山彦册子」と云ふ。天保二年辛卯(一八三一)門人等の序あり。本書は一部十卷なるを、同十年己亥に初編三卷を刊刻したるなり。
◎橘守部の傳は「稜威道別」の下にあり。

なんこくものがたり　南國中古物語　一卷

土佐國長曾我部氏治國中の戰話二十餘條を記したるもの。寛永十九年壬午(一六四二)の奥書あり。

なんごしふいせう　難後拾遺抄　一卷　源　經信

「後拾遺和歌集」中の、如何思ほゆ〜歌等をとりいでて評難したるもの。自序あり。經信の作と言傳ふ。「續群書類從」卷四百五十五、和歌部第九十に入れたるものは、天保二年辛卯(一八三一)若泉嘉左衛門の異本を以て比校せる由を奥書す。
◎源經信の傳は「師記」の下にあり。

なんざいかう　南山遺稿　二卷　永原　伯綱

著者の詩集にして、「吉野紀行」を附錄す。著者の住所郡山は南部に屬して吉野山其の南にあるよりして吉野山と云ふ。天明六年丙午(一七八六)後醍醐天皇、吉野に入御まし〳〵て以來、五十六年を經て、元中八年辛未(一三九一)南北朝始めて和親に歸するまでの要用事績を、年月の順に繫げて記せり。

なんざんきうわき　南山舊話記　一卷

徳川頼宣紀州へ移封の時の事情、及び、已後の事どもを雜記したるものなり。

なんざんぐわいしふ　南山外集　八卷　僧　古梁

著者の詩文集。天保六年乙未(一八三五)林衡、古賀煜の序、佐々木芳の跋あり。著者古梁は本書の外に「鹽松紀行」の著あり。

なんざんし　南山史　三十卷　成島　良譲

南朝三代の精詳なる漢文歴史。卷一を後醍醐天皇紀、卷二を後村上天皇紀、卷三を後龜山天皇紀とし卷四以下、後闇傳、皇子傳、皇胤傳、四王傳、世臣傳、武臣傳、雜傳等を設錄せり。其の體裁大率「日本史」に倣ひたるなり。自序及び凡例あれども年月を記さず。
◎成島良譲は字を倹卿といひ、桓之助と稱す。筑山、稼堂、秋樹等の號あり。徳川幕府の奥儒者となり、命を受けて、列國譜、後鑑、紫史吟評等を著す。嘉永七年甲寅(一八五四)三月七日五十二歳にて歿す

なんざんしこさんかくかい　南山子孤三角解　一卷　安島　直圓

庵文鼎が「暦算全書」中なる環中素尺加減捷法の一部を解きたるもの則ち斜弧三角形にて、弧三角比例の由て起る所を詳解したるものにして、圖解の樣極めて精し。甚だ學者に益あるものとす。
◎安島直圓の傳は「不朽算法」の下にあり。

なんざんしさんそんじゆつ　南山子三圓術　一卷　安島　直圓

三角容三圓術及び四内容三圓術を詳解したるものなり。是れ等は「不朽算法」中の二題の解法なれども、六斜術の理義及び括法の妙に至りては、實に著者の力の一旋を知るに足れり。
◎安島直圓の傳は「不朽算法」の下にあり。

なんざんじゆんしゆうろく　南山巡狩錄　十五卷　大草　公弼

南朝五十七年間の事績を詳錄せり。卷一の上に元弘の亂、同下に建武の亂を記し、卷二延元元年より以下編年的に十五卷に及べり。別に一卷明徳四年(一三九三)より、長禄二年(一四五八)に至る事實を記したるものを附錄せり。春秋の天王河陽に狩すといへる意にとりて、書名を「南山巡狩」と撰びたりといふ。文化六年己巳(一八〇九)の自序あり。
◎大草公弼の傳は「元人來寇考」の下にあり。

なんざんせうふ　南山小譜　一卷

南朝三代間の皇親及び諸臣の系譜なり。赤心居士の自序に、環山樓主人の輯錄に更に考補したるもの、由あれど、其の姓名及び編時を詳にせず。横綴小册子に作れり。

なんざんぞくごかう　南山俗語考　六卷

萬物を天、地、人、器財、文學、兵、疾病、船、居處、食物、醫、介、昆蟲、走獸、飛禽、草木、馬四、戰場、衣飾等に分類し、更に細目に分ちて、各熟語を列擧し、傍に支那音を記し、下に我が俗語を附したり。文化五年戊辰(一八〇八)源愚道の序、九年古賀樣の序等あり
◎島津重豪の傳は「成形圖説」の下にあり。

なんざんたふうんろく　南山踏雲錄　一卷

或年南部を立ちて、京へ赴く時の和文道中記なり。明治元年新鐫す。
◎伴林光平の傳記は「於斐傳草」の下にあり。

なんざんへんねんろく　南山編年錄　二卷　跡部　良顯

南朝に關する事績を年月日に繫げ、漢文にて記せり。後醍醐天皇の元應元年己未(一三一九)より、亀山院の元中九年壬申(一三九二)に至り、元中九年より、懸永三十一年までの事を附錄として掲げたり。正徳三年癸巳(一七一三)の自序中に、「諸家皆ばすところ王代編年の書、未だ詳に春秋通鑑の法をあらはすものを見ず、後醍醐天皇、南山に幸して南北に分れ、北朝を以て正統となし南朝を輕ず、然れども、もと南朝は正統にして、北朝は正統ならず、拔擢するに正統を知る者ありと雖も、私に是れを改正するは憚るところあるか、宜なるかな、南朝を以つて正統とするは獨神皇正統記の存するによれり。故に予意意をここに寓す」と云へり。其の趣味見るべし。
◎跡部良顯の傳は「三種神傳考」の下にあり。

なんじきんもうづる　難字訓蒙圖彙　三卷　永井　如瓶

此の書は一名「邇言便蒙抄」の下に解題せり。

なんしゆうやし　南狩野史　三卷　青山　延光

多くの正史野史によりて、後醍醐天皇南狩の御事績を、漢文にて詳論したるものなり。各引用書名を註記す。明治八年内務省の謄寫するところなり。
◎青山延光の傳は「赤穂四十七士傳」の下にあり。

なんしゆうろく　南狩錄　三卷　味池　修居

南朝皇統の事に關して資料授受の序を明にし、且一時思國衛國の士を採て其の間に附傳したるものなり。享保十九年甲寅(一七三四)の自序あり。

なんしりうごと　難後言　一卷　花垣　幸國

小説家主人著「しりうごと」の中に石川雅望の事を誹れるに因り、本書を作りて雅望を難駁したるもの。雅望が門人の筆なり。「百家説林」に收めらる、罪行の版本なり。
◎花垣幸國は阿波の人にて石川雅望また岡部東平に學べり通稱一衛と云ふ大阪にも江戸にも住めり

なんぜんじかきどめ

南禪寺書留　寫本　一卷

永德、應永、文安、康正年間等に於ける山城南禪寺の古記を書留めたるものなり。卷末に、「金地院家老平賀清兵衞、致持參家來永井與右衞門に渡候を書留る、寶永三丙戌〔二三六六〕三月伊勢兵庫貞守後室日記書之」とあり。

なんせんひしよ

難船祕書　寫本　一卷

寬政、享和、文化間の、本邦難船に關する書類十數條を輯錄細書したる橫綴本なり。

なんせんぶしうさがごだいさんじつき

南贍部州嵯峨五臺山實記　一卷

第一條拔嗟國の毘首羯摩天其の身を變じて、優塡大王の爲に栴檀を以て如來の形像を彫刻せし來由に起り、此の像日本へ渡りし事及び感應奇瑞のありし事などを記し、第三十三條尼公多年の願によりて、靈夢を蒙る事に終れり。五臺山は淸涼寺の號にして、本尊は栴檀瑞像なり。故に本書は一に「釋迦如來栴檀瑞像記」といへり。

なんそうぐんがうかう

南總郡鄕考　二卷　鳥海　醉車

房州の國名郡縣鄕名より各郡の故事を詳敍し、名所和歌並に發句等を揭出す。上卷八項、下卷六項あり。或は「房總郡鄕考」ともいへり。弘化四年丁未〔二五〇七〕仙臺如達の序、嘉永三年庚戌〔二五一〇〕の自序及び新井世文の序等あり。

◉鳥海醉車は南總の人にして、濫齋とも號し、別に南總沿革圖、房陽郡鄕考等の著あり。

なんそうさとみはつけんでん

南總里見八犬傳　百六卷　瀧澤　馬琴

此の書は里見氏の勇士八人の事績を根據として組織せる歷史小說にして、第一輯を文化十一年甲戌〔二四七四〕に出版せしより、第九輯天保十二年辛丑〔二五〇一〕に成りしまで、凡て二十八年の經營を經て成れる、著者が一生の大作にして德川時代文學の一大偉觀たり。八犬士とは犬江親兵衞、犬川莊佐、犬村大角、犬坂上毛、犬塚信乃、犬田汶吾、犬山道節、犬飼現八、之れを仁義禮智孝悌忠信の八德に配せり。里見義實戲れに愛女伏姬を以て犬に許しゝより伏姬犬の精に感じて孕めるあり、割腹して死するに及び、其の所持せる珠數の玉、八方に散亂し遂に八犬士となりて、里見家の勃興を助け、成業の後、上遷するまでの終始を敍せり。支那三大奇書の一なる「水滸傳」が、百〇八の星妖を骨子とせるより脫化せるものにて、卷中「水滸傳」の脚色を襲へる所亦尠からず。和漢の故事を錯綜し、古今文學の精華を集成し、之れによりて作者の文藻博識を窺ふべし。第一輯より第九輯に至り、凡て五十三卷百八十回にて大團圓を告ぐ。畫は柳川重信、溪齋英泉等の手になる。第九輯卷五十三の下を回外剩筆と題し、頭陀枕中を話說す四十八條、稗史本傳を大成す二十八年にして、本傳の遺漏をも補ひ、作者の意衷を述べて總跋に代ふ。其の中に著者中途にして明を失ひ、團圓をなすに苦辛せることを詳に敍したり、曰はく「今茲の春に至りて、我れ又思ふに、八犬傳は今昔ありがたき大部の物の本なるに、始ありて終なくば、只看官の飽ず思はんのみならず、文溪堂が爲には、後々までも利を全くしがたくて、遺憾こそあらんずらめ、人の爲に誤りて忠ならぬは、我も亦恥る所也、然ばとて我が孫興邦は僃乳臭ある机心うせず、且武藝を好める本性なれば、愆る幇助になるべくもあらず、彼が母は人並に、にじり書もすなれば、敎て代寫させばやと、やうやくに思ひかへしつ、第百七十七回の中、音音か大茂林濱にて、再生の段より、代筆させて、一字每に字を敎へ、一句每に假名遣を誨ふるに、婦人は普通の俗字だも、知るは稀にて、漢字雅言を知らず、假名遣てにをはだにも辨へず、偏傍すら心得ざるに、只言語なのみもて、敎へて寫さする我苦心はいふべうもあらず、況て敎を承て寫く者は、渉路を辿る心地して、困して果はうち泣くめり、然而代寫一枚に滿れば讀反へさせて、又敎て傍訓を寫するに、熟字を知らず、又句讀を心得ねば、讀時或は字を脫し、或はなき字を添て、讀すら輙らざるに、知らすこゝろ得ざる事を口授せられて寫く者の艱難を、思へばいと痛しさに、幾度か已めばやと思ひしを、思ひかへして」云々。遂に此の大業を成就せる始末を記せり。其の勞苦思ふべきなり。「帝國文庫」中に三册に收むるもあり。

◉瀧澤馬琴は名を解、字を瑣吉、通稱を淸左衞門といひ。また篁民と稱す。曲亭、馬琴、著作堂、蓑笠漁隱、玄同陳人、魁雷子等の號あり。幼にして稗史野乘を嗜び、甚夜卷を釋てず、年十四兒に薦められて戶田氏の徒士となり、幾もなくして辭し去り、幕士數氏に歷任せしが皆、意に合はず、遂に醫官山本宗英の家に寓し、醫を學びて宗仙と號し、經學を龜田鵬齋に受け、業を終へずして罷め、轉じて小說家山東京傳の家に寄たり。京傳其才を愛し篤く之れを遇す、是に於て始めて戲作に志し、「壬生狂言」を作る。京傳一見して驚歎し、爲に介して書肆蔦屋の管店となす、北齋に畫かしめて小說を著はす事三年にして、飯田町中坂なる商家に入婿し、書を兒童に敎へ、其暇を以て著作に從事す。一生間に作る所は實に三百二十餘種、海內至る所其の書を稱せざるは無く、書賈彫工、傍より之を促すに至りぬ。作る所の文辭絕妙、引證該博、而して、懲勸善懲惡にあり。老幼男女を問はず、讀む事を樂しみて飽く事を知らざらしむ。左に列舉すべし。晚年盲となり、嘉永元年戊申〔二五〇八〕十一月六日、八十二歲にて歿す。小石川茗荷谷深光寺に葬る。著者は、はやり與大いおせわ全く金平、二十冊四十冊誹用而二分狂言、鼠婚禮塵劫記、大師河原撫子話、臍が沸西遊記、敵討雜居寢物語、小夜中山宵啼碑、武藏修行木斎傳、新硏十六武藏坊、高尾船字文、五人揃囃言、大和莊子蝶籤、松株木三階奇談、匂金伽羅之柴舟、猫奴牧忠義合奏、盆𥩟山之日記、復讐阿姑射之松、玉櫛笥石堂丸物語、寫世街道御茶漬十二因緣、荒山水天狗鼻祖、花鬪子食家物語、福譯海無量品玉、四遍搦心學草紙、備正根歲軍廬の智輪、堪忍五兩金言語、武者合天狗俳諧、敵討お園の狂尾、彥山權現誓助劍、安部淸兵衞一代八卦、大當無筆節用似字盡、加古川本藏綱目、飛相案文當字摘、伊東寶痴漢の高名、御獄忠臣藏の攷、大黑猛貲金柱礎、舌下長生藥、庭莊子存物茶話、時代世話足利染、北國頭禮唄方便、風見草絲女箱用、龍宮苦界玉手箱、世諺口紺屋雛形、牙籤節用似字盡、四十部三升追善、明人形肢體機關、足手書草紙の讃賦、備前擂盆一代記、福德三年酒、視樂霞鏡條、春遊男達引、曲亭一風京傳張、坂東七兵衞、春駒染裝行路、人武忠義功浪速杯元女斧輪、野夫翁兒獣曲訛、買飴紙鳶野弄話、種蒔三世相、父讐字部宮物語、養得茄名鳥鬪諍、五段淨瑠璃酒肆、初老丁簡年代記、敵討鼓取眼、忠臣講釋、敎訓跡の祭戲草、六冊德川草紙、世帶評判記、春打札所誓、陽貌陰珍紋鬪蛙、妙黃奈粉發道成寺、信濃善光寺俠待開帳話、敵討鼎杜夫、伊賀越物語、青山瞽の仇討、鼓ヶ洞幼稚敵討、復仇岬之洞、島色蜑湊之仇討、小女郎蛇蝶怨苧環、小鍋丸手石入舟、松の月新刀明鑑、曲亭傳奇花紋兒、打也敵野寺鼓帥、山中鹿之助稚譚、傾城道中雙六、嶋記鸚鵡助太刀、皿屋舖浮名染著、涙の花柱の夕汐、西の部大內鑑、千葉館世繼雜談、險路鈴與作春駒、苗名辻發仇討、かくや姬竹の世話、歌舞妓傳助忠義話、鶴山後日の囀、駒鐘獅左衞門添加太刀、百物語長者の萬燈、姥櫻女淸玄、梅遊吉兵衞發心記、龜王丸齡の島臺、相馬內裏後の雛棚、春の海月の玉取、行年鍋須摩之酒宴、安達原秋の錦木、宮戶河三社網舟、弘法大師誓筆法、比翼紋目黑の色揚、巳鳴鐘男道成寺、手鞠唄三人長兵衞、女夫織玉川晒布、伊達模樣判官贔負、油橋河原祭文、伊豫簾再女純友、金毘羅利生鏡、雲貝身替り鉢木、梅櫻對の姉妹、信田妖手白の猿牽、綠結みの定紋、籠細工竹取物語、盃牛織女願絲竹、月夜好ゝ阿玉ヶ池、漢楚賽擬撰軍談、めて度しとし六三ヶ文章、照子ヶ池浮石窩讃、女悋薔薇之太刀魚、諸時雨紅葉合傘、殺生石後日怪談、視樂霞翳條、萬宗話亦本事始、敵討仇名物數奇、蘐裯辻花染、復仇甚三ヶ紅絹、傾城水滸傳、小女郎蜘蛛、姬萬兩長者鉢木、墨田川柳の禿筆、今戶土產女西行、誹諧詞姿に有身に成る金言、風俗金魚傳、磐洲將棋合戰、對模樣萩と尾花、睦鳥淺間嶽啫草紙、代夜待白女の辻占、五人嚙子部物語、千代褚良著聞集、二人與助百度擬佐本打札所誓、五大力三ッの龍訓讃、大師河原常度話、猫之草紙忠義の合奏、時代世話足利染、絵本忠臣講釋、三人十人おりう敵討女夫柳、十三童孝子功績、敵討淨るり坂仇討、敵討紀念の長册、敵討兒手柏木、敵討白鳥鬪、敵討發八丈、敵討二人長兵衞、敵討勝關乘掛、敵討まがひ八丈、敵同志石卜木枕、化競丑滿の鐘、俊寬僧都物語、常夏草紙、武王軍談、漢楚軍談、天神記、柳巷話說、枕石夜話、刈萱後傳、皿々鄕談、尊氏勳功記、昔語質屋庫、縮緬紙子、八丈綺談、松浦佐用姬石魂錄、絲櫻春蝶奇緣、敵討誰也行燈、近世說美少年錄、續再遊外記、酸風骨、朝夷巡島俠客傳、水滸畫傳、小說比翼文、風俗金魚傳、新編金瓶梅、南柯夢、佐野常世物語、松染情史七草、月水奇緣、裹見葛葉、旬殿實々記、綺本復讐錄、夢想兵衞胡蝶物語、伊賀越物語、椿說弓張月、昔砥蘆綱模綾案、三國一物語、稚枝鳩、標注園の雪、四天王剿盜異錄、隅田川梅柳新書、雲妙間雨夜月、通俗水滸傳、朝夷巡島記、金比羅利生記、聽梅餘史、王櫛笥、俳本水滸傳前編總評、水滸後傳國字解、平妖國字解、武者繪本、譜西遊記國字解、越開春の講、いはでもの記、物之本江戶作者部類、玄雜記、石言遺響、燕石雜誌、玄同放言、俳諧人物志、蓑笠雨談、同いろは韻、著作堂一夕話、同歲時記、戲子名所圖繪、古今歌話、戲子三十六家僞柳色紙、兩子寺綠起、五佛卷、錦𦾔花園、獨老編、雅俗茶文、新編古狀揃、近世流商人盤、女筆花鳥文章、國盡女文章等なり。

なんそうぞくしふ
南窓續集　寫本一巻
宋儒性理の說に關する隨筆なり。「朱子語類」等より抄出せるもの多し。

なんそうちりつぼ
南窓塵壺　一巻　僧　知空
眞宗の法義安心に就き、三十一の問答を設けて記述したるもの。正德三年癸巳〔二三七三〕五月の作なり。
◉知空の傳は「眞宗僧燈錄」の下に在り。

なんそんいかう
南村遺稿　二巻　宇野　義以
卷一に古今體詩共に一百二十三首、卷二に同一百三十一首を收め、筇山集を附錄とす。筇山集は其の子義信の遺稿にして、古今體詩六十首あり。明治十四年諸家の序跋を附して出版す。
◉宇野義以は土方と字し、忠三郎と稱し、南村と號す。大垣藩の人なり。

なんたいかう
男體考　寫本一巻　度會　延經
天照大神の男體なることを考證したるものにて漢文にて記せり。本書の說を破したるものに、度會常彰の「男體辨斷」あり。
◉度會延經の傳は「伊勢國神名帳考證」の下にあり

なんだいき
難題記　寫本一巻
黒田右衛門佐綱政が、寵臣隅田重時を拔擢して寄臣に列し、奢侈を極めたる事を數條の夢物語に託して記したるものなり。

なんたいへいき
難太平記　一巻　今川　了俊
主として今川一家祖先來の事歷を記し、其の功罪を明にしたるもの。應永九年壬午〔二〇六二〕二月、著者七十八歲の時の作なりといふ。貞享三年丙寅〔二三四六〕水戸力石忠一の序に、「難太平記者、實今川伊豫守源貞世之所作也。而人多以爲野人借名之書、頃閱藤原宣胤卿記、始知斯編詭憾太平記謬誤而作也、好古之士、其不可不讀矣。貞世薙髮名了俊、初與父範國共從源將軍尊氏、數有戰功、而歷仕義詮、義滿、義持。當於細川淸氏之叛、範國獻策、義詮欲及其未大徙貞世剌之、且範國意以駿河傳貞世、貞世不肯、終使兄適子氏家繼、氏家死、貞世又以其弟春範承統。於戲忠義萃於一門、足以愧殺亂賊之徒矣。予欽其爲人、恐遺編湮滅或不傳、於是以我相公藏本、校正訛謬、茲鋟於梓、以垂不朽」云々と云へり。其の大意を知るべし。
◉今川了俊の傳は「今川壁書」の下にあり。

なんたいべんだん
男體辨斷　寫本一巻　度會　常彰
度會延經の「男體考」を考證辨駁したるものなり。
◉度會常彰の傳は「外宮神事署略」の下にあり。

なんたうざつし
南島雜志　寫本一巻　名越時之助
薩摩の大島に在留中日常目擊したる風俗產物等を詳記したるものにて、間々粗略なる圖畫をも加へたり。更に附錄一巻を加ふ。著者名越時之助は薩摩の人なり。

なんたうし
南島志　二巻　新井　君美
琉球國の地理、世系、官職、宮室、冠服、禮刑、文藝、風俗、食貨、物產等を記したるものなり。漢土の書に廣徵し全編漢文にて記せり。享保四年己亥〔二三七九〕十二月の自序あり。
◉新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

なんていよゐん
南亭餘韻　寫本五巻　上杉　治憲
天明五年乙巳〔二四四五〕二月七日傳國詞より、時雨の紅葉、月下の扉、嫡庶論、反哺編、孝學編、その他數十編の書物を輯錄せり。治廣に與へて教戒とせしものなり。
◉上杉治憲の傳は「學問大意」の下にあり。

なんてうきでん
南朝紀傳　寫本五巻
此の書は一名「南方紀傳」の下に解題したり。

なんてうくぎやうぶにん
南朝公卿補任　寫本四巻
後醍醐天皇の延元二年丁丑〔一九九七〕より、後龜山天皇の元中九年壬申〔二〇五二〕に至る五十六年間、南朝諸公卿の補任を列記したるもの也。寛政五年癸丑〔二四五三〕三宅舍校寫のよしを末記せり。

なんてうくぎやうぶにんかう
南朝公卿補任考　寫本一巻　塙　保己一
「南朝公卿補任」の謬書なるよしを辨じたる者也。
◉塙保己一の傳は「群書類從」の下にあり。

なんてうくわういんせううんろく
南朝皇胤紹運錄　寫本一巻　竹口　尙重
南朝後醍醐の皇統世系等は、世傳多端にして、信ずべきもの少し、或は三主を四主とし、皇子皇孫の次序に於ては二人を混じて一人とし、一人を以て二人とするなど牽强附會のもの多し。「南帝系圖」及び度會延經、谷重遠、井澤長秀、松下見林、天野信景等の「南朝紹運圖」等ありと雖も、尙誤謬多しとして、著者は更に幾多の正書に徵し、名は缺を存して、此の書を著せりといふ。天明五年乙巳〔二四四五〕の自序あり。
◉竹口尙重のことは「南朝編年紀略」の下にあり。

なんてうくわういんふ
南朝皇胤譜　寫本一巻
南朝の皇統を系譜したるものなり。卷尾に南朝勤王の諸士の姓名を列擧せり。

なんてうごひやくばんうたあはせ
南朝五百番歌合　寫本二巻
南朝の天授元年乙卯〔二〇三五〕內裏の歌合なり。作者は左右各十人、判者は宗良親王にして、自詠の歌二百五十首を以て勝負を附したまへり。

なんてうざつろく
南朝雜錄　寫本一巻
南朝に關する雜著。「殘記殘編」「親房卿問書」「信濃宮傳」「賀文鈔敗」の四種を合編したるものなり。一名「南都雜錄」の下に詳解せり。

なんてうせううんづ
南朝紹運圖　寫本一巻　天野　信景
小槻宿禰の「續神皇正統記」に、北朝を正統としたるを、非なりとし、神器の傳統によりて正統を定め、後醍醐天皇より、後小松院に至るまで、凡四代間の皇子皇孫までを系譜せり。寶永五年戊子〔二三六八〕の自序及び源幸和の跋あり。
◉天野信景の傳は「牛頭天皇辨」の下にあり。

なんてうはなさくまつ
南朝花咲松　寫本一巻　塙　保己一
南朝後村上天皇の次に長慶院を立てて、南都四代とする說の非なるよしを考證辨論したるものなり。天明八年戊申〔二四四八〕藤原眞書寫の奧書あり。「中古叢書」に收めらる。
◉塙保己一の傳は「群書類從」の下にあり。

なんてうへんねんきりやく
南朝編年紀略　寫本三巻　竹口　尙重
南朝の事蹟を、月日に繫け、編年的に記載したるもの。天明五年乙巳〔二四四五〕の自序あり。その中に、南朝事蹟を傳ふる舊記實錄世に少く、度會延經、井澤長秀、谷重遠、松下見林、天野信景、德川光圀、德川綱條等の著ありと雖も、皆不具若くは不適當なる由を述べ、更に自家祖先以來南朝に奉仕して由紀日實に家傳せるもの少からず、それによりて此の書を編せる旨を云へり。
◉竹口尙重は織田丹後刺史輔宣、豐前刺史長敎に仕へる由序中にあり。別著に南朝皇胤紹運錄、武內宿禰墓廟考、五郎社記、大杜記、贈淨廣一河島皇子墓記あり。

なんてうへんねんろく
南朝編年錄　寫本二巻　跡部　良顯
此の書は別名「南山編年錄」の下に解題したり。

なんとかすがしやさいこしよざうこがいちうもん
南都春日社西庫所藏古鎧注文　寫本一巻　源　賴朝
伊勢弓馬叢書の中の一書にして、胄、建物、しころ、胴、脇楯、栴檀板、鳩尾板、袖等を略註したる僅二枚の册子なり。今見るは文政六年癸未〔二四八三〕の寫本なり。
◉源賴朝の傳は「鎌倉右大將家消息」の下にあり。

なんとざつろく
南都雜錄　寫本一巻
四種の書を編集したるもの。其の中「舊記殘編」一卷は首めに北畠家略系を擧げ延元正平建德天授弘和年間の雜事を記し、和歌の事に及べり。寶永六年己丑〔二三六九〕天野信景の跋あり。「親房卿問書」

一巻は北畠親房より白川結城親朝に贈りたる書翰なり。興國元年庚辰〔二〇〇〇〕より同五年に至る關東宮方合戰の雜記にして、其事實徴證とするに足る。「信濃宮傳」一巻は末に系圖をも附したり。「貢文龜玫」一巻は柴野邦彥の貢文龜の形象着色等の考證及び之れに關する尺牘數通を集めたり。

なんとだいぶつでんえんぎ

南都大佛殿緣起 三巻

卷首に金銅敕願文を揭げ、東大寺の濫觴、良辨僧正行基菩薩の事、天平十八年大佛の像を鑄ること七度に及べども正を得ず、天平勝寶元年己丑〔一四〇九〕御願の如く鑄造し得たる事等より、遂に建久六年乙卯〔一八五五〕三月十三日、大佛の供養に、後鳥羽院行幸あり、供養導師、咒願師の名を記し、賴朝自ら中門の柱に判形を捺へたる事等を誌せり。俗崇滋跋を附して、天明三年癸卯〔二四四三〕版刻す。俗跋中に曰く「大佛殿緣起舊版、當院〔龍松院〕鼻祖公慶住職之時、雖滿須美氏寄附之、既紛失而不存矣、今時加州侯大祖母之侍女佐川妙心尼、施若干淨財、再鋟斯緣起、因幸添刻本願聖武帝金銅敕願」と三巻一册に發行せり。

なんとうだいじはうもつづ

南都東大寺寶物圖 寫本 一巻

此の書は同寺の寶物を着色圖したるものなり。

なんとのふ

南都賦 一巻 小笠原基長

南都の盛を賦して明確なる考據、宏博なる引證を揭註せり。享保八年癸卯〔二三八三〕の自序中に、「摧搨舊記百六十餘部、摭拾古語、用爲一編」といへり、一巻二册に版行す。著者小笠原基長は松泓と號す。其の郷貫學歷を詳にせず。

なんとひやくしゆ

南都百首 寫本 一巻 一條兼良

應仁の亂を避けて南都に在りし頃、堀河百首の題意を、大和國の諸處の名に寄せて詠みたる百首なり。文明五年癸巳〔二一三三〕書寫の奥書あり。

◉一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

なんとめいしよき

南都名所記 一巻

奈良名所の大概を記したる繪入通俗本なり。寶曆四年甲戌〔二四一四〕出版、萬延二年辛酉〔二五二一〕改刻す。

なんとめいしよしふ

南都名所集 十巻 村井道弘

南都の名所舊蹟を舉げ主に堂社の緣起來歷を記す

なんとめいしよみちすぢのき

南都名所道筋記 一巻

此の書も南都の名所遊覽の道筋案内をしたる者なり。

なんとやくしじきんせきき

南都藥師寺金石記 一巻 小山田與清

平城右京藥師寺なる佛蹟石記發蹟歌の碑、浮圖の擦銘〔共に千有餘年の古物にて今日に現存せるもの〕を、諸記に參考して校徴詳釋したるものなり。文政年中の自序あり。

◉小山田與清の傳記は「松屋叢話」の下にあり。

なんにようばうたあはせ

男女房歌合 寫本 一巻

永延二年戊子〔一六四八〕七月二十七日、男女の歌合なり。春花色、曉蟲聲、松下聞風、水邊待月の題にて、左、小將君、爲親朝臣、茂賢、行賴。右、加賀守友範、侍從、衞門君、近衞君等の歌人なり。「續群書類從」巻四百〇七、和歌部第四十二に收む。

なんぱうかいたうし

南方海島志 寫本 三巻 秋山章

本書は一名を「伊豆海島記」といひて、伊豆諸島の形勝、風俗、田畝、租稅、村里、戶口、山川、土產、神祠、佛刹、古蹟等を記す。寬政三年辛亥〔二四五一〕の作にかゝる。著者秋山章は伊豆の人。別に豆州志稿、伊豆志稿、伊豆勝覽等の著あり。

なんぱうきでん

南方紀傳 寫本 五巻

後醍醐天皇の元弘元年辛未〔一九九一〕より、稱光院の應永三十二年乙巳〔二〇八五〕に至る、南部に關する事績を記したるものなり。一名を「南朝紀傳」と云へり。「史籍集覽」に收めたり。

なんばぐんかんたいぜん

難波軍鑑大全 寫本 十巻 清範忠

諸家の舊記によりて、二階堂行憲、萬年賴方の「難波戰記」を增補したるものなり。著者清範忠は與八郞と稱す。

なんばぐんき

難波軍記 寫本 十巻 萬年賴方 二階堂行憲

此の書は一名により「難波戰記」の下に解題せり。

なんばぐんき

難波軍記 寫本 二巻

豐臣德川大阪接戰の始末を記したるもの。間々故老の談話と、記者の今按とを加へたり。德川方の人の著せしものなるべし。延寶五年丁巳〔二三三七〕の序を載せたり。

なんばぐんきぜんかい

難波軍記全解 寫本 十四巻 神田勝久

豐臣德川大阪交陣の顚末を詳記したるもの。德川家康上洛、大阪城中秀賴上洛群議の事等より、大阪落城後德川忠輝信濃に移され逝去するの事に至る凡そ百九條あり。本書は二階堂行憲、万年賴方合著「難波戰記」を基とし、「武德大成記」、「武家閑談」等を參照して著したるものなりと云ふ。享保十一年丙午〔二三八六〕の自序あり。

◉神田勝久の傳は「合戰高名記」の下にあり。

なんばこうき

難波後記 寫本 十二巻

難波記に繼で筆を起し、同書に倣ひて、大阪平定以後の事を記し、島原一揆、江戶城出火の事にまで及べり。寬永二年乙丑〔二二八五〕の作なるべし。

なんばせんき

難波戰記 寫本 十巻 萬年賴方 二階堂行憲

豐臣德川大阪戰陣の始末を記したるもの。豐臣秀賴上洛の事より、德川家康同秀忠の出陣及び歸洛、大阪落人誅戮等の事に至る、凡そ百十三條あり。大阪城及び附近の圖をも揭げて記載頗る詳悉せり。本書或は「難波軍記」といふ。一本に寬文十二年壬子〔二三三二〕三宅可參の序を載せたるものあり。

◉萬年賴方は板倉勝正の客にして、兵法を好み古戰の事を穿鑿せり。二階堂行憲は阿部豐後守忠秋に仕へし人なり。

なんばせんきたいぜん

難波戰記大全 寫本 三十二巻 田丸具房

德川豐臣大阪接戰の始末を記したるもの。大佛殿建立の事に始まりて元和三年丁巳〔二二七七〕の事までを記せり。前揭「難波戰記」に記す所とほゞ同じく、其の記載の條件に兵書を引きて議論を加記したるものなり。

◉田丸具房は常山と號し、佐右衞門と通稱す。伊勢北畠の庶流なりと云ふ。「天草征伐記」の別著あり。

なんばせんきついか

難波戰記追加 寫本 六巻 萬年賴方 二階堂行憲

前著「難波戰記」に續きて、大阪落城以後の事を詳細に記したるもの。大阪落城の事より太田道灌江戶川越の事に至る三十一條あり。寬文十二年壬子〔二三三二〕三宅可參の序を載す。

◉萬年賴方及び二階堂行憲の事は「難波戰記」の下にあり。

なんばむねきやうのき

難波宗城卿記 寫本 一巻 難波宗城

享保九年甲辰〔二三八四〕八月より、寬政六年甲寅〔二四五四〕十二月に至る記錄なり。朝儀に關する記事多し。

◉難波宗城は正二位權大納言宗建の子にして、父の跡を繼ぎて權大納言に至れり。享和三年癸亥〔二四六三〕年八十に達し、杖を聽さるといふ。

なんばむねたけきやうのき

難波宗建卿記 寫本 六巻 難波宗建

享保十三年戊申〔二三八八〕正月より、元文二年丁巳〔二三九七〕八月に至る、朝儀に關する日記なり。

◉難波宗建は從三位宗尙の子にして、權大納言正二位に至れり。家世々蹴鞠の法を傳へしが、宗建頗る其の技に達し、時人の嘆稱する所たりきとぞ。明和五年戊子〔二四二八〕年七十二にて薨ぜり。別に「考閒錄」三册をも著はせり。

なんばんじこうはいき

南蠻寺興廢記 一巻

天正中織田信長、江州甲賀郡に切支丹宗南蠻寺を立つ。其れより同十六年戊子〔二二四八〕豐臣秀吉之れを破滅するまで、切支丹宗門に係はる事を

記せり。

なんぶけいづ
南部系圖 木一卷

清和天皇より系を引きて、本支數十葉を系譜し、天文以後彦三郎晴継の子弟に至れり。「續群書類從」卷百二十七、系圖部第二十二に入る。

なんぶごせいでん
南部五世傳 一卷　齋藤　馨

南部氏五世間の淡文傳なり。明治四年辛未(一八七一)齋藤馨の序、同六年癸酉(一八七三)田口小作の跋あり。同年田口小作の校正印行する所也。

◎齋藤馨の傳記は「續竹堂文鈔」の下にあり。

なんぶこんげんき
南部根元記 木一卷

南部氏祖先以來歷代の事績を記したるもの。其の祖南部三郎光行が治承四年庚子(一一八〇)石橋山の軍功にて賴朝より甲斐の國南部の鄕を得、其の後文治五年己酉(一一八五)奥州泰衡征討の賞として、同國糠部郡を得、建久三年壬子(一一九二)甲斐の國より、三戸へ入部せしこと等を記し、享保年間光行より三十三代修理大夫信親に至るまでの事實を略記す。

なんぶなんしやうじつき
南部難商實記 木二卷

寛延三年庚午(一七五〇)十一月、奥州岡部白濱村船頭又五郎乘員六人にて唐土福建省へ漂流し、翌四年長崎へ送り帰けられし時の始末を記したる實錄なり。

なんぺいき
楠兵記 木二卷

卷一を軍元立將の卷と稱し、卷二を軍敎の卷と名け、楠氏の軍法といふを漢文にて記し、往々圖を以て示せり。末に「建武三年(一三三六)五月日、正五位河内守楠朝臣正成」とあれど、後世の僞書なること必せり。

なんぺうき
南瓢記 五卷　枝芳軒

南海諸國の風俗雜事を筆記したるもの。瓢を以て海陸飛行の通ある南瓢道人の夢の告を筆記したるものと假託せり。寛政九年丁巳(一七九七)中野菜の序あり。著者枝芳軒は書肆なり。

なんぼくいうげん
南畝莠言 二卷　太田　覃

種々雜事の故實を記したるもの。目錄を除くに、卷一に二十條あり。文化十四年丁丑(一八一七)同年出版す。

◎太田覃の傳は「南畝叢書」の下にあり。

なんぼくかいたくいけん
南北開拓意見 一卷

我が邦南北地の開拓に關するところにて、水野筑後守の意見に係り、北は蝦夷地の開拓にて、樺太の開拓に及ぶ。「日本文庫」第十一編に收む。

なんぼくぐんかん
南木軍鑑 二十二卷

元弘建武年間の楠氏の軍事を詳敘したるもの。卷一を主上御夢に楠氏を得給ふ事より、四條縄手の合戰に正行討死の事までを記せり。

なんぼくし
楠木誌 八卷　中山　利質

楠氏の事績を輯錄したるもの。例言中に「此の編載するところ、正成、正行、正儀父子の本傳は專ら日本史及び忠勲錄に據り、楠族諸傳の如きは、前出史を採て之れを補ふ。前出史、日本史、各詳略あり、既に日本史に出るものは苟に依て改めず、四卷以下碑、記、論、贊、詩、賦、和歌等は、凡て楠氏に關するものを集む」云々といへり、廣索、博採以て本書を成せり。弘化六年己酉(一八四九)板倉勝明の序、嘉永二年己酉(一八五〇)齋藤正謙の序及び自序あり著者中山利質は幕府の御坊主なり。

なんぼくしんわ
南北新話 一卷　建部　凉岱

俳人蓼林希圓等の主旨を敷衍したるもの。目錄を除くに、發句の變化、蓼林の說、希圓が辨、句法の論、みづから句を定る法、句評の箴匡蓼林が猪垣の句評、蓼林諫跋烏の句、遊寺の鐘の句論、しぐれの句解、蓼林集解嘲、むすぶ句法、自然の句、親相、題宜の句、流行の客論、初心學道、句數の修行、句の訛

の論、古語の拔、蓼林鹿の句の二列、蓼林自選等なり。延享四年丁卯(一七四七)法橋百川の序あり。寛延元年戊辰(一七四八)出版す。近年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」の中に一ヶ收めたり。

◎建部凉岱の傳は「歌文要語」の下にあり。

なんぼくにきやうれいあしふ
南北二京靈地集 二卷　僧　良定

上卷に和州城の事より、熊野權現の事に至る三十五條、下卷に北京の事より、住吉大明神の事に至る四十五條あり。寛永元年甲子(一六二四)四月十六日の奥書あり、曰く「右此上下草稿者、予晩年遺忘漿風、移住此三笠山麓、出入所々、皆憑跡也、間皆起不過、知音後人亦如此、因茲少々書籠所見、集之號靈地集、若渉賢者手、添削是幸」とあり。

◎良定の傳記は「聖國寶」の下にあり。

なんぼくそうしよ
南畝叢書 四卷　太田　覃

古今諸家の撰著を叢書す。卷首に前集共に三十種とあれど、今見る處は、楠原芝輔の隨筆「楠巷談苑」、篠崎維章の隨筆「東海談」、南畝の門人某の著せる「藤樹年譜」、以上三種を收めたるのみ餘の二十七種は未だ版本たらざるものなるべし。收むるところの三種は每編小序を添へ、且作者の略傳を附す。寛政元年己酉(一七八九)の刊本なり。

◎太田覃は江戸の人にして、幕府の小吏たり、南畝また子耕と字し、直二郎また七左衛門と稱す。蜀山人、杏花園、櫻山人、石桶寮と號す。最初四方赤良と號し、また四方山人と號す。この余草を綴て蜀山人の號に改めたりといふ。文學を好み、和漢の學に通じ、文章を善くし、また最も狂歌に長ぜり。著書數諸を以て一世に知られたり。文政六年癸未(一八二三)四月六日、七十五歲にて歿す。著書頗る多し、列擧すれば、遯遊從之、漢鐘馬類考、浮世絵類考、龜卜類考、町屋類考、貨名類考、九月十三夜類考、取々千卷、富突考、源の若葉、家傳史料、草野史料、かくれ里の記、みづの浦、あしさ、昌平餘事、松樓私語、泗上呵筆、惟林一葉、街談錄、もすの草蔓、伸高日錄、細推物理、班荊野談、ひともと草、瀬山問答、富雄考、沿海異聞、俗耳鼓吹、南窗閑話、夢の浮橋、假名世說、科場秘錄、遊藏三昧、聞中氏碑誄、五星一舍私勘、漂流抄、成事不說、廢疹考、論衡帳秘錄、改元紀行、壬戌紀行、革令紀行、小春紀行、津寄唱和、親先集、瓊浦雜綴、調布日記、玉川砂利、玉川餘波、同遺稿、竹橋謾簡、竹橋謾間餘筆、謾戔書、客舍雜錄、四方のあか、七襲、不老不死仙家長壽堂、老葉子、蜀山餘錄、明詩擷林、東風詩草、杏園詩集、杏園文集、寢憶先生文集、萬載狂歌集、後萬載狂歌集、狂歌新五集、狂歌五傳、同百鬼夜行、同知足振、同月見集、全百首、蜀山百首、蜀山人集、紅、資合圖說、狂文資合寄品、狂文資合寄品、千紫萬人藝寄集、北里年表、七拳圖式、岡目八目、源平總勘定、小說土平傳、宛丘傳、零餘戔評、はりこの虎、重ねく、目出度尽參、國此奴和日本、手繰鳥無、縣見狂文、二度の賭、狂歌頂邊呑有、筆まかせ、南畝叢言、杏園雜錄、石桶堂隨筆、天明三年目錄、撰選編、蓼之塵、一話一言、百瀬川、半日閑話、百和香、群書一覽、續群書一覽、續故紙、三十輻、麓の塵等あり。

◎太田覃の傳は「蜀山人」の下にあり。

なんぼくそうわ
南畝叢話 一卷　山田　重春

狗偸力穡の趣意、農家必讀の書類等を說示したるもの。天保九年戊戌(一八三八)二月の作なり。

◎山田重春は上總國の人にして、東園と號し、別著に「灌園暇筆」一卷あり。漢文の隨筆なり。

なんぼくぶんしふ
南浦文集 三卷　僧　玄昌

著者の文詩集。卷上に文章三十五編。卷中に詩六十首。卷下に詩文凡そ二十七首。皆遊藏文字なり。寛永六年己巳(一六二九)某の跋ありて、慶安二年己丑(一六五〇)出版す。

◎玄昌は文之と稱す。日向國南鄕の外浦に生る、仍て以て南浦と號せり。大隅國正興寺の住職となり、後鎌倉建長寺に移れり。

なんめいししふ
南溟詩集 四卷　入江　忠囿

一名を「滄浪居文集」といふ。安永四年乙未(一七七五)源純堯の序を附して同年刊行す。

◎入江忠囿は江戸の人にして、子園と字し、幸八と稱し、南溟また滄浪居士と號す。物徂徠に就て儒を學び、藥を開きて徒を敎授す。著書は本書の外に、大學發蒙解、唐詩句解等あり。明和二年乙酉(一七六五)五月二十八日、年八十八にて歿す。

なんやうかいんづばつかう
南陽耕隱圖跋考 木一卷

南陽耕隱圖の跋の孔明が龐士元に贈りたる希世のものなりといふを考論したるものなり。承應二年癸巳(一六五三)林道春、林恕、林春德等の論なり。內閣文庫に特別書として所藏せり。

なんやうしぶろん　南陽四部論　初三卷　菊池　武愼

本書は刊本「南陽先生四部論」の下に解題したり。

なんやうせんせいしぶろん　南陽先生四部論　三卷　菊池　武愼

經論、史論、子論及び文論(附詩論)を輯錄し、附錄として佛論一編を載せたり。本書は單に「南陽四部論」として行はるゝもあり。安永二年癸巳(一七七三)の自序あり。翌年出版す。

◎菊地武愼は江戸の人にして、伯修と字し、千藏と稱し、南陽と號す。業を井上金峨に受けて儒學者たり。著書は此の外に、韓客唱和集、蓋簪山房集あり。

なんゆうきかう　南遊紀行　初一卷

享和二年壬戌(一八〇二)小野蘭山が命によりて、紀州熊野に採藥したる時、其の隨行者の筆錄したるものなり。里程、藥品等を記せり。

なんゆうきかう　南遊紀行　三卷　貝原　篤信

上卷は山城より和泉國田川に至り、中卷は紀伊國大川浦より戸たて山に至り、下卷は紀和の境待乳峠より山城に入り、石清水に至れる記にして、五箇國內の名所、舊蹟、神社、佛閣を簡單に記せり。時は元祿二年己巳(一六八九)の事なり。

◎貝原篤信の傳記は「自娛集」の下にあり。

なんゆうこんさいろく　南游稱藏錄　一卷　熊坂　秀

著者南遊中に得たる諸家の詩を集錄したるものなり。寬政十二年庚申(一七九二)の事なり。

◎熊坂秀は奧州伊達高子邑の人にして、吉州(享和三年致す)の子なり。君實と字し、宇右衛門と稱し、磐谷と號す。儒を以て知らる。著書は本書の外に、畿志編、西遊紀行別錄考證、戊亥遊藁、磐谷山人稿等あり。

なんゆうしさう　南遊詩草　一卷　龍　公美

攝津河內の間に遊びたる時の詩を輯錄したるもの也。卷末には「南遊草附」と題して、和歌若干首を擧げたり。自序及び安永五年丙申(一七七六)北山彰世の跋等あり。

◎龍公美の傳記は「草廬文集」(初編)の下にあり。

なんらんさうし　南蘭草子　一卷　覓橋陳人

假名の圖筆なり。各項記事の終句に「何々ならん」の疑辭を置きたるより、書名を「南蘭草子」といへり。徂徠の「南留別志」に倣ひたるなるべし。書中同書の事をも所々に引用せり。思ふに學者の手に成りしものなるべし。覓橋陳人は匿名なるべけれど、今其の本名を詳にせず。別著に「武藏名所考」あり。

なんりようくんいじ　南龍君遺事　初四卷　僧　眞如

紀州藩宣の一生事績を記したるもの。南龍は其の證號也。春夏秋冬の四卷に分ちて、言行を網羅せり

なんりようげんかうろく　南龍言行錄　初五卷

紀州藩宣の一生言行を記錄したるものなり。天和二年壬戌(一六八二)江四の儒者烏有子の序あり。

なんれいいかう　南嶺遺稿　四卷　多田　義俊

著者の考證雜錄。寶曆七年丁丑(一七五七)夏芝之の序、細谷文卿の跋あり。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

なんれいいかうひやう　南嶺遺稿評　初一卷　伊勢　貞丈

秋齋の「南嶺遺稿」中、卷一より一條、卷二より二條、卷三より四條、卷四より一條を抄出して、其の誤謬を評論したるものなり。安永三年甲午(一七七四)七月十九日、評するところなり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

なんれいし　南嶺子　初六卷　多田　義俊

著者南嶺の隨筆にして、多くは考證なり。寬延二年

己巳(一七四九)山中秀蕃の序、陶山晃の序、夏芝之の序等あり。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

なんれいしひやう　南嶺子評　初一卷　伊勢　貞丈

秋齋の「南嶺子」中より、數條を抄出して其の誤謬を評論したるものなり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

なんろし　南路志　初百二十卷　武藤　致和

土佐國の郡鄉年紀その他を詳敍したるもの。大綱を國總、年譜、附錄、拾遺の四に分ち、國總には、本國各郡村に關する古來の事蹟を類擧し、名所舊蹟、神社佛閣、其の他古人の由緒、古文書、產物奇談、詩歌、人物等を列敍す。年譜は天正十三年乙酉(一五八五)長曾我部元親の任國より、明和七年庚寅(一七七〇)に至り、年序によりて事實を掲げ、附錄は明和八年辛卯(一七七一)より文化元年甲子(一八〇四)に至る雜事を記し、拾遺は國總年譜の兩部に漏れたるものを集め、又古人の編集、諸家の記錄等を掲載せり。凡て百三十八冊に寫傳す。實に土佐一國の詳細地誌なり。文化十年癸酉(一八一三)の自序あり。

◎武藤致和は土佐の人にして、忠左衛門と稱す。本書の成れる文化十年癸酉(一八一三)は實に著者七十三歲の時なりきといふ。

なんろし　南路志　初二卷　何　龍

土佐の國の地理、歷史に關する事項を詳敍せり。

に

にるだがうだん　仁井田鄉談　初一卷　甲把　瑞益

土佐國高岡郡仁井田庄に關する故實沿革其の他の雜件を記したるもの。"土佐國群書類從"に收む。

◎甲把瑞益は別に「仁井田社鎭座傳記」の著あり。

にるだしやちざでんき　仁井田社鎭座傳記　初一卷　甲把　瑞益

土佐國高岡郡仁井田の庄仁井田神社の事傳を記したるもの。"土佐國群書類從"に收めらる。

◎甲把瑞益の事は前掲「仁井田鄉談」の下にあり。

にそんかうきようちくえんじゆつ　二圓交鎖容逐圓術　初一卷　會田　安明

二圓と一線圓、或は三圓圓に累圓を容れたる各圓に關する事件を記したるもの。著者年代共に未詳。

にぎりやくせつ　二儀略說　初二卷　小林　義信

天地二儀の略說にして一名を「一輪論」といふ。正德五年乙未(一七一五)多節齋大江意敬の奧書あり。

にぎりこぶし　仁義理古武志　一卷

四十八態の品種を圖示し、個姿法放態法等、都て應用に關する事件を記したるもの。著者年代共に未詳。

にかいだうけいづ　二階堂系圖　初一卷

民部大輔山城守行政より、數十代山城守兼藤、其の弟能登守知藤に至れり。"續群書類從"卷百六十九、系圖部第五十六に收む。

にかせん　二歌仙　一卷　松　吾

吾竹坊以下松吾、路洪、狂々その他數十家の俳諧を集めたるもの。寶曆五年乙亥(一七五五)の五竹坊の序あり。

にぎはひぐさ　にぎはひ草　二卷　佐野　紹益

著者の得意なる茶、香、鞠、和歌等につきて、紳士の寵遇を受けし事どもを隨筆したる者也。下卷に養父光悅の寓居鷺が巢の大虛庵の風致を詳記せり

◎佐野紹益は俗稱を灰屋紹益といふ。茶、香、鞠の諸技に長じ、かねて、和歌に巧なりきといふ。

小林義信は長崎の儒者にして、號眞と字せり。天和三年癸亥(一三四三)歿す、享年未だ詳ならず。

にぐうだいきやうぶるる
二宮大饗部類　本朝一巻
中宮東宮二宮の大饗に關する記錄を纂輯したるものなり。

にぐうねんぢうぎやうじ
二宮年中行事　一巻
伊勢內外二宮の年中行事を記したるもの。度會延佳の奥書あり。

にぐじきろん
肉食論　本朝一巻　三宅　正堅
儒者の肉食する可否の客問に對して對へたる一編の漢文論なり。「輪池遺書」の第四に收めたり。
◎三宅正堅は近江の人(或は京都の人ともいふ)子柔と字し、澹庵と號す。儒學を堀正意に學びて、桑名藩に仕ふ。著書は本書の外に、積年雜記、滅草ひところ、澹庵遺稿等あり。

にくまれぐさ
見憎草　本朝二巻　村上　祐之
貧賤にして世職を得ざるを呻ち、世の際士、不得道の事績を論述したるものなり。寶曆十二年壬午(一七四二)の自序あり。「土佐國群書類從」第百五十九に收む。
◎村上祐之は土佐國長岡郡後免町の人にして、貢免庵と號せり。

にこんしふ
二根集　本朝一巻　荒木田守平
和歌連歌のことを筆錄せり。元祿二年辛未(一六八九)九月、三條四大納言實澄伊勢參宮逗留中の談話を筆記せるものなり。著者荒木田守平は伊勢外宮の神職たり。

にざうしやうざ
二藏頌義　三十巻　僧　了譽
本書は具名「釋淨土二藏義」を更に註釋したるもの。現本は寛永九年壬申(一六三二)仲秋の重刊なり。
◎了譽の傳は「釋淨土二藏義」の下にあり。

にざうぎけんもん
二藏義見聞　八巻　僧　了譽
自著「釋淨土二藏義」を更に註釋したるもの。現本は寛永九年壬申(一六三二)仲秋の重刊なり。
◎了譽の傳は「釋淨土二藏義」の下にあり。

にしえぞたかしまにつき
西蝦夷高島日記　四巻
西蝦夷高島といふところに、官命を以て往復せし時の日記なり。彼國の風俗、地勢、物産等を略記す。

にしえぞにつし
西蝦夷日誌　五巻　松浦竹四郎
西蝦夷の地誌にして、山川海草木等の眞景を圖出せり。一編より五編まで五册あり。安政三年丙辰(一八五六)の作、文久三年癸亥(一八六三)の凡例あり。
◎松浦竹四郎の傳記は「蝦夷年代記」の下にあり。

にしかうつけのくにはつけいしならびにじよ
西上野國八景詩並序　本朝一巻　和田　湖水
西上野國八景といふは、三波川姥石、西牧破風山、妙義山石塔、樣名地藏嶽、牧川繩橋、白川車の郡、石原御劵山、佐野定家の森にして、湖水の撰びたる數なり。各其の來由を記し、自作の贅句を附し、貫玉智證、仙海、桃牛等の詩を編めたり。
◎和田湖水は野州の人にして、自寸齋と號せり。俳句家と見えたり。

にしきものがたり
錦木物語　五巻
艷書の往復を綴りたるもの。文を綴り歌を研くために作れりといへど、全編一貫の戀愛物語なり。

にしきのうらうら
丹敷能浦裏　本朝三巻
介類五百六十九品を揭圖したる着色寶譜にして、其の名稱產地等の略解を附記したり。著者年代を記さゞれども、文化文政の頃に成りたるものならんと云ふ。

にじじきならびにせがきちう
二時食並施餓鬼註　一巻　僧　性亮
佛徒の守るべき二時食(朝食と午餐)に就ての作法順序と、兼ねて施餓鬼の由來法式等を說明したるもの。元祿五年壬申(一六九二)の著なり。著者性亮

は眞言宗輪山編照院の住僧なり。

にしだいしふ
二四代集　本朝十巻　藤原　定家
入代の集中より抄出したる歌集なり。春上下、夏、秋上下、冬、賀、哀傷、別離、羇旅の十に部立して、一千七百九十一首を收む。もと「入代集抄」といひしを後に改名したるなり。
◎藤原定家の傳は「撿遺愚草」の下にあり。

にしだにぎろんぎきうし
西谷義論議章紙　本朝一巻
淨土宗西山派の宗義を發揮論述したるもの。論題は「歸三寶與念佛同耶異耶」に始りて「觀經何時章提得忍耶」に終る二十一題あり。大永八年戊子(一五二八)四月書寫のよし奥書す。

にしだにぎろんだい
西谷義論題　本朝一巻
淨土宗の教義に關する論題を諸書中に說明したる箇處を指示したるもの。論題は百四十五あり。書目には他宗の章疏を初め、傳通記、楷定記、直牒、糠鈔、頌義、論義鈔、他罪鈔、決疑鈔、新記、口罪鈔あり。

にしだにみやうもく
西谷名目　四巻
天台宗の教義を平易に敍述したるもの。著者年代共に未詳。或は慥仁の頃の作ならんと云へど定かならず。註釋には、眞迢の「西谷名目鈔」六卷、觀應の「西谷名目頭書」四卷、守元の「西谷名目啓蒙」九卷、了達の「西谷名目句解」七卷、著者未詳の「西谷名目條箇」五卷等あり。

にしおまはりうらまうしあげ
西地回浦申上　本朝二巻　堀機部正　村垣與三郎
著者兩人が、幕命によりて、東西蝦夷地巡檢の時の行程大略の上申なり。
◎堀機部正の傳は「蝦夷地村垣與三郎一名は範正、後年德川將軍の勘定吟味役となり、元治元年甲子(一八六四)同五年外國奉行となり、文久三年遣米副使となり、歸りて作事奉行となり、六年勘定奉行兼箱館奉行に轉じ、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺及び新續古今の二十一集を合せたるものなり。

にしのみやあんないしや
西宮案內者　一巻
此の書は攝津の西宮をはじめ、近邊諸社の緣起等を記し、且つて「西宮廣田參詣獨案內」と記せり。旅人の爲めに土人の作れるところにて、僅々數葉の摺物なり。年時を記さず。

にしのみやうたあはせ
西宮歌合　一巻
大治三年戊申(一一二八)八月二十九日、神祇伯顯仲王等廣田社に相會して催したるところにて、判者は前左衞門佐基俊、題は月寄曉、蟲寄夕、萩寄戀、女郎花寄戀、瞿麥寄戀、薄寄戀、藤袴寄祝等にて、凡て二十番あり。「群書類從」卷百八十四、和歌部第三十九にあり。

にしのみやぢんじふ
西宮左大臣集　本朝一巻　源　高明
著者の歌集。治承三年己亥(一一七九)七月、書寫校合の奥書あり。
◎源高明の傳は「西宮抄」の下に出づ。

にじふいわだいしふ
二十一代集　五十六巻
代々の歌集、卽ち古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新敕撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺及び新續古今の二十一集を合せたるものなり。

にじふいわだいしふぶんるる
二十一代集分類　五十巻
二十一代集を分類するに、部立の次第に從ひて、歌の順序に係はらずして、部立のまゝに分類別綴したるものなり。

にじふいつしやのき
二十一社記　本朝一巻　北畠　親房
伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大神、大倭、石上、廣瀨、大原野、吉田、住吉、日吉、廣田、梅宮、祇園、北野、丹生、貴船、都合二十一社の緣起及び鎭座の時代等を記したるもの。卷末に、一品儀同三司作」とあり。「櫻雲記」に、北畠親房を中院一品と稱するよし見えたり。また林道春「日本書籍考」に曰く「諸社考は二十一社の事をあら〳〵と記せり。親房の作なり。一卷あり」と。恐くは此の書の事

ならんと云ふ。元禄二年己巳(一六八九)版行の由を記せり。

◎北畠親房の傳は「神皇正統記」の下にあり。

にじふごせんき 二十五戦記 ※八巻

信州海野口城攻、韮崎合戦、海尻合戦、小荒間合戦、瀬澤合戦、鰐尻合戦、戸石合戦、笛吹峠合戦、上田原合戦、海野平合戦、丸山合戦、三寺尾合戦、法福寺合戦、時田合戦、桔梗原合戦、三日尻合戦、川中島合戦、松山城攻、川越衆軍、和田城攻その他共名戦、二十五戦を記したるものなり。

にじふさんもんだふ 二十三問答 一巻

道心おこすべき事、一心のむけやうの事、善悪限りなき事、よしあしのみなもとの事、根本むまれ死なざる事等より、心のおこるを如何すべき事、私の言にあらず皆經文なることに至る佛說二十三の問答なり。慶安元年戊子(一六四八)出版す。

にじふしかうえことば 二十四孝繪詞 ※一巻 屋代 弘賢

漢土二十四孝の傳を和文にて綴りたるものなり。寛政二年庚戌(一七九〇)八月中旬の脫稿とあり。「輪池叢書」の第三十一に收む。

◎屋代弘賢の傳は「古今要略稿」の下にあり。

にじふしかうきやう 二十四孝經 ※一巻 西園

漢文にて二十四孝を略傳したるもの。文政元年戊寅(一八二八)の自序あり。

にじふしかうひやう 二十四孝評 一巻 熊澤 伯繼

支那二十四孝の事績を簡略に記し、平易なる評論を附したるもの。寛政二年庚戌(一七九〇)草加定環の序あり。同年出版す。

◎熊澤伯繼の傳は「孝經外傳或問」の下にあり。

にじふしはいきうせきつゑ 二十四輩舊蹟圖彙 一巻

他力眞門の祖二十四輩の舊蹟を巡覽圖說したるものにて、凡そ五十餘箇所を表はせり。寛延三年庚午(一七五〇)の自序あり、翌四年大阪にて版刻す。

にじふしはいじゆんばいづゑ 二十四輩順拜圖會 十巻 僧 了貞

眞宗の開祖親鸞聖人の行化舊蹟の緣起を、畿内、北陸、關東、東海等と次第して、通俗繪入に詳記したるもの。享和三年癸亥(一八〇三)の著なり。著者了真は河内國專教寺の住僧なり。

にじふだいしふ 二十代集 一巻

二十一代集の中、古今和歌集を除きたる、餘の二十集中より、或種の歌を抄出したるものなり。

にじふにしやさんけいき 二十二社參詣記 ※一巻 度會 延賢

上中下二十二社に參詣しての記事なり。各略緣起を記す。享保十五年庚戌(一七三〇)の奥書あり。

にじふにしやしかう 二十二社私考 ※一巻 速水 房常

上七社、中七社、下八社の二十二社につき、祭神、所在その他等を考證したるものなり。

◎速水房常の傳は「禁中職原擧要」の下にあり。

にじふにしやしだい 二十二社次第 ※一巻

伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、大和、廣瀨、龍田、住吉、日吉、梅宮、吉田、廣田、祇園、北野、丹生、貴布禰、以上二十二社の由來と、其他神社に關する雜件を考記したるものなり。

にじふにしやちようかう 二十二社徵考 ※三巻 堀 直明

上七社、中七社、下八社の祭神、神社につき、行幸、放生會、臨時祭を考證したるものなり。

にじふにしやほんえん 二十二社本緣 一巻

二十二社とは、伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日、大神、大倭、石上、廣瀨、龍田、大原野、吉田、住吉、日吉、廣田、梅宮、祇園、北野、丹生、貴船なり。本書は其の略本緣なり。「群書類從」卷二十一、神祇部に收む。

にじふゆゐしきろんじゆつきかうろく 二十唯識論述記講錄 二巻 僧 基辨

印度世親の「二十唯識論」を註釋したる唐慈恩の「二十唯識論述記」を更に講述したるもの。解釋頗る簡略なり。從來寫傳なりしを、明治十九年に至りて新刻せり。

◎基辨の傳は「演語八轍鞏」の下にあり。

にじふゆゐしきろんちやうひろく 二十唯識論張秘錄 二巻 僧 戒定

印度世親論師の「唯識二十論」を註釋したる唐慈恩の「二十唯識論述記」を、更に註解評論したるものなり。明治二十七年に至りて新刊す。

◎戒定は眞言宗勅山の僧、天明の頃の人なり。漢學に博く、殊に華嚴宗の學に精通し、本書の外に、五教章張秘錄、十卷章張秘錄等の著あり。

にしやまものがたり 西山物語 三巻 建部 凉岱

上卷を黃金の卷、かへの卷、たちの卷とし、中卷をあやしの卷、琴の卷、文の卷、別れの卷とし、下卷を露の卷、よみの卷、ほぎの卷として、中古の事實を中古の調もて書き綴りたるものなり。明和五年戊子(一七六八)の金龍敬雄の序を附して出版す。

◎建部凉岱の傳は「歌文要語」の下にあり。

にしよくわうだいじんぐうしんめいひしよ 二所皇太神宮神名秘書 ※一巻 度會 行忠

前に神名秘書として解題したるものと同じ。彼は單行本にして、此は「續群書類從」卷三、神祇部に收めたり。此書には寛正五年甲申(一四六四)荒木田氏經寫本の奥書あり。

◎度會行忠の傳は「神名秘書」の下にあり。

にしよくわうだいじんぐうしきねんさい 二所皇太神宮式年遷宮要略 ※一巻 度會 延良

伊勢內外二宮御遷座要略にて、內宮は五十鈴河上に移遷まで、外宮は雄略帝の御代山田原に遷宰あり しまでを記す。正保三年丙戌(一六四六)春正月に落すところなり。或は「伊勢遷宮次第」ともいふ。

◎度會延良の傳は「神宮祕傳問答」の下にあり。

にしよだいじんぐうゐんねぎてんぶしだいき 二所太神宮員禰宜轉補次第記 ※一巻

伊勢兩宮の職員補任次第の略記なり。「續群書類從」卷九十二、補任部第四に收む。

にしよだいじんぐうれいぶん 二所太神宮例文 一巻

伊勢兩宮の荒木田遠祖泰仕次第、一員禰宜補任次第より、臨時遷宮並に假殿遷宮次第等に至る二十六箇の例文を集げたり。「群書類從」卷五、神祇部に收む。

にすゐがふりうづ 二水合流圖 一舖 荒木 帆風

一は江州湖水瀨田落口より始り、淀に合して一となり、一は大川原より兩岸、枝川、橋梁、社寺、城廓等を記せり。著者荒木帆風は伏陽の人とあり。

にすゐき 二水記 ※十二冊 鷲尾 隆康

著者の記錄にして、後柏原天皇の文龜四年甲子(一四九四)より、永正、大水を經て、後奈良天皇の享祿五年壬辰(一五三二)に及べり、中間まゝ闕文あり。著者鷲尾隆康は左少將なり。

にせいひやうせん 二精評詮 ※一巻 坂 正永

二精とは「精要算法」と「改精算法」とを云へるなり。前者は關流藤田定資の著述にして、後者は最上流會田安明の著述なり。是時に當りて二氏の爭論甚しく、年々益々激怒を加ふるの狀あり。正永視て以て不可となし、互に得失ありとす。本書は二書の論辯施術の可否を評したるものにして、些の偏倚なし、誠に公論と謂ふべし。年代記載なきも評論中に改精算法改正論、非改精算法、解惑算法及び解惑辨誤等を引きたれば、寛政の初年に成りたるものならん。

◎坂正永の傳は「算法學海」の下にあり。

にせむらさきのなかげんじ 偐紫田舍源氏 三十八巻 柳亭 種彦

紫式部の源氏物語を根據として作成せる小說合卷物なり。其の時代を近古に取り、婦女數十人を撰び來りて、容姿氣質を寫すに、異態別風、能く各種各樣に描出して、變轉實情に迫れること、纖腐健筆にあらざるよりは、得て望むべからず。加ふるに文詞

の優麗、語句の精巧を以てし、内部の結構と相待ちて其の美を完成せり。實に著者の傑作にして、頗る當時に持囃され、將軍德川家齊も縉覽して讚歎したりといふ。著者嘗て黃表紙、洒落本等に筆を執りたるも其の名揚らず、茲に至りて忽ち都鄙に喧傳し、始めて京傳馬琴と並稱せらる。固て自ら淺草堀田原の居樓を名けて修紫樓といへり。此の書後に草紙中の翻正なる以て稱せられ、馬琴の八犬傳、一九の膝栗毛、三馬の浮世風呂と共に本邦四大奇書の一に數へらるるに至れり。其の三十八編にて中絕し、大團圓に至らざるは、最も惜むべしとなす。

◉柳亭種彦は江戸有名の小說家なり。姓名を高柳知久といひ、彦四郎と通稱す。愛雀軒、足薪翁、三彦等の號あり。狂名を柳の風成といひ、また心の種後と改めしが、遂に柳亭種彦と稱せり。世々幕府に仕へて祿二百俵を受く。種彦夙く世を學び、また俳諧を詠じ、また狂歌を好み、後戲著に從て黃表紙を作り、洒落本を作り、終に合卷物に盡力して名を著せり。實に合卷物の鼻祖たり。天保十三年壬寅(一八四二)七月十九日歿す、歲六十。辭世あり、「散るものと定まる秋の柳かな」と。赤坂一ツ木淨土寺に葬れり。一生の著書を列擧すれば、修紫田舍源氏、椙野狐通近江之巻、同大和之巻、同播磨之巻、正本製於仲淸七、同二編小いな牛兵衛、同三編二代源氏時代物、同四編七役草紙、同五編六編二つ蝶々、同七、八、九編於染久松、同十編、十一編夕霧伊左衛門、同十二編花暎綱五郎、誂染遠山鹿子、花兄弁片腕、涙狂言三勝噺、柳の絲花の組炎、水木舞扇の猫骨、色も吉田由緣の藤澤、關東小六昔舞臺、淺間嶽煙の姿繪、孝と貞兩岸一覽、錦帶揃多と

三國、忍笠時代時絹、蛙の歌合の工手節、比翼紋松椙鶴賀、振金平昔繪雙紙、昔々眞鍮妓物語、いろは引寺入節用、新刻八百屋の花開、小脇差夢の螺鰒、富士額野うかれの蝶鳥、三つ瀨川上品仕立、二箇製手綱の紫、浮世形六枚屏風、唐人船今國性爺二日目怪談三島お仙、燈籠踊秋の花園、傾城盛衰記、操競三人女、昔語浦島ちゝい、翻案道中雙六、出世奴小萬傳、近江表腰蓑入景、ふし見ときはくまさか物語、桔梗の辻千種彩、女郎花噂吉の栗島、人形芝五色の絲織、花莚菜名所屬、絲結月下の薯、艶色の猪只居手、浮世一休腐間答、花櫻木春の夜話、堀川獄女捨曳、きち〳〵とん〳〵、雁金紺屋作の早染、誤て宮城野忍昔、自問自答戲盲合、合て三國同後編達州執筝物語、綠手摺昔木偶、忍賀對の花籠、床飾錦の額無垢、鯰庵丁昔碪の切味、近世怪談霜夜星、阿波鳴門、夢多橋龍女本地、奴の小萬物語、火熱ばし、山あらし、滑稽椿島の噂、花吹雪若衆宗玄、柴番いろは、娘修行者花の道記、櫻櫛振袖日記、國字小說三蟲揃眠、高野山萬年草紙、忠と孝義理請物、錦帶淮無間、南色梅の早咲、江戸紫三人兄弟、京一番娘羽子板、女模樣稻妻染、春霞布袋本地、千瀨川一代記、昔我昔狂言、昔傀儡二面鏡、風狸傳、川捨箱、還魂紙料、柳亭雜組、足薪翁百話、骨玄、染番いろは、娘修行者花の道記、櫻櫛振袖日記、國字小說三蟲揃眠、高野山萬年草紙、忠と孝義理請物、錦帶淮無間、南色梅の早咲、江戸紫三人兄弟、京一番娘羽子板、女模樣稻妻染、春霞布袋本地、千瀨川一代記、昔我昔狂言、昔傀儡二面鏡、風狸傳、川捨箱、還魂紙料、柳亭雜組、足薪翁百話、骨董、淺間嶽煙の姿繪、孝と貞兩岸一覽、錦帶揃多と

四年丁亥(一三六七)京都にて出版す。

にせんずゐひつ
二川隨筆　本朝二卷　山川崇石　細川宗眷

織田信長時代以來の雜事を隨筆したるもの。兩人の合作なるより「二川」の名あり。享保十年乙巳(一三八五)三月の作にかゝる。

◉山川崇石は字を信意といひ、細川宗眷は字を明といふ、共に京師の醫者なり。

にせんぶんりうき
二川分流記　本朝二卷

兩細川家の始末を記したるもの。細川右京大夫政元はじめ九條關白の息男澄之を養子とせしが、後孤疑の爲めに阿波の細川讃岐守の孫澄元を迎へて國を讓らんとし、遂に爭亂を惹起し、政元は害せられ、澄之は自殺し、澄元一時國主となりしが、亦遂に追放せられ。爾來一家二派に分れて穩かならざりし次第を詳記せり。別名を「細川兩家記」また「正統間記」といふ。「群書類從」卷三百八十、合戰部第十二にも收む。同書には元龜四年癸酉(一五七三)の奥書あり。

にそうたんき
二叟譚奇　本朝五卷　新樂間叟　久保田見達

久保田見達の「北地日記」と、新樂間叟の「北樣小筆」とを合せて「二叟譚奇」と名けたるもの。共に蝦夷千島等に行きたる時の見聞雜記なり。文化七年庚午(一八〇七)新樂間叟の序あり。

◉新樂間叟は誤に「東奧道中記」一卷、「白濱松菜

談」五卷、「蝦夷旅行日記」三卷、「蝦夷紀行聞」二卷、「寒地衛生艸」一卷、「聞叟談筆」一卷、「丙寅旅行日記」二卷等を著せしが、丁卯の變に遇ひて悉く烏有に歸したるより、本書の自序に見えたり。久保田見達は新樂間叟の友人なり。

にそうもんだふ
二叟問答　本朝一卷

某二叟が、時事に關して問答したることを筆記したり。文久四年甲子(一八六四)の自跋あれど其の姓名を詳にせず。

にそんゐんえんぎ
二尊院緣起　本朝一卷

原本外題は「後奈良院の宸翰」にて、初段二段は伏見入道眞敎の筆、三段以下終段即ち第十四段までは稱名院公條の筆、畫は狩野法眼元信の手に成れりといふ。本書は元祿八年乙亥(一六九五)の寫本によりて、「續群書類從」卷七百九十、釋家部第七十五に入れたり。

にたうえいいうき
二島英雄記　十卷　平賀　梅雪

宮本無三四實父吉岡太郎左衛門の敵、佐々木巖流を討ちて無念を晴す物語なり。享和三年癸亥(一八〇三)冬十二月の自序あり。

にちるきどうじやうしよそでん
日域洞上諸祖傳　二卷　僧　自澄

書名の示す如く日本洞上諸祖の傳歷にして、卷上に永平寺道元禪師より、禪林寺梵潭敎禪師に至る二十六人。卷下に興福寺不見見禪師より、全久院光玉禪師に至る四十四人。合せて七十人の傳を記せり。漠文なり。著者自澄は海雲寺の住職たり。

にちるきよくがまんせう
日玉我慢抄　本朝一卷　僧　杲寶

內には單に「我慢抄」と題せり。後宇多院於東寺卿濡頂事、圓城寺曾正大師號事、靜覺圓城兩流對揚無諍事、以大師號傳敎孫弟無諍事、以大師號傳敎弟子無諍事、傳敎弘法兩大師法流嫡末事、慈覺大師所傳同爲傍流事、稱大師不傳胎藏無諍事、七佛藥師法相傳不分明事、纖盛光法非正流相承事、弘法傳敎師資陳謝無諍事、稱東寺起請爲不實事、以仁和寺稱山門末寺無諍事、稱於東寺不可混二人大師甚爲僻案事、以上十四箇條を記せり。後光嚴天皇の延文三年戊戌(一三五八)八月一日、東寺末流日玉の筆記にかゝる。「續群書類從」卷八百三十九、釋家部第百二十四に收む。

◉果寶の傳は「果寶私鈔」の下にあり。

にちようしふ
日用集　本朝一卷　久保　正元

普通文案及び文章用語等を記したるものなり。延寶二年甲寅(一六七四)三月朔日の奥書に「右一册者、久保吉左衛門尉正元、以傳授之旨、當務所用之通、帙綴之面號日用集、努々不可出閫外者也」とあり。著者久保正元は吉衛門尉と稱す。

にちようしんぱふせう
日用心法鈔　三卷　壽福軒

方角、吉凶、金神の明暗等を記したる俗書なり。

日用の道法、習術に關することを雜記して、童蒙兒女の啟誡に充てたるものなり。世なくうすに三つの大事あり、勤めと、正直と、愼みとなり、勤め働くは人間第一の寶なり、勤むれば、一生逐り安し、萬事利德の根元なり、勤めて得るは眞の利なり、勤めざれは人間の交りにあらず、外もよく勤むればなり、此の內德ばかりにあらず、外もよく勤むればなり、此の三つを知る時は身を修め家を齊へ、先祖も辱かしめざるなり、勤めと正直と愼みとの中に、忠孝は籠ると知るべし、又商ひの秘密儒佛神三道の事ありて、日々火入用。見て編錄を增し、子孫長久の計略をなすべし、此の心を以て此の本の始終を見るべし」と序例に見えたり。文政十年(一八二七)の作。

◉譚編軒は江戸下谷金杉の人なり。日用心法鈔初編三卷の外、同二編、同三編、同四編、圭從心得草初編、同二編、同三編、同四編、同五編、以上八部十九册の著ありといふ。

にちようせいぎたいせい
日用精義大成　二卷　松浦　久信

日時九星の傳說を詳敍し、冥至、冬至に隨て陰陽二道の差別あることを辨論したるものなり。且圖するに天月二德、月空生殺等の吉神配當を以てせり。天保五年甲午(一八四四)男逸順の序あり。同人の校正するところなり。

◉松浦久信の傳は「家相秘傳集」の下にあり。

にちようべんわくしよ
日用辨惑書　一册

にちようやくひんかう
日用藥品考 本四 一卷 柴田 洞元
民間普通の藥品草木を考說したるものにて、文化七年庚午(一八一〇)の作にかゝる。

にちれんしやうにんちうぐわさん
日蓮上人註畫讚 一卷 僧 日澄
一生の事歷を三十二項に分ちて假名書にしたるものなり。寛永九年壬申(一六三二)出版す。

にぢん
耳塵 本四 一卷
東山慈照寺の事を記したるもの。同寺の書院、浴室、船舍、橋亭、竹亭等の類面の事まで詳記せり。

につかんていえう
日韓提要 本四 一卷
本邦と朝鮮との交通雜事を記したるものにて、元祿以後の作なりと見ゆ。

につき
日記 本四 二册
江戸を立ちて三州岡崎へ母を省る時の日記なり。年代、記者等を記さゞれど、記中に樞千蔭より、餞別の和歌を得たることを記せり。

につき
日記 本四 四卷
第一册に元祿元年甲子(一六八八)八月七日より、慶應元年乙丑(一八六五)五月二十二日に至り、第二册に同五月二十四日より十月晦に至り、第三册に同十一月朔日より、同二年五月に至り、第四册に同五月十四日より、同九月二十九日に至る御側、奥向等に關する政治的日記なり。著者が御側勤務中の日記なりといへど、何人なるかを知らず、橫綴本四册にせり。

につきかうせい
日軌考成 本四 四卷 金子 勝現
太陽の躔度測量の事を記載したるものにて、四卷の內一卷は附錄たり。

につきざんひづ
日金山碑圖 一鋪
豆州加茂郡なる日金山上の碑を圖したるもの。此の山嶺に上れば十國五島一目に眺望すべき地なるより、熱海の里長如是庵渡邊房求の嘱に應して、天明三年癸卯(一七八三)八月、諸島、光英、清候の三人が建立したるものなり。三人の和歌及び房求の建碑の趣意等を刻す。

につくわうき
日光記 本四 一卷 桑山伊兵衞
真享四年丁卯(一六八七)著者御田付代として、日光山に至りし時の日記にして、七月五日より同十九日に終れり。

につくわうきかう
日光紀行 本四 一卷 島田 則祐
著者が後櫻町天皇の明和五年戊子(一七六八)三月四日、伊勢の國を立ちて、十九日野州日光山へ着し、同二十四日江戸に入りたるまでの紀行にて和歌をも詠み入れたり。
◎島田則祐のことは「花洛紀行」の下にあり。

につくわうきんぶ
日光園譜 本四 一卷
日光產の菌類三十六種を圖示し、其の名稱性質效用等の略解を附記したるもの。著者年代共に未詳。

につくわうごさんけいき
慶安日光御參詣記 寛文 本四 一卷
慶安元年戊子(一六四八)德川家光日光參詣及び寛文三年癸卯(一六六三)家綱同山參詣の次第を記したるものなり。

につくわうごしやさんやくづけ
日光御社參役付 一卷
申御門天皇の享保十三年戊申(一七二八)德川吉宗が日光山に參詣したる時、留守役及び供奉のものどもの姓名家紋知行高等を記したるもの。同年の刊刻に係れり。

につくわうさいてんえんかくかう
日光祭典沿革考 本四 十八卷
德川家康の元和三年丁巳(一六一七)の一周忌より文化十二年乙亥(一八一五)の二百回忌に至る、日光山に於ける祭典の次第を記したるもの。文久三年癸亥(一八六三)日光山事類の中より拔萃編輯したるなり。

につくわうさいひんづせつ
日光採品圖說 本四 二卷 喜多村正市
日光產の草木を圖說したるものにして、仁孝天皇の文政七年甲申(一八二四)の著なり。著者喜多村正市は直安と字す。

につくわうさつわ
日光雜話 本四 四卷
日光宮社產物碑銘等の事を雜記せり。尙此種の書は、前後に解題せる外に、日光山記、日光修繕雜記、日光山年行事、日光山諸碑銘、日光山堂社建立沿記、日光山道志留邊、日光山八景詩、日光道中行程安見絵圖、日光御祭禮行列略圖、日光山三佛堂延年舞東遊舞圖日光道記、日光山紀行等あり。皆大同小異の案內書なり。

につくわうざんあんないしよ
日光山案內書 本四 一卷
此の書は日光參詣者の爲めに記したる案內書にして、各緣起等を記したり。

につくわうざんあんないわらべ
日光山案內童 本四 一卷
下野日光山開闢の事緣より、本社、拜殿、諸門、諸堂摂社、末社、名所、靈蹟、瀑布、石燈其の他の大略を記し、和歌銘文を揭げ、更に山四所、永八所、靈石五所、岩三所、瀧水三所當所藥草二十種、菓實八品、食物二十八品、花木草花二十六種、材木十種、楊枝木三種、家財五種、石四品等を擧げたり。自序自跋あり。

につくわうざんくわんちやうさ
日光山灌頂記 本四 一卷
此の書は別揭「日光山御神事記」と同本なり。

につくわうざんごさ
日光山御記 本四 一卷
日光山宮の祭事儀例を記したるものなり。寛永十三年丙子(一六三六)三月二日より、四月二十四日に至り、第四册、伊勢の國を立ちて、十九日野州日光山へ着し、同二十四日江戸に入りたるまでの紀行にて和歌をも詠み入れたり。
◎島田則祐のことは「花洛紀行」の下にあり。

につくわうさんぶ
日光園譜 本四 一卷
日光產の菌類三十六種を圖示し、其の名稱性質效用等の略解を附記したるもの。著者年代共に未詳。

につくわうごさんけいき
慶安日光御參詣記 寛文 本四 一卷
慶安元年戊子(一六四八)德川家光日光參詣及び寛文三年癸卯(一六六三)家綱同山參詣の次第を記したるものなり。

につくわうごしやさんやくづけ
日光御社參役付 一卷
申御門天皇の享保十三年戊申(一七二八)德川吉宗が日光山に參詣したる時、留守役及び供奉のものどもの姓名家紋知行高等を記したるもの。同年の刊刻に係れり。

につくわうさいてんえんかくかう
日光祭典沿革考 本四 十八卷
德川家康の元和三年丁巳(一六一七)の一周忌より文化十二年乙亥(一八一五)の二百回忌に至る、日光山に於ける祭典の次第を記したるもの。文久三年癸亥(一八六三)日光山事類の中より拔萃編輯したるなり。

につくわうざんきかう
日光山紀行 本四 一卷 伊達 吉村
五月朔日幕府の命を受けて、日光社修繕の事を管するため、同六日江戸を立ちて、八日日光に着し、二十五日日光を立ちて二十八日江戸に歸る。其の間每日の公私日記にて、自家の和歌をも揭げたり。卷尾に「此一帖歌詞書迄、中院前亞相通躬卿來請添削今度令清書第、正德三年(一七一三)閏五月下旬、左近中將吉村識之」とあり。
◎伊達吉村の傳記は「武家類歌傳」の下にあり。

につくわうざんぐぶしき
日光山供奉私記 本四 二卷
成島 和鼎
安永五年丙申(一七七六)四月將軍德川家治日光に詣る時、和鼎供從の役を受く。此の書は其の往復の途中及び日光に於ける事を詳細に記載したるものなり。自序あり。
◎成島和鼎の傳記は「飛鳥山碑始末」の下にあり。

につくわうざんくわんちやうさ
日光山灌頂記 本四 一卷
此の書は別揭「日光山御神事記」と同本なり。

につくわうざんごさ
日光山御記 本四 一卷
日光山宮の祭事儀例を記したるものなり。寛永十三年丙子(一六三六)三月二日より、四月二十四日

に至る記なり。

につくわうざんごさいれいぎきやうれつでうえんねんあづまあそびまひのづ

日光山御祭禮行列略圖　寫一帖

帖首に東照宮諡號、贈位、改葬、遷宮、奉幣使、敕會等の事を略記して、祭禮の規式行列の模樣を圖したるものなり。

につくわうざんごじつくわいごきしんちよくをにつき

日光山五十回御忌辰敕會日記　寫二軸

寛文五年乙巳(二三二五)、德川家康五十回忌追善法會の次第を記したるもの。四月六日に始まりて同月十九日に終れり。

につくわうざんごしんじき

日光山御神事記　寫一卷

寛永十三年丙子(二二九六)、日光山東照宮の造營竣工したるにより、神體を新造の本殿へ遷座したる時の儀式次第を詳記したるもの。卷中奉幣使着座の圖、布薩着座の圖、戒漢着座の圖、御經供養の圖、本地堂供養着座の圖等を載せたり。

につくわうざんさいてんえんかくかうそくへん

日光山祭典沿革考續編　寫二十四卷

光格天皇の文化十二年亥(二四七五)德川家康二百回忌法會の際、諸役司よりの伺、掛合、下知及び寺院の願の趣等を輯錄したるもの。正編とは其體裁を異にせり。孝明天皇の元治元年甲子(二五二四)の編輯に係れり。

につくわうざんさいでんえんかくかうそくへん

日光山祭典沿革考續編　寫二十四卷

光格天皇の文化十二年亥(二四七五)德川家康二百回忌法會の際、諸役司よりの伺、掛合、下知及び寺院の願の趣等を輯錄したるもの。正編とは其體裁を異にせり。孝明天皇の元治元年甲子(二五二四)の編輯に係れり。

につくわうざんだうしやこんりふきうき

日光山堂社建立舊記　寫二卷

下野日光山なる寺院、末社、攝社、小堂の名、古蹟名區の名を列擧し、所在、方位、開基年月、來由故事等を詳記したるものなり。

につくわうざんねんぢうぎやうじ

日光山年中行事　寫一卷

東照大權現、大猷院殿御靈祭當日錄並に同山年中の行事を記したるもの。一月より十二月に至る儀令校訂了。尚有魚魯之誤歟。慶安二年(二三〇九)秋九月日、左中將藤原朝臣爲景、圭水正清原朝臣賢忠」と書せり。思ふに、別書「日光山修善雜記」三卷の書に附錄して、此の帖を作りたるものなるべし。天台座主二品親王眞尊の序あり。

につくわうざんしうぜんざつき

日光山修善雜記　寫三卷

下野日光山に於て東照權現三十三回忌の時、卽ち慶安元年戊子(二三〇八)三月以下に行はれたる、祭禮法會の規式行事一切を記述したるものなり。三卷一册に寫傳せり。別書同名の「日光山修善雜記」一帖は、後に本書に附錄して作りたるものなるべし。

につくわうざんしうぜんき

日光山修善記　寫一卷

慶安元年戊子(二三〇八)四月、東照宮三十三回忌に當て、其の祭事法會の事を詳記したるものなり。

につくわうざんしうぜんざつき

日光山修善雜記　寫一帖

慶安元年敕使參向の時の諸式を、一々圖出したるもの。帖首に、「此修善雜記三卷者、往年於日光山、被修敕會之日錄也、依異沙門圭龍翁、各加管見補遺漏

につくわうざんしよひめい

日光山諸碑銘　寫一卷

下野日光山なるあらゆる鐘銘碑銘等數十編を輯錄したるものなり。靈圖、諸物產等をも記せり。

につくわうざんぶつだうえんねんあづまあそびまひのづ

日光山三佛堂延年東遊舞圖　寫一帖

日光山三佛堂に於ける延年舞、東遊舞の有樣を圖して、祭禮奉行、日光奉行、目代等拜見の座席等を記し、延年舞、東遊舞の傳來等をも記せり。

につくわうざんしし

日光山志　五卷　植田　孟縉

日光山巡覽探勝の次第に依りて詳敘し、當時名工の畫を插入す。天保八年丁酉(二四九七)刻成す。後、追加三卷作られたれども未だ刊本たるに至らずといふ。

◎植田孟縉は字を子夏、通稱を十兵衞と稱し、德川氏の八王子千人組同心頭にして、千人頭に屬し、日光山守衞の役に從ひ、屢往來實見して本書を大成せりといふ。

につくわうざんしし

日光山志　五卷　植田　孟縉

日光山巡覽探勝の次第に依りて詳敘し、當時名工の畫を插入す。天保八年丁酉(二四九七)刻成す。後、追加三卷作られたれども未だ刊本たるに至らずといふ。

◎植田孟縉は字を子夏、通稱を十兵衞と稱し、德川氏の八王子千人組同心頭にして、千人頭に屬し、日光山守衞の役に從ひ、屢往來實見して本書を大成せりといふ。

につくわうざんじやうぜんじき

日光山淨禪寺記　寫一卷

につくわうざんぜんじやうじき

日光山禪定寺記　寫一卷

につくわうざんぜんしやうじき

日光山禪定寺記　寫一卷

につくわうざんぜんざつき

日光山禪定雜記　寫一帖　藤原　爲景

日光山の禪定寺の時の諸式を、一々圖出したるもの。慶安元年戊子(二三〇八)四月、東照宮三十三回忌法會の事を詳記したるものなり。

につくわうざんぜんざつき

日光山禪定雜記　寫一帖　藤原　爲景

日光山の禪定寺の時の諸式を、一々圖出したるもの。慶安元年戊子(二三〇八)四月、東照宮三十三回忌法會の事を詳記したるものなり。

につくわうざんぜんじやうじき

日光山禪定寺記　寫一卷

につくわうざんぜんしやうじき

日光山禪定寺記　寫一卷

につくわうざんぜんざつき

日光山禪定雜記　寫一帖

慶安元年敕使參向の時の諸式を、一々圖出したるもの。帖首に、「此修善雜記三卷者、往年於日光山、被修敕會之日錄也、依異沙門圭龍翁、各加管見補遺漏

例を順記せり。

につくわうざんはつけいし

日光山八景詩　一卷　矢田　好古

日光山の八景とは、小倉巷曉、鉢石炊煙、含滿曛雨、寂光瀑布、大谷秋月、鳴蟲紅楓、山寺夕照、黑巖晴雪等にて、正德二年壬辰(二三七二)の自序に、「日光山八景詩者、我一品大王之所新設、而與陪從之輩同賦者也。且軺過朝鮮國纔使在于江城、命需失詩、合爲一册、集就而傳寫之者多。恐甚有魚魯之誤、因請錄諸梓云」とあり。卷首に朝倉景衡が日光山八景詩序を掲げたり。

◎矢田好古は字を孟敷といひ、長門守に任じ、門主大明院公辨法親王の諸大夫なり。

につくわうざんぶつきりやう

日光山物忌令　寫一卷

父母之忌五十日服一年閏月數不入時過間は如前從其日聞之の頃より、日數三昧所(不入十二時忌之に至る十九項目を示すのみ。嘉吉二年壬戌(二一〇二)十月二十日註せる由を末記す。「纉群書類從」卷八十、神祇部第八十に收む。

につくわうざんぶつしれう

日光産物志料　寫一卷

日光產草木の事を記したるもの。著者年月共に詳ならず。天保十四年(二五〇三)九月寫之」と末記せり。

につくわうざんみちしるべ

日光山道志留邇　一卷　高橋　義武

此の書は別名「日光山名跡志」の下に解題せり。

につくわうざんめいせきし

日光山名跡志　一卷　高橋　義武

日光山内外の名所を記したるもの。東照宮より山内諸所を記し、末に日光より諸方への里程等を掲げたり。享保十三年戊申(二三八八)の自序あり。

◎高橋義武は日光御幸町の人にして、武治郎左衞門と稱す。

につくわうし

日光志　寫三卷

下野國日光の誌にて、上中下三卷、十二國に分ち、漢文にて記せり。第一編地圖、第二編紀年、第三編廟陵、第四編祀典、第五編職員、第六編祠寺、第七編列傳、第八編文章、第九編地紀、第十編風俗、第十一編物產、第十二編道程等なり、事實を悉して考據すべきもの多し。著者及び年代を記さず、紀年の編に資曆乙亥(二四一五)三月十日の事までを記せるを見れば略其の比のものなるべし。文章また稍面古なるを見るべし。

につくわうじゆんらんき

日光巡覽記　寫一卷　嘯月堂泰吟

諸廟社、別當の院名、知行高等を詳記したるものなり。寶永五年戊子(二三六八)の自跋に、「日光山の下手嘯月堂春吟」と記せり。

につくわうしんりやうしはふひながたにつくわうしんりやうしはふひながた

日光神領仕法雜形　寫一卷　二宮　尊德

弘化二年乙巳(二五〇五)幕府の命によりて、日光神領荒地起返の方法を案定具申したるものにて、原本は「日光御神領村々荒地起返方仕法貸金壹兩積熟下十箇年季雜形」と題せりといふ。

◎二宮尊德の傳は「窮民撫恤仕法書」の下にあり。

につくわうだうちうかうていきあんげんゑづ

日光道中行程記安見繪圖　一帖

安永五年丙申(二四三六)の自序中に、「嚮に日光行程記と稱する書あり、暇の日友人宇野某と共に、此の小册を携へ、三道を往來し、漏れたるを拾ひ、足らざるを補ふ」といふ。三道は岩淵道、千住道、板橋道にて、圖端に各行程、宿付、人足の賃錢等を記せり。作者は「東神」と記せり。

につくわうだうちうりやくき

日光道中略記　寫八卷

本書の凡例に、「此の書は御參道中繪圖に載せ盡きざる所の事實を編錄せし書なれば、御道次第を以て江戸神田橋より筆を起し、日光山神橋に止る。御山内外の事實に渉らざるは、他の記載備はるもの多ければなり。云々とあり。著者の名を記さず。

につくわうだうえいりやうさんごゆゐしよおぼえがき

日光東叡兩山御山緒覺書　寫一卷

御宮醍醐寺緣起、日光山御宮創建、東叡山御宮創建、慈眼大師御親筆富山宥係贊、慈眼大師御贈答手簡等を輯錄す。明治七年內務省の謄寫本による。

上巻は江戸より野州日光山へ赴く岩淵通りの記にして、下巻は日光山内の諸堂舎の事、中禅寺道、男體山、女體山の事、小山壬生通りの日光道等を記せり。奥書に「家翁昔年遊歴して行紀を作る。今書肆の懇請によりて、又我見聞の事を加へて二冊となし、かれて新に一圖を作りて梓にちりばめしむ。享保丁未と記せり。享保丁未は其の十二年にして、紀元二千三百八十七年なり。二巻一冊に版刻す。

につくわうめいしょうき　日光名勝記　一巻　貝原　篤信

先妣「東路記」より、日光記に關することを抄出單行したるものなり。中御門天皇の正徳四年甲午(一七一四)京師の書賈柳枝軒の跋あり。書肆營利のための作なり。

◎貝原篤信の傳は「自娯集」の下にあり。

につこうしふ　日工集　本四巻　僧　周信

本書具には「空華日用工夫略集」といふ。後醍醐天皇の正中二年乙丑(一三二五)以下の日記なり。同名の下に解題せり。

◎周信の傳記は「空華集」の下にあり。

につしうのべをかゑつ　日州延岡繪圖　ゑ一舗

日向國臼杵郡延岡城の地圖にて。本丸、西丸、見付、士屋敷、町屋社寺等を記す。延享四年丁卯(一七四七)内藤備後守の居城たりし以後に圖したるものなるべし。

につしゆつふどき　日出風土記　本一冊　鶴峯　戊申

本書は原名を「異稱皇朝風土記」といひて、外國の書中より、本邦風土の記事に及べる文を抄出したるものなり。後、補訂して「日出風土記」と改稱す。文化五年戊辰(一八〇八)の編なり。

◎勉斎皮中の傳は「神階錄」の下にあり。

につしんくわんどうじくん　日新館童子訓　二巻　保科　容頌

本邦古來の嘉言善行を集め、朱子の「小學」にならひて、其の藩子弟の教訓書に供したり。享保三年癸亥(一七一八)松平定信の序、古南の跋あり。

◎保科容頌は會津中興の賢君にして、祖正之の著書等を版行して幕府に獻じたり。

につせいき　日青記　本百册

幕府評定所より引續きて内閣文庫に保存せる日省記にして、年度未詳に屬す。

につたうき　入唐記　本一巻

齊明天皇の四年戊午(六五八)僧知通、知達が敕によりて入唐したるより、成尋阿闍梨の延久四年壬子(一〇七二)の入唐不歸までを順記す。「續群書類從」巻八百四十五、釋家部第百三十に入る。

につたうき　入唐記　一巻　僧　瑞訴

寛徳三年辛未(一〇四五)僧允澎、芳眞、正副使となり、將軍足利義政の命を受けて入唐したる時、著者隨行して、同年十月六日に出立せるより、享徳三年甲戌(一四五四)七月十三日の復命までを記せり。

につたうどかでん　入唐五家傳　本一巻

眞言宗僧侶、眞如親王、安祥寺惠運、禪林寺宗叡、小栗栖常暁、靈巖寺圓行等の入唐者の傳なり。

につたき　新田記　本一巻

上野新田郡金山の城主由良成繁の事績を記したるもの。新田氏義貞の由來より、成繁に至りて、再び新田家を起し、天文五年丙申(一五三六)より永祿三年庚申(一五六〇)の頃まで、諸士金山城に登營して賀儀を述ぶる等の事を記せり。

につたじんじゃえんぎ　新田神社緣起　一巻

武藏國荏原郡矢口村なる新田神社の緣起にて、新田義興の詳傳を記す。延寶四年丙辰(一六七六)松平政種の跋を附す。同人の寄附したるものなり。寛政八年丙辰(一七九六)出版す。本書或は「新田大明神社緣起」と題したるものあり。

につたとくがはせらたかふ　新田德川世良田家譜　本二巻　新井　君美

三家の系譜にて、一名を「三家考」といへり。もと義

家の三男義國の孫義季と始めて德川と稱し、其の曾孫滿義新田庄世良田の地頭たりしより世良田を氏とせし。始終を詳に系譜したるものなり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

につたらうだんき　新田老談記　三巻

關東管領の衰後、上野國新田、金山、館林、桐生及び下野の足利等相爭へることを略記す。「續群書類從」巻六百二十四上中下、合戰部第五十四にもあり

につちうぎやうじ　日中行事　本一巻　後醍醐天皇

早朝卯の時に主殿司朝清めする事より、我の御殿のさし油の事に至る、禁中日々の行事を記したまへるもの。一名を「禁省日中行事」と云ふ。大永七年丁亥(一五二七)藤資直の奥書あり。「群書類從」巻四百六十八、雜部第二十一にもあり。

◎後醍醐天皇の御傳は「禁裏政要」の下に掲ぐ。

につてうかうてんかう　日東行程考　本一巻

我が諸國の行程を記したれど、多く雅考に成りて信據するに足るものなし。

につとうぎよふ　日東魚譜　八巻　神田　玄泉

本邦の魚介類を圖譜し、各其の形狀を正し、方言を辨じ、氣味藥毒を分ち、主治功能を記す。享保十六年辛亥(一七三一)の自序あり。一本五巻寫本のもの

のには同二十一年の自序あり。こ大岡越前守へ差出したる者なりといふ。元文元年(一七三六)の版。

◎神田玄泉の傳は「食物知新」の下にあり。

につとうほんざうづゑん　日東本草圖纂　本十三巻　玄　紀

動植物、金石の名稱を辨じ、其の形狀效用等を詳述す。安永年間の作なり。

にてうき　耳底記　一巻

歌學に關する雜記なり。著者の細川幽齋に學ばれる間答、並に當座の物語等を、俗言にて筆記したるものなり。紙數百枚ありて、寛文年辛丑(一六六一)出版す。

◎烏丸光廣の傳は「蹴鞠書」の下にあり。

にてうきべつろく　耳底記別錄　本一巻　佐方　宗佐

細川幽齋より聞書さしたる歌學の書なり。題の歌の事より、色紙書やうの事に至る四十一箇條を略說す。巻末に以敬齋長伯の奥書あり享保三年戊戌(一七一八)の寫本にかゝる。

◎佐方宗佐の事は「かやぐき」の下にあり。

にてうけんぎやうろく　二程治教錄　二巻　保科　正之

「二程全書」中より治教に關する文辭を抄錄したるものなり。寛文八年戊申(一六六八)山崎闇齋の序跋あり。

◎保科正之の傳は「會津風土記」の下にあり。

にでうけしやうぞくせう　二條家裝束抄　本一巻　藤原　晴良

此の書は一名「淨明珠院抄」の下に解題したり。

にでうけためかねしふ　二條家爲兼集　本一巻　藤原　爲兼

著者の詠歌數百首を收む。文安元年甲子(一四四四)三月下旬、某書寫校合の奥書あり。

◎藤原爲兼の傳記は「玉葉和歌集」の下にあり。

にでうけひでんのしよ　二條家祕傳書　本一巻

最初に「和歌手習日傳抄」を掲げ、次に「聞書」として歌學上の事を記せり。資永元年甲申(一三六四)寫本の奥書あり。

にでうのゐんごそくき　二條院御卽位記　本一巻　藤原　賴業

保元三年戊寅(一一五八)二條天皇御卽位の詳細記事なり。一名を「賴業記」といふ。「續群書類從」巻二百七十一、公事部第二十四に收む。

◎藤原賴業の傳は「寂然法師集」の下にあり。

にでうのゐんさぬきしふ　二條院讃岐集　一巻　讃　岐

「內裏に柳垂といふことを」の題下に「晉柳のなびく下枝にはきてけり、吹く春風やともの言つこ」と

詠めるより、「曉月」題の「大かたに秋のれさめの露けくはまた誰か袖にありあけの月」に至る凡そ百首を收む。「群書類從」卷二百七十九、和歌部第百三十四に收めたり。

◎譽破の傳は「譽破典侍日記」の下にあり。

にながはちかとしにつき

蜷川親俊日記 本 五卷　蜷川　親俊

著者が日々の記事にて、天文七年戊戌(一五三八)正月より、同十一年六月に至れり。閏日なく內外公私の事實を略記す。

ににんびくに

二人びくに 二卷　鈴木　正三

下野住人須田彌兵衛が討死の事に基きて綴りたる因果物語なり。其の母を悲みて作り、因果の理を說くこと明かなり。其の行文流暢にして、趣味あるため後世小說の如くに思ひ誤るものあり。其の妻に託作せり。寬文四年甲辰(一六六四)の版行に係る。

◎鈴木正三は三河の人。名を重三といひ、九大夫と稱し、法々軒また石平道人と號す。世々松平氏に仕へて武臣たり、正三大阪、關ヶ原等の戰に功あり、剃髮して諸國を行脚し、又儒佛の學を究め、晚年江戶に出でて座禪法を唱ふ。著書は本書の外に、因果物語、盲安杖等あり、明歷元年乙未(一六五五)六月二十五日、年七十七にて江戶に寂す。

にのみやおうえんぜつしよりやく

二宮翁演說書略 本 一卷　二宮　尊德

報德の本意を論じ、報德の盲行に關する歌數十種を附載したるものなり。

◎二宮尊德の傳は「窮民撫恤仕法書」の下にあり。

にはうたつしろく

二邦達志錄 本 一卷　秦　鼎

寬政元年己酉(一七八九)十一月、杭州人朱錫外七十餘人漂著したる時、應接したる筆語を集錄したるものなり。翌寬政二年本田眞卿の序あり。

◎秦鼎は尾張の儒者。字鉉と字し、滄浪と號す夙くより父の學を受け、業成りて藩學明倫堂の典籍となり、夢で敎授に遷る。其の後職を罷めて、讀書に餘年を送る。本書の外に、春秋左氏傳校本、國語校本、左傳周覩、左傳世族解、古韻紀、周易解、韋子因、世說新語補、韓文起、文選李善註、詩韻含英等を校刊し、また一宵話を著せり。天保二年辛卯(一八三一)七月一日、七十一歲にて歿す。

にはかせんにんたはごとにつき

俄仙人戲言日記 五卷　閑　戔　齋

無錢といふもの、久米の仙人の紹介にて、俄に仙界に入りし始末を書き綴りたる小說なり。著者閑戔齋は小說家なり。

にはおえうせう

二八要抄 本 二卷

古今和歌集より續後拾遺和歌集に至る十六代集中より、抄集したる歌集なり。卷末に、尹大納言賢卿の眞筆によりて寫寫せる由を記す。「續群書類從」卷三百七十四上下、和歌部第九に收む。

にはかちめいだいふ

二八明題集 十五卷　今川　了俊

此の書は一名「明題和歌全集」の下に解題せり。

にはつくりひでんしよ

庭作祕傳書 本 一卷

庭作の傳書なり。頃を改めて詳記す。今見るところ、正應二年己丑(一九四九)天台座主慈信僧正の古寫本なり。

にはのへしぶみ

庭之石婦見 本 一卷

作庭の傳書なり。仙洞御所の御庭師松綠堂清須法印の傳書と記したれど俗書なり。

にはのをしへ

庭の訓 一卷　阿　佛　尼

著者が、實子爲相の爲めに、鎌倉に下りし時、息女紀內侍に贈りたる敎訓書なり。

◎阿佛尼の傳は「十六夜日記」の下にあり。

にはのをしへせう

庭の訓抄 一卷　伴　資芳

阿佛尼の「庭の訓」を註釋したるものなり。自序及び文化三年丙寅(一八〇六)伴資規跋あり。翌四年出版す。

◎伴資芳の傳は「閑田耕筆」の下にあり。

にはんもんだふ

二判問答 一卷　二階堂政行

典例故實等につきて後成恩寺一條殿眞に問ひ得たる聞書にて凡そ四十條あり。文明十年戊戌(一四七八)六月の奥書あり。「群書類從」卷四百七十二、雜部第二十七に收む。

にひなめまつりしんせんさうのこと

新嘗祭神饌等之事 本 一卷

新嘗祭の神饌品目、制法、次第等を記述し、略圖をも揭げたり。

にひなめまつりたうざにじつしゆ

新嘗祭當座二十首 一卷　香川　景樹

著者景樹、景周、維申、快存の詠める二十種なり。各題を異にせり。「桂園叢書」の中に收められる。

◎香川景樹の傳は「桂園一枝」の下にあり。

にひなめまつりぶるゐ

新嘗祭部類 本 一卷

新嘗祭の事を諸家記錄より抄案したるものなり。

にひまりでふ

耳比磨利帖 二帖　玉田　成章

日本武尊、聖德太子、聖武天皇等を始めとして、個一体、東野州、小野道風等に至る、古人の眞蹟を模刻したるもの。總計百八十一葉、模本百八十種あり。天明七年丁未(一七八七)の編集に係れり。

にひみよのめぐみ

新御世の惠 本 一卷　屋代　弘賢

文化元年甲子(一八〇四)彌生中旬、著者が御勘定格に昇進し、殊に加增せられたる時の記事なり。今見る所、大學圖書館に貴重品として備へらる。蓋し著者自筆の本なり。

◎屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

にふあびだつまろんけんしうき

入阿毘達磨論顯宗記 二卷　僧　慈光

印度裏建地羅(悟入)の「入阿毘達磨論」を註解したるもの。原論は萬有を七十七法に分ちて其の體相を說明し、俱舍を學ぶものの階梯たり。本書顯宗記は寬政六年甲寅(一七九四)校行せらる。

◎慈光は眞言宗豐山の住僧本書の外に「大日經疏補闕鈔」六卷を著せり。

にふあづにつき

入越日記 本 一卷　山本　溪山

嘉永四年辛亥(一八五一)三月、著者が越中能登の兩國に遊行したる時の日記にて地理風景產物等にかゝる事を記せり。

にふがくもんだふ

入學問答 一卷　平田　篤胤

最初、貴所の敎導いたされ候學風を、古學と稱し、其の祖述せられ候道を、古道と稱せらるに候こと、是れは、何つのほどに、誰れが創め候學風にて、如何なる事を學び候事に候や。また和學に古學といふことは、儒學に古學起り候に倣ひたる、名稱のやうに申す者も有之候。此れ等の事委しく承り度候と

にふしんじふにひんかきあげちやう

入津十二品書上帳 本 一册

文久三年癸亥(一八六三)同四年の書上帳にして、幕府評定所より引繼ぎ內閣文庫に保存せり。

にふだいじんぐうのぎき

丹生太神宮之儀軌 本 一卷　僧　空海

いふ或人の問を揭げ之れに應じて敎行例證し、古學古道の本義、入學の階梯等を總說したるものなり。文化十年癸酉(一八一三)の作にかゝる。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

にふくわんだいいちぎ

入官第一義 本 一卷　塚田　虎

「孔子家語」「大戴禮」に記せる仕官の要を詳說したるもの。仕官するもの、其の官職に居て、人民を治る用心を諭したる聖言は、士たるもの第一に心得べき要義なりとの意にて、往々古書の原文を擧げて詳に敎行講解せり。

◎塚田虎の傳は「滑川談」の下にあり。

にふしゆつにもんげ

入出二門偈 一卷　僧　親鸞

往還回向入出二門等の眞宗の敎義を詠述したるもの。七言百四十八句より成れり。註釋には圓智の「二門偈分釋」一卷、日溪法霖の「二門偈窺斑錄」三卷、智遍の「二門偈流情記」三卷、慈然の「入出二門偈大意」一卷等あり。

◎親鸞の傳は「敎行信證」の下に在り。

にふしんじふにひんかきあげちやう

入津十二品書上帳 本 一册

文久三年癸亥(一八六三)同四年の書上帳にして、幕府評定所より引繼ぎ內閣文庫に保存せり。

にぶだいじんぐうのぎき

丹生太神宮之儀軌 本 一卷　僧　空海

勢州飯高郡丹生大神宮の縁起なり。弘仁九年戊戌〔一四七八〕以下書寫の奥書三四あり。「續群書類從」卷七十六、神祇部第七十六に收む。

◎空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下にあり。

にふだうしんわうそんくわいごくわんちやうのこと

入道親王尊快御灌頂事 *本一卷

承久二年庚辰〔一八八〇〕後鳥羽院の皇子、入道尊快親王、十七歲にして御灌頂ありし時の記にて、文化九年壬申〔一四七二〕寫本の奥書あり。「續群書類從」卷七百四十七、雜家部第三十二に入る。

にふだうだいなごんまさちかきやうひやくしゆ

入道大納言雅親卿百首 *本一卷

飛鳥井雅親

卷二十首、夏十五、秋二十、冬十五、戀二十、雜十首にて、享德、文明間の作にかゝる。「續群書類從」卷三百九十二、和歌部第二十七に收む。「雅親卿御詠草」として、單行せるもあり。

◎飛鳥井雅親の傳は、「亞槐和歌集」の下にあり。

にぶつかう

二物考 一卷 高野 長英

早熟薯蕷と馬鈴薯との性質、效用を詳論し、其の種植培養、貯藏、食用の諸法を細說して、專ら民間凶荒の豫備を示したるものなり。當時諸國饑饉の災多く、草根木皮を以て急を救ふの法ありと雖も、到底數月を支ふるの常食ならざるに感じて殊に本書を著して民間永遠の實利を謀れるなり。天保七年丙申〔一八三六〕の作。明治十五年群馬縣令撰取薯彥、大永三年癸未〔一五二三〕七月、八月、九月の日記なり。一名を「御遊部類記」といふ。

にほひぶくろ

香ひ嚢 一卷 鹽屋 艷二

花街遊女に關したる洒落小說なり。壬戌の序跋等あり。按ずるに、壬戌は享和二年〔一八〇二〕の事なるべし。

◎鹽屋艷二は江戸の人にして品川邊に住す。俳を善くし、また戲作を好みて紫色主と號せり。著書は本書の外に、南風風、南風風歸、蝶客三體志、見物左衞門、狂言雜話五大力、男一面髭抜錄、怪談當士論、夕之茶殼、鐵次郎生日記等あり、多く寛政年中の作にかゝる。

にほんあんぎやぶんしふ

日本行脚文集 七卷 大淀 友翰

全國行脚中、足跡の及ぶところ、名勝古蹟神社佛閣目に觸れ、耳に聞くところ筆に任せて記したるものなりといふ。凡て百四十題の文章あり、中に諸家及び自作の詩歌を入れゝもの多し。每卷頭國名を擧げて、其下に某國某處の作文は某卷にありと記して索引に便せり。元祿二年己巳〔一三四九〕の自序、伊藤春琳の跋あり。

◎大淀友翰は伊勢の人にして、三千風と號し、また無言堂、無不非軒等の別號あり、もと僧たりしが、文才あり、俳諧の技に長じ、一日に三千句を詠出したることあり、これより、三千風と俳號し、當時の俳家を以て知らる。中年以後四方に遊歷し、晩年大磯に、四行庵並に虎の社を建てゝこゝに居れり。其の時の句に、「一聲や大四行にほと〳〵ぎす」といへるにより、人呼びて大四行といへりとぞ。寶永六年己丑〔一三六九〕四月四日、自ら碑を建て、「東往居士之碑」と記して、去れりといふ。

にほんいつし

日本逸史 四十卷 鴨 祐之

桓武天皇の延曆十一年壬申〔一四五二〕より、淳和天皇の天長十年癸丑〔一四九三〕に至る歷史なり。六國史中「日本後紀」のみ中古より佚して世に傳はらざるをもつて、今「類聚國史」を本とし、「日本紀略」、「公卿補任」、「類聚三代格」、其の他の諸書を參照折衷して本書を修纂し、以て「日本後紀」に代へたるものなり。元祿五年壬申〔一三五二〕淺井貞邊の序あり。享保九年甲辰〔一三八四〕刊行す。本書は「國史大系」第六卷にも收めたり。該書は、享保九年の刊本を原とし、文政博士小中村清矩氏所藏本、及び矢野玄道翁の日本逸史私記に據りて標註校訂を加へ、傍ら類聚國史、類聚三代格、日本紀略、政事要略、令集解、公卿補任、其の他の諸書を以て一一原本の誤謬を正し闕文を補へりといふ。

◎鴨祐之の傳は「祭事記」の下にあり。

にほんえいしんがふ

日本詠史新樂府 一卷 中島 大賚

賴襄の「日本樂府」に倣ひて作りたるもの。天籟圓、入頭蛇、徐福來等より金法馬、玉掌談等に至る六十六題あり。文政十二年己丑〔一四八九〕の自跋、同十三年庚寅篠崎彈の評跋あり。

◎中島大賚は豐後の人、子玉と字し、海棠窩主人と號す。

にほんえいぶつし

日本詠物詩 三卷 伊藤 君嶺

我が古來の詠物詩を集めたるもの。凡例に曰く、「是の編部分題目、一々清の爺長仁が詠物詩選の例に遵ふ。蓋し爺が選申して我が邦に來詳なる名物及び其の物ありて其の詠なきものは、今亟に之れを闕く」云々といへり。安政五年庚申〔一四三六〕江村北海の序及び清田君錦の序あり、翌六年刊行す。

◎伊藤君嶺は播州北條の人にして、士善と字し、榮吉と稱すもと鹽田姓なりしが、越前福井侯の藩士、伊藤錦里養子となりて、其の家を嗣ぎ、儒を以て福井侯に仕ふ。寬政八年丙辰〔一四五六〕歿す、享年未だ詳ならず。

にほんかうていかう

日本行程考 一卷 新井 君美

日本全國の道程を記述したるものなり。編次の年代詳ならず。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

にほんかうりやく

日本考略 *本二卷 僧 橫川

漢籍中に記載せられたる我邦の事績を抄錄したるもの。松下見林著「異稱日本傳」、山本信有著「日本外志」等と同類の書なり。林道春の補修に係れり。

◎橫川の傳は「橫川和尙百人一首」の下にあり。

にほんかくこくふうどつせつ

日本各國風土圖說 二卷

此の書は本名「人國記」の下に解題したり。

にほんかのこ

日本賀濃子 十四卷 磯貝 舟也

「江戸鹿子」に擬して玉畿七道の城市神社佛閣の位置、知行高並に名所舊跡名物里程等を略記したる橫綴小册子なり。東山天皇の元祿四年辛未〔一三五一〕出版す。

にほんがふ

日本樂府 一卷 賴 襄

李賓の「明史樂府」等に擬して詠史詩六十六首を作り、每條其の記事を記したるもの。題は日出處、三韓來、炊煙起等に始まりて、夜叉來、契封册等に終れり。六十六に限れるは本邦の州數によるなりと云ふ。文政十一年戊子〔一四八八〕の自跋、同十二年己丑篠崎彈、牧靚等の序、田蕙の評語十二則、後藤機の跋等を載せたり。

◎賴襄の傳は「日本外史」の下にあり。

にほんかんれいろく
日本感霊録 本二巻
日本元興寺に於ける古來の靈異事五十八箇條を列記したるものなれど、今盛吉の爲めに其の半をも見ること能はず。

にほんぎうたのかい
日本紀歌之解 三巻 荒木田久老
日本書紀に出でたる歌の註釋なること其名の示せるが如し。寛政十一年己未(一四五九)の著。同年城戸千楯の序及び文政元年戊寅(一四七八)荒木田久老の跋あり。
◎荒木田久老の傳は「萬葉集槻の落葉」の下にあり

にほんぎおくだん
日本紀臆斷 本三巻 石崎 文雅
日本書紀の神代巻に插註したるもの。古人の說を擧げ、又今按をも加へたり。著者及び年代を記さざれども、石崎文雅の著なること、既に先覺の定說也
◎石崎文雅は、安永明和の頃、伊勢國山田に住したる人にて、國學者なり。(或は外宮の神官なりと)。著書は本書の外に神道紀年、神廷紀事、外宮儀式帳、二宮年表等あり。

にほんきかう
日本紀行 本二巻
亞米利加合衆國のペルリの日本紀行を翻譯したるものなり。其の要領を意譯せしのみにて全體の譯にはあらずといふ。

にほんきやうえんわか
日本紀竟宴和歌 本一巻
日本紀竟宴を開きて分詠したる和歌を論じたるもの。藤原國經、三統宿根理平、藤原春海、葛井宿禰清監、矢田部宿禰公望その他等の作なり。「續群書類從」巻四百〇四、和歌部第三十九全册に收めたり。

にほんきやうえんわかしふ
日本紀竟宴和歌集 二巻
元慶六年壬寅(一五四二)延喜六年丙寅(一五六六)天慶六年癸卯(一六〇三)の日本書紀竟宴の禮の時の歌七十四人、八十八首を集めたるもの。元祿十三年庚辰(一三六〇)契沖の奥書に「右此日本紀竟宴歌上下二巻者鎌倉中書王眞蹟本藏在屋後國舊本城下本妙寺矣全不盡得臨寫彼之本更寫臨模之本、與今并自閑者此本也」とあり。後に中村春野が契沖阿闍梨、藤井高尚等の解及び自說を首書して校刻したる本あり。

にほんきくんかう
日本紀訓考 五巻 關 四郎太
巻一に假字及び說法の考說を擧げ「日本紀」中の皇統並に皇親の系圖を揭げ、巻二以下本文の訓義註解にて最も詳密を盡せり。明治十九年丙戌(二五四六)木版に附し、大本十册にして行る。
◎關四郎太は越後國柏崎の人にして、前田夏陰の門人なり。

にほんきさんげんのまきせうかい
日本紀三元巻鈔解 本八巻
橫山 當永
自ら編輯したる「日本書紀三元巻」に、假名文の註釋を加へたるものなり。著者橫山當永は和學者にして、慎宗軒と號せり。

にほんぎさんそ
日本紀纂疏 二巻 一條 兼良
日本書紀の中の神代巻を漢文にて註釋したるもの。巻首自序の次に本書の綱領、修史に關する奏說、舍人親王安萬呂等の事、和訓に本末ある事等を論辨したり。
◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

にほんぎしき
日本紀私記 十五巻
日本書紀の中の語句或は歌を摘出して訓を附したるもの。巻一より巻七までは神代、巻八は人代、巻九は皇氏、巻十より巻十五までは歷代天皇の紀なり。元來私記と云へるは、昔し敕によって「日本紀」を講ぜしめ給ひし時、時の博士の作りたる私記にして、養老五年には博士太朝臣安萬、弘仁三年には博士當野朝臣高年、元慶二年には博士善淵朝臣愛成、延喜四年には博士藤原朝臣春海、承平六年には博士橘朝臣仲遠等、各之れを作りたるよしなれども、何れも今の世に傳はれるものなし。今揭ぐる所の現行本も後人の作にして、昔日の所謂私記にはあらざるべしと云ふ。

にほんきじやくせう
日本紀事譯抄 本一巻 高橋 景保
和蘭人ケエムペルの著「日本聞見記事」の第四編を

抄譯補註したるもの。文化五年戊辰(一四六八)に成れり。
◎高橋景保は橘姓。東岡の男にして、子昌と字し、作左衛門と稱し、蘭蕉また覆巢と號せり。父の職を襲ぎて幕府の書物奉行天文方兼帶となる。夙く蘭學に通じ、後て西洋の事情に詳しく、曾て亞文を譯して賞賜を得たる事あり、文政三年和蘭の甲比丹來朝の時、其の隨行外科醫シーボルトに親交し國禁を犯して我が地圖と彼の圖書と交換したることあらはれ、捕へられて獄に下され、未だ判決を見ざる中、獄中に病死、後に死刑の宣告を受くせり。時に文政十二年己丑(一四九)二月十六日、年四十六なりき。著書は本書の外に「地勢提要」二巻あり。

にほんぎじんだいのせう
日本紀神代抄 十一巻 清原 宣賢
日本紀の神代巻を抄譯し、全編片假名交文にて記せり。本書は卜部氏の秘說に違背せずして抄せる由を奥書す。寛永十七年庚辰(一三〇〇)出版す。十一巻七册に作らる。
◎清原宣賢は「古今和歌集傳授切紙」の下に傳す。

にほんぎじんだいのまきこうき
日本紀神代巻口義 十巻 多田 義俊
日本書紀の神代巻上下を註釋したるものなり。
◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

にほんぎつうしようもくろく
日本紀通證目錄 本四巻
谷川士清の「日本書紀通證」に註釋考證したる詞地名等をいろは順に抄錄類聚して、其の巻目丁數等を示したるものなり。

にほんぎみつぼねかう
日本紀御局考 一巻 藤井 高尚
源氏物語の作者紫式部を、日本紀の御局といへる事を考說し、また源氏物語の作意をも辨明したるもの。文化八年辛未(二四七一)十一月の著なり。
◎藤井高尚の傳は「淺瀨のしるべ」の下にあり。

にほんぎよかひよう
日本居家秘用 十二巻 三宅 建治
日用須知の雜件を集錄したるもの。室屋器財衣服飲食、酒醬、菜菜、天氣時候、漆細工、用火、紙細工、種植、香、花、硯墨筆、染色、養生、防病、食療、灸治、看病、撰醫、用藥等の事を通俗に記せり。享保十六年辛亥(一三九一)の序あり。元文二年丁巳(一三九七)に出版す。

にほんぎよくれい
日本玉靈 本一巻 振武 翁
神道、柱、神聖、祭政、訓義、教導、被除、祈禱並加持、神垂祈禱並加持、神垂祈福冥加王冥、和歌、三種寶物、十種神寶、太占、文字、五行、神宮參詣その他の事を略說す。享保年中垂加流學者の作なるべし。

にほんぎりやく
日本紀略 本二十六册
文武天皇の仁壽元年辛未(一五一一)より、後一條天皇の長元九年丙子(一六九六)までの事績を、年月に繫けて記したるもの。平維章が「日本紀略は光孝天皇より起り、後一條天皇まで記しゝなり、然るに世に行はるゝ本は宇多天皇以前を除きて延喜帝より用ふ。それを日本九代實錄とも號す。光孝天皇までは六國史にあるゆゑ除きたるか」と云へるは、蓋、本書の事なるべし。本書は「國史大系」の第五巻にも收めたり。該本(前編二十、後編十四)は、醍醐天皇紀以下は山崎知雄翁の校訂標註本を原とし、其の以前の巻は久邇宮家御藏本傳寫の一本を原とし、傍ら内藤耻叟、井上頴圍兩翁の所藏本及び六國史其の他諸書によりて增補訂正を加へたるものなりといふ。

にほんぎるゐこ
日本紀類語 本九巻
日本書紀に出でたる詞、姓名地名ないは分けに抄出類聚して、其の巻目丁數等を記し、搜索に便したるもの。詞の部六巻、姓名の部二巻、地名の部一巻あり。

にほんぎわかのうらつるせう
日本紀若浦鶴抄 本一巻
本居 内遠
日本書紀の若浦鶴中の事項につき、千家尊澄の問に應じて答へたるものなり。原書は千家の秘藏書にして、古書中の文義を解き、鈴の屋家の實傳、當時古學者の事績等を記したる十五册の書なりと。
編年月日を記さず。
◎本居内遠の傳は「落葉の錦」の下にあり。

にほんぎ
にほんぎわかりやくろく
日本紀和訓要記 著者未詳

にほんくにわけき
日本國分記 ㊥十卷
日本全國六十餘州の土産、人物、穀菜等の事を記し、毎國圖を著したるものにて、天正頃の作なるべしといふ。

にほんぐわいし
日本外志 本十五卷 山本 信有
松下見林著「異稱日本傳」の續編と稱して可なる書なり。卷首に記して曰く、「松下見林異稱日本傳引用書目僅に百二十五部なり。余の日本外志此の一百二十五部を除き外、引川の書籍三百餘部併せて五百部に及ぶ」云々。此の書全部三十卷の中十五卷を現存せり。
◎山本信有の傳は「作文率」の下にあり。

にほんぐわいし
日本外史 二十二卷 賴 襄
漢の司馬遷が「史記」世家の體に倣ひて、源平二氏より起りて、德川氏に至る武家の歷史なり。中興の諸將、群雄割據の治亂に關係するを以て、每家に之れを別記し、或は之れを錯合し、其の成敗盛衰の狀を示す爲め、大體の最も明確なるものにより、中間貫くに帝系年號を以て條理を表せり。全部の次第は卷一源氏前記〔平氏〕、卷二源氏正記〔源氏上〕、卷三源氏正記〔源氏下〕、卷四源氏後記〔北條氏〕、卷五新田氏前記〔楠氏〕、卷六新田氏正記〔新田氏〕、卷七足利氏正記〔足利氏上〕、卷八足利氏正記〔足利氏中〕、卷九足利氏正記〔足利氏下〕、卷十足利氏後記〔後北條氏〕、卷十一足利氏後記〔武田氏、上杉氏〕、卷十二足利氏後記〔毛利氏〕、卷十三德川氏前記〔織田氏上〕、卷十四德川氏前記〔豐臣氏上〕、卷十五德川氏前記〔豐臣氏中〕、卷十六德川氏前記〔豐臣氏下〕、卷十七德川氏前記〔德川氏一〕、卷十八德川氏正記〔德川氏二〕、卷二十德川氏正記〔德川氏三〕、卷二十一德川氏正記〔德川氏五〕等なり。卷首に二十餘項の例言を掲げ、次に文政十年丁亥（一八二七）五月二十一日、少將樂翁侯に奉る書を以て自敍とし、二百數十種の引用書目を擧げたり。本書は二十年を歷て成れる大著なり。然れ共家に藏して出さず、白河樂翁之れを聞き、禮を厚くして之れを請ひ、始めて世に公にせられたりといふ。又嘗て一生の來り「日本外史」を貸さんことを請へるあり、山陽之れを諾す。後又來りて促しまた勇壯にして慷慨なり。中華天下を遊歷して、文章の名を轟かす。遠近諸侯の重聘あれども、父母の國に仕へざる限りは決して朝服を着て他の貴人に見えざる事を誓うて一も應ずる事なし。著書は「日本外史」の外に、「日本政記」、「通議」、「春秋講義」、「先丈錄」、文集、詩集、「書後贅跋」、「日本樂府」、「遺稿」等あり、天保三年壬辰（一八四九）九月二十三日、年五十三にて病歿す。京都東山長樂寺に葬る。

にほんぐわいしせいこ
日本外史正誤 四卷 栗原 信充
賴山陽の「日本外史」中の事實の誤謬を考訂したるものなり。元治元年甲子（一八六四）の著なり。
◎栗原信充の傳は「鞍鐙新書」の下にあり。

にほんぐわいしほ
日本外史補 十四卷 岡田 僑
賴襄の「日本外史」は、足利氏の末葉元龜天正の間群雄割據謀略攻戰の事績を記するに、唯其の大體に止まりて詳細に及ばざるを以て、本書は其の遺漏を補はんがために、足利氏の末葉諸家成敗の事績を詳悉すとて、各家を世紀す。卷一北畠氏、卷二大內氏、卷三今川氏、卷四三好氏、卷五長曾我部氏、卷六島津氏、卷七大友氏、附立花氏、卷八淺井氏、卷九朝倉氏、卷十宇喜多氏、卷十一里見氏、卷十二伊達氏、卷十三最上氏、卷十四蒲生氏等の十四家なり。嘉永三年庚戌（一八五〇）の自序あり、慶應二年丙寅（一八六六）に刊行す。別に「名節錄」三卷（當時七十四人の傳）ありて本書に合刻せり。
◎岡田僑は淡路國三原郡加茂村の人にして、鴨里と號す。賴山陽に從學して儒者たり。

にほんくわんせいえんかくづ
日本官制沿革圖 本二卷 伊藤 長胤

此の書は本朝官制の沿革を圖示したるものなり。
◎伊藤長胤の傳は「輶軒小錄」の下にあり。

にほんけいねどじつそく
日本經緯度實測 本一卷 伊能 忠敬
日本の輿地を實測したるものなり。幕府の命を受けて、北陸、蝦夷を測量し、翌年東海西海諸道の沿海を測量す。寛政十二年庚申（一七九六）の作なり。其の實測圖は當年より、十數年を經て成れりといふ。
◎伊能忠敬は「大日本沿海實測錄」の下に傳す。

にほんこうき
日本後紀 本二十卷 藤原 冬嗣
續日本紀に續ける本朝の正史にして、いはゆる本朝六國史の一なり。桓武天皇の延曆十一年壬申（一七九二）正月に起りて、淳和天皇の天長十年癸酉（一八三三）二月に至る。四十二年間の事績を記したるものなり。卷首に承和七年庚申（一八四〇）十二月、藤原緒嗣等此の書を奏進する序ありて勅して以て四十卷と成すましを記せり。此の書全本久しく佚して傳はらず。今傳ふる所のものは僞本なりといふ。松下見林曰く、「今世に傳ふる所の後紀初の十卷は中古より寫し來れるものにして、末の十卷は近世或は類聚國史等の古記より編成せるものなり」云々。また「拾芥抄」に曰く、「日本後紀三十卷左大臣冬嗣等勅を奉じて撰す」と又いふ右大臣繼繩撰す云々」。姑く一說として之れを掲ぐ。本書は「國史大系」の第三卷にも收めたり。該書（四十卷）は故文學博士小中村清矩氏の校本に據り、傍ら祕閣本、其の他二三の校本を參攷して、流布本に校訂標註を加へたるものなりといふ。
◎藤原冬嗣の傳は「弘仁式」の下にあり。

にほんこうきさん
日本後紀纂 本一卷 藤原 冬嗣
日本後紀の抄略なり。其の全部が未だ亡佚せざりし時に成りたるもの、如し。
◎藤原冬嗣の傳は「弘仁式」の下にあり。

にほんこうきざんけつぼん
日本後紀殘闕本 一卷 藤原 冬嗣
日本後紀の殘闕本にして、卷五、八、十二、十三、十四、十七、二十一、二十二、二十四、以上十卷なり。「日本後紀」二十卷久しく佚して傳はらず。本書は其の眞本の殘闕なりと云ふ。卷毎に左大臣正二位兼行右近衞大將藤原冬嗣等奉敕撰と題せり。寛政十二年庚申（一八〇〇）嘯嘯已一の家に於て八卷を校刻し、享和元年辛酉（一八〇一）に至りて、また十二、二十一の兩卷を刻したり。此の書原本は伏見宮の祕庫より、塙保己一の門人、稻山行敎の寫ししものなり。
◎藤原冬嗣の傳は「弘仁式」の下にあり。

にほんこうきるじ
日本後紀類字 本一卷
日本後紀に出でたる詞をいろは順に抄錄類纂して、其の出所を指示したるものなり。

にほんこき
日本古義 五卷 高木 正朝
日本後紀類聚國史等の古記より編成せるもの、如し。
◎藤原冬嗣の傳は「弘仁式」の下にあり。

にほんこうきるじ
日本後紀類字 本一卷
日本後紀に出でたる詞をいろは順に抄錄類纂して、其の出所を指示したるものなり。

にほんこきん
日本古義 五卷 高木 正朝
日本後紀に出でたる詞を引用し、弦、箴、調度懸、無戸懸、鳴弦、其の他二三の故實を圖示辨說したるもの。天保四年癸巳（一八三三）卒業居の跋あり。圖九年戊戌上梓す。著者高木正朝は紀伊國の人なり。

にほんこげんさいしよもくろく
日本國見在書目錄 一卷 藤原 佐世
易家、尙書家、詩家、禮家等より、農家、小說家、兵家等に至る、四十類を分ちて、當時現存の書目錄數等を標記したるもの。千五百七十九部一萬六千七百九十卷の目錄なり。寬平年中の著なり。現本には嘉永四年辛亥（一八五一）安井衡の序あり。「續群書類從」卷八百十四、雜部第三十四に收めたるを、別刊單行したるなり。
◎藤原佐世は民部大輔雄友の子にして、攝政基經の家司たり、貞觀中文章得業生に擧げられ、遣唐大使に補せらる。同十四年渤海使を鴻臚館に接伴し、後累進して、寬平三年陸奧守となり、大藏小輔を兼ね、從四位下右大將となり、昌泰元年戊午（一八九八）を以て卒す、享年未だ詳ならず。

にほんこくげんぽうぜんあくれいいき
日本國現報善惡靈異記 本三卷 僧 景戒
此の書は一名「日本靈異記」の下に解題せり。本書名のは「群書類從」卷四百四十七、雜部第二に收めて、「狩谷望之の、文化十三年丙子（一八一六）二月に作りたる跋文ありて、本書の沿革、古本の由來等を記したり。

にほんこくごうかう
日本國號攷　一卷　木村　正辭
木居宣長、伴信友の考の、足らざるを補ひ正して、日本といふ號の起れるゆゑよしを、詳に辨じたるものなり。明治十一年戊寅(一二五三八)十二月の刊行にかゝる。
◎木村正辭の傳は「萬葉集集注大君志」の下にあり。

にほんこくちうちんざき
日本國中鎭座記　本朝七卷　渡邊　儀綱
日本各國の現存大社の鎭座濫觴等を記したるものにして、元文元年丙辰(一三九六)の作にかゝる。著者渡邊儀綱は總州の人なり。

にほんこくちうめいぶつき
日本國中名物記　本朝一卷
日本諸國著名の產物を國別に類聚したるもの。著者及び年代を記さゞれども、元祿年間の著作なるべしと云ふ。

にほんこくふう
日本國風　本朝六卷　度會　常彰
著者の國筆にして、延享五年戊辰(一二四〇八)の自序あり。
◎度會常彰の傳は「外宮神事著略」の下にあり。

にほんこくみらいき
日本國未來記　一卷
聖德太子が我が國幾百年の未來を豫見して記し置けるものを、楠正成が播州天王寺に於て閱覽せりといひ傳へ、同寺の寶庫より出でたりとて、慶安元年戊子(一二三〇八)版行せり。後人の僞作なること明けし。

にほんこくんじんぶつし
日本古今人物志　七卷　宇都宮由的
日本古今人物史略傳　七卷　宇都宮由的
本書は後に掲載せる「日本人物史」と同書なり。

にほんこくんじんぶつしりやくでん
日本古今人物史略傳　七卷　宇都宮由的
此の書もまた「日本人物史」の下に解題せり。

にほんさいじき
日本歲時記　七卷　貝原　好古
年中の故實雜事の、唐土の書に出でたるものを抄出して、假名文にし、また本邦の事實をば見聞のまゝに載せたり。貞享四年丁卯(一二三四七)篤信の序、編者の凡例あり。
◎貝原好古の傳は「諺草」の下にあり。

にほんさうどうれつそさやうげふき
日本曹洞列祖行業記　一卷　僧　融懷
日本曹洞宗の祖師道元、懷奘、義介、義尹の行狀を記したるものなり。
◎三木隆盛は橘姓。江戸の和學者にして、衡道と字し、治郎兵衛と稱し、晉亭と號す。著書は本書の外に皇國郡名考詳解、松島獨行吟、萊德頌等あり。

にほんさんかいめいぶつづゑ
日本山海名物圖繪　五冊　平瀨　徹齋
本書は既に「山海名物圖繪」の下に解題したり。「日本」といふ冠詞の有るもあればこゝにも出す。

にほんさんしやけい
日本算者系　本朝一卷　藤田　定資
慶長元和の交に當れる算者毛利重能に始まりて以降、各派の傳統を略述したるもの。著者が自己の知る所を記述して、以て業に呈出したるの書なり。固より全きには非ざれども、亦以て此學の系統を搜るに益あるものとす。天明元年辛丑(一二四一七)月二十一日と記入あり。
◎藤田定資の傳は「精要算法」の下にあり。

にほんしうめいかい
日本州名解　一卷　阿部　傳
各國諸邦の名義を解釋したるもの。各國著色地圖を掲げ、其の上に國郡の沿革等を詳敍せり。嘉永五年壬子(一二五一二)友人梅澤敏典の序あり。著者阿部傳は江戸の人にして、士智と字し、完堂と號す。

にほんしうめいきげん
日本州名紀原　一卷　三木　隆盛
本邦各州名の由來を考究したるものにて、寬政年間の作なり。

本邦人の詠作に係る古來の詩を年代的に選集したるもの。滋賀の朝より延曆に至るまでを甲集とし、大同より天長に至るを乙集とし、承和より寬弘に至るを丙集とし、長和より平治に至るを丁集とす。今見るところ、各集六卷宛にして丙集まであり。丁集は未だ其の現本に接せず。蓋し本書は本文五十卷、外集一卷、別集一卷、首集一卷、都合五十三卷、二十八册に作れるものありといふ。
◎市河世寧の傳は「金石私志」の下にあり。

にほんしこじせん
日本詩故事選　二卷　大江　維翰
本邦詠史の詩を事實に徵して選集せるもの。漢文にて歷史の事實を記し、次に其の故事を用ひたる詩句を擧ぐ。仁德天皇、桓武天皇等より、平政子、靜子等に至る凡そ百二十人のことにかゝり、引用の詩は凡そ七十七家の詩中よりとれり。安永七年戊戌(一二四三八)山陽の序あり。
◎大江維翰は京師の儒者。伯旗また文鼎と字し、久川玄藩と通稱し、藍水また東陽と號す。著書には、在津紀記、詩語國字解、詩聽國字解、藍水遺稿及び日本詩故事選等あり。天明八年戊申(一二四四八)五月八日、三十二歲にて病歿す。

にほんしし
日本詩史　五卷　江村　綏
日本詩學の變遷を略敍す。其の凡例中に「是の編、詩を論じて人に及び、人を傳して詩に及ぶ。巨儒宿學苟も編章存在の者無ければ、亦論載せず。此れ名くるに詩史を以てする所以なり」といへり。明和七年庚寅(一二四三〇)柚木太芝の序、同八年清田絢の跋ありて。同年出版す。
◎江村綏の傳は「授業編」の下にあり。

にほんしじやりやうねんずき
日本寺社領員數記　本朝一卷　林　恕
歷代天皇を標として、其の下に諸事績を記せり。神武帝の朝、天種子命天宮命より、後深草帝の朝藤原實經薨平に終り、次に武家を擧げ、平清盛より豐臣秀吉に終り、次に文人、畸人、善書、才女、良將、勇士を擧げ、次に五畿七道、次に羽族、毛群、次に本朝年中行事、次に冠婚葬祭の事等を輯錄す。寬永二十年癸未(一二三〇三)八月十三日舜旵の奧書あり。
◎林恕の傳は「本朝通鑑」の下にあり。

にほんしせん
日本詩選　十卷　江村　綏
本邦古來の詩を選集したるもの。其の凡例に曰く、「日本詩選二十卷、分て三編となす。今刻するところ十卷を正編となす。元和より今日に至る。前編五卷は寧樂の時より、天正の末に至る。業已に稿脫す。理當に併せ刊すべし。但裝潢空竭剞劂易きにあらず、裏白の隣、河清期し難し。故に倒行して之れを遂施す。延津の劍合する他日を待つことあり、續編五卷は正編の遑間なり」云々と。安永二年癸巳(一二四三三)の自序及び菅原在家の序、清田絢の跋ありて、翌三年刊行す。
◎江村綏の傳は「授業編」の下にあり。

にほんしせんぞくへん
日本詩選續編　八卷　江村　綏
「日本詩選」に續ける詩集なり。其の凡例に「前編の凡例に云く續編五卷と、今や斯の編卷數之れに過ぐ、亦已むことを得ざるのみ」と。安永四年乙未(一二四三五)原直の後序、同七年自序及び松延年の跋ありて、翌八年出版せらる。
◎江村綏の傳は「授業編」の下にあり。

にほんしやくみやう
日本釋名　五卷　貝原　篤信
本邦事物の名稱を解釋したるもの。劉煦の「釋名」に倣ひ「日本紀」「萬葉集」「和名抄」以下の古書につきて集錄せりといふ。卷上に天象、時節、地理、宮室、地名。卷中に水火、土石、金玉、人品、形體、人事、鳥獸、蟲、魚、介。卷下に米穀、草、木、飮食、衣服、文具、武具、雜器、虛字の二十三類に分ち、各自は五十音順に列敍せり。元祿十二年己卯(一二三五九)の自序、同年松下見林の序あり。
◎貝原篤信の傳は「自娛集」の下にあり。

にほんしやくみやうせう
日本釋名抄　本朝二卷
貝原篤信の「日本釋名」の中より、或る部分を抄略したるものならんが、何人の撰たるかを知らず。

にほんじゆりんでん
日本儒林傳　四巻　岡　白駒
此の書は一名「皇朝儒臣傳」の下に解題したり。

にほんしゆんじう
日本春秋　初五十巻　僧　日初
神武天皇以下中御門天皇に至る百〇九代、二千二百三十九年間の編年史なり。全編漢文にて記し、まま評論を加ふ。巻一な「神代通記」として神代を掲げ、末に「東都世語」として徳川氏歴代の事績を附す。明和三年丙戌(一七四二六)の自序、冨木定堅の序あり。今寫傳するところ二十五冊に作るものと、五十冊に作るものとあり。

にほんしよき
日本書紀　三十巻　舎人親王
神代より持統天皇に至る編年史なり。一二の巻を神代紀とし、三巻以下を人皇紀とす。六國史の第一にして、「古事記」に續ぎての官史なり。古事記は漢字を假りて邦語を直寫したるものなれども、「日本書紀」は純粋なる漢文なるを以て史漢、文選等の成語を其の儘に用ひて、斧鉞、牛酒等我が上古にはなき者をも、天皇、皇后、皇太子、四道將軍、棟梁臣等當代に無き名稱を以て事實を記せる等、文の爲めに事意を害したるところなきにあらず。元正天皇の養老四年庚申(一三八〇)舎人親王を總裁とし、「古事記」の著者太安麿等に撰せしめられたるなり。刊本は慶長四年己亥(一二五九)の神代巻敕版を最初とし、同十五年の全部活版、寛文九年己酉(一二三九)訓點を附して翻刻したるもの及び寛政、文政等のものあり。

註釋　養老年中以後諸家進講の「私記」、後深草時代の「釋日本紀」、忌部正通の「神代紀口訣」、一條兼良の「日本紀纂疏」、跡部良顯の「日本書紀抄」、度會清在の「日本書紀講進抄」、岡田正利の「日本紀事跡抄」、谷川士清の「日本紀通證」、河村秀根の「書紀集解」、飯田年治の「標註日本紀」、内山眞弓の「日本紀頴聚解」、鈴木重胤の「日本紀傳」、淺見絅齋の「神代巻講義」、山本廣足の「神代巻衝口發」、田中宗得の「神代巻講進鈔」、冨山東滿の「神代巻家傳聞書」、多田義俊の「神代巻要抄」、「神代巻秘要抄」、常静翁の「神代巻私語章」、清原春岑の「神代巻鹽土傳」、伴部安崇の「神代巻神社考」、高屋近文の「神代巻濫觴鈔」、吉川惟足の「神代巻風俗抄」、山崎垂加の「神代巻惟足抄」、秦信慶の「神代巻風葉集」、等あり。これらの中には一部分のものも多く、體亦一ならずと雖、皆本書研究の參考たるべし。本書は近年東京の舎名會社經濟雜誌社にて發行したる叢書「國史大系」の第一巻にも收めたり。該書は、故文學博士小中村清矩大人が、安政の頃内藤廣前氏の校本を以て異同を註せられたるものに據りて、寛文の版本(流布本)に標註を加へ、傍ら日本紀通證、書紀集解等二三の書を參攷して校訂したりといふ。

◎舎人親王は天武天皇の第三皇子なり。持統天皇の時、淨廣弐の冠を授けられ、慶雲三年一品に叙せられ、養老二年一品に至る。薨後通じて二千戸となれり。親王幼より頴敏にして、學を好み、百家の學に通ぜり、太安麿と共に詔を奉じて「日本書紀」を作り、此の歳詔ありて太政官の事を知す。聖武天皇の天平七年乙亥(一三九五)年六十歳にて薨じ、崇道盡敬皇帝と追尊せられ給へり。

にほんしよきあんかんてんわうきさくかんかう
日本書紀安閑天皇紀錯簡考　初一巻　伊勢　貞丈
日本書紀の巻本中寫傳の誤謬を考正したるものなり。明和九年壬辰(一四三二)秋八月二十一日と自記せり。
◎伊勢貞丈の傳は「安齋隨筆」の下にあり。

にほんしよきいほんかう
日本書紀異本攷　初二巻　木村　正辭
日本書紀の諸の古本を擧げて、一々其の提要を記したるものなり。二巻の中一巻は闕錄なり。萬延元年庚申(一三二〇)八月の作にかゝる。
◎木村正辭の傳は「萬葉集美夫君志」の下にあり。

にほんしよきかう
日本書紀考　初四十一巻　伴部　安崇
日本書紀の註釋なり。但し神代巻のは闕脱して今に傳はらず。一名「日本書紀抄」といふ。
◎伴部安崇の傳は「一切成就抄」の下にあり。

にほんしよきかうじゆつせう
日本書紀講述鈔　初二十三冊　度會　清在

日本書紀の全部を逐章講述したるものなり。本文に訓讀を附し、解釋は片假名交り文にて脚註す。
◎度會清在のことは「每事問」の下にあり。

にほんしよきくけつ
日本書紀口訣　十二巻　忌部　正通
日本書紀に假名文を以て口訣を加へ、更に卜部兼倶の鈔、大外記環翠の講義を加へたるものなり。貞治五年丙午(一三二六)の作。翌六年忌部正通の漢文自序あり。

にほんしよきけんれい
日本書紀見例　一巻　大關　增業
日本書紀の來歴、書體等を略記したるものなり。該書研究者の好枝折なるべし。
◎大關增業は「日本書紀文字錯亂考」の下に傳す。

にほんしよきさんげんのまき
日本書紀三元巻　四巻　横山　當永
日本書紀の中の神代巻上な天神本元とし、同下を地神起元とまた神武紀な人皇諸元とし、この三巻を合せて三元巻と名づけたるもの。卽本の本文和訓等に誤あるものは、今悉く刪補して古に復するよし、自序に見えたり。多田義俊の「ゐなほの草紙」には、「横山氏の何某とやらん、神代二巻に神武紀な添へて三元巻と名づけ惡に本文を添削したり、朝廷の大記わたくしに筆削をくはふること一向說をなすに及ばず」云々と云へり。寶永四年丁亥(一三六七)四月の著なり。
◎横山當永の傳は「日本紀三元巻鈔解」の下にあり

にほんしよきさんそ
日本書紀纂疏　八巻　一條　兼良
日本書紀を纂釋したるもので、巻首に自序及び綱領を掲げたり。此の八巻は「日本書紀」の第二巻までを釋したるにて、此の餘の巻は今見ることを得ず。
◎一條兼良の傳は「歌林良材集」の下にあり。

にほんしよきしき
日本書紀私記　初三巻
日本書紀の中難讀の文句を摘出して、其の古訓讀方を示したるもの。應永三十五年戊申(一四〇八)髪長吉叟書寫の奥書ありて、本紀三十巻持統天皇までの註あるよしな記せども、今見る所は、本紀第十、應神天皇の條に止まれり。

にほんしよきしせう
日本書紀私鈔　初三巻
日本書紀の神代巻を註解したるもの。多く佛書を引證し、假名にて記されたり。享禄四年辛卯(一五三一)の跋あり。寛永十七年庚辰(一六四〇)刊刻す。

にほんしよきしでん
日本書紀私傳　初七巻　岡　熊臣
日本書紀の神代巻、神世七代までを註解したるものなり。上巻第一巻を總論として、本書に關する要項數十目を掲げたり。
◎岡熊臣の傳は「千世の住處」の下にあり。

にほんしよきじんだいがふかい
日本書紀神代合解　十二巻　清原　國賢
日本書紀の神代巻に就て、忌部正通の「神代巻口訣」、卜部兼倶の「神代巻鈔」、大外記環翠の「神代巻講義」とを合解したるものなり。慶長四年己亥(一二五九)の自跋あり。寛文四年甲辰(一三二四)出版す。著者清原國賢は正四位下行少納言兼侍從たり。

にほんしよきじんだいしせつ
日本書紀神代私說　八巻　白井　宗因
諸種の神道說、儒說とを集說したるもので、語釋の條少し。延寶二年甲寅(一三三四)刊行せり。
◎白井宗因の傳は「神社啓蒙」の下にあり。

にほんしよきじんだいのまきとうせつ
日本書紀神代巻統節　初五巻
神代巻の本文に章段を分ち、假字文にて註釋を加へたるものなり。

にほんしよきじんむてんわうほんぎしかう
日本書紀神武天皇本紀私考　初一巻
垂加翁流の註解なり。巻首に山城、大和、和泉、攝津、紀伊等の略圖を掲げて、參考に供へたり。著者年代詳ならず。

にほんしよきせう
日本書紀抄　初四十一巻　伴部　安崇

此の書は一名「日本書紀考」の下に解題したり。

にほんしょきせんじゃべん

日本書紀撰者辨 一巻 **河村 秀根**

日本書紀の撰者につきて論辨考證し、舎人親王は編纂の總裁にして、安麻呂は其の員に備はれること、紀清人、三宅藤麻呂等の輩になりしことを断論したるものなり。

◎河村秀根の傳は「書紀集解」の下にあり。

にほんしょきちゅう

日本書紀註 本朝 三十一巻

假名文にて「日本書紀」を註釋したるもの。口訣、討講錄、十六字傳、「纂疏」、「舊事紀」、「延喜式」、「釋日本紀」、「日本後紀」、「選部考」、「續日本紀」、「儒宗傳等の諸書並に忌部正通、大山氏、重遠、延佳、宗固、垂加、光海翁、桂翁等諸人の說を參考採用したり。

にほんしょきつうしょう

日本書紀通證 三十五巻 **谷川 士清**（コトスガ）

日本書紀の漢文註解也。巻一に「纂言十九條附錄三編」ありて、此の書の大意、傳來の事、神代文字の事、舎人親王傳等を記し、巻二より巻七まで神代巻、巻八より巻三十五に至て、神武天皇紀より持統天皇紀までを註記せり。全編古今諸家の說を折衷し、且つ紀中の熟字成語は、一々經史佛書を引きて其の出據を證明せり。本書は延享五年戊辰（一七四八）に成り、寶暦二年壬申（一七五二）河北景禎、同六年藤原實連の序あり。同十二年上梓す。

◎谷川士清は伊勢洞の津の人にして、名を昇といひ、淡齋と號す、士清は其の字なり。玉木葛齋に垂加流の神道を、有栖川熾仁親王の門に和歌を學び、後益々語學史學を研究し、益に和學者を以て名を顯せり。著書は本書の外に、勾玉抄、和訓栞、鋸屑譚、反古紙說等あり。安永五年丙申（一七七六）十月十日、年七十にて歿せり。

にほんしょきでん

日本書紀傳 本朝 四十一巻 **鈴木 重胤**

神代七代章、八州起元章、四神出生章、瑞珠盟約章、資質開始章、資劒出現章、天孫降臨章等に分ち四十一巻四十七册に作る。

◎鈴木重胤の傳は「詞の歴井」の下にあり。

にほんしょきてんわうけいふ

日本書紀天皇系譜 一巻

神武天皇以下皇子皇后皇女等を悉く系譜し、各其の略傳を附したり。

にほんしょきぶんるゐ

日本書紀分類 本朝 二十六巻 **徳川 光圀**

日本書紀の中の事項を類別して、事實の索引に便したるものなり。二十六編は神祇志、皇子傳、皇妃傳、諸王傳、諸臣傳、詔令志、官位志、禮志、法志、音樂志、刑罰志、職代志、儒學志、藩跡、祥災志、地理志、「附都陵、屯舎」、外國傳、佛法志等なり。年時を記さず。

◎徳川光圀の傳は「大日本史」の下にあり。

にほんしょきもんじさくらんびかう

日本書紀文字錯亂備考 三巻 **大關 增業**

日本書紀の寛文刊本及び寛政校本に、錯誤多きを憾みて之れを提記し、且つ其の異同を示して參考に備へたるものなり。

◎大關增業は野州黒羽の藩主にして、丹治を氏とし、不比と字し、丹後守と稱し、括嚢と號せり。夙に文學に志あり、本書の外に原名、盛衰鉄、喫茶新話、機織葉綱、練章私記、乘化章隨筆等あり、弘化二年乙巳（一八四五）年六十四にて歿す。

にほんしょきるゐへう

日本書紀類標 本朝 十巻

日本書紀の中の、名詞又は熟語等を、性質によりて類舉し、各下に本書の丁數を記して索引に便したるものなり。其の類別の綱は、巻一に天部、歳時部、地部。巻二に地名、石、水、火。巻三に神祇、帝王。巻四に后妃、儲宮、帝戚、宴賀、官職。巻五に封爵、政術、賦役、禮儀、樂、文學、武備。巻六に異域、職貢人。巻七に人名、姓氏。巻八に言語。巻九に釋道、道教、靈異、災異、方術、巧藝、諸工、居處、産業、珍寶、舟車、漁獵。巻十に布帛、服飾、飲食、器財、藥石、五穀、草、木、鳥、獣、蟲、魚等の大綱に分ち、更に幾多の細目に分てり。

にほんしょきれきかう

日本書紀曆考 本朝 一巻 **保井 春海**

日本書紀の年月日、干支及び日月蝕を考正したるもの。巻末に附載したる「古今交蝕考」には、推古天皇の三十六年戊子（一二八八）より嶽元天皇の貞享二年乙丑（一三四五）までの日月蝕を歴舉したり。

◎保井春海の傳は「新選面命」の下にあり。

にほんしょきわくもんしかう

日本書紀或問私考 本朝 二巻 **多田 義俊**

巻一には總事紀、古事記、日本書紀の事、其れ等の眞僞、舎人親王の名の訓義、日本紀講談の變例等の問答、巻二には和訓の事數十條を記したり。但、神代紀二巻に止まりて、それより已下に及ばず。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

にほんしょじゃくかう

日本書籍考 一巻 **林 道春**

我邦最初の解題書にして、初めに和書百十三部の解題を載せて、覧文七年丁未（一三二七）林鵞峯の「此一册依或人之求記焉一覧之則可知一部之大概耳」と云へる末記あり。次に「經典題說」と題して、漢書十三部を解題し、「羅山子の末記に、右一帖應或人之求以校之且訓示兒童」と云へり。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

にほんしょじゃくそうもくろく

日本書籍總目録 本朝 一巻 **清原 業忠**

此の書は一名「本朝書籍目録」の下に解題せり。

にほんしるゐめいしょうくん

日本史類名稱訓 一巻 **伊能 外記**

神祇の御名及び神武天皇以來持統天皇に至るまでの天皇の御名、皇子后妃諸臣の名稱、地名などの讀みがたき訓じたるもの。一名「大日本史」の卷を逐うて、其の出處を標示せれば、搜索に便利なり。文久二年壬戌（一八六二）の凡例と慶應元年乙丑（一八六五）七月十一日、七十三村清矩の序あり。横綴小册子に作れり。

◎伊能外記は下總國香取郡佐原村の人にして、類則と字し、三造と稱し、蓋村また椎宇と號す。家も亦た吳服商なりしが、夙く國學に志し、小山田與清に從ひ、法制歴學を研究し、神典を伊吹遁舎に學べり。明治二年召されて大學大助教となり、宣教權中博士に轉じ、從七位に叙せらる。後ち香取宮の少宮司に任じ、次で權少教正に進級せらる。著書は本書の外に、香取鹿島二神祭神說、國史略辨證、百人一首新釋、神道新論、歌語童論、夏衣集、歌文集等あり、明治十年丁丑（一八七七）七月十一日、七十三にて病歿す。

にほんじんぶつし

日本人物史 七巻 **宇都宮由的**

諸種の人物を分類略傳したるもの。「日本古今人物志」また「日本古今人物史略傳」等の名にて行はるるもあり。巻一を武將部として、源平より池田郷政に至る五十四人。巻二七將部に源義仲より織田信雄に至る二十五人、閨將部に平宗盛より源義昭に至る八人、名家部に藤原通憲より、細川藤孝に至る九人。巻三忠臣部に鎌田政清より高阪彈正に至る九人。逆臣部に平將門より明智光秀に至る十一人。義國部に藤原保輔より御巫清直に至る九人。巻四義士部に長谷部信連より烏居強右衛門に至る十二人。勇士部に渡邊綱より木村重成に至る二十三人。巻五儒林部に藤原惺窩より中江藤樹に至る八人、醫林部に瑞策より近藤桂安に至る十七人。巻六烈女部に美渡第媛より勝家夫人に至る二十七人。巻七藝流部に尼張濱主より貞德に至る三十八人。以上七巻十三部に分ち二百五十人を傳す。全編漢文なり、寛文八年戊申（一六六八）山科長安の序を附し、同十二年五月上梓す。

◎宇都宮由的は周防國岩國藩の儒員なり。名を的といひ、通庵、頑拙、三近子等の號あり。少時京に出で學を松永昌三に受け、業成りて京に徒弟を教へ、また書を著して名遠近に聞ゆ。晩年主命によりて歸京し文學職となる。著す所は、四書標註、小學詳解、蒙求詳說、蒙求爵位考、近思錄標註、錦綉段標註、忠經標註、文機音註、杜律標註、同增益標註、杜律詳說、千家詩標註、千家集俚諺抄、三體詩詳解、通庵詩集、三五庵職原抄標註等あり。寛永六年己丑（一六二九）五月二日、年七十七にて歿す。

にほんすゐこでん

日本水滸傳 十一巻 **佐々木天元**

總州古來の口碑に傳はれる勇士の事績、足利の庶流、總州の洗落の始末等を、唐土の「水滸傳」に倣ひて物したる小說なり。多田道官自晃を見て盛衰を察すの語より、足利龍丸十圍を脱れて家名を永久に延ぶる話に至る凡そ二十七編あり。安永六年丁

酉(一四三七)仇鼎散人の序あり、享和元年辛酉(一四六一)出版す。著者佐々木天元は源姓にして高吉と稱す。

にほんすなどかう　日本水土考　一卷　西川　忠英

日本國水土の他外國に勝れたる所以を主張したる者。元祿十三年庚辰(一三六〇)の自序中に「蕞國無不以自國爲上國、而用自國之說、斷自國之美者、未脫有私稱之僞、而實知此國爲上國之理英、於茲著日本水土考、以示同學」とあり、其の用意を知るべし。

◎西川忠英の傳記は「華夷通商考」の下にあり。

にほんせいき　日本政記　十六卷　賴　襄

神武天皇より、後陽成天皇に至る百八世、二千年間の編年史なり。綱紀の弛張、敎化の隆替を記述し、附するに自家の論斷を以てす。蓋し賴襄晩年の作にして本書論述中筆を握りて殁せりといふ。

◎賴襄の傳は「日本外史」の下に出づ。

にほんせいごかう　日本正語考　四卷　和田　定胤

卷一に東夷考、天子考、冠位考、封爵考。卷二に貢業考、守屋考、泰伯考、日本考。卷三に神道考、宮社考、人相考。卷四に雜考を掲げたり。門人木内小伴の序あり、年代詳ならず。

◎和田定胤は京都の人にして、五郎左衞門と稱し、和國齋と號す。著書は本書の外に、神學辨書、本朝要槪、當世藻鑒草、武士鑑、武家樞要錄等あり。

にほんせいほでん　日本聲母傳　一卷　多田　義俊

著者の別著「いろは聲母傳」と同じく、いろは四十七字を擧げて、每字其の音義語源を說明したるものなり。卷首に十箇條の凡傳を掲げ、元來の日本語と外國語との區別、翻譯の事、聲母の事等を論述す。

◎多田義俊の傳は「遊和草」の下にあり。

にほんせんごかう　日本遷都考　一卷　平本　定智

此の書は一名「日本歷代遷都考」の下に解題せり。

にほんそうはうでん　日本僧寶傳　二卷

日本禪宗各祖師百數十名の行業を傳したるものなり。最初に虎關の「五家辨」東目庵の「五派一滴圖」等を掲げ、僧は黃龍慧南禪師より、眼關山行狀に至る。「禪林僧寶傳」と同物なり。

にほんだいしせんどうき　日本大師先德記　一卷　僧　定珍

此の書は一名「日本天台先德記」の下に解題せり。

にほんだいてん　日本大典　十卷　安藤　知多

神祇官、太政官等を始め、文武百官諸司の職掌章程を、律令、格式、國史、家記等に徵して輯錄したるもの。明和九年壬辰(一四三二)久我亞相源公に上るの書及び同年源信通の序を載せたり。著者安藤知冬は伊勢宇和島藩の敎諭なり。

にほんちのう　日本智囊　六卷　中村　和

本朝賢君名子の事績にして智略に渉るものを纂錄したるもの。漢文にて記せり。綱を上智、明智、察智、勝智、術智、捷智、語智、兵智、閨智、雜智の十部に分ち、また各更に細目數條を設けて類記せり。斯等の體例すべて明馮夢龍の「智囊」に倣ひたるなり。安政五年戊午(一五一八)の自序及び凡例あり。明治十八年乙酉(一五四五)男中村韭五校刻す。

◎中村和の傳は「寤眠錄」の下にあり。

にほんちやうれき　日本長曆　二卷　保井　春海

神武天皇即位元年より貞享元年甲子(一三四四)に至る、各年の干支、月の大小等を推算表記したるもの。凡例中に曰く、「神武天皇元辛酉至持統天皇五年辛卯、凡一千三百五十一年、其間所行曆皆不傳、今從日本紀所載之歲時月日、立上古曆法以稽之、自六年壬辰至天平寶字七年癸卯七十二年、以儀鳳曆推之、自八年甲辰至貞觀三年辛巳九十八年、以大衍曆求之、自四年壬午至貞享元年甲子、八百二十三年以宣明曆步算之」云々。貞享二年乙丑の自序あり。

◎保井春海の傳は「新盛面命」の下にあり。

にほんづ　日本圖　一枚　石川　俊之

日本全國の地圖。郡村城廓の位置を示し、城主知領

高里程等を記入したり。元祿十年丁丑(一三五七)上梓する所なり。

◎石川俊之は武藏國豐島郡巢山の住にして、流宣、或は流仙)と號す。元祿寶永間の畫工にして、別に江戸案內巡見圖鑑、附御江戸大繪圖、正德五年江戸繪圖、江戸圖綱目、吉原大黑雛等の著作あり。

にほんづかうもく　日本圖綱目　本篇　一卷

日本各國の石高及び郡名を列記したるものなり。蓋し前記「日本圖」に附すべきものならん。

にほんてんだいせんどうき　日本天台先德記　一卷　僧　定珍

本朝天台宗名僧傳敎、弘法、慈覺、智證の四師より、諸流の血脉小傳を輯錄したるものなり。一に「日本大師先德記」ともいへり。天正八年庚辰(一二四〇)の作なり。

◎僧定珍は常陸國小野崎善寺の學頭にして、著書は本書の外に「裝絹記」あり。

にほんどうじやうれんとうろく　日本洞上聯燈錄　十二卷　僧　秀恕

本朝曹洞宗の名僧七百四十三人の傳を輯錄したるもの。享保十二年丁未(一三八七)の自序、同二十年乙卯四成實性禪師の序、林信充の跋等あり。寬保二年壬戌(一四〇二)上梓す。明治十八年乙酉(一五四五)縮刷して五册としたるものあり。著者秀恕は武州萬年の禪祖。蟠龍と字す。

にほんどくめい　日本得名　本篇　一卷

卷首に「大日本帝王系圖」として、神武天皇より、第百十五代今上(中御門天皇)に至る御系圖を掲げ、次に日本六十五國二島の名を擧げて、一々其の名義を說明し、最後に「都をうつされし事」として神武以來四十二度の遷都地を略記す。一名を「日本風土記」といふ。「續群書類從」卷九百七十九、雜部第百二十九に入る。

にほんどすうのづ　日本度數之圖　本篇　一面

日本全國の各經緯度を示したるものにて、東西三十一度より十一度、東四三十一度より四十一度の國々を列擧せり。

にほんのき　日本之記　本篇　一卷

西洋紀元一千八百三十九年(我が天保十年)の刊行に係る「和蘭寶函」中より、我が日本の記事に關するものを抄譯したるものなり。譯述者を詳にせず。

にほんばうかうりやく　日本防考略　本篇　二卷

異朝諸國に於て、日本を攻むる手段を記したるものなり。各府縣土地の四至より、人物、氣質、强弱城堡、兵卒、兵糧、軍器、軍船等の事を擧げたり。年代は詳ならざれど、船手の海路などに通じたるもの、書上げなるべし。

にほんぶしかがみ　日本武士鑑　五卷　椋梨　一雪

本朝古今の勇士の事績を通俗體に記述したるもの。元祿九年丙子(一三五六)上梓す。

◎椋梨一雪の傳は「扇入泰公」の下にあり。

にほんぶじやうきやうき　日本武城沿記　一卷

全國の城主代々の氏名知行高を記したるものにて、元祿六年癸酉(一三五三)京師にて版刻す。

にほんぶぶき　日本風土記　八卷　秋里　舜福

卷一二に山城。卷三に大和、河內、和泉、攝津。卷四に伊賀、伊勢。卷五に志摩より常陸に至る諸國。卷

六に近江より出羽に至る各國。卷七に若狹より美作に至る諸國。卷八に備前より對馬國に及べる地誌なり。「國花萬葉記」を按として、古歌俗語等を擧ぐ。風土記の國を補ふと雖も、其の體裁は風土記と異れり。光格天皇の享和三年癸亥(一八〇三)皆川棋園の序あり。

◎秋里舜福の傳記は「近江名所圖會」の下にあり。

にほんふどき
日本風土記　木一卷
「日本得名」の一名なり。解題は同書の下に於てす。

にほんぶんけいづ
日本分形圖　一卷
本邦の地勢廣袤里數等を記し、各國間の通路里程を記し、卷末に六十七州貢數二千二百五十二萬九千二百八十三石と記し、寛文六年丙午(一六六六)と末記す。

にほんぶんしやうせうでん
日本文將小傳　木一二卷
「本朝武將傳」中より、其の傑なる者を拔きて、傳のみを寫したるものなり。卷末に「右百將、圀淺野圀幡守長治求、以撰之」と記せり。

にほんぶんせう
日本文鈔　三卷　源　世昭
貝原篤信、伊藤長胤、新井白石、物茂卿その他數十家の漢文を集めたるもの。卷上に序二十九編、記編。卷中に題言八、跋五、論四、辨三、說六、贊八、銘十二、傳五。卷下に紀事十六、文六、雜四、書二十、以上百三十餘編を收む。寛政十二年庚申(一七八〇)從二位菅原在熙の序あり。享和元年辛酉(一八〇一)出版す。著者源世昭は君甫と號す。

にほんはうくん
日本寶訓　一卷
天智、嵯峨、村上、花園、後小松、後宇多、後柏原、正親町天皇等の敕語を揭げ、次に「日本忠訓」と題して、鎌足、武智麿、小忌麿、永手、清麿、道、家眞、其の他の嘉言を記し、更に「婦女嘉言」と題して、額子、讃岐以下、十人の嘉言を記し、「忠臣略譜」をも添へたり。何年何人る編なるかを知らず。此の書「和物語」等の俗書より採れるもの多し。

にほんまつけいづ
二本松系圖　木一卷
從五位下總介義綱より、七郎右京亮滿重に至る本系十七代の系圖なり。「續群書類從」卷百十五、系圖部第十五に收む。

にほんまるかがみ
日本丸鑑　六卷　桃　隣　堂
此の書は一名「本朝丸鑑」の下に解題せり。

にほんめいさんづゑ
日本名山圖會　三卷　谷　文晁
各地名山の圖、七十餘種を載せたり。文化元年甲子(一八〇四)の自序、柴邦彥の序、川元善の跋等あり。文晁は名また字に用ふ。嘉山樓畫學齋、蠖叟無二等の號あり、幼より畫才あり、加藤伊豫守文麗、北山寒巖等に學び、宋の牧溪、木邦の雪舟、探幽等の筆意を慕ひ、練磨丹青遂に一家を成し、當時の畫仙を以て稱せらる。人物、山水、花鳥、蟲魚の中、殊に水墨山水に妙を得たり。德川田安家に仕へて畫師となる。嘗て白川樂翁に命ぜられて「集古十種」を編纂したることあり。その他の遺筆、皆今日に喧傳す。天保十二年辛丑(一八四一)十二月十四日、年八十八にて歿す。江戶淺草源空寺に葬る。

にほんめいしようしせん
日本名勝詩選　五卷　白　玄　文
本邦金國を五畿七道に分ち、各國に區別、遊覽の二門を立て、古今名家の詩を輯錄したるものなり。天明五年乙巳(一七八五)斗南の序及び自跋あり。著者白玄文は浪華の人にて、合離と號し、麗王と字す

にほんめいそうでん
日本名僧傳　木一卷
進仁寺鱗一庵より、仁恕、竺靈等に至る九十餘名の略傳なり。「續群書類從」卷二百〇三、傳部第十五に入る。

にほんめいぢよばなし
日本名女咄　五卷
此の書は一名「日本名女物語」の下に解題したり。

にほんめいぢよものがたり
日本名女物語　五卷

鎌倉尼將軍より始めて、紅梅女房の事に至る、古今の仁智、賢明、節義、貞心、才辨等の名媛女性を、傳したる物語なり。凡そ五十餘項あり。往々繪など入れて女兒の翫物としたるなり。寛文十年庚戌(一六七〇)出版す。本書は「日本名女咄」と題して行はるるもあり。

にほんめいばかう
日本名馬考　一卷　石川　久徵
我が歷史上の名馬、一百三十頭の事績を記述したるものなり。寛保二年壬戌(一七四二)の作にかゝる。著者石川久徵は水戶の人なり。

にほんもうぎう
日本蒙求　木三卷　恩田　仲任
菅亭の「木朝蒙求」と同物にして、唐李瀚の「蒙求」に倣ひ、木朝古今人物の偉事を輯めたるものなり。「木朝蒙求」の稿本にはあらざるか。

◎恩田仲任の傳は「竇北章語」の下にあり。

にほんもんだふ
日本問答　木二卷
我が國體及び神道の大略を述べたるもの。卷末に「右之二卷吉田家祕事、適子一人雖他々傳之、其方依執心、免之、適孫一人、以午王誓紙、可授其外、雖爲設賓子息、不可有他見者也」とあり。今明曆二年丙申(一六五六)の寫本による。

にほんやうしせつ
日本養子說　一卷　跡部　良顯
養子の義につき、和漢の書に徵して論述し、他姓を養子とするの非なること、同姓を以て養子とすべしと斷じたるものなり。享保七年壬寅(一七二二)十月の奥書あり。

◎跡部良顯の傳は「三種祕傳考」の下にあり。

にほんやし
日本野史　二百九十一卷　飯田　忠彥
此の書は「大日本野史」の下に解題せり。

にほんりうしんめいしやぎ
日本流神明射儀　木一卷
弓道の祕傳に關する古寫本なり。末に僧風と記して華押あれど、著者なるや否や詳ならず。

にほんれいいき
日本靈異記　木三卷　僧　景戒
雄略帝の御時より、光仁帝の寶、因果應報に關することを記したるもの。上卷合示善惡表緣十一條、中卷合示善惡表緣三十八條、下卷合示善惡表緣四十二條、下卷第二十五條の半以下今圀文に屬す。全編漢文にて記す。述作二年甲戌(一八七四)延喜八年庚申(一三四〇)等の奥書あり。

◎景戒は奈良藥師寺の住職にして、孝謙天皇時代の人なりといひ傳ふ。本書を假名文にて譯したるを「假名日本靈異記」あり。

にほんれいいきかうしやう
日本靈異記攷證　三卷　狩谷　望之
「日本靈異記」を註解考證したるものにて全編三册漢文細註なり。延寶の頃、高野山より取り出でたる原本によれりといふ。

◎狩谷望之の傳は「古京遺文」の下にあり。

にほんれいいきるゐへう
日本靈異記類標　木一卷
「日本靈異記」中の名詞、熟語等を摘出し、いろは順に列舉して、各其の本訓を施し原本の丁數を記して索引に供したるものなり。

にほんれきしりやく
日本歷史略　四卷　巨勢　正純
六國史以下種史小說等に就て治亂興廢の要を年代的に記したるものなり。神代より、第百〇九代後水尾天皇に至る。本文を漢文に記し片假名文にて細註す。元祿三年庚午(一六九〇)の自序あり。

◎巨勢正純は江戶の人にして、彦仙と稱す。幕府に仕へて從五位下大和守たり。著書は本書の外に、唐土歷代捷見、木朝儒宗傳、木朝歷史略評註等あり。

にほんれきだいせんとかう
日本歷代遷都考　一卷　平本　定智
日本書紀以下の國史に就きて、神武天皇より桓武天皇に至る、歷代遷都の事實年代を輯錄したるものにて、其の屋島と吉野とを除きたるは、作者の新意見なりとすべし。後西院天皇の寬文九年己酉(一六三九)の著にて、同年八月、十王齋賀瑋の跋あり。著者平本定智は、京師の人にして、林氏の門人なり。今その詳傳を得ず。

にほんわうじやうごくらくき
日本往生極樂記　一卷　慶滋（ヨシノ）保胤
聖德太子、行基菩薩、傳敎大師已下念佛信者四十二人の傳を輯錄したるものなり。

◎慶滋保胤は丹波守賀茂忠行の第二子にして、陰陽博士保憲の弟なり。天資文才に富み、當文時に師事して、文章當時に超絕す。また道風流の書を善くす。天曆の末、及第して、從五位下大內記に敍任せられ、後ち辭して僧となり寂心と號し、諸方を遊歷す。長德三年丁酉（一〇五七）東山如意輪寺に寂す。

にほんわうだいいちらん
日本王代一覽　七卷　林　恕
神武天皇より正親町天皇までの史蹟を編年に表記したるもの。慶安五年壬辰（二三一二）の自跋に「日本王代一覽は若狹國主從四品左少將源（酒井）忠勝の朝臣の求に應じて、國史小說等を考へ其の繁を刪り其の要を提げ。新に之を撰して呈す」とあり。寬文三年癸卯（二三二三）に上梓し、寬政七年乙卯（二四五五）に重刊したり。本書に續きて片山圓然の「續日本王代一覽」、同「續王代一覽後記」、同「續日本王代一覽後記」、佐野鄕成の「續日本王代一覽」、栗原信充の「重脩續王代一覽」等出でたり。各書目の下に解題あり。就て見るべし。

◎林恕の傳は「本朝通鑑」の下にあり。

にまぜのきぜんしふ
烹雜の記前集　二卷　瀧澤　馬琴
著者の雜記を集錄したるもの。上卷に薪堀山より筏刺に至る九種、下卷に夾三郎より、先版の誤升に至る十一種を收む。文化八年辛未（一八四七）之女御對。善惡上人問念佛安心之義。奏。證空和尙不得曰止而書予和字示焉。號之謂云女院御抄云々」と記せり。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

によあいき
如愛記　本一卷　僧　聖濟
弘安六年癸未（一九四三）八月の記にして、御修法の次第を記す。「如法愛法王法記」の略名なり。

◎愛染は名僧にして證空と號す。丞相通親の養子となり、後、出家して吉水寺に投じ、台敎を顯蓮に、密法を政曉、憲鎭、公圓等に學び、建保中西山三鈷寺に住して淨土を主張し、經を版し、寺を創むること多く、一時僧俗上下の信仰を受く。後嵯峨帝請じて菩薩戒を受け給ふ。著書は本書の外に「觀經疏決集」その他あり。寶治元年丁未（一九〇七）十一月二十六日、七十一歲にて寂す。

によいはうしゆ
如意寶珠　八册　荻野　安靜
俳諧の集にして、一名を「うちでの小づち」といふ。似船の清書する所にて、延寶二年甲寅（一二三四）五月成る。

◎荻野安靜の傳記は「けふの細布」の下にあり。

にようゐんおんふみ
女院御書　二卷　僧　辨才
宮中女院の間に對して、諸高祖の答へたる佛話を耕めたるものにて、文政三年庚辰（一二四八〇）の自序あり。

にようゐんき
女院記　一卷
圓融院の妃東三條院を始めとして、正親町院八十條名の系圖及び其の母吉德門院に至る、女院八十條名の系圖及び其の誕生、院號宣下、崩御等の年月を揭記したるもの。「群書類從」卷五百八、雜部第六十三に收めらる。

にようゐんごせう
女院御抄　本一卷　僧　善惠
淨土宗西山派の宗義を通俗平易に敍述したるもの。卷末に「四條院（一八九三―一九〇二）之女御對。善惡上人問念佛安心之義。奏。證空和尙不得曰止而書予和字示焉。號之謂云女院御抄云々」と記せり。

◎善惡は名僧にして證空と號す。丞相通親の養子となり、後、出家して吉水寺に投じ、台敎を顯蓮に、密法を政曉、憲鎭、公圓等に學び、建保中西山三鈷寺に住して淨土を主張し、經を版し、寺を創むること多く、一時僧俗上下の信仰を受く。後嵯峨帝請じて菩薩戒を受け給ふ。著書は本書の外に「觀經疏決集」その他あり。寶治元年丁未（一九〇七）十一月二十六日、七十一歲にて寂す。

にようゐんせうでん
女院小傳　一卷
圓融院の后東三條院詮子より、後光嚴帝の母后陽祿門院秀子に至る、女院七十條名の系圖及び其の敍立、關御等の年月を略記したるもの。「群書類從」卷六十五、傳部第二に收めらる。

にようはうくわんびん
女房官品　本一卷　二條　良基
女官の事を記したるもの。永德二年壬戌（一三八二）二月の作なり。永正十八年辛巳（一五二一）藤原基尙の奧書あり。

◎二條良基の傳は「菟玖波集」の下にあり。

にようばうこじつ
女房故實　本一卷

女房年中の儀式、服飾、其の他の故實を詳記したるものなり。一名を「御產所記」といふ。文祿二年癸巳（一五九三）書寫の奧書あり。「續群書類從」卷七百、武家部第四十五に收む。

にようばうさんじふろくにんかせん
女房三十六人歌仙　一卷
小野小町、式子內親王、伊勢、宮內卿、中務、周防內侍、寮藤女御、後成女、季繩女、待賢門院堀川、道綱母、宣秋門院丹後、馬內侍嘉陽門院越前、赤染右衛門、二條院讃岐、和泉式部、小侍從、女藏人左近、後鳥羽院下野、紫式部、辨內侍、小式部、少將內侍、伊勢大輔、清少納言、土御門院小宰相、大貳三位、八條院高倉、高內侍、後嵯峨院申納言典侍、一宮紀伊、式乾門院御匣、相模、藻壁門院少將等の歌集にて、應永六年己卯（一三九九）の奧書あり。

にようばうしやうぞくせう
女房私記　本一卷
此の書は女房の年中行事を記したるものなり。

にようばうしやうぞくせう
女房裝束抄　本一卷
此の書は裝束の寸法の事を記したるもの。永正七年庚午（一五一〇）の奧書あり。

にようばうしんたい
女房進退　本一卷
女房衆のしつけの事の諸項より、くろたなのかず物の事數項に至る數十目を記す。「續群書類從」卷七百〇一、武家部第四十七に收めたり。

にようばうひつぱふ
女房筆法　本一卷
女房文かきやう、衣裝かはりの事等數十項の故實等例を記せり。「續群書類從」卷七百〇一、武家部第四十七に收入せり。

にようはふじどのきかう
如法寺殿紀行　本一卷
京都より江戶に趣くところの和文紀行なり。卷末に「もんどの頭如法寺」と記せり。

にようはふそんしようき
如法尊勝記　本一卷
弘安四年辛巳（一九四一）六月十八日、異國降伏を祈りて、禁中に修法ありし次第を記したるもの也。

によくわんかざりせう
女官飾抄　本一卷
女官服飾の事を記したるもの。大永元年辛巳（一五二一）廣澤、二老の略傳なり。九皐の譚話につき門人永年の筆記するところなり。上中下三卷に寫傳し「重修裝書」卷二十八に收む。

によくわんしやうぞくしよくもんづゑ
女官裝束織文圖會　一卷　松岡　辰方
女帝女御等の裝束の模樣彩色等を圖示したるもの。享和元年辛酉（一八〇一）の自跋、寬政十二年庚申（一七九二）藤原正臣の序等あり。

◎松岡辰方の傳は「冠頭圖會」の下にあり。

によしのみやうたあはせ
女四宮歌合　本一卷
本書は天祿四年癸酉（九七三）の歌合の書なり。

によぜゐんねんだいき
如是院年代記　一卷
神武天皇即位元年辛酉より、正親町天皇の元龜元年庚午に至る二千二百三十年間の年代記にして、各干支を記入し、朝野の大事を註す。「群書類從」卷四百六十、雜部第十五に收む。

によらいししやりでんらい
如來齒舍利傳來　本一卷
支那三藏の西天竺より傳へたりといふ釋舍利の緣起なり。眞治六年丁未（一一〇七）僅か一枚に記す。「續群書類從」卷七百十六、釋家部第一に入る。

にらうりやくでん
二老略傳　本三卷　大和　永年
雪山、廣澤、二老の略傳なり。九皐の譚話につき門人永年の筆記するところなり。上中下三卷に寫傳し「重修裝書」卷二十八に收む。

にらふのやまつと
韮生の山つと　本一卷　小松常盤麻呂
文化十一年甲戌（一八一四）九月、土佐國大湊より、香美の郡韮生の鄕に赴きたる時の和文紀行なり。

島村眞幸と共に編する所なり。「土佐國群書類從」に收めらる。

にれいぎりやく
二禮儀略　四卷　村士　宗章
卷一、二を祭儀略とし、卷三、四を喪儀略とし、各其の故實式典等を詳細に記述したるもの。寛政四年壬子(一七九二)服部保の跋あり。
◎村士宗章の傳は「喪儀略」の下にあり。

にれいどうらん
二禮童覽　二卷　藤井　臧
喪禮及び祭禮の事を了解し易く通俗に編述したるもの。萬治三年庚子(一六六〇)の著。元祿元年戊辰(一六八八)に出版す。
◎藤井臧の傳は「閑窓雜記」の下にあり。

にれんいしよう
二連異稱　二卷　藤田　一正
古人居喪の善者を編次して、要制の得失を論述したるもの。著者夙に親を喪ひ常に感慣するところ多く、暇て禮を讀むの餘暇、本書を著して子弟を敎へたるなり。古人喪服の一種藤衣の事を說きて附錄とせり。門人倉澤安の序あり。明治二十年活刷二册に作る。
◎藤田一正の傳記は「勿農或問」の下にあり。

にくうおきぶみ
仁空置文　本一卷　僧　仁空
著者定置の條々として、西山粟鮎寺事、歡喜心院淨橋寺遊連院等事、西山妹淵淨滿寺事、城北鷹山寺事、江州原田寶藤寺事、多賀西生寺事、同國箕浦西圓寺事、同國岩脇總念院平方本光寺國友長修寺等事、遍照光院師蹟事、菩提識聖敎寶物等事、金剛藏聖敎並木院等事、山城國物集女庄事、攝津國楠葉河牧年預職事、同國小村下庄事、法性寺門眞地事等を記す。至德二年乙丑(一三八四)六月七日記し爭れる由を自記す。著者時に年七十七歲なりといふ。「續群書類從」卷八百四十一、釋家部第百二十六に入る

にんげんいつしやうし
人間一生誌　三卷
神道者流の妄りに儒佛二敎を輕侮するを慨き、三敎一致の理に據りて人間一生道に依り藝に遊ぶの要を撮記するよし、享保四年己亥(一七一九)の自序に見えたり。俗說をも雜へ記したるものなり。

にんじゆかがみ
仁壽鏡　本二卷
和漢古來の皇室の御年譜を表示したるもの。本邦のは國常立尊より、文保元年丁巳(一三一七)伏見院崩御に至り、外土のは大古盤古王より、梁惠王十七年(我神武の辛酉)に至る年表なり。「續群書類從」卷八百五十三本末、雜部第三に收めたり。

にんじんかうさく
人參耕作記　一卷　田村　玄臺
栽培法を平易に圖說したるも、著者晩年に供せるなり。延享四年丁卯(一七四七)出版す
◎田村玄臺の傳は「發製秘錄」の下にあり。

にんじんさつさん
人參粟纂　本一卷
人參の種類產地栽培製造の法等より、和產と渡種との效用の異同等を問答體に記し、末には和產三十六品の名稱と其の形狀の圖式六種とを附載せり

にんじんしき
人參識　本二卷　曾　槩
上卷には異國產人參の種類及び植來に關する古事等を記し、下卷には本邦產人參の種類性效鑒定法收藏法古今の產地等を記せり。著作の年月を記さざれども享保年間のものならんと云ふ。
◎曾槩の傳は「水草識略」の下にあり。

にんじんしよ
人參書　本一卷
人參の種二十七品を揭げたる着色の圖譜なり。解說を記載せず。著者年代共に未詳に屬す。

にんじんばいやうはふ
人參培養法　本一卷
人參培養法、掃土之法、作畦之法、下種之法、搭棚之法、覆根之法、移植之法、採實之法、川漬之法等の目に就きて說明せり。

にんじんふ
人參譜　本五卷　田村　玄臺
人參の種類七十六種を圖譜し、その形狀、土性、眞僞、種藝種藏等の事を記せし者。卷一に眞參部十五種、卷二に假參部十一、卷三に胃參部五、卷四に俗參部三十六。卷五に植參法、養參法、收參法、藏參法、人參總論を掲げ、人參或問一卷を附錄す。元文二年丁巳(一七三七)の自序、同三年吉祥以明の序、寛保三年木有柔の跋、寶曆五年乙亥(一七五一)藤卷調の序等あり。
◎田村玄臺の傳は「發製秘錄」の下にあり。

にんじんべん
人參辨　本一卷　栗本　昌臧
人參の事を辨說したるもの。「安政六年(一八五九)正月鯉齋以藏本書寫畢」云々と奥書せり。
◎栗本昌臧の傳記は「千蟲譜」の下にあり。

にんじんるゐしふ
人參類集　本一卷　田村　玄臺
高麗、百濟、其の他の人參類を集めて、各詳解を加へたるものなり。寶曆五年乙亥(一七五五)の著にかゝる。
◎田村玄臺の傳は「發製秘錄」の下にあり。

にんそうかうどだい
任僧綱土代　本一卷
正和二年癸丑(一三一三)に至る、僧正、僧都、律師の補任次第なり。「續群書類從」卷九十三、補任部第五に收む。

にんてんがふりたいかく
人天合離對格　本一卷　野之口隆正
活川雋に、人爲(ひとのする)と、天然(おのづから)しかる)との二種ありて、各種の用言を種々に入れ交へて、此の二種に分つ種々の格あることを主として論じたるものなり。

にんぶき
仁部記　本五卷　日野　資宣
建長八年丙辰(一二五六)五月、弘長元年辛酉(一二六一)五月、文永五年戊辰(一二六八)二月、同二年正月二九日、弘安二年己卯(一二七九)四五兩月等の記錄なり。
◎日野資宣は藤原姓。資實の孫にして、當時權中納言たりき。

にんわうきやうはふもんだふ
仁王經修法問答　本一卷
仁王經修法の事につきて、問答したる詳述なり。「續群書類從」卷七百三十九釋家部第二十四に入る

にんわうきやうはふれいきん
仁王經法勤例　本一卷
弘仁三年壬辰(一八一二)或は弘仁十四年といふ)高瓦弘法大師が、國家鎭護の爲めにとて、東寺の講堂に講じたるを始めとして、文永十年癸酉(一二七三)道融僧正の彗星出現につきての祈禱の爲め禁裏に修したる勤例を列記す。「續群書類從」卷七百三十八、釋家部第二十三に收む。

にんわうきやうはふしき
仁王經法私記　本五卷　僧　榮尊
承久元年己卯(一二一九)二月賀陽院御祈、天養二年乙丑(一一四五)五月二十一日禁中昭陽舍御祈、建永二年丁卯(一二〇七)五月二十一日高陽院御祈、正應三年庚寅(一二九〇)六月二十七日禁中御祈、正嘉三年己未(一二五九)三月十六日疫病除御祈。以上五祈の記を集錄したるものなり。著者榮尊は當時少僧都たり。

にんわうきやうはふしき
仁王經法私記　本五卷　僧　榮尊
承久元年己卯(一二一九)二月賀陽院御祈、天養二年乙丑(一一四五)五月二十一日禁中昭陽舍御祈、建永二年丁卯(一二〇七)五月二十一日高陽院御祈、正應三年庚寅(一二九〇)六月二十七日禁中御祈、正嘉三年己未(一二五九)三月十六日疫病除御祈。以上五祈の記を集錄したるものなり。著者榮尊は當時少僧都たり。

にんわうきやうはふもんだふ
仁王經修法問答　本一卷
仁王經修法の事につきて、問答したる詳述なり。「續群書類從」卷七百三十九釋家部第二十四に入る

にんわうきやうはふれいきん
仁王經法勤例　本一卷
弘仁三年壬辰(一八一二)或は弘仁十四年といふ)高瓦弘法大師が、國家鎭護の爲めにとて、東寺の講堂に講じたるを始めとして、文永十年癸酉(一二七三)道融僧正の彗星出現につきての祈禱の爲め禁裏に修したる勤例を列記す。「續群書類從」卷七百三十八、釋家部第二十三に收む。

にんわうじおむろけいふ
仁和寺御室系譜　本一卷
宇多法皇以下仁和寺御門跡の系譜なり。「續群書類從」卷九十五、補任部第七に收めたり。

にんわじおんひなみのき
仁和寺御日次記　本一卷
承元四年庚午(一二一〇)四月二十四日、上皇最勝四天王院に於て、百僧讀經を行せらるゝより、眞應元年壬午(一二二二)六月五日、土御門院御子妙法親王となり、尊性の御弟子始めて御房に參することに終れり。「續群書類從」卷八百六十五、雜部第十五に入る。

にんわじごでん
仁和寺御傳　一卷　僧　尊海

仁和寺草創以來寛永十一年甲戌〔二二九四〕に至る傳記なり。文龜二年壬戌〔二一六二〕より、同四年に至りて本書を成せり。『群書類從』卷六十七、傳部第四に收む。

⦿尊海のことは『土佐國蹉跎山緣起』の下にあり。

にんわじしよゐんけき

仁和寺諸院家記　一卷

仁和寺中、眞光院以下、七十八院の家記なり。卷末に「右仁和寺諸院家記、百花庵宗匠之遺物也。竊先師手澤校本不沈沒于世、仍刻之以傳不朽、于時文化七年〔二四七〇〕五月二日、二十七回忌也」とあり。『群書類從』卷五十九、補任部第十六に收む。

にんわじしよきせう

仁和寺諸記抄　寫本一卷

北院御室御日次記、龜山殿御談義雜記、光台院御室御灌頂記、應永御日次記、永正十三年日次記、鯨珠記殊簡、延暦寺中堂供養記、年中行事、假名文年中行事跋等の諸記中より拔萃したる日次記なり。應永二十九年壬寅〔二〇八二〕某内大臣嬰兒の爲めに編する由を奥書す。冬良の奥書に故禪閤の抄なる由を記す。『續群書類從』卷九百二十二、雜部第七十三に入る。

にんわじしよしねんぷ

仁和寺諸師年譜　寫本一卷

建永元年丙寅〔一八六六〕欖僧正に任ぜられたる印性より、元德二年庚午〔一九九〇〕二月十一日入滅したる眞光院國師大僧正禪助に至る十八人の年譜なり。元祿二年己巳〔二三四九〕寫本の奥書あり。『續群書類從』卷百九十五、傳部七に入る。

にんわじしよだうのき

仁和寺諸堂記　一卷

仁和寺諸堂の建立沿革を略記したるもの。仁治三年壬寅〔一九〇二〕六月注するところなりといふ。深賢の奥書、文祿二年癸巳〔二二五三〕二月九日僧正亮淳の奥書等あり。『群書類從』卷四百三十、釋家部第六に收む。

ぬ

ぬかだえんぎ

額田緣起　一卷

河内國河内郡額田村に鎭座せる額田神社の緣起を記す。同神社は應神天皇の御子額田大仲彦皇子を祭りたるものなり。元祿十二年己卯〔二三五九〕卜部兼敬證明の奥書あり。

ぬかぶくろ

努可婦久路　一卷　櫻井　吏登

連俳に於ける上下句の關係等を評論したるもの。例へば、よりの捨切の事、活句死句の事、前句同意の事、自他附句心得の事、一句自他相違の事等凡て百箇條あり。一々證歌を擧げて示せり。自序あり、享保年中出版す。

⦿櫻井吏登の傳は『俳諧野あそび』の下にあり。

ぬけまゐりゆめものがたりへんたふ

拔參夢物語返答　三卷　大江　匡弼

伊勢神宮拔參の事を骨子としたる俗談を記せるもの。猿田彦弘法と太神宮との問答の辨、猿田彦太神宮と拔參の問答の辨等すべて六章あり、是道子と云へるものゝ『拔參夢物語』の是非を辨正したるなりと云ふ。明和八年辛卯〔二四三一〕の自序あり。

⦿大江匡弼の傳は『和漢年中修事祕要』の下にあり。

ぬさのにしき

幣乃錦　寫本一卷　堀　正超

某年九月十三日江戸を立ちて、道を木曾路にとり、二十六日といふに京都に着したる時の和文紀行なり。年代記者等を記さゞれども、源朝風の奥書あり。「此の幣乃錦一卷は、景山堀先生の、江戸より木曾路を經て京にかへりませし時の日記なり。其の和文集といへるものゝ中に見えたるを、寫し書きたるなり。傳寫のあやまりと見ゆるは、其のまゝに物せり」といへり。

⦿堀正超は安藝侯の儒官にして、字は君燕、禎助と稱し、景山と號す。性溫厚篤學にして、後學を誘掖すること循々として倦むことなし。其の京師に歿するや、安藝侯親ら碑文を作りて其の嗣子に與へたりといふ。

ぬさぶくろ

幣ぶくろ　一卷　井上　士朗

安永三年甲午〔二四三四〕都貢と共に尾張より、京阪地へ行きたる時の道の記なり。近年發行の俳諧文庫第十二編『蕪村曉臺全集』の中にも收めたり。

⦿井上士朗は尾張の醫者にして、專庵と稱す。俳諧を好みて、曉臺の門に入り、琵琶園、松翁、朱樹叟、枇杷等の號あり。文化九年壬申〔二四七二〕五月十六日卒す、年七十餘。

ぬてのやちやうかしふ

奴弖能舍長歌集　二卷　長谷川菅緒（スガヲ）

本居大平、本居建正、長谷川菅緒、城戸千楯、近藤茂廣、湯淺經邦、大橋長廣、源政韶、前田直道、松園坊清根、藥清雄等の長歌數十編を集めたるもの。每月望の日、奴弖能舍に會して、長歌詠みたるを、藤垣内翁に見せて、よしとせるものを、長谷川菅緒の集めたるものなり。此の二卷は文化丙子卷と稱す。丙子は同十三年〔二四七六〕なり。翌十四年出版す。

⦿長谷川菅緒は和泉の人にして、三折と通稱す。國學和歌を以て名を著し、家の名を奴弖能舍と號し、生徒を聚めて敎授せり。

ぬなはざうし

ぬなは草紙　三卷　多田　義俊

著者の隨筆にして、上卷に近世神道家の事を擧げ、出口延佳の事、垂加翁の事、名法要集の事等を論じ、中卷に玉木正英、鵜井大和、白井宗因、吉川惟足の事、近代故實者の事、鳴弦相傳の事等を論じ、下卷は橘家神軍流の事、春台辨道書の事、職原の事、壺井義知と不和の事等を記述せり。卷首に蓴菜の事を出せるより、『ぬなは草紙』の名あり。寛保三年癸亥〔二四〇三〕の奥書あり。

⦿多田義俊の傳は『遊和草』の下にあり。

ぬばたまもんだふしふ

烏羽玉問答集　寫本一卷　世尊寺行成

家傳筆道の書なり。假名の沙汰、歌の書き樣、艶書の事、空海、道風、佐理等の筆の毛のこと等をも記せり。書中往々大師の口傳といふを引用せり。

⦿世尊寺行成の傳は『烏羽玉靈妙集』の下にあり。

ぬばたまれいめうしふ

烏羽玉靈妙集　寫本一卷　世尊寺行成

本書は「う」の部に於て解題せり。

ぬひどちたいがい

縫結大概　寫本一卷　高橋　正澄

てにをはの調へ方を說明したるものなり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕四月の作にかゝる。

⦿高橋正澄の傳は『霰の宿』の下にあり。

ぬぼこしふい

瓊戈拾遺　寫本三卷　澁川　春海

國號、婚禮、韓櫃、上指袋、殿上、産屋、暴日、元服、宿禰、朝賀、小朝拜、賀餞、神璽、陵墓、御正體、神田、行事その他を考證したるものなり。元祿十二年己卯〔二三五九〕の作にかゝる。

⦿澁川春海の傳は『新蘆面命』の下にあり。

ぬぼこのたたへごと

瓊矛稱辭　寫本一卷　横山　忠知

神德皇道の大略を述べたるもの。卷末に「やまとしまねの玉矛の道の傳へ聞きし事を、あらあら記しぬれど、もとより筆短かければ、言葉のつゞきからもくだくだしくなむ。たゞに心の及ぶ限りを記して、かき綴りぬれば、ふみの名をば瓊矛のたたへごととやいはまし、横山忠知津の國難波江のほとりに筆を潤ほすことしかり」と記せり。大阪に於て御城代土岐丹後守の所望に依つて書けりといふ五枚の寫本なり。著者横山忠知は御舟奉行にして左門と稱す。

ぬまたきじ

沼田紀事　寫本一卷

上州沼田城主代々の記錄なり。元弘亂の頃漂泊せる老婆の子の沼田左近丞と稱せるもの城廓を構へ近隣を討ち從へて鎌倉に隨屬せる事より、天和元年辛酉〔二三四一〕伊賀守の時罪あつて領地を沒收せられ、城廓を破壞せらるゝ事にいたる迄の沿革を記す。寶永二年乙酉〔二三六五〕寫本の奥書あり。

ぬるつるせふらん

ぬるつる捷覽　寫本一册　足代（アジロ）　弘訓（ヒロノリ）

てにをはの「ぬる」に連續する動詞と、「つる」に連續する動詞とを擧げ、五十音順に列ねて、ぬる、つるの動詞に連續するさまを示したるものなり。

⦿足代弘訓の傳は『寬居聞書』の下にあり。

ぬれがらす

ぬれ烏　一册　益　友

著者の俳諧なり。延寶七年己未〔二三三九〕中秋の

作にかゝる。

ぬれくらべさみだればなし
濡競白雨噺　二巻　一亭　萬丸
天保八年丁酉(一八四九七)作の小説にて、繪は歌川景松の筆になる。小版にて所謂草双本なり。東京帝國大學に別置書として藏せり。

ぬれてであは
濡手で粟　五巻　墨洲
商人氣質をあらはしたる滑稽小説なり。寛政十一年己未(一八四五九)出版す。

ね

ねぎきんかぶるる
禰宜禁河部類　木一巻　足代　弘訓
伊勢神宮に奉仕せる禰宜の禁河に關する規定慣例を集輯したるもの。禁河とは、古昔伊勢神宮に於て、竹川宮川以外に出づることを禁じたることありて、それを記したるを禁河の書といへり。
◎足代弘訓の傳は「筠居閒書」の下にあり。

ねぎしえうせう
禰宜至要抄　木一巻

伊勢内外兩宮禰宜補任の次第を記したるものなり

ねぎぶにんしだい
禰宜補任次第　木一巻
豐受太神宮禰宜補任の次第を記したるものなり。

ねごろじけうさうけちみやく
根來寺敎相血脈　木一巻
紀州那賀郡なる一乘山根來寺の開山覺鑁以下の血脈を記したるものなり。卷末に事敎一致血脈の事、十住心次第の事、その他法門數十箇條を註す。

ねごろびぐさ
寢轉草　一巻　内藤　丈草
人生無常の觀を喩せる文章なり。享保元年丙申(一七一六)著者三十五歳の作。享保元年丙申(一七一六)著者の十三回忌にあたりて、門人等と出版す。

ねざめ
ねざめ　一册　田中　常矩
俳諧の集なり。年代は明記なくして知りがたし。
◎田中常矩は京の俳人にして、眞齋と號せり。常長の門なり。或はいふ冥保の門と、また季吟の弟子ともいへり。後、談林の風な唱ふ。著書には、都の枝折、難波の枝折、蠅のすけ、五百題、雜巾、塵取、捨舟、花見三吟、及びねざめ等あり。天和二年壬戌(一六八二)三月二十三日歿せり。

ねざめうらしまたらうりやくえんぎ
寢覺浦島太郎略緣起　一巻
信濃國筑摩郡上ヶ松寢覺山臨川寺の後、浦島子が釣せし寢覺の床といふありとして、其の俗說を記逃したるもの。境内の辨財天社は正德二年壬辰(一七一二)尾州黃門吉通卿の所建なりといへり。この本は寶曆六年丙子(一七五六)再版したるものなり

ねざめすずり
寢覺硯　木一巻　六誹園立路
著者の隨筆。端書に「肉屏もなき老が枕のわびしらは、寢ざめがちなる燈のもとに、見聞のそこはかなかい付くるをもて、寢ざめ硯とは名付け侍る」といへり。
◎六誹園立路の傳は「老の灯」の下にあり。

ねざめのき
寢覺記　木六巻　一條　兼良
通俗平易なる修身談を記したるもの。正直をさきとすべき事、慈悲ぶかゝるべき事、神佛に祈るべき事、身を修むべき事、よろづを堪忍すべき事、おこりをつゝしむべき事、人をうらむべからざる事、恩をしるべき事、友を撰ぶべき事、用意あるべき事等の十章あり。末に承應二年(一六五三)三月中旬と記の奥書あり。
◎一條兼良の傳記は「獻條眞材集」の下にあり。

ねざめのすさび
寢覺廼須左備　木二巻　石川　雅望

諸家諸書中の隨筆雜考なり。上中下三卷の中、今上下の二卷、著者の自筆本に係るもの東京帝國大學に貯藏品として所藏す。
◎石川雅望の傳は「雅言集覽」の下にあり。

ねざめはつか
寢ざめ二十日　一巻　水田　西吟
西吟、才麿、嵐雪、一晶、關井等の催したる俳句の集なり。末に「彩法師を連立出る旅衣。十日十日の數を寢さむる」の兩吟、次に其角發句の「常よりや足袋賣にあふ宇津の山」の句あり。天和前後の編なるべし。
◎水田西吟のことは「鹽味集」の下にあり。

ねしろぐさ
根白草　一巻　浪化
發句の集、芭蕉、桃化、閑古、桂阿以下諸士の四季發句を集む。祕閒抄より抄出したりといふ。明和五年戊子(一七六八)出版す。最初に注意數條、後に芭蕉の行脚筋を掲げたり。
◎浪化の傳は「有磯海」の下にあり。

ねずみこぞうざうけいちやう
鼠小僧賊計帳　木一巻
盜賊小僧治郎吉の贓金を列記したるもの。凡そ百三十餘回にて三千四百餘兩の計あり。辰五月十日、榊原主計頭役所へ差出したるものなり。

ねずみざうし
鼠草紙　一巻

佐渡國小比叡山蓮華峯寺一揆法藤左衞門が爭亂の始末を記したるもの。寛政以前の作なり。因果應報を主とし記したれば俗徒の作なること疑ふべからず。明治二十九年の刊本あり。

ねづさいれいきしき
根津祭禮儀式　一巻
正德四年甲午(一七一四)九月二十二日、江戸根津權現の祭禮の時の次第以前の作法行事まで詳しく記載したるものなり。

ねつびやうかくげん
熱病覺原　三巻　山川　修德
熱病各種の區別を論じ、十七種熱病を擧げ各病因を說き、本末を記し、諸說の眞僞を辨論したるもなり。全編漢文にて記す。安政三年丙辰(一八五六)日尾瑜の序、同四年川田梧岡の序あり。

ねなしぐさ
根南志草　五巻　平賀　源内
著者の隨筆雜著なり。自序及び寶曆十三年癸未(一七六三)隨齋塚處士の序あり。近年活刷に付し「百萬塔」の中に收めて發行せるもあり。
◎平賀源内の傳は「風來六々部集」の下にあり。

ねぬよのとも
寢ぬ夜の友　木一巻　六誹園立路
著者の見聞隨筆なり。端書に「老が身の寢ざめ寢ざめの物憂さも、文を友とし候へば、昔し恨のとり鏡のきぬぎぬはよそ事に聞きて、筆の命毛のたへなばたへねと赤もひとつの册とはなりぬ」といふ。
◎六誹園立路の傳は「老の灯」の下にあり。

ねはんざうかうぶんせう
涅槃像考文抄　一巻
釋迦入滅前後の事歷を明かにし、涅槃像の考證に供せんために、佛般泥洹經、涅槃經、摩耶經、法苑珠林、佛本行經等の文を取意抄出して、拘尸那城事、佛歷遊諸國事、如來告涅槃事、十方來會事、最後敎誡事、茶毘葬送事、摩耶夫人下來事、分布舍利事、諸國舍利塔事等を記述したるもの。寛永年間(一六二四―四三)の作なり。

ねはんざうくわんゆろく
涅槃像粧喩錄　二巻　僧　信曉
釋迦如來涅槃像に就きて說明したるものなり。
◎信曉のことは「大原問答勸募」の下にあり。

ねものがたり
寢物語　二册　湖翁
俳句の集なり。年月は記さゞれど、元祿年中のものなるべし。

ねんがうかんもん
年號勘文　木一巻
寛保四年甲子(一七四四)二月、延享と改元したる時の勘文なり。

ねんがうべん
年號辨　木一巻　新井　君美

此の書は一名により「正德年號辨」の下に解題す。

ねんきいどうかう
年紀異同攷 寫本一卷 木村 正辭

本書は、大化より大寶に至るまでの年號年次の異說の、諸の古本に見えたるを摘出して、史學家の參考に供したるものなり。萬延元年庚申〔二五二〇〕八月の作にかゝる。

⊙木村正辭の傳は「萬葉集美夫君志」の下にあり。

ねんぐかう
年貢考 寫本一卷 長久保玄珠

和漢古今の貢法を考證したるものなり。編纂の年月詳ならず。著者長久保玄珠の傳は「長崎紀行」の下にあり。

ねんざんうちぎき
年山打聞 寫本二卷 安藤 爲章

文事故實人傳等に關する隨筆なり。百人一首、つぼれ、楯の北の方をさく、遠江の道の記、衣かつき、萬葉集は勅撰にあらず、千載集序、沙石集、柿本人麿、世繼物語、契沖阿闍梨行實等百二十二項あり。攷古博識の資となるべきもの多し。元祿三年庚午〔二三五〇〕正月の著なり。

⊙安藤爲章の傳は「年山紀聞」の下にあり。

ねんざんうちぎきしふい
年山打聞拾遺 寫本一卷 安藤 爲章

「年山打聞」に漏れたる事項、六十條を拾遺したるものなり。但し打聞の好本にはこの六十條を收めたるもありといふ。

⊙安藤爲章の傳は「年山紀聞」の下にあり。

ねんざんきぶん
年山紀聞 六卷 安藤 爲章

文事故實典籍人傳等、凡て考古博識の資となるべきことを記したる隨筆なり。總計二百三十餘項あり。前掲「年山打聞」は本書が寫傳流布せし間に處處佚脫したるものなるべし。元祿十五年壬午〔二三六二〕の著。寬政十一年己未〔二四五九〕小宮山昌秀の序、享和三年癸亥〔二四六三〕榊經寬の跋あり。文化元年甲子〔二四六四〕上梓す。

⊙安藤爲章は丹波の人。新介と稱し年山と號す。夙に儒を學び、兼れて國學を修め、また中院通茂の門に入りて詠歌を學べり。儒を以て伏見宮に仕へ、後水戶義公に召されて祿三百石を受け、「大日本史」、「禮儀類典」等の編纂に參預す。著書は本書の外に、紫女七論、常陸帶、手向草、千年山集、榮華物語考、世繼物語私考、宇津保物語考等あり。享保元年丙申〔二三七六〕十月、年五十八にて歿す。

ねんじばつしふ
年事拔集 寫本一卷

年中の行事、門松、鏡餅、節分、歲德神等の事より、亥の子、庚申の事まで說明せり。

ねんせいろく
年成錄 一卷 中井 積德

著者の隨筆にして、朝服、恤倂、義嗣、系譜、避宗、抑佛、賽神、退讓、賞刑、刑名、馬政、營田、禮樂、穢忌、葬地、遷轉、蝦夷、琉球、雜の二十目につきて考論したるものなり。書名は論語の「三年而有成」の語に取りしものなるべしといふ。先年發行の「日本文庫」第一編に收む。

⊙中井積德の傳は「七經雕題略」の下にあり。

ねんだいえんじやうき
年代炎上記 寫本五卷

明曆年中より寬政年中に至る、各地失火の年月日、刻限及び燒亡戶數等を列記したるもの。放火の事を司りし人の書留なるべし。

ねんだいき
花江都歌舞妓年代記 十七卷 立川 焉馬

江戶に於ける戲場年譜なり。各優の藝評長短を論記す。畫は松高齋春亭の手に成り蜀山人の序あり。文化十二年乙亥〔二四七五〕出版す。

⊙立川焉馬の傳記は「俳優畸人傳」の下にあり。

ねんだいきろく
年代記錄 寫本一卷

天明三年癸卯〔二四四三〕より、文化十三年丙子〔二四七六〕に至る、諸國の變事を編年體に記したるものなり。開卷に武江小日向產與田氏と記せり。卽ち記者なるべし。

ねんちうかくごのき
年中覺悟記 寫本一卷

正月より十二月に至る年中每日の恒例行事を記載したるものなり。

ねんちうきちじかゞみ
年中吉事鑑 一卷 千葉 玄之

淸朝の人陳簡侯の作「時令事宜」とて、年中日用の行事吉凶を示したるものなるを、千葉玄之、通俗に譯し、高井蘭山更に增補したるものなり。天明六年丙午〔二四四六〕源政辰の序、藤原忠器の序、文政九年丙戌〔二四八六〕高井蘭山の序等あり。

⊙千葉玄之の傳は「芸閣文集」の下にあり。

ねんちうぎやうじ
年中行事 寫本四十五册

朝廷及び諸家の年中行事各種なり。別に各特稱の下に解題せれど、便宜上今見るところの諸種を單に「年中行事」といふ普通名稱の下に列載す。卽ち足利家年中行事、伊雜皇太神宮年中行事、江戶幕府年中行事、要億辨志自安永至文化年中行事、自延享四年至文政十年々中行事、御隨于本年中行事、各禁中年中行事略、鎌倉證菩提寺年中行事、鎌倉年中行事、賀茂太神宮延寶二年書上年中行事、賀茂本年中行事、禁中恒例年中行事禁中當時年中行事略、禁中年中行事、禁中年中行事略考、皇太神宮元文四年注進年中行事、皇太神宮年中行事、外宮政所年中行事、建武年中行事、後醍醐天皇年中行事、後水尾院年中行事、于眞館年中行事、神祇官元曆元年注進年中行事、神宮年中行事、新撰年中行事、正中元年年中行事、承應年中行事追加附、住吉太神宮天和三年注進年中行事、醍醐寺年中行事、泰平辨志年中行事、帝王次第年中行事、當內宮元文四年注進年中行事、貞觀年中行事、東都年中行事、年中行事抄、年中行事祕抄、平辨志解年中行事、政所年中行事、師緒年中行事、師遠年中行事、師光年中行事、師元年中行事、大和國春日社年中行事記、柳營年中行事等也。

ねんちうぎやうじ
年中行事 寫本一卷

年中行事を記して、末に明和二年乙酉〔二四二五〕四月、內膳司高橋等庭の奧書に、賀茂社氏人保隆所傳の書を借寫せる由あり。

ねんちうぎやうじうたあはせ
年中行事歌合 二卷

貞治五年丙午〔二〇二六〕十二月二十日當座の歌合にて年中行事百首の題なり。作者は二十三人、判者は爲秀卿、判詞は後普光園院良基之れを書きたり。

ねんちうぎやうじせう
年中行事抄 寫本三卷

年中行事の註釋にして、公事恒例の起原を詳細に記したるものなり。

ねんちうぎやうじたいがい
年中行事大概 寫本一卷

年中正月朔日より、十二月三十日に至る行事の大略なり。末に一條兼良の筆にかゝる由を記せり。「續群書類從」卷二百五十五、公事部第八にあり。

ねんちうぎやうじたいせい
年中行事大成 六卷

三都その他の神社の祭祀、佛寺の法會、故事、人事、景物の類とを月別に記したるもの。每卷一月づつ六月に至りて止みたるは七月以下未版に止みたるにや。東岡主人の書せる序あり。文化三年丙寅〔二四六六〕六册に版行す。

ねんちうぎやうじひせう
年中行事祕抄 寫本一卷

禁中の年中行事を註說したるもの。永仁の比書き始め嘉曆の頃寫功を畢るよしの奧書あり。

ねんちうぎやうじひろく
年中行事祕錄 寫本五卷 藤井 常枝

正月元日より、十二月大晦日至る每月諸種の行事を詳敍したる者にて、漢字には振假名を加へたり。

⊙藤井常枝は友甫と字し、文含齋と號す。紀州舟尾浦に住して、醫を業とせり。天明六年の序ある「和漢字名錄」の著あり。

ねんちうげぎやう
年中下行 寫本一卷

年中の公事其の他の經費を記したるもの。卷末に貞享四年丁卯〔二三四七〕七月とあり。

ねんちうごうれいき
年中恒例記 一卷 廣橋 兼秀

室町足利氏年中の式例を記したるものなり。著者廣橋兼秀は大納言たり。

ねんちうしよくじしやうぞくえうせう
年中諸公事裝束要抄 寫本一卷

年中の諸公事に要する裝束の大要を記述したるもの。大永七年丁亥(一五二八)部督郎公條、修書功了の奥書あり。「續群書類從」卷三百十一、裝束部第一に入れたり。

ねんぢうぎやうれいき

年中定例記 一卷

幕府に於て正月より、十二月までの、公家、大名、外樣其の他に對面祝以下の定例を記したるもの。「群書類從」卷四百〇七、武家部第八に收む。

ねんぢうふうぞくかう

年中風俗考 二卷

俗間通行の年中の儀式等を考證記載したる者。貞享四年丁卯(一六八七)の自序あれど姓名を記さず

ねんねんせげんきゞがき

年々世間聞書 別名二卷

慶長五年庚子(一六〇〇)より、寛文三年癸卯(一六六三)に至る世間の諸事を雜記せり。

ねんぶつふうぞくつう

念佛風俗通 二卷 僧 觀智

江州西教寺中興圓戒國師眞傳和尚(眞盛上人)が飛鳥井殿に與へて、念佛を勸めたる法語の註釋なり。本書上卷は其の文句を逐うて詳密に演義し、下卷は更に其の深旨を開顯して、天台的念佛門の教義を述べたり。自序中に「欲レ光二啓理道一移二上人風一而化二凡俗一此所二以名一レ書以二風俗通一也矣」と云へり。寛保二年壬戌(一七四二)の著なり。著者觀智は天台宗の僧にして若空と字す。

ねんぶつみやうぎしふ

念佛名義集 三卷 僧 辨阿

念佛法門の安心起行等を說き述べたるもの。通俗なる假字文にして、委しく且つ解し易し。著述の由來は序に「成覺親鸞聖人の流を汲みながら淨土宗鎭西派に屬するが故に、書中主として該派所傳の教義を祖述し、往々同門異流(成覺親鸞等)の徒の主義を暗に評難したるところあり。

◎辨阿の傳は「淨土宗名目問答」の下にあり。

ねんろく

年錄 本朝二百二十三冊

明曆元年乙未(一六五五)より、文政六年癸未(一八二三)に至る、德川幕府殿中の沙汰狀、廻狀、其の他の書付を雜錄したるもの。年序を逐ふて編纂せり。

ねんろく

年錄 本朝七冊

幕府の日錄なり。今見るところは、第一冊に寛政十年戊午(一七九八)正月より十二月までを收め、第二冊第三冊に同十一年の全體を、第四、五、六、七の四冊に同十二年の正月より十二月までを收む。每日の法政任免其の他明細に記されたり。

のあそびのき

野遊記 一卷 椿 仲輔(チウホ)

著者が野遊の折、其の景色を綴りたる和文記なり。著者の末記、天保十二年辛丑(一八四一)伊能穎則の漢文序、神山業の國文序あり。

◎椿仲輔は下總國香取郡猿山村の人にして、初の名は千稔、四郎左衛門と稱す。雨塘、蘐塘、寂庵、常磐屋等の號あり。江戸に出でて小山田與清に從學し、國史制度に通じ、かれて國文を善くせり。後、佐倉侯に仕へたるも、辭して京都に上り、穗井田忠友等と交れり。著す所に、小坡雜日記、古今集解、二鏡遺韻、萬葉集發揮、常磐舍歌文集、常磐舍雜記等あり。弘化三年丙午(一八四六)二月四日、四十四歲にて歿す。

のうかうひやくしゆ

農耕百首 一卷 太田 子德

農事に關する和歌集なり。嘉永五年壬子(一八五二)東野居士の序あり。

のうかえうよう

農家要用 別本一卷

猪鹿の害を豫防すること、播種培養の事等を記述す。僻遠山間の農家の手に成れるものなるべし。

のうかえき

農家益 三卷 大藏 永常

櫨樹を培養して蠟を製することを詳解せり。享和二年壬戌(一八〇二)の自序、奥野秀辰、荒井公廉の序等ありて同年刊行せらる。

◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

のうかえきこうへん

農家益後編 二卷 大藏 永常

蠟燭の起原、櫨樹の培育、接木の法その他農事に關する諸件を圖說す。文化七年庚午(一八一〇)荒井公廉、藤堂良道の序ありて、翌八年刊行す。

◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

のうかえきぞくへん

農家益續編 二卷 大藏 永常

「農家益」の後編に續げるもの。其の趣意は、後編中に、接苗植やうに、先輩になる苗木を植置き、其の木の傍へ穗になるべき接木を並べ植置き、夏土用中接木する旬に、雨をまちて橫に倒し、植置所の臺木に、穗先を引附け、兩方扮合せ、呼接にする手段あり、是れを其の後便利宜しき住方を工夫仕出したれば、其の事を專ら委しく述るなりといへり。其大略を知るべし。文政元年(一八一八)菩提師の序あり

◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

のうかかんえうろく

農家肝要錄 別本一卷 佐藤 信淵

苗代、草害、肥培、稻病、蟲害、男種、女種等の要旨を記述したるものなり。天保比の作なるべし。

◎佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

のうかくわんぎやう

農家貫行 二卷 藪 豐昌

農家須要の事を記す。農業を勉勵して須臾も怠るべからざること、孝悌の道を喩りて敦厚の風に移らざるべからざる非等を述べて、管下の人民に頒分したるものなりといふ。成島鳳卿の序、元文元年丙辰(一七三九)九月の著述の跋あり。

◎藪豐昌は江戸の人にして、高橋と字し、筌之助と稱し、相山と號す。もと源姓なりしが、德川家康より、藪の稱を賜りて、世々これを襲用すといふ。本書は其の相模を治めし時自撰したるものなりと。生歿年時詳ならず。

のうかくん

農家訓 別本一卷

平易通俗に物したる農民教訓の書なり。敬愛勤儉の事柄を俚言にて親切に戒述せり。

◎河村義通は伊勢の人にして端軒と號す。資性敏捷にして才智あり、江戸に出でて材木商、土木業等に從ふ。能く地理を辨じ、又航海の理に通ぜり。五代將軍德川綱吉の時、命を受けて大阪淀川を治め、新川を開きて大阪以北の衝害を防ぎ、幕府其の功を稱して、新河を名けて安治川といひ、其の土を河口に積みて端軒山と號す。其の他土木に關する遺業多し。元祿十三年庚辰(一七〇〇)六月十六日歿す、年八十三。

のうかくん

農家訓 一卷 河村 義通

四恩、五常、勤勉力穡等世教に益ある語句を抄錄註解したるものにて、天明四年甲辰(一七八四)の作にかゝる。

のうかこゝろえぐさ

農家心得種 一卷 手塚 敬義

自序に「僕早歲より遊歷を好み、邊僻幽境の勤靜を見聞せしを思ひ、出でて經書の證據を拾ひ、草庵の經驗方をも年來試效せし集め、日用食物、有毒無毒合食禁を記し、耳目に認めたる異見を書き添へ、心得種と題して、備急に充つる老婆心にして、敎民の一助ならんかし」といへり。天保十四年癸卯(一八四三)刊行す。

のうかこころえぐさ
農家必要の事項を記す。もと尾張人某の作なるを、著者の名にて、天保五年甲午(一八四九四)版刻したるものなりといふ。
◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

のうかじげふ
農稼事業　五巻　大藏　永常
稻、漆、綿、紅花、油桐、その他水雞防禦に關すること等を記せり。文政十三年「庚寅(一八三〇)の作。
◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

のうかしゆち
農家須知　二巻　宮地　簡
稻種、肥料、土性、蝗蟲等の諸法を說明す。天保十一年庚子(一八四〇)の自序中に、「予が家、數世醫を業とす。刀圭の暇、農家に益ある事を聞けば書記し、且和漢の農書に來だ言はざる事を見聞き、傍ら事實に試み、之れを農人等に告げ知らしめむと思ふ」云々といへり。
◎宮地簡は土佐の醫者なり。覓夫と寫し、太仲と稱し、果仙とす。

のうかせふけいせう
農家捷徑抄　一巻　小貫　萬志
陰陽五行、君民の本分、農業の諸方、一家の計策、等農家普通の要事を記せり。文化五年戊辰(一八四六八)の著にかゝる。

のうかてうはうき
農家調寶記　一巻　高井　伴寛
和漢農業を重ずることより、往古國郡を定めしこと、道路の里數、村里の分別、新古の檢地、永錢の起原、錢錢の通用、五穀播種の時節、その他凡て農家要用の事柄を輯錄せり。文化六年己巳(一八四六九)の自序を附す。
◎高井伴寛の傳は「孝子教鈔解」の下にあり。

のうかてうはうきそくろく
農家調寶記續錄　一巻　大藏　永常
稻の千方、收入の時季、苗代の撰定、その他農業上利益なる事柄を記述す。一名を「農稼錄」と云ひ、文政九年丙戌(一八二六)の刊行に係る。
◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下に在り。

のうかさくやうし
農家德用志　一折　佐藤　政布
稻麥の雌雄を辨說したるものにて、文政十年丁亥(一八二七)の著にかゝる。
◎佐藤政布は水戸の人なり。別に「學稼新書」を著はせり。

のうかねんぢうぎやうじ
農家年中行事　一巻　大平與兵衞
土地の年中行事を、月日に繫けて記したるものにて、文政十年丁亥(一八二七)の著にかゝる。
◎佐藤政布は水戸の人なり。別に「學稼新書」を著はせり。

のうかびえうぜんぺん
農家備要前編　五巻　河野　剛
卷一に雨雪霜露の關係を論じ、卷二に穀菜、農師、農民、種種、穢代、稻種包浸、分栽等より耕耘、收穫、水利、除害等に至る二十五項。卷三に畠作耕種、屎料の種類等二十六項。卷四に土性に關すること十項、季節救荒食品及び其の製法等數項を揭ぐ。其の凡例に、「予嚮に藩命を奉じ、崎陽に客たること十有四年、西醫ハンデン、及シイボルトに交り、種藝の道を聞ひ、苟も稼穡に益あることは、誰で心に銘し、尙ほ其實思加舍密の學に基き、和漢關の說を集め、其の宜しきを取り、農事より以て救荒醫法に至るまで、民間必用事件を記し、分て六卷となし、名けて農家寶鑑といふ。醫法は姑く置き、其の農務緊要なることを抄錄し、今改て五册とし、以て家穡の一助に供す」と云へり。而して著者は醫を業とせるが、嘗て謂らく、病を醫するは、國を益するの大に如かずと、遂に此の著を企て備中倉敷の醫家石坂堅莊と謀りて世に公にせり。慶應年間の作、明治三年庚午(一八三〇)の版行。
◎河野剛は筑前福岡の人にして、通稱を禎藏といふ。學該博にして、醫を業とし、また農書の著に從へり。著書は本書の外に「農藥花歷」あり、京師に寓居し、兩書版行の後死去せりといふ。

のうかひつぢくしよへん
農家必讀初編　三巻　山崎　美成
農業の事を記し、往々圖畫を插入せり。農藥餘話、農業全書、農具便利論等の書中より摘要したるなり。

り。關慢爲寶の序を附し、安政六年己未(一八五九)出版す。
◎山崎美成の傳は「菴家便覽」の下にあり。

のうかひはいろん
農稼肥培論　三巻　大藏　永常
農事要用の肥料培養の事を詳述したるものなり。凡そ二十五項、皆肥料の事を辨す。明治二十一年戊子(一八五四八)出版す。
◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

のうかりつけう
農家立敎　一巻
天道を敬ひ、彝倫を守り、儉倹を尙ぶ等、勸農の趣意を記す。安永年間の作にして、農官の治民に揭示せるもの、如し。

のうかろく
農稼錄　一巻　大藏　永常
稻の千方、收入の時季、苗代の撰定、その他農業上の利益なる事柄を記述したるものなり。一名を「農家調寶記續錄」と云ふ。文政九年丙戌(一八二六)出版せらる。
◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下にあり。

のうかん
農　鑑　一巻
開拓檢地の法、農業種收の慣例、定免引方立樣、出作越石等の事を記述せり。

のうぐかたふるもつこ
農具地方古持籠　二巻　飯塚　生清
農業四時の狀況を記し、農務農具を圖示せり。自序中に、「農業の事、頗る廣大なる故に、書き落すこと數多らん、看もつこの目より漏れ落るを、予が樵れし手にて拾ひ集め、古持籠と題す」とあり。延享五年戊辰(一七四八)の作なる由奧書す。
◎飯塚生清のことは「田畑重寶記」の下にあり。

のうぐべんりろん
農具便利論　三巻　大藏　永常
當時諸國に用ひたる農具中より、鍬、踏車、稻こき等の最も便益なるもの數十種を圖示し、其の用法利害等を解說したるものなり。文政五年壬午(一八二二)の刊行に係れり。
◎大藏永常の傳は「製葛錄」の下に在り。

のうげきよだん
農隙餘談　二巻　利根川敎豐
農家の諸注意、耕耘、水利、山林等の事を略說す。天明三年癸卯(一七八三)の出版にかゝる。著者利根川敎豐は佐渡の人なり。

のうげふえうしふ
農業要集　一巻　宮負　佐平
「農業全書」に漏れたる事と實驗に自得せる事とを論すとて、農事總論より、穀菜その他の種藝、製菜、養蠶、抄紙法等を圖解す。文政九年丙戌(一八二六)の著なり。
◎宮負佐平の傳は「草木撰種錄」の下にあり。

のうげふぜんしよ
農業全書　十巻　宮崎　安貞
百穀菜果の種藝期、培養法等を圖說したる農書なり。其の目を擧ぐれば、卷一農事總論、卷二五穀類、卷三、四菜類、卷五山野菜類、卷六、三草類、卷七四木類、卷八果木類、卷九諸木類、卷十生類養法等にして附錄一卷あり。著者此の編を企つるや、遠く諸州を歷遊して、老農老圃に尋ね、歸鄉の後家居四十餘年、刻苦精勵して成功せりといふ。附錄一卷は貝原篤信の作。篤信嘗て此の種の著に志ありて、果さゞりしを、たまゝ、此の著ありしかば篤信の弟樂軒これを刪補し、兄の遺稿を附錄したりといふ。元祿九年丙子(一六九六)の自序、凡例、貝原益軒の序、貝原好古の跋、同十年佐々宗淳の書簡等を附したり。水戸黃門光圀は本書を見て、人生一日もなかるべからざるの書と歡稱し、貝原篤信は評して本邦農書の權輿とせり。而して著者の利人濟物に親切なる普通なることは、本書の上に明かなり。
◎宮崎安貞は藝州廣島の藩士儀右衞門の子にして、文大夫と稱せり。慶安四年筑前福岡に至りて黑田忠之に仕へ、祿二百石を受く。故ありて請暇し、後年また仕ふ。是れよりさき諸國を遍歷して農業の業を見聞し、元祿九年に至り「農業全書」を著せ

り。同十年丁丑(二三五七)七月二十三日、七十六にて病歿す、筑前國志摩郡女原村字小松原に葬れり。

のうげふだんしふいさつろく
農業談拾遺雜錄 ㊥一卷
宮永 正好
種藝、肥培、農具、害蟲の事につきて說明せるもの。先人宮永正運の「私家農業談」の遺漏を拾遺したるものなり。文化十三年丙子(二四七六)二月の作。著者宮永正好は、越中國鵜坡郡の人なり。

のうげふてびきぐさ
農業手引草 ㊥一卷
佐川五郎七
農業一般に關して、手引たる事どもを記す。文化八年辛未(二四七一)八月の作なり。

のうげふときのしをり
農業時の栞 二卷
細井 宣麻
穀物、蔬菜、木綿等の作培法を記し併せて孝悌忠信の道を說けり。天明五年乙巳(二四四五)の作にかゝる。
◎細井宣麻は三州赤坂驛の亭長にして字を千達といひ、紅葉屋孫右衞門と通稱して、農事の功者なりといふ。

のうげふにちようしふ
農業日用集 ㊥一卷
鈴木 梁滿
著者多年の農事經驗を記したる耕作法なり。文化二年乙丑(二四六五)の作。

のうげふにちようしふ
農業日用集 ㊥一卷
鈴木 梁滿
◎鈴木梁滿は三河國渥美郡吉田村熊野權現の神主なり。

のうげふはなごよみ
農業花曆 一折
河野 剛
農家備要の中の要を拔き、各作物の播種、播種、分栽等の諸術、原培、驅蟲、變化、結實の法等を記述せり。慶應年中の作にかゝる。
◎河野剛の傳は「農家備要前編」の下にあり。

のうげふもうくん
農業蒙訓 一卷
伊藤 正作
播種、播種、期節、耕耘、培養、驅蟲等の諸法を論じ、農業方針等を說けり。貫名菘翁の序あり、仁孝天皇の天保十年己亥(二四九九)七月の作にかゝる。著者伊藤正作は信前と字す。

のうげふよわ
農業餘話 二卷
小西 篤好
米麥綿蔬菜果樹等の播種培養繁殖方等、農家必要の諸件を著者の實驗に基き縷說したるもの。文政十二年己丑(二四八九)五月刊行す。
◎小西篤好は攝津國高槻佐保村の人にして、平田篤胤の門人なり。別著に「稻荷傳」一卷あり。

のうげふよわせう
農業餘話抄 一卷
武島 茂道
此の書は小西篤好の「農業餘話」中より、生民日用に切實なる米穀綿の二事を抄出して單行したるものなり。仁孝天皇の文政十一年戊子(二四八八)の自序あり。

のうこうしやうちからぐさ
農工商力草 ㊥一卷
農工商の用意數條を敎示したるものなり。寬政三年辛亥(二四五一)の末記あり。

のうさくじさくしふ
農作自得集 ㊥一卷
森廣傳兵衞
高田低田の耕作法、播種下種の事、綿培養法等を記述せり。寬曆十二年壬午(二四二二)の作。本書は古今の說を自家の經驗に徵して著したるものなり。著者森廣傳兵衞は出雲の人なり。

のうしういびまちづ
濃州揖斐町圖 ㊥一鋪
「濃州桂之鄕古圖」と相待て行はるべきものにて、同鄕の一部に屬する圖なり。編者は「山岸某」とのみ記せり。

のうしうかつらのさとづ
濃州桂之鄕古圖 ㊥一鋪
本圖は東下新町を限り、西堀川を限り、南前提を限り、北柴山後藤の屋敷を限り圖したるものにて、全圖にはあらず。別に「濃州揖斐町圖」といふものあり。同じく此の圖と相待つて行ふべきものなるべし。

し。編者は、山岸某」とのみ署名せり。

のうしうきりじやうひつき
濃州霧城筆記 ㊥五卷
元祿年中、美濃國惠那郡霧城主井羽和泉守の始末、滅祿して越後高柳に轉封せられたる事等を記せり

のうしうしよしでんき
濃州諸士傳記 ㊥一卷
美濃出の諸士の傳記なり。守護の事、土岐氏衰歿、齋藤氏由來、岐阜城主織田三代の事等より、保々氏の事、船田亂記等に至る二十九條あり。一名「美濃諸士傳記」ともいへり。

のうしうしりやく
濃州志略 ㊥八卷
松本 秀雲
美濃國全國十九郡一市の地圖を掲げ、山川古跡物産、戶口その他を詳記せり。寶曆六年丙子(二四一六)の作にて、自序あり。一名「濃陽志略」といふ。
◎松本秀雲の傳は「濃州府志」の下にあり。

のうしうせきがはらかつせんのづ
濃州關ヶ原合戰之圖 ㊥一鋪
慶長五年庚子(二二六〇)九月十五日、關原合戰の時、德川氏本陣の備立、出張の手配、諸將の陣取、旗指の籠方等に至るまでを、後に圖出す。

のうしうせきがはらぐんき
濃州關原軍記 ㊥一卷
林 道春
慶長五年庚子(二二六〇)六月、德川家康、上杉景勝征伐のため出陣の事より、翌年二月諸代の諸將に恩賞を與へ、家康江戶へ歸城の事までを、片假名にて詳細に記述したるものなり。
◎林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

のうしうおかたけんもんかくちしふ
農收地方見聞格知集 ㊥六卷
農政に關する雜事記なり。正德の逃意、農收地方正傳政事の說、國主地頭國替入部心得の事、戶籍の事、五人組條目、煙草及び造酒の制限、採礦の定法、海邊の諸掟、地方算法、國郡その他の名目解、土地纖別、種物土宜、地普請の事、農家年中行事等の項目を掲ぐ。資曆四年甲戌(二四一四)寫本の奧書あり。

のうしうめいせきし
能州名跡志 ㊥六卷
太田 頼資
能登一國の古事來歷、風土物產地理等を記したるもので、六卷三册に寫傳す。安永六年丁酉(二四三七)の自序あり。固陋の俗書なれど、地理上の事は往々採るべきものあり。
◎太田頼資は加州金澤の藩、作事方の屬吏にして、道濃と稱し、文雅また如松軒と號す。

のうじだいぜん
農事大全 ㊥一卷
鳴島 信逼
農書「農譚拾穗」〔此の書は總論、拓土、新村、播植、鄕約、蓄積、救荒等の目につきて論ず〕「呂覽農非篇」文〔此の書は上農、任地、辨土、審時等の目につきて論ず〕「東方農事準解」〔本書は本邦各地の風土を

のうじゆつかんせいき
農術鑑正記 二卷
砂川 野水
民間農行の事を詳敍し合せて年中の行事を記せり。自序に「先祖より鄕に居て農民の吏司たること百年に餘りぬれば、生れ付きたる耕作に、百姓の助力あることを心付、常に農書を校閱し年々近國に往來し、老農の稼穡を見習ひ、作り覺えし草木園菜藥等を五穀と均しく、民の產業に利あるもの、予が管見を山賤の爲めに記す」とあり、享保八年癸卯〔二三八三〕無盡堂普雄の序跋あり。其の跋中には、「此の書成するところ、歲時記、農業全書に遺漏せるを收拾するものなり」とあり。

のうじゆつくわうえきろく
農術廣益錄 一卷
堀井 好信
稻作の順序を記し、勤儉力穡の要を述べたり。寬政二年庚戌(二四五〇)の作なり。文化七年庚午(二四七〇)其の孫慶安といふもの校刻す。著者堀井好信は播津の人なり。

のうしよがたかなづかひ

能書方假名遣 寫本一卷 藤原 基輔

此の書は一名「假名遣」の題下に解題せり。

のうしよじせき

能書事績 寫本四卷 穗積 保

古來著名なる能書家の事績を集む。上、光明皇后より、下、中御門權大納言宣胤に至る。卷三以下に扁額の書法を記し、「錢文筆者考」、「一切經書寫考」を附錄す。寬政四年壬子〔二四五二〕屋代弘賢の序あり。

◉穗積保のことは「異年號考」の下にあり。

のうせいえうへん

農政要編 寫本一卷 船橋 渡

五公五民の大意、五公五民は石盛の上にある事、古今稅則の大意、上方關東稅則の差九の力子七五法の事、稻毛坪刈度竿の事、五公五民略解、西國毛見の大意、天正文祿田制の大意、奧州江刺郡六石銘七石銘の事、以上の目を說述したるものにて、萬延文久頃の作なり。

◉船橋渡は下總國關宿の人、長島仁左衞門に就きて、田制の事を研究せり。本書の外に「田法書」の著あり。

のうせいがくかいてう

農政學解嘲 寫本一卷 佐藤 信淵

佐藤家の農政學を嘲けるものありしかば、本書を著して其の嘲を解き、家學を發揮したるものなり。

◉佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

のうせいけうかいろくかでう

農政敎戒六箇條 寫本一卷 佐藤 信淵

勸農吏を設くる綱要を示したるものにて、農政を執るもの丶心法なり。作りて小池九藏に示すところなり。

◉佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

のうせいざいう

農政座右 三卷 小宮山昌秀

國郡、職役、田圃、步段、租稅、稻穀、帳簿の七項數十條に分ちて農政に關する諸件を考證記述したるもの。文政十二年己丑〔二四八九〕の自序あり。明治二十年丁亥出版す。

◉小宮山昌秀の傳は「垂統大記」の下にあり。

のうせいすゐとうき

農政垂統記 寫本四卷

天祖天照大神より歷代の農政に關する事績を擧げ、長元八年乙亥〔一六九五〕の農政事實までを記せり。全編漢文にて編年的に記し。二冊に寫傳す。

のうせいずゐひつ

農政隨筆 二卷 賀美 眞知

農政に關する雜記にして、寶曆六年丙子〔二四一六〕の作にかゝる。

のうせいほんろん

農政本論 六卷 佐藤 信淵

農政に關する家學の說明なり。其の目を擧ぐれば、農政起原、租庸調之制度、封祿位田、職分田、季祿神地、田代、莊園之禍、關府之政、枡制度、錢給之始末、五六之法、檢地、檢地之用具、竿入圖式、土性之辨、根元取箇法、鹼附、籤取、田畑名目、割付免狀、懸札、諸國石代、夏成、上方田畑米取並上方二割狩之說、出目米、關東込米、口永、三役、夫米、構莚役、茬大豆納、夫錢足、前柿木役、七百文出目、小物成浮役、山年貢山役、山手米永、野年貢、野手米永、草役永、茶年貢茶役、漆年貢、櫨年貢、松山藪林年貢、荒野錢、楮役油荏役、御林下草錢、河岸役、池役池魚役、網役網代役、鳥取役、紙漉役、定免之說並救助講說、檢見法、手代檢見、步刈法、年貢收納法、內密救助講法、商人債主援買之議、萬民牽育法並祭禮法等なり。五代相傳の家學なりといふ。文政十二年己丑〔二四八九〕正月の作。明治四年辛未〔二五三一〕六卷四冊に版行す。

◉佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

のうたんそう

農譚藪 寫本三卷 鹿系 田里

農政に關する雜事を辨明したるもの、地方職者之辨、田圃檢地之辨、土地美惡之辨、巡檢按察之辨、其の他州郡道路、租稅、普請、林木生殖、公廨差出古案牒、五畿七道風土等に分ち記せり。中御門天皇の享保七年壬寅〔二三八二〕の作にかゝる。著者鹿系田里は勢州龜山の人なり。

のうちうきかう

農中紀行 寫本四卷 平 貴德

文化元年甲子〔二四六四〕江戸を立ちて美濃に行きし時の漢文紀行なり。四月の江戸出立より、九月濃中歷遊までを詳しく記したり。記を案ずるに、著者官に仕ふること四十四年、今年七十三を以て、骸骨を乞ひ、父母の國たる美濃の國へ行ける由なり。四卷中一卷は附錄にして、「阿雅世池記」と「兪嶽記」との記事二編を載せたり。著者平貴德は九峯と號す。今その詳傳を得ず。

のうぢきかう

濃路紀行 寫本一卷

最初天正元年〔二二三三〕九月十日の頃、友とする人を誘ひて、「美濃國にまかる」と筆を起して、近江路を經、同二十日美濃國に入り、二十五日小野の宿、二十六日多賀大社に詣りたる事を記し、更に近江路を歷て都に歸るまでの上下の道中を記せり。卷末に「兎庵老人」と記せり、著者の事なるか如何。櫻散翁の奧書あり。

のうどく

能毒 一卷 羽倉 用九

穀菜魚鳥等の能毒を記したるものなり。文久二年壬戌〔二五二二〕に出版す。

◉羽倉用九の傳は「簡堂叢書」の下にあり。

のうにんぶくろ

農人袋 寫本二卷 藪 連立

農產諸物の撰種播種より、培養、收穫及び家計の諸般を說述したるもの。天明四年甲辰〔二四四四〕三月の作なり。

のうのづしき

能の圖式 六卷

四座能の由來、南部御神事能の事、松下關口の事、弓矢の立合の事、船の立合の事、舞臺、面、衣裝、小道具、作物等の圖、衣裝付の事、謠の名寄付の事、江戸京都役者名付等、能に關する諸件を輯錄したるもの。元祿十年丁丑〔二三五七〕の出版なり。

のうべんわくだいぜん

能辨惑大全 五卷 高田 平七

高砂、難波、老松、白樂天、養老等より、鸚、望月、石橋等に至る諸曲百十二番を集錄し、末卷には更に脇所作付、前五段之舞所作付、眞草の事、太鼓、遊女、神樂、老女、三足半、乘舞、不乘舞等より狂言心得、地謠心得、謠諷本意等の諸說を記したるもの。元文五年庚申〔二四〇〇〕の自序あり。

のうほくふうが

濃北風雅 一卷 齋藤 雄

美濃厖城の諸士及び諸名家の風景を題詠したる詩を纂めたるもの。卷首に久代景明の手に成れる近傍の名所圖を揭げ、金森侯松本寬賴の鏡田慈恩寺の十勝を詠じたる七律十章を揭げ、次に諸家の詩を收む。江村北海其の他の序あり。天明年中の編にかゝる。

◉齋藤雄は美濃の人なり。本書は其の社中の詩を纂めたるものなりと云ふ。

のうみんをあはれむことば

憐農民詞 寫本一卷 竹村 茂雄

農民艱苦の情狀を詳しく長歌に詠悉したるものなり。著者の歌集「穗向屋集」に收む天保頃の作なり。

◉竹村茂雄の傳は「千町能拔穗」の下にあり。

のうみんしつく

農民疾苦 寫本一卷 長久保玄珠

農民疾苦の狀況を詳述し、農政の弊害を除去せんことを論辨したるものなり。寬政年間藩主に上りたるものなるべしといふ。

◉長久保玄珠の傳は「長崎紀行」の下にあり。

のうみんちようかいへん

農民懲誡編 一卷 小宮次郎右衞門

天明三年癸卯〔二四四三〕の凶荒に鈴木武助の窮厄に遇ひし事實を記し、一般農民を警戒したるもの。文化五年戊辰〔二四六八〕七月の作なり。

のうやうかうき

濃陽行紀 寫本二卷

美濃地巡檢の紀行なり。年代と氏名を記さず。卷首に記して、「壬申三月朔日、張州府志成、獻納東觀、命賜食邑、門人助其業者、賜白金有差、三日邦君發趣東都、督有編集濃州事績之命、手延美舊之總裁」といふ。これによりて見れば本紀は「張州府志」の總裁たりし松平秀雲の作なるべきか。

のうやうしよしでん

濃陽諸士傳 寫本二卷

美濃國守護の事より、土岐、齋藤、織田、池田、安藤、稻葉、不破、氏家等諸名家の來歷事績及び諸寺院の

由來等を記したるものなり。

のうやうしりやく 濃陽志略 本八卷 松本 秀雲

此の書は一名「濃州志略」の下に解題したり。

のうやうせんき 濃陽戰記 本一卷

此の書は「濃陽諸士傳」に增補首書したるものなり

のうゆ 農喩 一卷 鈴木 武助

天明三年癸卯(一七八三)の凶荒に際して自家及び一般の樣狀を記し、勤倫撙備の必要を說喩したるものなり。文化二年乙丑(一八〇五)の作。嘉永三年庚戌(一八五〇)出版す。

◎鈴木武助は下野國黑羽の城主大關氏の執政にして。正長と稱せり。天明三年癸卯(一七八三)天下の饑饉に際して、大に救濟の法を講じ、封內に一人の餓者なきを得たりと、本書「農喩」は當時の作なりと。

のうわざむらびしょさかがみ 能脇侍所作鑑 本一卷

能の沿革、歷代脇侍の氏名、能舞臺の濫觴圖說、幕屋入の事、裝束を着る次第、身體の事、幕出の心得、舞蹈の作法、幕入の心得、視盲脇式の事、其の他之れに關する式法を記したるものなり。

のがらす 野がらす 一册

俳句の集なり。元祿十五年壬午(一七〇二)京都にて出版す。

のくらかう 野鞍考 本一卷

駄馬の鞍の一種野鞍といふものを圖說したり。

のくづ 鋸屑 六册 椋梨 一雪

著者の俳諧集にして、萬治三年庚子(一六六〇)四月編輯するところなり。

◎椋梨一雪の傳記は「肩入泰公」の下にあり。

のざらしきかう 野ざらし紀行 一卷 松尾 芭蕉

眞享元年甲子(一六八四)の俳句集にして「冬の日」を物したる時の紀なり。近年發行の俳諧文庫第一編「芭蕉全集」にも收む。

◎松尾芭蕉の傳は「奧の細路」の下にあり。

のざらしきかうすのあんせう 野ざらし紀行翠園抄 一卷 翠園

芭蕉が眞享元年甲子(一六八四)の紀行を註したる者なり。文化十年癸酉(一八一三)註者の自序あり。

のしまけでん 能島家傳 本五卷

水軍法に關する同家の祕傳書なり。寬政九年丁巳[一七九七]夏六月、菅普師の捺印ある奧書に、此の書は備後國島漁家數世に藏するところのものを謄寫せる由記せり。五卷一册に寫傳す。

のしめかう 熨斗目考 本一卷 松岡 辰方

熨斗目の事につき、伊勢貞丈、一條兼良等の說を引きて考證せり。寬政六年甲寅(一七九四)或る人の所望に應じて記せる由を末記す。「耀みそのや」の第二に收む。

◎松岡辰方の傳は「寬齋隨會」の下にあり。

のぜり 野芹 本一卷 細井 德民

土地人民は國の根本にして枝葉四條、花實五條ある後を述べ、國家の爲めに節儉政の要を論じたる雄自書なり。「野人獻芹」の故事に倣ひて「野芹」とは名けたるなるべし。

◎細井德民の傳は「詩經毛鄭異同考」の下にあり。

のちかゞみ 後鑑 三百六十五卷 成島 良譲

元弘以來天正年間に至る二百四十餘年間室町十三代の歷史なり。德川幕府の時撰したる「東鑑」にならひて、天保年中江戶幕府、成島良譲等に命じて編纂せしむるところなり。東鑑、太平記、總見記、太閤記、德川氏實紀等と參看せば、七百餘年間の得失成敗の跡を連續して照覽することを得べし。近年內閣記錄局に於て出版せり。

◎成島良譲の傳は「南山史」の下にあり。

のちのはな 後の花 三卷 齋月堂丈竹

菊花の栽培法を詳しく記す。當世菊花形の繪圖、葩の異名、花壇排列之事、同日當の事以下二十八項、皆菊花の栽培法にかゝる。中御門天皇の正德三年癸巳(一七一三)丈竹の自序中に、「春過夏閑秋暮れて、此の花開さて後、更に花なし、故に後の花と名づく」といへり。

のちのやまもとさふき 後山本左府記 本一卷 藤原 實泰

延慶二年己酉(一三〇九)十一月の記なり。元祿元年戊辰(一六八八)十月、彰考館の奧書あり。

◎藤原實泰は山本太政大臣公守の子にして、文保二年戊午(一三一八)八月、左大臣となる。故に、後山本左府」と稱す。元亨二年八月職を罷め、翌三年六月再び左大臣となり、正二位たり。嘉曆二年丁卯(一三二七)八月薨去す。

のちのろくろくせん 後六々撰 本一卷

泉式部、相模の歌各十首。慧慶法師、赤染衞門、能因法師、伊勢大輔の歌各八首。曾禰好忠、道命阿闍梨の歌各五首。平貞文、清原深養父、大江嘉言、源道濟、道雅卿、增基法師の歌各四首、公任卿、大江千里、在原元方、輔親卿、高遠卿、馬內侍、藤原義孝、紫式部、道綱卿母、藤原長能、定頼卿、上東門院中將の歌各三首、兼覺王、在原棟梁、文屋康秀、藤原忠房、菅原輔昭、大江匡衡、安法法師、清少納言の歌各二首を輯錄したるもの。四條公任の「三十六人撰」に倣ひて、其の後の人々を撰びたるなりと云ふ。

のちのよろづ 後は昔物語 一卷 手柄 岡持

著者少時よりの都下見聞の事實を雜記して、松露館主に寄せたるものなれども、往々人となり、格天皇の享和三年癸亥(一八〇三)著者六十九歲の時の序あり。

◎手柄岡持は羽州の人にして、氏を平澤、名を常富、通稱を平格といふ。淺黃裏成、手柄岡持は其の狂名なり。また俳諧の號を韓長齡といふ。龜明誠堂喜三二といひ、狂詩の號を鹿亭蝙、天譴亭等は皆其の別山人、道蛇樓、鹿岡記、虎年蝙、天譴亭等は皆其の別號なり、もと佐竹侯の家臣なりしが、後江戶に出でて留守居役となる。夙に戲作、狂歌を好み、斯の道の名人となれり。後落主の命により、戲作を廢し喜三二、淺黃裏成の號を門人寺樂亭長根に讓り、晚年辭職して後は剃髮して自ら平寄翁と號せり。著書には、文武二道萬石通、鐵入七人化粧、案內手本通人鑑、龍都四國の噂、珍獻立曾我、うそしっかり平萬八講釋、諸都酒奧選、蛭子大黑吐年過、龜山人家の化物、姐妓地理誌、大通間遣曾我、ながのいき姐妓地理誌、大通間遣曾我、ながのいき新風俗通志、瀧返柳黑髮、天道大福帳、新版桃太郎、南阡雜法師種、人間萬事萬八傳、六玉川柳樂、柳巷化言、羽勘三代圖會、後昔物語等あり。

のちのよろづ 後は昔物語 一卷 手柄 岡持

のちばむかしものがたり 後は昔物語 一卷 手柄 岡持

のちみぐさ 後見草 本三卷 杉田 玄伯

天變地異の出來事を記述したる隨筆なり。卽ち最初、龜岡石見入道宗山の記錄したる明曆火災の實記を掲げ、其の他の自記は種々見聞の異異記事なり。されど皆文飾に過ぎて多く事實を失へる由、先覺も云へり。

◎杉田玄伯は醫法外科醫なり。異と稱し、子孫と字し、鶴齋と號す。中御門天皇の享保十八年癸酉(一七三三)に生る。稍長じて幕府西丸の門に入りて醫を學び、壯年の後四年作に從つて蘭語を受く。學習に情を勵まし家學の擴張を勉めて怠ることなく、十年一日の如し。其の解體新書の如きは同志中川淳庵、前野良澤等と相提携して翻譯し、三箇年を經て十一回稿を改めたりといふ。其の他痲科大成、和蘭醫事問答等の著譯あり。光格天皇の文化十四年丁丑(一八一七)四月十七日、八十五歲にて病歿せり。

のつしやふにつし 納紗布日誌 一卷 松浦竹四郎

安政五年戊午(一八五八)實檢の納紗布目記地誌なり。萬延元年庚申(一八六〇)の凡例あり。末に「竹潭亭乡野氏志古辰日記」を附錄す。

◎松浦竹四郎の傳記は「假寢年代記」の下にあり。

のつしやふにつし 納紗布日誌 一卷 松浦竹四郎

のなかかい 野中家系 本一卷

野中清永より野中清七兄弟に至る、土佐國同家の

系圖なり。「土佐國群書類從」に收めらる。

のなかしかでん
野中氏家傳　本朝一卷　野中豊之丞

祖先中安兵部少輔より數代の祖先書なり。寶曆十三年癸未(一七六三)四月、支配山口兵庫に差出したるものなりといふ。野中氏は二百石の士にしてもと中安氏なり。

ののみやさいしやうさだもときやうのき
野宮宰相定基卿記　本朝一卷　野宮　定基

烏帽子太刀の故實を記したるもの。盖、本書は新井君美の問に答へたるものにして、「新野問答」の抄錄ならんと云ふ。寶曆十一年辛巳(一七六一)九月の奥書あり。

◎野宮定基の傳は「有職聞書」の下にあり。

ののみやじふばんうたあはせ
野宮十番歌合　本朝一卷

天祿三年壬申(九七二)九月二十八日、村上天皇の皇女規子內親王家の歌合にて、和泉寺原順の判なり。

ののやずゐひつ
野乃舍隨筆　一卷　大石　千引

著者の假名隨筆。日本紀、大友皇子等の目より、椎の歌、學問等の目に至る七十餘項多くは考證物なり。文政三年庚辰(一八二〇)の自跋、同年知非齋主人の序あり。

◎大石千引の傳は「言元梯」の下にあり。

のぶかげずゐひつ
信景隨筆　本朝二卷　天野　信景

著者の雜事隨筆なり。「鹽尻」の零本なるべし。卷數等に次第なきが如し。

◎天野信景の傳は「牛頭天王辨」の下にあり。

のぶすけせんき
信輔宣記　本朝二卷　平　信輔

此の書は著書の摘要日記にして、十數項を記せり。

◎平信輔は弘安八年乙酉(一二八五)右大辨となり、治部卿、藏人頭、參議、右大辨如等となり、從二位に進めり。

のぶたねきやうき
宣胤卿記　本朝二十三卷　中御門宣胤

文明より文龜までの頃の記錄。就中、文明十二年庚子(一四八〇)十月二十一日より十二月十四日まで、禁中に於て兼俱卿日本紀講莚の事ありし次第を詳記せり。

◎中御門宣胤は從一位明豐の子にして、嘉吉三年癸亥(一四四三)權大納言從一位に進む。文學あり、永正八年剃髮して乘光と法號せり。永正八年庚申(一五〇八)十一月、年八十四にて薨ぜり。

のぶちかせんく
信親千句　一册　服部　信親

著者の俳諧千句なり。編述の年時を記さず。著者服部信親は江戶の住人にして、勘左衛門と稱す。

のぶつなき
信綱記　本朝一卷　大島　豐長

松平伊豆守信綱の事蹟言行を輯錄したるものなり。開卷に信綱の傾覺に關すること三十四項を掲げ本文に入りて一生の事歷を記し、年譜を掲げ、次に置計三十七項を列載す。延寶五年丁巳(一六七七)編者の奥書あり。

◎大島豐長は左源太と稱し、松平伊豆守信綱が近侍の士なり。寬永十四年丁丑(一六三七)肥前島原の戰に信綱に從て拔群の功あり。信綱死して後は、其の子輝綱、孫晴綱等に歷仕せりといふ。

のぶつなこうげんかうろく
信綱公言行錄　本朝四卷

松平伊豆守信綱の德川三代將軍家光に仕へて。萬事才幹ありし事實を記したるものにて、內題には「非語機志錄」を記せり。

のぶともずゐひつ
信友隨筆　三卷　伴　信友

著者の見聞隨筆なり。「百萬塔」に收むるところは、除去したる數條もあり。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

のぶながき
信長記　本朝十五卷　太田　牛一

永祿十一年戊辰(一五六八)より、天正十年壬午(一五八二)に至る織田信長の事歷を、一年一卷づつに

記述したるもの。一名を「安土記」といふ。寬延三年庚午(一七五〇)其の奥書に「信長記全部十五卷は、世に流布の本にあらず、太田和泉守牛一自筆の正本を以て、一字を遺さず書寫さしむ。盖し文字の疑少からずと雖も、猶記を改むるに忍びず、其の中、最も疑ふべき所は、傍に是歟本の儘と註す。來だ皆て類本あるべからず、努々他見することなかれ」云云とあり。大久保忠教の「三川物語」には本書を評して「信長記を見るに僞多し、三が一は有る事なり、三が一は似たる事なり、三が一は跡かたもなき事なり。信長記を作りたるもの、我が最貳の者、我が智惠の有まゝに能く作りたるものなり」云々として、多くの謬誤を指摘せり。天正十五年丁亥(一五八七)著者八十四歲の時の記なりといふ。

◎太田牛一は和泉守と稱す尾張國春日郡の人にして、織田家に仕へて、信長の右筆なりしが、後豐臣家に仕へたり。著書は本書の外に太閤記、天正記等あり。最も晚年(慶長五年庚)の作なりといふ。

のぶながき
信長記　十五卷　小瀨　道喜

太田牛一の「信長記」を敷衍し、省略し金櫃に文飾を加へて版刻したるものなり。卷數は原本に從ひて、永祿十一年戊辰(一五六八)より、天正十年までな一年一卷づつとせり。八册に印行す。

◎小瀨道喜の傳は「太閤記」の下にあり。

のぶながきしふい
信長記拾遺　十卷　秋里　籬島

織田信長の記事、大阪御堂神創事以下の事績を記す。安永五年丙申(一七七六)より四年に渉りて、河內和泉等なる歷代御陵墓を巡拜したる時の紀行及び和歌を載せたるもの。卷首に「たづねゆかん千代の古みちもあれはてゝ、しらぬ野山の數をそする」と云へる歌を掲げたり。題意の在る所を知るべし。文久二年壬戌(一八六二)著者の奥書あり。「やまと叢誌」に收めらる。

◎伴林光平の傳は「於菟穗草」の下にあり。

のぶひできやうみけうしよあん
宣秀卿御敎書案　本朝一卷　中御門宣秀

文明年間より明應年間に至る、敎書案を集錄したるもの。慶安元年戊子(一三〇八)應物堂無跡の序あり。

◎秋里籬島の傳は「近江名所圖繪」の下にあり。

奥書あり。

◎中御門宣胤は宣胤の子にて、從二位權大納言たり。享祿四年辛卯(一五三一)七月薨ぜり。

のべたかりやくき
延岡略記　二卷

此の書は一名によりて「阿賀多視」の下に解題せり。

のぼりつる
のぼり鶴　一册　法　濟

此の書は著者が俳句の集。寬永元年甲申(一六二四)著者が俳句の集。寬永元年甲申(一六二四)出版。著者法濟は江戶の俳人なり。

のやまぐさ
野山草　五卷　橘　保國

草花彩色畫集なり。各種とも說明せり。畫工保國、彩色長谷川眞信、彫工田中忠治にして、寬曆五年乙亥(一六五五)刻成す。

◎橘保國は大阪の人。守國の男にして、狩野派の畫を善くし、法橋に敍せらる。

のやまのなげき
野山のなげき　一卷　伴林　光平

安政三年丙辰(一八五六)より四年に渉りて、河內和泉等なる歷代御陵墓を巡拜したる時の紀行及び和歌を載せたるもの。卷首に「たづねゆかん千代の古みちもあれはてゝ、しらぬ野山の數をそする」と云へる歌を掲げたり。題意の在る所を知るべし。文久二年壬戌(一八六二)著者の奥書あり。「やまと叢誌」に收めらる。

◎伴林光平の傳は「於菟穗草」の下にあり。

のりあひばなし
乘合噺　五卷

種々人の氣質を評判したる滑稽談を記したるもの。大飯小喰、愚編才貧、姑嫁紛々、上戶下戶、醉客鵬妓、醫家兩方、蒙衆一對、佛說儒經、虛實合評等の項目あり。寬保三年癸卯(一七四三)の作なり。著者は東道軒と記せり。

のりかたのしよ
乘方書　本朝一卷

弓馬放置の書にて、馬術馬具の式法を略述す。弓馬叢集」の中に收む。

のりとかい
祝詞解　本朝五卷　賀茂　眞淵

延喜式第八卷の祝詞を註解したるもの。內題には「延喜祝詞解」と云へり。卷一に一章、卷二に八章、卷三に一章、卷四に十五章、卷五に二章ありて、考證解釋頗る叮嚀なり。延享三年丙寅(一七四六)九月の自序あり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

のりとかう
祝詞考 三卷 賀茂 眞淵

是れも亦た延喜式の祝詞を考解したるもの。著者晩年の作。本書は前著「祝詞解」を考訂したるものにして、其の注解頗る詳密を加へたり。明和五年戊子〔二四二八〕の自序、寛政十二年庚申〔二四六〇〕荒木田久老の跋あり。

◉賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

のりとかう
諄辭考 寫本 二卷 賀茂 眞淵

版本「祝詞考」と同じ。書法等多少の異同あるを見れば、該書の原稿に屬するものなるべし。

◉賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

のりとぐい
祝詞愚意 一卷 座田 太氏（ヒロウヂ）

祝詞式中の語句を抄出して、解釋考證したるものなり。嘉永五年壬子〔二五一二〕の講義なり。著者座田太氏は賀茂姓にして、上賀茂の社家なり。

のりとしきりやくちう
祝詞式略註 寫本 一卷 小野 高潔

祝詞式を漢文にて略註したるもの。文政元年戊寅〔二四七八〕五月の著なり。

◉小野高潔の傳は「歳時記三湖草」の下にあり。

のりとしさたぶみ
詔刀師沙汰文 寫本 一卷

元弘二年壬申〔一九九二〕伊勢外宮の禰宜、内外兩宮を兼行する如何につきて爭論したる時の沙汰文なり。

のりとせいかい
祝詞正解 二卷 青柳 高鞆

延喜式中の祝詞を解釋したるものなり。頗る簡易にして普通の初學者に最も便益なり。

◉青柳高鞆は下總國香取郡滑川村の人にして、通稱を建之助といふ。平田篤胤の門に古學を學び、權田直助に醫を學べり。明治維新の際、王事に奔走し、彼の足利三代の木像を三條磧に梟示したる一人なり。其の罪によりて猿野藩に幽せらる。後、東京府、神祇官等に仕へ、住吉の少宮司等に任ぜられたり。本書の外に「古事記兩傳抄」の著あり。

のりとせいくん
祝詞正訓 二卷 平田 鐵胤

「延喜式」祝詞の讀方を示さんために、文の傍に片假名にて正訓を附したるもの。安政五年戊午〔二五一八〕高玉安兄の跋あり。

◉平田鐵胤は、篤胤の養子なり。明治元年神祇官判事となり、今上天皇の侍講となり、尋で大學大博士となり、大敎正となる。明治十三年庚辰〔二五四〇〕十月十五日、年八十二にて歿す。

のりながたくうたあはせ
範永宅歌合 寫本 一卷

野花、小鷹狩、駒迎、十五夜月、秋田、露、雁、霧、鹿、擣衣の題にてよめる十番歌合なり、宮若乳母、小輔師、成元、回元、小乳母、式部、五節君等の作なり。「續群書類從」卷四百十二、和歌部第四十七に入る。

のりのはな
法の花 三册 松 嵜 軒

著者の俳諧集なり。寛文十三年癸丑〔二三三三〕三月編輯す。著者松嵜軒は僧なり。

のりのむち
法の策 一卷 僧 蓮阿

病中報恩の爲めにとて、第十八世大法主の安心領解の文の文字を各歌の頭に置きて讀成せる百數十首の和歌なり。弘化三年丙午〔二五〇六〕出版して施本にしたるものなり。

◉蓮阿は舜善と字し、慈敬院と號し、澄泉精舍第十二世の住たり。

は

はいあくしゆぜんろく
廢惡修善錄 三卷 僧 松磬

日蓮宗徒が淨土宗其他を罵倒するを返破したるものなり。言論嘲罵に趨りて穩實なる論究に乏し。正德三年癸巳〔二三七三〕の著なり。

◉松磬は淨土宗鎭西派の僧にして、攝津坂城大善寺に住したり。本書の外に翻迷開悟集三卷、血盆經和解七卷、略論詳解二卷、淨土列祖傳二卷、諸文故事要解三卷等を著せり。

ばいあんこひつでん
梅庵古筆傳 寫本 一卷 梅 庵

天智天皇の御宸筆以下、諸家の古筆を傳記したるものなり。「續群書類從」卷九百十九、雜部第六十九にあり。

はいいうゐだん
俳優異談 寫本 一卷 河竹 其水

俳優の逸話數件を錄したるもの。面白かりし昔話、變生女子の話、隱里へ迷ひ往し説、弱よく剛を制す等の目あり。安政六年己未〔二五一九〕豐芥といふもの、水翁にかりて寫せる由を記す。

◉河竹其水は江戸日本橋なる商家の子なり。通稱を吉村新七といふ。五世鶴屋南北に學び、勝諺藏といひ、後二世河竹を襲ぎ、更に斯波晋輔と改め、芳芳また其水と俳號し、最後に古河默阿彌と號せり。明治二十六年癸巳〔二五五三〕一月二十二日、年七十八にて歿す、淺草源通寺に葬らる。

はいいうかう
俳優考 寫本 一卷 新井 君美

外國俳優の考より、本朝俳優の起源沿革、猿樂狂言等の事までを考證せり。六代將軍家宣に進めたるものなり。

◉新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はいいうきじんでん
俳優畸人傳 四卷 立川 焉馬

市川壽美藏、松本幸四郎、尾上榮三郎、市川白猿、坂東三津五郎、岩井杜若、岩井紫若、中村芝翫、關三十郎、中村富祿、嵐冠十郎、尾上菊五郎、岩井半四郎等を傳したるもの。天保四年癸巳〔二四九三〕自序中に、「前の談洲樓焉馬の撰みし歌舞妓年代記は、寛永の初より文化まで、ふた百近き年の間の俳優を記せり、はた八文舍自笑の撰集あまた有り、其の證光委しく、此の道の龜鑑ともいふべきなり。されど、星うつり物換りて今の世に名高き俳優人を載せし集册なし、依て文政天保に名を得し人々の先祖より、世々の名繼ぎ人、今の世の何某としるし俳優の評は省きて、いつの頃より、此の道に入り、常に何を好み、かゝる事ありしなど種々のはなしをさへ加へつ。〔中略〕一卷に三たり四たりづつ出しぬ、なほ年々卷をつぎてやがて全からんと爲ず」云々とあり。

◉立川焉馬は江戸本所立川町の住。もと和泉屋和助といひて大工の棟梁なりしが、性來院本を好み、また狂歌を能くし、遂に戲作者として知らるゝに至る。烏亭、桃栗山人、榊綾齋、野見てうなごん鑿釿等の號あり、また五世市川團十郎と兄弟の約を結びて談州樓の號を讓らる。著書は本書の外に、「芝居年代記」十二卷あり、文政五年壬午〔二四八二〕六月二日、七十一歳〔或は八十歳といふ〕にて歿す。

はいいうさわ
俳優茶話 三卷 朧月亭有人

當時の俳優の奇談逸話を集錄したるもの。すべて十二條あり。本書はもと六十九齋夜半蟲の原稿ありしを補綴したるなり。市紅庵三猿の跋あり。

はいいうすゐこでん
俳優水滸傳 九卷 鶴屋 南北

江戸當時の俳優扮裝の圖、脚色劇場等の大槪を記したるもの。記事は南北、畫は歌川國貞の手に成る。

◉鶴屋南北は初代南北の男にして、幼名を源三郎、後ち孫太郎と稱し、父の跡を襲で二世南北と稱し、演戲師たり。二世河竹新七、三世瀨川如皐等其の門に出づ。嘉永五年壬子〔二五一二〕正月、五十七にて歿せり。

はいいうむらさきげんじ
俳優紫源氏 三卷 八文舍自笑

京都大阪江戸名古屋等の當時俳優の聲評を記したる橫綴小册子。梅篤齋枝鶯、一鳳齋素朴等と共に編輯するところなり。弘化五年戊申〔二五〇八〕の版。

◉八文舍自笑のことは「役者綱目」の下にあり。

ばいいんいしよ
梅陰遺書 寫本 一册 大黑 梅陰

今川了俊の「難太平記」と、治部大輔義將朝臣の「竹馬抄」と、空識主の「公武大體略記」との三卷を抄輯したるものなり。

◉大黑梅陰は、江戸の儒者なり。通稱大黑屋幾次郎。其の先は伊勢の人。父は幸大夫といひて、俄羅斯國に漂流し、歸りて幕府吹上苑に言上したるものなり。梅陰は江戸に生れ、初、一商家の丁稚とな

りしが、性、讀書を好み、家主の補助によりて、遂に儒となり徒を敎ふ。學洛閩を宗とす。常に曰ふ。方今の學者、各門戶の見を持すれど、予の如きは雜學恐くは人の子を賊はん、只句讀を授くるのみと。業を請ふもの數百人に及べりといふ。母に事へて孝、主に仕へて忠。終身母の爲を思ひて妻を娶らざりしといふ。嘉永四年辛亥〔二五一一〕五月十三日、年五十五にて歿せり。

ばいうかう

梅雨考　寫本一卷

入梅出梅等の事實を說明したるものなり。著者年代共に詳ならざれど、寬政享和比の撰なるべしといふ。

ばいゑんきしやう

梅園奇賞　二卷　野里　梅園

古代の書畫器物紋樣等の圖を縮寫模刻したるもの。數百種あるべし。本居大平の跋あり。文政十一年戊子〔二四八八〕上梓す。

◉野里梅園の傳は「梅園草木花譜」の下にあり。

ばいゑんぎよふ

梅園魚譜　寫本三帖　野里　梅園

魚類を集めて圖譜す。文政八年乙酉〔二四八五〕の作なり。

◉野里梅園の傳は「梅園草木花譜」の下にあり。

ばいゑんきんぷ

梅園菌譜　一卷　野里　梅園

菌類を集めて圖譜す。文政八年乙酉〔二四八五〕の著にかゝる。

◉野里梅園の傳は「梅園草木花譜」の下にあり。

ばいゑんさいやくきかうづゑ

梅園採藥紀行圖繪　二軸　野里　梅園

著者採藥中の自筆圖畫にして、江戶近郊及び近國の山野を着色圖したるものなり。

◉野里梅園の傳は「梅園草木花譜」の下にあり。

ばいゑんさうもくくわふ

梅園草木花譜　寫本二卷　野里　梅園

本邦固有若しくは當時舶齎したる花樹草花百八十二種の精密彩色畫を輯錄したるもの。圖傍に大和本草、和漢三才圖繪、和名類聚抄、多識編等に據りて其の釋名を示せり。梅園は著者の號なり。本書二卷の收むる所、春の部に止れるは四季全稿に及ばざりしものならん。首卷には文政八年乙酉〔二四八五〕、次卷には天保十五年甲辰〔二五〇四〕の自序、其他阿部正精、河野中吉等の題字あり。

◉野里梅園は通稱四郞左衞門、毛利元譜といふ。梅園は其の號なり。大阪の町年寄にして文政天保の頃の人なり。水野忠邦〔越前守〕梅園奇賞といふ額を書きて贈りし事田鶴舍日記〔村田春門日記〕に見えたり。夙に博物の硏究を嗜みて、梅園奇賞、梅園魚譜、梅園採藥紀行圖繪、梅園蟲譜、梅園百花畫譜等を著す。

ばいゑんざつわ

梅園雜話　五卷　梅朧館主人

蕉堅道人細川右典廐を貶す、付妓女但馬籠島を放せし話より、一農夫の信義公聰を感ぜしむに至る雜話十一條を揭げたり。文政七年甲申〔二四八四〕出版す。

◉梅朧館主人の事は「續新齋夜話」の下あり。

ばいゑんししふ

梅園詩集　二卷　三浦　安貞

著者の作詩各體とも、類を分たず雜載せり。天明六年丙午〔二四四六〕の自序跋あり。

◉三浦安貞の傳は「五月雨抄」の下にあり。

ばいゑんそうしよ

梅園叢書　三卷　三浦　安貞

著者の諸論編を叢書したるもの。詩を說きて道に志す人に喩す、酒食欲の誡、生前死後の理等より、米に譬へて五倫の道を喩す施をなしまた施を受く等に至る凡そ四十九編あり。天明元年辛丑〔二四四一〕の自序あり。「百家說林」第六卷に收む。

◉三浦安貞の傳は「五月雨抄」の下にあり。

ばいゑんちうふ

梅園蟲譜　寫本一卷　野里　梅園

蟲類を網羅して圖譜したるものなり。文政年間の著なるべしと云ふ。

◉野里梅園の傳は「梅園草木花譜」の下にあり。

ばいゑんにつき

梅園日記　五卷　北　愼言

著者の考證隨筆なり。凡て百數項の雜事を考說す。

天保十五年甲辰〔二五〇四〕朝川鼎の序、西島長孫の跋、弘化元年甲辰〔二五〇四〕岸本豐流の序あり。

◉北愼言は江戶の人にして、菅原氏。字を有和といひ、通稱を宋根屋三右衞門といひ、靜廬、梅園、四當書屋等の號あり、屋根葺を業として其の棟梁となり、餘暇元木阿彌に就て狂歌を學び、網の破損針金と戲號せり。後專ら漢學を修めて當時に博識を以て知らる。著書は本書の外に、續古事談註、五雜俎訓瑩、水滸傳新釋、宇治拾遺物語抄、園の梅、蝴蝶の夢、嬰兒遊戲考、四書笑附譯、東鑑不審問答補正、譯語正僞、寬平以來公卿年表、俗語類譯、四時雜識、傷寒論後條辨解、靜廬雜抄、雪窓呵筆、梅園雜記、靜廬俗談等あり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕三月二十九日、八十三歲にて歿す。辭世あり。〔孫ひこに別るゝことはかなしくも、また父母に逢ふぞうれしき。〕

ばいゑんひやくくわぐわふ

梅園百花畫圖　二十三卷　野里　梅園

花譜十八卷、魚譜三卷、鳥譜一卷、菌譜一卷等を合したるもの。文政八年乙酉〔二四八五〕の撰なり。

◉野里梅園の傳は「梅園草木花譜」の下にあり。

ばいおうそういんくしふ

梅翁宗因句集　五卷　西山　宗因

著者の俳句を、四季に次第して編輯す。谷素外が、天明元年辛丑〔二四四一〕の版本に、追加、拾遺、後拾遺、後々拾遺等を加へて、文化二年乙丑〔二四六五〕發行せり。俳諧文庫第十八編「俳諧珍本集」にも收む。

◉西山宗因の傳は「大阪獨吟集」の下にあり。

はいかいあすならふ

俳諧あすならふ　二卷　越谷　吾山

俳諧初學者の付合參考として、部部勝地の事、用語の雅俗等を列擧したるもの。題號の意は、初學者席に臨で種々の材料に富まざる時は、花に立ち並ぶ深山木のやうなりといふ芭蕉の「寂しさや花のあたりの翌檜〔あすならふ〕」の句によりしといふ。安永八年己亥〔二四三九〕出版。寬政十二年庚申〔二四六〇〕の版。文化十四年丁丑〔二四七七〕の版等あり

◉越谷吾山の傳は「諸國方言物類稱呼」の下にあり

はいかいあはせ

俳諧合　六册

諸家の俳諧を集めて、北村季吟の判したるものにて、元隣の跋あり。明曆二年丙申〔二三一六〕七月、編輯したるものなり。

はいかいいつかう

俳諧一稿　一册　鈴木　清風

著者の俳諧集にて、貞享三年丙寅〔二三四六〕九月六日の編にかゝる。

◉清風のことは「いなむしろ」の下にあり。

はいかいいつくわんせう

俳諧一串抄　一卷　六平齋亦夢

俳諧の書にて、名は體用の元たる事、俳諧の作句に體格ある事、俳句の格は體詠に定むべき事、古今集の俳諧歌は翁の俳句の證とはならざる事、曾呂利新左衞門が滑稽の事、俳句を作る心得の事、翁の作句俳諧の字義より出る事、正當無名の事、萬物に序あること、翁俳諧の中興たる事、翁が成人の事、發句には必季節を用ふべき事、切字の事、二段切三段切の事、はなれといふ事、連句俳句差別の事、隱士三句を解く事、發句の魂といふ事、學は法によるべき事、題詠の部、境界の部、端書の部、名所の部、假格を隱す事、繹を用ふる句の事等の目あり。天保初年の版なるべしといへり。近年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」の中にも收めたり。

◉六平齋亦夢は名を那雄といひ、諸學に通じて越中富山に名を著せし人なり。子孫徽て俳諧に妙を得たりと。亦夢嘗て蚊の爲めに貌られず、一夜に千句を得たる事ありといふ。辭世に「かざりあれば元の住家へかへるなり」といひたるに、子民故、其の聲に應じて「あとはかはらぬ世々の月花」といひたりとぞ。

はいかいいつさいきやう

俳諧一切經　寫本一卷

元祿十三年庚辰〔二三六〇〕義仲寺に會合せる俳家丈艸、支考、正心、錦江、以下二百三十八人の詠を集輯したるものなり。白梅下木因の序あり。

はいかいいときりば

俳諧絲切齒　二卷　石橋　春耕

寶曆年中江東に方竟千梅と云へる蕉門の俳士あり、「筏纏輪」と云ふ書を作りて、元祿年間に竹亭法叟が著したる「なだまき」の非を正し俳學に疎きものを罵斥しけるが其の「筏纏輪」〔わくかせわ〕にも

誤謬少からずとて、之を論訂したるが卽ち本書「俳諧絲切齒」なり。寶曆十二年壬午(一七六二)北出彫の序あり。著者石橋春耕は浪華の人なり。

はいかいうもれぎ

俳諧埋木　一卷　北村　季吟

俳諧の非、六義、發句の切字、本歌の發句、手爾於葉、皮肉骨の俳諧、親句疎句、十體、其の他俳諧に關する事數項を說明したるもの。明曆二年丙申(一六五六)成り、延寶元年癸丑(一六七三)出版す。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

はいかいうもむものせき

俳諧有也無也關　一卷　松尾　芭蕉

俳諧正風の祕訣十八箇手爾葉以下の事を論定す。明和元年甲申(一七六四)出版す。一に「幻住庵俳諧有也無也關」と名づく。近年發行の俳諧文庫第十五編「續俳諧論集」の中にも收む。

◎松尾芭蕉の傳は「奧の細路」の下にあり。

はいかいうのづくり

俳諧瓜作　一卷　生玉　琴風

元祿時代の發句連句等を類集したるもの。琴風、扇雪、湖春、其角、嵐雪、擧白、不卜、其他の數十家あり。卷は曙、山は、柴は、心時めく物、木の花は、など清少納言の「枕草紙」の題に擬して類集せり。元祿四年辛未(一六九一)出版す。俳諧文庫第十八編「俳諧珍本集」の中にも收めたり。

◎生玉琴風は芭蕉の門人にして、槃羅架と號す。享保十一年(一七二六)二月七日、八十八にて歿す。

はいかいえのあはせ

俳諧繪合　二冊　菅谷　高政

俳諧繪合の集なり。元祿年中の編輯なるべし。

◎菅谷高政の傳記は「是天道」の下にあり。

はいかいえのうろく

俳諧懸能錄　一冊　平泉　鬼貫

著者の俳諧集にして、延寶七年己未(一六七九)の作にかゝる。

◎平泉鬼貫の傳記は「ひとりごと」の下にあり。

はいかいをがさ

俳諧小傘　一冊

俳諧付心指南の書なり。元祿五年壬申(一六九二)松春、未達の編輯したるものなり。

はいかいおくのちかみち

俳諧おくの近道　二卷　角鹿　齋鼠

俳諧發句等の趣意作法に就き項を分ちて親切に華授したるものなり。卷末には人の間に從ひ師傳のものその他略授くる旨を述ぶ。天保十四年癸卯(一八四三)の出版なり。

はいかいをんこしふ

俳諧溫故集　一冊　箕輪　蓮谷

古來の公家、武家、釋門、連歌師等の發句以下、諸家の發句を集めたるものなり。松永貞德の序、自跋等あり。延享五年戊辰(一七四八)出版す。近年發行の俳諧文庫第十編「元祿名家句集」中にも收む。

◎箕輪蓮谷は雷風庵、嘉祿齋、玉龍堂等の號あり。

はいかいかけい

俳諧歌觴　二卷　瀧澤　馬琴

當時名家の狂歌を集めたるものなり。文化十三年丙子(一八一六)發行す。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

はいかいかふしふ

俳諧家譜拾遺　一卷　青木　十口

俳家福田雁石、早川文名、野村北梅、望月宋屋、中川貞佐、黑瀨去舟、山中梅麿、松木笠秋、板羽紙隱、貞六堂乾峯、堀內吟霞、松木應隱、神澤杜口、中村閑石、中井雞院、中井仙經、山本普求等の系譜なり。二十年前に於て京師調宗の傳系を作りし拾遺なりといへり。下卷には各辭世の秋吟を揭げ、その歿年、年齡等を記し、更に點業の受廢、調宗家の發句等を揭げたり。寬政九年丁巳(一七九七)出版す。

◎青木十口は始の名を佐德といひ、後ち十口に改め、悲心齋また滿古閑人と號す。京都綾小路通に住せり。著書は本書の外に、後拾遺家譜、四季出會、旅亭記、秩穗、いとゞがき、生補箋、禽獸辨、行事錄、陸のまひ、閑居友等あり。寬政三年辛亥(一七九一)七月二十一日、六十九歲にて歿す。

はいかいからん　田邊宇武

はいかいきよせづかう

俳諧季寄圖考　二卷　梅枝軒來鶯

各種の植物を列擧し、四季に分ち圖示し、俳諧の資料に供したるものなり。仁孝天皇の天保十三年壬寅(一八四二)出版す。著者梅枝軒來鶯は別に芝

翠と號せり。

はいかいきんしうだん

俳諧錦繡緞　二卷　板本　其角

元祿十年丁丑(一六九七)他の諸集中なる俳諧及び小品文等を集めて版したるものなり。近年發行の俳諧文庫第四編「其角全集」にも收む。

◎板本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

はいかいくせのと

俳諧九世の戶　一卷　其日庵錦江

八世錦江翁々翁が、第九世の相續を委ねしとき、遠近諸俳家より送りし賀句を集錄せるものなり。天保十四年癸卯(一八四三)九月の編。同年三世素仙堂の淚文序あり。

◎其日庵錦江は俳人にして、九世其日庵と稱す。別に「俳諧來の露」一卷をも著せり。

はいかいぐわふしふ

俳諧畫譜集　二卷　五岳

種々千百の略畫を揭げ、古句を其の上に書き出でし畫譜なり。五川誌と共に攜ふるところなり。天保七年丙申(一八三六)の自序あり。著者五岳は黃檗と肩書せり。

はいかいこがくだいきうせう

俳諧古學臺褒抄　二卷　樞之本北元

此の書は一名「古學截斷字論」の下に解題せり。

はいかいごるん

俳諧御傘　五卷　松永　貞德

俳諧用の語句をいろは順に列擧して、各性質、用法、忌禁等を說示したるもの。御傘の名は、此の一本あれば、あめが下にまたさしあひすゝ人あるまじの心にて名け、こゝろさんと音讀せりとなり。萬治三年庚子(一六六〇)八月の編なり。

◎松永貞德の傳は「歌林雜話」の下にあり。

はいかいこじだん

俳諧古事談　五卷　菊岡　沾凉

俳家芭蕉翁、其角、嵐雪その他當年の名句を列擧して、和漢の故事を解し、一々其の出典を正し四季に分ち細目して詳說したるものなり。

◎菊岡江戶砂子」の下にあり。

はいかいごじふさんつぎ

俳諧五十三次　二卷

東海道五十三次に役者畫を配したるものなり。嘉永五年壬子(一八五二)の自序をのす。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

はいかいさいじき

俳諧歲時記　四卷　瀧澤　馬琴

春夏秋冬雜と類聚して、俳諧を味む人の知るべき四季の詞の意義、神祭佛事公事等の故實を示し、斯道初學の人の案內に供したるものなり。發端に俳諧の字義、連歌權輿の論、俗談平話の辨の三編あり。享和元年辛酉(一八〇一)の自序をのす。

◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下にあり。

はいかいさいじきしをりぐさ

俳諧歲時記栞草　五卷　藍亭　青藍

曲亭馬琴の著「俳諧歲時記」を增補したるもの。增補したる所は主に草木鳥獸等に關するもの多く、本書は詞の頭字によりていろは順に類纂したり。卷首に俳諧の字義、俳諧之連歌權輿、俳諧の大意等の事を略辨したり。孝明天皇の嘉永三年庚戌(一八五〇)の自序を載せ、同四年上梓す。明治二十五年活刷に附したる本あり。著者藍亭青藍は俗稱を金兵衛と云ふ。

はいかいさくいはやでんじゆ

俳諧作意早傳受　一卷　平橋庵蔽氷

俳諧作法の一般を說示したるものなり。一名を「俳林寶材」とも云ふ。下卷に梅の句千韵を附錄せり。甲北散人春澤の序あり。

◎平橋庵蔽氷は東小原甲州に住する俳人にして、門琴の門弟なり。

はいかいさくしやのなよせ

俳諧作者の名寄　一卷　朝江　種寬

俳諧作者を名寄して、同學者の參考に便したるものなり。編輯の年時は詳ならず。

◎朝江種寬のことは「俳諧調友」の下にあり。

はいかいさんご

俳諧參語　一卷

俳人爲大、百化二家共著の俳論書なり。卷末に「二人のうちがほしき事の多ければ、或日師の間をうかがひて聞ふに答へをかきつけおきしが、同好の人にも見せばやと、やがて本にけづれるなり。文化元年(一八〇四)十二月、爲大、百化」と記せり。近

年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」中にも收む

はいかいさんじふろくかせん
俳諧三十六歌僊　一卷
其角、嵐雪、許六、以下名家三十六人の圖像傑作を列擧したるもの。寛政十一年己未(一二四五九)の序を附して、同年出版す。書林獻下堂の編するところなり。

はいかいさんぶせう
俳諧三部抄　三册　岡西　惟中
俳諧の書にて、延寶五年丁巳(一三三七)霜月の編にかゝる。
◎岡西惟中の傳記は「一時軒蘆葦」の下にあり。

はいかいしいう
俳諧詞友　三册　朝江　種寛
俳諧參考の書にて、寛文八年戊申(一三二八)十月の編にかゝる。卜圃の跋あり。
◎朝江種寛は寛文頃の俳諧者なり。本書の外に俳諧大概、續詞友集、俳諧作者の名寄等あり。

はいかいじゐん
俳諧次韻　一卷　松尾　芭蕉
桃青、其角、才丸、揚水の次韻にて七百五十韻、二百五十句なり。延寶九年辛酉(一三四一)出版す。
◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

はいかいしちぶしふ
俳諧七部集　十二卷　松尾　芭蕉

冬の日、春の日、あら野、ひさご、炭俵、猿蓑、續猿蓑の七部を稱して、世に「俳諧七部集」といへり。多くの著書中殊に此の七種を撰びたるにつきては、風國が元祿十一年の泊船集の序に、「連歌は冬の日といふ五歌仙に盡き、ひさご、猿蓑出來て新しき風流を起し、正風の腸を見せ給ひ、忽に千歳不易の姿、一時流行の變格明らかなりしみをさぐり得給ひしほ、炭俵、續猿蓑是なり」と。盞し變風なる見安からしめんがために、又正風の道を開かんがために、門人を拔擢して撰集したるものなるべしといふ。
◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

はいかいじつぴやくゐん
俳諧十百韻　一册
江戸談林派の俳諧集なり。梅翁の卷頭にて、「されたる歌に談林の木あり梅の花」等の句あり。延寶四年丙辰(一三三六)九月の編にかゝる。

はいかいしなよせ
俳諧師名寄　一册
俳諧師の氏名を列擧したる編輯したりしかを知らず。

はいかいじふさんでう
俳諧十三條　一卷　櫻井　吏登
著者の遺稿を明和四年丁亥(一七六七)に編輯したるもの。後に珠阿彌と改む。落葉庵ま
四條中極祕の一を除きて十三條としたるものなり。此十三條は十
といふ。近年發行の俳諧文庫第十七編「奨太全集」

申にも收めたり。
◎櫻井吏登の傳は「俳諧野ざらし」の下にあり。

はいかいじろん
俳諧十論　二卷　各務　支考
俳諧傳、俳諧道、俳諧德、虛實論、姿情論、俳諧地、修行地、言行論、變化論、法式論の十編を收めたり。每條例、蓉三の評あり。本書は元祿四年辛未(一三五一)芭蕉翁と斯等の事を論じたる筆記なりといふ。正德四年甲午(一三七四)版行す。末に享保四年己亥(一三七九)獅子房蓬二の十論戀あり。近年發行の俳諧文庫第八編「支考全集」の中にも收めたり。
◎各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

はいかいじろんしやぎ
俳諧十論衆議　卷一卷　信　杖　房
獅子庵の「俳諧十論」に就て同傳と共に評議したる所を筆錄したるもの。明和三年丙戌(一二四二六)五月に成りたり。

はいかいじやうぜつろく
俳諧饒舌錄　二卷　元木阿彌
手爾乎波の性質用法、係結等を詳しく說明せるものなり。一々俳諧の實例につきて符示解釋せり。文化元年甲子(一二四六四)冬烘居士の序を附して同年出版す。
◎元木阿彌は小川奎制の別號にて、江戸の狂歌師渡邊崑松の狂名なり。後に珠阿彌と改む。落葉庵また知惠の內子と別號す。通稱を大野屋喜三郎といひ、京橋北紺屋町に湯屋を業とす。嘆年剃髮して墨

堤に住し、專ら狂歌俳諧を以て自ら娛めり。文化八年辛未(一二四七一)六月二十八日歿す、年八十一。深川萬年町正覺寺に葬れり。

はいかいしよ
俳諧書　一卷　瑞　馬
芭蕉、其角、素堂、嵐雪、其他十餘名の俳諧百七十餘句を集めたるもの。自詠のも雜れり。寛政十一年己未(一二四五九)自序を載せて上梓す。

はいかいしよがくせう
俳諧初學抄　一册　齋藤　德元
俳諧の式目、季寄等を記したるもの。某君の命によりて撰したりといふ。寛永十八年辛巳(一三〇一)出版す。江戸に俳書の版刻せられたるは實に此の書を以て嚆矢とす。近年發行の俳諧文庫第三編「芭蕉翁以前俳諧集」下卷の中にも收めたり。
◎齋藤德元の傳は「伊豆走湯俳諧」の下にあり。

はいかいしよくげふづくし
俳諧職業盡　二卷　茶　靜
四季の類を分ち、鍾馗、茄子苗作、鯰商、抱鯉、鹽鯛鬼鳴突、線香賣、狐販等三十六種の家職の風態を圖示し、且其の大要を說明し、各圖解の次に左右對句合十條首づつを記したるもの。天保十三年壬寅(一二五〇二)坎窩山賢の跋、樋守部の序あり。

はいかいしよもやくるく
俳諧書籍目錄　卷二卷　筒井　重勝
永正十一年甲戌(一二一七四)の編輯にかゝる山崎宗鑑の「犬筑波集」より始めて、元祿五年壬申(一二三五二)の當年に至る、諸家古來の俳諧書凡そ五百餘種を目錄したるもの。書名は年代の順に列記、册數、年代撰者等を記し、往々其の書の序跋者をも掲げたり。卷末に、阿誰、盲水の兩吟三十六句を添へたり。元祿五年三月十七日の自序あり。同十五年京寺町井筒屋版刻の奥書をなせり。今見る所は、其の版本を寫したるものなるべし。末葉に俳書の出版目錄「寶貳段付」さへ擧げたり。
◎筒井重勝は京都の俳人にして、藤の柳塵と稱し、阿誰軒と號せり。池西言水等と友たりし由見ゆ。著書は、此の外に「書籍拾遺二册あり。

はいかいしんじつかるゐだいしふ
俳諧新十家類題集　卷四卷
俳諧堂主編
穆堂、完來、成美、道彦、奇淵、月居、乙二、士朗、升六、若虹、以上十家の俳諧を集雜して類題したるものなり。文化九年壬申(一二四七二)賀蔑季鷹の序、來記あり。本書は阿里圓六轡と共に編するところなり。著者俳諧堂主編は阿州豐浦の人にして、奇淵の門人なり。

はいかいじんぶつべんらん
俳諧人物便覽　卷二卷　三浦　若海
古來の俳諧家數百家を網羅し、其の名いろは順に排して、各名下に貫籍、門流、年月等を略示せり。

はいかいじんめいかう
俳諧人名考　卷一卷
冬の日集作者、春の日集作者、荒野集作者とやうに區別して、俳諧者の名を掲げ、其の下に略傳を記したる小册子なり。

はいかいじんめいろく
俳諧人名錄　二卷　惟　章
當時の俳家四百八十餘人をいろは順に羅列して各人の發句數首づつを錄し、其の住所別號等を首書したるもの。天保七年丙申(一二四九六)の著なり。著者惟章は東都の人なり。

はいかいすゐでん
俳諧水滸傳　卷十卷　僧　空阿
俳道名家の逸話雜事を記したるもの。試に卷一、卷二の目錄を示せば、連俳品定出入傑、守武感聖廟神夢、聖代文學俳諧興、立甫重賴遊洛西、西園解壁畫之意、宗鑑與梅千西園雪柴炊魚留西園、雪川海渡開雲帆等なり。この體裁あり水滸傳と名くる所以なるべきか。卷十までに凡て四十餘目あり。仙臺古梁といふものの序あり。
◎空阿は俳人にして、名を如日といひ、還月、照空等の號あり、文化九年壬申(一二四七二)九月十五日、門人等相謀りて碑を江戸深川開巢堂子院不動院中に建てたり。

はいかいすゐのつゆ
俳諧末の露　卷一卷　其日庵錦江
其日庵泰々の發句俳文を集めて、其の遺弟に頒ちしものなり。著者其日庵錦江のことは「俳諧九世の戸」の下にあり。

はいかいすてぶね
俳諧捨舟　四巻　田中　常矩
俳諧の集なり。寛文十三年癸丑(一六七三)七月編輯する所にかゝる。
◎田中常矩の傳記は「れざめ」の下にあり。

はいかいせきすまふ
俳諧關相撲　三册　未達
江戸大阪等の諸家の俳諧集なり。貞享前後の編なるべし。

はいかいせんく
俳諧千句　二册　野々口立圃
著者の俳諧千句にして、承應二年癸巳(一六五三)八月編輯したるものなり。
◎野々口立圃の傳記は「なさな源氏」の下にあり。

はいかいぜんぶんしふ
俳諧前文集　本朝一卷　胡燕
俳諧前文の書例を集錄したるもの。文政二年己卯(一八一九)の自序あり。

はいかいそが
俳諧曾我　二册　白雪
俳句の集なり。元祿十二年己卯(一六九九)の編にて、京都井筒屋の發行したるものなり。
◎白雪は三河の人なり。別著に「三河小町」あり。白雪は「參河國二葉松」の著者太田長孝の俳號にはあらざるか、疑を存す。

はいかいそのからかさ
俳諧其傘　三卷　相澗　貞山
江戸宗匠中の評點規掟折越を嫉ふ二句去三句去及び句數等を詳記したるもの。蓋し當時宗匠の指合吟味區々にして、評點一致せざるより、門人または遠人の名がまゝに「連歌の新式」「無言抄」等を祖として、當時の標的を示したりといふ。元文三年戊午(一七三八)の自序、城南、貞習等の跋ありて橫本三册に作れり。
◎相澗貞山は松永尺山の門に學びて俳諧に長じ、潮月亭また蓋丸舍とも號せり。京都より江戸に移りて桶町に住す。著書は本書の外に、手燭灯、ひらつゝみ、江戸名所集、圃機抄、親盞等あり、寛保元年辛酉(一七四一)歿す、年七十餘。

はいかいだいいちぎしふ
俳諧第一義集　二卷　鼻中庵三力
正風體俳諧の主眼本來の面目を說明したるものなり。一々鼻祖芭蕉の名句を引きて證す。天明三年癸卯(一七八三)の自序、相樂山樵子の跋あり、寛政二年庚戌(一七九〇)出版す。

はいかいたいがい
俳諧大概　一册　朝江　種寛
俳諧に關する一般の要件を述べて、同學者の參考に便じたるものなり。編輯の年時は詳ならず。
◎朝江種寛のことは「俳諧詞友」の下にあり。

はいかいたなさがし
俳諧棚さがし　一卷　大島　蓼太
資曆十四年甲申(一七二四)正月八日より、明和三年丙戌(一七六六)二月八日までの講說を、門人愚得坊凪腹が筆錄したる俳論なり。近年發行の俳諧文庫第十七編「蓼太全集」の中にも收めたり。
◎大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

はいかいたまもしふ
俳諧玉藻集　一卷　谷口　蕉村
關女以下女流諸家の俳諧を集めたるもの。千代尼の序あり。文政五年壬午(一八二二)出版す。近年發行の俳諧文庫第十二編「蕪村曉窓全集」中にも收む
◎谷口蕉村の傳は「芭蕉翁付合集」の下にあり。

はいかいたんぶくろ
俳諧團袋　一册　北條　團水
西鶴、淵瀨との兩吟、言水、我黑、淵瀨、信德、團水の五歌仙、元旦發句集等を編集したるもので、元祿三年庚午(一六九〇)の撰なり。近年發行の俳諧文庫第三編「芭蕉翁貝前俳諧集」の下卷中にも收む。
◎北條團水の傳は「新永代藏」の下にあり。

はいかいちくりん
俳諧竹林　一札　西鬼
著者の俳諧集にして、七吟なり。延寶九年辛酉(一六八一)の作にかゝる。

はいかいつうぞくし
俳諧通俗志　二卷　兒島　胤矩
俳諧の詞ないろは順に列擧して、各相異せる去嫌を示したるものなり。享保元年丙申(一七一六)の

作。同二年渥美椎本才麿の序あり。

はいかいつくばはうく
俳諧筑波法錄　本朝一卷　松尾　芭蕉
日本連歌の起原を述べ、四季の詞、雜の詞、戀の句等につきて、說明するところあり。東山天皇の元祿六年癸酉(一六九三)門人森川許六に傳授したるものなりといふ。
◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

はいかいつけあひこかざみ
俳諧附合小鑑　一卷　大島　蓼太
俳諧付合の書にて、「三物之事並たゞ一盃の事」より、「假名遣の事」に至る凡て十七條を論記す。安永四年乙未(一七七五)雪屋親牛家の序あり。同人が校刻する所なり。近年發行の俳諧文庫第十七編「蓼太全集」の中にも收む。
◎大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

はいかいつねのすがた
俳諧庸姿　一册　菅谷　高政
著者の俳諧集一札なり。寶元天皇の延寶七年己未(一六七九)九月の作にかゝる。
◎菅谷高政の傳は「是天道」の下にあり。

はいかいてうちん
俳諧手挑燈　一卷
連歌俳諧に用ふべき季節、祭禮、其の他種々の詞を類聚したるもの。卷首には俳諧の作法を略記し、末には作例の詠句を集めたり。

はいかいてとはせう
俳諧天爾波抄　六卷　富士谷成元
俳諧に用ふる、てにをはの意義用法等を說明したるもの。前著「あゆひ抄」の說に基きて口授したるを、酒井有國の筆記したるもの。文化三年丙寅(一八〇六)の著、皆川盤の序あり。整四年出版す。
◎富士谷成元の傳は「百人一首燈」の下にあり。

はいかいてんぐもんだふ
俳諧天句問答　一卷　大島　蓼太
當時の俳人、漫に我を高ぶるの弊多ければ、これを諷せんため、小說的に書き綴りたるもの。門人雪椿庵鳳足、安永二年癸巳(一七七三)の序を附し自ら校定して版行す。近年發行の俳諧文庫第十七編「蓼太全集」の中にも收む。
◎大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

はいかいどぎんしふ
俳諧獨吟集　一卷
宇武、眞德、立圃、令德、正章、重賴、梅盛、定清、季吟、安靜、林門跡、德元、幸和、一閑、卜養、玄札、昌琢、山石、如眞、ステ等の獨吟集を編纂したるものなり。橫綴一册に作る。

はいかいなぐさのほころび
俳諧和の綻　一卷
亡父芳澗堂雨峯の志をつぎ、其の追福の爲めにて招魂會の席上諸友の俳句を集て成せる俳集なり明和三年丙戌(一七六六)江戸山田窟翻山林、山和の亭に寓して認めたる序を掲ぐ。著者山和は甲斐國乙黑村の人にして、山林の門人なり。

はいかいなぐさめぐり
俳諧名知折　二卷　谷　素外
四季の草木生物等百七十餘品を圖し、之を題詠したる俳諧數百種を纂めたるもの。編輯は素外、畫は北尾重政の成す所なり。後桃園天皇の安永九年庚子(一七八〇)に作れる素外の自序あり。整年二卷一册に上梓す。
◎谷素外の傳は「龍の宮津子」の下にあり。

はいかいななくさ
俳諧七草　一卷　天來
梅室の俳諧を論難したるもの。附言の一に曰く、此書はもと室を憎みて著したるにあらず、年來わが教諭の趣とかれの行ふ處と異るを訝り、門人の間に聚じて答へ諭したるを、かく梓に彫らせる事に成りたり。其趣意は余の發端の文と、凋が書けける序の如し。由て雜談めきたるものゝ左次するほ、門下の會得し安からんが爲めなり」と。天保十一年庚子(一八四〇)春秋園の序、如春庵の跋あり。近年發行の俳諧文庫第十五編「續俳諧論集」の中にも收めたり。著者天來は雜波の俳人なり。

はいかいなぞかけ
俳諧謎懸　一册　安都
俳諧に關する謎語を集めたるもの。寛文八年戊申(一六六八)十月の編にかゝる。著者安都丹州の人なり。

はいかいななくるま
俳諧七車　五巻　平泉　鬼貫
著者自撰の句と文とを集めたるものなり。享保十二年丁未〔一七二七〕の自序あり。近年發行の俳諧文庫第十四編「蓼堂鬼貫全集」の中にも收む。
◎平泉鬼貫の傳は「ひとりごと」の下にあり。

はいかいにていき
俳諧耳底記　二巻　九十九庵風之
蕉門の俳人野坡の俳風を祖述したる俳論なり。千九十九庵支下の序あり。近年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」の中にも收む。
◎九十九庵風之は夙に蕉門に志あり、野坡親弟の俳人となり、後、膳所酒堂に隨ひ、本書も其の酒堂より聞きたる年來の聞書なりといふ。

はいかいのあそび
俳諧野あそび　一巻　櫻井　吏登
菫草小蝶な昧みたる發句を撰集し、客相伴、亭主等と分ちたり。元文二年丁巳〔一七三九〕の自序あり。
◎櫻井吏登は江戸の人。初め李嗣といふ。庵泉と別號す。俳人服部風雪の門に入りて、砌蔭し、二世雪中庵の號を繼げり、寶暦四年辛未〔一七六一〕六月二十五日歿す。享年未だ詳ならず。

はいかいのそうぞう
俳諧之條々　※一巻　中川　乙由
卷首に俳諧上の要事五條を掲げ、次に漫與と題して、朋友、乙由、支考、灰止、友來、唐廷、水甫の俳諧數十句を擧げたり。星山友來と共に編する所也。
◎中川乙由は芭蕉の末弟にして、有名の俳人なり。初め、伊勢山田の祠官にて慶德圃書といひたりしが、後、今の名に改め、梅我また碧林舍と號せり。支考と親交あり、當時に俳名を競へり。元文三年戊午〔一七三九八〕歿す。享年未だ詳ならず。

はいかいはじやけんしやう
俳諧破邪顯正　一冊
古流の見を以て、新派を攻撃したるもの。享保十八年庚申〔一七三四〇〕の作にかゝる。

はいかいはなだんす
俳諧花篭箪　一巻　大島　蓼太
本書は一名により「正花論」の下に解題せり。

はいかいはまをぎ
俳諧濱荻　一冊　野々口立圃
立圃と定親との兩吟俳諧にして、寛文十二年壬子〔一六七二〕七月上旬の編成なり。
◎野々口立圃の傳は「なさな源氏」の下にあり。

はいかいはるのた
俳諧春の田　二巻　越か目蜂歩
著者の俳諧集なり。部三條の逸にて大風屋磨吉といふもの花咲といふ標札を打て川柳幌または不倫俳諧の點者を業として一種の俳諧をなせるより、著者大歎してこれを辨駁するといふ、一名を「浩盤酒」といふ。天保十二年辛丑〔一八四一〕桑原平氣齋の序、さし出の磯の漁翁左平次の跋ありて、同年版行す。

はいかいひやくぐわさん
俳諧百畫贊　二巻　松尾　塊亭
百樣の畫を掲げて、俳諧の贅を揚げたるもの。畫は月窓谷世逸の筆。卷首に著者の小傳を載せたり。文化十一年甲戌〔一八一四〕岡風竹の序、意當比良の序、詩佛の題辭、風圭の後序、龜一樓主人の跋等あり、門人等の編輯して同十三年丙子〔一八一六〕出版するところなり。
◎松尾塊亭は隆弘といひ、三七と字し、風悟木雞子、欠伸子等の號あり。獅子庵（盈元坊）正統の俳諧に通じて世に知らる。

はいかいふうたいしふ
俳諧風體集　一冊　岡西　惟中
俳諧の書にて、延寶五年丁巳〔一六七七〕の編にかかる。
◎岡西惟中の傳記は「一時軒隨筆」の下にあり。

はいかいふかがはしふ
俳諧深川集　一巻　濱田　酒堂
此の書は一名「深川集」の下に解題せり。

はいかいふたみがひ
俳諧二見貝　四巻
春夏秋冬に分ちて、俳諧の熟語を集輯して、會席の用に供したるもの。細註を施して、集むること博く說明すること深し。安永九年庚子〔一七八〇〕松後の序、嘉永元年戊申〔一八五〇八〕養採其舟の凡例あり。本書は森々庵松後の監定、男金馬優松雨の編に鵠巢微翁の集註したるものなり。

はいかいほつくるかがみ
俳諧發句小鑑　一巻　大島　蓼太
發句案方の事、趣向をとる事、句に理屈をぬく事、初の字の冠の事、色字の事、吟嘆の事、手爾葉遣の事、一字褒貶の事、放題の事、乞食袋の事、古瀬の新水の事、撓の事、等類の事等を論述す。門人三駱が校定して、天明七年丁未〔一七八七〕發行したるものなり。近年發行の俳諧文庫第十七編「蓼太全集」の中にも收めたり。
◎大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

はいかいほつくるるだい
俳諧發句類題　二巻
諸家の俳諧を類題したること名の示すが如し。春の部に二百〇二題、夏の部に一百題、秋の部に一百〇三題、冬の部に九十七題あり。夷門、蓼阿、完龍、故山、完龍、嘯美、洞津連その他數百家の作なり。

はいかいまんぐわ
俳諧漫畫　一巻　爲永　春水
古今の俳句中より畫に適對すべきものを撰びて、畫と共に掲げたり。畫は溪齋の筆に成り、句は秋光庵主人撰すといふ。
◎爲永春水の傳は「いろは文庫」の下にあり。

はいかいみちづれ
俳諧道連　一冊　小谷　立靜
著者の俳諧集にして、寛文十一年辛亥〔一六七一〕十一月編輯したるものなり。
◎小谷立靜のことは「古今四季友」の下にあり。

はいかいみづひるし
俳諧水蛭　一札　佐竹　直親
著者の俳諧の集なり。平泉鬼貫の編したる「四瓜三ッ」に對する返事なり。

はいかいむごんせう
俳諧無言抄　七册
俳諧の書にして、奚淵の際士葉の作なりといふ。延寶二年甲寅〔一六七四〕三月の編。樵翁の序あり。

はいかいめいしよつけあはせ
俳諧名所付合　二册　重俊
俳諧學者の參考として、名所付合を集めたるものなり。寛文四年甲辰〔一六六四〕八月下旬編輯したるものなり。

はいかいもうぎう
俳諧蒙求　一册　岡西　惟中
俳諧學者の參考書なり。編述の年月日を明記せず。
◎岡西惟中の傳記は「一時軒隨筆」の下にあり。

はいかいもんだふ
俳諧問答　一册　森川　許六
去來の「贈晋子共角書」、許六の「贈落柿舍去來書」、去來の「答許六子問難辨」、許六の「再呈去來書」、許六の「俳諧自讃之論」、許六の「自得發明辨」、許六の「同門評判」等の文を收めたり。元祿十一年戊寅〔一六九八〕の編。寛政十二年庚申〔一八〇〇〕出版す。近年發行の俳諧文庫第五編「許六全集」の中にも收めたり。
◎森川許六の傳は「風俗文選」の下にあり。

はいかいゆきおろし
俳諧雪おろし　一巻　大島　蓼太
當時興行の延享二十歌仙を評論したるものなり。資暦元年辛未〔一七五一〕の自序及び吐月の跋あり。近年發行の俳諧文庫第十五編「續俳諧論集」の中にも收む。
◎大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

はいかいりやうぎんしふ
俳諧兩吟集　二巻　北村　季吟
季吟と野酔、平吉、宜春、友光、可全、政由、廉吉、周金等との連吟の俳諧を纂輯したるもの。就中、下卷のは和漢の連吟なり。萬治寛文の頃の咏なり。寛文四年甲辰〔一六六四〕六月上梓す。
◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

はいかいわだいもん
俳諧或問　一巻　石川　積翠
俳論の書にて、問答體に記せり。近年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」中にも收めたり。著者石川積翠は二世太白堂機隣の門人なり。

はいかいわたうさう
俳諧和唐才　一巻　氷　儿

俳諧の材料を季寄にして、列擧し唐詩和歌等に其の例をとれり。寛政七年乙卯〔二四五五〕の自序あり。著者氷几は浪華誹陣人郭蓮社と肩書す。今見るところは春の一卷なり。夏以下出版せられたりや否や詳ならず。

ばいかうえいぶつし

梅岡詠物詩 一卷 松村 延年

咏物の詩凡て一百首あり。支那高宗の乾隆三十七年〔我が安永元年にして紀元二千四百三十二年〕竹里汪鵬の序、同三十八年王亶望の後序あり。

◉松村延年は江戸の人にして、或は修して松延年と稱せり。子長と字し、多仲と稱し、梅岡と號す。始め徂徠學を主唱し、後詩歌に志し、晩唐の詩風を唱へたり。著書は本書の外に、樵者逃旨、梅翁詩鈔、駒谷芻言、漫遊詩紀、梅岡詠物百首、紫海紀行等あり。天明年間、五十四歳にて歿す。

ばいかうせんせいしふ

梅岡先生集 寫本六卷 松村 延年

卷の一に五言古詩、七言古詩。卷の二に五言律詩。卷の三に七言律詩。卷の四に七言律詩、五言排律、七言排律、五言六句律、七言六句律、六言律詩、六言絕句。卷の五に五言絕句、七言絕句。卷の六に七言絕句等を集す。安永七年戊戌〔二四三八〕門人紀南西況の序あり。六卷五册に寫傳す。

◉松村延年の傳記は「梅岡詠物詩」の下にあり。

ばいかうぶんしふ

梅岡文集 寫本十卷 松村 延年

著者の文を撰集したるもの。安永七年戊戌〔二四三八〕西況の序、竹里汪鵬の跋あり。

◉松村延年の傳は「梅岡詠物詩」の下にあり。

はいかおほけいづ

俳家大系圖 二卷 生川（ナルカハ） 正香（タヾカ）

本系圖に收むるところは、先づ俳諧中興の祖松永貞德の直弟八十一人の小傳を擧げ、次に高弟野々口立圃四世百十人。次に松江重賴四世の門人九十四人。鶴永井令德五世五十六人。高瀨梅盛五世四十三人。山本西武二世二十人。北村季吟三世五十六人。石田未得三世十二人。荻野安靜五世四十二人。高橋玄札弟子二人。正法寺成安門生四人。池田正式弟子二人。法樹院如友二世四人。椋梨一雪弟子四人。藤田貞兼三世、宮川松堅三世二十三人。半井卜養弟子三人。吉田友次息一人。高瀨道甘弟子二人。片桐良保六世十六人。松永尺山子弟五人、岡村玄當血脈三世、以上貞德の孫弟子。次に檀林派祖梅翁宗因並に直弟六十人。西山宗因の孫弟子井原西鶴五世二十人。田代松意弟子一人。菅野谷高政弟子二人。前田由平二世六人。高瀧似仙弟子一人。志水盤谷二世、内藤露沾四世廿九人。大淀三千風二世。以上凡て七百〇三人を略譜せる系圖なり。卷首に引用書二百七十三部を列擧し、荒木田守武、松永貞德、松壽軒西鶴、芭蕉等の畫像を揭ぐ。天保九年〔二四九八〕の自序山崎芳名の後序あり、同年出版す。

◉生川正香の傳は「誹諧瓶の響」の下にあり。

はいかきじんだん

俳家奇人談 三卷 竹内 蓬廬

俳道諸名家の事績、逸事餘談等を集錄したるもの。末に玄々居士の略傳、今世名家追福發句等を附錄す。文化十三年丙子〔二四七六〕の自序に「嚴に閑田子近世畸人を集錄し、載せて其の書に詳なり。來者ありと雖も、復其の盛を繼ぐものなからむ。竊に惟みるに、永正天文の頃に守武宗鑑の淸操あり、寛永正保の中に貞德季吟の卓举あり、延寶元祿の間に宗因桃靑の逸群あり、且、望一、西武、貞室、立圃、重賴、信德、言水、其角、嵐雪、去來、丈艸、支考、許六、北枝、惟然、來山、鬼貫、乙由、不角、原松、淡淡等の一奇ありて、其の間に雜出する時は、俳家にも亦其の人なしといふべからず、茲に先人玄玄一遺稿あり、俳奇を好む者の爲に輯する事八十有餘談、其の要たるや古人の行狀を擧げて奇事を知しめ、又各自に其の風韻の處を識すにあり、今や叨りに題して之れを俳家奇人談といふ」云々とあり、其の大概を知るべし。臥舫、寥松等の序あり。

◉竹内蓬廬は播磨高野の人にして、玄々一と稱し、有無軒、竹窓等の別號あり。中年明を失し、俳諧を學びて終に名を知らる。後ち江戸鍛冶橋に移り、文化元年甲子〔二四六四〕八月二十五日、六十三歳にて歿す。

はいがぶるゐ

拜賀部類 寫本三卷

諸家の記錄によりて、古來の拜賀著陣の事を部類したるものなり。

ばいかんしよしふ

梅磵初集 寫本一卷 森田 居敬

著者の詩百數十首を撰錄したるもの。天保十四年癸卯〔二五〇三〕大槻崇、後藤機等の序、大沼厚の跋あり。

◉森田居敬の傳は「梅花鶴影莊」の下にあり。

ばいくわくわくえいさう

梅花鶴影莊 四卷 森田 居敬

著者の詩を撰集したるものなり。安政六年己未〔二五一九〕草塲麻、其の他の序あり。明治三十年丁酉〔二五五七〕に新刻す。

◉森田居敬は字は簡夫、艮太郎と稱し、梅磵と號し、又紫山樵史と號す。文政二年己卯〔二四七九〕に生る。經を佐久間象山に、詩を梁川星巖に、書を卷菱湖に學びたり。慶應元年乙丑〔二五二五〕四月、享年四十七にて歿す。

ばいくわしやうゑん

梅花正園 寫本一卷

梅花一百三十八種を撰び、各其花形を精寫して、名稱を正し、略説を加へ、當時所有主の氏名をも記したり。

ばいくわしゆんする

梅花春水 四卷 爲永 春水

山東京傳の著「梅花氷裂」の完結を告げざりしにより、本書は其の後編として、彼書の闕を補ひたるものなるよし、文政九年丙戌〔二四八六〕の自序に見えたり。現本は單に「梅花氷裂」七卷として、彼書と合刻せり。

◉爲永春水の傳は「いろは文庫」の下にあり。

ばいくわしんえきしやうちうしなん

梅花心易掌中指南 五卷 馬場 信武

宋邵康節の「梅花心易」に基き、其の意を敷衍して占法卦數の事を詳記したるもの。元祿九年丙子〔二三五六〕の自跋、泉田梅翁の序あり。翌年出版。文化二年乙丑〔二四六五〕再刻す。

◉馬場信武の傳は「初學天文指南」の下にあり。

ばいくわひやくえい

梅花百詠 一卷 玉山主人

著者梅花を愛賞して、官暇毎に得たる百詠の詩を集めたるものなり。正德五年乙未〔二三七五〕伊藤長胤の序、王登瀛の序、瀨尾維賢の跋等あり。同年出版す。著者玉山主人は薩州官吏なりきといふ。

ばいくわひやくえい

梅花百詠 寫本一卷 林 茗澗

梅花を題咏したる七絕百首を集めたるもの。自序に「壬午三月二十一日梧南主人識」とのみありて、年代詳ならず。「明遠館叢書」に收めらる。

ばいくわひやくりつ

梅花百律 一卷 三上 恒

梅花を詠じたる五律百首を集めたるもの。文政六年癸未〔二四八三〕男恭の與書、天保六年乙未〔二四九五〕大窪行、隴田華、橋本秀等の序あり。

◉三上恒、字は九如又は松亭と云ひ、靜一居士と號す。上毛群馬里の人、醫を以て業とし、江戶に住したりと云ふ。

ばいくわひようれつ

梅花氷裂 三卷 山東 京傳

梅の與四兵衛其妻小梅の事績を骨子として作りたる世話小說にして、李園の雜劇を翻案したるものなりと云ふ。文化三年丙寅〔二四六六〕著者の述意あり。本書は實に其の前編のみにして、後編を出すに及ばざりしを、既に解題せる「梅花春水」は本書の闕を補ひたるなりと云ふ。

◉山東京傳の傳は「小說浮牡丹」の下にあり。

ばいくわむじんざう

梅花無盡藏 二卷 長田 德本

醫藥の處方を記したるもの。別錄二卷ありて診候藥性其の他の雜件を記す。上卷の末に「此醫書都合三册は醫の大綱なり、尤も祕すべきものなり、慶長十六年辛亥〔二二七一〕二月二十六日知足齋德本、政貞公に授與す」とあり。明和四年丁亥〔二四二七〕和氣正路の序、同五年高孟彪の跋をも載せたり。

◉長田德本の傳は「德本書牘」の下にあり。

ばいくわむじんざう

梅花無盡藏 寫本七卷 僧 瑞九

著者の詩文集なり。卷一、二、三に七言絕句、卷四に頌、卷五に頌並雜體詩、卷六、七に雜文を輯錄したり。自註また本光國師等の註もあり。「梅花無盡藏」は著者の別號なり。「續群書類從」の文筆部にも收めたり。

◉瑞九の傳は「曉風集」の下にあり。

ばいくわむじんざうせう

梅花無盡藏抄　木活一卷　僧　瑞九

詩集「梅花無盡藏」中より、各種の詩文を抄出したるもの。文政十年丁亥〔二四八七〕間宮士信の跋及び著者の小傳を添へたり。

◉瑞九の傳記は「曉風集」の下にあり。

ばいけいかう

梅溪稿　木活二卷

著者の詩、絶句數百首を輯む。「續群書類從」卷三百四十八上下、文筆部第三十二に收む。

ばいげつだうげうしんはふしわか

梅月堂堯眞法師和歌　木活一卷　僧　堯眞

著者の歌集。畿内立春の「あら玉の年にさきだつ春もいま、たがはぬ天の道やしるらん」より、柿本の影前に供奉る、「仰ぐぞよ山島の尾のながき世に、ひとり名高き敷島の道」に至る凡そ三百首を收む。元文二年丁巳〔二三九七〕閏十一月、肥前長崎なる門人梅溪舍楠雅珍の集するところなり。

◉堯眞〔香川宣阿〕は「草庵集蒙求諺解」の下に傳す

はいげんきびき

俳言季引　二卷　馬場　存義

いろは四十七各字の下に時令、植物、生類、食類、衣類、神祇、釋敎、戀詞、述懷、人倫、居所、名所、天象等の諸門を分ちて、俳諧に用ふべき文字を類聚したるもの。文政元年戊寅〔二四七八〕高井伴寛の序言に據るに、本書は明和の頃古來庵の集錄せしを、龍鱗庵藤井好鴎校刻の意ありしも果さずしてみまかりければ、伴寛其の志を繼ぎて再校刊刻したるなりと云ふ。

◉馬場存義は江戸の人。始め泰里と稱す。李井庵、古來庵、有無庵等は其の俳號なり。夙く服部南郭に從ひて儒を學び、後俳諧に志して、春來泰室に從ひ遂に此の道の名を成せり。天明二年壬寅〔二四四二〕十月三十日、年八十一にて歿す。江戸淺草誓願寺に葬れり。

はいげんさいぐわいしふ

佩弦齋外集　二卷　青山　延光

小早川隆景、蒲生氏鄕、加藤清正、加藤嘉明、以上四英雄を傳したるものなり。慶應三年丁卯〔二五二七〕青山延壽の序あり。

◉青山延光の傳は「赤穗四十七士傳」の下にあり。

はいげんさいざつちよ

佩弦齋雜著　四卷　青山　延光

「佩弦齋雜著」中、刀劍錄にして、古來の名刀を擧げて其の來歷所傳を記せり。全編漢文にて作れり。天保五年甲午〔二四九四〕拙齋の敍、天保十三年〔二五〇二〕著者の弟延壽の跋あり。四卷二册に版行す。

◉青山延光の傳は「赤穗四十七士傳」の下にあり。

ばいけんやわ

梅軒夜話　木活二卷　梅　軒

假字文の隨筆。前後二集に分ちほぼ門類を立てたり。正德元年辛卯〔二三七一〕の自序あり。

はいざうくわさんじんし

拜造化三神詞　一卷　岩崎　長世

造花の三神、卽ち天之御中主神、高皇産靈神、神皇産靈神を拜する祝詞なり。慶應元年乙丑〔二五二五〕刊行す。

◉岩崎長世の傳は「神字箋」の下にあり。

ばいさおうのげ

賣茶翁偈　一卷　高　遊外

著者の偈集。僧無住の編するところなり。卷首翁の像に其の自題を揭げ、敬雄の題辭、竺常が撰せるところの翁の傳を揭げ、末に翁が用ひたる茶具の銘文を出したり。寶曆十三年癸未〔二四二三〕遊子梅山の跋を附す。

◉高遊外は肥前蓮池の人にして、通稱を柴山元昭といふ。幼にして、黃檗宗の僧となり、化霖、獨湛等に師事し、後茶器を荷うて諸方を遊歷し、風流雅客と交る、人稱して賣茶翁といへり。晚年還俗して國君に仕へ姓名を高遊外と改む。佛學に通じ、また詩歌に巧なりき。寶曆十三年癸未〔二四二三〕七月十六日、年八十九にて歿す。

はいじせつようしふ

俳字節用集　二卷　高井　伴寛

俳諧に用ふべき文字をいろは分けに類聚したる袖珍書なり。いろは各字の下に言辭、人倫、支體、食衣、官位、器財、家居、天象、時令、地理、神釋、生類、植栽、「節用字貫」二十卷中より抄出したるものなりと云ふ。文政三年庚辰〔二四八〇〕に成りたり。

◉高井伴寛の傳は「孝子教鈔解」の下にあり。

ばいしつかしふ

梅室家集　木活一卷　櫻井　能充

著者の俳諧を集錄したるものにて、凡そ數百首あり。梅室は著者の一號なり。

◉櫻井能充は加州金澤の人にして、初め雪雄と稱し、後ち素信また素芯と改め、梅室、方圓齋、陸々道人、遲流庵、餘花園、癸松庵、相應軒等の號あり。父の業を襲ぎ刀磨を以て加賀侯に仕へ、後年病を以て致仕し、閑更に就て俳諧を學び、諸方に遊歷して當時に名を知られ、蒼虬、鳳朗、卓池と合せて、天保の四老人と稱せらる。嘉永五年壬子〔二五一二〕八十四歲にて京都に歿す。同地本禪寺に葬らる。子能監〔宮内書記官〕錦洞と號し書を善くせり。

はいじぶくろ

俳字袋　二卷

俳諧に用ふべき文字をいろは順に類聚して、略解を施したるもの。文化十一年甲戌〔二四七四〕に再版せられたり。

はいしふりやうざい

俳集良材　三册　正　由

俳諧初學の材料集にして、寛文三年癸卯〔二三二三〕五月中旬編輯したるものなり。著者正由は別に「眼寐集」をも著せり。

ばいじやうろく

梅城錄　一卷　呆　庵

天滿宮を頌贊したる漢文にて、二十五章、章ごとに四句に詠じ、古史を引きて菅公の履歷を詳記す。天明二年壬寅〔二四四二〕藤原長桓の奥書、天明七年、市河世寧の奥書等あり。「群書類從」卷二十、神祇部第二十にあり。

はいしやくろく

排釋錄　一卷　佐藤　直方

朱子の語類文集等より、佛老を排擊する語句を集錄したるものなり。各項其の出處を細註す。貞享二年乙丑〔二三四五〕の自跋あり。

◉佐藤直方の傳は「道學標的」の下にあり。

ばいしようそちん

梅松訴陳　一卷

昔時菅公を慕ひて、飛移したりといふ梅の、天朝に訴陳して春風の濫吹を停め、瓊花をして久しく社壇を防らしめよと請へる文なり。古人一時の漫戲の作にて、語誹諧に渉るもあり、されども詞藻婉麗雅趣高潔の漢文たり。或は云ふ、二條關白の作と、また滋憲法印の著と、下半に滋齋といふもの本文の字訓を細註して揭ぐ。嘉永五年壬子〔二五一二〕那須資禮の序、黑川春村の跋を附して版刻す。

ばいしようろん

梅松論　二册

主として足利尊氏に關する戰記なり。其の兄弟の繁榮を飛梅の開くにたとへ、其の後裔の後世を老松の千歲にくらべて梅松論とは名けたるなり。其の記述の體は「大鏡」、「増鏡」等にならひたるものの如く、最初北野天神へ參籠せる或法師の談話に作り成せり。往々誤脫紕繆はあれど義貞尊氏の戰事につきては比較的に正確なるものとして史家の參考するところなり。著者詳ならざれど梅松論などとて尊氏を尊敬するより考ふるに足利氏臣隷の手に成り、光明天皇の貞和五年己丑〔二〇〇九〕比に著されたるものなるべしといふ。今見るところは、享保三年戊戌〔二三七八〕谷重遠の跋、明和九年壬辰〔二四三二〕源高敬の奥書あり。

はいしよこくし

背書國志　木活二卷　古谷　久語

伊勢國地誌にて、同人の著「布留屋草紙」「勢陽雜記」の外に同國の雜事を記したるもの。自跋あり「洞津伊藤氏は我が舊識なるを、十有餘年相見ずして、一日投宿しけるに、予が老いたる體を見て、性質の記臆もさこそ衰へけるらんと語られぬるに、折しも春雨の徒然慰めがたく、硯に向ひ、我が記得せし伊勢の古ことなど、細々聞書し、出來たる物ぞかし。誤り違ふ事もありぬべく、見む人ゆるしたまへ」といへり。安永八年己亥〔二四三九〕出辰の名にて序せり。曰く、「古谷氏、好讀列國郡史諸本、是故明海內之地理、精古今之事績、且以强記稱矣。或將試焉。於是乃擧當州所有之事物而以誌之、幾可二萬言、俄然爲章、不出旦夕而以應其試焉。雖夙稿構思者亦何必如是速」と。右兩文によりて、著者の地理歷史に關する記憶の強確なりしこと、及び此の書を編したる由來の突然人の試驗に應じて作りたるがごとき事情を窺ふべし。

◉古谷久語の傳記は「伊勢風土記」の下にあり。

はいしよさんさう　配所殘草　一卷　山鹿　高祐

寛文六年丙午(一六六六)十月著書の罪に因て、德川幕府より、淺野內匠頭へ預けとなり、播州赤穗城へ差遣られて後、延寶四年丙辰(一六七六)赦免に遇ひて、前來幼時以來の略歷、赤穗下向の前後の模樣等な自ら記錄したるものなり。一名「配所殘筆」と云ふ。「存採叢書」の中にも收む。

◎山鹿素祐の傳記は「湯儲金寵」の下にあり。

はいしよさんぴつ　配所殘筆　一卷　山鹿　高祐

本書は一名「配所殘草」の下に解題せり。

はいじんひやくかせん　俳人百家撰　一卷　綠亭　川柳

芭蕉以下俳家百人の肖像傳を揭げ、更に各小傳を頭書したるものなり。畫は雄齋國輝の筆に成る。嘉永八年乙卯(一八五五)の作。

◎綠亭川柳は川柳第五世にして、通稱を永谷金藏といふ。佃島の御用漁師たり。綠亭、風叟等は其の號なり。著書は本書の外に、「新柳多留」其の他あり。安政五年戊午(一八五八)八月十六日、七十二歲にて歿す。

はいせう　馬醫抄　本朝二卷

馬醫一切に關する詳說なり。第一馬の見樣の事、第二馬の諸道具の事、第三馬いれる吉日の事等より、牛につかれたる事に至る二百四十三條あり。卷末に桑島平六、大沼平右衞門、山上彌七郎等の連名ありて、次に天正十九年辛卯(一五九一)十二月の日附あり。「編輯者、編輯日なるや未だ詳にせず。「弓馬諸式」の中に收む。

はいせつ　拜說　本朝一卷　僧　顯常

拜揖跪躬等の儀を說明したるものにて、凡そ二十四則、諸書を引て考證せり。明和二年乙酉(一七六五)九月十一日の成稿。

◎顯常の傳は「柿本人丸事蹟考」の下にあり。

はいぜつろく　廢絕錄　本朝三卷　小田　彰信

慶長五年庚子(一六〇〇)關原戰後諸侯の領知を沒收せられ、また滅絕せられたるもの、同六年以來罪科に處せられたるもの、嗣子なき爲めに斷家せしもの、萬石以上のものにして分家して萬石以下なりしもの等を年序的に集錄せり其の居城居處石高等は殊に細註を以て示せり。文化九年壬申(一八一二)の作。「史籍集覽」に收めたり。

◎小田彰信は源姓にして又藏と稱す。通稱は源藏。著書は本書の外に武家補任、續撰武家補譜」の編に關りしを以て、御持同心より、伊賀守に轉ぜり。著書は本書の外に武家補任等あり。

はいぜんかんご　配膳覺悟　本朝一卷　僧　顯常

配膳放置の書にて、文化五年戊辰(一八〇八)三月十八日、伊勢濱勘眞卷の奧書あり。

はいぜんき　陪膳記　本朝一卷

陪膳に關する一切の故實を圖說したるものなり。天文十五年丙午(一五四六)八月、伊勢貞順の奧書、文化五年戊辰(一八〇八)七月二十三日伊勢貞卷の奧書等あり。伊勢貞丈の朱書も往々に見えたり。

はいせんしせう　珮川詩鈔　四卷　草場　佩

著者の詩、初よそ六百首を收む。十八歲の時の作より、五十三歲の時の作までを取れり。著菜山以下諸家の評言あり。嘉永二年己酉(一八四九)著者六十三歲の時、男雁夫と、甥生とが校合して出版するところなり。同年筱崎弼の序、翌三年後藤機の序、翌四年廣瀨謙の跋等あり。

◎草場佩は肥前多久の人にして、嶸助と稱し、棣芳と字し、玉女山人、瀧纓堂主人、珮川等の號あり。儒を以て本藩佐賀に仕ふ。かれて畫を好み、人物花卉、墨竹、山水等を巧にせり。晚年德川幕府より賞を受けたることあり。慶應三年丁卯(一八六七)八十一歲にて歿せり。

はいそうひつき　梅窓筆記　二卷　橋本　經亮

著者の考證隨筆なり。上卷に神樂庭火の末句うたはざる事より、平家を語る瀧腸に至る九十條。下卷に掛物の上下を卷て掛る事より、謠曲に禁句なうたひ替る事に至る九十八條を揭げ、末に諸圖像を

載せたり。文化二年乙丑(一八〇五)友人丘愚純の序あり。序中に著者生前に綴したる序を、今歿後に至り更に書肆の迫るにまかせ掛錄に擬する由あり

◎橘本經亮は橘梅窓と號し、また香園と號す。洛西梅宮の祠官たり。夙に和學を修め、高橋圖南の門に入りて有職古來な究め、蔗庵、蓍園等と交りて、深く和歌に通ぜり。當時博識選記な以て知られたる一人なり。性豪放不羈にして逸談少からず。著書は本書の外に、橘窓自語、校正年山紀聞等あり。服飾古實等の考證に關する著者多けれども、散逸からずして脫稿に至らざるもの多きは慨むべし。文化三年丙寅(一八〇六)四月十日、四十七歲にて歿す。

はいそんさいひつ　梅村載筆　本朝一卷　林　衡信

著者の隨筆なり。多く詩歌文章等に關する事實を、和漢對照して假名文に記したるものなり。世人誤りて本書を道春の作とし、明に道春と署名して寫傳せるさへあり。書中に往々「羅山子語りけるは」云々あるな見ても、其の說の非なるな知るべし。

◎林衡信の傳は「史籍考話」の下にあり。

はいだこだいはくだつ　倍梁互對剝脫　本朝一卷　關　孝和

倍梁衡、互對衡及び剝脫法とな併記したる書にして、關孝和第四傳山路主住の校に成りたるものなり。年代記入なし。

◎關孝和の傳は「大成算經」の下にあり。

はいたるいぶつし　梅癡詠物詩　一卷　僧　梅癡

著者の詠物詩百餘首な集めたり。夫沼枕山、梅癡の山房に、數年寓居して花鳥に唱和したることの緣あるによりて、此の年これな編輯發行せり。時に弘化二年乙巳(一八四五)なり。翌三年菊池五山の序あり。嘉永二年己酉(一八四九)出版す。

◎梅癡は肥前の人にして、名な榮岡、字な白純、號な小蓮主人といふ。性、文學な好み、清淡な愛す。初、江戶深川の本誓寺に住し、また、三緣山に入りて其の學頭となり、後、北總弘經寺の住職となる。詩な善くし、書畫に妙な得たり。

はいどうしふ　梅洞集　四十卷　僧　薬洲

著者梅洞の家集。詩集十卷、文集十卷、續詩集二十卷な集む。最初二十卷は著者の自撰にして、續詩集二十卷は著者の編輯するところなり。

◎林春信の傳は「史籍考話」の下にあり。

はいとんしせう　梅墩詩鈔　十二卷　廣瀨　旭莊

著者の詩集にして、初、二、三、四の四編各上中下三卷より成る。弘化三年丙午(一八四六)門人畢井信夏の跋書ありて成書の由來な明にす。同四年筒井曫溪、筱崎小竹の序あり。嘉永元年戊申(一八四八)出版す。

はいばいしゆつせきま　賣買出世車　二卷　東　白

業商通用宇、相場商利德の事、立身出世の事、相場の高下な料る事等、一般商業上の要件な記したるものなり。延享五年戊辰(一七四八)三月の作。

はいびでんのしよ　馬醫祕傳之書　本朝一卷

馬病療法の書なり。結馬之次第、尿結之次第、虫腹之次第、內癰之次第、癰馬之次第、痢病之次第、風病之次第、諸藥食之事、則與則冷之事等十條條な記せり。年代著者共に詳ならず。

はいびゆうよくしうへん　排謬翼宗編　二卷　僧　薬洲

淨土眞宗の宗義安心に關して、「歸命本願說」に就く所な返駁し、「願生歸命辨」の說な回護したるものなり。全編殆んど嘲罵の文字な以て充たされたるは惜むべし。寬政元年己酉(一七八九)の著なり。

◎薬洲は眞宗本願寺派の僧なり。功存の門人にして、伊勢津正泉等に住したり。

はいひん　梅品　二卷　松岡　玄達

本書は、名に「顧齋梅品」の下に解題したり。

はいひんしんづせつ　梅品眞圖說　三卷

梅の種類凡そ八十種な列擧し、一々着色圖に作りて、悉く說な附載す。

はいほんそうたげん　梅本增多原　本朝四卷　太田　元貞

梅本は古文經傳にて、魏晉の間、王子雍の爲めに、

當時の某學者が、安國に託して作り、鄰康成の古文を破したるものなりといふ。而して、此の增多二十五編は、安國の三十四編と相類似せず、乃ち魏晉の人の僞作なるべしといふ。然れども能く左國孟荀等の古書を摭據網羅し、倫書の逸句を引て補綴したれば、其の實質は古倫書の遺文に屬し、今增續する所は、更に古人の格言を用ひて聖賢の奧旨に戾らざる具備せるものなりといふ。本書はこれに案註を加へたるものなり。全編漢文無點にて寫傳す。覺政十年戊午(一四五八)八月朔日の自序あり。

◎太田元貞の傳記は「周易詳說」の下にあり。

はいめいならびにくわけい

梅名並花形　本邦一卷

梅花の名稱を列擧して、發句等の用例を示し、また花形を略說す。「續みそのゝ」の部四に收む。

はいやうしんびろくほい

培養深祕錄補遺　本邦二卷

佐藤　信淵

培養法殊に肥壯の用方を叮嚀に說明したるもの。文政七年甲申(一八二四)二月の自序、安政五年戊午(一八五一)八佐藤信昭の跋あり。

◎佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

はいりいかう

梅里遺稿　一卷

杉田　信

文八編、詩古今體四十一首、國文一編、和歌二章を收錄したり。明治十八年乙酉(一八五五)三月、孫盛編輯出版す。

◎杉田信は我國洋學の開祖と呼ばるゝ鶴齡杉田玄伯の孫、立卿穆の子。文化十四年丁丑(一八一七)十一月に生る。成卿と通稱し、梅里と號す。二十歲の時坪井信道の門に入りて醫書蘭學を研修して、天保十二年幕府の譯員となり、弘化二年侍醫となり、安政三年幕書調書の教授職となれり。同六年己未(一八五九)二月、四十二歲にて歿したり。其の著譯の書には「濟生三方」三卷、「瘍科新說」二卷、「海上砲術全書」十三卷、「砲術訓蒙」十二卷、「山砲略說」一卷、「萬寶玉手箱」二卷、「梅里雜抄」九卷等あり。

はいりぞうたふ

俳理贈答　本邦一卷

俳句の批評に關して、機軸を集めたるものなり。

はいりようかう

梅龍遺稿　四卷

武田　欽緜

著者の詩文稿を、男璋如の編輯したるもの。卷一に五言古、七言古、騷體、五言絕句、七言絕句、五言排律、五言律、六言律。卷二に序。卷四に記、墓誌銘、祭文、贊、說、書牘等を收む。天明二年壬寅(一七八二)江村綬、源之熙の序及び池之愚の跋あり。四卷三冊に作る。

◎武田欽緜、字は聖謨、梅龍と號し、三綱と稱す。伊勢の人なり。初め筱田元亮、字は子明、南陽と號し、京都に住す。伊藤東涯、堀南湖等に從學し、後苗姓に復したりと云ふ。明和三年丙戌(一七六六)五十一歲にて歿し、文端と私謚す。

はいりようかう

梅里餘稿　一卷

杉田　信

文二十編及び詩一百十餘首を收錄したり。卷末に梅里先生年譜を附載せり。明治十八年乙酉(一八五五)孫盛の出版に係る。

◎杉田信の傳は「梅里遺稿」の下に在り。

はいろん

俳論　一卷

八文字屋瑞笑

俳諧の沿革變化等を論じたるもの。明和元年甲申(一七六四)の自序中に、「俳諧も元來和歌より出れど、後世庶人にわたり、連歌道の外に一家を立つ。上古、中古、近世當時まで、代々の流行は、時々の變化擧ぐるに暇あらず、後人蛇の多きに迷惑し、初心の蜚長途に退屈せり。彼に時代流行變化を別錄し、論を立て撫び搜るの勞なく、一見に盡さんと、卿一集なすと云々といひ、目を分つて詳論せり。附錄に新古の發句を混雜し、四季を分つて記せり。寬政十二年庚申(一八〇〇)比の版なり。近年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」の中にも收む。

◎八文字屋瑞笑は八文字舍自笑の孫にして、自露と號す。別著には「彩色歌相撲」あり。

はいりよかう

梅里餘稿　一卷

杉田　信

文二十編及び詩一百十餘首を收錄したり。卷末に梅里先生年譜を附載せり。明治十八年乙酉(一八五五)孫盛の出版に係る。

◎杉田信の傳は「梅里遺稿」の下に在り。

はいろんぞうたふ

俳理贈答　本邦一卷

俳句の批評に關して、機軸を集めたるものなり。

はいりようかう

梅龍遺稿　四卷

武田　欽緜

著者の詩文稿を、男璋如の編輯したるもの。卷一に五言古、七言古、騷體、五言絕句、七言絕句、五言排律、五言律、六言律。卷二に序。卷四に記、墓誌銘、祭文、贊、說、書牘等を收む。天明二年壬寅(一七八二)江村綬、源之熙の序及び池之愚の跋あり。四卷三冊に作る。

◎武田欽緜、字は聖謨、梅龍と號し、三綱と稱す。伊勢の人なり。初め筱田元亮、字は子明、南陽と號し、京都に住す。伊藤東涯、堀南湖等に從學し、後苗姓に復したりと云ふ。明和三年丙戌(一七六六)五十一歲にて歿し、文端と私謚す。

はいりようかう

梅里餘稿　一卷

杉田　信

文二十編及び詩一百十餘首を收錄したり。卷末に梅里先生年譜を附載せり。明治十八年乙酉(一八五五)孫盛の出版に係る。

◎杉田信の傳は「梅里遺稿」の下に在り。

はいろん

俳論　一卷

八文字屋瑞笑

俳諧の沿革變化等を論じたるもの。明和元年甲申(一七六四)の自序中に、「俳諧も元來和歌より出れど、後世庶人にわたり、連歌道の外に一家を立つ。上古、中古、近世當時まで、代々の流行は、時々の變化擧ぐるに暇あらず、後人蛇の多きに迷惑し、初心の蜚長途に退屈せり。彼に時代流行變化を別錄し、論を立て撫び搜るの勞なく、一見に盡さんと、卿一集なすと云々といひ、目を分つて詳論せり。附錄に新古の發句を混雜し、四季を分つて記せり。寬政十二年庚申(一八〇〇)比の版なり。近年發行の俳諧文庫第十三編「俳諧論集」の中にも收む。

◎八文字屋瑞笑は八文字舍自笑の孫にして、自露と號す。別著には「彩色歌相撲」あり。

はいりやくせんく

望一後千句　一册

杉田　望一

著者の俳諧千句にて寬文七年丁未(一六六七)正月編輯したるものなり。前の慶安三年の「望一千句」に對して「望一後千句」といへるなり。

◎杉田望一の傳記は「望一千句」の下にあり。

はいりやくせんく

望一千句　一册

杉田　望一

著者の俳諧千句集なり。慶安三年庚寅(一六五〇)二月の編にかゝる。

◎杉田望一は伊勢山田の盲人にて句宮たり。俳諧を善くし、望一千句、望一後千句、山田俳諧等の著あり。寬永七年庚午(一六三〇)六月七日歿せり、年八十三。

はううんしふ

芳雲集　本邦一卷

武者小路實陰

著者の家集。芳雲は櫻町院敕賜の二字なりといふ。

◎武者小路實陰の傳は「實陰公言談」の下にあり。

はううんるゐだい

芳雲類題　本邦一卷

武者小路實陰

芳雲和歌集類題」と大同小異なり。末には文を收めずして、百首和歌を入れたり。

◎武者小路實陰の傳は「實陰公言談」の下にあり。

はううんわかしふるゐだい

芳雲和歌集類題　六卷

武者小路實陰

春夏秋冬戀雜と部立して自詠の和歌を集めたるもの。歌數頗る多し。享保前後の咏出に係る。芳雲の二字は櫻町院敕賜の號なり。寬曆十年庚辰(一四二〇)實岳の跋に、余曾聽其「實陰公」詠草以獻元文帝、帝御敕題芳雲集哥」と云へり。天明七年丁未(一四四七)出版す。

はうえいえどえづ

寶永江戶繪圖　一鋪

圖の四方に十二支を記して方角を示し、本所染平橋、深川久右衛門町より東は、合符を以て右端に別圖とせり。溫清軒の序あり、寶永は東山天皇の朝にして、(一三六四—一三七一)に及べり。

はうえいえどえづ

寶永江戶大繪圖　一鋪

遠近道印

寶永七年庚寅(一三七〇)版行するところにて、圖端に、江戶大繪圖は、先年五枚に編立て、一分を五間の積りにせしが、今度、一分を一間に縮めて、五枚を一枚にし、且前圖の遺漏を補ひ、東は本庄深川、西は千駄木、北は角田川、南は日黑品川までを書入るゝ由を述べたり。

◎遠近道印の傳は「寬文版江戶大繪圖」の下にあり。

はうえいにふぶつ

寶永二年御旗本高附帳　本邦十七册

度會延貞

東山天皇の寶永二年乙酉(一三六五)の時の幕府旗本知行所、禄高並に役名、年齡等を記したり。當時各家當主のまゝなり。

◎度會延貞のことは「神名略記序」の下にあり。

はうえいせんさうこちやくたうひやくしゆ

寶永仙洞御着到百首　本邦一卷

寶永二年乙酉(一三六五)九月九日より、同十一月某日に至る御着到にて、御製、通茂、通躬、濟房、實業、重條、雅豐、輝光、實陰、爲綱、公長、通夏、爲久、公緖、光榮等十五家の作にかゝる。

はうえいつなみできしづか

寶永津浪溺死塚　本邦一卷

古屋　尉助

寶永四年丁亥(一三六七)十月十四日の津浪、安政元年甲寅(一八五四)十一月五日の津浪と四國に於ける大震傷の大略を記し、紀念の碑に書き付けしものなり。安政三年丙辰(一八五六)十月四日の作。『土佐國群書類從』卷七十四に收む。

はうえいにつき

寶永日記　本邦五卷

寶永六年己丑(一三六九)正月より十二月に至る德川幕中の日記。第一卷は綱吉薨去、法事の始末、第二卷は家綱將軍宣下の次第を記し、第三卷以下は幕府の沙汰書等を輯錄せり。

はうえいにねんおはたもとてかつけちやう

寶永二年御旗本高附帳　本邦十七册

寶永六年己丑(一三六九)八月二十四日、外宮御遷代御再興のことを、神主長官申より、山田奉行渡邊下總守へ願ひ出でたるものなり。

はうゑいばんえどかゞみ
寶永版江戸鑑 一巻
萬石以上の諸家を列擧し、其の内室、屋敷、城地、船印等を記せり。寶永年甲申(二三六四)江戸牛込の書肆藤雀堂の版行するところなり。

はうゑいぶかん
寶永武鑑 四巻
第一、第二巻は諸大名、第三巻は諸役、諸奉行、遠國諸奉行、第四巻は西丸附として、各其の家紋、知行高、宿所、駕籠の印、官位、家系、居城、城主の遷替、家老役人の姓名等を詳記したるもの、寶永五年戊子(二三六八)に出版す。

はうゑんかん
算法方圓鑑 一巻 荻原 信芳
自設自答術文を附したる圓理問題の集錄なり。全巻題を別つこと十八條にして、頗る高尚なり。文久二年壬戌(二五二二)版行す。
◎荻原信芳は蔵助と稱し、湖山と號す、上毛勢多郡關根村の人なり。初め數學を、同國齋藤義宣に學びしが、後獨學にして、終に大に斯道に通し、人呼て當時の一人と稱す。

はうゑんきうりくわつじゆつせんでん
方圓窮理捷術先傳 一巻 白石 長忠
和田寧より受けたる無窮小數の極限、即圓理に關する發數の略を記載したるものなり。年代記入なし。著者白石長忠の傳は「社盟算譜」の下にあり。

はうゑんきうりくわつじゆつせんでんきげん
方圓窮理捷術先傳起源 一巻 白石 長忠
本編方圓窮理捷術先傳の數理の由て生ずる所の算法を解きたる書なり。文政六年癸未(二四八三)に成りぬ。
◎白石長忠の傳は「社盟算譜」の下にあり。

はうゑんきかう
方圓奇巧 四巻 有馬 頼徸
本編三冊には圓周の弧背等を求むる法及び角術を記し、附記一冊には術路の捷法を記したるもの。本書の全體は、「方圓算經」に似たるも、更に一層精しき所を見る。是書も亦關流の内に在て、極て祕藏したり。明和三年丙戌(二四二六)に成りぬ。
◎有馬頼徸の傳は「拾璣算法」の下にあり。

はうゑんざつろく
望遠雜錄 十五巻
慶安年中由井正雪、丸橋忠彌等が異謀を企て、事露顯するに及んで、其の徒みな刑戮に處せられたるもの。正雪出生の事に始まりて、訴訟人堂を賜はる事に終る、凡そ六十條あり。別に附錄四巻ありて、本件に關聯せる雜事を記したり。本書或は「研齋雜錄」第五第六に收めたるもあり。

はうゑんさんけい
方圓算經 六巻 松永 良弼
先づ首巻を置き、以て圓理學に於ける要項を記載したり。其第一巻には、圓周率及び弧背を求むる三法及び弦積等を求むる眞術を記し、第二、三巻には、角術を載す。則、角中經平中經距面弦を求むるの實理を詳にし、別に太陰率一巻、立裁一巻とす。實に關流圓理學の最祕法にして、世に乾坤の巻と共に貴重せらるゝものなり。
◎松永良弼は安左衛門と稱し、東岡また龍池と號す。初め寺内糀平と曰ふ、内藤政樹に仕ふ。政樹も亦良弼を師として、數學を修めて、亦斯道に通じぬ。良弼數學を荒木村英に受けて、大に上達し、遂に關流の嫡傳を得たり。之れを關流の三傳と爲す。良弼師傳を受るや、師の年既に高し、關氏の遺書を整理せんこと未だ完からず、良弼乃ち大に之れを補闕修正して、更に序次を立て、三題免許(見題隱題代題)の外、又二免許の階級を立てたり、之れを別傳及び印可と曰ふ。是より關流目錄都て五級と爲る。故に傳書の全きは、良弼より始れり。此外諸術を校正し、且つ自發の術も亦多し、殊に圓理括法を發したるが如きは、一世の功と謂ふべし。享和年間に歿す。

はうゑんさんけいひやうりん
方圓算經評林 七巻 會田 安明
本編を五巻とし、之に首二巻を加へたり、先づ松永良弼が著したる「方圓算經」は、文辭の虚飾多きを誹謗し、而後術文を改記して簡易ならしめたるのみにして、其失の擧ぐる所なし。文化六年己巳(二四六九)に成りぬ。
◎會田安明の傳は「算法古今通暁」の下にあり。

はうゑんじゆんど
方圓順度 二巻 溝口 林卿
著者が自家の工夫に成りたる方圓規矩の術を記載したるものなり。書中往々四洋の法則に似たるもの多し。光格天皇の天明八年戊申(二四四八)の記入あり。
◎溝口林卿の傳は「紙上盤錐」の下にあり。

はうゑんりうわあひ
方圓流居合 一巻
方圓流居合の名目を擧げたるものにて、天保十四年癸卯(二五〇三)の寫本にかゝる。

はうゑんりうへいはふ
方圓流兵法 一巻
方圓流兵法の名目を列擧したるものにて、天保十四年癸卯(二五〇三)の寫本なり。

はうゑんりうぼう
方圓流棒 一巻
方圓流の棒法を名目したるものにて、天保十四年癸卯(二五〇三)の寫本なり。

はうおんき
報恩記 一巻 僧 存覺
佛說によりて、父母及び師長の厚恩に報ゆべきことを說論したるものなり。「眞宗法彙」巻十六に收められる。
◎存覺の傳は「六要鈔」の下にあり。

はうおんしやどくせう
報恩謝德鈔 一巻 僧 了譽
師範の恩父母の恩の厚きことを述べ、佛經の書寫讀誦、造塔供養の功德あること、佛像開眼供養の事等を記したるものなり。著作の年代を載せず。
◎了譽の傳は「釋淨土二藏義」の下にあり。

はうかいびげん
防海微言 一巻 龜井 昱
海防の事を論述したるもの。安政三年丙辰(二五一六)の自序あり。
◎龜井昱の傳は「字例述志」の下にあり。

はうかいまいだん
防海每談 一巻
江戸府下の神社佛閣其の他の故事雜談を記したるものゝすべて六十箇條あり。著者と年代とを記さゞれども、享保中の還老が元文より明和までの間に筆記したるものなるべしと云ふ。近刻「温知叢書」に收められる。

はうかいろく
防海錄 九巻 野間 三竹
漢書中より、道德上の事項を集錄したるものにて、每項出所を示す。第四巻以下には宋儒の說にかゝるもの多し。萬治元年戊戌(二三一八)謝林子の序あり。
◎野間三竹の傳は「桑華紀年」の下にあり。

はうかしゆち
砲家須知 一巻 長山 貫
和蘭砲術書を抄譯編輯したるもの。安政三年丙辰(二五一六)の自序あり。
◎長山貫は杉園と號す。本書の外に「海防私議補遺」の著あり。

はうかぢうがくぜんしよ
礮家重學全書 十巻
衆繩、器械、演練、超險の諸門に分ち、更に綱目を設けたる西洋礮家の重學に關する譯述書なり。

はうかんいかるがやわめんだふしふ
方鑒斑鳩夜話問答集 二巻 松浦 久信
方位、吉凶に關する事を問答體に記したるもの。上巻、元日出行初方位の選並に神殺の圖及び趣意より、「本命的殺禁方の說並に的殺方縁法の圖解」に至る八條。下巻に「木宅造作の時假住の所より方位の大事有之說」より、「天德月德麒麟星常宮飛宮同會の辨說並に風水地中の論方選等八箇條の解說を附す」に至る八條を說けり。文化十三年丙子(二四七六)春二月十五日の自序、翌十四年門人加藤秋英の序あり。文政元年戊寅(二四七八)出版す。
◎松浦久信の傳記は「家相祕傳集」の下にあり

はうかんるゐえう
方鑒類要 八巻 松浦 久信
方位の選擇、氣運の吉凶等あらゆる卜占法に關する條件を取載圖說したるもの。天保五年甲午(二四九四)門人奥谷忠言の序あり。明治二十七年に再刻す。著者松浦久信の傳は「家相祕傳集」の下にあり。

はうきうへいかんぼうしゃのまき
寶弓兵鑑奉射之巻　本一巻
伊勢弓馬撰書の中の一書にして、弓術十四條を略記せる數枚の册子なり。伊勢貞丈の奥書あり。

はうきうへうかんやぶさめのまき
寶弓兵鑑流鏑馬巻　本一巻
伊勢弓馬撰書の中の一書にして、流鏑馬の書にて馬上の三物並歩行立の三物といふ事、馬場の名の事等より、犬追物の手綱の事、笼裏袋の事に至る十五條を略記す。

はうきのくにおほかみやまのき
伯耆國大神山記　本一巻　大江　春平
延喜式神名帳に大神山神社とある社の祭神、靈驗等を記したるものなり。

はうきのくにだいせんじえんぎ
伯耆國大山寺縁起　本一巻
同寺の縁起を假名文に記せり。文政二年己卯(一八一九)塙保己一校す。「續群書類從」巻八百十五、釋家部第百にあり。

はうきのまき
伯耆之巻　一巻
元弘の亂、後醍醐天皇、伯耆國弁上山に遁れ給ひし時、忠勤渺からざりし、名和長年の事歴等を記したるものにて、「群書類從」巻三百七十二、合戰部第四に收む。

はうきぼんぎ
寶基本紀　本一巻
伊勢二所太神宮造營の寶基本紀なり。永應三年甲午(一二一四)龍照近書寫の奥書あり。

はうきみんだんき
伯耆民談記　本九巻　松岡　布政
第一巻を國誌の巻と題して、風俗、國號、郡號、米子城下、倉吉縣、古今の國主將統、郡鄉誌村の號等三十四條を掲げ、第二巻三巻を社閣の部として六十一箇所の社寺を集げ、第四巻以下九巻までを古城故所の部として、各郡の故蹟三十七箇所を集げて記せり。目錄の下に「寛保二年壬戌(一七四二)と記せり。同年の記なるべきか。九巻四册に寫傳。
◎松岡布政は伯耆國倉吉の人にして、鳥取池田氏の臣たり。

はうきやうかいし
寶鏡開始　本一巻
入唐鏡、無縁鏡、その他古代の神鏡を圖して說示したるもの。嘉暦三年戊辰(一九八八)の奥書あり。

はうくわうじでんき
方廣寺傳記　一巻
遠州龍潭寺に傳ふる無文禪師の傳記及び同國方廣寺に傳ふる同禪師行狀記二種を集めたるもの。禪師は無文、後醍醐天皇の第十一の皇子にして、深奥山方廣寺の開山なり。寛政四年壬子(一七九二)傳寫の奥書あり。

はうくわうむもんぜんじごろく
方廣無文禪師語錄　一巻　僧　元選
詩偈文章等を輯めたるもの。巻頭に肖像を掲げ、次に文明十二年庚子(一四八〇)四世の法孫友勝の讃を載せ、次に享保十三年戊申(一七二八)現住性琴の序、同年道盛の題辭、次に禪材の序、末に寺籍、智融の跋等あり。
◎元選は無文禪師と號し、遠州奥山方廣寺に住す。後醍醐帝の皇子にて、興國中元に入りて法を福州高仰山の梅友に求むと云へり。後歸朝して奥山に住し、元中七年庚午(一三九〇)閏三月入寂す、年六十八。

はうくわさくづかん
防火策圖解　三巻　小田　東壁
火災防禦策の圖解なること其の名の如し。安政三年丙辰(一八五六)冨木榮の序、小森三和の跋あり。

はうくわじりゃく
寶貨事略　本一巻　新井　君美
本朝古來の金銀銅貨の制定、沿革等を記し、また外國に入りし總數等を掲げたり。それ正德五年乙未(一七一五)より、寶永五年戊子(一七〇八)までの大數なり。
◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はうくわぞふ
芳華帖　一巻　賴　襄

著者人の爲めに作る所の習字帖なり。嘉永六年癸丑(一八五三)十月十八日松陰主人機の跋あり。近年寫眞石版に附して大本に作れり。
◎類襄の傳記は「日本外史」の下にあり。

ばうくわんまんろく
傍觀漫錄　本五十七巻
安政七年庚申(一八五〇)より、慶應元年乙丑(一八六五)に至る、當時內外の事狀に關する雜記なり。內國に關する記錄は勿論、外國新聞紙の抄譯等を多く收錄したり。

はうくんしふせう
寶訓集鈔　本三巻
明君、聖君、天理、政治、禮儀、細謹、勸學、省身、省心、克己、務本、練議、任賢、知人、改過、君子、忍仁、賞罰、將帥、兵道等の諸部に分ち、古句を引き出でて其の大意を抄譯したるもの。今見るところは、上巻近衛關白信尹公晩年の正筆、中巻は同公の息女太郎姫の正筆、下巻は同關白信尋公十五六歳の頃の正筆にて、表紙は秋田城介實季の眞筆なりといふ。帝國圖書館貴重品とす。

はうくんぶんゐ
寶訓文彙　一巻　角田　忠行
「日本寶訓」「政草紙」その他の書中より、字弟の教訓となるべき條々を拔萃したるものなり。元治元年甲子(一八六四)十一月六日の自序あり。明治六年の出版にかゝる。
◎角田忠行の傳記は「古史略」の下にあり。

はうけいき
寶慶記　一巻　僧　道元
禪師が宋の寶慶元年、卽ち本朝嘉祿元年乙酉(一八五)入宋し三年間、天童古佛和尚の下に參禪して得たる法語を錄したるもの。延長五年癸丑(一九一三)圓爾辨圓山の刪寶慶記序あり、寛延三年庚午(一七五〇)瑞方面山の刪寶慶記序ありて、「正法眼藏」の下にあり。

はうけつづせつ
包結圖說　二巻　伊勢　貞丈
包の記、結の記と分ちて、物の包み樣組の結び樣を圖解したるもの。天保十一年庚子(一八四〇)源詮丈の序あり。弘化二年乙巳(一八四五)刊行す。
◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

はうけふんでんひやくしゆ
寶筐院殿百首　本一巻　足利　義詮
春日同詠百首和歌と題して、四季戀雜に分ちて百首を收む。「續群書類從」巻三百八十九、和歌部第二十四にあり。
◎足利義詮の傳は「義詮公難波紀行」の下にあり。

はうげん
放言　一巻　廣瀨　建
本名「義廉」によつて「き」の部に解題せり。

はうけんたいき
保建大記　二巻　栗山　愿
保元元年丙子(一一五六)後鳥羽院、崇德院の御爭より、延久三年壬子(一八五二)後白河院崩御の後、賴朝執權に至る凡そ三十八年間の記なり。非法謀叛にして「神皇正統記」に亞ぎ、文章は同書の上に出づとの評あり。元祿二年己巳(一六八九)の自序、正德二年壬辰(一七一二)三宅緋明の序、正德四年甲午(一七一四)安積覺の跋等あり。
◎栗山愿の傳は「幣帚集」の下にあり。

はうけんたいきうわさき
保建大記打聞　三巻　谷　重遠
栗山愿著「保建大記」の本文並に序跋等を悉く假名文にて註釋したるものなり。享保五年庚子(一七二〇)京都書肆菱城方道上梓す。
◎谷重遠の傳は「甲乙錄」の下にあり。

はうげんものがたり
保元物語　三巻
後白河院と崇德院との御爭に關する兵亂の記なり。作者明ならず。「平治物語」と同じく藥室大納言時長の作ともいへり。

はうさうろく
報衆錄　一巻　齋藤　馨
天保十一年庚子(一八四〇)秋八月より同十一月二十九日に至る四北旅行日記なり。漢文日次にて記す。末に詩數十首を附す。擷堂、長齋、小竹、蘐溪、春草、湖山、志樂等の評語あり。僧玉洞の序、安藝思溫の跋あり。

◉齋藤馨の傳は「樅竹堂文鈔」の下にあり。

はうさうろく

苞桑錄　本寫 三卷　姫井　集

此の書は松平定信の治績を、見聞に從て輯錄したるものなり。天明年間の作にかゝる。

はうさくしんぺん

交際 方策新編　本寫 十五卷

漢土朝鮮をはじめ他の諸蕃國との交通上に關する書翰類を輯集して、考を附し、その起源沿革等を記したるものなり。

ばうしういはくにきんたいけうづ

防州岩國錦帶橋圖　一鋪

周防國玖珂郡岩國なる岩國川〔或は錦川〕に架したる錦帶橋の圖なり。該橋は吉川氏の横山城大手要害の橋にして、急流の中に石崖を築き、其の上に大圓形五反の大橋にして、人馬の通行最も不便なり。牛馬車等は勿論、人も多くは下流の架橋若くは渡船にて往來せり。橋の裏面桁梁を組みたる所、恰も算珠に似たるを以て、俗に算盤橋(ソロバンバシ)といへり。表裏の壯觀、當時天下の第一たりしなるべし。此の圖は橋の一般と、水の流行く様とを略圖して同城下に版行したるものなり。

ばうしうかつうらなんきんせんへうちやくき

房州勝浦南京船漂着記　本寫 一卷

安永九年庚子〔二四四〇〕四月、大岡兵庫頭の領分、房州勝浦の内へ、南京船漂着したる事あり。當時の始末を、朝夷村百姓伊兵衞といふものゝ物語るを筆錄したるものなり。

はうしうくじゆ

芳洲口授　本寫 一卷　雨森　芳洲

和漢の雜事を漢文にて記せり。京都相國寺の僧岱琳が其の口授を受けて筆記したるものなり。延享元年甲子〔二四〇四〕の奥書あり。「甘雨亭叢書」にも收めたり。

◉雨森芳洲の傳は「橘窓茶話」の下にあり。

はうしうぜんじごろく

寶洲禪師語錄　二十卷　僧　寶洲

卷の一より三までに上堂、卷の四に陞座、小參。卷の五に小參。卷の六に示衆。卷の七に機緣、源流。卷の八に法語。卷の九に眞讃、自讃。卷の十に拈香。卷の十一より十六までに詩偈。卷の十七に古體、雜體、排律、歌、四言、五言、六言。卷の十八に小佛事。卷の十九に書、疏、啓。卷の二十に記、序、跋、銘、祭文、雜著等を收めたり。寶永五年戊子〔二三六八〕、「前住黄檗山第七代賜紫八十歳支那閩門弟道宗悅山和南敬撰」の序を揭げたり。

ばうしうりよかうき

防州旅行記　本寫 一卷

攝津大阪より、防州德山間の路次里程等を記し、其の間名所、舊蹟等の名稱だけを略記したるもの。最初防州德山より花岡までの路次を記し、順次闕戸より玖波に至りて防州の部を終り、藝州に至りては玖波より二十日市、順次本鄕市より三原に至り、備後に入りては三原より尾の道、順次板倉より岡山に至り、備前は岡山より藤井、大藏谷より兵庫に至り、攝州は兵庫より西宮、西宮より昆陽に至りて止る。未定の稿本なるべし。

はうしやうゐんづしよもくろく

寶生院圖書目錄　本寫 二十三册

尾州名古屋大須の寶生院眞福寺所藏の經藏圖書合總目錄なり。開卷第一紙に「經藏圖書今度夫々令修補、目錄總計二十三册、取調相渡之者也。文政四巳〔二四八一〕十一月二十三日、寺社奉行所印」とあり。

はうじやうゑをみるき

觀放生會記　一卷　太宰　純

寶永五年戊子〔二三六八〕男山八幡宮の放生會を觀たる時の和文記事なり。文化四年丁卯〔二四六七〕杏花園書寫の奥書あり。「甘雨亭叢書」に收めたり。

◉太宰純の傳は「經濟錄」の下にあり。

はうじやうゑかう

放生會考　本寫 一卷

元正天皇の養老四年庚申〔一三八〇〕秋九月、筑紫の宇佐宮なる八幡大神の託宣ありて、始めて行はれきといふ。放生會の來歷を述べ其の利否を論じたるものなり。

はうじやうゑしきぶん

放生會式文　本寫 一卷

每年八月十五日、山城國石淸水八幡宮に於て執行する放生會の儀式を記したるものなり。

はうじやうゑりやくしだい

放生會略次第　本寫 一卷　勸修寺經慶

石淸水八幡宮放生會の儀式を記したるもの。放生大會總次第を附記せり。延寶七年己未〔二三三九〕經慶書寫の奥書あり。

◉勸修寺經慶は武家傳奏經廣〔貞享五年薨去〕の子なり、父に繼ぎて敍爵を受け、從一位權大納言に至れり。

はうしやうくんかん

寶章訓函　一卷　僧　柔遠

眞宗蓮如上人の「五帖消息」中處々の文句を摘出して略解したるもの。明治十六年新に出版せり。

はうじゆゐんでんせいきよねんげつかう

芳樹院殿逝去年月攷　本寫 一卷　大久保忠寄

此の書は一名「御十代年數考」の下に解題せり。

はうしゆくをしやうろく

彭叔和尙錄　本寫 一卷　僧　彭叔

著者の詩偈文章を編輯す。天文中の作多きを見る。

◉彭叔は瓢庵と號し。自悅溪の法嗣となりて、東福寺に住す。元弘三年癸酉〔一九九三〕入寂す。

はうじゆつごせん

砲術語選　一卷　上田　仲敏

砲術に用ふる洋語を。日本いろは順に分ちて一々譯名を附したるものにて、同國人山田重脩と共に編する所なり。嘉永二年己酉〔二五〇九〕錦窠伊藤圭介の序あり。

◉上田仲敏は尾張の人にして、帶刀と稱す。本書の外に「西洋砲術便覽」三卷をも著せり。

はうじゆつづせつ

砲術圖說　本寫 二卷

小銃大砲の使用法及び布陣行止等の軍術を、詳しく圖說したるものなり。內題には「砲術言葉圖說」と記せり。

はうじゆつはつき

砲術發揮　本寫 十卷

西洋紀元千八百四十二年に版行せられたる「砲術發揮」を假字文に譯述したるもの。卷の一に、火藥、砲制、卷の二に隨身兵器。卷の三に刀劍。卷の四に砲車輪車。卷の五に彈丸、火熕製造。卷の六に發射。卷の七に不射投射名稱解。卷の八に砲臺建修、砲車、支給。卷の九に軍橋。卷の十に陸戰砲軍用法等の諸編に分ち、更に數十の細目を設けて詳說せり。

はうじゆつびえう

砲術備要　本寫 四卷　本木　正榮

西洋紀元一千七百五十一年〔我が寶曆元年〕に和蘭にて刊行したる「新撰大砲打放要術明鑑」とも云ふべき書を、譯述したるもの。譯者更に附譯するものありて、新に「砲術備要」とは名けたりといふ。卷の一に發端、放銃師勸戒大砲圖解、問答。卷の二に問答の二、點放法式問答。卷の三に裝藥分量。卷の四に火藥揀擇、火攻奇器。附錄に硝石等以上十條あり。文化五年戊辰〔二四六八〕官命によりて譯したるものなること、譯者の凡例にあり。著者本木正榮は長崎和蘭譯司たり。

はうじゆつめいかんくわせうせいざうろん

砲術明鑑火硝製造論　本寫 一卷　山田　森重

硝石火藥の製法用法等を記したるもの。文化五年戊辰〔二四六八〕閏正月脫稿す。著者山田森重は越中富山の人なり。

ばうしゆんわくもん

防春或問　本寫 一卷　鹽谷　世弘

防海事宜を或問體に論述したるもの。嘉永六年癸丑〔二五一三〕米人ペルリ來舶の時の著なり。

◉鹽谷世弘の傳は「阿芙蓉彙聞」の下にあり。

はうしよさうあん

報書草案　本寫 一卷

嘉永年間亞墨利加への返翰に擬したる草案なり。一家の外交論を見るべし。嘉永七年甲寅〔二五一四〕の寫本にて、「祕籍叢書」の中に收む。

ばうしんしふ

卯辰集　四卷　立花　北枝

蕉門諸家の俳句を集めたるものなり。蕉門の俳人楚常の編輯したるを、其の歿後元祿四年辛未〔二三五一〕北枝これを發行したるなり。近年發行の俳諧文庫第十編「元祿名家句集」の中にも收めたり。

◉立花北枝は俳人にて、鳥翠堂と號し、蕉門十哲の

一人なり。加賀國能美郡小松町の産、研屋彦兵衛の次男にして、次郎右衛門と稱し、兄牧童と共に俳諧を好み、金澤に移居して蕉門に入り、寛に北陸の俳祖となれり。門人等其の驚を繼き今に金澤宗匠の系をなせりといふ。著書に、花月傳、北枝傳、金言抄等あり。享保三年戊戌(一三七八)五月十二日歿す。金澤卯辰山心蓮社の境内に墓を築けり。

はうせいおだいき

寶正治代記 卷二卷

寶永、正德年間に於ける德川氏の事實を記したるもの。總目を擧ぐれば、上卷に、綱吉公御廢參の事、同襲御附り御事記並に役附、御用被仰付事、東叡山御入棺御法事の事、公家衆參向附り御贈位御贈官且又前田栄女及傷、淨光院殿御逝去御出棺御法事、增上寺御法事、御用懸衆御褒美、出仕並に獻上物附り月額の事、落髮並御役御免、席附免許の事、御遺物附り女中分け、御代替に付御參詣の事、追々被仰出事。下卷に御一周忌御法事、紅葉山御殿御造營の事、淨光院殿御一周忌之事、清揚院殿三十三回の事附り常憲院殿三回御忌の事、諸國巡見の事、武家諸法度の事、御服明御祉參の事、寅卯兩年八箇家追々參向の事、舞樂上覽の事、御自身御能並に蹴鞠の事、竹姫君樣御縁組の事等なり。

はうせきるいしょ

寶石類書 卷十五册 紀 宗直

有職故實禮式故事を輯集したるもの。諸家の記錄數十百中より、祕事、祕傳、口授、口傳、故事、故實、家傳、家說、先例、佳例、家禮、傍例等、流々說々あるを、類抄摘擧して、輯成したるものなり。寶曆二年壬申(一七四二)の自序あり。

◎紀宗直の傳は「三節會御膳圖」の下にあり。

ばうぜこうろく

亡是公錄 卷一卷

永祿四年辛酉(一五六一)より寶曆二年壬申(一七四二)に至る、石見濱田松平周防守の家記なり、家人の書留め置きたるものなるべし。

ばうぜこうろく

亡是公錄 卷一卷

山內對馬守一豐が慶長六年辛丑(一六〇一)土佐に入國せしより慶安の頃までに家人を成敗したる始末を記したるもの。家人の祕記なるべし。

ばうそうぐんがうかう

房總郡鄉考 二卷 烏海 醉車

此の書は一名「南總郡鄉考」の下に解題したり。

ばうそうぐんき

房總軍記 卷一卷

義眞より義康に至る里見氏九代の間房總二國を領し、關戰の次第より、義康の天正十六年戊子(一五八八)まで房州岡本に在城し、關原合戰の後鹿島三萬石に移封せられ、慶長癸卯(一六〇三)十一月逝去するまで九代間の卒年法諡等を記し、次に德川家康房總二國を討平し、之れを諸將に頒與せし事に終れり。桃園天皇の寶曆年間に記したるものなるべしと云ふ。

ばうそうこせつでん

房總古說傳 卷五卷 吉野 重泰

房總に關する事實な、國史雜史中より抄錄したるもの也。第一卷「命四道將軍事」より、「東國行幸事」に終り、第二卷「安房國置事」より、「房總任國領事」に終り、第三卷「將門系譜」より、「秀鄉家系事」に至り、第五卷を附錄とし、房總の名所和歌を集め、更に「下總風土記」の殘册を拔く。凡て五册に寫傳す。

◎吉野重泰は下總國千葉郡南生實村の人にして、八劍神社の神主なりと云ふ。別に房總名家傳十二卷、木朝神社考記の著あり。

ばうそうしれう

房總志料 五卷 中村 國香

房總兩國の地誌なり。寶曆中の作にかゝる。天保中田丸健良の撰びたる同結論六卷、寬政中、鶴岡安宅の同別本六卷等あり、

◎中村國香は上總國夷隅郡白井鄉長者里の人にして予關と號せり。

ばうそうしれうぞく

房總志料續 卷十四卷 田丸 健良

中村國香と共に寶曆十一年辛巳(一七六一)の初冬鄉里夷隅郡より出でて、埴生、市原、望陀、周淮、天羽の諸郡を經直に南折して房總界の鋸山に背き、安房の地平群、安房、長狹の三郡を歷覽し、夫より清澄山に登り、小湊浦を望み、再び夷隅の地釜宿を過ぎり、植野、勾屋、山田、海鹿の山嶺神坂を越えて、大掉芳賀といふ嶮難の嶺を下り、布施村の館山にまで

到れるまでの見聞記なり。地理上、歷史上の事實をも網羅せり。天保四年癸巳(一八三三)田丸健良の末記あり。著者田丸健良は上總國夷隅郡白井鄉長者里の人なり。

ばうそうちらんき

房總治亂記 卷一卷

上總國勝浦の城主庭木左近大夫、天正十五年丁亥(一五八七)安房の里見氏との爭闘より、同十八年小田原北條沒落の頃まで近國の諸會處々にて闘爭の次第を雜記し、末に慶長六年辛丑(一六〇一)房總地方の地震海嘯、同十四年上總國大多喜へ唐船漂着の次第を略記せり。卷末に寬文八年戊申(一六六八)度々謄寫の奥書あり。以て本書の好著にして廣く世に行はれたるを知るべし。

ばうそうまんろく

茅窓漫錄 三卷 茅原 定

種々の故實を記したる假名文の隨筆。其の目次の一端を擧ぐれば、驛路鈴、啐喙、佛法僧鳥、朱子學四書來由並に慶高祖徠二先生傳、史山訳並四書、檢地、伊豆那、混泥肝、和漢異年號、初午並稻荷、偏傍、枝折、鎗來由、木花櫻、ナガ玉木、四百餘洲、煙草、革命紀元、大纖冠像、神農祭並醫祖神、蔥忌草、飛鳥寺鎗並三貝由來等あり。就中三貝由來の如きは頗る長編なり、文政十二年己丑(一八二九)の自序を載せ、天保四年癸巳(一八三三)出版す。

◎茅原定の傳は「諸經名物集成」の下にあり。

ばうそうめいかでん

房總名家傳 卷十二卷 吉野 重泰

古今房總三箇國に關係ある諸名家の系統を略傳したるものなり。本書一、二、三卷までの事は別編「房總古說傳」に揭げ、第三、直方寄千葉城事」より、「蛭信東國下向事」に至る以下第十二「里見記」、第二「亂治記」等に終れり。

◎吉野重泰のことは「房總古說傳」の下にあり。

はうだいしんしき

砲臺新式 卷二卷

砲臺建築の事を記述したるもの。著者年代共に詳ならず。本書二卷の外、別に附錄二卷を添へたり。

はうちうぜんしょ

庖厨全書 卷二卷

炊蒸處、粉麪處、菜具處、烹調處、鳥獸處、菜蔬處、醃漬等の綱につき、更に細目數十を設け漢文にて略說す。著者の名は「潦水蘇短」と記せり。

はうちうびようわみやうほんざう

庖厨備用和名本草 十三卷 向井 元升

刊本「庖厨和名本草」と同物也。同名の下に解題す。

はうちうろく

庖厨錄 卷二卷

諸侯の料理法を、魚介、鳥獸、菜蔬、以下凡て土門に分ちて記載せり。

はうぢにねんうぢみゆきのき

寶治元年歌合 卷一卷

寶治元年十一月(一九〇七)早春霞、山花、五月、郭公、初秋風、海邊月、野外雪、忍久戀、逢不逢戀、旅宿風、社頭祝の題にて詠める百三十番歌合なり。藤原爲家判者たり。

はうぢにねんうぢみゆきのき

寶治二年宇治御幸記 卷一卷

後深草天皇の寶治二年戊申(一九〇八)十月、後嵯峨上皇、後深草天皇の宇治御幸の事を記したるもの。

峨上皇宇治に行幸遊ばされたる時の記。「續群書類從」卷八十六、帝王部第五に入る。

はうぢにねんき

寶治二年記 本一卷

寶治二年戊申(一九〇八)十月、或る廷臣の日記也。

はうぢやうき

方丈記 一卷 鴨 長明

著者日野の外山に閑居せる時、年來見聞ごとにも書き綴りたる隨筆なり。安元三年四月二十七日の大火、治承四年四月二十九日の大風、同年六月の遷都、養和の飢饉、元暦の地震のことなどを詳に記したり。卷末に其の住居のさまをいへる條に、その家のありさま、世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺のうちなりとあるにとれり。其の方丈といふ名の起りは、天竺に佛在世の時、維摩詰といふもの、毗耶離大城の中に於て、常に一丈四方の室に入り、假りに病に臥して、訪ひ來る者なしてゝ、身の病を以て、廣く說法得度したる由の故事によれり。本書は順德天皇の建保(一二一三―一八)中の作なるべしといふ。詞づかひは古雅に過ぎず信儘に陷らず、文は雄壯奔逸の氣に富めり、厭世の趣意充てりと雖も、淫猥柔弱の跡なし。普通文の模範として尊重すべし。註釋本には、加藤盤齋の「方丈記私說」二卷、槇島昭武の「方丈記流水抄」二卷、山岡元隣の「方丈記頭書」一卷、其外「方丈記諺解」二卷、「方丈記捷徑」一卷等あり、明治近刊の講義註解書を擧げなば十種にも餘るべし。

◎鴨長明は其の家代々山城國賀茂社の氏人にて、祖父季長、父長繼皆同社の禰宜なりき。長明幼より和歌を好み、父方の祖母に養はれたりしが、性質敏慧にして、才學あるまゝに禁中に仕へ、二條天皇の應保年中從五位下に敍せらる。和歌、管絃の道に精しく後鳥羽上天皇の寵を受け、藤原清範、藤原秀能等と共に和歌所の寄人に擧げらる。然るに長明は、父祖の跡なうさて賀茂の社司たらん素望ありしに許可を得ざりしより、遂に寄人をも辭し、雜髮して名を蓮胤と改め、洛外の山中に世を遁れぬ。時に年五十なりきといふ。著書は本書の外に、鴨玉集、無名抄、發心集、文字鏡、四季物語等あり。生死年月は定かならねど、一說には久壽元年甲戌(一一八四)に生れ、建保四年丙子(一二一六)六十三にて寂せりといふ。

はうぢやうきしせつ

方丈記泗說 一卷

方丈記を註して、頭書に掲示せり。まゝ世をも插入す。卷首には例の題號及び作意の事等を述べ、明暦四年戊戌(一六五八)刊行す。

◎加藤盤齋の傳は「伊勢物語初冠」の下にあり。

はうぢやうきさうしよ

方丈記頭書 一卷 山岡 元隣

方丈記の頭書に註したるもの。よく諸書を引徵し、綺麗をも揭げたり。

◎山岡元隣の傳は「食物和歌本草」の下にあり。

はうぢやうきりうすゐせう

方丈記流水抄 二卷 槇島 昭武

方丈記の本文を揭げ、頭註して、最も詳細なる解釋をなせり。蓋し同書解釋書中の最も明細なるものなるべし。卷首に作者の系圖本書の由來等を述ぶ。寶永三年丙戌(一七〇六)の自序あり。享保四年己亥(一七一九)出版す。

◎槇島昭武の傳は「有職小說」の下にあり。

はうちやうしよろく

庖丁書錄 本一卷 林 道春

先づ膳夫庖人等の由來を述べ、次に服飾、吉野國樌、若菜、御粥、草餅絲、水、嘉定、七夕、盂蘭盆、八朔、菊酒、亥子餅、節分豆、その他の典故來歷を記したる者也。

◎林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

はうぢんしんじゆつ

方陣新術 本一卷 松永 良弼

關孝和の「方陣之法」に基き、自ら意を加へて列布法を記したるものなり。年代記入なし。

◎松永良弼の傳は「方圓算經」の下にあり。

はうぢんのはふ

方陣之法 本一卷 關 孝和

方陣列布數の法則を記載したるもの、從來此法ありしも、本書は關孝和氏の始めて發したる法則なり。年代記入なし、方陣及び圓攢法を以て一書とす。關流傳書の一にして、七書中の一なり。

◎關孝和の傳は「大成算經」の下にあり。

はうていせうさ

方程招差 本一卷

先づ圭垛以上、方垛等を擧げて、後方程招差法を解きたる一小册子なり。年代及び著者記載なし。

はうてきるゐそう

方廸類聚 三卷 坂本 道傳

方位に關する編。年家神殺起例、年家三元二十四方位、年家神殺考、年家倒去神殺辨、月家神殺起例並に泊宮考、月家神殺考辨、三元二十四方位三十六箇月の圖、倒去の神殺考辨、泊宮考八方位六十年十二月之圖等を圖說す。漢文にて記す。文飾は宗係蓋し屋多く預かれりと)安政二年乙卯(一八五五)の序あり。明治に至り、「增補」として相續者が發行す。

◎坂本道傳は武藏國比企郡毛塚村の人にして通稱を半兵衛と云ふ。

はうとくき

報德記 八卷 富田 高慶

二宮尊德が諸處に於て家計を經理し、國政を興復したる事業を詳記したるもの。すべて六十餘項あり。全編假名文にて記す。安政三年丙辰(一八五六)十一月の著。明治十六年十二月新刻、宮內省の藏版たり。

◎富田高慶は福島縣磐城國任瘠と號す。官其の功勞を賞して叙位の恩典あり。

はうとくぐわいき

報德外記 二卷 齋藤 高行

二宮尊德が經濟上の主義方法等を記述したるもの。命令、分度、盛衰、興復、勤化、暴直、開墾、治水、助貧、備荒、敎化、全功、報德等の項目ありて、漢文にて記せり。安政元年甲寅(一八五四)の著。明治十八年新刻す。

◎齋藤高行は福島縣磐城國宇多郡中村の人、伯順と號す。

はうとくさんねんかすがごはつかうにつき

寶德三年春日御入講日記 本一卷

寶德三年辛未(一四五一)四月九日の御入講日記にて、「續群書類從」卷三十八神祇部第三十八に入る。

はうとくしゆい

報德趣意 本一卷

其の師二宮尊德の言行を記し、興國安民の要旨等を記したるもの。嘉永五年壬子(一八五二)の作。

はうとくせんく

寶德千句 本一卷

寶德四年壬申(一四五二)三月十二日、宗砌、宗松賢盛、忍猿、專須、日成、原春、超心、龍忠、與阿、梁心、金阿、利五、貞明、吉利等の催したる連歌千句なり。「續群書類從」卷四百七十四、連歌部第四に入る。

はうとくにねんせんどうしたあはせ

寶德二年仙洞歌合 本一卷

寶德二年庚午(一四五〇)十一月の仙洞歌合にて、河落葉、曉千鳥、遠霜雪、忍逢戀、松歷年の題にて、宰相典侍、二條式部卿親王、按察使公保以下凡て三十人、七十五番の歌合なり、一條兼良判者たり。

はうとくひやくばんうたあはせ

寶德百番歌合 本一卷

本書は「群書類從」に收むる所によりて、「百番歌合」の下に解題せり。今單行の寫本によりて、茲にまた此の名を揭げたり。

はうはうわ

方々和 本一卷

平方、立方以上の各數の和を求むる術を記載したるものなり。著者及び年代記入なし。

はうばんぢやうけんじゆつ

方盤町見術 本一卷 志野 郯卿

方盤を用て算術に依る所の測量術を記載したるものなり。從來行はる、町見術とは頗る其趣を異にしたり。

◎志野郯卿は庄之助、又掃犬と稱し、槇山と號す。紀州の藩士なり。內田五觀の門に入り數學を修めて其室に入り、算學を以て鳴りぬ。

はうふしき
方布式 一巻

招差法を以て各差を求め、而して是等の間歴を設けて其の波段を記したるものなり。年代及著者記載なし。本書は關流傳書にして、別傳目錄中にあれば、松永貞德の著なりしならん。

ばうふてんまんぐうれいげんき
防府天滿宮靈驗記 一巻

鈴木　高鞆

本書の成立は、弘化四年丁未(一八五〇七)の自序に説明して、天滿宮の御事とだに云へば、古今の國史家牒を始め野史に至るまで、見るまゝに書つけ置き、又近き世にありし靈驗どもを記せるも亦甚多くありて、自ら一部の書となれるを、其が中より我が仕へまつる松崎の御社(現に周防國佐波郡防府町に在り)にかゝりたる事のみ抜書して一冊となしぬ」と云へり。以て其の大要を知るべし。同年中川政巖の序もあり。

◎鈴木高鞆は、周防國佐波郡宮市(防府町)松崎天滿宮の祠官なり。

はうまんちやうじや
寶滿長者 一巻

天竺寶滿長者の事を通俗に記したるもの。寛文五年乙巳(一六六五)出版す。

ばうめいしそうき
亡名氏叢記 一巻

卷首に合戰といふ事の要旨を辨し、次に本守記(前田利家と佐々成政との軍事を記したるもの)、慶長四年三月廿三日前田利家の遺書、官地論(慶長元年佐々木高頼謀叛の事、加賀一揆蜂起の事、富樫政親滅亡の事等を記したるもの)、朝倉英林宗滴遺書、朝倉金吾利口條目六十七條等を纂輯したり。

はうもつしふ
寶物集 七巻

平　康頼

著者の見聞隨筆。最初治承元年丁酉(一一七七)藤原園の島を出で、同二年春再度若里に歸り、東山に籠り居る時、知人の訪ひ來りし話より書き起こし終始寶と云ふことに因みて、卑近なる佛教の教義傳說を數項說示したるもの。全編和文にてしかも雜へ記されたり。「續群書類從」中に元祿六年癸酉(一六九三)刊刻す。京都東山雙林寺に住居す。治承中藤原成親等と平清盛一族を滅さんことを謀り、事覺れて鬼界島に流されしに、途中勅免して名を性照と改め、居ること三年、赦に遇うて京都に還り、直に東山の苍藥に入り、復た世を願みず。

ばうやうぐんがうかう
房陽郡鄉考 一巻　鳥海　醉車

安房建置沿革說、國郡圖說等を掲げ、地圖をあらはして、郡鄉高を記載せり。孝明天皇の嘉永三年庚戌(一八五〇)に記したる新井世文の序あり、當時の傳記は「房總郡鄉考」の下にあり。

ばうやくしゆんじうさしでん
傍譯春秋左氏傳 三十巻

小畑　行簡

「春秋左氏傳」の全部を和譯したるものなり。安政四年丁巳(一八五七)の自序あり。

◎小畑行簡の傳は「詩山堂詩話」の下にあり。

はうやくしんしよ
砲藥新書 一巻　中居　義倚

火藥の製造法及び器械を圖示說明したるもの。安政二年乙卯(一八五五)櫛原政陳、高島敦の序あり。

ばうやくそんし
傍譯孫子 一巻　小畑　行簡

「孫子」を和譯したるもの。萬延元年庚申(一八六〇)の自序あり。

◎小畑行簡の傳は「詩山堂詩話」の下にあり。

はうらいせう
蓬萊抄 一巻　勘修寺重隆

正月元日の節會より、十二月追儺の儀式に至り、其の他臨時行幸、御祓等の作法を記述す。一名を「非職事雲客所役祕抄」といふ。文永八年辛未(一二七一)、弘安五年壬午(一二八二)等の奥書あり。「群書類從」卷百〇四、公事部第二十四にも收む。

◎勘修寺重隆は勘修寺家祖大藏卿爲房の三男にして、右衞門權佐たり。

はうりじゆんきやくへう
方理順逆表 一巻　和田　寡

曲線を成さゝるもの、卽ち直邊形、或は直面體等を截斷して以て測るものに就きて、其原點を定むるに順逆あることを說明したるものにして、極限の理、甚だ明瞭なり。此の法古來和刻して見るものなり。此書圖形に論及せざれども、實に四理を學ぶものの闕く可らざる良本なり。家傳書の一とす。年代記入なし。

◎和田寡の傳は「四理算經」の下にあり。

はうりやくかんき
保曆間記 一巻

後白河天皇の保元元年丙子(一一五六)より、光明天皇の曆應元年戊寅(一三三八)に至る一百八十餘年間の事實を記したるもの。筆を保元の亂に起して、後醍醐天皇の崩御に終れり。自序あれども姓名と編年とを記さず。

はうれきくわうせつしふ
寶曆廣說集 四巻

當時當中の事跡等を輯錄したるもの。まま怪妄の談に渉るものもあり、當時の世態を知るに足るべし。酒井讃岐守途中にて狼藉ものに逢ひし事に始まりて、松平主佐守海上にて、雜風に遭ひし事に終る、凡そ六十四條あり。

はうれきぶかん
寶曆武鑑 三巻

尾張三家を始め、同時代の武家を網羅して知行、石高、居城、家紋、臣下の事等を記したるものなり。此の種の書は當時殆んど年々に編輯せられたり。

はうれきよねんはちぐわつにじふごにちごとくだい
寶曆四年八月二十五日御得度次第 一巻

桃園天皇の寶曆四年甲戌(一七五四)八月二十五日、和議親王(尊統親王)御得度ありし次第を記したるものなり。

はうれつこうかげんげん
芳烈公嘉言 一巻

備前候池田光政の嘉言を輯錄したるもの。主君、農工商、水土、稅法、制禁、賞罰、筵士、諸役人等行執事の八目を立て、聖賢の教を主として國家を治むる要を說くこと頗る親切當明なり。芳烈は卽ち光政の謚號なり。寶曆十三年癸未(一七六三)の記。

はうろうかくでん
寶樓閣口傳 一巻　僧　明惠

成身觀、道場觀、寶樓閣三印、三摩耶形鉢、本尊、種子色、月輪觀、曼陀羅の事等を論述せり。天福二年甲午(一二三四)の奥書を附す。

◎明惠の傳は「高祖賞嘆式」の下にあり。

はえんさうべん
破烟草辨 一巻

煙草の有害論と、有益論との二說作を合したるもの。安永年間の作なり。一は稚生館主人、一は尻烟子の名を以て多賀三大夫と伊勢貞丈との作るところなり。

はがくんしふ
葉隱集 十一巻　僧　常朝

肥前鍋島侯歷代の系譜事績又は藩臣の事績にして勳勞の賞となるべき諸件を輯錄したるもの。本書は常朝禪師の談話を田代又右衞門と云へるもの、筆記したるものなりと云ふ。孝明天皇の嘉永五年壬子(一八五二)三月の序あり。著者常朝禪師は俗姓山本を稱す。

はがけいづ
芳賀系圖 一巻

清原氏芳賀左兵衞尉高俊より、慶長十七年壬子、二二七二)九月二十日に終して、悲田道光と法號せる芳賀左兵衞尉高武に至る十五代の列名なり。各名の下に其の法號を記せり。「續群書類從」卷百六十八、系圖部第六十三に收む。

ばかさんじんでん
痴漢三人傳 一巻　感和亭鬼武

和泉街の長太郎坊、淺草の阿婆土人、鹿の子餅の男子との三人を撰び和歌三神に模して作りたる一小說なり。文化三年丙寅(一八〇六)の自序あり。

◎感和亭鬼武は江戸の小說家。通稱を前野雞一郎といふ後受助と改む。別號を曼亭といふ。もと名橋な氏とせりしが、中頃一橋家の家臣前野某の名跡を襲さて御勘定役となる。家を女婿に讓りて、自ら山東京傳の門に入り、又曲亭馬琴に從うて專ら戲落に從事せり。晩年零落して、文政の初年病歿せり。著書は本書の外に、自來也物語、天城錦、化粧坂

闇の仇討、異疫巢劇種、四十八手後の巻哀傳居士談、嗚呼蜃氣樓、敵打盤手踟躅、逐疾入軍の仇討、悟迷惑心之鬼武、響放千里虎尾峠、三國和漢閙物語、慎道迷墓誌、金澤獺二部廻國話、函嶺復讐談、寶入舟七福大娯、仁王反英雄二木、聖寵奇談勿來園、敵討業平塚由來、同於牛ヶ紅粉、同十三鐘之由來、同怪談鬼武作物語、信夫摺錦之伊達染、淺草寺略縁起神酢仇討、三島婚化粧水墓、浮巣鉛忠義見通、敵討十三塚之由來、復讐鴨立澤、菩薩の角髪、滑稽仕形噺、國字詩階梯等あり就中「自來也物語」最も行る。

はがじえんぎ

羽賀寺緣起　本一巻

元正天皇の靈龜二年丙辰(一三七六)行基菩薩の草建に係るといふ、若州羽賀寺の古緣起なり。延寶三年乙卯(一三三五)の編にかゝる。

ばかしふ

馬鹿集　六冊

諸家の俳諧を集めたるもので、明暦二年丙申(一三二六)正月、秋田屋平左衛門といふ書肆の發行する所なり。

はかせよみかうしよう

博士讀攷證　本一巻　岡本　保孝

曰(いはく)、不可有(あるべからず)、敢(あへて)、惓(あだかも)、默(あざむく)、莞(あに)等、漢文の訓讀に用ひ來れる日本語百六十餘を擧げて考説したるものなり。「況齋叢書」の第四十にも收めたり。

◎岡本保孝の傳は「韻鏡攷」の下にあり。

はがたのつ

羽形圖　本一巻

矢の羽形百餘種を圖出したるもので、末に「此羽形は奥秀衡、佐々木源三、秀吉相傳之羽形也」とあり。「續群書類從」巻六百七十八、武家部第二十四に收めたり。

はかたゆり

博多百合　一册　井原　西鶴

著者の俳諧集なり。編輯の年時は未だ詳ならず。

◎井原西鶴の傳記は「小夜嵐物語」の下にあり。

はぎがはなすり

萩が花すり　本一巻

萩をよめる歌を集む。作者は信明、氏教、忠精、利厚、高久、家長、久周、孟翁、維祺、忠雄、安辰、孝寛、資眞、弘賢、その他直富の室、家長の室、雅敦等の詠するところなり。書名は最初の歌詞にとれり。末に「右一册文化三年(一八〇六)正月晦日、堅田侯勘源弘賢」とあり。

はぎだらに

萩陀羅尼　一巻　古川　松

著者の俳句なり。夫、萬葛の編輯したるもので、文政十三年庚寅(一八二四)刊行す。巻末に花讃女追悼の連俳句あり。近年發行の俳諧文庫第十編「元禄名家句集」の中にも收めたり。

◎古川松は横山萬葛の號なり。採菜庵萬里に學びて俳諧を學べり。文政十三年庚寅(一八二六)七月二十四日、年二十三にて歿せり。

はぎのつゆ

萩の露　一巻　榎本　其角

父の病歿に近づきたる時の家事狀況と、其夜の哀慟とを記したるのにて、元禄四年辛未(一六九一)の編にかゝる。近年發行の俳諧文庫第四編「其角全集」の中にも收めたり。

◎榎本其角の傳は「句兄弟」の下にあり。

はぎのはな

萩　花　三册　山本　西武

著者の俳諧集。承應三年甲午(一六五四)比の編輯なるべし。

◎山本西武の傳記は「あはは千句」の下にあり。

はぎはらずのひつ

萩原隨筆　本一巻

故實、歷史等の事實につきて、評論雜記したるものなり。巻末に「以墨河春村藏本模寫之」とあり。

はきよせ

はきよせ　本一巻

德川時代、幕府及び地方の雜事を輯錄したるもの。文政十年丁亥(一八二七)書寫のよしを記せり。

はきよせざうし

末代新語寄草紙　三巻　蓮臺道子

狂言綺語に關する戲作繪草紙なり。道化狂畫、どうけ三十六歌仙、江戸名所流言くらべ、行々婆ばら

ひ、厄除狂歌集、あるものづくし、厄除わらふ門、江戸はしづくし、浮世年代記、その他の雜戲を集めたり。安政五年戊午(一八五八)道際の戲画あり、同年發行す。

はきりしたん

破鬼理死端　一巻　鈴木　正三

佛說と比較して、耶蘇宗の所說を駁破したるものなり。寛文二年壬寅(一六六二)京都にて出版す。

◎鈴木正三の傳は「二人びくに」の下にあり。

はくいうかつさんざうでん

白雄葛三像傳　本一巻

信州松代の俳匠徹心白雄居士と一阿葛三居士との肖像と略傳となり。一は寛政年中五十七にて歿し、品川海晏寺の境内に葬り、一は文政元年戊寅(一八一八)六月、五十七にて鴫立庵に歿したる人なり。本書は安政六年己未(一八五九)みのむし庵御風の寫本するところなり。

はくいうやわ

白雄夜話　一巻　春秋庵白雄

俳諧の事、聯句の事、文と連哥との事、名所と地名の事、漢和和漢の事等より、蜜柑子の事、女なめとつかふ事、越人が鳴の浮巣の事、宝草の法花の事、俳諧の事等に至る凡て五十條を論述す。天保四年癸巳(一八三三)人花垣遥々の編輯したるもので同人の跋あり。近年發行の俳諧文庫第十五編「續俳諧論集」の中にも收めたり。

◎著者春秋庵白雄は、江戸の俳人にして、加舍五郎と稱す。烏酔(或は、ふくろ)松露庵烏明の門に入りて研究し、蕉風中興の一家となりて、春秋庵昨烏と號す。寛政三年辛亥(一七九一)九月十三日、五十三にて歿す。品川海晏寺に葬れり。

はくいんをしやうくわうねんせきやううた

白隱和尚荒年施行歌　一巻　僧　白隱

饑人貧者に施與せんことを喩せる短歌數首を掲ぐ。天保八年丁酉(一八三七)施本したるものなり。

◎白隱は駿河國原驛の人にして俗姓を長澤懇龍と云ふ松露庵烏明の弟子となり、僧となり松蔭寺單嚴の弟子となり、諸方に雲水し、年三十一歸りて修行數年にして、請方松蔭寺に住す。其の衆あたり、其の名遠近に聞え碩學高蹈を以て知られたり。また書を善くし、歌に妙なり。著書は本書の外に、市鼓、醫生草、魄安國語、圓提紀聞、息耕錄普說、荊叢寤言、夜船閑話、遠羅天釜、左之助草、資鑑貽照、寒林貽寶、紛引歌、毒瓜牙、八重洲、同二編、同三編、薗鹽果、辻談義、毒蛇遣、戊子二(一八〇二)十二月十一日、八十四歳にて入寂し、神機獨妙禪師の勅諡を賜ほる。

はくうんあう

馬具繪與　本一巻

手綱、腹帶、手繩、三尺繩、止綱、口指繩、馬繕、腹掛、馬中、魚革、馬櫛、頭鐵、爪打刀、裡取刀、裡鞘、爪打鐵、爪打板、刷刀、刷選、濡布、藥筒、魚捻、馬柄杓、馬鞭、引竿、尺指等の製法故實を圖說せり。享保十一年丙午(一七二六)永島卜也、伊東甚右衛門の奥書あり。

◎小笠原長時のことは「笠懸小笠懸」の下にあり。

はくうんくわんしがん

白雲館詩眼　一巻　熊坂　邦

作詩法を記したるもの。寛政六年甲寅(一七九四)の自序、岡田摂之の序あり。同九年出版す。

◎熊坂邦の傳は「永慕編」の下にあり。

はくうんくわんししき

白雲館詩式　一巻　熊坂　邦

近體の詩則に就て詳論したるもの。唐土の聲律に基きて其の要を主論せり。漢文にて記す。寛政六年甲寅(一七九四)二月の自序あり。同九年尾州名古屋にて出版す。

◎熊坂邦の傳記は「永慕編」の下にあり。

はくえいいかう

伯英遺稿　二巻　林　世興

著者の詩稿を、高橋体の編輯したるものなり。巻尾に宮川龍の撰したる伯英の墓碑銘を附錄せり。寛政十一年己未(一七九九)宮川龍の序、十二年恩田仲任の跋、整宇和元年源希逸の序、衛普敬の跋あり

◎林世興は美濃の儒者にして、大蓮と稱し、伯英と號す。寛政八年丙辰(一七九六)年十九にて歿せり

はくえんものがたり

白猿物語　本一巻　荷田　在滿

流鶯なる和文物語にて、實話を聞きて作りなせる

もの〳〵如し。或人船に乗して無人島に漂着し、数多の猿と共に生活し、只管便船を待てるに或る日一外國船を認めて、それに乗り移り急ぎ馳せたれば、後にて島なる白猿これを追慕し、船に向て頻りに叫びたりしが、船の漸く遠かるに随て、白猿も更に決心せるものの如く其の子猿を抱きて千尋の底に身を投じたりとて、その心いとせめてあはれなれば戯れに白猿に代りて船を慕ふ時の心をとて歌さへ添へたる物語なり。元文四年己未(一三九九)水無月望の夜に戯作したるものなり。

◎荷田在満の傳記は「羽倉考」の下にあり。

はくおうしやうしせう

白鷗莊詩鈔　七巻　田中　榮

第一巻に水雲集古今體共八十八首。第二巻に擷芳集古今體共七十八首。第三巻に風巒集古今體共七十三首。第四巻維新集古今體共六十四首。第五巻に霞餘集古今體共八十首。第六巻に閑居集古今體共百三首。第七巻に試筆集古今體共六十四首。通計五百五十首を収めたり。巻首に著者の小像と自讃とを掲げ、次に文久元年辛酉(一八六一)秋八月、門人常孝の凡例末に慶應三年丁卯(一八六七)秋七月の自跋あり。明治三年三册に出版す。

◎田中榮は子順と字し、湖東と號し、また莊を白鷗莊と號す。

ばくかしかん

幕下士鑑　寸　四册

旗本五百石以上、九千石以下の名を録げ、家紋、石高、住宅等を記したるものにして、其の人員總數五千二百三十五人、石高凡て二百六十三萬八千二百五十石五斗三升六合二勺四才なり。横綴四册に寫傳す。

はくがちやうかふ

博雅長行譜　本　二巻　源　博雅

管譜の書。横笛、雙調曲、黄鐘調曲、水調曲、盤渉調曲、角調曲、亂聲、林邑物、伎樂等の譜を掲ぐ。康保三年丙寅(一六二六)十月十四日、正四位下行左近中將兼近江權守源朝臣博雅の末記あり。享保十六年辛亥(一三九一)九月十五日、正五位下行左近衛將監駿原倫秋の寫本するところなり。

◎源博雅は二品兵部卿克明親王の長子にして、醍醐帝の皇孫なり。中務大輔、皇太后宮權大夫等に歴任して従三位に叙せらる。世に博雅三位と稱す。琵琶の名手なり以て名あり。天元三年庚辰(一六四〇)九月十八日薨す、年六十三。

はくがんせう

白眼抄　本　一巻

京都所司代板倉周防守の裁斷逸事を輯録したるものなり。

はくぎうらくかう

白牛酪考　一巻　桃井　寅

白牛酪の主治效驗を考證說明したるもの。徳川八代將軍吉宗、始めて白牛三頭を安房國嶺岳に放ちてより、其の牛漸々蕃息す。仍て寛政四年壬子(一七九二)從五位下石見守岩本正倫、幕命によって嶺岳に至り、牛乳數石を得て乾酪を製す。時に著者も亦た其の治功を考へしむ。是れ其の結果を發表したるものなり。同年同岩井石洲の序、樋元周の跋等あり。

はくきをみることは

白氣を見る詞　本　一巻

天保十四年癸卯(一八四三)中春、西南未申の方にあたりて、白氣立ち顯れたる時の記なり。末に同二月二十二日夜江都藩邸燈下に記す由あれど、名は「小枝」の二字を書せるのみ。「土佐國群書類從」巻百十二に收めたり。

はくぎさいせう

博戯犀照　寸　一巻　山崎　美成

雙六、樗蒲、四一半、何筒、加留多、三筒附、穴市、於花こま等の冬種類につき、其の起原を考證したるものなり。

◎山崎美成の傳は「畸家便覽」の下にあり。

はくぎよくしふ

柏玉集　十巻　後柏原天皇

御歌集。巻一より巻八までを部立し、巻九、十は百首の御製なり。

◎後柏原天皇は後土御門天皇の御子にして、文明十二年親王となり、御年十七にして加冠し、明應九年三十七にして即位し給ふ。當時應仁の亂後を受けて朝廷幕府共に衰微して、踐祚の大禮も長く行はれざりしが、大永元年本願寺僧光兼其の資を獻納するに及びて始めて大儀を行はせらる。同六年丙戌(一五二六)御年六十三にて崩じ給ふ。

はくくわうもんだふこうへん

白黄問答後編　本　一巻　藤原　定基

「新野問答」の異名同物なり。故に同名の下に解題せり。

はくけいふくんぎやうじやう

白圭府君行狀　本　一巻　松崎　惟時

著者の父、子允の一生行狀を記したるものなり。白圭はその號にして、子允はその字、通稱は左吉といへり。寛暦三年癸酉(一七九三)六月の記にかゝる。

◎松崎惟時の傳は「親海集」の下にあり。

はくけぶるる

白家部類　本　一巻

此の書は一名「白川家部類」の下に於て解題せり。

はくけぶるる

伯家部類　本　二巻

神祇官の事、内侍所の事、並に渡御の事、内侍所御神樂の事、内侍所御拂の事、御鏡御拜の事、毎朝御拜並に御代官の事、臨時御拜の事、並に御月待御月待の事、正月御拜始の事、攝關御傳授の事、廢朝の節御拜御代官の事、伊勢遷宮の事、例幣の事、大嘗會の事、御即位の由奉幣の事、諸社御祈の事、臨時公卿勅使の事、鎮魂祭の事、院御拜の事、作進の事、八神殿再興の事、家系の事並に裏頭女王の事、神事傳授の事、寮籠の事、伯無製服の事。以上二十五件神祇伯白川家に關する部類記なり。古き所より起りて、大抵享保年中に終れり。

ばくさうしよ

馬具雜書　本　五册

直鞍流の序の巻、二十箇條の巻、旋並に筋目利書、鞍鐙並に轡切付小道具押掛手綱手綱繰の圖、綱の書、鞦の書、馬道具請取渡の書等を叢書す。

はくさんさうもくし

白山草木志　本　二巻　畔田　伴存

文政年間、加賀白山に採藥せる時、福井より、白山に至れる道の記にて、まゝ途中の眞景畫を圖入す。

◎畔田伴存の傳は「水族志」の下にあり。

はくさんしふ

白山集　五巻　平賀　周藏

著者の詩稿を男安藏の編輯するところ。諸體すべて五百二十九首あり。寛政六年甲寅(一七九四)皆川愿、赤松滄の序、僧六如の跋等あり。五巻四册に作る。

◎平賀周藏の傳は「蝸廬庵集」の下にあり。

はくさんほうのふしふ

白山奉納集　三册

白山奉納の俳諧集にして、延寶六年戊午(一六七八)九月の編輯にかゝる。同追加一册あり、伊勢の住慶産神主の編なり。

はくさんほうのふしふつるか

白山奉納集追加　一册

「白山奉納集」に追加したるもの。菊酒の附句あり。

同じく延寶六年戊午(一六七八)九月、慶産神主の編するところにかゝる。

はくしへん

白絲篇　三巻　僧　善意

論題を設けて淨土眞宗の教義を敍述したるもの。聖淨權實より小兒往生に至る十題あり。附錄として致請編及び信願開合集を載せたり。本編著作の年代を記さず。致請編には延享四年丁卯(一七四七)僧機の序あり。併せて天明元年辛丑(一七八一)に刊刻す。

◎善意は眞宗本願寺派の僧。字は芳山、尺伸堂と號し、越中水見西光寺に住したり。其の著す所は本書の外に、大經弘顯釋七巻、阿彌陀經通贊三巻、正信偈歸伸錄四巻、評論辨一巻、琵琶湖叢編三巻等あり

はくしゆどかう

駁朱度考　一巻　荻生　茂卿

幕命を奉じて明朱載堉の「律學新說」を駁議したるもの。巻首照下に「周尺の考は大概の寸並に明の三種尺本據なき事」と記せり。近年刊行の「日本文庫」に收めらる。

◎荻生茂卿の傳は「蘐園叢錄」の下に在り。

はくすゐらうしきかう

白水郎子紀行　本　一巻　岡西　惟中

本書は副讀して「あまのこ紀行」の下に解題す。

ばくせいこじだん

幕政故事談　一巻

幕府の諸記錄中より抄出し、または自家の見聞等を以て幕政の一斑に關する記なり。寛政年中の作なるべし。「温知叢書」の第二編中に收む。

はくせきいかう

白石遺考 本朝十卷　新井　君美

著者の考證遺編を集錄したるもの。岩松家系附錄序說、人名考、河川兩字通用考、國郡の名の字の事、我邦文字傳來考、本朝樂曲考、漢土樂曲考、東遊考、木瓜考、淮后准三宮考、決獄考、玉考、聖像考及び進呈案等を收む。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきいしよ

白石遺書 本朝一卷　新井　君美

正德三年癸巳（一三七三）三月、諸役人諸侯士の分限の事などを論じて、奏進したる案文なり。「三月農記」と題するものと異名同物たり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきいぶん

白石遺文 二卷　新井　君美

上卷に史論、下卷に史論、雜著、詩聯句を收め、凡そ數十編あり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきいぶんしふく

白石遺文拾遺 二卷　新井　君美

上卷に序。下卷に雜著及び詩を收む。凡そ八十餘首あり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきかう

白石雜考 本朝八卷　新井　君美

著者の考證編、聖像考、決獄考、樂考、木瓜考、供僧考進呈案等を收む。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきさつき

白石雜記 本朝一卷　新井　君美

著者の考證編、淮后准三宮考、進呈案、人名考、岩松家系附序說、河川兩字通用考、國郡名字考等あり

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきさつべん

白石雜辨 本朝一卷　新井　君美

著者の考辨を集めたるもの。宮次第可據官位令之辨、雜事行之辨、參議號宰相辨、解刑部尙輔之考、大察小察之辨、職原抄准大臣編點不同辨、死者行寺葬川辨等を集收す。皆漢文なり。「島海叢書」の第二十一に收む。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきし

白石子 本朝九卷　新井　君美

地名河川字考、國郡名字考以下、著者の述作數十種を叢書したるものなり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきしさう

白石詩草 一卷　新井　君美

著者の詩集。正德元年辛卯（一三七一）朝鮮人李礥、趙大億、高芝岳、李邦彥等の序跋あり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきしひつご

白石子筆語 本朝二冊　新井　君美

著者が文學その他の考證事項につき、諸家の問に答へたる文書なり。各、項を改めて當時の月日等を記せり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきしゆかん

白石手簡 本朝二冊　新井　君美

第一冊は白石の加賀の小瀨復庵に贈酬したる手翰一百通を、平澤元愷の輯錄する所。第二冊は新井君美與室直清書九卷、「同與內匠頭書」、木佐錄附書の三種を合本したるもの。就中室直清に與ふる書には、寬政二年庚戌（一四五〇）立原萬の跋ありて其由來を記せり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきせんせいこけいふ

白石先生御系譜 本朝一卷　新井　君美

清和天皇より德川五代將軍綱吉に至る系圖なり。正統を主として記し、傍親は其の間に註記せり。書名は後覽の附したるものなり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきせんせいごけいふ

白石先生御系譜 本朝一卷　新井　君美

清和天皇より德川五代將軍綱吉に至る系圖なり。正統を主として記し、傍親は其の間に註記せり。書名は後覽の附したるものなり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきせんせいさうじゆつ

白石先生叢述 本朝一卷　堤　朝風

白石の著書百五十部を列記したるもの。附錄として白石の逸事十數條、其の碑銘、系圖等を載す。享和三年癸亥（一四〇三）四月の自序あり。「中古叢書」に收めらる。

◎堤朝風の傳は「近代名家著述目錄」の下にあり。

はくせきせんせいちよじゆつもくろく

白石先生著述目錄 本朝一卷　堤　朝風

白石の著書百五十部を列記したるもの。附錄として白石の逸事十數條、其の碑銘、系圖等を載す。享和三年癸亥（一四〇三）四月の自序あり。「中古叢書」に收めらる。

◎堤朝風の傳は「近代名家著述目錄」の下にあり。

はくせきせんせいていじりやく

白石先生事略 一卷　新井　君美

著者の詩集。正德元年辛卯（一三七一）朝鮮人李礥、趙大億、高芝岳、李邦彥等の序跋あり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

新井白石の著「殊號事略」二卷、「外國通信事略」、「琉球國事略」、「高野山事略」、「本朝寶貨通用事略」各一卷。以上五書を合せて五年略と名けたり。「中古叢書」に收めらる。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきせんせいしんしよ

白石先生紳書 本朝十卷　新井　君美

著者の雜考なり。卷の乾九二九五の辭の事、孝經に先王の法服と言ふ事附禹王の事、聖賢人を知る術等より、大黑天の事熱田の寢殿伊勢の御寶殿の事に至る凡そ數百條あり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきせんせいずひつ

白石先生隨筆 本一卷　新井　君美

和漢の雜事を傳聞のまゝ又は問答せし事などを記す。片假名文なり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきせんせいせうひん

白石先生小品 一卷　新井　君美

著者の考證文なり。武家次第の事、武家官位の事、武家裝束の事等を略說す。本書は前山誠齋幕府の臭右筆なりし時、官庫の秘書を抄寫せしものにて、白石の政府に上りたるものなりといふ。「温知叢書」の第二編に收む。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきせんせいそうしよ

白石叢書 本三十册　新井　君美

家の著書を叢書したるもの。その日を畢ぐれば、新井家系、同附錄、輔記、古說の序、文廟御遺誡、木瓜考、玉考、俳優考、樂考、起請文考說、聖像考、進呈案、決獄考、人名考、地名河川兩字通用考、淮后准三后考、癸巳三月議、視樂筆談、東音譜、御製譜、將軍宣下三十一度儀不同次第、朝鮮國信書式、樂對、史疑、那須國造碑釋文、紺珠、紳書、國書復號紀事、關原正傳、白石與鶴巢書簡、本朝軍器考餘、朝鮮聘使錄、奧羽海運記、日東行程考、北海隨筆、白石書翰、蝦夷風土記、蝦夷之記、南島志、白石遺文、白石先生著述書目、國製正誤、蝦夷志、利法典例、黃門白石問答、新室手簡、長久手記、朝鮮通交錄、小牧戰話、骨董錄、殊號事略、外國通信事略、中華並外國土產、琉球事略、本朝寶貨通用事略、高野山事略、采覽異言等なり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきたいしろく

白石退私錄 本三卷　新井　君美

著者の假名隨筆なり。師木下順庵に受るところの說最も多し。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせきらん

白石爛 本十四卷　新井　君美

著者の著作中、「殊號事略」以下、數十種を叢書したるもの也。今見る所は、閱卷を省きて四十餘種を收めたり。

◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はくせんしかう

帛川詩稿 二卷　藤田　安正

著者の作、雜懷の詩を集めたるものなり。詩佛、宅山の批閱する所なり。文政十一年戊子（一四八八）蟠路儒員居公幢宅山の序、同十三年大雅詩佛の序、天保二年辛卯（一四九一）宅山の跋等あり。

◎藤田安正は宰都宮藩の詩人、手靜と字し、帛川と號す。

はくせんしふ　泊船集　六巻　風國

芭蕉の遺稿を集めたり。巻一に芭蕉翁道の記、巻二より巻五までに芭蕉庵拾遺稿、巻六に追加として同門俳家の發句を收めたり。元祿十二年戊寅(一六九九)の編輯出版に係れり。

◎風國は京都の人にして、有名の俳人去來の男なり。俳諧を以て當時に知らる。

はくたうしふ　白湯集　一巻　太田　元貞

著者の西遊の絶句詩集なり。凡そ數百首を掲げ、附錄を文の部として、十餘編を載す。白湯は和訓さゆの意にて、淡泊を意味すといふ。著者の友人大窪天民の「西遊集」を人嘲りて白湯集といへるより、著者自ら其の西遊詩草をかくは名けたるなり。文政三年庚辰(一八二〇)の自序あり。

◎太田元貞の傳は「周易詳說」の下にあり。

はくだつ　剝脫　木一巻　關　孝和

「方々和」に於て、其の積を以て段數を求むる術を記載したる書なり。年代記入なし。

◎關孝和の傳は「大成算經」の下にあり。

はくだらに　白陀羅尼　一巻　各務(かがみ)　支考

從晉、北枝、支考の發句を集め、下半を机右と題して諸家數十名の句を畀けたり。俳諧の變記を其の吟味上に發現せるなり。元祿十七年甲申(一七〇四)編者東華坊の自序あり。

◎各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

はくたんかこくじやく　駁短歌國字譯　木一巻　屋代　弘賢

藤塚子章の「短歌國字譯」を辨駁したるものにて、末に古華の徵證たるべきものなどを模寫せり。

◎屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

はくたうしふ　白雉帖　木一巻　高　玄岱

孝德天皇白雉圖、文武天皇慶雲圖、大江匡房賦四百句圖、源經信兼三才圖、平重盛諫父圖、以下皆歷史上の事實につき漢文にて敘述したるものなり。白雉圖の事を先づ出せるより取りて帖名とせり。巻末に「高芝喬寒言撰」と朱書す。

はくでんせう　莫傳抄　木一巻　源　俊頼

萬葉集なる草木並に十二箇月異名を擧げ、その每種每月に詠みたる歌を照載したるものなり。本書或は「萬葉集草木並十二月異名集」といふ。

◎源俊頼の傳は「金葉和歌集」の下にあり。

はくはあうきかい　白馬奥儀解　一巻　各務　支考

本書は一名「芭蕉翁二十五條解」の下に解題せり。

はくばしふ　白馬集　二冊

正秀、酒堂の俳句集にて、元祿十五年壬午(一七〇二)京都井筒屋より出版したるものなり。

ばくはんさそくき　麥飯さそ草　一巻　熊谷　蓮心

麥飯の效力を列擧したるものにして、安政六年己未(一八五九)七月の著なり。

◎熊谷蓮心は鳩居堂と號す。京都寺町通姉小路の書畫墨等の豪商なり。當時賴山陽を始め學者多くは蓮心の補助に資れり。且慈善を主とし他人にも之を勸誘せり。予孫其意を繼ぎ今に繁榮せるは積善の餘慶と謂ふべし。

はくはんじつき　白藩實記　木六巻

天明七年乙卯(一七八五)より寛政二年庚戌(一七九〇)に至る、松平定信白川藩執政中の雜記なり。郎中の沙汰總狀觸書等より當時の童謠里諺の寓言等を集錄したり。

はくふくろく　剝復錄　木二冊　塚村嘉平吾

天明六年丙午(一七八六)關東に洪水饑歲ありて、

東部大に騷擾するにあたり、備州公出でて、仁慈の政道を布き、人心悅服の美事の里談巷說の見聞に入りしものを書き集むといへり。もと三册ありしが、其の初の一册傳はらずといふ。

◎塚村嘉平吾は備前の藩士にして、山陽の宿儒西山拙齋の門に學び、文學に長じ、郡事に心を用ひ、備中國淺口郡地頭村の小吏たり。本書は其の餘暇に編輯したるものなりといふ。

ばくふじだいどゞけきうしわたし　幕府時代屆申渡　一巻

寛文元年辛丑(一六六一)より天保十年己亥(一八三九)まで、德川幕府に處理したる屆書申渡文を輯錄したるもの。修史の資料となるべきもの多し。近刊「百萬卷」の第九に收めらる。

はくぶつくわいもくろく　博物會目錄　木六册

文政、天保、嘉永、文久中、尾藩修養堂に開設したる博物會の陳列珍異を排列記載したるものなり。

はくべんだうしよ　駁辨道書　二巻　僧　乙堂

太宰純の辨道書を辨駁して、佛教の說を主張したるもの。元文四年己未(一七三九)三月、前の自序あり。

◎乙堂の傳は「正法眼藏續紹講義」の下にあり。

はくほしふ　伯母集　一巻　關　盈文

此の書は一名「康資王母集」の下に解題したり。

はくほしふ　伯母集　木二巻

諸家の歌を雜載したるもの。「一枝軒打聞」には、伯母集に或說に一色菜の伯母の作云々といへり。

はくみやうわろく　白明語錄　木一巻

元祿十五年壬午(一七〇二)江戸芝の泉岳寺に在りし白明和尚の、赤穗義士に關せる談話を、戸部眞黙が筆記したるもの。談話したるは寶曆五年乙亥(一七五五)四月なりしより、同十一年辛巳五月眞黙の奥書に見えたり。「土佐國群書類從」巻六十六に收めらる。

◎白明は土佐國土佐郡森郷の産、月海と號す。元祿十五年壬午(一七〇二)、十九歲にして郷里を發し江戸に至り、享保三年戊戌(一七一八)越前を經て歸國し、同國宿毛郷南山東福寺に主たりき。

はくようき　白應記　一巻

信濃國諏訪の神平より來るところの白鷹の記なり。其の諏訪川の長を論じて、文末に「誠に我が國の奇物、他州の異禽たるをや、よりて粗是れを記するなり、田安家に仕へ、後、賀茂氏凱翁を進めて同家を去り、後進に教授せり。著書には大嘗會具釋、大嘗會儀纂、本朝制度略考、令三辨、裝束錄考、國歌八論、古今集左注論、長月物語、白猿物語等あり。寛曆元年辛未(一七九一)四十六歲にて歿す。

はくらいきんづる　舶來禽圖彙　一巻　關　盈文

舶來鳥類を圖說したるもの。詳しくは「海舶來禽圖說」の下に揭ぐ。

はくらいぐわんきんいちらん　舶來玩禽一覽　木一巻　柏原　信好

舶來の禽類凡そ二十六種を列記したるものにて、弘化四年丁未(一八四七)の記にかゝる。

はくらいしよじやくたいいしよ　舶來書籍大意書　木四巻

清商が長崎に舶齎したる書籍の大意を解題したるもの。長崎官吏より其の鎭臺へ進呈したるものならんと云ふ。

はぐらかう　羽倉考　二巻　羽倉　在滿

種々故實の考證を輯錄したるもの。項目の一斑を擧ぐれば田租正稅公廨及出擧、王臣家領來由考、兵士考、地下人考、除目名目略解、山藍之事、衣服考、水干考、烏帽子考、祖神考、蘭紋考、青海波裝束考、唐紙考、倭米考、君臣養父母之服忌微考、其の他十數項あり。延喜より寶曆の頃幕府命を各家に下して、得る所の考案を呈出せしむ。本書また其の一なりと云ふ。

◎羽倉在滿は東之進と稱し、荷田宿禰在滿(アリマロ)と云ひ、持之と字し、仁良齋と號す。東滿(アヅママロ)の姪にて其養子となり、田安家に仕へ、後、賀茂氏凱翁を進めて同家を去り、後進に教授せり。著書には大嘗會具釋、大嘗會儀纂、本朝制度略考、令三辨、裝束錄考、國歌八論、古今集左注論、長月物語、白猿物語等あり。寛曆元年辛未(一七九一)四十六歲にて歿す。

はぐらけさんだいのぶんしやう
羽倉家三代之文章 木一冊
春滿の「神代和歌釋」と、在滿の「姓氏考」と、御風の「佛本朝臣人際畫像考」とを集めて、「羽倉家三代之文章」とは名けたるなり。

はくらんこげん
博覽古言 十卷 菅原 道眞
六經正史諸子家訓等より脩身道德に關する要言を拔抄したるもの。之れを君道、政事、文學、武備、禮法、官制、祭祀、人倫、人事、刑法、祥瑞、臣道、風俗等の編目の下に類聚せり。本書の原名を「菅蠡鈔」と云へり。現本は天明五年(一七八五)に補刻す。
◎菅原道眞の傳は「菅家文草」の下にあり。

ばくりんしふ
麥林集 三卷 中川 乙由
春、夏、秋、冬、神祇、戀別、留別、雜戀、慨等と分類して著者自作の發句を集めたるもの。一名を「麥林舍發句集」とも云へり。編輯の年代詳ならず。
◎中川乙由の傳は「俳諧之條々」の下にあり。

ばくりんしやはつくしふ
麥林舍發句集 三卷 中川 乙由
此の書は前に掲げたる「麥林集」と同物なり。

はくれんちくわんしせう
白蓮池館詩鈔 二卷 河野 亮
著者の詩を雜載す。友人林英の校するところたり。

はさんい
美濃派の俳諧宗匠平と逢支とが聯句に加評したるを、著者が更に局外より評論したるものなり。近年發行の俳諧文庫第六編「也有全集」の中にも收む。
◎横井也有の傳は「翼衣」の下にあり。

はこだてらいさしよるゐ
函館來槎書類 木十九卷
文化十年癸酉(一八一三)九月十二日、魯西亞船エトモ灣在中、函館へ差し出したる假字書、同高田屋嘉平に贈る假字書、同代島章平に贈る假字書等以下數十通の書類を編輯したるものなり。

はこねをんせんみちのき
箱根溫泉道之記 一卷
江戸より箱根に至れる記にして、途中の里程、名所、溫泉に關する事等を記せり。寶曆十三年癸未(一七六三)潛龍の序あり。著者は「東都淺草栖霞長慶」とのみ記せり。

はさみものゝき
挾物之記 木一卷
射的口傳の書。卷首に「挾物いはれの故實に、小笠懸の的に、板を挾みて射たるより初るもの。年頭の弓始にも、又勝負にも射るなり。挾物初る時代も、いつよりともなしと」記せり。「續群書類從」卷六百七十一、武家部第十七に入る。

はさんいかう
把山遺稿 一卷 口羽 德祐
著者の詩文遺稿を、坂上忠輔の編輯するところなり。羽倉用九の序、慶應元年乙丑(一八六五)端午、藤原櫻老の序等あり。
◎口羽德祐は本姓を大江、諱は通琦、字は希琦、一の名を親之といひ、把山また憂庵と號す。家世々長州の重臣たり。安政六年己未(一八五九)年二十六を以て歿す。

はさんししふ
潮山詩集 六卷 田長 溫
卷の一に擬古樂府三十六首、五言古九首、七言古十一首。卷の二に五言律百七首、五言排律二首。卷の三に七言律八十五首。卷の四に七首律八十二首、七言排律一首。卷の五に五言絕句三十八首、七言絕句九十二首。卷の六に七言絕句百四十五首等を集む。寶曆八年戊寅(一七五八)服部元喬の序、同七年龍長愷の序、同山根清の跋あり。明和二年乙酉(一七六五)の出版にかゝる。著者田長溫は長門の人にして、子恭と字す。

はし
馬誌 木一冊
馬に關する諸般の事を誌したるもの。馬の原始より馬の性質、馭法、療法及び馬具のことに至るまで古今の書に據りて記錄せり。皮相、旋毛、裏駿、調習、蓄養、治療、規則、器具、雜語等の諸部に大別し、通編六十卷、まゝ、繪圖を插む。年代、著者共に詳ならず。或は昌平黌地誌編輯久保筆黌等が安政年間の作なりといふ説あり。

はしがきぶり
はしがきぶり 一卷 建部 涼袴
入代集中の端書な、四季戀雜に分ちて、歌文の例となせり。「後編はしがきぶり」一卷をも著せり。
◎延部涼袴の傳は「歌文要語」の下にあり。

はしもり
橋守 一冊 荷兮
著者の俳句集なり。元祿八年乙亥(一六九五)の編にて、京都俳諧書林井筒屋より版行したるもの也。

はじやうき
馬上記 木二卷
京より東海道を經て江戸に至る五十三驛間なる、山川、城邑、神社、佛寺、古蹟、典故及び每驛の戶數等を記し、かねて木曾路、美濃路、甲州路等の大略をも掲げたり。

はじやうしふ
馬上集 木一卷 僧 心敬
連歌に關する論述。卷末に心敬僧都、九條殿若君と石山へ供奉の時、僧都道すがら馬上にて、たゞちに答へたる條々を、後に自筆して進上したるものなるを記せり。「續群書類從」卷四百九十五、連歌部第二十五に收めたり。
◎心敬の傳は「老のくりごと」の下にあり。

はじやうしんちよ
潮城新著 一卷 山縣 子祺
長藩萩の學者の文を集めたるもの。山縣周南の文五編、山子瀾の文二編、四公記の文二編、流長儀の文二編、仲士路の文二編等を收む。大江慶渕の序、寬延元年戊辰(一七四八)編者子祺の序あり。同二年出版す。
◎山縣子祺は長門の儒者にして、秀八と通稱し、名彦と字し、洙川と號す。山縣周南に學べり。

はじやけんしやうき
破邪顯正記 五卷 僧 眞道
日蓮宗の教義を難破したるもの。法華經に對する日蓮の見解を斥して天台宗の解釋を演べ、且つ日蓮が四箇格言を主張して諸宗を罵詈するを返駁したるものなり。六十七章段に分れ、假名交り文にて記されたり。寬永十四年丁丑(一六三七)の著なり。
「禁斷日蓮義」の解題を參看すべし。
◎眞道は齋部氏、東都の人、初め日蓮宗の僧たりしが、のち天台宗に轉じ、勉めて念佛の法を修したり。天海僧正請うて東叡山幹事に充つ。幾もなく辭して叡山に還り、爾來江湖に雲遊し、萬治二年己亥(一六五九)十一月、京都圓鏡堂にて入寂す。享年未詳。著すところ本書の外に、支那訓釋芠籤十四卷、四教義集解新鈔六卷、天台宗集解鈔三卷、觀心異論訣一卷、西谷名目鈔六卷、念佛選擇評一卷、十宗略記一卷等あり。

はじやけんしやうせう
破邪顯正鈔 三卷 僧 存覺
眞宗々徒に對する他宗僧徒、山臥巫女等が誘難の條目を擧げて之れを辨明し、官府に申告したるもの。元亨四年甲子(一三二四)八月に記す所なり。
「眞宗法要」の卷十三に收めたり。
◎存覺の傳は「六要鈔」の下に在り。

はじゆつきゝがき
馬術聞書　一巻　瀬尾　義覚
馬術上の要旨を略記す。内題には「馬術口達覚書」と記せり。明和三年丙戌(一四二六)著者の奥書に、瀬尾治助口達の趣を筆記したる由記せり。治助は義倫と字し、著者義覚の父なり。

はじゆつひみつあうぎ
馬術秘密奥儀　一巻
ぢ口の強き馬の事より、強き馬乗候時のあてがひの事に至る二十六條、駁馬の諸法を論述す。安政三年丙辰(一八五六)亜部に於て新刻す。編者は「折下水谷翁」と署名せり。

ばしよ
馬書　木八巻
馬に關する傳書なり。馬の始より、飼法、療法、調法、乗法等に至るまで雑記す。

はしりゆかうき
走湯行記　木一巻　京極　高門
元禄十五年壬午(一三六二)九月二日、江戸を出立して、豆州走湯温泉に入浴し、同二十八日江戸に歸着するまでの記にて、自詠及び同遊者の和歌をも載せたり。この記、名「浦のしほかぜ」ともいへり。
◎京橋高門の傳は「曲妙集」の下にあり。

はしんろく
婆心錄　一巻　松平　定信

はすのいと
蓮の糸　一札　淵瀬
著者俳句の集。元禄三年庚午(一三五〇)七月二十九日の作にかゝる。

はすのみ
蓮の實　一册　賀子
著者の俳句集なり。元禄四年辛未(一三五一)八月の編輯にかゝる。
◎賀子のことは「難波丸」の下にあり。

ばせいせうひん
馬性小品　一巻　北村　士攌
馬名を挙げて、解釋したるもの文化八年辛未(一八一一)の作。著者北村士攌は下總國佐倉の醫なり。

ばせうあんごぶんこ
芭蕉庵小文庫　一巻　史邦
芭蕉及び其の門人山店、風竹、丈草、去來等の發句を集めたるもの。中に芭蕉の俳文も數編あり。元禄九年丙子(一三五六)編集す。近年發行の俳諧文庫第十編「元禄名家句集」中にも收めたり。本書或は「芭蕉翁小文庫」と題して傳寫せるもあり。
◎史邦は大津の人といふ、蕉門の弟子にて五雨亭と號せり。

ばせうあんさいとうしふ
芭蕉庵再興集　一巻　大島　蓼太
芭蕉庵の荒蕪堙滅して菜侯の邸内に入れるを歎き、明和八年辛卯(一四三一)有志相謀りて、其の舊地一二町の近傍なる翁の菩提所要津寺中に小堂を結びて、翁の木像を安置したる始末を記したるものなり。近年發行の俳諧文庫第十七編「蓼太全集」の中に收めたり。
◎大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

ばせうおうぎやうじやうき
芭蕉翁行狀記　一巻　路通
芭蕉の一生を詳叙し、その間の俳句をも掲げ、且末に「枯尾花」に漏れたる追福の俳諧句等を悉く拾收せり。寛延四年辛未(一四一一)硯田舍紀逸の序を附して出版す。
◎路通は蕉門の俳人なり。放蕩にして家を逐はれ、路傍に書を成して錢を乞ふ。後芭蕉の見る所となりて門弟とせられ、路通と名けらる。後年故ありて破門せられたれども、芭蕉の晩年にはまた許されたりといふ。著書は本書の外に、勧進帳、彼岸の月等あり。

ばせうおうくしふ
芭蕉翁句集　一巻　松尾　芭蕉
寛文、延寶、天和、貞享、元禄間の句を、類聚したるものなり。專ら佛兮湖中が「一葉舟」に據りて校正したるものなり。近年發行の俳諧文庫第一編「芭蕉

全集」にも收む。
◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

ばせうおうしおしよ
芭蕉翁七書　三巻　松尾　芭蕉
芭蕉庵桃青の行脚捉一二十五箇條、十六編、句合、蛤峨日記、奥の細路、發句、已上七書を合刻したるもの。書肆の手に於て編輯名題せられたるなり。文化十二年乙亥(一四七五)發刊す。
◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

ばせうおうつけあひしふ
芭蕉翁付合集　二巻　谷口　蕉村
芭蕉の句を撰集し、三句のはこびを考慮せしめんため付合を集したるものなり。安永三年甲午(一四三四)の自序あり。
◎谷口蕉村は名を信章といひ、春星と字し、夜半亭、與謝長庚、三果東成、四明謝寅巴人、紫狐庵等の數號あり。大阪天王寺の人にして京都に住し、俳諧を善くし、畫に妙を得たり。天明三年癸卯(一四四三)十二月二十九日、六十七歳(或は七十歳といふ)にて歿す。

ばせうおうにじふごでうかい
芭蕉翁二十五條解　一巻　各務　支考
俳諧の道とする事、俳諧の二字の事、虚實の事、變化の事、起定轉合の事、發句に切字ある事、脇に韵字ある事、第三手爾葉ある事、四句目の輕き事、月花の事、花に襷付る事、當季を案ずる事、發句のかたり樣の事、附句案じ樣の事、趣向を定る事、墨の句の事、切字に口傳あること、指合の事、辛崎の松に纏の句の事、假名遣の事、「之れは別書」以上芭蕉翁の二十五箇條といへるを解したるものなり。二十五箇條には、別に俳諧類式、真享式、白馬經等の名あり。固て本書を一に「白馬眞儀解」といへり。俳諧文庫第十五編「續俳諧論集」の中にも收めたり。
◎各務支考の傳は「發日記」の下にあり。

ばせうおうぶんしふ
芭蕉翁文集　一巻
著者の文にして、他の諸書に漏れたるものなり。近年發行の俳諧文庫第十編「元禄名家句集」に收む。
◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

ばせうおうほこぶみ
芭蕉翁反古文　二巻　僧　文曉
俳家芭蕉の諸國行脚中の遺蹟を叙し遺句を拾ひたるものなり。一名を「花屋實記」また「花屋日記」といふ。光格天皇の文化七年庚午(一八一〇)の自序を掲げたり。著者文曉は肥後八代の人にして、乞食にて歿す。

ばせうおうにじふごでうかい
芭蕉翁二十五條解　一册　順水
俳諧の道とする事、俳諧の二字の事、虚實の事、變化の事、起定轉合の事、發句に切字ある事、脇に韵字ある事、第三手爾葉ある事、四句目の輕き事、月花の事、花に襷付る事、當季を案ずる事、發句のかたり樣の事、附句案じ樣の事、趣向を定る事、墨の句の事、切字に口傳あること、指合の事、辛崎の松に纏の句の事、假名遣の事、「之れは別書」以上芭蕉翁の二十五箇條といへるを解したるものなり。二十五箇條には、別に俳諧類式、真享式、白馬經等の名あり。固て本書を一に「白馬眞儀解」といへり。俳諧文庫第十五編「續俳諧論集」の中にも收めたり。
◎各務支考の傳は「發日記」の下にあり。

ばせうそでにつき
芭蕉袖日記　二巻　素綾
芭蕉の發句集にて、もと七百五十有餘句のものを傳へたりしに、更に世の遺漏を拾ひて、八百六十餘句となし、延寶天和の古風を分ち、貞享元年より、元禄七年浪花の旅店にて病中の作までを年序的に編輯したりといふ。寛政十一年己未(一四五九)編者の序あり。文化元年甲子(一四六四)版刻す。著者素綾は俳人にして、虻戸庵と號せり。

はせでらえんぎ
長谷寺緣起　二巻
上卷に堂塔建立の事及び權德道事績、稽文生動、佛像を造りたる事等を記し、下卷に敕使藤原房前長谷寺に至り供養の儀行れし事等を記せり。本書は常相公の撰述したる長谷寺緣起文を、後世和譯して別行したるものなり。二卷一册に作る。

はせでらえんぎぶん
長谷寺緣起文　木一巻　菅原　道眞
寛平八年丙辰(一五五六)二月十日、敕によりて撰述したる緣起なり。漢文にて記す。緣起末に松平樂翁公の跋文を附したり。
◎菅原道眞の傳記は「菅家文草」の下にあり。

はせでられいげんき
長谷寺靈驗記　木二巻
卷上は吉備大臣於大唐讀野馬經朝事より、宇治關白俊蔭母知灰燼事に至る十九條、卷下は當来

建立前臨此山者成所願事付諸人得霊事より、新滅罪生善附輿重輕受得菩提事に至る三十三條あり、みな同寺の緣起靈驗の記なり。永享七年乙卯(一四三五)の奥書あり。「續群書類從」卷七百九十九上下、釋家部第八十四に入る。

はたうせふけいひでんしふ　馬道提徑祕傳集　寫二卷

馬道の心得十六箇條の事より、惡馬の直し方、軍陣の乘方等、凡そ敗十箇條の乘馬術を說示す。著者は馬術を以て家傳の業とせるものなりといへど。其の姓名を記さず。

はたうそうせんしよけい　馬島朝鮮書契　寫一卷

足利時代より寬文年中まで、支那朝鮮其の他の諸外國と往復の書翰を輯めたるもの。收むるところ大率精確なり。

はたけけいづ　秦家系圖　寫一卷

土佐國の秦氏、第一代能俊より第二十一代元親に至る系圖なり。寬永七年庚午(一六三〇)世度野齋の序言、天明三年癸卯(一七八三)谷眞潮の奥書あり。「土佐國群書類從」卷三十三に收めたり。

はたけやまかふ　畠山家譜　寫十二卷　池田秀陳　井足方儀

畠山氏本支一族の詳細なる系譜なり。源義家六代の孫悉園始めて畠山と稱せしより秀吉薨去の頃まで畠山の本家を始め、其の支葉末家に至るまで、委しく事績を輯め、元弘元年辛未(一九九一)より慶長四年己亥(一五九九)に至る二百六十九年に渉りて記載せり。大久保西山の奥書によるに著者兩人が寬永中より享保十五年庚戌(一七三〇)に至る二十餘年間家書の中より撰述編輯したるなりと云ふ。外に祕傳一卷、音義次編末誌續編一卷あり。合せて十五冊とす。

◎池田秀陳は大和國葛上郡北窪村の人、泉之進と通稱す。畠山家の末流池田雅辰の子なり。井足方儀は同國宇智郡久留野村の人、道宅と字し、藤重郎と稱せり。畠山家の末流畠山昌長の子なり。享保十三年攷めて井足を氏としたり。

はたけやまき　畠山記　寫三卷

明應二年癸丑(一四九三)より享祿四年辛卯(一五三一)に至る畠山細川等合戰の事を記したるもの。九一に至る畠山細川等合戰の事を記したるもの。本書は「足利季世記」第一、第二、第三の三卷と同物なり。

はたけやまぐんえうひじ　畠山軍要祕事　寫一卷

畠山家に軍要祕事とせる和漢古今の兵要軍法を略記したるものなり。永祿十年丁卯(一五六七)寫本の奥書あり。

はたけやまけいづ　畠山系圖　寫一卷

清和源氏河內畠山の系圖なり。義家より系して、民部光政に及べり。光政は牛安と名け、國世と號し、父の業を繼ぎ、醫業を以て水月侯に仕へたる人なり。「續群書類從」卷百十五、系圖部第十五に在り。

はたしかしよ　波多氏家書　寫一卷

文祿三年甲午(一五九四)波多三河守好清が、肥前國唐津の領地を沒收せられたる時の記。其の遺書、殉死の辭世、法名、家人の知行高等を記せり。

はちかづきのさうし　はちかづきのさうし　二卷

中昔の頃、河內の國交野の邊に在りし、備中守されたかといへる人の嫁はちかづきの由來事績を綴りたる物語なり。萬治二年己亥(一六五九)二月刊刻す。寬文六年丙午(一六六六)「はちかづきひめ」として出版せる給入草紙もこれと同じ。

はちかづきひめ　はちかづきひめ　二卷

本書は一名「はちかづきのさうし」の下に解題す。

はちくわいのにつき　八廻之日記　一卷　多賀　高忠

騎射の法式を綴記したるものにて、卷端「矢沙汰すべき次第」とて三十項を記せり。文明十六年甲辰(一四八四)子孫の爲めに具註せる由を記す。「群書類從」卷四百十六、武家部第十四に收む。「八廻目記」として、「弓馬雜纂」の中にも收めたり。

◎多賀高忠の傳は「當流開書」の下にあり。

はちじふおうまんびつ　八十翁漫筆　二卷　新見　正朝

此の書は一名「八十翁書語」の下に解題せり。

はちじふおうむかしがたり　八十翁書語　二卷　新見　正朝

明曆萬治已後凡そ百年間、卽ち紀元二千三百年代の風俗世態の現狀及び變遷を、通俗に而も詳細に記述し、且つ圖をも插入したれば、當時の風俗を溫知せんには好き案內書なるべし。凡そ七十餘項あり。本書一本には「新見老人昔々物語」と題し、また「八十翁漫筆」と題し、或は單に「昔々物語」と題せるもあり。享保十七年壬子(一七三二)の作。天保八年丁酉(一八三七)刻成す。

◎新見正朝は通稱を傳左衞門と云ふ。父の陸を以て神田橋邸に仕へ、延寬中入つて大朝扈從隊士となり、享保の初め致仕して法入と號す。寬保二年壬戌(一七四二)三月病死す、齡九十二。

はちじふはちぶるゐ　八十八部類語　寫九卷　小山田與清

「庭訓往來附翼」、「徵古圖錄」、「四位五位裝束略抄」、「官職浮說或問」、已下記錄故實書等八十八部に出でたる調及び事項をいろは順に類聚して其の出處を指示したるものなり。

◎小山田與清の傳は「松屋叢話」の下にあり。

はちすかしけいづ　蜂須賀氏系圖　寫一卷　河野　逸

蜂須賀小六正照より、齊昌に至る十五代間の系譜なり。後附には分家飛驒守隆重、藏人隆矩、半人隆喜、下總守隆誧、內匠頭重隆、主殿休光、以上六家の分流を詳記す。

◎河野逸のことは「建撥錄」の下にあり。

はちすかぶんげんちやう　蜂須賀分限帳　寫一卷

享保十一年丙午(一七二六)改の蜂須賀家分限記也。

はちすのはかぜ　蓮の羽風　一卷

此の書は北國曲といふものの歌曲解といふを評論したるものなり。享保九年甲辰(一七二四)の作といふ。近年發行の俳諧文庫第八編「支考金集」の中にも收めたり。

◎各務支考の傳は「笈日記」の下にあり。

はちだいしふ　八代集　十六卷　牡丹花肖柏

古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞華、千載、新古今の八代集を合刻したるもの。元祿十六年癸未(一七〇三)龍原寺知足老和尚の奥書に、飛島井雅俊より、此の道に堪能の族、傳へ來りて其の家々の珍寶とし傳る由ないへり。

はちだいしふのうちてには　八代集之內天爾波　寫一卷

八代集中の、かな、か、こそ、其の他辭の助辭ある歌を抄出して解釋したるもの。元祿十六年癸未(一七〇三)龍原寺知足老和尚の奥書に、飛島井雅俊より、此の道に堪能の族、傳へ來りて其の家々の珍寶とし傳る由ないへり。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

はちだいしふせう　八代集抄　五十卷　北村　季吟

古今以下新古今に至る八代敕撰を註釋したるもの。卷一より卷八までに古今。卷九より卷十四までに後撰。卷十五より卷二十までに拾遺。卷二十一より卷二十八までに後拾遺。卷二十九より卷三十一までに金葉。卷三十二と卷三十三とに詞華。卷三十四より卷四十までに千載。卷四十一より卷五十までに新古今を收めたり。天和二年壬戌(一六八二)の自跋中に「竝於古今集、直載古抄、其餘之七代集、或襲先達之註解、或用前人之翻說、定爲百八冊名曰八色抄、利布而語於久遠、嗚呼我湖識淺見、安足究其淵微、唯欲爲童蒙之進行千里遙一步之裨也、居業蕘、而竊看於敕撰之和歌、竊比種玉老人翻釋萬葉等云」とあり。其の八色抄といひしは蓋名なるべし。もと每集表紙の色を異にし見分けに便じたりきといふ。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

はちだんるゐご　八談類語　寫九卷　小山田與清

「十訓抄」、「宇治拾遺物語」、「古今著聞集」、「發心集」、「徒然草」、「沙石集」、「古事談」、「續古事談」の八部に出でたる調單句を抄出して、いろは四十七字順に類聚し、其の出處を指示したるものなり。

◎小山田與清の傳は「松屋叢話」の下にあり。

はちぢやうきだん
八丈綺談　六卷　瀧澤　馬琴
美濃園齋藤道三、同義龍等の事績を骨子として綴りたる小說。光格天皇の文化十年癸酉(一八一三)の著なり。
◎瀧澤馬琴の傳は「南總里見八犬傳」の下に在り。

はちぢやうさんぶつしふ
八丈産物集　一卷
八丈島に産出せる動植物を圖錄したるものなり。悉く彩色を以て圖して、一々名稱略說等を掲ぐ。

はちぢやうし
八丈誌　五卷　大原　正矩
伊豆八丈島の詳細地誌なり。天保六年乙未(一八三五)の著にかゝる。

はちぢやうじまこじまあをがしまねんだいき
八丈島小島青ヶ島年代記　一卷
島中の治亂、沿革、領主の氏名、領主以後代官の氏名、飢饉病疫、生死、津波、山燒、地震、風雨、旱魃、雜船、破船其の他の事項とも凡て二百五十四條。寛政二年庚戌(一七九〇)六月下旬より八月上旬まで嚴しき旱魃といへる條項までを記載せり。

はちぢやうじまのき
八丈島記　二卷　小寺　應齋
此の書は一名「伊豆日記」の下に解題せり。

はちぢやうじまのき
八丈島記　一卷
天明元年辛丑(一七八一)典農司東佐藤玄六郎行信、吉川右衛門をして檢察の上、作らしめたる「伊豆八丈一島に關する地誌を拔出したるもの。形勝、風俗、氣候產物等を詳錄せり。

はちぢやうじまのつ
八丈島圖　一鋪
伊豆八丈島及び小島の全圖にて、地名山嶽を記し、方位、里數、戶數、人口、年貢、柚の定數等を圖傍に掲げたり。

はちぢやうじまひつき
八丈島筆記　一卷　古河　辰
伊豆八丈島の沿革より、氣候、風俗等を聞書したるものなり。寛政九年丁巳(一七九七)伊豆七島の支配役三河口某より聞けるものなりといふ。尾關勝任といふもの〻序文あり。
◎古河辰の傳は「東遊雜記」の下にあり。

はちぢやうじまへうどき
八丈島漂渡記　一卷
延享二年乙丑(一七四五)紀伊の國の漁夫土佐の近海より八丈島に漂流して同島の事狀等を記したるもの。同三年の記。「土佐國群書類從」卷七十八に收められる。

はちぢやうたちおり
八丈裁衣織　一卷　服部　義高

伊豆國八丈島の地誌にて、八丈島開闢、土地風俗の事、源爲朝渡海の事、社寺の來由、土人の傳說等より、男女衣服の制、家屋の造り方、農業の仕方、言語、禽獸草木の名及び附近諸島の方位里程、海岸の險夷、波浪の動靜等を詳記す。著者同島の古老桑山翁の物語に、餘人の傳說、自家の見聞等を交へて綴り成したるものなりといふ。昔時同島に於て種々の織物裁縫を繼ぎ合せて裁衣縫といへる衣服をなしたりといふに倣ひて、此の書名に擬びたりといふ。文化八年辛未(一八一一)の自序あり。
◎服部義高は、もと三宅島の長筥木平兵衛の子なりしが、八丈島官船預服部來、天明五年乙巳(一七八五)十月、父子溺死せしより、生前に交際ありし筥木氏、服部氏一族の請により、其の子を遣し服部氏を繼がしめたりといふ。さてこそ八丈島の人となりて、服部氏を稱せるなれ。

はちぢやうのねざめぐさ
八丈の寢覺草　一卷
伊豆八丈島の沿革風俗等を記錄したるもの。往々畫圖を插みたる版本なり。

はちぢやうぶつさんし
八丈物産志　三卷　翠村道人
寶曆のころ、赦にあひて八丈島より、歸り來りたる大村某の筆記申より、物産に關するものどもを抄錄圖寫したるものなり。草木蟲魚皆著色して描く。

はちぢんづせつしわうかい
八陣圖說雌黃解　一卷　岡田　守道

孔明の八陣、後世六花陣等を圖說したるもの。天明七年丁未(一七八七)岸信之の序あり。

はちぢうないふき
八條內府記　一卷　八條　公秀
永仁六年戊戌(一二九八)六月、七月、八月、九月、十一月の日記なり。
◎八條公秀の傳記は「公秀公記」の下にあり。

はちぢうものがたり
八條物語　一卷　佐々木善行
大和國十市郡八條村庄右衞門の孝義を記したるもの。畫圖をも加へたり。安永八年己亥(一七七九)筱原惟明の序。善行の男恭寬の跋あり。同年上梓す。

はちぢうりうきあひのしよ
八條流息合之書　一卷
馬足の息合に就き、騎者の心得を示したるもの也。

はちぢうりうきゝがき
八條流聞書　一卷
日本馬乘の指南書なり。騎者必要の事項を網羅して、八條流といふ。

はちぢうりうせめかたのしよ
八條流責方之書　一卷
騎馬上、馬足を責る方法を詳說したるものなり。

はちぢうりうもくばしふえう
八條流木馬集要　一卷　北越　逸民
此の書は木馬に乘る方術を說明したるものなり。

はちのふ
蜂譜　一卷
蜂の種類性質飼養等を圖說したるものなり。何人の何時作成したるかを詳にせず。

はちぶんじるのせう
八部字類抄　三卷　小山田與清
「太神宮儀式帳」「佛足石歌」「古語拾遺」「日本靈異記」「聖德太子傳曆」「皇太神宮諸雜事記」及び「熱田太神宮緣起」の八部に出でたる詞、地名等を抄出して、いろは順に類聚し、其の出處を指示したるものなり。
◎小山田與清の傳は「松屋叢話」の下にあり。

はちぼくたからのいち
繪入八木寶の市　一卷　赤松閑鬼望
米穀賣買上の祕法、米價高下等の察知法等を記したるものなり。寶曆八年戊寅(一七五八)十月の作にかゝる。

はちぼくどらのまき
八木虎の卷　一卷　猛虎軒
米商の祕機、天時の水旱、豫價の高下等の察知法を記す。寶曆六年丙子(一七五六)の作、天明年間の版行にかゝる。

はちぼくのはなし
八木のはなし　一卷　北越　逸民

はちまんかう
八幡考　一卷　伴　信友
若狹國遠敷郡なる正一位八幡三所大神の來由に就て盡く考說したるものなり。孝明天皇の嘉永五年壬子(一八五二)七月二十五日、予信近校合したる由の奧書あり
◎伴信友の傳記は「古事遡傳考」の下にあり。

はちまんうさのみやおはらひおほあつ
八幡宇佐宮御祓大會圖　一卷
同社御祓大會の略圖にして、卷末に、古來祭事の興廢を記し、延寶年中再興以來は毎歲懈怠なきよし等を記せり。

はちまんうさのみやけいさん
八幡宇佐宮繫三　一卷　僧　淨圓
豐前國宇佐八幡宮の事歷を記述したるものなり。繫三の名は、其の自序中に、「以八幡大神利物之跡、繫諸年於月於日、因題曰繫三」とあるに據れり。寬政三年辛亥(一七九一)豐後國佐伯大日寺に版刻したる書なり。

はちまんうさのみやごたくせんしふ
八幡宇佐宮御託宣集　四卷
宇佐八幡宮の神託を收集したるものにて、正應三年庚寅(一二九〇)の序あり。

はちまんかう
八幡考　一卷　伴　信友
若狹國遠敷郡なる正一位八幡三所大神の來由に就て盡く考說したるものなり。孝明天皇の嘉永五年壬子(一八五二)七月二十五日、予信近校合したる由の奧書あり
◎伴信友の傳記は「古事遡傳考」の下にあり。

はちまんかやうき
八幡河陽記 二巻　雲松堂
八幡は攝田八幡宮の事にして、河陽は河内國の事なり。巻頭に同宮及御陵を圖し、次に攝田八幡宮略記」と題して宮殿神寶等を掲げ、本文に入りて聖徳太子先代巻事本紀御撰述之事以下數項を雑記す。編輯の體裁不備にして、同宮の故實を研究するに假なき本なり。雲松堂とのみ題して姓名を詳にせず。菅林管利の爲めの編なるべし。

はちまんき
八幡記 本朝一巻　遠藤　隆綠
慶長五年庚子(一六〇〇)遠藤左馬助慶隆美濃國小原に在りて、大阪軍の招に應ぜず。却りて稻葉右京亮貞通の居城郡上八幡の城を攻落し家康の感賞を蒙りたる始末を記したるものなり。寛元天皇の寛文十三年癸丑(一六七三)の記にかゝる。著者遠藤隆綠は但馬守なり。

はちまんき
八萬騎 本朝二巻
江戸旗本武士八百餘名をいろは順に列擧して、禄高家紋、姓氏住地等を列載したるもの。其の禄高の合計二百五十萬六千九百三石七斗九升三合六勺七才と記したり。

はちまんぐうしやせい
八幡宮社制 本朝一巻
八幡宮の服忌制數十項を掲ぐ。「續群書類從」巻八十、神祇部第八十に入る。

はちまんぐうほんき
八幡宮本紀 六巻　貝原　好古
八幡大神の實錄を輯記す。「日本書紀」以下神錄野乘の載するところより、遺言寃事を採りて其の事實を列ねたり。巻一を仲哀天皇紀、巻二、三を神功皇后紀、巻四を應神天皇紀、巻五を仁德天皇紀、巻六を聖廸編とす。附錄一巻ありて、諸國八幡神の緣起を略敍せり。元祿二年己巳(一六八九)の自序、同八年の貝原益軒の序あり。
◎貝原好古の傳は「諺草」の下にあり。

はちまんぐどうくん
八幡愚童訓 二巻　僧　快元
八幡宮の、垂跡御事、名號御事、遷座御事、御體御事、氏人御事、慈悲御事等、佛菩薩の應現なる所以を說明したるもの。愚童を以て名づけ、快元自ら謙稱したるもの也。著者快元は「快元僧都記」の下にあり。

はちまんしやむしよくしだい
八幡社務職次第 本朝一巻
相模國鶴岡八幡宮社務職の事を記錄したるもの也

はちまんはつしりやくだん
八幡八社略談 本朝一巻
伊豫國内なる、湯月八幡宮、桑原八幡宮、日尾八幡宮、正八幡宮、日招八幡宮、山崎八幡宮、飽熊八幡宮、勝山八幡宮、以上八社の所在緣起等を略記せるものなり。

はちろんよげん
八論餘言 本朝一巻　田安　宗武
著者宮て宮田在滿に命じて「國家八論」を作らしめ、後また自らこの書を作りて、歌の源の論、歌を翫ぶの論、詞を撰ぶの論、詞を探るの論、過を正すの論、大宮人の歌をほしいままにする論、歌を學ぶの論、新しき物の名を歌によむ論、歌をたしなむ論等を掲ぐ。寛政八年丙辰(一七九六)案洲の奥書、賀茂眞淵の跋言等あり。
◎田安宗武は德川氏、金吾と稱す、從三位左近衛中將に任ぜらる、夙に文學、有職等に志深く、本書の外に、樂曲考、樂曲考附錄、服飾漫語、服飾管見、服飾管見別錄、冠服、類聚愚抄、玉函秘抄、玉函叢說、梁雅等を著せり。明和六年己丑(一七六九)薨ず、享年未だ詳ならず。

はちろんよげんしふい
八論餘言拾遺 本朝一巻　賀茂　眞淵
田安金吾の著「八論餘言」の拾遺として、歌學上の論數條を書き記したるもの。文化元年甲子(一八〇四)清水濱臣の末記に本稿は賀茂翁の反古中より得たるものなり、その末の論の見えざるはここのままに書きすて置かれたるにやといへり。
◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

はちんしふ
破枕集 三册　片桐　良保

俳諧の集にして、寛文三年癸卯(一六六三)五月中旬編輯したるものなり。
◎片桐良保の傳記は「戯諧草」の下にあり。

はついん
發隱 算法一巻　北川　猛虎
勾股整數、自約法、別約法及び極數法の四法を記したるものなり。解法極めて明瞭にして、最も良本なり。文化十二年乙亥(一八一五)出版せらる。
◎北川猛虎は醫左衛門と稱し、曠山、また文皮と號す。尾州侯に仕ふ。初め數學を四足嘉宣に受けしが、後ち丸山良支の門人と爲りぬ。

はつゐんかなかうそんぎ
撥韻假字攷存疑 本朝一巻　岡本　保孝
撥韻假名に就きて考論したるもの。嘗て義門が「男信」の稿本を見せたるに、それに意見數十條を記して還したるものに、義門の意見を添へたるものといふ。弘化二年乙巳(一八四五)の作。明治七年の奥書あり。「況齋叢書」の第十二に收めたり。
◎岡本保孝の傳は「韻鏡攷」の下にあり。

はつえいしんけつ
撥醫鍼訣 二巻　鈴木　章
內腎眼の鍼治に關する事を詳論す。上巻に統論、症候、名稱、體質、位置、內外區別、鑒定、施術難易等以下凡て十五條、下巻に初起治法、針後治法の二條を掲げ、附錄に辨按定瘕之害、辨療具利鈍並に針製異同、附針製大概、治驗の四條を載せたり。弘化三年丙午(一八四六)四月十六日の自序、同年男元邦の跋あり。嘉永二年己酉(一八四九)版行す。
◎鈴木章は安房の針醫にして、字玉また道順と號す。

はつかぐさんびやくゐん
二十日草三百韻 一册　西山　宗因
著者の三百韻俳諧なり。編述の年時は詳ならず。
◎西山宗因の傳記は「大阪獨吟集」の下にあり。

はつかくしふ
拔覺集 本朝一巻　人見　宗次
乘馬の法に關すること八十餘條を記したるもの。承應三年甲午(一六五四)の著者人見宗次は常陸國大田の住人にして、辨齋と號す。

はつかねずみ
二十日鼠 一册　谷　水丸
此の書は普茶の俳諧集なり。

はつかのだいじ
八箇大事 本朝一巻　僧　勝覺
眞言祕密の大事といふ任經法、東寺講堂之事、光明智、二智法等を論述せり。
◎勝覺は原俊房の子にして、夙に佛法に歸し、醍醐寺定賢に從て眞言の宗義を學び、また範俊、義範等に就て其奥妙を極む。來從の徒弟頗る多し。永三年癸未(一一〇三)の旱天に際し、敕を受けて雨を祈り、大に賞賜を受く。大治四年己酉(一一二九)四月入寂す。三寶院門跡の祖にして、權僧正たり。

はつかののと
八箇祝詞 本朝一巻　齋部連自丸
祝詞、陽祝、陰祝、木祝、火祝、土祝、金祝、水祝等の祝詞にして、神龜元年甲子(一三八四)の作と記せども、後人の僞作なるべし。

ばつかろく
伐柯錄 本朝二巻　青山　延于
好學、知人、納諫、愛士、簡儉等編を分ちて人君の擧措を輯錄して、規戒の料に充てたるなり。巻首に德川家康の事、終に水戸義公の事を錄し、文化十二年乙亥(一八一五)水戸公武公に捧ぐるところなり。
◎青山延于の傳は「皇朝史略」の下にあり。

はつくわいし
初懷帋 一巻
歲旦、雜旦、歲暮、守歲、四極等の題を咏みたる發句を集めたるもの。凡そ四百數十句あるべし。

はつしうかうそうせう
八宗綱要抄 二巻　僧　凝然
俱舍、成實、律、法相、三論、天台、華嚴、眞言、一附り禪、淨土等佛教八宗の教義及び史傳の大要を記したるもの。文永五年戊辰(一二六八)著者二十九歲の時の撰述なり。本書は古來初學者の指南として廣く世に行はれ、元亀二年辛未(一五七一)、承應二年癸巳(一六五三)、文政十年丁亥(一八二七)及び明治年間に至り數度の重刊を經たり。註釋書もあ

またあれども「八宗綱要抄啓蒙録」、「八宗綱要攷證」等を最良なるものとすべし。

◎凝然は示観と號す。仁治元年庚子(一九〇〇)伊豫國(越智郡)高橋郷に生る。戒壇院圓照に投じて剃髪し華嚴を學習す。其間また各宗百家の學を修め、照に襲きて戒壇院に住し招提寺に移り復た戒壇院に回る。後宇多上皇國師の號を賜へり。講經說戒四時輟むことなく又た懶を嘗逃に寄せず、成す所凡そ一千一百餘巻あり。探玄記洞幽鈔百二十巻、五教章通路記五十二巻、維摩經義疏應雜記三十巻等を初めとして、大小の著作悉く後世學佛者の指南たらざるものなし。元亨元年辛酉(一九八一)九月、八十二歳にて入寂す。

はつじべんらん

發字便覽　一巻

平上去入の四聲の字を、畫引に排列したる漢字辭彙なり。二畫より二十五畫に至り通計七百十八字あり。寛政六年甲寅(一四五四)家田虎の序あり。同年出版す。雄風館大峯先生塾の編輯と記せり。

はつじやういつかげん

發情一家言　二冊　中條　信禮

詠歌上の係結語格等に就きて說明したるもの。二條家冷泉家等の古學派の說に同じからずして、紀傳學の一家の歌學に必要なる事件を記したりといふ。序中に「さことの歌は我が國の習俗などといふべきものにはあらず、言辭の道を知て言辭の上にある神明の道教を知るためなれば、老若男女皆これを學ぶことにて、我が國俗を知らやはあるべからざるなり。故和歌者、神代以來發感情、通冥意、鬼神交遊の梯階、男女偶和之基也。辨古言古意、而知言辭中存在之道教以窺神明の室述徑也ともいふべきものなるを忘るましきなり」といへり。萬延二年辛酉(二八六一)の作なるべし。

◎中條信禮のことは「杉能下葉」の下にあり。

はつしやうへう

應　和象表　本一巻　和田　寧

圓理學に必須なる發裝八種を記載したるものなり。家傳書の一とす。文政元年戊寅(一四七八)に成りぬ。

◎和田寧の傳は「圓理算經」の下にあり。

はつするおなぼ

拔萃落穗　本二巻　石原　正明

和歌の風體作法等につきて論述したるものなり。文化二年乙丑(一四六五)反故を補綴して此の帖を作れる由を自記せり。

◎石原正明の傳は「壬戌隨筆」の下にあり。

はつするずねひつ

八水隨筆　一巻

文武の事に關する雜事なり。稽古はじめの事、くつたびの事等より、乘馬の事、鷹狩の事、岡殿の事に至る五十二條あり。元文元年丙辰(一七三六)九月以後、寛保延享の頃の作なるべし。知叢書」第二編に入る。

はつせまうでみちのき

初瀨詣道記　二巻

元祿十一年戊寅(一六九八)仲秋の頃法川の爲、初瀨に詣でんとて、江戸を立ちて東海道を經、伊勢の兩宮に參り、紀州高野山に登り、和歌の浦に出で、大阪に歸り、初瀨寺に至り、十二月に初瀨を立ちて江戸に歸るまでの詠歌を集載せり。(以上は上巻の所載。下巻は「再び初瀨詣の記」にて、元祿十二年神無月初瀨に詣でて江戸に歸るまでの歌を集めたるものなり。著者朝陽は武藏國豐島郡谷中天瑞山觀福寺の僧たり。

はつせやまのづ

初瀨山圖　本一輔

初瀨山は大和國城上郡にありて豐山と號し、寺を長谷寺(または神樂院)と號す。此の圖は同寺境内の略圖にて土地に販賣するところなり。

はつそえいさん

八祖影贊　本一巻

遍智院義範、石山淳祐内供、南智院源仁、延命院元果、般若寺觀賢僧都、鳥羽僧正範俊、眞觀寺僧正、小野僧正仁海、以上眞言八祖の影贊を集錄したるものなり。

はつたいへう

八態表　本一巻　和田　寧

點竄二項式を縱術に依て開出商を得たるもの。及び自乘累乘數を記載したるものなり。これまた圓理學中の必要なる書とす、著者が家傳書の一なり。年代記入なし。

◎和田寧の傳は「圓理算經」の下にあり。

はつたくめいきやうつかい

八宅明鏡圖解　一巻　松浦　久信

人々の姓に因て邸宅の建築に吉凶あり、それと共の住法に因て吉凶相轉倒することありといふ事實を略說したるものなり。

◎松浦久信の傳は「家相秘傳集」の下にあり。

はつたびえきろのいさご

初旅驛路砂　本四冊

延享五年戊辰(一七四八)正月九日、江戸より伊勢に參詣したる時の日記と、寶曆二年壬申(一七五二)京大阪に行きたる時の往復日記となり。名所、舊蹟、宿驛等を記せり。寶曆三年の自序あり。

はつだより

初便　本一册

筑前の知方亜に來翻の編輯したる俳句集にて、元祿十五年壬午(一七〇二)京都の書林井筒屋より版行したるものなり。

はつちやうきうのき

八張弓之記　本一巻　小笠原長持

一番大平弓、二番蛇形弓、三番裸形弓、四番和位弓、五番四足弓、六番陰陽弓、七番福藏弓、八番世平弓等を略說せる數枚の寫本也。「弓術秘傳書」に收む。

◎小笠原長持のことは「笠懸小笠懸」の下にあり。

はつてうきぶん

八朝紀聞　本十巻　山宮　維深

はつたく

はつたくめいきやうつかい

八宅明鏡圖解　一巻　松浦　久信

人々の姓に因て邸宅の建築に吉凶あり、それと共の住法に因て吉凶相轉倒することありといふ事實を略說したるものなり。

◎松浦久信の傳は「家相秘傳集」の下にあり。

はつたびえきろのいさご

初旅驛路砂　本四冊

延享五年戊辰(一七四八)正月九日、江戸より伊勢に參詣したる時の日記と、寶曆二年壬申(一七五二)京大阪に行きたる時の往復日記となり。名所、舊蹟、宿驛等を記せり。寶曆三年の自序あり。

はつだより

初便　本一册

筑前の知方亜に來翻の編輯したる俳句集にて、元祿十五年壬午(一七〇二)京都の書林井筒屋より版行したるものなり。

はつちやうきうのき

八張弓之記　本一巻　小笠原長持

一番大平弓、二番蛇形弓、三番裸形弓、四番和位弓、五番四足弓、六番陰陽弓、七番福藏弓、八番世平弓等を略說せる數枚の寫本也。「弓術秘傳書」に收む。

◎小笠原長持のことは「笠懸小笠懸」の下にあり。

はつてうきぶん

八朝紀聞　本十巻　山宮　維深

はつてうさんぱふ

發微算法　一巻　三瀧　郡智

「古今算法記」の十五問の答術を記したる書なり。關孝和が自撰の演段術を以て解きたる者、門人三瀧郡智、同門三埜久長と共に之れを著したり。延寶二年甲寅(一六七四)の出版にかゝる。

◎三瀧郡智は四郎右衞門と稱し、關孝和の門人也後陽成、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門の八朝、天正十四年丙戌(一五八六)より、享保二十年乙卯(一七三五)に至る、百三十九年間の編年史なり。漢文にて記す。寛保三年癸亥(一七四三)自序あり。

◎山宮維深は江戸の儒者にして、仲淵と字し、官兵衛と稱し、霊樸また菜翁と號す。學を室鳩巣に受けて、後講筵を開きをくの學徒に教授す。傍ら國學和歌等に通じ、後年龜田侯の儒官となる。著書は本書の外に、落風編、勤王師論、忠精筆記、雪樓文集あり

はつぬぐさはなしだいかん

初音草咄大鑑　四巻

世間の落語俗談等百數十箇を集めたるもの。序中に「彼の隆雅僧正の歌に、聞くたびに珍らしければ郭公、いつも初音の心地こそすれ、とよめる心ばへをとりて、初音草咄大鑑と題するになん」といへり。著者は洛下鶯言子と記せり。

はつびさんぱふ

發微算法　一巻　關　孝和

「古今算法記」の十五問の答術を記したる書なり。關孝和が自撰の演段術を以て解きたる者、門人三瀧郡智、同門三埜久長と共に之れを著したり。延寶二年甲寅(一六七四)の出版にかゝる。

◎三瀧郡智は四郎右衞門と稱し、關孝和の門人也

はつびさんぱふえんだんげんかい

發微算法演段諺解　四巻　建部　賢弘

向に「發微算法」の著あり、其の解法は關演段に由れり。本術は關流の秘法にして、當時未だ世に公にせず、是を以て世人此真術あるを知る者なし。皆單に天元術を以て之れを推す。是故に多くは正術のある所を誤り、本術を見て私に譯術と爲すの徒少からず。賢弘之れを遺憾とす。蓋し是れ關演段術のあるを知らざるの致す所として、本書は爲に之れが演段術を明にしたるものなり。實に關演段術の解義書を世に公にしたる者は、之れを以て始めとす。貞享四年丁卯(一六八七)版行す。

◎建部賢弘は彦四郎と稱し、不休と號す。寛文四年を以て江戸に生る。兄弟四人あり、皆數學を善くす。賢弘は其末弟にして、最も數理に通ず。關孝和の門に在て、老成荒木村英と並び稱せられたり。少壯より啻老に及ぶまで、力を斯道に致して怠るなく、常に後者を導き、世を益すること亦多し。將軍吉宗に仕へて善く天體歷理を說く。吉宗大に信ず。元文四年已未(一七三九)七月卒す。年七十六。諡して安山道全居士と曰ふ。門人に傑才多し、承繼永く存す、又著書頗る多し皆關流後學の貴重する所と爲る。

はつびやくねん

八百韻　一册

才藏、桑風、惟子、惣四、快笑、孤松、昨非、好節等の八百韻なり。元祿五年壬申(一六九二)の編に係る。

はつほさいきす

初郭公　一巻　桃澤　匡衞

享和元年辛酉(一八〇一)三月下旬、春の別を惜みがてら風山の若葉を見んとて、香川景樹と夢宅の

はつほど

二人が出て行きたる時の記事と歌となり。「桂園叢書」の第二集に收められる。

◎桃澤民衛は信濃の人にして、彦兵衛と稱し、夢宅啓山、振思亭等の號あり、僧澄月に就て國學を修め、本書の外に、神樂催馬樂集釋義、夢宅和歌集等を著せり。文化七年庚午(一八一〇)歿す、享年未だ詳ならず。

はつもうしょかんしき　發蒙書柬式　二卷　小宮山昌世

明の劉に從て尺牘書柬の法式を圖說したるものなり。簡牘の寸法は「舜水談綺」を本とし、書式は「時用靈簽折梅箋」に據れるよしを記せり。寶曆五年乙亥(一七五五)越克敏の序ありて、同年上梓せらる。

◎小宮山昌世の傳は「享保通鑑」の下にあり。

はつもとゆひ　初元結　五卷　池田　是水

古今俳諧の付合をいろは順に輯錄したるものなり。萬治元年戊戌(一六五八)の自序及び令德の跋あり。寬文元年辛丑(一六六一)十二月上旬の編にして、翌二年、五卷七册に出版す。

◎池田是水(或は是誰と記す)は、播州姬路の人にして、松永貞德の門に出でたる俳家なり。著書は本書の外に、破暬覽玉くしげ等あり。

はつらんさんぱふ　撥亂算法　一卷　神谷　定令

關流最上流の爭論書に於ける第五の出版書なり。初め最上流會田安明、「改精算法」を著して以て關流藤田定資が著せる「精要算法」を駁る、定資が門人神谷定令「非改精算法」を著して安明が邪を辨明す。安明又「改正論」及「解惑算法」を著して大に「非改精算法」を非難す、定令重ねて「解惑辨誤」を著して以て誹謗する甚し、本書は則ち「算法廓如」を著して以て「算法廓如」に對して大に其正邪を辨じたるものなり。寬政十年戊午(一七九八)の出版。

◎神谷定令の傳は「非改精算法」の下にあり。

はつわらいうめのことみ　初咲梅のことみ　一卷　白　清

年中祝日の事を狂言體に作りたる滑稽讀物なり。後櫻町天皇の明和三年丙戌(一七六六)の作にかゝる。著者の傳詳ならず。

ばてれんいるまんどうしゆくはくじやうのおぼえがき　伴天連いるまん同宿白狀之覺　一卷

筑前國大島にて捕へられたる伴天連宗徒いるまん等が白狀の次第を記したるもの。すべて五條あり。此の件は寬永八年辛未(一六三一)のことなるべしと云ふ。

ばでんひせう　馬傳祕抄　十七卷

馬に關する傳書を纂書したるもの。契沖の「古今餘材抄」中に、其の何たるを論ぜざりし故、本書を著して遺漏を補へるなり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

はつる

はとつ　鳩圖　一帖

鳩の種類五十種の裝束を着色して一百圖に畫きたるものなり。

はとのみおさうろく　鳩嶺雜錄　二卷

後朱雀天皇の寬德二年乙酉(一〇四五)より、順德天皇の承久三年辛巳(一二二一)に至る石清水行幸の年月日、御即位又は改元の事等を記す。

はないくさ　花　軍　一册　朝江　種寬

著者の俳諧集にして、定溝の批判を加へたるものなり。編述の年月は詳ならず。

◎朝江種寬のことは「俳諧聞友」の下にあり。

はなうつぎ　花盧木　一册　澤　露川

著者の俳諧集なり。元祿二年己巳(一六八九)の編述にかゝる。

◎澤露川の傳記は「庵之記」の下にあり。

はなかつみのかう　花かつみの考　一卷　賀茂　眞淵

花かつみの田宇草なることを考證したるもの。契沖の「古今餘材抄」中に、其の何たるを論ぜざりし故、本書を著して遺漏を補へるなり。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

はなぐしまきのしき　花串的之式　一卷

同敬式を略說せる數枚の寫本なり。「弓術祕傳書」の中に收む。

はなぐるま　花　車　一册

俳諧の集なり。何時何人が編輯したるものなるか、明記なくて知るべき由なし。

はなごよみ　花ごよみ　八卷

月の滿干、火の辨、蹉跎龍燈、野上龍燈、光明寺龍燈、淺間嶽、以下數十目の雜事につきて說明せり。

はなさくまつ　はなさく松　一卷　塙　保己一

古歌により、南朝三代の論を記したるものにて、天明八年戊申(一七八八)太田寮の奧書あり。

◎塙保己一の傳は「群書類從」の下にあり。

はなしうたひ　噺　謠　一卷

高砂、難波、志賀、弓八幡、老松等より、猩々、春榮、春日龍神等に至る七十五番の謠を擧げ其の調譜を記したるもの。天保十二年辛丑(一八四一)刻す。

はなしおぼえしふ　咄覺集　一卷　松下　見林

噺物語、以下世上の舊話三十種を記載せり。延寶八年庚申(一六八〇)著作と云ふ。

はなしものがたり　噺物記　三卷

天下一目醫者の噺、並に華佗物語、籠拔の噺、並列子物語、以下世上の舊話三十種を記載せり。延寶八年庚申(一六八〇)著作といふもの輯錄せりとあれど、其の傳知るべからず。

はなしやうぶばいやうろく　花菖蒲培養錄　一卷

花菖蒲培養法を述べ、玉蟬花二十一種の容品を圖說したるものなり。嘉永六年癸丑(一八五三)の作。著者は松平某にして、幕府小譜請方なりといへど、其の名を詳にせず。

はなぞのにつき　花園日記　一卷

寬政十一年己未(一七九九)十二月二十六日、京花園の方へ出立つときより同二十八日に至る和文日

織田主計頭入道眞意の下に數十年來道を勤めたる折々に、眞意より聞きし茶事に關する談話を雜錄したるもの。寬永七年(一六三〇)著者の端書あり。

◎松下見林の傳は「異稱日本傳」の下に出づ。

はなしどり　放　鳥　二册　晩　柳

俳句の集。東山天皇の元祿十四年辛巳(一七〇一)京都にて發行したるものなり。著者曉柳は肥前の俳人なり。

はなしのたね　波奈志之種　一卷　恒亭主人

心學上の道德說なり。平易俗譯もて數十項を記載す。天明二年壬寅(一七八二)著者の端書あり。

◎松下見林の傳は「異稱日本傳」の下に出づ。

はなしもの　噺物記　三卷

天下一目醫者の噺、並に華佗物語、籠拔の噺、並列子物語、以下世上の舊話三十種を記載せり。延寶八年庚申(一六八〇)著作といふもの輯錄せりとあれど、其の傳知るべからず。

はなしやうぶばいやうろく　花菖蒲培養錄　一卷

花菖蒲培養法を述べ、玉蟬花二十一種の容品を圖說したるものなり。嘉永六年癸丑(一八五三)の作。著者は松平某にして、幕府小譜請方なりといへど、其の名を詳にせず。

はなぞのにつき　花園日記　一卷

寬政十一年己未(一七九九)十二月二十六日、京花園の方へ出立つときより同二十八日に至る和文日

はなぞのぬんごそくゐき　花園院御卽位記　一卷

延慶元年戊申(一三〇八)十一月、花園天皇御卽位の記なり。時に御年十二歲なりきと。「續群書類從」卷二百七十四、公事部第二十七に收む。

はなぞのぬんぎよき　花園院御記　三卷　花園天皇

此の書は一名「宸筆暦記」の下に解題したり。

はなぞのぬんこそくゐき　花園院御卽位記　一卷

延慶元年戊申(一三〇八)十一月、花園天皇御卽位の記なり。時に御年十二歲なりきと。「續群書類從」卷二百七十四、公事部第二十七に收む。

はなぞのさだいじんき　花園左大臣記　一卷　源　有仁

天治元年甲辰(一一二四)三月、五月、六月間の日記、即ち中宮御產の記なり。もと幾卷のものなりしも、餘は散佚して傳はらざるものなるべく。此の條のみは後人の抄出によりて傳はれるならん。別名を「園記」、「園槐記」、「春記」と稱す。

◎源有仁は後三條天皇の孫、輔仁親王の子にして、源姓を賜りしものなり。才學に富み、儀容を修め、進退周旋禮節に合せざるなく、衣裳の制最も精微を極め、爲に當時の風俗を一變せりといふ。官は從一位左大臣に至る。久安五年己巳(一一四九)薨す、年四十五。世に花園左大臣と稱す。輔仁親王、嘗て仁和寺の花園を以て別邸とし給へるが故なり。

記にて和歌も録み入れたり。「土佐國群書類從」巻百〇八にあり。

はなつみ

華摘　二巻　榎本其角

元祿三年庚午(一六九〇)四月八日より、同七月十九日に至る俳諧日記なり。母の寺に詣でて手向の爲めにとて、録み出でしもの百句に滿ちて本書となれりとぞ、また其の夜其の日の見聞の諸家の句句も續繰として各句の下に列れたり。山田笏深の漢文跋を附す。

◎榎本其角の傳は「旬兄弟」の下にあり。

はなのえん

花のえん　二巻

本書の發端に、「むさしにちくさの花共あつまりて、うたをよみしをつくり、ちやかうかびおひくはげんぱんのうへのあそびなど、思ひ〳〵さまざまにやさしき事ども侍りける」とありて、草木を人に擬して其の非歷な記したる作物語なり。武亭三馬自筆の端書に「享和それのとし四月あがなひ得たりしを、文化の十とせといふとしの霜月するつかた、裏裝してをさめ置つ」と云へり。

はなのくも

花の雲　一册　千山

著者の俳句集なり。元祿十五年壬午(一七〇二)京都にて出版す。

◎千山は播州姫路の俳諧者にして、別著に常座拂、又花の雲等あり。

はなのしがらみ

花のえがらみ　一巻　菅原定理

沼田順義の著「級長戸風」を返駁して本邦固有の神道を闡明したるもの。初め本居宣長の「直毘靈」に、儒佛二教を掊斥する語ありしを駁して、市川匡麿「我乃比禮」を作り、宣長更に「葛花」を作りて「萬我乃比禮」を反難したるに、沼田順義の「級長戸風」には又宣長の說を駁したるより、定理が此の書を作りて順義の說を破りたるなり。天保九年戊戌(一八三八)の自序あり。

はなのしつえ

花のえつ枝　一巻

出雲國杵築の歌人五十名の歌各一首づつを採錄したるもの。安政四年丁巳(一八五七)の著なり。

はなのしまだい

花廼島臺　一巻　松亭金水

紙屋治兵衛と、於春とを主人に作成したる小說なり。自序あれど年代を記さず。

◎松亭金水の傳は「松亭漫筆」の下にあり。

はなのしゆび

花の首尾　一册

俳句の集にて、寶永四年四册屋より出版したるものなり。

はなのつゆ

花の露　四册　高瀬道甘

俳諧の集にして、寛文二年壬寅(一六六二)仲冬編輯したるものなり。

◎高瀬道甘は俳家高瀬梅盛の弟にして。專庵また樂々庵と號し、伏見に住せり。著書は本書の外に「絲瓜草」あり。元祿四年辛未(一六九一)二月十五日歿す。年八十。

はなのなかだち

花の媒　本(一)二巻

此の書は一名により「九篠雜記」の下に解題せり。

はなのなごり

花の名殘　五巻

無名氏の序に曰「此物語は或やんごとなき御方の御供公、江の島に詣で給ひ鎌倉に御逗留ありしに二人の尼の住みける柴の庵を訪れ給ひて、しめやかの御物語のついで、都にての事ども聞召及ばれぬ、なまめやかにと御尋有りしに、かたくいなみ申されしを、慨悔に過去の罪を滅すと、しひて望ませ給ふにより、辭しかたくや有りけむ、もしの尼妙句が是を書きつづりて、御歸府の後御なぐさみ草にとてまいらせあげぬ、題號を花の名殘といふは此書の序に花の名殘の春菜と書出せるをとりて母公の號け給ひけるとぞ」云々。以て本書の由來を知るべし。天和四年甲子(一六八四)出版す。

はなのまがき

花能万賀喜　本(一)一巻　宗砌

連歌に關する論述なり。巻末に「享德初の年(一一一二)神無月の頃、大和國より或少人連歌の道心得侍るべきやうなる書附てと承る程に、草案などにも及ばず、傍に見え侍る此の料紙を取て、かやうに記し、彼の所望に從ひ侍る。いかにぞや」とあり。「續群書類從」巻四百九十五。連歌部第二十五に收む。

◎宗砌は連歌師にして別に「砌公雜物」の著あり。

はなひぐさ

はなひ草　一巻　立巴

俳諧に用ふべき詞ないるは順に纂排して、其の用法を略記したるもの。自序及び烏丸大納言の奥書あれども、其の年代を記さず。

はなびぐさ

鼻火草　本(一)一册　野々口立圃

著者の俳諧集なり。寛永二十年癸未(一六四三)正月の編。烏丸光廣の跋あり。

◎野々口立圃の傳記は「をさな源氏」の下にあり。

はなびたいぜん

鼻火大全　一册

著者の俳諧集にして、寛文四年甲辰(一六六四)六月編輯したる者なり。著者に「雜俳軒」と署名あり。

はなびたいぜんかうもく

花火大全綱目　一巻　小河景三

俳諧の用語ないるは順に排列して、簡略なる解釋を施したるもの。寶元天皇の寛文八年戊申(一六六八)五月の自序を掲げたり。延寶三年乙卯(一六七五)に出版す。本書或は「花火綱目」と題して三册に寫傳せるもあり。

はなぶえ

鼻笛　一册

著者の俳諧集なり。編述の年月日は明記なければ知りがたし。

はなふぶきくまでのちり

花吹雪隈手廼塵　本(一)三巻　恕堂閑人

安政五年戊午(一八五八)七月より、文久三年癸亥(一八六三)十月に至る間の政令雜事を記したるもの。天巻に本郷丹後守初罪御苦之事より、再後守初罪御苦之事より、原言葉に至る三十九條。地巻に嘉永六年丑年異船渡來一件より、水府家臣反忠之祕書に至る二十七。人巻に品川東禪寺夜戰之記より、江府兩國橋張札並大和五條一件文久三亥三月兩賀茂社へ御幸行列附に至る三十八條等あり文久三年(一八六三)の自序あり

はなみぐさ

花見草　四巻

俳諧に就ての心得、著名なる俳家の逸譚等を雜記したるもの。元祿十五年壬午(一七〇二)加古利嗣の序、延享四年丁卯(一七四七)福子英の奥書あり。小柴硏鑒の「見聞雜記」第七に收む。「土佐國群書類從」巻百二十六にも收めたり。

はなみさんぎん

花見三吟　一册　田中常矩

著者の俳諧三吟にて、延寶八年庚申(一六八〇)の編にかゝる。

◎田中常矩の傳記は「ねざめ」の下にあり。

はなみじらう

花見次郎　一巻　升六

はなみぢ

俵別草　本(一)一巻　宮川勘平

女子の修業心得に關して細々と書き成せる和文なり。其の女よつと名くるを、十三歲の時、卽ち寛政年中、江戸より古郷土佐の國へ送り遣す時、俵別として書き與へたるものなり。此娘後に土佐の城下勘平の姉の子の妻となりしとなり。此の書は寛文比の作にして、正德二年壬辰(一七一二)加古利嗣の序、延享四年丁卯(一七四七)福子英の奥書あり。小柴硏鑒の「見聞雜記」第七に收む。「土佐國群書類從」巻百二十六にも收めたり。

はなもみぢみやこのにしき

花紅葉都錦　二卷　長榮軒檀氏

生花の式法を圖解したるもの。後桃園天皇の安永七年戊戌〔二四三八〕三月の著なり。著者長榮軒檀氏は京都の人なり。

はなもみぢみやこばなし

花紅葉都咄　三册　千秋老人

天明八年戊申〔二四四八〕正月晦日、京都大火の給入記事なり。併せて仁政行届、善後の策立ちて、四民新築に安堵することを記し、諸家の詩歌等を集め、尙奇談をも入れたり。

はにつれいじんげんかうろく

土津靈神言行錄　寫本二卷　横田俊益

會津藩主松平正之の嘉言善行を記したるもの。上卷は林羅山、山崎闇齋の作りたる行狀記、又は正之の書に附したる序跋等より抄出して其の遺事を記し、下卷は著者が常に正之の左右に侍して見聞したる事實を記せり。土津靈神とは正之歿後の諡號なり。天和元年辛酉〔二三四一〕の自跋を載す。◉横田俊益は、三友と字し、淸四郞と稱し。何求と號す。儒を以て會津藩に仕ふ。著書は本書の外に、大學金篇抄、四箴和字訓解、孝經大義和字抄等あり。元祿十五年〔二三六二〕正月、八十三にて歿す。

はゝきぎべつちう

帚木別註　寫本一卷　僧　宗祇

一名「雨夜談抄」の下に解題せり。著者の宗祇法師なる事は、一書の奥書によりて知ることを得たり。◉宗祇の傳は「新菟玖玻集」の下にあり。

はゝそのおちば

はゝその落葉　寫本一卷　服　子

過ぎにし母の事績を慕ひ思ひて、綴り成せる和文の記なり。本文の末に「はゝそ葉の散り過しより、露けき袖のひるよなく明ぬくれぬも月日もはやく過るにつけて、いとゞ涙の雨とふりしことども思ひ出づるに、かしこき事のみぞ多かりける。ひとひせうとの君の渡らせ給ひ、物かたらひし給ふ時、今はたのむ陰なき木の下に、落葉かいあつめてんやとあれど、はかばかしからぬ筆の行へも見ぐるし、書もてひがめなば、中々なる事、あやまちやせまじと聞ゆれど、せちにいさいさとそゝのかし給へば、えなんいたみがたく、我と心に問ひつゝかたみにひろひあつめ侍りぬ。享和のはしめのとし〔二四六一〕長月、服子」とあり。その文章の一斑を知るべし。今見る所はその筆蹟のまゝなるに似たり。女流の筆の見事なるものにこそ。

ばびやうれうぢしよ

馬病療治書　寫本一卷

療馬の書にして一名を「療馬元鑑集」といふ。承應元年壬辰〔二三一二〕の作にかゝる。

はふえかくせい

法衣格正　寫本一卷　僧　默室

僧服に關する體川を論述したるものなり。其の日を列擧すれば、袈裟功德分、名義甚深分、體色量分、割裁裁縫分、條葉次第分、施設鉤紐分、頂戴搭披分、院洗淸淨分、護守奉重分等の九條を論じ、更に座具、褊衫、裙子、直裰の四訓を附錄せり。寬永二年己酉〔二五〇九〕の寫本による。

はふゑんりやくしふ

法苑略集　五卷　僧　高泉

著者の詩集三十卷中より拔錄したるものなりといふ。法苑は高泉の住したる院の號なりと。◉高泉の傳は「山堂淸話」の下にあり。

はふおんせう

法音抄　五卷　僧　惠空

謠を註したるもの。源氏供養、兼平、檜垣、千手、蟻通、實盛、富士太鼓、三井寺、卒都婆小町、自然居士、志賀、江口、春日龍神、柏崎、山婆、熊野、當麻、百萬、淸經、野宮、東岸居士、誓願寺、以上二十番を註し、古抄の誤をも正したり。正德四年甲午〔二三七四〕出版。◉惠空の傳は「實語敎童子敎諺解」の下にあり。

はふごひつき

法語筆記　一卷　僧　超然

人生無常のことを述べ、佛敎の大意を說きたる小册子なり。卷末に「右一通は江州蔭摩村善照寺了觀の室（實室賴壽卿息女）其同胞の御方へ參らせたき由懇請の間、懇に筆を染て草し訖。末學として、法語めきたる筆點ふかく冥見を恐るゝ處なり」とあり。されば表題に「贈貴族女姓法語」と記せり。天保三年壬辰〔二四九二〕八月の作なり。

◉超然の傳は「山居餘課」の下にあり。

はふこんがうゐんりやくえんぎ

法金剛院略緣起　二卷

山城國葛野郡第一組花園村なる法金剛院は文德天皇の御建立にて、待賢門院の再興にかゝる寺なりといふ。本書は其の略緣起を記したるものにて、並は海北友雪の手に成れり。

はふしやうじくわんぱくき

法性寺關白記　寫本四卷　藤原忠通

保安四年癸卯〔一七八三〕正月及び二月、長承二年癸丑〔一七九三〕二月、大治二年丁未〔一七八七〕七月、天地元年甲辰〔一七八四〕正月の日記。朝儀に關する事を記せり。この外に卷數多かりしなるべけれども散佚して傳はらず。◉藤原忠通は關白忠實の子なり。嘉承天永の間、內外の要職を歷て、永久二年內大臣となり、元永二年左近衞大將を兼ぬ、保安二年遂に關白に進み、左大臣となり、大治三年太政大臣に拜し、後また關白、太政大臣等に再任す。二條天皇の時職を辭して別業を法性寺の側に作りて住し、應保二年薙髮して圓觀と改む。世に法性寺關白と稱す、詩歌を以て樂み、最も書を善くせり。長寬二年甲申〔一八二四〕六十八にて薨ず。忠通は崇德、近衞、後白河、二條の四朝に仕へ、朝廷の典故に明なりきといふ。

はふしやうじくわんぱくごしふ

法性寺關白御集　一卷　藤原忠通

著者の律詩一百二首を收む。〔此の中絕句二首あり〕卷末に「久安元年〔一八〇五〕十二月二十三日、殿下御敎書到來、仰云、年來御草一卷遣之、若事宣七字侯者、念佛餘暇合點可令進給、所忽思食也、不可及披露者、仰旨如此謹言、散佐親房奉、上、入道中納言殿」とあり。「群書類從」卷百三十四、文筆部第十二に收む。◉藤原忠通の傳は「法性寺關白記」の下にあり。

はふじやうじこんだうくやうのき

法成寺金堂供養記　一卷

治安二年壬戌〔一六八二〕七月、入道相國の建立にかゝる法成寺金堂五大堂の新佛開眼の供養會記なり。「群書類從」卷四百三十二、釋家部第八に收む。

はふじやうじせつしやうき

法成寺攝政記　二卷　藤原道長

寬弘二年乙巳〔一六六五〕より寬仁二年戊午〔一六七八〕に至る朝儀に關したる日記なり。別に「御堂關白記」といふ「道長公記」〔寬弘二年より長和二年に至る日記〕寫本十卷の異本なるべし。◉藤原道長の傳は「道長公記」の下にあり。

はふじよしんわうごくわんちやうき

法助親王御灌頂記　寫本一卷

寬元元年癸卯〔一九〇四〕戒師權大僧都大周助につきて、法助親王の御受戒ありし記事なり。

はふちうしやうぞくのこと

法中裝束之事　寫本一卷

鈍色白裳附り香染の事、裙表袴の事、袍裳附り香染の事、衲橫皮の事、紫甲背甲の事、平袈裟の事、襪の事、草鞋錦の事、衣の事、等身衣の事等を說明せり。享保十八年癸丑〔二三九三〕明和四年丁亥〔二四二七〕等の寫本奥書あり。

はふぢゆじしやうこくき

法住寺相國記　寫本一卷　藤原爲光

著者の日錄殘闕なり。今正曆二年辛卯〔一六五一〕八月十一日の記事と、同九月七日著者任大臣大饗の記とを存せり。◉藤原爲光は右大臣師輔の第五子にして、參議、納言等を歷て、遂に太政大臣に任ぜらる。晚年佛法に歸依し、職を辭して法住寺を創してこれに住せり、故に法住寺相國と稱す。正曆三年壬辰〔一六五二〕薨去す、恒德と諡し、後一條太政大臣と稱し、相模公に追封せらる。

はふぢゆじどのおんわたましぶるゐ

法住寺殿御移徙部類　寫本一卷

永曆二年辛巳〔一八二一〕四月十三日の移徙を部記したるものにて、「續群書類從」卷八十八、帝王部第七に入る。

はふぢゆじどのでんじやうのうたあはせ

法住寺殿々上歌合　寫本一卷

嘉應二年庚寅〔一八三〇〕十月十六日の歌合にして、藤原俊成卿の判にかゝる。

はふねんしやうにんぎやうじやうづぐわ

法然上人行狀圖畫　四十八卷　僧　舜昌

本朝淨土宗の開祖法然上人源空一生の行狀を詳錄したるもの。博く諸傳を參輯し上人の事績頗る詳備せり。初め後伏見上皇の敕に因りて本傳を編集し、正安二年庚子(一二九九)之れを奏獻す。上皇更に當時才筆の名僧に敕して、其の詞藻を潤飾し又た畫圖を附せしめ給へり、本書卽ち是なり。敕修御傳と稱して盛んに世に行はる。

◎舜昌は江州志賀の人、十一歲の時叡山の隆眞に就て出家し、顯密二敎を研き頗る文才あり。初め叡山功德院に在り、後に知恩院に住し其の第九世たり。本書の外に「遊懷鈔」一卷を著せり。

はふねんしやうにんでん

法然上人傳　十卷

淨土宗の開祖源空上人の傳記。三河山中法藏寺の藏本にして、世に西山十卷傳と稱するもの是なり。

はふもんひやくしゆ

法門百首　一卷　僧　寂然

佛敎の意をよみたる百首なり。一首毎に、法によせて說明せること詳かなり。「群書類從」卷四百四十五、釋家部第二十一に收めたり。

◎寂然の傳は「寂然法師集」の下にあり。

はふりうじえんぎしざいちやう

法隆寺緣起資財帳　一卷　僧　隣信

法隆寺の緣起資財を記したるもの。天平十八年丙戌(一四〇六)の調査にかゝる。下卷は逸失して、今上一卷を遺す。「續群書類從」卷七百九十八、釋家部第八十三にあり。

はふりうじがらんほんぞんれいはうき

法隆寺伽藍本尊靈寶記　一卷

法隆寺は南都七大寺の一にして、大和國平群郡にあり、廐戸皇子の創建、其の後數回の災に罹れり。此の書は同寺の藏版にして、佛像、什物及び金堂、五重塔、講堂、大經藏、上堂、手水屋、三經院、後千三百餘十年前の建築、其の儘に現存せるものな堂、造舍、西室、西圓堂、聖靈院、聖靈院、御廐、綱封藏、食堂、律學院、宗源寺、東院、伽藍、夢殿、舍利堂、繪殿、御相殿、傳法堂、三寶院、禮堂、北室、律院、中宮寺、正覺寺、明王院、勸學院、如法經堂、修南院、常樂寺、金光寺藏王堂等の廢委間數等を記したり。

はふりうじはうもつづ

法隆寺寶物圖　本三卷

大和國斑鳩里の古刹法隆寺の寶什を圖錄したるものなり。編者年代共に詳ならず。

はふりうじべつたうしだい

法隆寺別當次第　本二卷

承和年中に任なる延寶大德より、永正十五年戊寅(一二一七八)拜堂の晃圓上人に至る同寺の別當補任なり。「續群書類從」卷百〇三上下、補任部第十五に收む。

はふりうじりうきしざいちやう

法隆寺流記資財帳　本一卷　僧　靈尊

大和國法隆寺の寺領寶物什具等を詳記したるもの。天平十九年丁亥(一四〇七)二月、錄して奏進したる所なり。「聖德遺德錄」の第十五卷に收めらる。

はふりしふ

波布里集　一卷

弘化元年甲辰(一二五〇四)三月、木曾義昌三百五十回忌を、殿玉山東漸寺に修行したる時の追悼の和歌發句等を集め、同寺の緣起寺狀等を記したる者也。

はふりやのまき

法量卷　本一卷　小笠原持長

「伊勢弓馬叢書」中の一書なれど、「法量卷」「持長作」と異り、本書は圖解を主としたるものなり。卷末に文安三年丙寅(一四〇六)六月二十九日、沙彌淨元(持長)の奧書及び弘治二年丙辰(一五五六)八月、信覺の奧書あり。

◎小笠原持長の傳記は「犬追物集書」の下にあり。

はふりやのもの

法量物　本一卷　小笠原持長

「伊勢弓馬叢書」中の一書にして、大鳩、丸物、草鹿、笠懸、小笠懸、流鏑馬、犬追物、子牛追物、挾物、矢開、弓、弓袋、矢、座所器目、鞭、伏鳥懸鳥射る事等を記せり。一本には「文安三年(一四〇六)七月二十八日、沙彌淨元」と末記せり。今、之れに依て署名す。

◎小笠原持長の傳記は「犬追物集書」の下にあり。

はふりんじべつたうぶにん

法琳寺別當補任　本一卷

承和七年庚申(一五〇〇)宣下の同寺第一別當常曉阿闍梨より、元和五年己未(一二七九)出世したる第百六十二別當日新和尙に至る補任次第なり。「續群書類從」卷九十九、補任部第十一に收む。

はふれんげんしやかだうしゆぎやくわんじんちやう

法蓮院釋迦堂修造勸進帳　本一卷

僧　西阿

南都同堂の緣起を述べ、十方檀那に向て寄附を募集するところの趣意書なり。享德三年甲戌(一四五一)十一月の作。「續群書類從」卷八百、釋家部第八十五に收む。

はふわうくでうでんせんもつづき

法皇九條殿饌物雜記　本一卷

享保七年壬寅(一七二二)三月二十七日、靈元上皇、九條輔實の亭に御幸ありし時の供御の獻立書なり

はへうち

蠅打　五冊　乾　重次

俳諧の集なり、內一冊を追加とす。編輯の年月詳ならず。

◎乾重次の傳記は「あたち千句」の下にあり。

はまをぎ

濱荻　一冊　關　卜圃

俳諧の參考書にて、去嫌のことを拈げたり。寬文十年庚戌(一六七〇)三月の編輯にかゝる。

はまぐりはたおりひめ

蛤幡織姬　二卷

天竺摩訶陀國にナシウと云へる貧しきもの母に仕へて孝道を盡せしが或時母の食事の料にとて蛤を漁りしに其蛤化して美しき女となり機を織りてナシウの孝行を助けたりといふ作物語なり。

はまづと

濱づと　一卷

歌學の書。部を天象、歲時、方位、地儀、居所、草木、鳥獸、人事、器用等に分ちて、歌詞を拔け作例を示して會席當座の便に供へたるものなり。

◎加藤景範は大阪の人にして、通稱を小川屋喜太郎といひ、子常と字し、竹里と號す。有賀長伯に學びて自ら一家を成せり。著書は本書の外に、和歌川字集、和歌實盛集、和歌虛詞集、名所いまつ、みなれ棹等あり、寬政の末年に歿せり。

はまなりしき

濱成式　本一卷　藤原　濱成

此の書は一名「歌經標式」の下に解題せり。

はまのまさご

濱のまさご　二卷　有賀　長伯

歌學の書、四季題雜の各題を設けて、歌詞を拔け、作例をあげて初心の栞としたるものなり。

◎有賀長伯の傳は「歌枕秋の寢覺」の下にあり。

はままつちうなごんものがたりのくろく

濱松中納言物語目錄　本一卷

小山田與清

「濱松中納言物語」の中に出てたる詞章句を摘錄して、いろは順に類聚し、其の出處を指示したるものなり。此の書は一に「濱松中納言物語類字」と云ふ。

◎小山田與清の傳は「松屋叢話」の下に出づ。

はままつちうなごんものがたりるゐ

濱松中納言物語類字　本一卷

小山田與清

本書は一名「濱松中納言物語目錄」の下に解題す。

はまゆふにつき

濱木綿日記　本三卷　小津　久足

紀州熊野浦より、丹後天橋立に至るまでの和文紀行なり。三月二十六日家を立つ時の歌に、「濱木綿のもゝへの山もはや越えて、みるめかり來む三熊野の浦」とあり。書名は此の歌に緣をとりたるものなるべし。天保十年己亥(一八四九)五月と末記せり。更に自らの跋を附して、此の記の述しるべを主として、文を客につくりたる由をいへり。

◎小津久足は伊勢松坂の豪商にて本居家の門人なり雜學庵と號し藏書には西莊文庫といふ印を捺せ

り。書畫刀劍等を好み晩年には眞の雜學者と成る。

はむろちうなごん

葉室中納言　寫本一卷

萩原院の御時都西山葉室中納言の邸にて殿上人等の多くつどひて種々の物語ありしことを記したる草册子なり。

ばめいかう

馬名攷　寫本一卷　畔田　伴存

和漢古今の書、凡そ一百十八部を參證して、一百七十餘種の馬名を說明せり。天保十二年辛丑〔二五〇一〕九月の著にかゝる。

◉畔田伴存の傳は「水族志」の下にあり。

はやしゑいきかなづかひのしよ

林永喜假名遣書　一卷　林　永喜

定家のかなづかひに基きて、言語をいろは順に列ねて註したるもの。後水尾天皇の后東福門院に上りたるものなりといふ。寛永四年丁亥〔二二八七〕河井恵久の奥書あり。

◉林永喜は羅山の弟にして、名を信澄といひ、後、永喜と改め、東舟また樗墩と號す。江戸に出で儒を以て幕府に徴仕す初め儒を藤原惺窩、兄羅山等に學び、和歌を弓治に受け、博く和漢の書に渉り、遂に名を羅山と齊うするに至れり。仕へて功あり、刑部卿法印に敍せらる。著書は本書の外に、東武紀年、三史鈔、東舟詩集、東舟文集、樗墩雜記等あり。寛永十五年戊寅〔二二九八〕八月十五日、〔或はいふ十九日〕、五十四歳にて病殁す。

はやしざきぶんこしよもく

林崎文庫書目　寫本三卷

伊勢大廟の林崎文庫の藏書を、四十二門に分ちて三千餘部の書目を列記したるもの。天保四年癸巳〔二四九三〕八月、京都村井敬義より皇太神宮へ奉納せし由の端書あり。

はやしけいふ

林氏系譜　寫本一册

藤原氏の餘流より出でたる、初祖正勝より、林春信、信篤等に至る系譜なり。各傳漢文にて記せり。

はやしだうきうき

林道休記　寫本一卷　林　道休

森越後守可勝、同三右衛門可成、同傳兵衛某、同武藏守長一等の事績の大略を記したるものなり。

◉林道休は通稱を長兵衛と云ふ。森長一に仕へ長一討死の後、書道書一通を寄して秀吉に出し、森忠政に川中島を賜りし後はこれにも仕へたりと云ふ

はやびきじんぶつこじ

早引人物故事　二卷　川關　惟充

古來の名人をいろは順に列擧し、其の著績逸事等を記したる人名字書なり。享和二年壬戌〔二四六二〕の自序あり。文政八年乙酉〔二四八五〕出版す。著者川關惟充は武藏の隱士なりといふ。

はやびきせつようしふ

早引節用集　中本一卷　鈴木德之助

いろは順に我が雅俗の熟語を列擧して、左右に音訓を附したるものなり。天保十四年癸卯〔二五〇三〕初版以來既に三版を重ぬ。横綴に作る。

はやびきぢんこふきたいせい

早引塵劫記大成　一卷

八算見一、開平開立に至る、日用の諸算法を記したる獨修書なり。「塵劫記」の三字を下すも、從來の「塵劫記」には甚だ似ず、文化十一年甲戌〔二四七四〕版行す。

はやびきてびきしふ

早引手引集　一卷　山本一二三

數目八算見一以上、諸相場割、利足勘定、坪詰等、日用必須の算術を記したる獨學書なり。殊に開平開立早算の如きは、當時他書に見ること稀なり、且つ卷首に算數言葉遣ひの法を掲げたるは、人事上、何物にても珠盤上にて談話するを得るものなり。頗る興味あり、安永四年乙未〔二四三五〕の出版。

はやひのみことあもりかう

速日尊天降考　寫本一卷　工藤　栖彦

饒速日尊の天降のことにつきて考證したるものなり。著者工藤栖彦は青森の人なり。

はやまのしをり

葉山の栞　一卷　萩原　廣道

歌の詞がきの作法を說明したるもの。初めに總論三條ありて、次に額髮そりし人につかはす歌の詞かきより、人のおこせたる歌を詞書にかく事に至

る十五條あり。嘉永元年戊申〔二五〇八〕九月の著なり。同三年出版す。

◉萩原廣道の傳は「源氏物語評釋」の下にあり。

はやみごぶかん

早見御武鑑　一卷

初めに「鎌倉武鑑」と題して鎌倉時代、次に「應仁武鑑」として室町時代、次に「織田武鑑」及び「豐臣武鑑」ありて、各其の幕下に於ける武士の姓名を列記したるものなり。

はらひぎしき

祓儀式　寫本一卷

「御祓中次第口授」と內題して、御祓法式等十箇條を掲げ、士農工商等によりて差別ある事等を記す。

はらひきんしぎしき

祓勤仕儀式　寫本一卷　松下　見林

平日之儀式、當世之儀式、古法之儀式、一切成就之祓、その他の儀式を集錄したるものなり。

◉松下見林の傳は「異稱日本傳」の下にあり。

はらひぐづせつ

祓具圖說　寫本一卷　度會　延佳

八足案圖、八針幣紙圖、八針之垂栽圖、八針之圖、案下幣圖、十座祓垂栽圖、十座祓垂折圖、十座祓幣圖、一座祓幣圖、錢切裁次第圖、錢切箱圖、數取圖等を說示したるものなり。寛文十年庚戌〔二三三〇〕の記にかゝる。

◉度會延佳の傳は「伊勢太神宮神異記」の下にあり

はらみいしけひろく

孕石家祕錄　寫本一卷

天正十六年戊子〔二二四八〕に生れ承應三年甲午〔二三一四〕に死したる正元、寛永五年戊辰〔二二八八〕に生れ元祿十四年辛巳〔二三六一〕に死したる元政、寛文十二年壬子〔二三三二〕に生れ正德四年甲午〔二三七四〕に死したる元矩、已上土佐國孕石氏三代の家事を記錄したるもの。「土佐國群書類從」卷三十六は卽ち是なり。

はりぬきしふ

はりぬき集　一册

俳諧の集なり。何時何人が編輯したりしかは未詳。

はりぶくろ

鍼嚢　二卷　鹿持　雅澄

手術平波の性用を詳說したるものにて、綱を正格、別格、高格、格外等に分ち、更に細目を設けて說示す。天保九年戊戌〔二四九八〕三月七日の自序あり、本書名を解していかによき織物も鍼なくては裝縫すること難く、故に此の選に撰り集めたる鍼にて長短よろしく本末正しく縫裝せばいかばかりよき衣裳をも製し得べしの意なりといふ。明治二十六年癸巳〔二五五三〕の發行にて宮內省の藏版に係る

◉鹿持雅澄の傳は「古言譯通」の下にあり。

はりま

破誾魔　三册　池田　是水

著者の俳諧集にして、內一卷は播磨姬路にありし時の作なり。明曆二年丙申〔二三一六〕五月の編にかゝる。

◉池田是水の傳記は「初元結」の下にあり。

はりまいわじんじやこもんじよ

播磨伊和神社古文書　寫本一卷

播州一宮伊和神社所藏にて、同社に關する古文書を輯めたるもの。天平寶字二年戊戌〔一四一八〕八月三日のものより、享保十七年壬子〔二三九二〕のものに至る三十餘通を收む。明和九年壬辰〔二四三二〕同宮神主の編輯するところなり。

はりまかゞみ

播磨鑑　寫本十六卷　平野　庸脩

播磨國の地誌なり。第一卷の最初に建置、形勝、郡名、城地、神社、寺院、舊蹟、氏族、古城蹟、人物、土產、風俗の十二門を分ちて其の略目を示し、二卷以下明石、加古、印南、赤穗、佐川、宍粟、多可、美嚢、加東、加西、神東、神西、飾東、飾西、揖東、揖西、以上十六の各郡に入り、大略此の標的によりて記せり。第十六卷は附錄として、拾遺事項を掲載す。寶曆十二年壬午〔二四二二〕の自序、泉溟の序、同十三年清田訥齋の序、明和元年甲申〔二四二四〕三浦元禮の序、同二年草加親賢の序及び自跋、井村菊水の跋等あり。

◉平野庸脩は播磨國印南郡平津の人にして、養甫と字し、才市郎と稱せり。

はりまこせきべんらん

播磨古蹟便覽　寫本二卷

巻首に一國の石高村數等の統計事項を擧げ、各郡の名所古蹟を略記して、其の和歌等をも掲載せり。書中に「寛延己巳(一七四九)十月、村上正躰埴章慶甫」と題する所あれど、本書の編者なるか否かを詳にせず。

はりましさう

播磨志草 寫十八卷　周　平方

播磨國地誌にて、平野庸脩の「播磨鑑」に基き、僅に增減するところあり。增減したる所適切にして、地理學の上にも、編書の上にも前書より劣れり。寛政十二年庚申(一八〇〇)の自序に、自家多年の苦辛に成れる書の如く記せるが、盖し一書の八九分は「播磨鑑」を其儘剽竊したるものなり。著者周平方は播磨の醫者なり。

はりますぎはら

播磨杉原 一册　可　申

著者の傳詳ならず。編輯の年月は未だ詳ならず。

はりまのくにおほえづ

播磨國大繪圖 一帖　山下　重政

播州一圓の細見大圖なり。十六郡を分ち記し、四圖には神佛、名所、里程等を示す。寛延二年己巳(一七四九)の出版にかゝる。

◎山下重政は河内の人にて、河州散人と號す。別に「大全早引節用集」の著あり。

はりまのくにがらんかいき

播磨國伽藍開基記 寫一卷

法華山寺、犬寺、書寫山圓敎寺、大谷山大溪寺、清水寺、極樂山淨土寺等の開基由來を記したる漢文なり。各寺の年代を算するに、元祿二年己巳(一六八九)までを限りとすれば、同年の作なるべし。

はりまのくにさいけんえづ

播磨國細見繪圖 一舖　宮田　彦夠

播磨國地圖の細見彩色せられたるものなり。圖外に建設沿革、形勝、風俗、山、川、湊水、祠寺、古城蹟、舊古蹟、名宦、人物等を列載せり。弘化三年丙午(一八四六)大阪にて發行す。

◎宮田彦夠は播州の游士にして、浪花の寓居にこれを撰したるものなり。

はりまのくにさんぶつもくろく

播磨國産物目錄 寫一卷

金玉土石類五十四種、山草類百六十九種、芳草類三十種、濕草類百九十二種、蕈草類二十八種、惡草類七十三種、雜草類九十一種、穀類五十三種、香木類十五種、喬木類六十二種、灌木類百五十四種、民用類十七種。凡て十五類千〇三十七種を目錄せり。

はりまのくにさんぶつき

播磨國名所産物記 寫二卷

上卷に飾東、飾西、揖東、揖西、赤穗佐用等の諸郡の名所産物を擧げ、下卷には宍粟、神東、神西、加東、加西、多可、三木、明石、加古、印南等の諸郡の名所産物及び所屬不明の産物を擧げたり。全卷を通じて名所百十三箇所、産物二百二十二品あり。

はりまふどき

播磨風土記 一卷

赤石、赤穗の二郡と、賀古郡の首文とを闕きたれど、賀古、印南、飾磨、揖保、佐用、宍粟、神崎、多賀、賀茂、美濃の風土記なり。其の年代は和銅の年を遠く距らざる古本なるべしといふ。明治二十年敷田年治、傍訓標註を加へて出版せり。

はりまめいしよじゆんけんづゑ

播磨名所巡見圖繪 五卷

播州より播州に至る紀行にて、巡路を連絡し、寺社其の他の名所舊蹟等を委曲せり。享和三年癸亥(一八〇三)宮小路正三位貞直の序、中直藍江の跋あり、文化元年甲子(一八〇四)出版す。著者は村上某と記せり。

はりまめいしせきし

播磨名蹟志 寫四册　白井　元貞

各郡諸所の名所舊蹟を旨として記し、諸家の和歌記文等を列擧せり。元文三年戊午(一七三九)の末書あり。

◎白井元貞は播磨國飾東郡木場村の人にして、長左衛門と稱せり。

はりまめぐり

播磨巡 一卷　田原　相常

卷頭に播州路程總圖を掲げ、播州大阪より播州姫路までの道程、名所、舊蹟、神社、佛閣を記し、姫路より淸水へ參詣し、大阪へ歸る道中を記し、且姫路

以西近郷の名所を集錄せり。明和九年壬辰(一七七二)の自序あり。著者田原相常は浪華の人なり。

はるくさ

春草 寫二卷　伊勢　貞丈

著者が「四季草」の一にして、武家故實の書なり。卷上下に各五十條を收む。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

はるくさ

春草 一卷　內藤　正範

著者の歌集にて、卷二百五十三首、夏百五十首、秋百七十八首、冬百四首、戀百五十二首、雜百四十六首、凡て九百八十三首あり。文化二年乙丑(一八〇五)源定信の序、同年前權中納言持明の跋、男內藤外記正弘の奥書等あり。光格天皇の文化四年丁卯(一八〇七)正弘の發行する所なり。著者內藤正範は甲斐守と稱す。

はるさめ

はるさめ 一册　椿　子

著者の俳句集なり。明記なけれど、真享年中の作なるべし。

はるさめがたり

春雨譚 十卷　鱸　重常

本書は「春雨抄」(しゆんうせう)の下に解題せり。

はるさめせう

春雨抄 十卷　鱸　重常

本書は題號を音讀してゝ「しゆんうせう」の部に解題せり。

はるさめのき

春雨の記 寫一卷　成島　良譲

徳川家の御落所卒去の際、葬途の有樣などを和文にて記したるものなり。

◎成島良譲の傳は「南山史」の下にあり。

はるざよはうしうき

春女報讐記 寫一卷　杉山　東庵

元祿年中河越侯松平吉保の家臣大西助次郎、同藩の士伊東仙右衛門を殺害して出奔す。仙右衛門の孤女春二十八年を經て父讐を報じたる始末を詳記せしものなり。享保七年壬寅(一七二二)に成れり。著者杉山東庵は春女の夫なり。

はるなさんし

榛名山志 寫一卷　佐藤　寛雄

上野國群馬郡なる榛名山の名義、本社、名巖、名石、洞窟、林泉寺其の他を詳しく記して、天明三年癸卯(一七八三)に成れり。「榛名山地名考」と同作にして、少しく文を改めたるものなるべし。

◎佐藤寛雄は上野國榛名山同社の祠官にして、左中太と稱し、君倫と字す。「榛名山地名考」の作あり。

はるなさんちめいかう

榛名山地名考 寫一卷　佐藤　寛雄

上野國群馬郡なる榛名山の名義、本社、名巖、名石、洞窟、林泉寺、其の他等の地名を考證したるものなり。「榛名山志」と對照すべし。

◎佐藤寛雄の傳記は「榛名山志」の下にあり。

はるのあけぼののき

春能明本農乃記 一卷　烏丸　光廣

寛永十二年乙亥(一六三五)二月、敕使として、二條左相の若君と共に、江戸に下る時の日記なり。其の月六日京都を出立して、同十九日江戸に入るまでを記す。兩家道中の詩歌をも掲げたり。此の書或ほ「春の曙の記」と表書せるもあり。

◎烏丸光廣の傳記は「續翰書」の下にあり。

はるのうぐひす

春の鶯 寫一卷　松平　定信

天明年間の凶荒に、勁儉を論すの條々、救荒の諸件、其の他農業上の要旨等を記したるものなり。卷末の「谷かげに賢き人のあるならば、我れに知らせよ春の鶯」といへる歌によりて、此の書名を成せるなり。

◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

はるのさうもくけいぶつうたあはせ

春草木景物歌合 寫一卷　前田　及

慶應二年丙寅(一八六六)二月七日、土佐國高知に於て催したる花合歌合の會の記事なり。花の判者は前田、歌の判者は中城直宗、其の他來行講師行司等の列名は本書の首に記せり。當時來行の一人たりし阪本存樹の序あり。「土佐國群書類從」卷百十三に收めらる。

はるのしか
春の鹿　二冊　魯九
俳句の集なり。寛永三年丙戌(一六二六)京都にて出版したるものなり。

はるのなぐさ
春の七草　一巻　曾永年
なづな、はこべら、せり、すゞな、御形、すゞしろ、佛の座の七艸を圖譜したるものなり。寛政七年乙卯(一七九五)著者の來記あり。
◎曾永年のことは「落の舟敷」の下にあり。

はるのひ
春の日　一巻　松尾芭蕉
貞享二年乙丑(一六八五)の春、東伊勢より、再び尾張に出でたる時の俳句集なり。去年の冬著したる「冬の日」に對し、今年の春の撰なるより「春の日」とは名けたり。並年發行の俳諧文庫第二編「芭蕉全集」にも收む。
◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

はるのみふね
春の御ふね　一巻　成島信遍
元文五年庚申(一七四〇)三月、冷泉、冨室の兩卿墨田川に遊覽したる時の和文記事なり。著者は幕命により兩卿接待の事に與り、私にその記し留めおきたりと云ふ。文政二年己卯(一八一九)末孫成島司直の跋あり。
◎成島(鳴島)信遍は一名を鳳卿といひ、錦江と号せり。

はるのもの
春の物　一册　青木　鷺水
著者の俳句集なり。東山天皇の元祿五年壬申(一六九二)著者の來記あり。

はるのやざうしよるのうく
春の夜雜書目錄　一巻　中根　長章
著者が自家の藏書二千餘部の書目を列記したるものなり。著者中根長章は越後高田の人なり。

はるはらけいづ
春原系圖　一巻　曾永年
天智天皇より系を起し、從六位主殿助元孝に至る數十代の系なり。卷末に貞享二年乙丑(一六八五)著者の來記あり。

はれのごくわいぶるゐ
晴御會部類　一巻　和切
俳諧に關したる隨筆なり。天保十二年辛丑(一八四一)十月維石の序によるに、著者病後に之れを認め上梓するに及ばずして歿したりといふ。

はんねづせつ
範圍圖說　一巻　谷川　順祐
易學生卦に關して說明したるもの。文政十年丁亥(一八二七)秋九月の自序中に、「中州先生、嘗發明其精義、以作範圍圖、又釋其規則、以述此編、是故範圍者、所以範圍生卦之圖、而此編示其變動也。原本頗有錯誤。故今刪補校正、刻以公於世、學者先譜之、以對閱於其圖、則生卦之法、備于此矣」といへり。同十三年出版す。
◎谷川順祐の傳は「左國易一家言」の下にあり。

はんえさそうわ
坂役叢話　一巻
慶元の間、大阪に於ける二度の戰爭中、眞田幸村その他の著名なる軍事を記錄したるものなり。

ばんかうえんくわだんかうもく
萬香園花壇綱目　一巻　萬香園主人
廣く本邦の草類を採集し、和漢の諸書に徵して、其

の名稱を考說したるもの。排列の順序は本草綱目の區別に從ひたり。

はんかうれきしやく
頒行曆釋　一巻　森　效
頒行の曆に就て、年號改元、干幹、十二枝、眞享曆、宣明曆、年日數、大歲、大將軍三年塞進遊行、太陰神、歲刑神、歲破神その他曆面上にあらはれたる諸項を說明したるものなり。卷末には「森司馬」と記せり。享和元年辛酉(一八〇一)十月二十一日、岡林維祺識於介の序に、「我邦官無司馬、則名司馬、氏森、關澤其號乎」といへり。
◎森效は江戸の儒者にして、字は君則、關澤と號す。幼にして學を好み、太宰春臺に師事して頗る讀書に繙し、父兄世々秋元侯に仕へ、谷田貝を姓とせり、關澤業成り、江戸に帷を下すに及び、舊藩森養文といふもの請うて養子となす。經義の外射御兵法、天文算術に通じ、また能く雅樂を好めり。安永五年藝藩世子に近侍し、職小傅に次ぐ。翌六年丁酉(一七七七)五月二十八日、五十六歲を以て病歿す。

ばんがくせう
晩學抄　一巻　飛鳥井雅康
蹴鞠の書なり。「續群書類從」卷五百三十七、蹴鞠部第二にも收む。
◎飛鳥井雅康の傳は「蹴鞠肝要抄」の下に出づ。

ばんがしうおきておほえがき
板賀州掟覺書　一巻
板倉伊賀守の訴訟刑罰等に關する掟の條々を備忘のために記したるもの。

ばんかじんめいろく
萬家人名錄　五巻　柿耶丸長齋
著名なる俳家の肖像、姓名、雅號、年代、住國、及び傑句各一首等を輯錄したるもの。文化九年壬申(一八一二)當小路貞直卿の序あり。翌年出版す。著者柿耶丸長齋は浪華の人なり。

ばんかん
藩鑑　一百十四巻　林　輝
德川幕府の創業以來、寛保年間に至る君臣間の嘉言善行の、諸書に散見するものを輯錄したるもの。各其の原文を抄錄して出所を記し、每編小傳を揭ぐ。林輝の序文中に「人君たるもの此の編を讀み、其の寬厚にして衆を容れ、仁慈にして民を撫するを觀ば、須くこれを今日臨國の際に照すべし。身に藏め、政に施し、然る後以て君たるに愧るなし。人臣たるもの此の編を讀み、其の淸廉にして身を持し、忠直にして君に仕ふるを觀ば、須く之れを今日立朝の際に照すべし。心に得て行に效し、然る後以て臣たるに愧るなし」といへり。其の趣意を知るべし。而して「藩鑑」の名は、國家に藩屛たるもの、龜鑑たらしめん意に取れるものなるべし。別に五卷序例目錄等あり。嘉永元年戊申(一八〇八)に着手して、同六年に大成す。林輝幕命を受けて其の編輯を監し、諏訪賴永、岡田清儀等凡て十人の執筆に成れるものなり。

ばんかんぶりやくけい
藩翰譜略系　十二巻
新井白石の「藩翰譜」に記されたる諸家の略系譜な

寛政五年癸丑(一七九三)、中山愛親正親町公明の兩卿が、太上天皇の尊號敍證の事により江戸に下り、松平定信を以て事の始末を訊問せられ、終に兩卿の閉門となり。其の後歸京の事までを記したるもの。「中山問答」と稱するものと大同少異なり。

はんかんぶ
藩翰譜　十三巻　新井　君美
慶長五年庚子(一六〇〇)關原戰終りてより、延寶八年庚申(一六八〇)に至る八十年間、萬石以上の諸侯三百三十七家の興記沿革等を集錄したるもの。曩に「木朝武林傳」といへる書ありて世に行はれしが、本書は同書を骨子として作りたるものならんと云ふ。德川家宣の命を承り、元祿十四年辛巳(一七〇一)七月起草、同年十月に至りて脫稿したり。「藩翰譜」の名また其の下賜する所なりといふ。正編十卷、附錄二卷、凡例目錄共に一卷、通計十三卷、分つて二十册とす。
◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はんかんぶびかう
藩翰譜備考　四卷　新井　君美
新井君美の「藩翰譜」に收むるところの諸氏數十家の系譜なり。朱線にて其の關係を示し、事實を其の間に細書する事他一般の家譜と其の體異る事なし
◎新井君美の傳は「折たく柴の記」の下にあり。

はんかんぶりやくけい
藩翰譜略系　十二巻
新井白石の「藩翰譜」に記されたる諸家の略系譜な

り。十二巻八冊に寫傳す。

ばんき

番記 本一巻

保元三年戊寅(一一五八)八月、九月、十二月、朝儀に關する日記。猶保己一校寫の奥書あり。「輪池叢書」の巻三にも收む。

はんぎょふ

半魚譜 本一巻 **森 立之**

河海の魚類を寫し、各漢名を記し、氣味能毒を說明す。その品數八十一種あるより、半魚譜といへりと。安政六年己未(一八五九)の自序あり。

◎森立之の傳は「簾勝和名攷」の下にあり。

ばんきんさんげふぶくろ

萬金産業袋 三巻 **三宅 也來**

器財、衣服の二門に分ち、更に器財門には彫刻、筆墨、繪具、紙類、漆器等の製方並に産地符牒の類を記し、衣服門には機織裁縫の方法、織物の定尺等を記す。享保十六年辛亥(一七三一)の著にかゝる。

ばんぐわいざつしよかいだい

番外雜書解題 十七巻 **戸田 氏徳**

文政八年乙酉(一八二五)以前に徳川幕府の官庫に收入せられたる近代の雜書を撰要解題したるもの。巻一を神書、紀事、巻二を職務、巻三を武事、巻四より巻七を文筆、巻八を諸藝、巻九を百家、巻十を訓誡、巻十一、十二を類聚、巻十三を叢書附書目、巻十四を圖筆、巻十五を雜錄、巻十六を經說、史說、巻十七を子說、集類、學說、明清雜著として、都合千三百餘部七千餘巻を收めたり。番外とは經史子集の外、雜書とは類別せざるの謂なり。文政九年丙戌(一八二六)著者の凡例、宮崎成、間宮士信、中里仲舒等の序、村井量令の跋あり。近刊「續史籍集覽」の中にも收入せらる。

◎戸田氏徳の傳は「記錄解題」の下にあり。

ばんぐわいしよもく

番外書目 本二巻

慶元以來の撰述にて、正經雜俗を擇ばず收めて四庫及び國朝古書の外なるより番外と名けたり。其の類を分つこと、朝儀官職、輿地地理、史傳譜紀、水利農務、論學議政、武備兵法、諸藝雜儀、衣服飲食幼教女訓、字學音册、書畫文房、小技曲藝、寶貨器用、動植品物、居室園林、神道釋門、醫療搨登、詩集文集、和歌雜歌、書簡往來、雜考、經說、史考、千解等なり。書數凡そ三千餘種を收む。

ばんくわわかしふ

晩花和歌集 本二巻 **下河邊長流**

著者の家集。巻末に著者の年譜を掲げて、諸體すべて五十四編を收む。慶應元年乙丑(一八六五)藤應の序、奥田元繼の序あり、五巻三册に刻す。

◎白木彰に讀破の人にして、有常と字し、半水また半山と號す。中井竹山の門人なるべしといふ。

はんざんぶんそん

飯山文存 二巻 **松林 漸**

著者の文集。巻頭通じて五十四編を收む。慶應元年乙丑(一八六五)藤應の序、奥田元繼の序あり、五巻三册に刻す。

◎松林漸は伯淵また千達と字し、飯山と號す。筑前早良郡飯盛山下に生る。父に贅ひて大村に來り、嘉永三年歳十二にして始めて大村侯に見え、唐詩を講じて侍一口を受く。同五年命を奉じて江戸に出で、安積長齋に學び、年十九にして昌平黌に入り詩文掛となり、安政六年大村に歸りて藩六十石を受け、藩の學頭と爲る。其の後君國の爲め文武に盡すところあり、慶應三年丁卯(一八六七)正月三日、城手に係りて歿せり。時に年二十九。

はんし

蕃史 本二巻 **齋藤 馨**

西洋紀元前亞當の時より、紀元一千八百四十年に至る編年大略記なり。漢文にて記せり。西洋紀元の下には、必ず我が年代を充つ。嘉永四年辛亥(一八五一)の凡例、昌谷碩の序あり。

◎齋藤馨の傳は「緑竹堂文鈔」の下にあり。

ばんしふ

萬葉集 本二十巻 **大槻 清崇**

著者の自撰集にして、諸體すべて三百二十一首を收む。文化二年乙丑(一八〇五)藤應の序、奥田元繼の序あり、五巻三册に刻す。

◎白木彰に讀破の人にして、有常と字し、半水また半山と號す。中井竹山の門人なるべしといふ。

ばんしうたまくらならびにがらんかいき

播州歌枕並伽藍開基 本一巻

播磨の名所、播磨潟より、荒田神社に至るまでの七十九箇所を擧げ、各所に古歌を引證し、一首毎に出所と讀人とを上下に記せり。伽藍開基は國々巨刹六箇寺の開基を記し、元禄二年己巳(一六八九)までの年代を擧げたるものなり。

ばんしうこじやうき

播州古城記 本一巻

赤穗郡に八箇所、加西郡に六箇所、明石郡に五箇所、神東郡に十一箇所、神西郡に七箇所、宍粟郡に五箇所、印南郡に十四箇所、加東郡に十七箇所、佐用郡に三箇所、飾東郡に十三箇所、飾西郡に十箇所、多可郡に三箇所、三木郡に三箇所、加古郡に七箇所、揖東郡に二十四箇所、揖西郡に五箇所、凡て百四十一箇所を列記せり。寛政五年癸丑(一七九三)冨木の末記あり。

ばんしうこじやうきべつぽん

播州古城記別本 本一巻

赤穗郡に二十箇所、揖西に二十三、揖東に二十四、佐用に十七、宍粟に六、飾西に十二、飾東に十二、加東に十三、加西に十、印南に十三、加古に十四、神東

安政五年戊午(一八五八)菊池邊の序を載せて出版したり。

◎大槻清崇の傳は「鴻漸齋一百詩鈔」の下にあり。

ばんこくしやうくわづ

萬國掌果圖 一鋪

佛家の說に基きて圖したるもの。圖上に掲ぐる所の引用書數は百二部あり、其の中三十二部は佛家の說に屬す。自序あり。「寶永庚寅(一七一〇)京兆頭陀沿華子撰」と記せり。

ばんこくちめいかう

萬國地名考 本一巻

五大洲中、各有名なる地名を漢字にて記し、傍訓を朱書したる者なり。「中古叢書」の第七十八に入る。

ばんこくつばめ

萬國燕 一巻 **柳岡**

發句二千句を撰集して品評輯錄したるもの。判者は半時庵淡々。時は享保十三年戊申(一七二八)三月の事なり。

ばんこくでん

蕃國傳 本三巻

第一巻に朝鮮、衛滿、辰韓、新羅の四傳。第二巻に高勾麗、渤海の二傳。第三巻に百濟、任那、諸韓、靺鞨多補の五傳を收め、各國並の興廢、沿革等を記す。漢文にて書せり。

ばんこくふつうれき

萬國普通暦 一巻 **澁川 景佑**

ばんさいてきかう

半齋摘稿 本四巻 **勝田 猷**

著者の文稿を集めたるもの。清人盧燮春、卜葆韵、林蓉椿、楊邦榕、鐘步嶸等の題詞及び批評あり。著者勝田猷は詩人にして半齋と號す。

ばんざんいぶん

蕃山遺聞 本一巻

熊澤蕃山の逸事を輯錄したるもの。土佐人刈谷貞藏、江戸の人草加定環等の談話を筆記したる者也。

はんざんししふ

半山詩集 五巻 **白木 彰**

に七、神西に九、多可に六、三木に三、明石に六、附錄に十三。凡て二百八箇所を列擧せり。

ばんしうごせいばつのこと

播州御征伐之事 一卷　大村　由己

播磨國東八郡の守護別所小三郎長治を、羽柴秀吉の征討したる始末を記したるもの。卷末に秀吉の十德を數へて、「君有忠臣、臣有賞罰、軍有武勇、民有慈悲、行有政道、意有正直、內有智略、外有威光、聽有金言。見石奇特」とし、「是誠人間拔群之主、仰而可仰、將軍家長久繁榮之基也、覩々珍重々々于時天正八歲（一五八〇）正月晦日、大村由己誌之」とあり。「群書類從」卷三百九十三、合戰部二十五に收む。

◉大村由己は花の本の宗匠にて、播州三木に住したり。柴田勝家に從て、後、越前北の庄に病歿す。著書は此の外に、雌任退治記、柴田退治記、秀吉事記等あり。

ばんしうこせきべんらん

播州古蹟便覽 寫本二卷

播州全國十六郡の古蹟を列擧したるものなり。郡別に各地名を擧げて、まゝ考說し古歌等を擧げたるもあり。

ばんしうさよぐんき

播州佐用軍記 寫本二卷　川島　正友

天正五年丁丑（一五七七）秀吉、信長の命によりて播州に討入りし時佐用郡上月籠城の始末を記したるもの。當時正友いまだ十歲に滿たず後長ずるに及んで遺臣等と筆記したるなりと云ふ。慶長六年辛丑（一六〇一）の自跋、明曆元年乙未（一六五五）秀吉木下屋後守家定、慶長五庚子池田三左衛門尉政、武藏守鄕貞、元和三己巳、本多忠政、同政朝、寬永十六己卯、松平下總守忠明、松平大和守直基、松平式部忠次、溝口信濃守勝、松平大和守明矩」と。城主の屋敷を記したり。

ばんしうひめおのつづ

播州姬路圖 寫本一鋪

姬路城內外の圖にて、東は新築屋に、西は龍野町に、南は鷄山本德寺に、北は但州街道信德寺町に限れり。圖中城の本丸以下諸門諸廓、諸士屋敷、寺院、市街等を圖せり。

ばんしうめいしよじゆんらんづゑ

播州名所巡覽圖繪 五卷　村上　石田

播磨より播磨に至る紀行にして、道中の地名は巨細に順記し、數多の圖繪を插入して詳しく記載せり。秋里籬島編の「都圖會」の體に倣ひて編輯したるものなり。享和三年癸亥（一八〇三）勉亭主人（富小路正三位貞直）の序、中江直の跋あり。

◉村上石田は鄕貫俗稱を詳にせず、石田は其の雅號なり。

ばんしうしきふろく

播州色夫錄 寫本二卷

播州赤穗の城主柳原式部大輔が、女色に溺れ不良の行跡多かりしより、終に退隱を申附けられたる次第を記したるものなり。

ばんしうしよしやざんえんぎ

播州書寫山緣起 寫本一卷　僧　快倫

西國札所なる書寫山圓敎寺といふ古刹の緣起なり。末に元弘三年癸酉（一九九三）六月三日、權律師行春の記したる「書寫山記」を附せり。寬永二十一年甲申（一六四四）の奧書あり。「續群書類從」卷八百十六、「釋家部第百〇一」に收む。著者快倫は書寫山理敎房の住職なり。

ばんしうひめぢじやうゑづ

播州姬路城繪圖 寫本一鋪

姬路城本丸以下諸門諸廓諸士屋敷、寺院、市街等を記し、「圖端」に「赤松筑前守眞範、眞和年中構宮於飾東郡姬路、是當城最初也。其後小寺相模守賴季、同藤兵衛尉景次、同四郎後守職治、同伊豫守則職、天正十八年庚寅（一五九〇）秀吉木下屋後守家定、慶長五庚子池田三左衛門尉輝政、武藏守鄕貞、元和三己巳、本多忠政、同政朝、寬永十六己卯、松平下總守忠明、松平大和守直基、松平式部忠次、溝口信濃守勝、松平大和守明矩」と。城主の屋敷を記したり。

ばんしうしきふろく

播州色夫錄 寫本二卷

播州赤穗の城主柳原式部大輔が、女色に溺れ不良の行跡多かりしより、終に退隱を申附けられたる次第を記したるものなり。

ばんしうしよしやざんえんぎ

播州書寫山緣起 寫本一卷　僧　快倫

西國札所なる書寫山圓敎寺といふ古刹の緣起なり。末に元弘三年癸酉（一九九三）六月三日、權律師行春の記したる「書寫山記」を附せり。寬永二十一年甲申（一六四四）の奧書あり。「續群書類從」卷八百十六、「釋家部第百〇一」に收む。著者快倫は書寫山理敎房の住職なり。

ばんしうひめおのつづ

播州姬路圖 寫本一鋪

姬路城內外の圖にて、東は新築屋に、西は龍野町に、南は鷄山本德寺に、北は但州街道信德寺町に限れり。圖中城の本丸以下諸門諸廓、諸士屋敷、寺院、市街等を圖せり。

ばんしうめいしよじゆんらんづゑ

播州名所巡覽圖繪 五卷　村上　石田

播津より播磨に至る紀行にして、道中の地名は巨細に順記し、數多の圖繪を插入して詳しく記載せり。秋里籬島編の「都圖會」の體に倣ひて編輯したるものなり。享和三年癸亥（一八〇三）勉亭主人（富小路正三位貞直）の序、中江直の跋あり。

◉村上石田は鄕貫俗稱を詳にせず、石田は其の雅號なり。

ばんしうつろく

播史實錄 寫本一卷

備前播士の實錄にして、信雄入道勝入討死の事、雄政利隆光政の盲行及び當時播士の物語等敘傳に過ぎざれども、めづらかなる事も見えたり。安永七年

戊戌（一七三八）書寫の奧書に、後世好事者此書を知らずんばあるべからずと記せり。

ばんしせんこう

萬紫千紅 一卷　太田　覃

著者の狂詠二百餘首を集めたるものなり。狂詩狂文をも交へたり。文化十五年戊寅（一八一八）四方歌垣の序あり。江戸にて出版す。

◉太田覃の傳は「江戸繁昌記」の下にあり。

はんじやうとうき

繁昌後記 一卷　寺門　靜軒

前著「江戸繁昌記」の續編にして、八大地獄、死出山、三途河、賓橋、葉圖等の項目あり。時弊を痛罵したる寓言なり。

◉寺門靜軒の傳は「江戸繁昌記」の下にあり。

ばんしやうわうらい

番匠往來 一卷　鈴本　驥園

番匠の心得べき文字を列記して匠家徒弟◉讀書に供したるもの。安政三年丙辰（一八五六）の作なり。

はんしよかう

蕃諸考 寫本一卷　青木　敦書

甘藷の栽種貯藏の法を記したるもの。享保二十年乙卯（一七三五）二月の緒言に「敦書嘗て聞く豆州諸島近年食に難なりと。之が救をなさんと欲す。匹夫の人敢て及ぶ所にあらず。因て藷藷を廣めて以て北の飢を救ふことを思ひ、藷書を裒集して蕃藷考を爲る。後に松岡成章の藷藷錄を得たり。其書詳悉なり。今藷藷錄載る所を去て載せず。其要至るもの薩州種藏の法を記し、猶に僞て藷藷考と名くしと云へり。以て本書の作意を知るに足るべし。

◉青木敦書の傳は「昆陽漫錄」の下にあり。

はんしよかう

蕃薯考 一卷

青木昆陽の友人鈴木俊民の筆記したる「甘藷記」を增訂したるものにて、一名を「甘藷記」といふ。享保六年癸未（一七二一）の作。著者は大阪長瑯の人絲川某なり。

はんしよきりつ

蕃薯起立 寫本一卷　青木　敦書

享保年間著者幕府の命により、藷藷植立の書類を輯錄したるものなり。

◉青木敦書の傳は「昆陽漫錄」の下にあり。

ばんしよくづかう

萬職圖考 五卷　戴　斗子

種々雜多の紋樣圖案等を模寫したるもの。天保六年乙未（一八三五）、嘉永三年庚戌（一八五〇）等の序文あり。

はんしよしうりん

焚書收燼 六卷　諸葛　鑒

「書經」の錯簡脫誤、失順等を訂正したるもの。蓋し「書經」は漢夏商周の最古書にして、渙の時僅に二本の殘りたるものなり。然れども其の一本は既に滅びて、東晉豫章の梅氏に至て始めて安國傳の一本を得て、これを今日に傳へたりといふ。歲月の經過すると共に錯簡脫誤を多く、順序の亂雜せるものも少からずといふ。由て著者四渙以後諸家の諸傳に基き和漢數十家の考論に參叅して訂正したるなり。卷の一を說書、堯典舜典、大禹謨、皐陶謨、卷の二を夏書、禹貢、甘誓、五子之歌、胤征。卷の三を商書、湯誓、仲虺誥、湯誥、伊訓、大甲上中下、咸有一德、盤庚一、二、三、四、說命上中下、高宗肜日、西伯戡黎、微子。卷の四より六までは周書。（就中卷の四は秦誓上中下、牧誓、武成、洪範、微子之命、金縢、大誥旅獒、康誥、酒誥、梓材。卷の五は君奭、蔡仲之命、多方、立政、多士、召誥、無逸、洛誥。卷の六は君陳、周官、顧命、畢命、君牙、冏命、呂刑、文侯之命、費誓、秦誓等なり。以上六卷五十七編あり。寬政二年庚戌（一七九〇）春三月の自序あり。同五年正月門人二雅清熙の凡例あり。同人の編輯にて、同七年の版行。附錄一册あり、六卷七册に作る。

◉諸葛鑒の傳は「鑿堅山人集」の下にあり。

はんしよろく

蕃諸錄 一卷　松岡　玄達

本草、府志、縣志等に考據して、甘藷の事を記したるもの。著作の年代は詳ならず。

◉松岡玄達の傳は「櫻品」の下にあり。

はんすゐいかう

半水遺藁 寫本四卷　杉原　煒

著者の漢文數十編を編輯したるもの。其の上中二卷に著者自ら編する所にして、下卷は其の易簀の後安積良齋の編する所。大抵十八歲の時より二十

二歳の致年までの作なり。友人高島詳更に其の十五歳より十七歳に至る間の作を輯めて拾遺となし都合四巻とす。拾遺に、仁孝天皇の天保五年甲午〔一八三四〕高島詳の凡例、杉原郁の跋。第一に翌六年松崎純倹の序あり。著者杉原燁は文林と字し、半水と號す。

ばんすゐいちろ

萬水一露　二十八巻　能登　永閑

源氏物語の註釋本なり。巻首には源氏物語聞書と題して、作者、由来、時代、大意の事及び此物語古来稱美の事、紫式部の事、物語書き始むる年號の事、源氏と號する事、源氏姓を賜ふ事、五十四帖巻名の事、四部法門の事、四門得道の事、三諦の事等を記し、巻末に靈隠の說一巻を附したり。承應元年壬辰〔一六五二〕松永貞徳の跋に、法華の二十八品に象りて、二十八册に作れる由を云へり。

◎能登永閑のことは「伊賀名所記」の下にあり。

ばんすゐのんちやうべふいちだいき

幡隨院長兵衛一代記　二巻

江戸の俠客幡隨院長兵衛の一生を、小說に作成したるものなり。同人生立より事後俠客子分等が諸所に於て召捕らる、事に及べり。

ばんすゐにふかい

萬水入海　一巻

春夏秋冬と部立して、發句を集めたるもの、凡そ千餘句もあるべし。序言に「海之爲水也小而一滴一露、大而江河淮濟衆朝宗壹、此書所輯亦類于是、得之非一方吟之非一時、時積人衆聚以成編、故假名萬水入海云」とあり。以て本書の成立及び題意を知るに足るべし。

ばんすゐよは

洋水餘波　本邦　十一巻　大澤　貞雄

備前藩醫員の著書を編纂したるもの。即ち市浦毅齋、小原正義、小原如瓶、松井河樂、篠岡誠堂、窪田立軒、山田剛齋、和田省齋、井上玉成、井上爲山を擧め、其他以上諸人熊澤蕃山、泉々窩等の行狀記數編あり。資暦六年丙子〔一八四六〕に成れり。著者大澤貞雄は備前藩國學副監なり。公知と字す。

ばんせいうんじやうめいかん

萬世雲上明鑑　二巻　速水　房常

親王家、內親王家、宮門跡、攝家、華族、大臣家等より、諸寺諸社の俤衆請家に至るまでの姓名、知領高等を列記したるものにて、此の種のものは當時殆んど年々に編輯せられたり。寶暦八年戊寅〔一七五八〕の著、天保三年壬辰〔一八三二〕の序傳は「堂中職原擧要」の下にあり。

◎速水房常の傳は「堂中職原擧要」の下にあり。

ばんせいかはう

萬世家寶

士農工商の敎訓となるべき事を記したるもの。元祿七年甲戌〔一六九四〕の自序あり。

ばんせいだいきふ

萬世大統譜

神代文字にて記したる五十音圖に、更に五十音をあて、開合、初發用令助等の刑を示したるものなり。天保十年己亥〔一八三九〕の作なり。男鐵胤校正して一枚に版せり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

ばんせいたいへいかん

萬世泰平鑑　本邦　十二巻　大野　廣城

德川家康、以下第十二代將軍家齊まで、天文十一年壬寅〔一五四二〕より、天保八年十酉〔一八三七〕に至る二百九十六年間、德川氏歷代事績の綱目を年序的に記したるものなり。天保十二年辛丑〔一八四一〕の自序あり。

◎大野廣城の傳は「泰平年表」の下にあり。

はんせうだん

半宵譚　本邦　二巻

國史記錄中のものを論し、字義訓詁、和漢物語の事等を記したり。著者年代共に詳ならず。

ばんせんいつけん

蠻船一件　本邦　一巻　平田　篤胤

文政五年壬午〔一八二二〕五月伊豆の海邊に英吉利の船來りし事より思ひつきて「日本紀」等より夷狄征伐の由緒を抄記したるもの。同年の著。「輪池叢書」の巻九に收めらる。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

ばんだいわかしふ

萬代和歌集　二十巻

古來の和歌を類聚したるもので、凡そ數千首を收む。「丹鶴叢書」には十册に作り收む。其の巻末に「右萬代和歌集全部六册者、寛文十一年亥〔一六七一〕三月中旬雖取、同五月十日全書寫、後日校合第、雖然寫本少々不審之事等有之、就中奥書之文字不分明、重而以證本可令校合矣」と記せり。

はんたうかう

半陶稿　六巻　僧　彥龍

著者の詩文稿を編輯したる者也。年代詳ならず。

◎彥龍は相國寺法嗣院の住職にして周興と號す。澤庵陶工の子にして横川和尚の弟子なり。四六の文に妙を得たりと。藤原惺窩「彥龍雖爲異敎之徒、又一代偉人、餘所甚愛重也」といへることあり。

はんだのみちのき

半田道記　本邦　一巻

延享三年丙寅〔一七四六〕半田稻荷社へ參詣したる時の道の記也。同社は武藏國葛飾郡葛西領にあり。

ばんどうさんじふさんしよくわんおんれいぢやうき

坂東三十三所觀音靈場記　十巻

僧　亮盛

最初に坂東巡禮始行之圖、坂東巡禮の因緣等を述べて、相州杉本寺より始め、第三十三番安房國那吳寺に至る三十三箇所を擧げたり。

◎亮盛の傳は「筑波山名跡志」の下にあり。

ばんどうちうぎでん

坂東忠義傳　十巻　三木　成爲

支那小說水滸傳を翻案して作りたる小說にて、坂東なる足利左京亮源義遠、長尾鑑物爲明、一色太郎左衛門時綱、城戸次郎太郎特廣、由形八郎季照、小栗判官助重、鎌倉權五郎景政、鎌倉悪源太義平、梶原源太景季、和田小次郎義盛、和田太郎義茂、和田三郎宗實、和田四郎義胤、和田五郎義長、和田六郎義直、和田七郎、鹿島惣次郎等の武勇忠義の事績を傳したるものなり。元文五年庚申〔一七四〇〕友人高泰の序あり。十巻十五册に發行せり。

ばんどうつうし

坂東通志　五巻　足利　政勝

足利尊氏の二男基氏關東管領となりしより、天正十八年庚寅〔一五九〇〕小田原北條氏滅亡の事に至る、關東の治亂、京都將軍の交替、鎌倉執權の次第等を記したるもの。慶長三年戊戌〔一五九八〕九月和泉守政勝之を著はす。著者足利政勝は總州佐山の住人にして、助七郎と通稱せり。

はんにやしんきやうくわんぢうでん

盤若心經關註傳　一巻　僧　玄櫻

「摩訶般若波羅蜜多心經」に假名文の註釋を加へたるもの。文化九年壬申〔一八一二〕の自序あり。明治十六年癸未新刻す。

はんにやしんきやうしていせん

般若心經止啼錢　一巻　僧　天桂

「摩訶般若波羅蜜多心經」を假名文にて註釋したるもの。明治九年丙子〔一八七六〕新刻す。

◎天桂の傳は「正法眼藏辨註」の下にあり。

はんにやしんきやうひけん

般若心經秘鍵　一巻　僧　空海

眞言宗の宗義に據りて、般若心經の大意を解釋したるもの。弘仁九年戊戌〔一四七八〕の著なり。註釋書には賴寶の祕鍵東開記三巻、道範の祕鍵開寶鈔二巻、宥快の心經祕鍵鈔七巻、賴瑜の祕鍵開蘗鈔二巻、杲寶の心經祕鍵鈔六巻、其の他數部あり。

◎空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下に在り。

ばんねんまんろく

晩年漫錄　本邦　一巻　久米　順利

天理二字の義を講說したるものなり。晩年の感得なるより、書名と爲したるなるべし。安永七年戊戌〔一七七八〕の自序あり。

◎久米順利は京師の人にして、通二郎と稱し、訂齋と號す。三宅尚齋の女婿なり、其の學統を傳へて敎授を業とし、門人頗る多し。著書には性理要說、性理餘說、訂齋筆記及び晩年錄等あり。明和年中、歲六十餘にて歿せり。

ばんばうしんしよ

萬寶新書　二巻　宇田川興齋

杉田成卿の「萬寶玉手箱」につぎて、西洋書中より譯出したるもの。酒の醸法、食品の貯方以下凡て二百七十餘項あり。序中に「原本係閻俺緒坦府醫總、名曰悉葛加誤財、盛寶函之義也、其所載諸般術藝、製作方法、以至近時所發明之事件、(中略)遞亡友杉田成卿、有葛寶玉手箱之著、亦略資原于此焉、惜矣哉彼氏辭世、又無次編之槩、是以予今校所譯之遺稿、擇其中便要而近我用者、以附剞劂」云々とあり。著者宇田川興齋の傳は詳ならず。

ばんぱうぜんしよ

萬寶全書　十三卷　菊木　嘉保

卷一、二、三に本朝畫印傳三百七十八人及び雜傳六十四人。卷四に唐繪畫印傳百七十八人。卷五に和漢墨跡印鑑八十八人、本朝古筆諸流目錄二十八家、古來流行御手鑑目錄七百五十一。卷六、七に和漢名物茶入肩衝目錄百九十一。卷八に和漢諸道具見知抄にて三十八品。卷九に和漢古今寶錢圖にて三百三十餘品。卷十、十一、十二を古今銘盡合類大全とし。卷十三を彫物目利彩金抄とし、後藤氏系圖、彫物代付目錄、彫物見分樣の事、紋盡の事、諸國鍔の事、柄鞘鮫の事、甲泥錢の事等を掲げ、享保三年戊戌〔二三七八〕六月版行し、明和七年庚寅〔二四三〇〕に改正再版す。

ばんぱうたまてばこ

萬寶玉手箱　一卷　杉田　信

西洋諸書中より、日用簡易諸法を抄譯したるもの。例せば、廉價の夜燈を造る法、名酒を製する便法、掾寶または栗の實を以て、咖啡を作る法等、凡て五十餘項あり。安政五年戊午〔二五一八〕刊行す。

◉杉田信の傳は「梅里遺稿」の下にあり。

ばんぱうひじき

萬寶鄙事記　八卷　貝原　篤信

世俗雜事を、衣服、營作、器財、硯墨筆紙文字、刀脇指、收穫、花、香、火、紙細工、染物、去蟲鼠、雜、占、天氣、月令、養氣、食禁、用藥、灸治の二十門に分ちて平易に略說す。卷首に「此の書一部八冊二十門、記すところ和漢の書を引證とし、又古語或は俗說をも交へて、邊鄙の人々の、見やすく、心得やすからしめんためなり」と記せり。寶永二年乙酉〔二三六五〕の作。橫本四冊に作る。單に「鄙事記」と題したるもあり。

◉貝原篤信の傳は「自娛集」の下にあり。

ばんぱふちやうけんじゆつ

蠻法町見術　木活 一卷　平野悟默軒

闔書に依り、測量術を和解したる小册子なり。術の全體は半圓器を用ひ、八線表を査して、其の術を施すものにて、最近易なる法則を記載したり。然れども當時にありては、稀に見るものとす。寛政九年丁巳〔二四五七〕仲夏と記入せり。村田光隆寫記し、渡邊以親復寫して以て傳ふ。

◉平野悟默軒は、久留島義太の門人なり、江戸本所に住せり。

はんぴしやうこのき

半臂掌故之記　木活 一卷　大塚　嘉樹

半臂着用の故實次第を記したるものなり。天明四年癸卯〔二四四三〕自らの奥書あり。

◉大塚嘉樹の傳は「若槁隨筆」の下にあり。

ばんぶつくわいいべんだん

萬物怪異辨斷　八卷　西川　忠英

和漢古今の書中より、怪異の事のみを抄錄して各辨說を與へたるものなり。前集を天異編、後集を地異編として、八卷二册に版す。正德四年甲午〔二三七四〕金忠佐の序あり。

◉西川忠英の傳は「華夷通商考」の下にあり。

はんぼうばいひやくりつ

半峯梅百律　一卷　堀江　章

著者の律百首を輯む。安政四年丁巳〔二五一七〕安積信の序あり。

ばんやうまんぱうちゑぶくろ

播陽萬寶知惠袋　木活 五十卷　天川　友親

播磨國の地誌に關し、社寺の緣起、諸家の著作等を抄集し、かねて自家の記說をも加へたり。播陽の事實、名所、古蹟の材料は、最も輯め得たりといふべし。其の社寺緣起の外、諸家著作を擧げたるは、芦屋道考の「古處傳聞志」、芦屋道仙の「府中記」、廣田鵜松の「步行古處記」、赤松蒔齋の「故事考」、三木通資の「村名古事記」、芦屋道建の「國衙巡行考證」、孝橋立閑の「室津道考略記」、三木通識の「雄德山八幡宮略記」、大鹿清基の「越部舊蹟記」、三木通識の「八十岩橋記」、白井元貞の「木庭記」、岡山某女の「法華山記」、芦屋道海の「府中廻り」、三木通識の「府中廻り拾遺」、瀨氏八百里の「府邊二十四社巡拜名略記」、芦屋道海の「近村廻り一步記」、久保玄靜の「古處拾考」、三木通識の「諸所隨筆」、自撰の「名所集」、三木通識の「古處集」、赤松了益の「古處歌寄集」、英保芳蔦軒の「古歌雜歌小夜枕」、春日守楓の「播磨歌垣」、三木通識の「古所歌寄」、天川增山の「古所舊傳」、後藤基邑の「名所考」、加藤敬直の「古蹟便覽」、天川友親自撰の「名所古歌集」、同「名所今昔集」、同「名所詳海」、雲松寺の「西國三十三所和歌」、同「姬

路三十三所和歌」、南空上人の「印南三十三所順禮」、宗德の「法華二十八品法樂記」、亞槐通躬卿の「曾根法樂歌合」、一翠軒竹叟の「名所拾錄」、三木通識の「名所拾錄異本」、紫式部の「明石卷」、天川友春の「所員詩歌」、藤江忠廉の「龍野志」、自撰の「揖保郡志」、藤江忠廉の「赤穗郡志」、橋本元孫の「宍粟郡志」、自撰の「武名事實記」、最端の「因果物語」、赤松了益の「あだ物語」、同「うつゝ物語」、永良竹叟の「竹叟夜話」、五代重氏の「五代氏夜話」、相賀重氏の「說盡夜話」、榊原政房の「榊原夜話」、赤松義村の「祕事枕」、赤松則房の「雜談聞書」、永良鶴翁の「めざまし草」、後藤基邑の「播步思出草」、三木通識の「皿屋舖」、芦屋道海の「巡考聞書」、赤松了益の「龍城聞書」、赤松諱齋の「諸家注進」、三木通識の「織古所拾考」、讃成の「嘉吉軍記」、通成の「嘉吉赤松軍記」、同「赤穗書記」、岡村道齋の「赤松家傳袖記」、永良鶴水の「武道物語」、魚住徃齋の「神吉合戰記」、自撰の「寺院異物語」、同「諸所古今物語」、三木立之の「播磨諸抄」、佐々木混淨の「高砂拾遺補抄」等なり。其の自撰のものなどは、自ら實地に就て見聞探索したる者なりといふ。五十卷二十五册に寫傳せり。

◉天川友親は播州の人にして蒋木堂と號せり。攷古に志厚かりし人なるべし。學術に秀でたる人とは見るべからざるも、本書に收めたる著書の如きも數書あるを見るべし。

ばんゆうよろく

槃游餘錄　木活 十卷　吉田　桃樹

天明八年戊申〔二四四八〕より、寛政十二年庚申〔二四六〇〕に至る間に、東海、畿內、山陽、山陰、東山道等の諸國を歴遊して、路の順に、月日にかけて記したる日記なり。此の內「槃游餘錄」二卷は上にいふ諸國に涉りて最も廣く漫游したる跡を記し、次編一卷は寛政元年己酉〔二四四九〕伊豆、相模兩國に遊歷したる時の記。三編二卷は寛政四年壬子〔二四五二〕伊豆中の遊歷の記。四編二卷は寛政五年癸丑〔二四五三〕奥羽歷遊の記。五編一卷は寛政九年丁巳〔二四五七〕秩父遊歷の記。六編一卷は寛政十二年庚申〔二四六〇〕安房遊歷の記、附錄一卷あり。凡て十卷、各諸家の序跋あり。

◉吉田桃樹は江戸の人にして、甲夫と字し、忠識と稱し、繁岐、雨岡等の號あり。初、井上金峨に經書を學び、後、澤旭山と交りて文詩を錬り、楠千阪、村田春海等と深交ありてまた歌文を善くせり。家世々德川幕府に仕へ、桃樹も能く吏務に通じ、明和中淺草川の架橋〔今の吾妻橋〕に著功あり。饑饉に對して賑給策を建つる等甚だ明敏なり。後、讒にあひて黜けられ、是より削髮して東叡山時雨岡に退居す。又漫遊を好み、海內の名勝祇、探らざるなし、本書の成る蓋し其の紀行なり。著書の傳はれるものは、本書の外に岡別錄、繁岐雜錄等なりといふ。享和二年〔二四六二〕十一月九日、六十六にて歿す。

ひ

ひいみのせつ

火忌說　一卷　河北　景楨

神道の國風として、伊勢五十鈴の近邊、古來殊に火忌の行はるゝにつき、それに關する事を考證したるものなり。明和九年壬辰〔二四三二〕谷川士淸の序、安永二年癸巳〔二四三三〕荒木田弧形の跋あり、同年刊行す。著者河北景楨は伊勢の人にして奄藝と號す。

ひうがけいゐりやくき

日向經緯略記　木活 一卷　佐藤　信淵

日向國の經緯を測量し地理物產等の事に論及したる書なり。

◉佐藤信淵の傳は「經濟要錄」の下にあり。

ひうがすみよしのべん

日向住吉の辨　木活 一卷　岡田　正利

日向國橘檍原に、住吉といふ地名なきことを辨明したるものなり。享保十二年丁未〔二三八七〕の記にかゝる。

◉岡田正利の傳は「神代卷證歌」の下にあり。

ひうがのくにゑづ

日向國繪圖　木活 一鋪　松平又三郎

東は海。西は肥後、薩摩、大隅。北は豐後の境を限りとしたる地圖にて、郡村、陸路、航路等を記し、圖端に郡村高を揭げ、「寛政六丙子年〔二四一六〕十月松平又三郎」と記したり。

◉松平又三郎のことは「大隅國繪圖」の下にあり。

ひうがのくにきうちかう
日向國舊地考 寫一卷 柏崎 永以
日本紀神代卷にいへる日向國高千穗峯と、諸縣郡霧島嶽とを、古來混誤したること、日向の襲の曙は今の大隅國姶於郡なりといふ俗說等を辨じたる稿本なり。卷末に、元文元丙辰(一七三九)八月十四日記之、源元珍とあり。元珍は柏崎永以の事なり。天明三年癸卯(一七八三)四月晦日、伊勢眞文寫本の奥書あり。書中に橘三喜の延寶三年乙卯(一六七五)九月の肥後紀行文をも收めたり。
◎柏崎永以の傳は「參考落穗集」の下にあり。

ひうがのくにもろがたごほりがうそんこくづけちやう
日向國諸縣郡鄉村石附帳 寫一卷
村數百六十四にして石高都合十二萬〇二十四石五斗八升を、村別に列記したるものなり。

ひうちぶくろ
火打袋 一卷 多田 義方
本書は一名により「草の螢」の下に解題したり。

ひうちぶくろづかう
燧袋圖考 一卷 映水軒
燧袋を圖示考證したるもの。栗原信充の刀劍圖考等に倣ひ作れるなり。弘化三年丙午(一八四六)の自序あり。

ひえいざんさうりんたうめいりやくしやく
比叡山相輪樑銘略釋 一卷
僧 光謙
比叡山に在る相輪樑の銘文を略解したるもの。相輪樑は弘仁十一年庚子(一四八〇)最澄の建てし所にして、其の銘また同人の撰に係れり。元文元年丙辰(一七三九六)本書を梓行す。
◎光謙の傳は「觀經妙宗鈔講錄」の下にあり。

ひえさんわうしんき
日吉山王新記 寫一卷
本書は次掲「日吉山王二十一社新記」の下に解題す。

ひえさんわうにじふいつしやしんき
日吉山王二十一社新記 寫一卷
京師阪本にありて、傳敎大師の開基せりといふ日吉山王神社の緣起なり。上の七社は伊勢、石清水、賀茂、松尾、平野、稻荷、春日。中の七社は大原野、大神、石上、大和、廣瀨、龍田。住吉。下の七社は梅宮、吉田、廣田、祇園、北野、丹生、貴布禰等なり。皆神體、神號、神位、由來等を記す。全編漢文なり。「日吉山王新記」と題して傳ふるもあり。

ひえさんわうべん
日吉山王辨 寫一卷
日吉山王の稱の有無由來等を、諸書に徵して考辨したるなり。嘉永四年辛亥(一八五一)六月七日の作、同五年源富明の序あり。
◎前田夏陰の傳は「稻荷神社考」の下にあり。

ひえさんわうりしやうき
日吉山王利生記
日吉山王社の緣起靈驗等を繪傳したるものなり。今其の繪を省けり。「續群書類從」卷五十、上中下三冊、神祇部第五十に入る。

ひえじんよこにふらくけんもんりやくき
日吉神輿御入洛見聞略記 一卷
應安元年戊申(一三六八)より、康曆(一三九一—一四〇〇)年間に至るまで、山門の大衆が、日吉の神輿を奉じて入洛したる事績を略述したる者なり。

ひえのやしろうたあはせ
日吉社歌合 一卷 九條 知家
嘉祿元年乙未(一二二五)十二月二十四日、同社奉納の自歌合なり。凡て廿一番、皆定家の判詞を加ふ。「群書類從」二百十八、和歌部第七十三に收む。

ひえのやしろきやうかうざつじ
日吉社行幸雜事 寫一卷
本書は日吉社行幸の供奉雜錄なり。年代詳ならず。

ひえのやしろしんたうみつき
日吉社神道密記 寫一卷 行丸
同社の本社末社に至る雜事を筆記し、卷末に社務祝部の系圖、大宮方、二ノ宮方、八王寺三社等の圖をも載せたり。著者行丸は禰宜正四位下にして大藏卿たり。

ひえのやしろならびにえいざんぎやうかうき
日吉社並叡山行幸記 寫一卷
元德二年庚午(一三三〇)三月、後醍醐天皇の、日吉社及び叡山等へ行幸遊ばせられたる時の記なり。

今見るところは享和二年壬戌(一八〇二)吉嶽法受院大僧都眞超の寫本なり。

ひえのやしろむろまちどのしやさんき
日吉社室町殿社參記 寫一卷
應永元年甲戌(一三九四)八月、足利氏の日吉社參詣の詳細記なり。貞享三年丙寅(一六八六)、文化五年戊辰(一八〇八)等寫本の奥書あり。

ひえのやしろはふらくひやくしゆぞくか
日吉社法樂百首續歌 寫一卷
邦高、義政、義胤、その他諸家の詠にかゝる百首なり。文明九年丁酉(一四七七)十二月十日と末記す。

ひえふせう
祕藥抄 寫六卷
調馬療病に關する傳書なり。鈍凡漫頂祕密集拔書、仲園祕傳集拔書等もあり。

ひをけのさうし
火をけのさうし 一卷
翁の愛する火桶を嫗みて、嗣の打碎きたるを骨子として悲綴りきたる單純なる古小說なり。插畫もまた古雅なり。

びかいさんぱふ
微開算法 一卷 綠川 重明
邊に穗積與信が著したる「下學算法」の十一問に答術を附したる書なり。原安島氏の序に曰く「十一問者城攝十一氏之所ニ難澁一也、重明閑ニ之不ル措、件々作之解辨」とあり。享保五年庚子(一七二〇)出版す。著者綠川重明は諱三と稱す。和州郡山の人なり。

ひかいせいさんぱふ
非改精算法 一卷 神谷 定令
向に會田安明が藤田定資の著したる「精要算法」を見て、編中に訛誤ありとし、其の十三箇條を改正したり。定資親て是れ被意を挾みて事實改正に非ずとす、乃ち門人神谷定令をして、これを辨論せしめたる書なり。故に名て「非改精算法」と曰ふ。天明六年丙午(一七八六)出版す。
◎神谷定令は幸吉と稱し、藍水と號す。藤田定資の高弟にして、甸る斯學に通ず。文化八年辛未(一八一一)正月十二日殁す。江戸小石川四岸寺に葬る。

ひかうろく
比考錄 寫四冊
幕府評定所より引繼ぎて、內閣文庫に保存せる法政書類なり。年度は詳ならず。

ひかきかしふほちう
檜垣家集補註 二卷 中島 廣足
檜垣嫗家集の遺漏を拾ひ、并澤蟲龍子の「檜垣集冠註」を補註したるものなり。前大宮司永章、弘瀨貞幸の序、天保六年乙未(一八三五)資泉の跋、大友遠霞の跋等あり。
◎中島廣足の傳は「瑕浦集」の下にあり。

ひかきのおうなかしふ
檜垣嫗家集 寫一卷 檜垣 嫗

歌文の集にて、この中の文章は「扶桑拾葉集」に入れるもあり。
◎檜垣嫗は筑紫白河の遊女にして、和歌に巧なりき。曉年太宰大貳藤原興範といふもの、適々淚して水を乞へるとき、嫗年ふれば我が黑髮も白河の、みづはぐむまで老にけるかなと詠みて水を進む。興範感悟して物を與へたりと傳ふ。

ひかきもんじよ
檜垣文書 寫三冊
此の書は一名「鏑矢伊勢宮方記」の下に解題せり。

ひかげのおちば
蘿の落葉 一卷 橫井 也有
明和三年丙戌(一七六六)印行したる「蘿葉集」を、天明二年壬寅(一七八二)再刻する時、前編以後の俳句を、文樵が集めて添へたるものなり。近年發行の俳諧文庫第六編「也有全集」の中にも收めたり。
◎橫井也有の傳は「鶉衣」の下にあり。

ひかげのかつら
蘿鬘 一卷 堀 秀成
言詞辭差別の事、言に五種の差別ある事、詞の四種二種の差別ある事、詞に五段の差別ある事、以下凡て數十條、言語の差別、言語の活用、てにをはの事等を考述したるものなり。安政四年丁巳(一八五七)成稿す。
◎堀秀成の傳は「言葉妙用論」の下にあり。

ひがしいんどしよたうもく
東印度諸島地名 寫一卷

胖里悪音島(ヒリペイン)と總稱するもの十箇島、英里古斯島と總稱するもの十三箇島、シユンダアと總稱するもの三箇島との各小名を列舉したるものなり。

ひがしえぞくなじりたういつけん
東蝦夷地くなじり島一件 本一卷

寛政元年己酉(一七八九)五月東蝦夷地くなじり島に騒動ありし時、新井田孫三郎以下二百十餘人を差向けたる事ありしが、本書は當時の始末を記載したるものなり。

ひがしえぞちめいかい
東蝦地名解 本一卷

東蝦夷沿岸地方の地名の名義由來等を説明したるものなり。

ひがしえぞちめいかう
東蝦地名攷 本一卷 秦檍丸(アハキマロ)

東蝦の地名を和讀せしめ、また語原語義等を註解せる所もあり。文化五年戊辰(一八〇八)著者の凡例中に、「凡地名案の及ばざる所は、蝦夷に問うて具に古今の沿革を察し、漢音和訓五音の相通を熟考して、是れを記しぬ、其の来考のものは爽も知らざる所、短かきオの考へ得ざる所なれば暫く巻き闕を存して、後の賢き人をまつ」と云へり。

◎秦檍丸の傳記は「錦窩翁概圖」の下にあり。

ひがしえぞにつし
東蝦夷日誌 六卷 松浦竹四郎

東蝦夷の山川地理風俗習慣等を説明圖示したる地誌なり。文久三年癸亥(一八六三)の凡例あり。初編一卷に山越内、虻田の二場所を記し、二編一卷にウス、モロラン、ホロベツ、シラヲイ、の四場所を、三編、四編、五編、六編に亘り東蝦夷諸地方を記せり。

◎松浦竹四郎の傳は「蝦夷年代記」の下にあり。

ひがしえぞやご
東蝦夷夜語 三卷 大内 徐庵

東蝦夷の風俗習慣山川地理に關することなどまで詳記したるもの。著者官命を帶びて該地に渡り、三年の在留中に其の見聞したるものを、後の證柄にもとて畫工の修飾をも加へて綴り成せりといふ。尤文梁雅言を用ひず、唯其の地を踏み其の勝を記し、其の實を傳へんと欲すれば、文の卑陋なるを見るも人咎むることなからんことを、これ冀ふ」と、安政七年庚申(一八六〇)二月の著者の例言中にいへり同年菅原夏陰の序、鈴木善の序等あり。

◎大内徐庵は江戸の人にして、徐と稱し、弘真と字し、桐窓と號す。

ひがしやまさふき
東山左府記 本一卷 藤原 實熙

享徳二年癸酉(一四五三)三月、三月の朝儀に關する日記なり。端裏に「行類抄」の下にあり。

◎藤原實熙の傳は「行類抄」の下にあり。

ひがしやまさんかき
東山山家記 本一卷 木下 勝俊

東山幽居の有樣を自記したるもの。和文の日記也。

◎木下勝俊の傳は「寒白集」の下にあり。

ひがしやまぢのおんかうあはせ
東山殿御香合 一卷

初めに香合の由來を敘し、次に足利時代に行はれたる聞名香合の式を記したるもの。寛延元年戊辰(一七四八)大枝流芳の校正を經て上梓す。

ひがしやまどのもんちやう
東山殿紋帳 本一卷

足利時代諸武家の家紋を集錄したるもの。凡そ二百六十餘種あり。卷末に「永正七年庚午(一五一〇)三月十七日於立雪齋書了」と記したり。

ひがしやまはなみのき
東山花見記 一卷 宇都宮由的

京都祇園の東なる洛陽著名の勝地東山に觀花したる時の紀行文なり。凡て二編あり、一編は寛文二年壬寅(一六六二)二月二十二日、一編は同三月一日のものなり。

◎宇都宮由的の傳記は「日本人物史」の下にあり。

ひがしやまめいしよき
東山名所記 一冊 淺 淺

東山名所を詠める發句の集なり。延寶二年甲寅(一六七四)三月中旬の編にかゝる。

ひがしやまわうらい
東山往來 本二卷

東山なる某僧師と、椙圭某との往來答問書四十三

雙を輯したるもの。「續群書類從」卷三百五十九上下、消息部第一に收む。

ひかずのつれづれ
日數の徒然 本一卷 六誹園立路

著者の隨筆。端書に、「きのふと過ぎ、けふとくらすも、やまひの多き身なれば、おとづるる書眼の睦みにすがりて、茶話の數々をまるし、また雨の夜月の夕、寤さめ勝なる愛をすめてつゞる日數を、其の儘に日數の徒然とは名け侍るとぃへり。

◎六誹園立路の傳は「老の灯」の下にあり。

ひかはじんじやりやくき
氷川神社略記 一卷

武藏國一宮なる氷川神社の緣起を記したる者也。

ひかんせう
祕肝抄 本一卷 僧 空海

眞言宗五箇の祕密書なり。自行觀、灌頂觀、別行觀、胎藏界等を論ず。曾空海の撰名あり。

◎空海の傳は「祕密曼陀羅十住心論」の下にあり。

ひがんのつき
彼岸の月 一册 路通

路通並に雪風の俳句集なり。元祿十一年戊寅(一六九八)の編にて、京都井筒屋の版行なり。

◎路通の傳は「芭蕉翁行狀記」の下にあり。

ひがんべんぎ
彼岸辨疑 一卷

びきすゐけいでん
尾紀水系傳 本一卷

德川の御三家たる尾張、紀伊、水戸、三侯系譜を詳細に記したるものなり。

びきふはちやくしんろん
備急八藥新論 三卷 佐藤神符滿(シンプマロ)

卷首に整藥、方丈等仙院の由來を述べ、次に人參、大黄、硝子、厚朴、甘草、胡椒、丹砂、巴豆の八藥を説明し、本邦固有産の性效著き事等を論じたり。安政年間の出版にかゝる。

◎佐藤神符滿の傳は「寄視」の下にあり。

びきりものちやう
日限物帳 本二冊

嘉永元年戊申(一八四八)の謄册にして、幕府評定所より引繼ぎ、內閣文庫に保存せり。

びきんかくざうしよもくろく
披錦閣藏書目錄 本一卷

和書各種凡そ六百數十部を列載せる書目なり。書名をのみ記して、著者卷册數等を記さず。

びぐちごのの
樋口殿之記 本三卷

故實に關する雜記なり。奥書に樋口殿といふを解して、堂上新家六十三家中の高倉家なりといへり。

びぐちごのひざうき
樋口殿祕藏記 本三卷

「齋院の賀茂にありし時御形(みあれ)というて、內侍が賀茂へ御形の宣旨を承て、賀茂へ使に、一度行きてからは、後まで宣旨といふ、直に女中の號になりて、今も宣旨といふがありし」といふを、開卷の第一項として、以下齋院祭式葺隨身女裝位其の他の實例故實等を記したるものなり。卷末に「右樋口先生一帖不存外見、可令祕藏者也」と記し、更に「樋口殿は堂上新家六十三家之內、高倉家なり。二百石石藥師水流の角」と記せり。一本に「樋口祕記」と稱する一卷の寫本あり、內容全く同じくして、享保十四年己酉(一七二九)書寫の奥書と、安永二年癸巳(一七七三)伊勢貞丈の考說とを附したり。

びくましふ
曳駒拾遺 本三卷

遠江國濱松領に關する名所舊蹟を記せり。國名のことより、隅部賀茂、大日庵等に至る六十八條あり。曳駒は引馬とも書して、遠江國數郡の地名、今の濱松の地なり。天正五年丁丑(一五七七)の曳駒の城を移したるより、驛路も自ら今の所に改まりしとなり。正德三年癸巳(一七一三)の自序あれど、撰者の氏名を詳にせず。

びぐらしすゝり
日暮硯 本一卷

信州松代の城主眞田伊豆守の政績を記したるもの。家人恩田杢を擢でて政事を委れ、治績ありしこ

とを記す。寛暦十一年辛巳(一四二一)家人の記錄するところなり。

びくわうさうもくづ

備荒草木圖　二卷　建部　由正

食料に充つべき草木一百餘種を擇びて圖解し除蝗調食の法等を示し備荒救急の用を效へたるものなり明和八年辛卯(一四三一)の著。天保四年癸巳(一四四九三)杉田勤の序、同四年大槻玄澤の序等あり。

◎建部由正は、字を元策、號を清庵といふ。一關田村侯の侍醫たり。

びくわうゆしよ

備荒諭書　一枚　德川　齊昭

弘化二年乙巳(一五〇五)著者當年の凶荒を察し、芋の種を種植して、備荒すべき由を、殿内の卿士金澤吉衛に内諭せる手書なり。

◎德川齊昭の傳は「食菜錄」の下にあり。

びくわさうろん

非火葬論　一卷　安井　眞祐

火葬の非なることを儘說に基きて考論したるものなり。

◎安井眞祐のことは「歸正漫錄」の下にあり。

びくわさうろんふろく

非火葬論附錄　*一卷　浦野　種智

稻葉正義の「火葬論」に附錄する意にて、諸家の說を抄出して、論記せり。卷末に延享二年乙丑(一四〇五)稻葉正義の「與浦野種智」記あり。

ひくわらくえふ

飛花落葉　一卷　平賀　源内

慶長五年庚子(一二六〇)の頃より、寛永六年己丑(一三六九)の頃に至る、所在の落書を集錄したるものなり。「續史籍集覽」の第四に收めらる。

◎平賀源内の傳は「風來六々部集」の下にあり。

ひけしやくでんたつちやう

火消役傳達帳　*一卷　堀田幸之助

享和三年癸亥(一四六三)より、堀田幸之助が、懷火消役勤務中の書留なりといふ。著者堀田幸之助は紀一と稱し、火消役を勤めたり。

ひげんしふ

鄙諺集　八冊　荻野　安靜

俳諧の集にして、寛文二年壬寅(一三二二)三月編輯したるものなり。

◎荻野安靜の傳記は「げふの細布」の下にあり。

ひげんせう

非言抄　*三卷　中村　正尊

芭蕉の作として傳へらる、「俳諧古今抄」の僞書なるよしを論證したるものなり。

びげんひじ

美言飛耳　*四卷

德川八代將軍吉宗の事績以下紀州藩宣の逸事、備前少將新太郎の事績等を雜記したるもの。卷の一に一箇所、六箇所、卷の二に一箇所、卷の三に一箇所、卷の四に一箇所、卷の五に一箇所、卷の六に一箇所、卷の七に一箇所、卷の八に一箇所、卷の九に一箇所、卷の十に一箇所、卷の十一に一箇所、卷の十二に一箇所、卷の十三に一箇所、卷の十四に一箇所、卷の十五に一箇所、卷の十六に一箇所、卷の十七に一箇所、卷の十八に一箇所、卷の十九に一箇所、卷の二十に一箇所、卷の二十一に一箇所、卷の二十二に一箇所、卷の二十三に一箇所、卷の二十四に一箇所、卷の二十五に一箇所、卷の二十六に一箇所、卷の二十七に一箇所、卷の二十八に一箇所、卷の二十九に一箇所、卷の三十に一箇所、卷の三十一に一箇所、卷の三十二に一箇所、卷の三十三に一箇所、卷の三十四に一箇所、卷の三十五に一箇所、卷の三十六に一箇所、卷の三十七に一箇所、卷の三十八に一箇所、卷の三十九に一箇所、卷の四十に一箇所、卷の四十一に一箇所、卷の四十二に一箇所、卷の四十三に一箇所、卷の四十四に一箇所、卷の四十五に一箇所、卷の四十六に一箇所、卷の四十七に一箇所、卷の四十八に一箇所、卷の四十九に一箇所、卷の五十に一箇所、卷の五十一に一箇所、卷の五十二に一箇所、卷の五十三に一箇所、卷の五十四に一箇所、卷の五十五に一箇所、卷の五十六に一箇所、卷の五十七に一箇所、卷の五十八に一箇所、卷の五十九に一箇所、卷の六十に一箇所、卷の六十一に一箇所、卷の六十二に一箇所、卷の六十三に一箇所、卷の六十四に一箇所、卷の六十五に一箇所、卷の六十六に一箇所、卷の六十七に一箇所、卷の六十八に一箇所、卷の六十九に一箇所、卷の七十に一箇所、卷の七十一に一箇所、卷の七十二に一箇所、卷の七十三に一箇所、卷の七十四に一箇所、卷の七十五に一箇所、卷の七十六に一箇所、卷の七十七に一箇所、卷の七十八に一箇所、卷の七十九に一箇所、卷の八十に一箇所、卷の八十一に一箇所、卷の八十二に一箇所、卷の八十三に一箇所、卷の八十四に一箇所、卷の八十五に一箇所、卷の八十六に一箇所、卷の八十七に一箇所、卷の八十八に一箇所、卷の八十九に一箇所、卷の九十に一箇所、卷の九十一に一箇所、卷の九十二に一箇所、卷の九十三に一箇所、卷の九十四に一箇所、卷の九十五に一箇所、卷の九十六に一箇所、卷の九十七に一箇所、卷の九十八に一箇所、卷の九十九に一箇所、卷の百に一箇所、卷の百一に一箇所、卷の百二に一箇所、卷の百三に一箇所、卷の百四に一箇所、卷の百五に一箇所、卷の百六に一箇所、卷の百七に一箇所、卷の百八に一箇所、卷の百九に一箇所、卷の百十に一箇所、卷の百十一に一箇所、卷の百十二に一箇所、卷の百十三に一箇所、卷の百十四に一箇所、卷の百十五に一箇所、卷の百十六に一箇所、卷の百十七に一箇所、卷の百十八に一箇所、卷の百十九に一箇所、卷の百二十に一箇所、卷の百二十一に一箇所、卷の百二十二に一箇所、卷の百二十三に一箇所、卷の百二十四に一箇所、卷の百二十五に一箇所、卷の百二十六に一箇所、卷の百二十七に一箇所、卷の百二十八に一箇所、卷の百二十九に一箇所、卷の百三十に一箇所、卷の百三十一に一箇所、卷の百三十二に一箇所、卷の百三十三に一箇所、卷の百三十四に一箇所、卷の百三十五に一箇所、卷の百三十六に一箇所、卷の百三十七に一箇所、卷の百三十八に一箇所、卷の百三十九に一箇所、卷の百四十に一箇所、卷の百四十一に一箇所、卷の百四十二に一箇所、卷の百四十三に一箇所、卷の百四十四に一箇所、卷の百四十五に一箇所、卷の百四十六に一箇所、卷の百四十七に一箇所、卷の百四十八に一箇所、卷の百四十九に一箇所、卷の百五十に一箇所、卷の百五十一に一箇所、卷の百五十二に一箇所、卷の百五十三に一箇所、卷の百五十四に一箇所、卷の百五十五に一箇所、卷の百五十六に一箇所、卷の百五十七に一箇所、卷の百五十八に一箇所、卷の百五十九に一箇所、卷の百六十に一箇所、卷の百六十一に一箇所、卷の百六十二に一箇所、卷の百六十三に一箇所、卷の百六十四に一箇所、卷の百六十五に一箇所、卷の百六十六に一箇所、卷の百六十七に一箇所、卷の百六十八に一箇所、卷の百六十九に一箇所、卷の百七十に一箇所、卷の百七十一に一箇所、卷の百七十二に一箇所、卷の百七十三に一箇所、卷の百七十四に一箇所、卷の百七十五に一箇所、卷の百七十六に一箇所、卷の百七十七に一箇所、卷の百七十八に一箇所、卷の百七十九に一箇所、卷の百八十に一箇所、卷の百八十一に一箇所、卷の百八十二に一箇所、卷の百八十三に一箇所、卷の百八十四に一箇所、卷の百八十五に一箇所、卷の百八十六に一箇所、卷の百八十七に一箇所、卷の百八十八に一箇所、卷の百八十九に一箇所、卷の百九十に一箇所、卷の百九十一に一箇所、卷の百九十二に一箇所、卷の百九十三に一箇所、卷の百九十四に一箇所、卷の百九十五に一箇所、卷の百九十六に一箇所、卷の百九十七に一箇所、卷の百九十八に一箇所、卷の百九十九に一箇所、卷の二百に一箇所、卷の二百一に一箇所、卷の二百二に一箇所、卷の二百三に一箇所、卷の二百四に一箇所、卷の二百五に一箇所、卷の二百六に一箇所、卷の二百七に一箇所、卷の二百八に一箇所、卷の二百九に一箇所、卷の二百十に一箇所、卷の二百十一に一箇所、卷の二百十二に一箇所、卷の二百十三に一箇所、卷の二百十四に一箇所、卷の二百十五に一箇所、卷の二百十六に一箇所、卷の二百十七に一箇所、卷の二百十八に一箇所、卷の二百十九に一箇所、卷の二百二十に一箇所、卷の二百二十一に一箇所、卷の二百二十二に一箇所、卷の二百二十三に一箇所、卷の二百二十四に一箇所、卷の二百二十五に一箇所、卷の二百二十六に一箇所、卷の二百二十七に一箇所、卷の二百二十八に一箇所、卷の二百二十九に一箇所、卷の二百三十に一箇所、卷の二百三十一に一箇所、卷の二百三十二に一箇所、卷の二百三十三に一箇所、卷の二百三十四に一箇所、卷の二百三十五に一箇所、卷の二百三十六に一箇所、卷の二百三十七に一箇所、卷の二百三十八に一箇所、卷の二百三十九に一箇所、卷の二百四十に一箇所、卷の二百四十一に一箇所、卷の二百四十二に一箇所、卷の二百四十三に一箇所、卷の二百四十四に一箇所、卷の二百四十五に一箇所、卷の二百四十六に一箇所、卷の二百四十七に一箇所、卷の二百四十八に一箇所、卷の二百四十九に一箇所、卷の二百五十に一箇所、卷の二百五十一に一箇所、卷の二百五十二に一箇所、卷の二百五十三に一箇所、卷の二百五十四に一箇所、卷の二百五十五に一箇所、卷の二百五十六に一箇所、卷の二百五十七に一箇所、卷の二百五十八に一箇所、卷の二百五十九に一箇所、卷の二百六十に一箇所、卷の二百六十一に一箇所、卷の二百六十二に一箇所、卷の二百六十三に一箇所、卷の二百六十四に一箇所、卷の二百六十五に一箇所、卷の二百六十六に一箇所、卷の二百六十七に一箇所、卷の二百六十八に一箇所、卷の二百六十九に一箇所、卷の二百七十に一箇所、卷の二百七十一に一箇所、卷の二百七十二に一箇所、卷の二百七十三に一箇所、卷の二百七十四に一箇所、卷の二百七十五に一箇所、卷の二百七十六に一箇所、卷の二百七十七に一箇所、卷の二百七十八に一箇所、卷の二百七十九に一箇所、卷の二百八十に一箇所、卷の二百八十一に一箇所、卷の二百八十二に一箇所、卷の二百八十三に一箇所、卷の二百八十四に一箇所、卷の二百八十五に一箇所、卷の二百八十六に一箇所、卷の二百八十七に一箇所、卷の二百八十八に一箇所、卷の二百八十九に一箇所、卷の二百九十に一箇所、卷の二百九十一に一箇所、卷の二百九十二に一箇所、卷の二百九十三に一箇所、卷の二百九十四に一箇所、卷の二百九十五に一箇所、卷の二百九十六に一箇所、卷の二百九十七に一箇所、卷の二百九十八に一箇所、卷の二百九十九に一箇所、卷の三百に一箇所、卷の三百一に一箇所、卷の三百二に一箇所、卷の三百三に一箇所、卷の三百四に一箇所、卷の三百五に一箇所、卷の三百六に一箇所、卷の三百七に一箇所、卷の三百八に一箇所、卷の三百九に一箇所、卷の三百十に一箇所、卷の三百十一に一箇所、卷の三百十二に一箇所、卷の三百十三に一箇所、卷の三百十四に一箇所、卷の三百十五に一箇所、卷の三百十六に一箇所、卷の三百十七に一箇所、卷の三百十八に一箇所、卷の三百十九に一箇所、卷の三百二十に一箇所、卷の三百二十一に一箇所、卷の三百二十二に一箇所、卷の三百二十三に一箇所、卷の三百二十四に一箇所、卷の三百二十五に一箇所、卷の三百二十六に一箇所、卷の三百二十七に一箇所、卷の三百二十八に一箇所、卷の三百二十九に一箇所、卷の三百三十に一箇所、卷の三百三十一に一箇所、卷の三百三十二に一箇所、卷の三百三十三に一箇所、卷の三百三十四に一箇所、卷の三百三十五に一箇所、卷の三百三十六に一箇所、卷の三百三十七に一箇所、卷の三百三十八に一箇所、卷の三百三十九に一箇所、卷の三百四十に一箇所、卷の三百四十一に一箇所、卷の三百四十二に一箇所、卷の三百四十三に一箇所、卷の三百四十四に一箇所、卷の三百四十五に一箇所、卷の三百四十六に一箇所、卷の三百四十七に一箇所、卷の三百四十八に一箇所、卷の三百四十九に一箇所、卷の三百五十に一箇所、卷の三百五十一に一箇所、卷の三百五十二に一箇所、卷の三百五十三に一箇所、卷の三百五十四に一箇所、卷の三百五十五に一箇所、卷の三百五十六に一箇所、卷の三百五十七に一箇所、卷の三百五十八に一箇所、卷の三百五十九に一箇所、卷の三百六十に一箇所、卷の三百六十一に一箇所、卷の三百六十二に一箇所、卷の三百六十三に一箇所、卷の三百六十四に一箇所、卷の三百六十五に一箇所、卷の三百六十六に一箇所、卷の三百六十七に一箇所、卷の三百六十八に一箇所、卷の三百六十九に一箇所、卷の三百七十に一箇所、卷の三百七十一に一箇所、卷の三百七十二に一箇所、卷の三百七十三に一箇所、卷の三百七十四に一箇所、卷の三百七十五に一箇所、卷の三百七十六に一箇所、卷の三百七十七に一箇所、卷の三百七十八に一箇所、卷の三百七十九に一箇所、卷の三百八十に一箇所、卷の三百八十一に一箇所、卷の三百八十二に一箇所、卷の三百八十三に一箇所、卷の三百八十四に一箇所、卷の三百八十五に一箇所、卷の三百八十六に一箇所、卷の三百八十七に一箇所、卷の三百八十八に一箇所、卷の三百八十九に一箇所、卷の三百九十に一箇所、卷の三百九十一に一箇所、卷の三百九十二に一箇所、卷の三百九十三に一箇所、卷の三百九十四に一箇所、卷の三百九十五に一箇所、卷の三百九十六に一箇所、卷の三百九十七に一箇所、卷の三百九十八に一箇所、卷の三百九十九に一箇所、卷の四百に一箇所、卷の四百一に一箇所、卷の四百二に一箇所、卷の四百三に一箇所、卷の四百四に一箇所、卷の四百五に一箇所、卷の四百六に一箇所、卷の四百七に一箇所、卷の四百八に一箇所、卷の四百九に一箇所、卷の四百十に一箇所、卷の四百十一に一箇所、卷の四百十二に一箇所、卷の四百十三に一箇所、卷の四百十四に一箇所、卷の四百十五に一箇所、卷の四百十六に一箇所、卷の四百十七に一箇所、卷の四百十八に一箇所、卷の四百十九に一箇所、卷の四百二十に一箇所、卷の四百二十一に一箇所、卷の四百二十二に一箇所、卷の四百二十三に一箇所、卷の四百二十四に一箇所、卷の四百二十五に一箇所、卷の四百二十六に一箇所、卷の四百二十七に一箇所、卷の四百二十八に一箇所、卷の四百二十九に一箇所、卷の四百三十に一箇所、卷の四百三十一に一箇所、卷の四百三十二に一箇所、卷の四百三十三に一箇所、卷の四百三十四に一箇所、卷の四百三十五に一箇所、卷の四百三十六に一箇所、卷の四百三十七に一箇所、卷の四百三十八に一箇所、卷の四百三十九に一箇所、卷の四百四十に一箇所、卷の四百四十一に一箇所、卷の四百四十二に一箇所、卷の四百四十三に一箇所、卷の四百四十四に一箇所、卷の四百四十五に一箇所、卷の四百四十六に一箇所、卷の四百四十七に一箇所、卷の四百四十八に一箇所、卷の四百四十九に一箇所、卷の四百五十に一箇所、卷の四百五十一に一箇所、卷の四百五十二に一箇所、卷の四百五十三に一箇所、卷の四百五十四に一箇所、卷の四百五十五に一箇所、卷の四百五十六に一箇所、卷の四百五十七に一箇所、卷の四百五十八に一箇所、卷の四百五十九に一箇所、卷の四百六十に一箇所、卷の四百六十一に一箇所、卷の四百六十二に一箇所、卷の四百六十三に一箇所、卷の四百六十四に一箇所、卷の四百六十五に一箇所、卷の四百六十六に一箇所、卷の四百六十七に一箇所、卷の四百六十八に一箇所、卷の四百六十九に一箇所、卷の四百七十に一箇所、卷の四百七十一に一箇所、卷の四百七十二に一箇所、卷の四百七十三に一箇所、卷の四百七十四に一箇所、卷の四百七十五に一箇所、卷の四百七十六に一箇所、卷の四百七十七に一箇所、卷の四百七十八に一箇所、卷の四百七十九に一箇所、卷の四百八十に一箇所、卷の四百八十一に一箇所、卷の四百八十二に一箇所、卷の四百八十三に一箇所、卷の四百八十四に一箇所、卷の四百八十五に一箇所、卷の四百八十六に一箇所、卷の四百八十七に一箇所、卷の四百八十八に一箇所、卷の四百八十九に一箇所、卷の四百九十に一箇所、卷の四百九十一に一箇所、卷の四百九十二に一箇所、卷の四百九十三に一箇所、卷の四百九十四に一箇所、卷の四百九十五に一箇所、卷の四百九十六に一箇所、卷の四百九十七に一箇所、卷の四百九十八に一箇所、卷の四百九十九に一箇所、卷の五百に一箇所、卷の五百一に一箇所、卷の五百二に一箇所、卷の五百三に一箇所、卷の五百四に一箇所、卷の五百五に一箇所、卷の五百六に一箇所、卷の五百七に一箇所、卷の五百八に一箇所、卷の五百九に一箇所、卷の五百十に一箇所、卷の五百十一に一箇所、卷の五百十二に一箇所、卷の五百十三に一箇所、卷の五百十四に一箇所、卷の五百十五に一箇所、卷の五百十六に一箇所、卷の五百十七に一箇所、卷の五百十八に一箇所、卷の五百十九に一箇所、卷の五百二十に一箇所、卷の五百二十一に一箇所、卷の五百二十二に一箇所、卷の五百二十三に一箇所、卷の五百二十四に一箇所、卷の五百二十五に一箇所、卷の五百二十六に一箇所、卷の五百二十七に一箇所、卷の五百二十八に一箇所、卷の五百二十九に一箇所、卷の五百三十に一箇所、卷の五百三十一に一箇所、卷の五百三十二に一箇所、卷の五百三十三に一箇所、卷の五百三十四に一箇所、卷の五百三十五に一箇所、卷の五百三十六に一箇所、卷の五百三十七に一箇所、卷の五百三十八に一箇所、卷の五百三十九に一箇所、卷の五百四十に一箇所、卷の五百四十一に一箇所、卷の五百四十二に一箇所、卷の五百四十三に一箇所、卷の五百四十四に一箇所、卷の五百四十五に一箇所、卷の五百四十六に一箇所、卷の五百四十七に一箇所、卷の五百四十八に一箇所、卷の五百四十九に一箇所、卷の五百五十に一箇所、卷の五百五十一に一箇所、卷の五百五十二に一箇所、卷の五百五十三に一箇所、卷の五百五十四に一箇所、卷の五百五十五に一箇所、卷の五百五十六に一箇所、卷の五百五十七に一箇所、卷の五百五十八に一箇所、卷の五百五十九に一箇所、卷の五百六十に一箇所、卷の五百六十一に一箇所、卷の五百六十二に一箇所、卷の五百六十三に一箇所、卷の五百六十四に一箇所、卷の五百六十五に一箇所、卷の五百六十六に一箇所、卷の五百六十七に一箇所、卷の五百六十八に一箇所、卷の五百六十九に一箇所、卷の五百七十に一箇所、卷の五百七十一に一箇所、卷の五百七十二に一箇所、卷の五百七十三に一箇所、卷の五百七十四に一箇所、卷の五百七十五に一箇所、卷の五百七十六に一箇所、卷の五百七十七に一箇所、卷の五百七十八に一箇所、卷の五百七十九に一箇所、卷の五百八十に一箇所、卷の五百八十一に一箇所、卷の五百八十二に一箇所、卷の五百八十三に一箇所、卷の五百八十四に一箇所、卷の五百八十五に一箇所、卷の五百八十六に一箇所、卷の五百八十七に一箇所、卷の五百八十八に一箇所、卷の五百八十九に一箇所、卷の五百九十に一箇所、卷の五百九十一に一箇所、卷の五百九十二に一箇所、卷の五百九十三に一箇所、卷の五百九十四に一箇所、卷の五百九十五に一箇所、卷の五百九十六に一箇所、卷の五百九十七に一箇所、卷の五百九十八に一箇所、卷の五百九十九に一箇所、卷の六百に一箇所、卷の六百一に一箇所、卷の六百二に一箇所、卷の六百三に一箇所、卷の六百四に一箇所、卷の六百五に一箇所、卷の六百六に一箇所、卷の六百七に一箇所、卷の六百八に一箇所、卷の六百九に一箇所、卷の六百十に一箇所、卷の六百十一に一箇所、卷の六百十二に一箇所、卷の六百十三に一箇所、卷の六百十四に一箇所、卷の六百十五に一箇所、卷の六百十六に一箇所、卷の六百十七に一箇所、卷の六百十八に一箇所、卷の六百十九に一箇所、卷の六百二十に一箇所、卷の六百二十一に一箇所、卷の六百二十二に一箇所、卷の六百二十三に一箇所、卷の六百二十四に一箇所、卷の六百二十五に一箇所、卷の六百二十六に一箇所、卷の六百二十七に一箇所、卷の六百二十八に一箇所、卷の六百二十九に一箇所、卷の六百三十に一箇所、卷の六百三十一に一箇所、卷の六百三十二に一箇所、卷の六百三十三に一箇所、卷の六百三十四に一箇所、卷の六百三十五に一箇所、卷の六百三十六に一箇所、卷の六百三十七に一箇所、卷の六百三十八に一箇所、卷の六百三十九に一箇所、卷の六百四十に一箇所、卷の六百四十一に一箇所、卷の六百四十二に一箇所、卷の六百四十三に一箇所、卷の六百四十四に一箇所、卷の六百四十五に一箇所、卷の六百四十六に一箇所、卷の六百四十七に一箇所、卷の六百四十八に一箇所、卷の六百四十九に一箇所、卷の六百五十に一箇所、卷の六百五十一に一箇所、卷の六百五十二に一箇所、卷の六百五十三に一箇所、卷の六百五十四に一箇所、卷の六百五十五に一箇所、卷の六百五十六に一箇所、卷の六百五十七に一箇所、卷の六百五十八に一箇所、卷の六百五十九に一箇所、卷の六百六十に一箇所、卷の六百六十一に一箇所、卷の六百六十二に一箇所、卷の六百六十三に一箇所、卷の六百六十四に一箇所、卷の六百六十五に一箇所、卷の六百六十六に一箇所、卷の六百六十七に一箇所、卷の六百六十八に一箇所、卷の六百六十九に一箇所、卷の六百七十に一箇所、卷の六百七十一に一箇所、卷の六百七十二に一箇所、卷の六百七十三に一箇所、卷の六百七十四に一箇所、卷の六百七十五に一箇所、卷の六百七十六に一箇所、卷の六百七十七に一箇所、卷の六百七十八に一箇所、卷の六百七十九に一箇所、卷の六百八十に一箇所、卷の六百八十一に一箇所、卷の六百八十二に一箇所、卷の六百八十三に一箇所、卷の六百八十四に一箇所、卷の六百八十五に一箇所、卷の六百八十六に一箇所、卷の六百八十七に一箇所、卷の六百八十八に一箇所、卷の六百八十九に一箇所、卷の六百九十に一箇所、卷の六百九十一に一箇所、卷の六百九十二に一箇所、卷の六百九十三に一箇所、卷の六百九十四に一箇所、卷の六百九十五に一箇所、卷の六百九十六に一箇所、卷の六百九十七に一箇所、卷の六百九十八に一箇所、卷の六百九十九に一箇所、卷の七百に一箇所、卷の七百一に一箇所、卷の七百二に一箇所、卷の七百三に一箇所、卷の七百四に一箇所、卷の七百五に一箇所、卷の七百六に一箇所、卷の七百七に一箇所、卷の七百八に一箇所、卷の七百九に一箇所、卷の七百十に一箇所、卷の七百十一に一箇所、卷の七百十二に一箇所、卷の七百十三に一箇所、卷の七百十四に一箇所、卷の七百十五に一箇所、卷の七百十六に一箇所、卷の七百十七に一箇所、卷の七百十八に一箇所、卷の七百十九に一箇所、卷の七百二十に一箇所、卷の七百二十一に一箇所、卷の七百二十二に一箇所、卷の七百二十三に一箇所、卷の七百二十四に一箇所、卷の七百二十五に一箇所、卷の七百二十六に一箇所、卷の七百二十七に一箇所、卷の七百二十八に一箇所、卷の七百二十九に一箇所、卷の七百三十に一箇所、卷の七百三十一に一箇所、卷の七百三十二に一箇所、卷の七百三十三に一箇所、卷の七百三十四に一箇所、卷の七百三十五に一箇所、卷の七百三十六に一箇所、卷の七百三十七に一箇所、卷の七百三十八に一箇所、卷の七百三十九に一箇所、卷の七百四十に一箇所、卷の七百四十一に一箇所、卷の七百四十二に一箇所、卷の七百四十三に一箇所、卷の七百四十四に一箇所、卷の七百四十五に一箇所、卷の七百四十六に一箇所、卷の七百四十七に一箇所、卷の七百四十八に一箇所、卷の七百四十九に一箇所、卷の七百五十に一箇所、卷の七百五十一に一箇所、卷の七百五十二に一箇所、卷の七百五十三に一箇所、卷の七百五十四に一箇所、卷の七百五十五に一箇所、卷の七百五十六に一箇所、卷の七百五十七に一箇所、卷の七百五十八に一箇所、卷の七百五十九に一箇所、卷の七百六十に一箇所、卷の七百六十一に一箇所、卷の七百六十二に一箇所、卷の七百六十三に一箇所、卷の七百六十四に一箇所、卷の七百六十五に一箇所、卷の七百六十六に一箇所、卷の七百六十七に一箇所、卷の七百六十八に一箇所、卷の七百六十九に一箇所、卷の七百七十に一箇所、卷の七百七十一に一箇所、卷の七百七十二に一箇所、卷の七百七十三に一箇所、卷の七百七十四に一箇所、卷の七百七十五に一箇所、卷の七百七十六に一箇所、卷の七百七十七に一箇所、卷の七百七十八に一箇所、卷の七百七十九に一箇所、卷の七百八十に一箇所、卷の七百八十一に一箇所、卷の七百八十二に一箇所、卷の七百八十三に一箇所、卷の七百八十四に一箇所、卷の七百八十五に一箇所、卷の七百八十六に一箇所、卷の七百八十七に一箇所、卷の七百八十八に一箇所、卷の七百八十九に一箇所、卷の七百九十に一箇所、卷の七百九十一に一箇所、卷の七百九十二に一箇所、卷の七百九十三に一箇所、卷の七百九十四に一箇所、卷の七百九十五に一箇所、卷の七百九十六に一箇所、卷の七百九十七に一箇所、卷の七百九十八に一箇所、卷の七百九十九に一箇所、卷の八百に一箇所、卷の八百一に一箇所、卷の八百二に一箇所、卷の八百三に一箇所、卷の八百四に一箇所、卷の八百五に一箇所、卷の八百六に一箇所、卷の八百七に一箇所、卷の八百八に一箇所、卷の八百九に一箇所、卷の八百十に一箇所、卷の八百十一に一箇所、卷の八百十二に一箇所、卷の八百十三に一箇所、卷の八百十四に一箇所、卷の八百十五に一箇所、卷の八百十六に一箇所、卷の八百十七に一箇所、卷の八百十八に一箇所、卷の八百十九に一箇所、卷の八百二十に一箇所、卷の八百二十一に一箇所、卷の八百二十二に一箇所、卷の八百二十三に一箇所、卷の八百二十四に一箇所、卷の八百二十五に一箇所、卷の八百二十六に一箇所、卷の八百二十七に一箇所、卷の八百二十八に一箇所、卷の八百二十九に一箇所、卷の八百三十に一箇所、卷の八百三十一に一箇所、卷の八百三十二に一箇所、卷の八百三十三に一箇所、卷の八百三十四に一箇所、卷の八百三十五に一箇所、卷の八百三十六に一箇所、卷の八百三十七に一箇所、卷の八百三十八に一箇所、卷の八百三十九に一箇所、卷の八百四十に一箇所、卷の八百四十一に一箇所、卷の八百四十二に一箇所、卷の八百四十三に一箇所、卷の八百四十四に一箇所、卷の八百四十五に一箇所、卷の八百四十六に一箇所、卷の八百四十七に一箇所、卷の八百四十八に一箇所、卷の八百四十九に一箇所、卷の八百五十に一箇所、卷の八百五十一に一箇所、卷の八百五十二に一箇所、卷の八百五十三に一箇所、卷の八百五十四に一箇所、卷の八百五十五に一箇所、卷の八百五十六に一箇所、卷の八百五十七に一箇所、卷の八百五十八に一箇所、卷の八百五十九に一箇所、卷の八百六十に一箇所、卷の八百六十一に一箇所、卷の八百六十二に一箇所、卷の八百六十三に一箇所、卷の八百六十四に一箇所、卷の八百六十五に一箇所、卷の八百六十六に一箇所、卷の八百六十七に一箇所、卷の八百六十八に一箇所、卷の八百六十九に一箇所、卷の八百七十に一箇所、卷の八百七十一に一箇所、卷の八百七十二に一箇所、卷の八百七十三に一箇所、卷の八百七十四に一箇所、卷の八百七十五に一箇所、卷の八百七十六に一箇所、卷の八百七十七に一箇所、卷の八百七十八に一箇所、卷の八百七十九に一箇所、卷の八百八十に一箇所、卷の八百八十一に一箇所、卷の八百八十二に一箇所、卷の八百八十三に一箇所、卷の八百八十四に一箇所、卷の八百八十五に一箇所、卷の八百八十六に一箇所、卷の八百八十七に一箇所、卷の八百八十八に一箇所、卷の八百八十九に一箇所、卷の八百九十に一箇所、卷の八百九十一に一箇所、卷の八百九十二に一箇所、卷の八百九十三に一箇所、卷の八百九十四に一箇所、卷の八百九十五に一箇所、卷の八百九十六に一箇所、卷の八百九十七に一箇所、卷の八百九十八に一箇所、卷の八百九十九に一箇所、卷の九百に一箇所、卷の九百一に一箇所、卷の九百二に一箇所、卷の九百三に一箇所、卷の九百四に一箇所、卷の九百五に一箇所、卷の九百六に一箇所、卷の九百七に一箇所、卷の九百八に一箇所、卷の九百九に一箇所、卷の九百十に一箇所、卷の九百十一に一箇所、卷の九百十二に一箇所、卷の九百十三に一箇所、卷の九百十四に一箇所、卷の九百十五に一箇所、卷の九百十六に一箇所、卷の九百十七に一箇所、卷の九百十八に一箇所、卷の九百十九に一箇所、卷の九百二十に一箇所、卷の九百二十一に一箇所、卷の九百二十二に一箇所、卷の九百二十三に一箇所、卷の九百二十四に一箇所、卷の九百二十五に一箇所、卷の九百二十六に一箇所、卷の九百二十七に一箇所、卷の九百二十八に一箇所、卷の九百二十九に一箇所、卷の九百三十に一箇所、卷の九百三十一に一箇所、卷の九百三十二に一箇所、卷の九百三十三に一箇所、卷の九百三十四に一箇所、卷の九百三十五に一箇所、卷の九百三十六に一箇所、卷の九百三十七に一箇所、卷の九百三十八に一箇所、卷の九百三十九に一箇所、卷の九百四十に一箇所、卷の九百四十一に一箇所、卷の九百四十二に一箇所、卷の九百四十三に一箇所、卷の九百四十四に一箇所、卷の九百四十五に一箇所、卷の九百四十六に一箇所、卷の九百四十七に一箇所、卷の九百四十八に一箇所、卷の九百四十九に一箇所、卷の九百五十に一箇所、卷の九百五十一に一箇所、卷の九百五十二に一箇所、卷の九百五十三に一箇所、卷の九百五十四に一箇所、卷の九百五十五に一箇所、卷の九百五十六に一箇所、卷の九百五十七に一箇所、卷の九百五十八に一箇所、卷の九百五十九に一箇所、卷の九百六十に一箇所、卷の九百六十一に一箇所、卷の九百六十二に一箇所、卷の九百六十三に一箇所、卷の九百六十四に一箇所、卷の九百六十五に一箇所、卷の九百六十六に一箇所、卷の九百六十七に一箇所、卷の九百六十八に一箇所、卷の九百六十九に一箇所、卷の九百七十に一箇所、卷の九百七十一に一箇所、卷の九百七十二に一箇所、卷の九百七十三に一箇所、卷の九百七十四に一箇所、卷の九百七十五に一箇所、卷の九百七十六に一箇所、卷の九百七十七に一箇所、卷の九百七十八に一箇所、卷の九百七十九に一箇所、卷の九百八十に一箇所、卷の九百八十一に一箇所、卷の九百八十二に一箇所、卷の九百八十三に一箇所、卷の九百八十四に一箇所、卷の九百八十五に一箇所、卷の九百八十六に一箇所、卷の九百八十七に一箇所、卷の九百八十八に一箇所、卷の九百八十九に一箇所、卷の九百九十に一箇所、卷の九百九十一に一箇所、卷の九百九十二に一箇所、卷の九百九十三に一箇所、卷の九百九十四に一箇所、卷の九百九十五に一箇所、卷の九百九十六に一箇所、卷の九百九十七に一箇所、卷の九百九十八に一箇所、卷の九百九十九に一箇所、卷の千に一箇所、卷の千一に一箇所、卷の千二に一箇所、卷の千三に一箇所、卷の千四に一箇所、卷の千五に一箇所、卷の千六に一箇所、卷の千七に一箇所、卷の千八に一箇所、卷の千九に一箇所、卷の千十に一箇所、卷の千十一に一箇所、卷の千十二に一箇所、卷の千十三に一箇所、卷の千十四に一箇所、卷の千十五に一箇所、卷の千十六に一箇所、卷の千十七に一箇所、卷の千十八に一箇所、卷の千十九に一箇所、卷の千二十に一箇所、卷の千二十一に一箇所、卷の千二十二に一箇所、卷の千二十三に一箇所、卷の千二十四に一箇所、卷の千二十五に一箇所、卷の千二十六に一箇所、卷の千二十七に一箇所、卷の千二十八に一箇所、卷の千二十九に一箇所、卷の千三十に一箇所、卷の千三十一に一箇所、卷の千三十二に一箇所、卷の千三十三に一箇所、卷の千三十四に一箇所、卷の千三十五に一箇所、卷の千三十六に一箇所、卷の千三十七に一箇所、卷の千三十八に一箇所、卷の千三十九に一箇所、卷の千四十に一箇所、卷の千四十一に一箇所、卷の千四十二に一箇所、卷の千四十三に一箇所、卷の千四十四に一箇所、卷の千四十五に一箇所、卷の千四十六に一箇所、卷の千四十七に一箇所、卷の千四十八に一箇所、卷の千四十九に一箇所、卷の千五十に一箇所、卷の千五十一に一箇所、卷の千五十二に一箇所、卷の千五十三に一箇所、卷の千五十四に一箇所、卷の千五十五に一箇所、卷の千五十六に一箇所、卷の千五十七に一箇所、卷の千五十八に一箇所、卷の千五十九に一箇所、卷の千六十に一箇所、卷の千六十一に一箇所、卷の千六十二に一箇所、卷の千六十三に一箇所、卷の千六十四に一箇所、卷の千六十五に一箇所、卷の千六十六に一箇所、卷の千六十七に一箇所、卷の千六十八に一箇所、卷の千六十九に一箇所、卷の千七十に一箇所、卷の千七十一に一箇所、卷の千七十二に一箇所、卷の千七十三に一箇所、卷の千七十四に一箇所、卷の千七十五に一箇所、卷の千七十六に一箇所、卷の千七十七に一箇所、卷の千七十八に一箇所、卷の千七十九に一箇所、卷の千八十に一箇所、卷の千八十一に一箇所、卷の千八十二に一箇所、卷の千八十三に一箇所、卷の千八十四に一箇所、卷の千八十五に一箇所、卷の千八十六に一箇所、卷の千八十七に一箇所、卷の千八十八に一箇所、卷の千八十九に一箇所、卷の千九十に一箇所、卷の千九十一に一箇所、卷の千九十二に一箇所、卷の千九十三に一箇所、卷の千九十四に一箇所、卷の千九十五に一箇所、卷の千九十六に一箇所、卷の千九十七に一箇所、卷の千九十八に一箇所、卷の千九十九に一箇所、卷の千百に一箇所、卷の千百一に一箇所、卷の千百二に一箇所、卷の千百三に一箇所、卷の千百四に一箇所、卷の千百五に一箇所、卷の千百六に一箇所、卷の千百七に一箇所、卷の千百八に一箇所、卷の千百九に一箇所、卷の千百十に一箇所、卷の千百十一に一箇所、卷の千百十二に一箇所、卷の千百十三に一箇所、卷の千百十四に一箇所、卷の千百十五に一箇所、卷の千百十六に一箇所、卷の千百十七に一箇所、卷の千百十八に一箇所、卷の千百十九に一箇所、卷の千百二十に一箇所、卷の千百二十一に一箇所、卷の千百二十二に一箇所、卷の千百二十三に一箇所、卷の千百二十四に一箇所、卷の千百二十五に一箇所、卷の千百二十六に一箇所、卷の千百二十七に一箇所、卷の千百二十八に一箇所、卷の千百二十九に一箇所、卷の千百三十に一

日本書紀考、日本紀年暦考、仁徳魚の事、月日の蝕なきはへといふ事、以上の四考を集錄したるもの。弘化四年丁未(二八四七)脱稿、嘉永五年壬子(二八五二)出版す。同書五巻以下は寫本にて傳はれるを、近年「存採叢書」に收めて印行せり。もと十六巻のものなり。

◎伴信友の傳は「古事逸傳考」の下にあり。

ひごめいしょうりゃくき 肥後名勝略記 ※一巻

國中の名所を擧げて、其の大略を記したるもの。飽田郡に二十二箇所、託摩郡に四箇所、益城郡に七箇所、宇土郡に六箇所、八代郡に十五箇所、葦北郡に六箇所、玉名郡に十二箇所、山鹿郡に六箇所、菊池郡に十四箇所、合志郡に四箇所、阿蘇郡に十八箇所。以上十一郡、百十四箇所を收めたり。

ひごものがたり 肥後物語 一巻 龜井 魯

著者曾て肥後に遊び、其の善政德化を慕ひ、見聞せる所の良法美談を輯錄し、自國筑前の國政に裨補せんが爲めに、藩主に上りたるものなりといふ。嶺平太左衛門昇進之事、稻津猿右衛門水損を救ひし事、長岡主水大臣の體を具へし事肥後侯學者を優待し給ふ事等以下數十項皆君臣の美德に關することもなり。"鹿鳴園叢書"の第一集に收む。

◎龜井魯は筑前遠賀の人にして、儒醫たり、道號と字し、南溟と號す。年十四にして肥前の僧大潮に學び、大阪に出でて永富獨庵に學び、後長州に行きて山縣周南に學び、學博く詩に長じて、儒名大に顯はる。藩侯擢でて儒員となし、聖堂館を創めて其の教授を掌らしむ。著書は本書の外に、南溟間答、辨惑論、論語語由、左傳講義、半夜物語、園居小草、南溟集等あり、文化十一年(二八一四)七十二にて歿す。

ひごよねざわはなしがき 肥後米澤聞記 ※一巻

肥後米澤領内の學事に關する諸件を雜記したるもの。安永の頃に記されたるものなるべし。

ひさご 一巻 松尾 芭蕉

元祿三年庚午(一六九〇)春、伊賀に歸らんとして、湖南に留まれるとき、珍碩等の乞によりて撰したる俳句集なり。近年發行の俳諧文庫第一編「芭蕉全集」の中にも收む。

◎松尾芭蕉の傳は「奥の細路」の下にあり。

ひさそうしょ 秘鎖叢書 ※六冊

嘉永年中諸家の海防論策を叢書したるもの。其の目を列擧すれば、靈夢之枝折、海岸防禦託宣、捨訴下書、紅葉山神鎭記、旗下士來上圖老書、大槪平次存寄書、赤坂狂夫上書、松平兵部存念書、覆舟海防策、可也問堂海防策、長齋海防策、諸時放言、桑處問答、假疑之目覺、報書草案等なり。各書は其の名の下に解題せり。

ひしうあつたじんじゃろく 尾州熱田神社錄 ※一巻 天野 信景

太神宮に關する問答證實錄なり。大宮五座の次第、土用殿の事、大宮鎭座地の事、大宮神階の事等より、大宮所攝社略記、寺院略記、雜類略記、其の他神寶に

關する事等を記し、末に原見草及び同附錄、同附錄雜等を收む。中原常政が寛政二年庚戌(一七九〇)の奥書あり。一名を「熱田緣起」といふ。

◎天野信景の傳は「年頭天王辨」の下にあり。

びしうおしろにつき 尾州御城日記 ※四巻

承應二年癸巳(一六五三)正月より、同三年十二月に至る日記なり。

びしうけんもんしょ 飛州見聞書 ※一巻

飛騨の地理、風俗、土産、飲食、年中行事、冠婚葬祭の禮に至るまで詳悉せり。

びしうこくさんぶつしらべ 尾州國産物調 ※一冊

幕府評定所より引繼きて內閣文庫に保存せる調書なり。年度は詳ならず。

びしうさんき 飛州三記 一巻

飛騨の古書として傳へ來れる「飛州軍亂記」「飛州千光寺記」「飛州三澤記」を輯す。此の三書は、皆同州往古の雜說を記したる者で「史籍集覽」中に收む。

びしうし 飛州志 ※四巻 長谷川忠崇

第一巻を土地の部、第二巻を國法の部、第三巻を物產の部、第四巻を神祠の部とし、一國の大意、郡村の數、四方の里數、形勝、古城主の氏名、代官の氏名年代、風俗、物產等を記せり。延享年中の編にかゝる。別に附錄、古蹟圖一帖あり。

◎長谷川忠崇は庄五郎と稱す。享保中飛騨國に代官を勤めしものにて、治所にありてこれを編輯したりといふ。

びしうじしゃりゃうしょういん 尾州寺社領證印 ※一巻

德川家の證印、並に尾張家分直以來の證印、古來領主の證印ある社寺を突へ記し、其の領知の高、證印の年月日等を記せり。其の年代は大永三年癸未(一五二三)より、寛永七年庚寅(一六三〇)の者に及ぶ。

びしうしふろくこせきづ 飛州志附錄古蹟圖 ※一帖 長谷川忠崇

「飛州志」に附隨して、同國のあらゆる古蹟を圖說したるものなり。

◎長谷川忠崇の傳は「飛州志」の下にあり。

びしうしまつかいけんわ 尾州諸士喧嘩 ※一巻

元和寛永の頃より、寛政年中に至るまで、尾張藩に行はれたる及傷事件を錄したるもので、關係者の官職姓名年月等を記せり。

びしうたかやませうれんじさんさうしょうていのき 飛州高山照蓮寺山莊松亭記 ※一巻 野間 三竹

純純曾郡が築きたる松亭の十境八景を詠ぜし、諸家の詩歌を編輯したるものなり。

◎野間三竹の傳は「桑華紀年」の下にあり。

びしうつしまてんわうさいき 尾州津島天王祭記 一巻 眞野 時繩

尾張國海部郡門眞庄有根吉津島天王祭の來歷故事を詳記せり。其の大要を擧ぐれば、津島の渡りとは藤浪の里といひし事、津島對馬通用せる事、京都祇園當社より請じたる來由並に津島渡萬葉集に證ある簡條、大祭元始考、管祭考、朝祭考、要撰調進考、他邦他郡調進考、祭務雜式考、祭式寄附考、殘編勘例帳、年表考を擧記す。正德元年辛卯(一七一一)の自序あり。寶二年出版す。

◎眞野時繩の傳は「異域同日譚」の下にあり。

びしうながくてかつせんわくせつ 飛州長久手合戰或說 ※一巻

天正十二年甲申(一五八四)長久手戰爭の次第を論評したるものなり。

びしうなごやごふしんごかちうにんやくちゃう 尾州名護屋御普請御家中人役帳 ※一巻

慶長十五年庚戌(一六一〇)名古屋城普請中同家中の諸調差統計也。"士佐國群書類從"第二十に收む。

びしうへんねんろく 尾州編年錄 ※二巻

度長五年庚子(一二六〇)義直の誕生より、元祿十三年庚辰(一三六〇)光友の逝去に至る尾張藩の年代記なり。一族の事實大小を窺ふべし。明和七年庚寅(一四三〇)の寫本あり。

ひしうりがいしゆいしよ

飛州利害趣意書 寫一卷

田畑檢地の事より、其の利害を論じ、籠達、上訴の事等を錄せり。

ひじえうろく

鄙事要錄 寫六卷 **青木 興利**

神祇、地儀、造營、文筆、田毛の五部に分ち、祭祀、地形、地目、水利、土功、檢地、租法等の事を略說せり。弘化三年丙午(一五〇六)書寫の奥書あり。

ひしがふふ

彼此合符 二卷 **岡田 挺之**

漢土の歷史隨筆等の事實と符合せる本邦の事實を列擧し、和漢の出典を註せり。寬政七年乙卯(一四五五)出版す。

◉岡田挺之は尾張の人。名を宜生、通稱を彦左衞門といふ。新川、暢園、朝陽、甘谷等の號あり、多く挺之の字を以て行はる。松平君山に從學して博學多通、當時赤松滄洲と名を齊す。著書には、當語藪、日下新詠、下學廣集、雨穗錄初編、同二編、物類稱謂、崎人詠、噂噂偶詠、夢遊編、先友詩鈔、葦亭石、甘谷志聞、新川集、暢園詩草、暢園文草、暢園詠物詩、暢園節序詩、暢園題畫詩、暢園祝壽詩、暢園類雅及び彼此合符等あり、寬政十一年己未(一四五五)三月二十四日、六十三歲にて歿す。

ひじき

鄙事記 八卷 **貝原 信篤**

本書は一名「筠窗鄙事記」の題下に解題せり。

ひじしあんぶくろ

祕事思案袋 三卷

日用諸種の方術を記したるもの。凡そ二百餘種あり。其の二三を例擧すれば、紙に墨引する法、大海より土地の氣を知る法、腫物のうみ針を用ひず吸出す法、眞鍮を白色にする法、味噌の味酸くなりたるを直す法等凡て製窯、果實貯藏、衣服染方、洗濯法、小惡治方の類を雜記す。

ひじじんし

非詩人詩 二卷 **羽倉 用九**

收むる所上は大友皇子、大津皇子より下は頼襄、佐藤坦等の詩を編集したるもの。題號の意は編者の例言に說明して「所謂詩人者規步唐宋鄧乏天趣不容自放被其所長在古體矣、非詩人者直吐胸臆寧陷海純詩人也、屠軒渠山純非詩人也、菜山杏坪詩人之近詩人者也」と云ふ。

◉羽倉用九の傳は「簡堂叢書」の下にあり。

ひじずるひつ

祕事隨筆 寫二十六卷

和漢古今の書中より、何くれとなく雜事を拔萃したるものなり。著者群書涉獵中の備忘錄なるべし。年代著者共に詳ならず。

ひじひやくせん

祕事百撰 一卷 **福井長右衞門**

世の奇傳祕術といふもの、百箇條を記したるものにて、別に後編もありといへど今見るところは其の前編なり。著者の名は「智德齋」の號にて記せり。

◉福井長右衞門は京師の人にして、智德齋と號す。寬永時代の俳人、幸和、定清、友貞、卜圃、當長と共に立圍門下の六點者と稱せられたりといふ。

ひじりのせつ

日知之說 寫一卷 **伴部 安崇**

豐葦原瑞穗の神國に於て、神聖の御德を、古來日知りと申し奉れることを、古書に徵して考說したるもの。享保二十年乙卯(一三九五)の記なり。

◉伴部安崇の傳は「一切成就祓抄」の下にあり。

ひしわ

非詩話 寫十卷 **古賀 煜**

總論、序論、詩話、詩話十五病の三編に分ちて詩話の非を辨論したるものなり。文化十一年甲戌(一四七四)の自序あり。

◉古賀煜の傳は「延元遺蹟」の下にあり。

びじんさう

美人草 二卷 **多賀 高忠**

弓馬故實の聞書なり。上卷は「にぎり卷樣の事」より、「うつぼのみにじんどうさすべき事」に至る百十條。下卷には「鞭とじんどうさす事」より「出陣に可乘馬いはひ候事」に至る百十五條なり。寬正五年甲申(一二二四)十一月、家傳聞書云々高忠の奥書あり。一名を「美人雜」また「高忠聞書」といふ。安永九年庚子出版す。

◉多賀高忠の傳は「當流聞書」の下にあり。

びじんざふ

美人雜 寫一册 **多賀 高忠**

此の書は前に揭げたる「美人草」の寫本なり。

ひしんろん

非心論 寫一卷 **本橋 惟義**

算法書なり。編者が浪花天滿天神社に算額を揭げたるより、終に其の師武田眞元と絕交の末、破門者となりたる前後の、爭論等の算法を記述したる算法書なり。天保七年の記入あり。

◉本橋惟義は鼎と稱す、初め福田雛之丞と云ふ、福田嘉當の弟なり。數學を武田眞元に受け、後小出修喜に從て學びたり。

ひせきこうかん

不磧後鑑 寫四卷 **寺村 成樹**

土佐國守山內豐雛一生の事績を記したるものなり。豐雛は桃園天皇の寬延三年庚午(一四一〇)に生れ、明和五年戊子(一四二八)土佐守となり、光格天皇の寬政元年己酉(一四四九)四十歲にて歿したり。本書は務めて其の善政美行を稱揚したるものなり。

びぜんいつこくし

備前一國誌 寫十六卷

備前國の鄉庄村里の山川寺社、古蹟物產等を略示せり六國史以下數十の雜書を參考せり。

びぜんをかやまがくかうづ

備前岡山學校圖 寫一鋪

松平光政の建てたる岡山學校の略圖にて、門內泮宮橋、中門以內大成殿及び勞烈祠、學間所、食堂、諸舍並に役人長屋等を示せり。

びぜんをんせんがだけやまやけき

肥前溫泉嶽山燒記 寫一卷

寬政四年壬子(一四五二)肥前國高來郡島原領溫泉嶽破裂の記なり。

びぜんぐんき

備前軍記 寫五卷

嘉吉、文安の頃より、慶長年中に至る備前一國の隆替盛衰を記したるもの。九十四條あり備前諸士の小傳本書の拾遺等を附錄し、五卷二册に寫傳す。

びぜんびうりやうどきかう

備前侍從兩度紀行 寫二卷 **池田 光政**

備前岡山の城主光政が江府より入部したる時の紀行にて、一は明曆三年丁酉(一三一七)神無月十日、將軍家の命を受けて首途せるより同月二十六日備前岡山城に入るまでを記し、一は寬文五年乙巳(一三二五)長月の末つかた江府を立ちて、岡山城に着するまでの事を記せり。

◉池田光政は輝政の孫にして、新太郎と稱す。父利隆の卒後、其の封播磨を襲ぎ、後、因幡伯耆に徙封し、元和九年將軍德川家光の一字を賜りて光政と改し、從四位下に敍し、侍從に任ぜらる。寬永三年に至り、左近衞權少將となり、同九年封を備前に徙す。性、學を好み、學校を興し、熊澤藩山を擧げて之れに任じ、敎化隆盛、時に名君と稱せられたり。天和二年壬戌(一三四二)五月卒す。年七十四、天質義晃通源院と法號す。

びぜんのくにいそのかみさんだじせきかう

備前國石上新蛇事緣考 寫一卷

土肥 經平

備前國赤坂郡石上布都之魂神社に、紫藤鳴厚の八股蛇を斬り給ひたる劒を齎き祭れる事を考證したるものなり。

◉土肥經平の傳は「甲冑威毛色目」の下にあり。

びぜんのくにうんじやうとりしらべしよ

肥前國運上取調書 寫一册

肥前國運上取調書にて、幕府評定所より引繼ぎ、內閣文庫に保存せるものなり。年度は詳ならず。

びぜんのくにかうしでん

備前國孝子傳 五卷 **湯淺 明善**

備前藩の忠孝節義者の傳なり。其の凡例に曰く、「此の書、上は慶長より、下は天明の今年に至るまで、我が藩の孝子、忠臣、義士、貞女の類を集類し、

備前孝子傳と名く云々となり。天明六年丙午〔一七八六〕小原正路の序を附し、寛政元年己酉〔一七八九〕出版す。

◎湯淺明善の傳は「續備藩典和」の下にあり。

ひぜんのくにかみのみやこもんじよ
肥前國鏡宮古文書　本一卷

肥前國鏡山所藏の古文書、貞享四年丁卯〔一六八七〕の市興行願書に至るまで十七通を寫錄したるものなり。

びぜんのくにかみつこほりゆどほしむらまんだうゆらい
備前國上道郡湯通村萬燈由來　本一卷

宇喜多氏と毛利氏と和睦の後、毛利氏より聘うて其の家臣の討死したるもののために追善を求む。依て宇喜多直家も默止難く、湯通村、脇田村邊の人民に命して、毎年七月十四日の夜、湯通村北後の山に萬燈を燈し、亡靈を弔ひ、後世まで其の例を怠らやといふ次第を記したるものなり。

びぜんのくにきびつしやき
備前國吉備津社記　本一卷

備前吉備津社の造營次第、社領、寶來、神官家祿分配の事、その他を記せり。

ひぜんのくにさんぶつもづ
肥前國產物繪圖　本八帖

木崎　盛標

圖の大略を摹くれば、小川島の圖、近國漁事の場所、鯨を取る圖、唐津馬島鹿狩並に鷺集を取る圖、石灰を取る圖、線香を作る圖、鵜飼圖、唐津領馬渡島の圖、紙漉の圖、江豬〔いるか〕を取る圖、其の他の圖なり。

◎木崎盛標は肥前唐津の人にして、入道して攸軒〔或は悠々軒〕と號せり。本書の外に「獲鯨圖說」の著あり。

ひぜんのくにたつまだいみやうじんこもんじよ
肥前國田島大明神古文書　本一卷

「天正三年〔一五七五〕二月吉日願額（花押あり）田島大明神御師」と記せるもの一通と、「文十二年卯月二十二日（文の上の字蠹害に遇ふ）筑（花押あり）平野新兵衛尉殿」と記せるもの一通とを寫せり。

ひぜんのくにめうおんじこもんじよ
肥前國妙音寺古文書　本一卷

同寺所藏の古文書九通を收錄したるものなり。書中に櫻町天皇の元文二年戊午〔一七三八〕に同妙音寺現住無參更といふものの撰述したる同寺の緣起なども收めたり。

ひぜんふどき
肥前風土記　一卷

肥前の國古代の風土記にて、基肄、養父、三根、神埼、佐賀、小城、松浦、杵島、藤津、彼杵、高來の十一郡を存せり。延長年間の撰述なりと云ふ。寛政十一年己未〔一七九九〕三月。荒木田久老の訓點を加へて發刊す。

びぜんめいしよさいしるし
備前名所細志集　本三卷

吉備の國、前中後三國に分れし說より、國富、郡名、古今の異同、驛路、入泉、觀音札所、寺社古蹟、歷代の古文書を詳錄せり。寶永六年己丑〔一七〇九〕太宰軒の自序あり。其の姓名を詳にせず。

ひそめぐさ
類草　三卷

修身、學問等に關する隨筆なり。各項「人のいへるを聞けば」と書き起して古今の事實を擧げて、專ら兒女の讀物として作れり。表紙の裏に柳亭種彥の書き付けあり。「此の書江戸大傳馬町鱧形屋後年再刻して鸚鵡新つれづれ草と標題を改む。江戸版は檜入木也。案するに寬文の頃の再刻歟」といへり

ひそらいがく
非徂徠學　一卷　蟹　維安

徂徠の學を非難せる徂徠の學を更に排斥して、一一辨論せり。寶曆四年甲戌〔一七五四〕の自序跋、及び同十年庚辰來順利の序ありて、明和二年乙酉〔一七六五〕上梓す。

◎蟹維安の傳は「治邦要旨」の下にあり。

ひだいがくべんだん
批大學辨斷　一卷　淺見　安正

元祿六年山崎闇齋といふもの「大學辨斷」を著して、伊藤仁齋の「大學」を駁したるを、著者更に本書を著し、「大學辨斷」を是正して朱說を發揮せんとせ

り。元祿九年丙子〔一六九六〕の附言ありて、翌十年出版す。

◎淺見安正の傳は「靖獻遺言」の下にあり。

ひだき
飛驒記　本一卷　朝比奈定味

飛驒の國司城主の來歷軍事等を記錄したるもの。書中飯山一黨の事、國司姉ケ小路の事、江馬小四郎が事、三木一黨の事、金森法印三木を討つ事、法印の死去及び同子孫の事等を記し、「今此の記を成しぬるも、偏に佳誉の是非をあらはし、勸善懲惡の誠となさんことを願ふ」といへり。元和五年己未〔一六一九〕の作。享和元年辛酉〔一八〇一〕高山主吏機櫪廻の奥書あり。別行「飛驒記」とは全然別物也。

◎朝比奈定味は飛驒國高山の人にして、定味は入道しての名なり。

ひだき
飛彈記　本一卷

美濃、信濃、越中、加賀、越前等への道路の數、一國の形勢、籠の渡、藤橋、山川、代官所、高山の町數、土產、風俗、高山年中行事、收穫期、名所舊蹟、寺社、鑛山、陶冶、水車、溫泉、其の他の雜事等を詳錄せり。別行「飛驒記」とは全く別書なり。

ひだこくかあらんき
飛驒國家治亂記　本一卷

飛驒國中古平家時代の治亂變遷を記し、天正元年癸酉〔一五七三〕四月、三木の爲に滅亡せる迄の事績を記せり。卷末に同國古城の在所住人等を錄す。

ひだこくしけいづ
飛驒國司系圖　本一卷

正三位大納言家時より系して、天正十四年丙戌〔一五八六〕正五位下に敍せられ侍從に任ぜられたる同國司左京大夫親綱に及べり。「續群書類從」卷百四十八、系圖部第四十三に入る。

ひたくれかう
直垂考　本一卷　壺井　義知

直垂の事に付きて考證したるもの。卷末に「直垂考附錄」に關して詳しく考證せり。

◎壺井義知の傳は「官職淫說或問」の下にあり。

ひたくれかう
直垂考　本一卷　大塚　嘉樹

壺井義知の「直垂考」、伊勢貞丈の「直垂考附錄」、土肥經平の「直垂考」、自撰の「直垂物次意」等を集編して「直垂考」と名けたるなり。

◎大塚嘉樹の傳は「若槻臨軒」の下にあり。

ひたくれかう
直垂考　本一卷　土肥　經平

古書に徵して直垂の事を考論したるもの。卷末に「此鎧直垂考一帖者、或人所望によりて、書記を合せ考て註するものなり。淺學の僻案、尤慥束なし、後人宜しく正すべき者也、安永九年〔一七八〇〕孟春下院、於綠雲庵、土肥經平書之」とあり。本書を評したるものに、伊勢貞丈の「土肥氏直垂考評」二卷。

◎土肥經平の傳は「甲冑威毛色目」の下にあり。

ひたくれかう
直垂考　本一卷　伊勢　貞丈

壺井義知の「直垂考」に附錄したるもの。卷末に「壺井氏所著直垂考也、讀古書、求所考、其說精詳矣、然予有卿所以附錄于卷尾云、明和九年壬辰〔一七七二〕正月二十八日、屈從旅士伊勢平藏貞丈書」と記せり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋雜書」の下にあり。

ひたちおび
常陸帶　一卷　安藤　定爲

著者の紀行文。丹波より嵯峨、京都に至る名所々々の和歌を記し、元祿十一年戊寅〔一六九八〕京に出でて常州水戸に到り、德川光圀に面謁し、日光山を巡りて京に歸るまでの紀行なり。

◎安藤定爲は爲章の實父にして、伏見宮貞清親王の家臣たり、內匠頭と稱し、朴翁と號し、丹波國桑田郡千年山の麓に住したりといふ。

ひたちおび
常陸帶　一册　瀨山　兒水

著者の俳句集にして、寺田重德の序あり。元祿五年壬申〔一六九二〕の編輯にかゝる。

◎瀨山兒水は京の人にして、芳樹軒と號せり。池西言水の門に出でたる俳人なり。

ひたちきかう
常陸紀行　四卷　黑崎　貞孝

常陸國の諸寺地理風俗等を詳記したる假字文の紀

行なり。文政九年丙戌(一二四八六)の自序あり。著者墨崎眞幸は至純と字し、泊心と號す。

ひたちじやうしゆみづたにばんりうぐんき
常陸城主水谷蟠龍軍記 寫一卷

水谷蟠龍の大永三年癸未(一二一八三)正月十七日の誕生より、天正十三年乙酉(一二一四五)に至るまでの履歴武功等を記したるものなり。

ひたちのくにがうちやう
常陸國鄉帳 本一卷

常陸全國高九十萬三千七百七十八石四斗五升八合、永錢二十一貫文、村數千六百七十七箇村を列記したるもの。元祿十五年壬午(一三六二)四月の調査にかゝる。

ひたちのくにぜんづ
常陸國全圖 一鋪

常陸全州の詳細地圖なり。圖傍に統計的事項を擧げたり。版刻の年時を記さず。

ひたちのくにむらむらめいさいしよ
常陸國村々明細書 本一卷

常陸國河內郡伊佐津村より、同郡柴崎村に至る二十一箇村の明細書にて、各村名村高等を記せり。尚同名の書に河內郡大德寺村より同郡脇川村に至る二十一箇村を擧げたるもあり。

ひたちのだいじようでんき
常陸大掾傳記 本一卷

卷首に常陸大掾の略傳を掲げ、桓武天皇より、花林院貞國に至る三十代を列名す。「續群書類從」卷百三十九、系圖部第三十四に收む。

ひたちふどき
常陸風土記 一卷

常陸國古代の風土記。卽ち元明天皇の和銅年間諸國に敕し、記して獻じしめたるものなり。其の書の今に傳はれるものは盜し本書の外數部に過ぎずといふ。天保十年己亥(一二四九九)四野宣明の訓點標註を加へて發刊す。

ひたにのくにちらんき
飛驒國治亂記 本一卷

飛驒國に於ける古來天正慶長頃に至る治亂の事績を略敍したるものなり。「續群書類從」卷六百十八、合戰部第四十八に入る。

ひだのくにちらんきじ
飛驒國治亂紀事 寫一卷

常國歷代城主の戰爭、また治世の事績等を略記せり。末に國中の古城趾、城主の事績等を略記せり。文政元年戊寅(一二四七八)の寫本の奥書に三木自書の本によりて寫す旨を記せり。

ひだのくにのりくらがたけらいてうき
飛驒國乘鞍嶽雷鳥記 本一卷

延享元年甲子(一二四〇四)四月、飛驒の代官長谷川庄五郎といふものに命じ、乘鞍嶽に雷鳥といふ獸鳥(或は佛法僧といふ)を捕へぬ、同時に其の羽をも獻上したる始末を記したるものなり。

ひちがさ
ひち笠 一册 **燈外**

著者の俳句集なり。元祿五年壬申(一二三五二)五月の編にかゝる。

◎燈外は元祿年代の大阪俳人なり。本書の外に「生駒堂」の著あり。

ひちよう
非徵 八卷 **中井積善**

荻生蒗園の「論語徵」を辨駁したる、五井純祐の「非物編」に續きて、更に「論語徵」を辨斥したるものなり。天明三年癸卯門人早辨之の序ありて、翌四年刊本となる。

◎中井積善の傳は「逸史」の下にあり。

ひついだん
筆意斷 三卷 **源 周義**

其の師鶴林の筆意說を筆記輯錄したるもの。日本筆道神代濫觴といふ目より、以下書筆相忘爲書妙道といふに至る五十餘條、皆筆道の要領を述べたるものなり。假名交り文にて記す。寬政四年壬子(一二四五二)著者周義の序及び觀水亭、菅光忠の序、倘諸家の跋あり。

◎源周義は來澤の人書家鶴林居士の門人にして伯耳と稱す。

ひつきしうえきほんぎ
筆記周易本義 十六卷 **中村 欽**

「周易本義」を註解したるもの。著者の五經筆記の一なり。程朱の本旨に基きて、諸家の說を取捨し、最も平正に詳解せり。門人增田益夫の校刻する所なり。他の筆記と同じく、享保十五年庚戌(一三九〇)室直清の序、和角維幹の序を掲げたり。

◎中村欽の傳は「講學筆記」の下にあり。

ひつきししふでん
筆記詩集傳 十四卷 **中村 欽**

詩經を註說したるもの。著者の五經筆記の一なり。著者は博物洽聞、程朱の學に深くして、其の經を說くこと最も平正、常に曰く、夢低くくとも高きことなかれ、夢拙くとも巧なることなかれと、研究剖析務めて本旨を得るを以て要歸とせり。此の意に基きて「四書鈔說」を作り、延て「五經筆記」に及べり。諸家の說を取捨して最も詳釋す。門人增田益夫の校正發行する所なり。享保十五年庚戌(一三九〇)四月九日室直清の序、同三月門人和角維幹の序等あり。

◎中村欽の傳は「講學筆記」の下にあり。

ひつきどくえきえうりやう
筆記讀易要領 四卷 **中村 欽**

此の書は易經中の要領を抽象講說したるものなり

◎中村欽の傳は「講學筆記」の下にあり。

ひつきらいきしふせつ
筆記禮記集說 十五卷 **中村 欽**

「禮記」の章節を逐うて、詳說したるもの。謂ゆる五經筆記の一なり。諸家の說を擧げ、自家の斷を下して、全部の意義を講解す。終始無動の漢文なり。安政四年丁巳(一二五一七)安積艮齋の序あり。

◎中村欽の傳は「講學筆記」の下にあり。

ひつけたうそくあらため
火附盜賊改 本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。享和年度のものなり。

ひつけたうぞくいつけん
火附盜賊一件 寫一卷

火付盜賊改、不正の筋ありとて、與力、同心、召捕方、吟味作法等を論議したるものなり。

ひつせいしふ
筆勢集 寫一卷 **僧 希一**

筆勢に關する論述なり。漢土書家の筆勢筆意をも論じたり。

ひつたいせう
筆體抄 寫一卷

筆體書法に關する要項にして、二十四箇條あり、橫本小册子の古本なり。著者は筆相入道と記せり。

ひつだうほんちひじ
筆道本知比事 一卷 **馬場 秋水**

筆道に本を知るの要を述べ、一家の書法を傳へたるもの。末に當流一代馬場筆水手跡、當流二代馬場東水手跡、當流馬場秋水手跡、倘十三歲と四歲との子供の手跡とを擧げたり。最初の論述、皆秋水の筆にて古語の引用は楷書、其の說明は凡て草書細字にて、全部の意義を講解す。終始無動の漢文なり。安政元年己酉(一二四九)の作。江戸に出版せり。寬政元年己酉(一二四九)の作。江戸に出版

◎中村欽の傳は「講學筆記」の下にあり。

ひつけたうそくあらため
火附盜賊改 本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。享和年度のものなり。

ひつけたうぞくいつけん
火附盜賊一件 寫一卷

火付盜賊改、不正の筋ありとて、與力、同心、召捕方、吟味作法等を論議したるものなり。

ひつせいしふ
筆勢集 寫一卷 **僧 希一**

筆勢に關する論述なり。漢土書家の筆勢筆意をも論じたり。

ひつたいせう
筆體抄 寫一卷

筆體書法に關する要項にして、二十四箇條あり、橫本小册子の古本なり。著者は筆相入道と記せり。

ひつだうほんちひじ
筆道本知比事 一卷 **馬場 秋水**

筆道に本を知るの要を述べ、一家の書法を傳へたるもの。末に當流一代馬場筆水手跡、當流二代馬場東水手跡、當流馬場秋水手跡、倘十三歲と四歲との子供の手跡とを擧げたり。最初の論述、皆秋水の筆にて古語の引用は楷書、其の說明は凡て草書細字

ひつちうのかみなかざねあそんおよしねあはせうた
備中守仲實朝臣女子根合歌 一卷

康和二年庚辰(一七六〇)五月五日に、菖蒲根、芳、盧橘、石竹等の題にて、周防掌侍、俊頼、上總君、仲實、大宮中將君、顯仲、藤波、隆源阿闍梨等の五番根合なり。「群書類從」卷二百二十六、和歌部第八十一に收む。

びつちうのくにこつ
備中國古圖 寫五鋪

五郎連檀して、備中一圖を示せる古圖なり。墨朱の線を以て示し、圖端に十一郡の總高、領主の氏名、里程等を記せり。

びつちうのくにたかとえじやうのき
備中國高越城記 本一卷

備中國後月郡東江原村なる高越城の次第を、土地の役人より、其の村の庄屋三郎衞門といふものに尋ねたる時の答申なり。同城は宇都宮眞綱開基にて、享祿二年己丑(二一八九)伊勢新左衞門行長、伊勢國より入部したりといふ。

びつちうのくにづ
備中國圖 本一帖

備中國全圖にして彩色を以て區劃し、十一郡六百六十三箇村を記したり。天保九年戊戌(二四九八)の改作にかゝる。

びつちうふし
備中府志 本五卷　平川　親忠

此の書は本名「古戰場備中府志」の下に解題せり。

びつちうへいらんき
備中兵亂記 本一卷

元親謀叛之事付驛陣寄來事より、常山城仁落女軍之事に至る十一項に記せり。「續群書類從」卷六百四十一、合戰部第七十一にあり。

びつちうむらかゞみ
備中村鑑 二卷　渡邊　正利

備中國全郡の村名を擧げ、各領主、其の村高、用達、庄官、年寄、その他神佛古城蹟等を記せり。文久元年辛酉(二五二一)の出版にかゝる。著者渡邊正利は與平と稱す。

びつちうめいしようかう
備中名勝考 二卷　小寺　清之

備中一圖の名勝を行宮、神社、郡、里、村、島、浦、山、岡、野、原、河、渡、泊、潟、崎、池、澤、淵、瀬、泉、井、田、橋、森の二十五部に分ち百二十箇所を詳記し、粉畫を入れて其の實狀を示せり。文化十二年乙亥(二四七五)の自序、及一二家の序あり。文政五年壬午(二四八二)出版す。

◎小寺清之は備中笠岡の和學者にして、常陸介と稱し、檜園と號せり。著書は本書の外に、本牧園明、檜園家集等あり。文政年中、年八十にて歿せり。

びつちんせんご
筆陣雋語 三卷　齋藤　正謙

書家墨場用として、隸行草の三書體を、二字句、三字句、四字句、五字句、其の他等に次第して、語句を撰定せり。澤後頤齋城の筆するところなり。安政四年丁巳(二五一七)揔堂の自序あり。

◎齋藤正謙の傳は「伊勢國司記略」の下にあり。

ひつぱふでぐん
筆法御口傳 本一卷　尊圓法親王

執筆法の條々を筆記したるもの。後光嚴天皇御幼稚の時御手習の御本に添へて進講したるものなりとぞ。正平二十三年戊申(一三六八)以下數多の奥書あり。

◎尊圓法親王の傳は「釋家官班記」の下にあり。

ひつようろく
聖用錄 本四卷　菅原　在家

卷の一に辨名〔洪和〕、制度〔洪利〕、把笏、典故上〔洪〕で卷の二に典故下〔和〕、木品、古笏寸法。卷の三に補遺。卷の四に古笏圖。附錄に釋文等を考說せり。附錄共に一冊に寫傳す。

◎菅原在家のことは「宿德裝束抄」の下にあり。

ひでさとものがたり
秀郷物語 一卷

俵藤太秀郷一生の事歷を、俗說のまゝに物したる絵入小說なり。

ひでさとりうけいづ
秀郷流系圖 本一卷

藤氏秀郷より分派せる、小山、結城、佐野、阿曾沼、足利、後藤、佐伯、波多野、河村、松田の系圖なり。「續群書類從」卷百五十五、系圖部第五十に入れたり。「續史籍集覽」に收めたる「秀郷流藤原氏諸家系圖」と稱するものと大同少異なり。

ひでさとりうふぢはらししよけけいづ
秀郷流藤原氏諸家系圖 二卷

藤原秀郷より分派したる諸家の系譜にして、「秀郷流系圖」と大同少異の書也。「續史籍集覽」中に收む

ひでよしじき
秀吉事記 本一卷　大村　由己

秀吉の播州征伐、惟任退治、柴田退治、紀州發向、任官履歷、四國發向等の事を通俗に記したるもの。天正八年庚辰(一二四〇)より同十三年までの間に記したり。

◎大村由己の傳は「播州御征伐之事」の下にあり。

ひでよししゆつしやうき
秀吉出生記 本一卷

秀吉、秀次の家譜に傳聞を加へて、其の妻妾一族の略歷生卒位牌の所在等を記せり。卷末に多賀常政の識本によりて、安永六年丁酉(一二四三七)高敬といふもの寫本せる由あり。著者は岡部某と記せり。

ひでよりき
秀賴記 本一卷

豐臣秀賴が德川家康と不和を構へて終に滅亡に至りたる次第を、通俗なる漢文にて記したるものなり。末に、元和二年(一二七六)四月下旬來迎寺內林故」と記せり。

ひでよりろうじやうき
秀賴籠城記 本一卷

豐臣秀賴の大阪籠城記なり。當時臣下の事實を筆記したるものなり。

ひでんくわきやうきぶん
祕傳花鏡記聞 本一卷　小野　職博

草木禽獸の名稱性質等を說明したるもの。園樹、藤蔓、花草、蒼禽、蒼獸、鱗介、昆蟲の七類に分ち、數百數を擧げたり、天明二年壬寅(一四四二)三月十三日より、同年十二月九日に至る講義を、延陵寺顯融といふもの筆記したるなり。

◎小野職博の傳は「欽勝摘要」の下にあり。

ひでんせはうぶくろ
祕傳世寶袋 三卷　日下部不錄

種々の呪術を記したるもの。俳諧につまりたる方、蟄蛇にさゝれたる呪、河を渡るに怪我なき呪、犬の病を治する方、山椒にむせたる方等、すべて二百條項あり。寶曆十三年癸未(一四二三)の著なり。

ひでんそようはうき
祕傳重寶記 一枚

接木の傳、魚鳥料理法、漬物、和物法、その他諸病の救急法等を略記して懷中用の重寶としたる者也。

ひでんそようはうき
祕傳重寶記 一折

狂犬、毒蟲に噛まれたる時の救急法、または衣服の濕、油を拔く等に至る雜事を記したるものなり。

ひとあつかりちやう
人預帳 本一冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。嘉永三年庚戌(一二五一〇)のものにかゝる。

ひとことぐさ
鄙都言種 四卷　樗樸道人

教訓雜話を綴りて、給を入れ兒女の讀本に充てたるもの。前編二卷、後編二卷にて、書稽の濫觴、讀本でかなはぬ書等より、人に對する六字、玉子酒の歌等に至る數十談あり。享和二年壬戌(一四六二)の自序あり。

ひとことぐさ
一言草 本二十四冊

古今の故事雜話等を筆錄し。雜說雜文等を抄出して、區筆雜輯したるものなり。

ひとたづねちやう
人尋帳 本三冊

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる人尋帳にして、弘化年度より、慶應年度に至る。

ひとついちるもんじよ
一櫟文書 本三冊

此の書は一名「鏑矢伊勢宮方記」の下に解題せり。

ひとつばしどのじゆんくわいせんげのしだい
一橋殿准槐宣下之次第 本二卷　松岡　辰方

文政八年乙酉(一四八五)七月、一橋治齊へ准大臣の宣旨を下し給ひし時の次第を記したるもの。同年八月に記す所なり。

◎松岡辰方の傳は「冠頗圖會」の下にあり。

ひとつばしふ
一橋譜 本一卷

此の書は一橋家の系譜にて、宗尹及び其の子孫を系譜して、略傳を示せり。

ひとつまつ　飛東津松　四冊　尚白

諸家の俳句を集めたるもの。其の數凡そ二千數百句、作者三百人の以上に及べり。眞章前後の編なるべし。著者尚白の傳は「叉衣」の下にあり。

ひとなつひやくく　一夏百句　一卷　大島蓼太

天明五年乙巳(一七八五)卯月八日より、同年七月十九日に至る毎日の俳句を列記したるものなり。翌六年二樂庵雅郎の序、翌七年白龐の跋あり。近年發行の俳諧文庫第十七編「蓼太全集」にも收めたり

◎大島蓼太の傳は「筑波紀行」の下にあり。

ひとはりゆみのきよがき　一張弓之開書　本一冊

小笠原家の一張弓の由來を記せるものなり。もと小笠原家に、「曼陀羅滋藤」又は「雷上動」と云へる一張の弓の圖あるより、一張弓と呼ばれたる一書あり。今この一張弓の由來を述べたるなり。

ひとまね　人眞似　二冊

俳諧の集にして、明暦三年丁酉(一六五七)十一月の編輯にかゝる。

ひとまろしふ　人麻呂集　一卷　賀茂　眞淵

人麻呂歌集の歌として旋頭歌十二首、古歌集中出

歌として同旋頭歌五首、次にまた人麻呂歌集の五句の歌百四十九首を載錄し、平易に其の歌意を註解したるもの。卷首に斯の人麻呂歌集に關する考說を擧げたり。本書はもと著者の「萬葉集考」に添ひたるも別行したるものなり。文政七年甲申(一八二四)八月長瀬眞幸の跋を附して出版す。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

ひとまろでんき　人丸傳記　本一卷

柿本人丸の事につき、古來異說多く、或は五種の人丸といひ、或は十五人の同名異人といひ、或は佛陀の權化などいふ。本書はこれらの諸說によりて、其の所說を擧例したるものなり。

ひとまろひせう　人丸祕抄　本一卷

假名遣の事を記したる書なり。攝者を詳にせず。

ひとみしき　人見私記　本四冊　人見　求

本書の內容及び成書の由來等は其の自序に明なり。其の全文を擧ぐれば、「御書物讀に有之候、寬永八年(一六三一)より、元祿までの日錄、虫喰殊の外損候に付、慶長以來御日記の如く、御書物に仕立申度段、或人內談致し候所、御時節柄故、折も可有之との事故、猶私に存候はゞ、只今さへ見え繕候所多く候へば、後々御用に立申間敷と存じ、熟覽致し、彼是御用にも可立處を拔書に致し置候。萬一御日記大破に及び候而、後御用之節、私存念申述候事は勿論、子孫成共可差上、自分覺書に致し候間、人見私記と名付申候に付、甲府御林日記も同じく書拔置候。櫻田神田に屋敷有之候故二田錄と名付申候。御書物奉行人見又兵衛求」として筆押あり。

◎人見求は又兵衛と稱し、御書物奉行たり。本書の外に人見氏傳、人見隨筆等の著あり。

ひとみしでん　人見氏傳　本一卷　人見　求

敏達天皇より出でて、享保十二年丁未(一七二八)四月に生れたる著者に至るまで、人見氏歷代の系傳を詳記したるもの。寶曆十二年壬午(一七六二)七月の自序あり。

◎人見求の傳は「人見私記」の下にあり。

ひとみずのひつ　人見隨筆　本一卷　人見　求

寬永十九年壬午(一六四二)十一月十四日「竹千代君御髮置記」の漢文と、これを假字文に譯したるもの、次に延寶八年庚申(一六八〇)五月六日、大將軍右大臣源家綱の不豫に關する漢文の記と、次に同年八月將軍宣下を記したる漢文の記等なり。以上四冊に作りて足利學校へ藏めたるものを一冊に寫し來りたるものなり。

◎人見求の傳は「人見私記」の下にあり。

ひとめたまはこ　一目玉鉾　四卷

卷一に駿河より江戸までの路程、卷二に江戸より駿河島田までの路程、卷三に遠州金谷より播州姬

崎網島までの路程、卷四に大阪より對島までの路程を圖出し、其の間の名所、寺蹟、社寺等を揭げ記したり。元祿二年己巳(一六八九)の自序あり。名は難波俳林とのみ記せり。

ひとめつゝみ　一目土堤　一卷　內田屋新太郎

德來の怪談を座敷狂言に仕組みたるもの。歌樂が庵室、媚家の異見、通言の原始等十カ條あり。天明八年戊申(一七八八)の作なり。

◎內田屋新太郎は江戸の人にして、內新好、白銀屋一丸、魚當等は其の號なり。もと茅場町に住して小商をなしゝが、後本所石原町に住し俳諧の宗匠となり、傍ら戲作に從事し、金隆鄙年貢、明花淨爲花、早替平氣の景清、花紅葉二人飯盜、怪談文章、壬任男弊色名代振袖、落咄腹筋問答等あり。

ひともとぐさ　一本菊　二卷

和文體の物語なり。天曆の御門の御時、ときめける右大臣殿に、若君姬君各一人ありけるが、北の方が果敢なくなりし後、右大臣、後妻を迎へたれば、此の腹にまた若君と姬君とが生れたり。然るに、右大臣卒して後家督を後妻の子に取られたれば、先妻の二子、途方を失ひて辛苦せる種々の經歷を陳べたるものなり。萬治三年庚子(一六六〇)の刊行にして、世に珍しき書なりといふ。

ひともとぐさ　一本草　五冊　石田　未得(トク)

諸者の編輯にかゝる俳諧集なり。その年月は未だ詳ならず。

◎石田未得は江戸の俳人にして、乾堂と號し、又右衛門と通稱す。松永貞德の門人となりて、學殖奇才あり。剃髮して雨窓町に住せり。著書は此の外に「吾吟我集」あり。寬文九年己酉(一六六九)七月十八日、八十三歲にて歿す。句あり、「出し置いて寢られぬ御仁に炭火かな」といふ。

ひともとぐさ　一本草　一卷　田澤　義章

和歌野近邊に關する和歌を輯錄したるもの。武藏野の和歌五十二首、玉川の歌一首、堀四首、狹山の歌四首、箱池の歌一首、堀首、三吉野里の歌五首、逸水の歌一首、都筑原の歌一首、小山田關の歌一首、立野の歌四首、霞ヶ關の歌三首等を載せて、頗及び作者を記せり。本書は僧法輪との合編にて、法輪草保二十年乙卯(一七三五)武藏野に及び、古歌を採り、歸て後こ

ひともとぐさ　一本日記　一卷　田澤　義章

二十一代集中より、武藏野近邊に關する和歌を錄したるもの。武藏野の和歌五十二首、玉川の歌一首、向岳の歌四首、狹山の歌四首、箱池の歌一首、堀兼井の歌一首、三吉野里の歌五首、逸水の歌一首、都筑原の歌一首、小山田關の歌一首、立野の歌四首、霞ヶ關の歌三首等を載せて、頗及び作者を記せり。本書は僧法輪との合編にて、法輪草保二十年乙卯(一七三五)武藏野に及び、古歌を採り、歸て後これを編したる由なり。

◎田澤義章は武藏國橘樹郡稻毛菅生村の農にして源太郎と稱す。和歌を成島凰卿に學べり。著書は本書の外に、北條分限帳郡村略考、武藏地名考、小田原分限考等なり。法輪は常陸國筑波郡柴戶淨衆寺の僧なりといふ。

ひとよばな　ひとよばな　一卷　僧　海量

著者の紀行歌集なり。五畿內より順序して、風由卷望、琵琶景勝、鹽竈秋霄、立山遠望、鳴門眞景、博多勝景等あり。天明六年丙午(一七八六)の自序、本居宣長その他の序あり。著者は近江の人なり。

ひとりごと　ひとりごと　二帖　平泉　鬼貫

著者の俳諧評筆にて、俳論、俳話、俳文、自敍傳等あり。有賀長伯の序と「右二帖者、年比思ひ寄たる事ども、疑覺疑證にかいつけ置き侍りしを、あながちに乞ふによって、千及市貫にあたふる者也」の自記と、享保三年戊戌(一七一八)紫野巨妙子の跋とあり。天明四年甲辰(一七八四)出版す。近年發行の俳諧文庫第十四編「紫堂鬼貫全集」の中にも收む。

◎平泉鬼貫は攝州伊丹の俳人。通稱は與惣右衛門また三郎兵衛といひ、自休庵、樗花翁、佛兄、馬樂堂等の別號あり。晚年獵々哩居士卽翁と號す。もと富豪なる酒造家なりしが、小說俳諧を好みて、產業を顧みず遂に家產を蕩盡するに至れり。俳諧は松江維舟に學びて、此の道に進む。然れども窮困日に甚しく、京阪の間に流浪す。元文三年庚午(一七三九八)

八月二日、七十八にて歿す、或はいふ元文二年七十七にて死せりと、並の名死後大に著る。

ひなあそびのき

雛遊の記　一巻　度會　直方

三月三日の雛遊の根元由來を考究して、貴紛などを挿入して物したるものなり。寛延二年己巳(一七四九)田中友水子の序文あり。

ひなづるげんじものがたり

雛鶴源氏物語　六巻

「若草源氏物語」の次にて、源氏物語の、若紫の巻、末摘花の巻の二帖を當時の俗語、俗葉に書き移したる物語なり、本文の上に抄略を加へず、よく諸抄を集めて、普通の詞に書移せり。寶永五年戊子(一七〇八)洛陽散人水月堂の序、及び隱士梅雪の跋あり。同年江月にて出版す。後、享保六年辛丑(一七二一)單に「雛鶴源氏」と題し十冊に刊行したるもあり。花の宴、紅葉の賀の巻も出版の由見えたり。

ひなづるもんだふ

鄙鶴問答　本朝一巻　速水　房常

憲非幾知が、諸方の聞者に答へたる考證雜記なり。鄙鶴問答の名は著者の附するところなり。

◉速水房常の傳は「掌中職原聖要」の下にあり。

ひなのうけき

雛廼宇計木　本朝三巻

本邦古傳の童話、勝々山、舌切雀、猿蟹戰、浦島太郎、竹箆太郎、花咲老夫、桃太郎、以上七種の談につきて辨論したるものなり。著者は瑞鳥園守翁士と記せり。

ひなのうたがたり

比那能歌語　一巻　千家　尊孫

上代の歌と近世の歌との論、歌體の替りしは遣歌の起りしよりの論、書寫の誤の論、以下助辭、川言等の事、歌の心得等につきて考說したるものなり。千家尊晴の序あり、仁孝天皇の天保九年戊戌(一八三八)出版す。

ひなぶりしふ

鄙風集　一巻

著者の歌集の二編にて百餘首を收めたり。文久元年辛酉(一八六一)五月の自跋に、さいつ頃の希興卿のあつめ給へる鄙風集のひと巻歌のかず多からぬより、增補せまほしう侍て、反古の中より拾ひ出し、自ら寫して版にせる由をいへり。時に七十七翁とありと姓名を記さゞるは惜むべし。

ひなみかしふ

日次歌集　本朝一冊　冷泉　爲經

十一月九日立春氷より、翌年十二月十一日に至る日次歌集なり。御製式部卿宮、按察使、前源中納言、菅宰相、新宰相、基綱、雅康、通秀、敎國、實淳、親長、敎秀、實隆、政爲、季種、元長、永宣、濟繼、康親、爲和、雅綱、秀房、眞澄等の歌なり。「此兩家不免他見者也、冷泉爲經朱印、泰聲台令、而以冷泉亞相奥書の家本、敏寫之訖、享保壬子歲(一七一二)二月上浣、綠力深省稽首」等の奥書あり。

ひなみきじ

日次記事　本朝六巻　黑川　玄逸

正月元日より、十二月晦に至る日々の行事を記したるもの。行事は大書して其の日を標し、細註して其の事實を記し、一月を節序、神事、公事、人事、忌日、開帳、法會の七類に分ち、每月の末に節候の解並に不時の行事を記載せり。明の遐齡京月令廣義の「日次紀事」に倣ひて書目を設けたりといふ。延寶四年丙辰(一六七六)林鵞峯の序、林鳳宇の跋、貞享二年乙丑(一六八五)野節の序等あり。

◉黑川玄逸の傳は「雍州府志」の下にあり。

ひなみにつき

日次日記　本朝一巻　地藏院房玄

貞和四年戊子(一三四八)以來の記。「續群書類從」卷八百六十六、雜部第十六に收む。

◉地藏院房玄は觀應二年辛卯(一三五一)十月十五日七十歳にて他界。

ひなみのき

日次記　本朝二百二十巻　二條　良基

攝家歷代の日次記なり。天曆元年丁未(一三四七)より、仁治三年壬寅(一二四二)に至る。諸家の日記を綴合したるもの。全編を十干に分てり。

◉二條良基の傳は「莵玖波集」の下にあり。

ひなるべし

非南留別志　二巻　富士谷成章

狹生徂徠の「南留別志」の說を批評したるものなり。天明六年丙午(一七八六)富士谷成章の序あり。

◉富士谷成章の傳は「あゆひ抄」の下にあり。

ひにんあづかりちやう

非人預帳　本朝二冊

幕府評定所より引繼さて內閣文庫に保存せるものにして、嘉永元年戊申(一八四八)のものにかゝる。

ひのいちりうけいづ

日野一流系圖　本朝二巻

大織冠鎌足より、永正十五年戊寅(一五一八)遷去したる權中納言冬光の孫左衞門佐侍從元宣に至る系譜なり。「續群書類從」卷百四十七上下、系圖部第四十二に收む。

ひのえざるとしのよごと

丙申歲壽詞　一枚　平田　篤胤

安永五年丙申(一七七六)に生れ、今年天保七年丙申(一八三六)八月二十六日が還曆にあたるとて、家族門弟の祝儀を受けて、詠ひ出でたる二首の和歌に序を添へて檀紙一葉に版したるものなり。

◉平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

ひのひろすけきやうくぎ

日野弘資卿口儀　本朝一冊　日野　弘資

和歌の引例、熟語、名詞等につき說明したるもの。「御陪のさは」より、「あまのさかて」に至る百二十一條あり。奥書に大江氏綱の問に對して答へたるもの、由にて「日野弘資卿和歌之答」と大同小異の記なり。安永五年丙申(一七七六)の序あり。思ふに「日野弘資卿和歌之答」は本書より拔萃したるものなるべきか。

ひのひろすけきやうわかのこたへ

日野弘資卿和歌之答　本朝一巻　日野　弘資

歌學上の熟語名詞及び古歌の引例等につきて考證說明したるものなり。「かさゝぎ」「ひさゆく駒」等より、「なかなかに」「つゝかなのとまり」等に至る四十四條あり。坂上宗永の問に對して答へたるものなりといふ、享保十二年丁未(一七二七)書寫の奥書あり。「右此三部抄者、日野殿弘資卿祕書也、愚趨宗坂上宗永大江綱元依懇深之問、而答此之祕說也、門流之外不可免外見者也、仍證之訖」といふ。「日野弘資卿口儀」と參看すべし。

ひのみささぎづき

日御崎雜記　本朝一巻

出雲日御崎兩宮攝社末社の建立次第、年中行事等より、九十代間の系圖を拔書す。今見るところは、「出雲大社記」に併せ寫せり。

ひのみささしやもんじよ

日御崎社文書　本朝一巻

同社所藏の古文書數通を編輯模寫したる者なり。

ひのみささだいだいおかぐらのことば

日御崎太々御神樂の詞　一巻　古庄　美直

出雲大社日御崎宮の緣起、大社の事、大已貴命之異名、大國と大黑との文字混雜等の事を記せり。天明元年辛丑(一七八一)太々神樂永代執行助成として、江戶に來りたる時、著したるものなりといふ。著者古庄美直は出雲日御崎宮の上官なり。

ひのみささりやうぐうならびにせつしやまつしや

日御崎兩宮並攝社末社　本朝一巻

出雲なる日沈宮相殿祭神の名、拜殿玉垣の事、神宮相殿祭神の名同拜殿、八足大門、廻廊、月讀神社より韓國神社に至る五十三社の祭神等を記し、日御崎太神宮御建立の次第の條に安曇天皇の十三年乙丑(一二五)行幸建立より寬永十一年甲戌(一六三四)德川三代將軍家光の建立に至るまで十九度遷宮ありたる事等を記載せり。

ひのみささりやうぐうりやくき

日御崎西宮略記　一巻

出雲日御崎兩宮とは日沈宮と、神宮との兩宮をいふ、日沈宮は天照大日靈貴相殿五男神を祭れり。在昔清江の海の日置島にありしを、村上天皇の敕にて陸に遷せりといふ。神宮は素盞嗚尊相殿に、三女神を祭れり。在昔隱丘にありしを、日沈宮と同時に今の陸地に遷したりといふ。本書是れ等の緣起を略載せり。

ひのようじんしかた

火之用心仕方　本朝一巻　梅辻　規清

火事豫防の事につきて、建築法その他を略論したるもの也。天保八年丁酉(一八三七)の寫本による。

◎梅辻規清の傳は「生魂神宮次第記」の下にあり。

びはろんずゐひつ
批把園隨筆　一卷
俳諧に關する諸家の消息雜說等を編輯したるものなり。去來書、藤堂家の文、絲筠軒、その他凡そ三十種あり。秋舉の序、大蘇の序等あり。

びはこのき
琵琶湖記　木一卷　僧　充長
近江國琵琶湖の形勝沿革變遷等を記し、同湖及び近邊に關係ある古蹟等を記す。
◎充長は沙彌たり。俗名を仁木五郎右衛門と稱する歌人なり。

ひはつらん
算法非撥亂　一卷　會田　安明
向に神谷定令が著したる「撥亂算法」を非難したる書なり。自序には其の辭頗る飾る所あれども、本文の論錄甚だ穩ならず、此の書に至りて、關流、最上流の爭論一層甚しきを加へたるが如し。「撥亂算法の條な參照せよ。寛政十三年辛酉(一八〇一)の版。
◎會田安明の傳は「算法古今通覽」の下に詳なり。

びはんごぶんこごしよもく
尾藩御文庫御書目　木二冊
乾册の最初には駿河御讓と題し、二冊とも各經書類、諸子類、文集類、和書類の四に分ちて書名、版の種類(唐本、朝鮮版、宋版、和版、活字版、寫本等)册數等を擧げたり。收むる所凡そ一千八百餘種あり。別に「尾藩御側御文庫御書目」と題したるもあり。

びばんさく
備蠻策　木一卷　筒井　政憲
西洋外人の性行を評し海防の要を論じたるもの。にて、淡文十章の一小册子なり。嘉永二年己酉(一八五〇)五月の撰述にかゝる。
◎筒井政憲は子恒と字し、鑿渠と號し、紀伊守と稱し、後に肥前守と稱す。寛政年中試に應じて幕府の書院番士となり、使番目附を歷て文政四年町奉行に任ぜらる。在職二十餘年、裁判の功最も多し。天保の末年冤によりて禁錮せられしが、冤はれて牧野國水師提督布恬廷に長崎に通商を議したること あり、外交上の智識亦知るべし。安政六年己未(一八五九)六月八日、八十二歲にて歿す。

びばんしせう
批判四笑　一册
延寶二年甲寅(一六七四)六月上旬、編輯したる所の俳諧集なり。

びばんてんけい
備藩典刑　木三卷　湯淺　元禎
備前光政少將の時、慶長頃より、寛永年中に至る年の間出し諸法度を編錄したるもの。
◎湯淺元禎の傳は「常山紀談」の下にあり。

びばんてんろく
備藩典錄　木二卷　三村　永忠
備前少將新太郎光政の嘉言善行及び家中に示せし觸書覺書等を筆錄す。末に光政棹榊の銘文等を擧げ、更に緖錄數項を附載せり。自序及び桃園天皇の寛延二年己巳(一七四九)四月河口子深の序あり。一名「有斐錄」ともいふ。著者三村永忠は備前の藩士なり。

びばんれいでうき
備藩令條記　木一卷
備前少將の時、家中諸士に示したる訓令、條書等の案文を編輯したるものなり。

ひゝなあそび
ひゝな遊び　木一卷　屋代　弘賢
我が習俗三月三日を以て女子の雛日とせることの根元を尋ねその由來を考證したるものなり。「古今要覽稿」の摘寫なり。
◎屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

ひふうしふ
鄙風集　一卷
此の書は訓讀により「ひなぶり集」の下に解題せり

ひふきだけ
火吹竹　一册　富尾　似船
著者の俳諧集なり。延寶七年己未(一六七九)季秋の作にかゝる。
◎富尾似船の傳記は「堀川の水」の下にあり。

ひふつへん
非物編　六卷　五井　純禎

備前少將新太郎光政の嘉言善行及び家中に示せし觸書覺書等を筆錄す。末に光政棹榊の銘文等を擧げ、更に緖錄數項を附載せり。自序及び桃園天皇の寛延二年己巳(一七四九)四月河口子深の序あり。一名「有斐錄」ともいふ。著者三村永忠は備前の藩士なり。

びばんれいでうき
備藩令條記　木一卷
備前少將の時、家中諸士に示したる訓令、條書等の案文を編輯したるものなり。

ひゝなあそび
ひゝな遊び　木一卷　屋代　弘賢
我が習俗三月三日を以て女子の雛日とせることの根元を尋ねその由來を考證したるものなり。「古今要覽稿」の摘寫なり。
◎屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

ひふうしふ
鄙風集　一卷
此の書は訓讀により「ひなぶり集」の下に解題せり

ひふきだけ
火吹竹　一册　富尾　似船
著者の俳諧集なり。延寶七年己未(一六七九)季秋の作にかゝる。
◎富尾似船の傳記は「堀川の水」の下にあり。

ひふつへん
非物編　六卷　五井　純禎

物徂徠の「論語徵」を非難したるものなり。著者の業を終へずして物故したるを、其の徒中井積善、同積德等の校正梓行するところなり。明和三年丙戌(一七六六)中井積善の序あり。六卷三册に作る。
◎五井純禎の傳は「源語詁」の下にあり。

ひへんだうひへんめい
非辨道非辨名　一卷　森　鐵
物徂徠の「辨道」「辨名」を非駁したるものなり。漢文にて記す。答客一編を附錄す。天明四年甲辰(一七八四)の自序及び小澤讖、島羽田諭哀、井恒、田威直等の序跋あり。
◎森鐵は上總の人。大年と字し、彦右衛門と稱し、東郭と號す。江戸に出で、宋學を主張し、徂徠學を非斥せり。著書は本書の外に、辨道五編、非辨直、易道撥亂辨、論語徵辨、東郭文鈔等あり。寛政三年辛亥(一七九一)七月歿す。年六十三。

ひほんたまくしげ
秘本玉くしげ　木二卷　本居　宣長
矯弊、御馬、治財、尚武、敬神等の要を論述したるものなり。天明七年丁未(一七八七)君侯の問に答へたる意見書なり。
◎本居宣長の傳は「古事記傳」の下にあり。

ひみつまんだらじふぢうしんろん
秘密曼陀羅十住心論　十卷　僧　空海
眞言宗に說く所の十住心の敎判を詳述したるもの。弘仁十三年壬寅(一八二二)、嵯峨天皇の敕を奉じて著す所なり。「續刷藏經」霜帙第七に收めらる。註釋書には、秀範の十住心論科註二十一卷、印融の十住心論廣名目六卷、杲寶の十住心論鈔十卷、寂祝の十住心論私記十二卷、空海の冠註十住心論十卷、頓瑜の十住心論愚草三十八卷、同十住心論枢毛鈔二十五卷、其他數部あり。
◎空海は本邦眞言宗の開祖なり。讃州多度の人、十五歲の時上洛して博く群書を學び、十八歲序に入り三敎指歸を作る。弱冠にして勃操に從つて出家し大小二乘を學習す。延曆十三年入唐し歸國の後は、朝廷の崇仰頗る厚し。弘仁七年伽藍を高野山に創立し金剛峯寺と名く。同十三年平城上皇海に就て灌頂を受け給ふ是れ帝者灌頂の始なり。承和二年乙卯(一八四九五)三月入寂す。享年六十有二。其の著す所、一百四十餘部二百二十餘卷あり。延喜二十一年辛巳(一九〇一)弘法大師の諡を被賜せらるゝ。

ひむろもり
非無漏毛理　四帖　池田　正式
俳諧の集「毛吹草」を主に評論したるものなり。門人の其の雜句を問へるまゝにて、詳細に俳意俳諧を論じ、同集を評論したり。正保三年丙戌(一六四六)著者の來記あり。
◎池田正式の傳は「玉海集」の下にあり。

ひめかゞみ
比賣鑑　三十一卷　中村　欽
通俗親切なる婦道敎訓の書なり。其の述意は大概朱子の「小學」に法りてそれを敷衍し、卷一より卷十二までを述言、卷十三以下を紀行とし、訓言と實行との符合せんことを期し、更に立勞明倫敬身等と細項を分ちたるも「小學」に準據したるものと知るべし。寛文元年辛丑(一六六一)の自序、貞享四年丁卯(一六八七)伊藤子勝の序あり。
◎中村欽の傳は「講學筆記」の下にあり。

ひめじまかう
比賣島考　一卷　大倉　重威
豐後國姬島に就ての考證なり。文政八年乙酉(一八二五)の作、天保三年壬辰(一八三二)の自序その他あり。末に藤原重名の「姬島のかうがへを見て詠める長歌」を附せり。
◎大倉重威は豐後國杵築藩の人にして小串仙助と稱す。

ひめぢじやうのづ
姬路城之圖　木一舖
播州姬路城の、位置要害內外建築等を詳圖したるものなる大繪圖なり。

ひめぢばんふくしう
姬路藩復讐　木一卷
天保四年癸巳(一八三三)十二月二十六日、酒井雅樂頭家來、由本三左衛門といふもの、爲藏といふものに切害せられたるを恨み、その嫡子、叔父九郎左衛門と共に同六年七月、江戸神田橋にて首尾克復讐なしたる事實の口上書類を輯錄す。「輪池叢書」の第二十一に收む。

ひもかがみうつし
ひもかがみうつし　一卷　市岡　猛彥

本居宣長の「てにをは紐鏡」の「は、も、徒」「そのや、何」「こそ」の三係結を一冊子に綴り直して、下に俗語を添へたるものなり。享和四年甲子(一八〇四)の作にかゝる。

◎市岡猛彦の傳は「雅言假字格」の下にあり。

ひもかがみなかのこゝろ
紐鏡中能心　三卷　太田　豐年

本居宣長の「紐鏡」を註釋詳解したるものにて、末に同書の本文をも掲げたり。仁孝天皇の嘉永元年戊申(一八五〇)鈴木重胤の序あり。著者太田豐年は淡路國の人なり。

ひもかがみばうちうかう
紐鏡傍註考　一卷　横澤　飲河

本居宣長の「てにをは紐鏡」に略註を加へたるもの。附錄あり、「詞の玉緒」より抄出して、うごかぬ辭にて結ぶものを列擧せり。それは「てにをは紐鏡」に載せざりしものなり。今見るところは文化十三年丙子(一八一六)の寫本なり。

ひもろぎしよせつならびにひやう
神籬諸說並評　一卷　谷　垣守

神籬の事につき、五鼇翁と問答したるものなり。卷末に、「此書谷丹四郎垣守問而五鼇翁答之也、間目者多略之。于時享保十二年丁未(一七二七)九月二十日也、岡田躬齋」とあり。

◎谷垣守の傳は「臣子弟のわきまへ」の下にあり。

ひもろぎのまき
神籬卷　一卷　神門　守臣

諸家に祕傳とせる神籬傳を取り出して神道王道の事、幽事顯事、內外尊卑の別等を詳解したるもの。嘉永三年庚戌(一八五〇)神門守手の跋、同四年癸世聰の跋あり。著者神門守臣は出雲の神官にて中村氏なり。

ひもろぎはんきやうもんもく
神籬磐境間目　一卷　谷　垣守

神代卷の「高皇產靈尊敕曰吾則起樹天津神籬及天津磐境當爲吾孫齋奉」とあり。神籬磐境の事につき、古今の諸抄を引き五鼇翁に問ひ訂したるものなり。享保九年甲辰(一七二四)及び丁未、壬子、癸丑等の問答なり。

◎谷垣守の傳は「臣子弟のわきまへ」の下にあり。

びやうをかやまがくかうのき
備陽岡山學校記　一卷

寬文六年丙午(一六六〇)より、元祿十三年庚辰(一七〇〇)に至る、備前國岡山藩黌の沿革雜事を記したるものなり。

びやうかしゆち
病家須知　八卷　平野　重誠

瘍藥、攝生、看護、食物能毒等に關する萬般の事件を網羅し、通俗詳細に記述して家庭の用に備へたるもの。一名を「病家意得草」又は「ことふき草」と云ふ。就中七八の兩卷は「塵褒必研」一名「とりあげばば心得草」二卷を合刻し二書一部八卷として發刊したるなり。卷首に天保二年辛卯(一八三一)一部八卷の要領を提示するの文あり。「塵褒必研」の初めには文政十三年庚寅(一八三〇)に記したる端書あり。天保三年壬辰二書を合刊す。

◎平野重誠の傳は「一夕醫話」の下にあり。

びやうかふ
尾陽家譜　卷二卷　儀野　本孝

亞相襲直より、黃門齋朝に至る一族の詳細家譜也。著者儀野本孝は尾藩の士にして長右衞門と稱す。

びやうかんちやうご
病間長語　三卷　井上　純卿

病間に口授して門人子弟をして筆記せしめたる醫筆體の雜記なり。其の記すところは、先進の心術、後輩への敎訓、學者の出處等に關係する事件なり。近刊「溫知叢書」の第十一編に收めらる。

◎井上純卿の傳は「易學折中」の下にあり。

びやうき
備陽記　二十卷　石丸　定良

本書は備前國の地誌にて、享保年間の作にかゝる。

ひやうきのさがき
評議拔書　卷一卷

寬政七年乙卯(一七九五)町奉行坂部能登守より何濟の上、年限にて新吉原町風儀改正の觸書を抄出したるものなり。

ひやうぎものさためちやう
評議物留帳　卷百二十四冊

當藩府評定所より引繼さて、今內閣文庫に保存せ

るもの。寬曆十一年辛巳(一四二一)より、嘉永二年己酉(一八四九)に至れり。各一冊は頗る浩瀚にして、他の書冊と同一視すべきにあらず。

ひやうぐらうく
萍遇錄　卷二卷　僧　大典

寬永元年甲申(一六二四)朝鮮信使南秋月、成龍淵、元玄川等と會見したる時の筆談及び彼我贈答の詩文等を集輯したるものなり。

◎大典の傳は「柿本人丸事蹟考」の下に在り。

ひやうぐさつき
兵具雜記　卷一卷

鉢卷、梨打烏帽子、甲之役、釉注、鎧直垂仕立、幕、幔幕、扇、團子、太刀刀寸尺の事等を圖說せり。「續群書類從」卷七百〇五、武家部第五十一に收む。

びやうくちやう
尾陽句帳　二冊　岡村　不存

著者の俳諧集。名古屋にての作にかゝる。編述の年月日は未だ詳ならず。

◎岡村不存は朱琢門の俳人にして、一柳軒と號し、江戸に住せり。元祿四年辛未(一六九一)四月九日歿せり、年六十餘。

ひやうくわまんびつ
萍華漫筆　二卷

江戸近代の事歷を輯記したるもの。上卷に生司並廓說、五十間道切手、湯屋自筆文、大盡舞自筆、塔婆染形圖。遊女古證文雲井雅文簿、同原の樂書、下卷に寬文細見圖、湯女勝山事績、酉之町事績、自休印籠圖、夢市郎兵衞說、半鐘入右衞門自筆、助六事績、三圍雨乞之說、譬久八事績、髮洗橋事績等なり。著者は「江戸桃華園」と記せり。

ひやうぐんき
肥陽軍記　卷八卷

龍造寺氏の興廢を詳記す。家系及び山城守隆信、大內義隆、大友宗麟と戰爭事績より、山城守隆信、大內の願末より、天正十二年甲申(一五八四)島津中務少輔豐久と、島原に合戰して隆信自殺に及ぶまで凡四十條に記せり。入卷四册に寫傳せり。

びやうこくし
備陽國志　卷十三卷　和田　正尹

備前國岡山藩領內の地理、沿革、風土、勝蹟、土產等を詳記したるもの。備前の全國と、備中の內、窪屋、下道、加夜、都宇、淺口の五郡に渉れり。卽ち卷一に凡例總國、行程、山川。卷二に岡山府。卷三に備中の內岡山領、已下卷四に備前國御野郡。卷五に同國津高郡等と備前國八郡とを別記。卷六より卷十二に備中の〔二三九七〕の夏、藩命を受けて、落命を致せり、年六十餘。

びやうくわまんびつ
萍華漫筆　二卷

江戸近代の事歷を輯記したるもの。上卷に生司並廓說、五十間道切手、湯屋自筆文、大盡舞自筆、塔婆染形圖。遊女古證文雲井雅文簿、同原の樂書、下卷に寬文細見圖、湯女勝山事績、酉之町事績、自休印籠圖、夢市郎兵衞說、半鐘入右衞門自筆、助六事績、髮洗橋事績等なり。著者は「江戸桃華園」と記せり。

びやうぐんき
肥陽軍記　卷八卷

龍造寺氏の興廢を詳記す。家系及び山城守隆信、大內義隆、大友宗麟と戰爭事績より、山城守隆信、大內の願末より、天正十二年甲申(一五八四)島津中務少輔豐久と、島原に合戰して隆信自殺に及ぶまで凡四十條に記せり。入卷四册に寫傳せり。

びやうこくし
備陽國志　卷十三卷　和田　正尹

備前國岡山藩領內の地理、沿革、風土、勝蹟、土產等を詳記したるもの。備前の全國と、備中の內、窪屋、下道、加夜、都宇、淺口の五郡に渉れり。卽ち卷一に凡例總國、行程、山川。卷二に岡山府。卷三に備中の內岡山領、已下卷四に備前國御野郡。卷五に同國津高郡等と備前國八郡とを別記。卷六より卷十二に備中の〔二三九七〕の夏、藩命を受けて、落命を致せり、年六十餘。

◎和田正尹は備前岡山の人にして、字溫と字し、獺兵衞と稱し、雪窗と號す。學を穀齋に受け、享保元年岡山藩に俸祿を受けて、國學直講となり、十一年諸生敎授となり、十六年新に食邑を得て副監となる。日夜經傳史子を研究し、學德共に稱せらる。元文四年己未(一七三九)六月、五十五歲にて歿す。

ひやうごつきじまものがたり
兵庫築島物語　一卷

往時清盛が帝都を福原に遷さんとするに、其の地一條より五條までにて、餘地なければ、海を埋め地を築きて擴張せんとしたる時の物語を記し、此の島末松王入水の所にて松王來迎の所といひ來迎寺〔また築島寺〕といふ寺あり。此の寺に參詣するものゝために土人が發行したるものなり。

ひやうごめいしよき
兵庫名所記　二卷　植田　下省

上卷に兵庫より東北五里內外の名所古蹟を詳記し、下卷に西南の方播磨兩國の境川まで凡そ二里內外のことを紹介せり。東山天皇の寶永七年庚寅(一七一〇)發生山口某の序及び自跋あり。二卷一冊に版行せり。

びやうざつき
尾陽雜記　卷十冊

尾張國地誌にて、第一册に熱田太神宮白鳥宮の事より、諸郡の神佛名を擧げ、第二册に熱田七社より政秀寺の緣起及び軍日記に至り、第三册に國名風土の事より、山口修理の系圖に至り、第四册に狩野、工藤其の他の系圖より諸家古文書に及び、第五册に荒子觀音の來由より、清正の傳に至り、第六册に豐城主の事より、相州藤澤堀田正成院擧阿碑銘に至り、第七册智多郡宮山城の事より、貞享三年丙寅秋名古屋町名改革の分を記すに及び、第八册慶長十三年八月德川二代將軍判の寫より、京都三十三間堂矢數目錄に及び、第九册智多郡智多の名義より、尾州生死川譏談橋の來由に及び、第十册天正十年六月二日信長父子の弑せられし異說、長久手合戰始末等より、蟹江城攻の事等に至る雜記なり。作者詳ならず、部類門目卷數等を掲げず。

びやうじしやし

尾陽寺社誌　寫本七册

尾陽城下なる社寺を列擧したるものなり。間々緣起を記せるもあり。社寺より差出したるものにて、俗文のまゝを編輯す。

びやうしちやうがふき

尾陽視聽合紀　寫本五卷

仁の卷に尾張風土、和名、神名、土產、鍛冶、古書、志波系、阿野系。義の卷に熱田、神宮寺、晉願寺。禮の卷に旅店、熱田宿、大宮司系譜、熱田寶物、夢想觀音、庚申、宮部天王、笠寺觀音、山口系。智の卷に熱田七社、井戶田八幡、龜井道場、中根城、楠根、羽黑、八幡林、赤目、中島、小田井、松原島、淸須、杉原、遠藤系、一柳系。信の卷に津島、勝島一宮等の事を雜記したるものなり。

びやうしやうまんぴつ

病床漫筆　寫本一卷　荒木田久老

「槻の落葉信濃下向漫錄」と內題して、享和元年辛酉〔二四六一〕信濃に下向し善光寺に病臥中隨筆したる考證物なり。莫囂圓隣の歌の訓、多鷄蘇香、波太禮、かきつばた、三諸就、菜國人、あくがれ、歌の風體の論、詞に近古なき論、おかしなかしの假字、犯の假字、臨時大祓建禮門にて行はるゝ明證、海河に越といふ例、淸濁音便、ころもでの大分青駒、神風のいせ、いもが髮、あられふり、しきもあふやと、やきだちの、たくぶすま、こも枕、あまざかるひな、みけむかふ、箸むかふ、阿元、しだ、中やま、中まな、山どりをろのはつを、かまけ等を考說す。本書は單に「信濃漫錄」として行はるゝもあり。

◉荒木田久老の傳は「萬葉考槻の落葉」の下にあり

ひやうすゐわかしふ

萍水和歌集　寫本二十卷　下河邊長流

諸家の和歌一千首を輯め春夏秋冬戀雜に分類したるもの。其の自序中に、九年前に集めたる「林葉累塵集」に漏れたるを拾集せよとの、人の勸めもあればとて、これを集め、連歌師心敬、宗祇、弄花老人等の歌までを拾ひ加へて千首を得二十卷に作るよしをいへり一册に寫傳す。

◉下河邊長流の傳は「枕詞燭明抄」の下にあり。

ひやうたじるゐせう

平他字類抄　寫本四卷

諸事物を類擧して、各下平字と上聲、去聲、入聲等の字をいろは順に列集したるものなり。最も古本にして、後世の節用集類の權輿なるべしといふ。嘉慶二年戊辰〔二〇四八〕十一月二十三日、書寫の奥書あり。

ひやうちやうしへん

評廳紙片　寫本一卷

評定所にての、「一座へ御渡被成候御書付」「一座へ相談の上相究候御書付並に當用大概」等を、安永四年乙未〔二四三五〕二月拔抄したるものなり。

ひやうぢやうしよおぼえがきしよこくぐんつけたりれいしよ

評定所覺書諸國郡附例書　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せり。寬政九年丁巳〔二四五七〕のものたり。

ひやうぢやうしよおぼえがきつゐか

評定所覺書追加　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、寬政三年辛亥〔二四五一〕より、文久二年壬戌〔二五二二〕に至る。

ひやうぢやうしよくじさいきよならびにふさんなまへちがひぎんみ

評定所公事裁許並不參名前違吟味　寫本六册

幕府評定所より引繼ぎて、內閣文庫に保存せり。文化十年癸酉〔二四七三〕より、天保三年壬辰〔二四九二〕に至る。

ひやうぢやうしよごせんぎものとりはからひ

評定所御詮議物取計　寫本二册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、享和元年辛酉〔二四六一〕のものなり。

ひやうぢやうしよしきじつたちあひかきとめ

評定所式日立會書留　寫本一册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、享保元年丙申〔二三七六〕のものにかゝる。

ひやうぢやうしよそのほかさうだんもの

評定所其外相談物　寫本二册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せる者にして、文化六年己巳〔二四六九〕より同十年に至る。

ひやうぢやうしよならびにおやくたくにおいてごせんぎもの

於評定所並御役宅御詮議物　寫本二册

幕府評定所より引繼ぎたるものにして、天明年度より、慶應年度に至る。內閣文庫に保存せり。

ひやうぢやうしよはりがみちやう

評定所張紙帳　寫本七册

幕府評定所より引繼ぎて內閣文庫に保存せるものにして、年度不詳に屬す。

びやうどうゐんこづ

平等院古圖　寫本一鋪

山城國宇治の平等院の古昔の大略を圖したる大繪圖なり。

びやうねんぢうぎやうじせう

尾陽年中行事鈔　寫本十二卷　小島廣林

社寺の緣起、祭禮、行事、故實等を記載す。卷の一より卷の五までを春の卷と稱し、卷の六より卷の八までを夏の卷、卷の九、卷の十を秋の卷、卷の十一、卷の十二を冬の卷とし、月日を擧げ、事實を錄し、郡村名を註せり。卷末に國中社寺參詣の案內を附錄す。明和六年己丑〔二四二九〕橫井時文の序あり。著者小島廣林は尾張の人、名古屋の藩士なり。

ひやうはんきせう

兵範記抄　寫本一卷　平　信範

著者の日記「兵範記」中の一部を抄出したるものなり。全書の內外は「兵範記」の別名「人車記」の下に見るべし。

びやうぶぎざつだん

備陽武義雜談　寫本三卷　熊澤　伯繼

備前の國初以來、元祿年間までの大小事實を輯錄し、八十五箇條に分ち記せり。

◉熊澤伯繼の傳は「孝經外傳或問」の下にあり。

びやうぶぐわづのき

屏風畫圖記　寫本一卷　住吉　廣行

文化六年己巳〔二四六九〕朝鮮使對馬まで來聘の筈なるより、其の國に遣すべき屏風の繪を命ぜられたれば、其の故實考證を詳しく假名文に記したるものなり。同五年の作にかゝる。

◉住吉廣行は柳營繪所內記廣通の第五代にして同じく住吉內記たり。文化八年辛未〔二四七一〕、五十七にて歿す。

びやうめいぞくかい

病名俗解　寫本一卷　名古屋玄醫

漢法病名を擧げて、これをいろは順に列れ、其の一一を易說俗解したるものなり。全書七十餘枚に寫本せり。

◉名古屋玄醫の傳は「丹水子」の下にあり。

びやうよひやくぜつ

病餘百絕　一卷　木村　溫

著者の絕句百首なること名の如し。嘉永四年辛亥〔二五一一〕豐民の序、長澤亨、田口克の序、坂福、秋葉誠等の跋あり。

◉木村溫は越後の人にして、士貞と稱し、觀旭軒と號す。本書の外に「觀旭軒文稿」の著あり。

ひやくゐんじちう

百韻自註　寫本一册　安原　正章

著者の俳諧百韻に、自ら註解を加へたるものなり。寬永十九年壬午〔二三〇二〕二月の述作にかゝる。

◉安原正章の傳は「片言」の下にあり。

ひやくゑいわか

百詠和歌　寫本二册　源　光行

自詠二百四十首を撰びて註說したるもの。漢土の詩句に對照するもの多し。元久元年甲子〔一八六

四)の自序あり。十二巻病中の錄なる由を云へり。

◎源光行は經基王九代の孫右兵衛尉季遠の三男にして、武部丞親行の父なり。仕へて正五位下に敍し河内守兼大監物に任ぜらる。和歌を好みて其の技に長じ、其の作千載集にも入れり。歌を以て後鳥羽上皇の寵遇を被れり。承久の亂、官軍にあり、誅すべかりしのところ、子親行の嫌介に哀訴して、其の死を免れしこと「吾妻鏡」の承久三年辛巳(一二二一)八月二日の條に見えたり。

ひやくかいづせつ

百介圖說　本一巻

介類二百品を圖說したるものなれども、著者年代ともに詳ならず。

ひやくかきかうでん

百家琦行傳　五巻　八島　春信

名題の如く諸家の奇行逸話を輯錄す。澁井智明、笹岡市正、天嶽乳平等より、行水政右衛門、有難與一兵衛に至る凡そ五十名を擧げ畫圖を入れて記したり。仁孝天皇の天保六年乙未(一八三五)の自序を附したり。

◎八島春信の傳は「狂歌奇人譚」の下にあり。

ひやくかしゆげいろく

百家種藝錄　本五巻　猿子　惟常

全編を三要六類に分類して、百家種藝の要務を詳述したるものなり。寛政九年丁巳(一七九七)の著にかゝる。著者猿子惟常は近江の人にして、偕首山人と號せり。

ひやくかせん

百歌仙　四冊　元岳

諸家の俳句を編輯したるものにて、東山天皇の元祿十六年癸未(一七〇三)京都の俳諧書林井筒屋庄兵衛方より版行したるもの。著者元岳は大阪の人なり。

ひやくかでうきろく

百箇條記錄　本二巻

德川氏時代に於ける典刑百箇條を記錄したるものなり。

ひやくかるゑふ

百家類葉　二巻

諸家の歌を撰集したるものなり。

◎富士谷成元の傳は「百人一首燈」の下にあり。

ひやくきくふ

百菊譜　二巻

正德以來の菊花の種類を集め一々圖譜着色して敍撰集その他諸大家の集中より、一首二首宛の歌をとり出でて揭げたり。享保二年丁酉(一七一七)頃に至る採擇にかゝる。享保十九年甲寅(一七三四)大曾正道恕の序その他來、同十九年甲寅(一七三四)頃に至る採擇にかゝる。享保二年丁酉(一七一七)頃に至る採擇にかゝる。享保十九年甲寅(一七三四)大曾正道恕の序その他出版す。同辛丑(一七四一)大曾正道恕の序その他出版す。同辛丑(一七四一)大曾正道恕の序その他の跋等あり。

◎狩野派畫家は狩野派の畫人にして、或は梁川に作る。名を信政といひ、外記と通稱す。

ひやくくわそんしんづ

百花存眞圖　一巻　坂本　純澤

漢土の藥草を集めて圖說したるものなり。天保二年辛卯(一八三一)出版す。

◎坂本純澤の傳は「醫譜」の下にあり。

ひやくくわちうふ

百花蟲譜　本一巻

多くの花卉蟲類を擧げて圖譜したること名の示すがごとし。

ひやくくわさう

百花草　本一巻

靈上行事のいろは歌、敏雨の松島碑文、雪中庵蓼太の五月雨の發句詩等より、文歌、連俳等を雜輯したるものなり。

ひやくきやかうのづ

百鬼夜行之圖　本一軸　土佐　光起

百鬼の彩色圖なり。東京帝國大學圖書館に貴重品として所藏す。萬延元年庚申(一八六〇)尚立齋の所藏せる由を記せり。

◎土佐光起は、土佐家の畫家光則の男なり。壯年泉州堺にありて、畫法を祖父光吉の門人某に就きて學び、また先代の名畫を模ひ、和漢諸名家の法をも兼修して、遂に斯道の大家となり、名、海內に著れ、光長、光信と共に、土佐家の三筆と稱せらる。官に就きて叡所預となり、從五位下左近將監に任ぜられ、後薙髮して法眼に敍せられ常昭と號す。元祿四年辛未(一七三一)九月二十五日、七十五にて歿す。尚其の名畫の遺れるもの少なからず。

ひやくくわづさん

百花圖纂　一巻　坂本　純庵

草木百花を着色圖譜したるものなり。嘉生圖は男純澤の筆するところなりと云ふ。天保四年癸巳(一八四九三)の著、同五年刊行す。著者坂本純庵は、坂本浩然の父なり。

ひやくくわてう

百花鳥　五巻　藤原　守範

桐鳳凰、孔雀、磐梨鸚等より、辛夷木兎、枇杷鶫等に至る、花鳥圖百種を集め、其の畫法を簡單に說明したるもの。享保十三年戊申(一七二八)の自跋あり。翌年出版す。

◎藤原守範は上野の人、石仲子と號す。狩野探雪の門人なり。

ひやくくわばいやうかう

百花培養考　本一巻　阿部　蔦翁

和漢洋の花卉百種を集め、各形狀、栽培法等を記したるもの。仁孝天皇の弘化三年丙午(一八四六)の著なり。

ひやくくわんさうたうりやく

百官相當略　本一巻　大塚　嘉樹

親王四階、一品より四品に至る、諸王十四階、正一位より、從五位下に至る、諸臣三十階、正一位より、少初位下に至る各相當官名を擧示したるものにして、插圖四枚の寫本に成る。

◎大塚嘉樹の傳は「菁梧園筆記」の下にあり。

ひやくくわんさんくうづ

百官表圖　一鋪　近藤　篤

神祇官、太政官、八省、諸職、諸衙、諸司その他の諸官の次第、正從の分、女官雜官、僧官、院關白家執事實司等に至る表圖なり。

◎近藤篤の傳は「四遊館詩集」の下にあり。

ひやくくわんりやく

百官略　本一巻

北畠親房の著「職原鈔」の目錄にして、末に「弘安禮節」の書札禮事を模寫し載せたり。

ひやくくわんわひせう

百官和祕抄　本一巻

百官の職限を略說したるものなり。天正十三年乙酉(一五八五)正三位清原朝臣賢入道、陽白秀吉へ進獻する由を奥書せり。「續群書類從」卷二百四十四、官職部第一にあり。

ひやくこうくわんづう

百工貫通　本一巻

大工、家根職、塗工、石工、瓦工、鍛冶、建具匠、桶匠、船匠等の工、錢割付法を略記したるものなり。文化七年庚午(一八一〇)の作にかゝる。著者坂場與藏は水戸藩の普請奉行なり。

ひやくこうひじゆつ

百工祕術　三巻

智工、器工、食工、磁工、雜工の五門に分ちて、諸術の便法な雜記したるものなり。享保八年癸卯(一七二三)編輯す。著者の名は、「兼帶齋山郭」と署名せり

ひやくごじふばんくわはせ

百五十番句合　一巻　生白堂

蓼太と吐月との同題の發句を組み合せて一冊となしたるものなり。生白堂書林明和元年甲申(一七六四)に編輯す。

ひやくさいまんろく

百際漫錄　本一巻　小澤　埜美

著者の聞見雜事一百〇九則を漫書したるもの。漢文にて記す。

◎小澤埜美のことは「精斧文抄」の下にあり。

ひやくさうろ

百草露　本二十二巻　合弘堂偶齋

著者の考證雜錄にて數百項あり、地理、歷史、記傳、詩歌、古物語その他等類を分たず雜載せり。別に一册の目錄を附し、凡て二十三册に寫傳す。

ひやくさんじふばんうたあはせ

百三十番歌合　本一巻

承明院小宰相、俊成通忠、實雄、公基、爲經、信實、雅光、道成、有教、師繼、雅忠、蓮性、爲氏、經朝、その他の百三十番歌合なり。

ひやくしやういまがはじゆんじやう

百姓今川雅狀　一巻

今川了俊の「今川狀」に倣ひて、農家敎戒の事項を

記したるものにて、題頭には占候諸法を掲ぐ。文久三年癸亥(二五二三)二月の再版なり。

ひやくしやうかしよくげん
百姓稼穡元　寫本七卷

田賞百姓之事、種撰方の事、蒔拵方之事、鋤鍬之事、代掻之事、牛馬之事、三拜祭之事、田植式禮之事、田賞諸道具之事、七草之事、八拍之事、以上十一綱に分ち、更に細目を設けて、その起源典故等を記述せり。天明寛政頃の作なるべしといへり。

ひやくしやうしんえい
百將新詠　二卷　影田　隆恵

和漢古來の英將百人を詩に詠じたるもの。上卷は日本人にして素盞嗚尊、道臣命、大彦命等より、柴田勝家、豐臣秀吉等に至り、下卷は齊太公、司馬穰苴、范蠡等より、徐達、常遇春等に至れり、天保十一年庚子(二五〇〇)の自序、古賀煜の題詩、嘉永四年辛亥(二五一一)大槻磐溪の序、同年昌谷碩の序、同戊申歳安積信の序、同年菊池桐孫の題詩、釋孝信の題詩、仁孝天皇の弘化二年乙巳(二五〇五)齋藤馨の跋等あり。
◉影田隆恵は仙臺の人にして、同藩世子の侍讀たり。可久と字し、蘭山と號せり。

ひやくしやうでん
百將傳　二卷　林　道春

古今の名將百人を撰びて肖像を掲げ、内に「本朝有像百將傳」と題せり。
◉林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

ひやくしやうでんき
百姓傳記　十五卷

卷一四季集、卷二五常、卷三地性論、卷四屋舗取善惡樹木集、卷五農具小荷駄名揃、卷六不淨集、卷七坊水集、卷八苗代百首同抄、卷九田耕作集、卷十麥耕作集、卷十一五穀雜穀品々耕作集、卷十二蔬菜耕作集、卷十三水草集、卷十四萬糧集、卷十五庭場道具、麻機道具名揃となし、四時の運行、土質の鑑別より、農具及び肥料の各論、穀菜の耕種、扶食貯藏の事までを詳論す。元祿比の作なるべしといふ。

ひやくしやうとくかうはうかん
百姓德行寶鑑　寫本一卷　熊谷權四郎

勸儉力穡の要を述べたるものなり。寶暦十一年辛巳(二四二一)地方役なる著者が、其の治下の農家に訓示するところなり。

ひやくしやうにちようくん
百姓日用訓　一卷　松江　鱸

農家の注意要件を敍述したる小册子にして、安永二年癸巳(二四三三)水戸の書肆より版行す。

ひやくしやうみもちのこと
百姓身持の事　寫本一卷　板橋善右衞門

五人組の條例、土民家持の事、田畑耕作、旱損水害、その他農家の心得に關する事項を多く輯錄せり。天保二年辛卯(二四九一)の編にかゝる。著者板橋善右衞門の傳は詳ならず。

ひやくしやうわうらいほうねんぐら
百姓往來豐年藏　一卷

農家日用の雜事を敍述したるものなり。明和三年丙戌(二四二六)出版す。

ひやくしゆいけん
百首異見　五卷　香川　景樹

小倉百人一首の精細なる註釋なり。契沖阿闍梨の「百人一首改觀抄」、賀茂眞淵の「百人一首初學」等の舊説を擧げて評訂取舍し、著者の創見を以て詳明なる註解を施したるなり。文化十二年乙亥(二四七五)十二月著者の奥書あり。
◉香川景樹の傳は「桂園一枝」の下にあり。

ひやくしゆいけんもんだふ
百首異見問答　一卷　山本　昌敦

香川景樹の「百首異見」中なる、ながくし夜の詞と、田子のうらゆの詞とにつきて、從四位下荒木田久守の難駁を、著者の答辯したるものなり。享文政元年戊寅(二四七八)にかゝる。

ひやくしゆしいか
百首詩歌　寫本一卷

歌には職仁、光胤、實積、爲村、雅香、その他。詩には榮親、資望、家長、隆英、宣條その他等にて、詩歌各百首を列載せり。

ひやくしゆしだいきゝがき
百手次第聞書　寫本一卷

「伊勢弓馬叢書」の中の一書にして、同故實二十九條を寫せる五枚の册子なり。武田の記たる由の奥書あり、寛政四年壬子(二四五二)伊勢貞春の奥書もあり。

ひやくしゆしやてき
百手射的　寫本一卷

百手射的の由來方法等を略説す。「弓術祕傳書」の中に收む。

ひやくしゆせいかい
百首正解　三卷　杉庵　志道

定家の「百人一首」を詳解したるものなり。作者の略傳、解義の餘意等を頭書し、風景畫をも處々上欄に插めり、高松前宰相公祐の序及び自序あり。天保九年戊戌(二四九八)の出版にかゝる。
◉杉庵志道は古學者にして、火水與傳、水穗傳、祝詞正解、安房國勝景圖繪、萬葉集言撰、古今集言撰、旅駿の夢等の著あり。

ひやくしゆぜいぜい
百首贅々　一卷　中井　積德

定家の「百人一首」を詳註したるもの。自序中に「歌のこと知らぬもの、如何なるさがしらぞや、贅の上の贅ならめと、いとうとましきものから、さすがやきもやられすなむと是れ贅々と名けて、函の底に隱し」云々とあり、題意を知るべし。
◉中井積德の傳は「七經雕題略」の下にあり。

ひやくしゆぶるゐ
百首部類　六十二卷

「丹後守爲忠家百首」六卷、「寶治御百首」五卷、「名所百首」三卷、「正治後度百首」二卷、「正治院百首」三卷、「弘長百首」一卷、「白川殿七百首」三卷、「前寶治御百首」六卷、「龜山殿七百首」三卷、「嘉元仙洞御百首」七卷、「五社百首」三卷、「久安御百首」四卷、「永享百首」三卷、「延文御百首」十卷、「將軍家百首」二卷。以上六十二卷十五部を編輯したるものにて、別に一卷の目錄を附す。

ひやくじゆんしふ
百鶉集　寫本四册

詩歌及び雜文を輯めたるものなり。一册に仙洞御會始、公宴御會始、仙洞住吉法樂、仙洞當座和歌、一册に春信來(新年詩歌集)。一册に臨書。即ち萱兆昌の王文恪集序、閣亭眞蹟石刻朱之瑜の澄玄庵序。一册に宗鏡錄等を收めたり。

ひやくしよくもみぢしふ
百色紅葉集　一卷　伊藤伊兵衞

槭樹の種類の網羅して、各葉形を圖して解説したるものなり、處々友人の歌をも擧げたり。元文二年丁巳(二三九七)刊行す。
◉伊藤伊兵衞の傳は「廣益地錦抄」の下にあり。

ひやくせんきはふげんかい
百戰奇法諺解　寫本一卷　林　道春

李氏「武德全書」、章氏の「圖書編」等に載せたる百戰奇法、即ち軍戰川件百箇條を、假名文にて諺解したるものなり。羅山の奥書あり。
◉林道春の傳は「羅山文集」の下にあり。

ひやくせんせう
百籤鈔　一卷

慈惠大師が震旦國より傳へたりといふ、籤一百條を掲げ、吉凶禍福、萬事の勝敗進退等を記したる俗書なり。寶永五年戊子(二三六八)出版す。插入するところの畫は奥村政信の手に成れるものなり。

ひやくせんづ
百錢圖　一卷　中谷　顧山

古錢圖譜なり。天保六年乙未(二四九五)の自跋中に「此の書は弄錢初心の爲めに、錢文筆體世に多きもの百品を採り、又多少を別ちて五等に位を定む」云々といへり。
◉中谷顧山の傳は「孔方圖會」の下にあり。

ひやくせんてうそう
百川朝宗　寫本二册

我が全國諸川を記したるものにて、上册は上州上利根川に起り、相州鈴川に終り、下册は豆州岩科川より遠州中川に終り、各其の地誌源流等を記せり。享和三年(二四六三)鱸文(鈴木文左衞門)の奥書あり

ひやくせんふ
百泉譜　寫本一卷

和漢の古錢を、公卿大夫士庶の五等に分ちて、年代を記入す。卷尾に錢考及び古戰祭の事等、若干條を雜記す。一名を「和華泉鑑」といふ。

ひやくだいしふえふ
百題拾葉　八卷　後水尾天皇

此の書は本名「一字御抄」の下に解題したり。

ひやくちんしふ
百椿集 本一巻　僧　策傳

慶長元和の比に於て、あらゆる椿の種類を網羅して、一々説明したるものなり。「續群書類從」巻九百四十、雜部第九十に收む。

◎策傳の傳は「醒睡笑」の下にあり。

ひやくつうきりかみ
百通切紙 四巻　僧　明傳

淨土教の安心及び行業を示したるもの。百條條の問答より成れり。間々採用す可からざる説ありと云ふ。延寶九年辛酉(一六八一)の著。著者明傳は備中小田郡笠岡淨心寺の僧なり。

ひやくてうづ
百鳥圖 二巻

種々の異鳥百種を着色生寫したるものなり。著者詳ならず。

ひやくにじっく
百二十石 五巻　山岡　恭安

見聞隨筆にて、一の巻に三世因果、高瀬宗大夫、吉田氏女、幽靈、神島漁夫。二の巻に古布龜女、大家惡想獄、小田圭殿、墓所靈驗、雷、天狗。三の巻に關ヶ原驛大火、大火定鎭、自鳴鐘、伊勢太神宮、木中文字、寄異古錢。四の巻に無名寄怪、河太郎、眞寶寺赤朱、轉變時世粧、幼兒閻目。五の巻に和漢一對、金がほしい、廣瀨裘九郎、地獄極樂等の目あり。西長(寛政八年歟)の自序に「士農工商の四民にあらず、儒者にあらず、佛者にあらず、勿論神道者にもあらず、只何と無き太平の御代の遊民、うからうからと七十年の月日を過し、一日五合飯りにして、勿體なくも百二十石の米を喰ひ潰して、何一つ仕出したる事もなき竹醉子といふ老人あり、もはや此の世の逗留も少しと思へるから、せめて天地への御奉公、百二十石の奧加と思ひつき、我よりも亦愚なる人の爲めに罪紙を費して一册の草子を作れり」云々といへり。寛政十年戊午(一七九八)京都にて出版。

◎山岡恭安は大伴氏にして、竹醉子と號す。本書の外に「本草正々謳」の別著あり。

ひやくにんいっしゅ
百人一首 一巻　藤原　定家

古今集以下、續後撰集にいたる十代の撰集に入れる歌を撰出したるもの。其日記「明月記」に文暦二乙未(一二三五)の頃、嵯峨の中の院の障子、色紙形に、歌かくべしと切に彼の入道の乞ほるゝまゝ智天皇以下百人の百首を書きて贈りたる由をいへり。世に先きに新古今集を撰したる時は、一人ならで意の如くならざりしより、こたびは獨り、意のまゝに撰定したりなどいへるも測度なるべし。本書は、中古の時より、今日まで世に噺さるゝこと多ければ從て註解のものなど多し。

◎藤原定家の傳は「拾遺愚草」の下にあり。

ひやくにんいっしゅ
百人一首 本一軸

藤原定家の「百人一首」を信海の自筆したる軸物にして、內閣文庫に、特別として藏せり。

ひやくにんいっしゅいっせきわ
百人一首一夕話 九巻　尾崎　雅嘉

定家の「百人一首」を詳解し、次に各撰者々々の事歷逸話を插書して記載したるものなり。畫は大石眞虎にして頗る見るべきもの。花園三位公雅卿の序、筱崎小竹の題辭、香川景樹の跋等ありて、天保四年癸巳(一八三三)新刻す。

◎尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下にあり。

ひやくにんいっしゅうびまなび
百人一首うひまなび 五巻　賀茂　眞淵

前著「百人一首古説」中の所々を削りなどして、名を「うひまなび」と改めたるよし明和二年乙酉(一七六五)の自跋にあり、天明元年辛丑(一七八一)十一月出版す。

◎賀茂眞淵の傳は「冠辭考」の下にあり。

ひやくにんいっしゅかい
百人一首解 一巻　栗本　瑞陣

百人一首の歌の詞中に更に詞を加へ記して、初學者の通解に便ぜり。寶暦六年丙子(一七五六)の自序あり。

ひやくにんいっしゅかいくわんせう
百人一首改觀抄 五巻　僧　契沖

百人一首の歌を解するに一種の見を以てして、古註に根據するところなし。考證最も精しく悉く古書に徵證ぜり。自序中に「下河邊長流、嘗て百人一首を註す、稿を綴りて未だ脫せずして卒す。予案より古を好むの癖あり、長流と同病相憐む。生が志業卒らざることを悲しみ、これが釋をつぎて、改觀と名づく」云々といへり。本書は契沖の歿後に樋口宗武風袋山と謀り、校訂添削し、延享四年丁卯(一七四七)序を附して翌年出版ぜり。

◎契沖の傳は「萬葉代匠記」の下にあり。

ひやくにんいっしゅかんそいき
百人一首函底記一 本一巻

百人一首の略記にて、巻首に定家の年譜を示し、享保十三年戊申(一七二八)卯月の奥書を附し、同十一月五日三位へ奉る歌を附したり。著者は申齋隆德として葛岡宣易の門人なりと。

ひやくにんいっしゅきせんせう
百人一首基箭抄 三巻　井上　秋翁

百人一首を註釋するに、祖父の遺書に基き、細川幽齋に就て「古今和歌集」の傳、及び歌道秘奥を受く。其後時々詠するところの歌は、皆當時に賞せらる。皆すところには和歌の鈔類、物語の註釋類あり。慶長十五年庚戌(一六一〇)三月、年五十三にて歿す。

ひやくにんいっしゅさがのやまぶみ
百人一首嵯峨の山ぶみ 三巻　齋藤　彦麿

定家の百人一首を、一句々々につきて註釋したるものなり。よく和漢古今の書に徵して考説す。裏題には單に「嵯峨の山布見」と題せり。文化十三年乙亥(一八一六)の自序あり。

◎齋藤彦麿の傳は「傍廂」の下にあり。

ひやくにんいっしゅさんあうせう
百人一首三奥抄 本二巻　下河邊長流

百人一首の各首を註して、作者の傳をなさず、傍註と、押紙の説とは契沖の加へたるものなり。享保十三年戊申(一七二八)の奥書あり。

◎下河邊長流の傳は「枕詞燭明抄」の下にあり。

ひやくにんいっしゅしせつせう
百人一首師説抄 本二巻　僧　祐海

百人一首の註釋。最初に各歌人の傳を列ねたり。巻末に「明歷四年(一六五八)仲春、吾立袖末第不動院法印祐海鈔之」と記せり。

◎祐海は、名を愚案といひ、枯蓮社信阿と號せり。

ひやくにんいっしゅしゅうかんそいき
百人一首函底記一 本一巻

江戸千日谷一行院の住職にて文才の人なりき。寛暦十年庚辰(一七六〇)正月二日入寂す。

ひやくにんいつしゆじだいせうしよ

百人一首時代抄書 一巻

百人一首のよみ人、各個の時代を調べ、文政六年癸未(一八二三)までの年数を示したるものなり。同年の作なること知るべし。

ひやくにんいつしゆしふするのせう

百人一首拾穂抄 四巻 北村 季吟

定家の「百人一首」を註釋すること精細なり。天和元年辛酉(一六八一)の著にかゝる。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

ひやくにんいつしゆしふするのせうほちう

百人一首拾穂抄補註 六巻 谷口 元淡

北村季吟の「百人一首拾穂抄」に補註したること名の如し。元文二年丁巳(一七三七)正月の自序ありて、延享五年戊辰(一七四八)正月刊行す。

◎谷口元淡は大和郡山の人にして、大雅と号す。北村季吟の門に入りて歌學を修業す。著書は本書の外に、補註祖徠學則問答あり。

ひやくにんいつしゆしふちう

百人一首集註 三冊 北村 季吟

此の書は一名「百人一首拾穂抄」の下に解題せり。

ひやくにんいつしゆしんせう

百人一首新抄 一巻 石原 正明

定家の「百人一首」を註釋せること名の示すが如し

◎石原正明の傳は「壬戌隨筆」の下にあり。

ひやくにんいつしゆせう

百人一首抄 一巻 長野美波留

定家の「百人一首」を註釋し、また他のよみ歌を合せたり。文政二年己卯(一八一九)の作にかゝる。

◎宮士谷成元は成章の男にして、一名を成善また光枝の門に入りて專ら詠歌を學び、業成りて教授に從ふ。著書は本書の外に徴古圖鉢、對照假字格、縣居雜錄標註、同補抄標註等あり。

◎長野美波留は江戸の人にして、藤原姓なり。大村家の門に入りて專ら詠歌を學び、業成りて教授せり。夙に國學和歌を好み、父の業を受けて、斯學に通ぜり。著書は本書の外に、百家部類鈔、古事記燈、詞葉新雅、同二編、百首鈔、山のひともと、假字訓義追考、歌袋、いれひも、北野家集、萬葉燈、北邊隨筆、歌道非唯抄、土佐日記燈等あり。文政六年癸未(一八二三)十二月十六日、五十六にて歿す。

ひやくにんいつしゆせう

百人一首抄 三巻

加藤盤齋の「真德頭書百人一首抄」の頭書と、其の巻首にかゝげたる七條の大意とを省きたるものなり。寛文三年癸卯(一六六三)四月版行す。

ひやくにんいつしゆそうざせう

百人一首宗祇抄 一巻 僧 宗祇

巻首には例の如く一書の大體を論じ、註は主として東野州の說等をあげたり。

◎宗祇の傳は「新蒐玖波集」の下にあり。

ひやくにんいつしゆちごのてびき

百人一首兒の手引 一巻 烏籠山人

小倉百人一首の歌ごとに、其の出處を示し大意を述べ、また傍に字を添へて歌の意を了解し易からしめたるものなり。

ひやくにんいつしゆのあかし

百人一首燈 二巻 富士谷成元

小倉百人一首の歌意を解明したるもの。巻首に總論一編あり。文化元年甲子(一八〇四)四月の著也。

◎宮士谷成元は成章の男にして、一名を成善また御杖とりひ、源吾また專右衛門と稱し、北邊と號せり。夙に國學和歌を好み、父の業を受けて、斯學に通ぜり。著書は本書の外に、百家部類鈔、古事記燈、詞葉新雅、同二編、百首鈔、山のひともと、假字訓義追考、歌袋、いれひも、北野家集、萬葉燈、北邊隨筆、歌道非唯抄、土佐日記燈等あり。文政六年癸未(一八二三)十二月十六日、五十六にて歿す。

ひやくにんいつしゆひなことば

百人一首鄙言 四巻 尾崎 雅嘉

百人一首を俗言俚語をもて解釋し、歌人傳等も諸書を引て廣く考說せり。

◎尾崎雅嘉の傳は「群書一覽」の下にあり。

ひやくにんいつしゆべんもうせう

百人一首辨蒙抄 二巻

百人一首を註して童蒙の解に供へたるもの。巻末に作者部類を附し、また謠曲をも拔載せり。

ひやくにんいつしゆまんえふ

百人一首萬葉 一巻

百人一首の註解なり。「萬葉集」「日本書紀」「續日本紀」等の文字を交へて歌を註したるより、萬葉の名は附したるなるべし。

ひやくにんいつしゆみねのかけはし

百人一首峯梯 二巻 衣川 長秋

定家卿の百人一首を平易に註解したるもの。文化三年(一八〇六)利部卿眞直、本居大平等の序あり。

◎衣川長秋は周防の人にして、瓊窗と號す。鈴廼舍門に學びて和歌に長じ、徒を集めて教授せり。著書は本書の外に、「田舍日記」、「耶都禮襲記」、「校正大同類聚方」等あり。

ひやくにんおよらうしなさだめ

百人女郎品定 二巻 西川 祐信

上は女帝皇后皇女より、下大原柴賀、百姓女房に至るまでの風姿を畫きたる繪草紙なり。古今女中の繪鏡草とならん事を願ふより、いろ品のたがひはあれど、凡百花に准じてすぐれま百人女郎と外題せる由、享保八年癸卯(一七二三)八文字自笑の序にあり。同年出版す。東京帝國大學圖書館に貴重書として所藏す。

◎西川祐信の傳は「祐信畫鑑」の下にあり。

ひやくはつちやうき

百八町記 四巻

儒者の妄りに佛教を罵詈するを戒め、儒佛二教の相戻らざるよしを、問答體に記したるものなり。

ひやくばのづ

百馬圖 一帖 黒澤 定幸

馬圖八十三種、牛圖十四種を彩圖して、名稱を頭書せり。正保年間の作なり。

◎黒澤定幸の傳は「相驅鑑」の下にあり。

ひやくはふもんだふせう

百法問答抄 九巻

佛教中唯識法相宗の法理教相を、百二十條の問題目を設け、通俗平易の漢文を以て記述したるもの。本書の作者に就て、古來興福寺學侶香雲房勝超、同寺西室西ノ座ノ法師少納言、同寺末院藥師寺唯憩、菩提院俗正等の諸說あれども、何れも定がならず。今は姑らく著者を未詳に附す。寛永九年壬申(一六三二)九巻、秀翁の「百法問答抄私考」十二巻、印融の「百法問答抄要解」十一巻、聞證の「百法問答抄私考」十二巻、印融の「百法問答抄要解」十一巻、聞證の「百法問答抄」を詳密に註釋考定したるもの。萬治年中(一六五八―六〇)の著也。

◎聞證は淨土宗鎮西派の僧、字は眞光、號は、京都の人なり。沙門皇覺に從つて出家し、又、空山東曜等に歷從せり、更に南都に趨きて唯識を盛源に學び、尙來諸方に遊寓し、頻りに講筵を張れり。其の著す所本書の外に、略述法相義三卷、三論玄義誘蒙三卷、成唯識論略解五卷、三外義略解三卷、大原問答辨釋一卷等三十餘部あり。元祿元年戊辰(一六八八)五月入寂す、享年五十五。

ひやくはふもんだふせう

百法問答抄 冠註 九巻

前掲「百法問答抄」に詳細なる冠註を加へたる者。

◎同書は「冠註百法問答抄私考」の要を摘錄して頭註したるものなり。延寶二年甲寅(一六七四)刊刻。同十九年訂正增補等あり。

ひやくはふもんだふせうしかう

百法問答抄私考 十二巻 僧 聞證

ひやくばんうたあはせ

百番歌合 一巻

寶德三年辛未(一四五一)八月十一日、雨中荻、秋夕情、松月幽、鹽屋煙、暮秋蟲、恩涙戀、契待戀、倶絶戀、旅宿夢、名所遠等の題にてよめる百番なり。沙彌祐雅判者たり。「群書類從」卷二百〇八、和歌部第六十三に收む。「寶德百番歌合」と題したる寫傳の單行本もあり。

ひやくばんうたあはせ

百番歌合 一巻

建保四年丙子(一二一六)閏六月九日の百番歌合にて、判者は藤原定家なり。「群書類從」卷百九十六、和歌部第五十一に入る。本書は「建保百番歌合」と題したる單行寫本もあり。

ひやくばんほつくあはせ

百番發句合 一册 北村 季吟

伏見四岸寺の住職任口上人の發句を批評したるも

のなり。近年發行の俳諧文庫第十四編「蒹葭堂鬼貫全集」の中にも收めたり。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

ひやくばんれんかあはせ

百番連歌合　本一冊　宗長

著者の百番連歌合にて、四三條公と、牡丹花との判にかゝる。永正五年戊辰（一五〇八）夢庵老人判の記を附す。

◎宗長の傳は「雨夜記」の下にあり。

ひやくひんかう

百品考　六冊　山本亡羊

本草綱目、救荒本草、府志等に據り、また著者の考察に據りて、動植物合計百種の釋名産地等を記したるもの。初編には天保九年戊戌（一八三八）男猶廢の序あり。二編は弘化四年丁未（一八四七）著者七十歳の時の作にて、第三編は嘉永六年癸丑（一八五三）の出版にかゝる。

◎山本亡羊は、京都の人にして、有名なる本草家小野蘭山の門人なり。

ひやくふじ

百富士　四卷　河村　眠雪

種々の方面より、また種々の場合に富士山を眺望したる圖を畧げ、和歌發句を一首づつ題したるもの。明和四年丁亥（一七六七）の自跋あり。

ひやくものがたり

百物語　五卷　桃華山人

古來俗間に傳說せる妖怪奇談を書き集めたるもの。

◎北村季吟の傳は「源氏物語湖月抄」の下にあり。

ひやくばんれんかあはせ

百番連歌合　本一冊　宗長

著者の百番連歌合にて、四三條公と、牡丹花との判にかゝる。永正五年戊辰（一五〇八）夢庵老人判の記を附す。

◎宗長の傳は「雨夜記」の下にあり。

ひやくひんかう

百品考　六冊　山本亡羊

本草綱目、救荒本草、府志等に據り、また著者の考察に據りて、動植物合計百種の釋名産地等を記したるもの。初編には天保九年戊戌（一八三八）男猶廢の序あり。二編は弘化四年丁未（一八四七）著者七十歳の時の作にて、第三編は嘉永六年癸丑（一八五三）の出版にかゝる。

◎山本亡羊は、京都の人にして、有名なる本草家小野蘭山の門人なり。

ひやくふじ

百富士　四卷　河村　眠雪

種々の方面より、また種々の場合に富士山を眺望したる圖を畧げ、和歌發句を一首づつ題したるもの。明和四年丁亥（一七六七）の自跋あり。

ひやくものがたり

百物語　五卷　桃華山人

ひやくものがたり

百物語　一卷　村井　由清

教訓絵入百物語

本書は「教訓百物語」として「け」の部に解題す。

ひやくもんだふ

百問答　十八卷　安國

著者見心と共に馬の痼の事を論じたる問答。

ひやくもんだふ

百問答　一卷　僧　香國

蹴鞠の作法に關する問答、凡そ百箇條を記したるもの。天文十五年（一五四六）著者書寫の奥書あり。

ひやくらうばのづ

百老婆圖　一鋪　養雲　惟章

老婆百人を圖して、四時の行樂を示す。或は兒孫を抱きて猿舞を見るもあり、蛺蝶を逐ひ、花を插し、猫狗を弄し、茶を喫し、話を催す等、實に眞に迫れり。德川幕千代君誕生慶賀に命じて寫さしむるところの眞筆なり。同幕千代の顯辭及び、跋、文化五年戊辰（一八〇八）史臣川口長孺命によりて作るところの序文等を掲げたり。帝國圖書館に貴重品として藏す。

ひやくらうばのづ

百老婆圖　一鋪　養雲　惟章

老婆百人を圖して、四時の行樂を示す。或は兒孫を抱きて猿舞を見るもあり、蛺蝶を逐ひ、花を插し、猫狗を弄し、茶を喫し、話を催す等、實に眞に迫れり。德川幕千代君誕生慶賀に命じて寫さしむるところの眞筆なり。同幕千代の顯辭及び、跋、文化五年戊辰（一八〇八）史臣川口長孺命によりて作るところの序文等を掲げたり。帝國圖書館に貴重品として藏す。

ひやくりようづしき

百龍圖式　一軸　嘉七

虹梁蜜龍、虹梁鼻陽龍、千譬木陽飛龍其の他凡て三十種、匠家模本の爲めに圖出したる龍の圖式なり。嘉永三年庚戌（一八五〇）著者の凡例あり。東京帝國大學に貴重書として藏せり。

ひやくれうくんえうせう

百寮訓要抄　一卷　二條　良基

北畠親房の「職原鈔」に倣ひて、官職の事を略記したるものなり。康正元年乙亥（一四五五）の奥書によれば、足利義滿の時に撰したる者なり。

◎二條良基の傳は「菟玖波集」の下にあり。

ひやくれうくんえうせうべつちう

百寮訓要抄別註　本十卷　大塚　嘉樹

藤原良基の「百寮訓要抄」を別註したるもの。天明四年甲辰（一七八四）の自跋に、「右一帖は百寮訓要抄の別註なり、然して本書に女官、內侍、司の名目未だ備らざるの三條ありはこれもまた後普光園院殿の御遺漏にや、また、後人の補ひ書せんとして事を終らざるにや、是非と可否とを考へ得ずと雖も、印本は卷末に是れを記し、他本も亦卷外に是れなき書せるあり、並に印本の卷外に僧侶官位の事少少其の名目ばかりを錄記せり。其の趣職原抄補遺に抄出せるものと粗ぼ又同じ。故に今件の內侍司の三條と僧侶官位の名目とを合せ、註して後に附し、卷外の一册となし、又屬するに勤位の名義、また年官、年爵、封戶、位田等の數目を加へて十一册となす」と云へり。詳細を知るべし。

◎大塚嘉樹の傳は「菩提圖罪」の下にあり。

ひやくれうわか

百寮和歌　本一卷　高木夫實無

攝政關白太政大臣以下、太宰帥六位等に至るまで、百寮の官名を歌によみたる歌集にて、凡て一百二十條集あり。

ひやくれんせう

百錬鈔　本十七卷

大治二（一一二七）比より、正元元年（一一五九）比に至る雜事を記したる記錄なり。本書は「國史大系」の第十四卷にも收めたり。該書は、嬉保己一の校本を原とし、金澤文庫本傳寫一本を以て訂正を加へたりといふ。

ひやくれんせうるゐへう

百錬鈔類標　本一卷

「百錬鈔」中記載の事實を、一々いろは順に排し、原書の丁數を記して搜索に供したるものなり。

ひやくろく

百錄　本三卷

文學史傳その他の見聞百事を雜錄考したる者也

ひやのしよ

火矢之書　本二卷

火矢の治革種類用法硝藥法等を略記したる傳書なり。"宮脇左馬尉家勝より、虎走彌兵衛尉眞次に口傳し、眞次より平山治大夫正勝に傳へたるもの、如し。本書は同人の綴るところにて、正保二年己酉（一六四九）八月の寫本なり。

ひやうろく

飛脈錄　本三卷　源　廣長

捕慳法より、相慳辨、歲放、收法及び治病法等に至るまで、精細に辨說す。後櫻町天皇の明和八年辛卯（一七七一）の序あり。著者源廣長は松前の人なり。

ひらゐけいづ

平井系圖　本一卷

宇多天皇より系を引きて、明曆三年丁酉（一六五七）卒去したる宗綱の子、清左衛門秀綱に至る數十系なり。"續群書類從"卷百三十四、系圖部第二十九に入る。

ひらいづみかうさう

平泉行草　本一卷　僧　香國

奥州平泉に行きたる時の日記なり。平泉は奥州の中央にして、名勝古蹟最も多き所なり。此の記は月日と里數と地名とを漢文に記せり。年號を記さず、只最初丁酉三月十八日出羽山より、同二十七日到松島に終れるのみ。

ひらいづみきうせきし

平泉舊蹟志　本一卷　相原　友直

奥州平泉の興廢舊蹟を詳記したるものなり。卷末に記して曰く、"盤井は予が祖先膽澤郡內の采地に併せて、宅地を國君より賜りし郡にして、先人の故鄉なり。村は平泉に隣りて赤萩と號す、故に予幼年頃より彼地に遊ぶことあまたたびなりしが、予山水の僻ありて、夙く靜地佳境を尋ね遊ぶ、常に平泉達谷の遺蹟を訪ふの日、其の地の記を案るにこれを得ることなし。於是古典舊記等に散見せし輯めて平泉實記を著し、又僧徒村老の口碑に求め、世父先人の譚話にもとづきて此の一册を草稿せり。實記に昔の盛衰を述べ、此の書は荒廢の今を交へ著す」云々と。其の大要を知るべし。寶曆十年庚辰（一七六〇）の自跋なり。

◎相原友直は陸奥國盤井郡篠谷の人にして、吳市と稱す。著す所は本書の外に、平泉雜記、平泉實記とあり。安永二年癸巳（一七七三）七十一歲なりしこと、平泉雜記の自序にあり。

ひらいづみざつき

平泉雜記　本二卷　相原　友直

奥州平泉に關する雜事を輯錄す。"平泉舊蹟志"の末文中に"又繁くして二書（"平泉舊蹟志"、"平泉實記"）に漏せし事、怪異にして兒輩の話に異ざるをも捨るに忍びず、別に三册となし、"平泉雜記"と名けて家僮に授く、此の二書を輯めんとして搜り集めたる草稿にして、別に力を用ひたるにはあらず"云々といへり。安永二年癸巳（一七七三）の漢文自序あり。今乾坤の二卷に寫傳す。

◎相原友直の傳は"平泉舊蹟志"の下にあり。

ひらいづみじつき

平泉實記　本十二卷　相原　友直

奥州平泉に關する古來の沿革興廢に關し、最も詳細に記述せられたる實記なり。文政二年己卯（一八一九）正月の序あり。十二卷、六册に寫傳せり。

◎相原友直の傳は「平泉落穂志」の下にあり。

ひらいづみじつろく
平泉實錄　本一卷

奥州平泉の沿革より、其の地境の名勝、古蹟社寺、城墟、館趾、山川、澤池、方位、故實等を詳記せり。平泉は往昔郡名なりしも、中古より村名と變革したれど、勝蹟最も多し。就中、藤原清衡、其の子基衡、其の子秀衡、父子三代鎮守府將軍として、高館を作り大に繁盛を極め、奥の御所とまで稱したる地なりと傳へたり。

ひらがきうけいじつき
平賀鳩溪實記　五卷　櫟齋老人

平賀鳩溪源内の一生を敍したるもの。卷一に源内幼年奇才、讃州退去、大阪にての評判、京都にて白人白絲へ馴染、三井八郎右衛門へ對面。卷二に宮士山へ登る條より凡て七條。卷三に七條。卷四に六條。卷五に五條、鳩溪喫辭の事に至る。光格天皇の天明八年戊申(一七八八)の自序あり。櫟齋老人の姓名を詳にせざれども、或は源内の門人故舊のものなるべし、本書は漫りに事實を附加して敷衍補張したるものなる由、先覺の說あり。「温知叢書」の第四編に收めたり。

ひらのぎやうかうしだい
平野行幸次第　本一卷

平野行幸の式を記したるものなるが、何時何人の記したるかを知らず、明暦四年戊戌(一六五八)林春齋の奥書にもその事を云へり。

ひらみづひき
平水引　一册　俳句

俳句の集なり。元祿五年壬申(一六九二)の編にかかる。著者登翁は大阪の人なり。

ひらやましざうしよもく
平山氏藏書目　本一册　平山　潛

平山兵原が、自ら編する所の藏書目錄なり。卷首に「擁腫草虛藏書目錄」として、擁腫虛者予山房の書名也」と記し、次に「櫪誌、形勢、拔巧、陰陽謂之四種也、前漢書以類分之、今從獵錄、不暇部分也、猶待他日云爾」と記し、書名と卷數とを擧げて數百部を列れたり。別に「平山兵原藏書目」と題し二册に寫傳せるものあり。

◎平山潛の傳は「孫子折衷」の下にあり。

ひらやましのじやうしよ
平山氏の上書　本一卷　平山　潛

文化四年丁卯(一八〇七)六月八日、と同秋七月との漢文上書二通を寫したり。

◎平山潛の傳は「孫子折衷」の下にあり。

ひらやましへいげんざうしよもく
平山兵原藏書目

此の書は一名「平山氏藏書目」の下に解題せり。

ひるるかう
皮類考　本一卷　伊勢　貞丈

皮革類四十三種の事を考說し、其の製法を略記したるもの。末に「天明三年癸卯(一七八三)十二月三日、酒井飛驒守殿祖父貞丈へ相傳の趣なり」と記す

◎伊勢貞丈の男にして、萬助と稱し、また和學、故實等の研究あり。著書は本書の外に、具足羽織記、大和事始正誤、類聚馬毛名歌、位署徵古等あり。

ひるぎつねのうわさ
晝狐のうわさ　本一卷

奸佞邪智の徒、巧言令色を以て、主家を狂惑陷擠するの意を、晝狐の嫁女をたぶらかすに寓意して諷刺的に書き成せる短編なり。「耕獵錄」第二に收む。

ひるのごぜんしだい
晝御膳次第　本一卷

天皇陛下晝御膳の御次第を記したるもの。明暦元年乙未(一六五五)當時の內膳司の次第なり。

びろうしふ
尾籠集　本一卷

凡於主親御前不可振舞條々より、人々門前にて欲立聞事に至る數十項の敎誡目を擧げ、「右條々之掟、於防州大內殿領中壁書也、如之爲後世寫置候事」と記し、更に數目を擧げ、最後に「右此條々防州山口集編にて、書寫訖、天正十三年(一五八五)三月吉日」とあり。「續群書類從」卷九百四十七、雜部第九十七にあり。

ひろをかむらさくうぼさつりやくえんぎ
弘岡村虛空藏菩薩略緣起　本一卷　僧　快龍

土州吾川郡弘岡村なる同菩薩の略緣起なり。紙員僅に一枚。明和九年壬辰(一七七二)二月の記。「土佐國群書類從」第百三十に收む。

ひろしまひつき
廣島筆記　本一卷　廣沢輯策　門卷　長右

元和五年己未(一六一九)淺野但馬守長晟、大阪陣の軍功により、廣島を賜りし時の記錄なり。同家人が萬治の頃筆錄したるものなり。

ひろたしやうたあはせ
廣田社歌合　本一卷

此の書は大治三年戊申(一一二八)八月二十九日の歌合にて、基俊の判なり。

ひろたしやうたあはせ
廣田社歌合　一卷

承安二年壬辰(一一七二)十月十七日、社頭聲、海上眺望、述懷等の題にて、皇太后宮大夫俊成の判にかかる。二十九番二十九番づつ、凡て八十七番歌合なり。「群書類從」卷百八十七和歌部第四十二に收む。

ひろばたけさんじふばんうたあはせ
廣幡家三十番歌合　本一卷

享和二年壬戌(一八〇二)左、廣幡大納言前秀、日野前大納言資矩以下凡て十人、右、德大寺大納言公廸、綾小路中納言俊資以下凡て十人の三十番歌合なり。題は花月雪、判者は吐屠慶憲延なり。

ひろみねしかいづ
廣峰氏系圖　本一卷

ひんせきふうが
品石風雅　二卷　加藤　濟

著者嘗て其の鄕里なる伊豫山に入つて一奇石を得たり。形同山に似たるを以て、小孫奚また豫山石と名く。この石を携へて梁川星巖、若山勿堂、其の他當時の諸名家に就てこれを贊記せる詩文を得て集輯したるものなり。慶應二年丙寅(一八六六)夏六月の自序、その他大沼厚、小橋勳、保岡孚等諸家の詩題序跋あり。二卷一册に版す。

◎加藤濟は房州平久里の人にして、世美と字し、霞石、衰丘、掬翠等の號あり。夙に孝を以て鄕黨に知られ、醫を學び、また儒に志す。天保中諸方に師を求め、九州に遊び、また還りて、佐藤若山等の門に入り、經史詩文に通じ、また行書の書に長ず。後長島侯の聘するところとなりて江戸に移り、醫を以て仕ふ。晩年歸りて鄕に終す。時に明治三年庚午(一八七〇)年六十九なりき。

ひんせんいつとう
品川一燈　本一卷　澁井　孝德

明和元年甲申(一七六四)朝鮮使來朝の時、江戸高輪客館に就て應接したる時の會話贈答を集錄したるものなり。同九年中井積善、天明四年甲辰(一七八四)賴惟寬の跋等あり。

◎澁井孝德の傳は「國史」の下にあり。

ひんせんしふ
便船集　七册　高瀨　梅盧

俳諧の集にて、寛文八年戊申(一六六八)十月の編輯にかゝる。

◎高瀨梅盧の傳は「鶯鶉集」の下にあり。

ひんぶつかうしよ
品物考證　二卷　乾　桐谷

草、菌、魚、甲、介、蟲、禽、石、以上八類の名詞異同等を考證辨明したるものなり。嘉永六年癸丑〔一八五三〕の作、安政二年乙卯〔一八五五〕版刻す。
◎乾峒谷は純水と稱す。阿波國徳島の人にして、「阿波産志」を著したる乾善水の子なり。

ひんぶつめいゐ
品物名彙 一巻 岡田 安定
諸品物の名稱を類集したるもの。安政六年己未〔一八五九〕の作にかゝる。著者岡田安定は伊勢の人なり。

ひんぶつるゐじゆ
品物類聚 七巻 行方（ナメカタ） 水谷
庶物の名稱を類聚して、考説したるものなり。安政五年戊午〔一八五八〕の出版なり。

ふ

ふいくさう
童子教註 二巻 脇阪 義堂
孝悌忠信修身齊家等の事を平易に記述したるものにて、光格天皇の享和三年癸亥〔一八〇三〕鎌田鵬の序あり。同年出版す。著者脇阪義堂は別に「孝行になるの儀受」を著せり。

ふいのやなぎ
ふいの柳 一巻 僧 蝶夢
編者の俳友宜朝の發句二十句、宜朝の死を悼める諸俳友の發句七十餘句を收錄し、終りに「風の雪ふくのてふいの柳かな」といへる宜朝の前句に附けたる、蝶夢、梅下、沂風の連俳を載せたり。書題の出所も之れによれり。宜朝の一周忌にあたりて編輯したるものなり。
◎蝶夢の傳は「蝶夢和尚文集」の下にあり。

ふいんそうわ
武陰叢話 十冊
徳川家康時代に於ける、諸士の逸談、古戰の得失、名將勇士の言行等を雜記したるものなり。一名を「武話叢談」といふ。

ふううてんげんつう
風雨天眼通 一巻 黄白山人
風雨豫知の法を詳述したるものにて、安永五年丙申〔一八〇三六〕の作なり。

ふううぶぐじべん
風雨賦國字辨 二巻 中西 敬房
天時の晴曇、風雨、霜雪、雷電等を占候する圖說なり。安永五年丙申〔一八〇三六〕の作にかゝる。
◎中西敬房の傳は「中五穀豊熟占」の下にあり。

ふうえふわかしふ
風葉和歌集 二十巻
撰集の體にならひて、古今の物語等にある歌を集めたるものなり。巻上下、夏、秋上下、冬、神祇、釋教、離別、羇旅、哀傷、賀、戀一、二、三、四、五、雜一、二、三に部立して歌數一千三百八十首を收む〔もと二十巻ありたりしも、今十九、二十の兩巻を闕き歌數も少し〕元徳三年庚午〔一三三〇〕露睡子の奥書あり、また寶永四年丁亥〔一七〇七〕野村尚房の跋あり。其の文中に曰く、「或説云風葉和歌集者南朝之御時、於吉野山皇居、所撰著之物語和歌而、三葉集之一也云々然序中泰國非仰千歌餘二十巻、文永八年〔一二七一〕蓮歳之云々非南朝之撰可知之、撰者誰人乎可尋之者也」云々とあり。

ふうがよ
風雅餘 一巻
歴史中の童謡傳説を集めたるものにて、毎條其の事實を記せり。

ふうがわかしふ
風雅和歌集 二十巻 花園天皇
巻上中下、夏、秋上中下、冬、旅、戀一、二、三、四、五、雜上中下、釋教、神祇、賀等に部立して、歌數二千二百十首〔拾芥抄の計〕を收む。眞和二年丙戌〔一〇〇六〕十一月九日の假名序中に、「元久のむかしの跡をたづねて、ふるきあたらしき詞、目につき、心にかなふをえらびあつめて、はたまきとせり」云々とあり。假名序、眞名序は、共に法皇の御製なり。
◎花園天皇の傳は「宸筆暦記」の下にあり。

ふうきじざいしふ
富貴自在集 二巻 大關 爲孝

しやうじ木、じひふか木、よろう程のよ木、ゆだんのな木、かないむつまし木、しんばうつよ木、やうじやうよ木、いさぎよ木、つひえのな木、あさお木、かせ木等の目につきて、修身要領を説きたるものなり。天保八年丁酉〔一八四九七〕の自序及び梅塢の序、鈴木弘真の序、海老名綱の跋等あり。著者大關爲孝は忍藩と號す。

ふうきやうぶんさう
風狂文草 五巻 田中友水子
著者の狂文擬作を集む。漢武帝の秋風の辭に擬したる春風辭、風原の漁夫の辭に擬したる虚婦の辭等より、神農陷獄、琉球孝讃に至る數十編あり。寶暦二年壬申〔一七五二〕出版す。
◎田中友水子の事は「増補懐寶永代藏」の下にあり

ふうげつしふ
風月集 四巻 西洞院時名
著者の發句集なり。門人等考訂補輯して、安永五年丙申〔一七七六〕成稿す。
◎西洞院時名は當時の歌人にして伽羅庵と號し、寶暦中入道して風月と號す。

ふうげつしふ
風月集 一巻 松平 定信
文政十二年己丑〔一八二九〕の春に詠み出でたる和歌として數十首を掲げたり。巻末に「此御歌かくれさせ給ひし、文政十二年の春の初の御歌なり、自ら書き給ふ一巻ばかりあれば、副本にとてうつしてひめおくなり。天保十年さつき定和」とあり。「樂翁公遺書」の下巻に收む。
◎松平定信の傳は「花月草紙」の下にあり。

ふうじゆしさん
楓樹詩纂 二巻 村瀬 之熙
總攷、詩話、緑朋等に門して、楓樹を詠じたる唐人の詩を纂めたるものなり。安永年中の編なるべし。
◎村瀬之熙の傳は「蘐苑日渉」の下にあり。

ふうすゐかう
風水稿 四巻 僧 智好
著者の詩集なり。東山天皇の元禄十三年庚辰〔一七〇〇〕の自序を載せたり。著者智好は東武の人にして、雷山散人と號せり。

ふうすゐさうくわんき
風水草管窺 一巻 玉水 正英
此の書は一名「中臣祓風水草管窺」の下に解題す。

ふうせつやまにしき
風説大和錦 十巻
文久三年十津川義擧の事を記す。中山侍從暨兵庫にて御詠歌の事、並大阪表裏の事を記す。
著討死生捕の事、藤堂家より浪士命乞延引の事に至る三十一條あり。十巻一冊に寫傳す。

ふうぞくけんもんろく
風俗見聞錄 五巻
世の見聞を筆錄して、武士、百姓、寺社、醫業、陰陽、盲人、公事訴訟、諸町人、同中邊以下、遊里賣女、歌舞伎芝居、稼多非人、米穀産物、山林、日本神國、非命に死せるみ、士民君の事等を編記せり。自序あれど姓名と年代とを記さず。

ふうぞくしちゆうだん
風俗七遊談 三巻 鈍 苦 齋
武藏日發の里に牛醉散人といふ者あり。幾多の人人同時に集れ來りて、粋所の談話を求むるまゝに談し聞すに擬して作れり。古妓粋、妓、踊子、陰間、比丘尼、衆發、遊女等の七譚なり。一册に作る。

ふうぞくしふ
風俗集 三册 片桐 良保
著者の俳諧集にして、寛文六年丙午〔一六六六〕五月の編輯にかゝる。
◎片桐良保の傳は「戯諧草」の下にあり。

ふうぞくすゐさうだんぜんぺん
風俗醉茶夜談前編 十五巻
多羅福山人
著者多羅福山人の雜筆戯撰なり。乾坤、時候、氣形、支體、蕪藝の五大門に分ち、世界は途に泥の海の事より、鬼魅を畫く事に至る八十二項あり。安永四年乙未〔一七七五〕の自序を附す。

ふうぞくぶんせん
風俗文選 十巻 森川 許六
芭蕉、浪化、丈草、千那、李由、支考、其角、嵐雪、野坡、北枝、凉莵、露川、雲鈴、吾仲、路通、凡兆、素堂、嵐闌、炳口、去來、萬子、厚篤、木導、汶村、毛紈、程

巳、朱廻、許六等俳家二十八人の俳文を編輯したるもの。俳賦、譜、既解、記、紀行、序、箴、銘、誄、歌、文、傳、疎、辯、表、論、頌、讃賛、書の二十一類に分ち凡て百餘編を收め、巻首に作者の略傳を掲げたり。寶永二年乙酉(一七〇五)の自序及び李由、支考等の序あり。俳諧文庫第五編「許六全集」中にも收む。

◎森川許六は字を羽官といひ、蕉阿佛また五老井と號す。江州彦根井伊家給人なり。俳諧を好みて芭蕉の門に入り、頗る其の妙に達して蕉門十哲の一人と稱せらる。また狩野安信に就て畫を學び、此の技を以て芭蕉に致へたることあり、六藝に通ぜより、芭蕉許六の名を與へたりといふ。晩年痛を病み、正徳五年乙未(一七一五)八月二十六日、六十歳にて歿す。著者には、編突、韵塞、宇陀法師、一枚起請、和讃三體詩、十三歌仙註、歴代滑稽傳等あり。

ふうそくへんかうもくしさろく　風俗變更獻識錄　本一巻　賓浦　專八

著者の實歴せる六七十年間の鄉俗の變遷を詳記したるものなり。享和三年癸亥(一八〇三)七十八歳の自序あり。『土佐國群書類從』第百四十一に收む。

ふうぞくゆうせんくつ　風俗遊仙窟　四巻　克齋

張文成撰入仙家事、附り詩歌、張文生久来仙人に遇事、附り問答、蕗夢の記等の題にて、文藝と仙人との關係を終始して作りなせる戯作なり。要は、俳文の一端を世に紹介せんために力を盡せるものなり。延享元年甲子(一七四四)の作。寛延二年己巳(一七四九)出版す。著者克齋は寸木散と肩書せり。

ふうぞくん　風塵記　本一巻　平間　長雅

心の松、濁めぐり、歌のむしろの三より成れる記なり。機内諸國を漫遊して、吟詠の詩歌多し。元禄十三年庚申(一七〇〇)住吉松陰に於て記せる由を自ら奥書せり。

◎平間長雅の傳は「長雅集」の下にあり。

ふうぞんしふ　風鹿集　本二巻

和漢古今の格言、詩等を抄錄す。多くは道徳上の金言なり。二巻一册に作る。

ふうどれいそく　風土蠡測　本二巻　山田　好之

享保十二年丁未(一七二七)の自序中に「僕正徳の頃、五畿諸道を歴廻りて、人の風俗、地の善悪、山川の圖、湖海の押、年の豊凶、田の租稅、見及び聞き傳ふる事どもを、纔に書き付て、見め唐土の事に引合せ、風土蠡測と名く」といへり。其の大概を知るべし。此の書は播州鶴殿島の草庵に作るところなり。

◎山田好之の傳は「齊民術」の下にあり。

ふうぶんきさのこゑ　風聞雉子聲　本四巻

徳川時代の朝野の雑事を記したるもの。巻一、二に京極丹後守、水野和泉守と駿州大井川にて喧嘩の事より、藤堂和泉守高虎が禁裏警衛勇の事に至る凡そ九條、巻三、四に新田義貞の兜を越前國より取出す事より、酒井讃岐守頓智の事に至る凡て十二條を記したり。

ふうらいろくぐふしふ　風來六々部集　二巻　平賀　源内

著者の狂文を集めたるものなり。前編には放屁論、同後編、遂除隊遊傳、力婦傳、蛙腹背大通、於千代傳の六部。後編には飛だ噓の評、天狗髑髏鑑定縁起、里のをだ巻、飛花落葉、菩提樹の辨、細見嗚呼お江戸の序の六部を集めたれば六々部集と名く。安永九年甲午(一七八〇)門人森羅萬象の跋あり。

◎平賀源内は本草學者として、戯作者として共に名あり。本名を國倫、字を士彝といひ、鳩渓と號す。戯號には天竺浪人、風來山人、森羅萬象翁、福内鬼外、杉籟子、無根叟等あり。讃岐の人にして、幼より奇行あり、文學を嗜み、皇典を賀茂眞淵に、本草を田村藍水に學び、頗る博物に通ぜり。後長崎にゆきて唐人館に出入し、輸入藥物の眞僞を評判し、また和蘭譯官につきて同國語を學び、博物上の智識を得ること多し。著書には物類品隲、浄瑠璃五百圓、火浣布考、火浣布略説、神農本草圖經、神農本草和名考、本草比肩、食物本草、四季名物正名、日本物産譜等あり。戯著には、神霊矢口渡、源氏大草紙、金毘羅利生記、六々部集、當世さよ嵐、同續、仙術金のなる木、風流志道軒傳、當世野夫論、諸國自慢、れなし草、同續、かな文選、長枕褥合戰、風流志道軒、秘術工夫箱等あり。安永八年己亥(一七七九)十二月十八日、五十七歳、人の爲めに連座して獄中に病死せりといふ。

ふうらうしふ　風浪集　三巻　仲村　興

上中の二巻に詩を集め、下巻には天和二年壬戌(一六八二)朝鮮使との筆談及び諸體の文を載す。真享元年甲子(一六八四)出版す。

◎仲村興は江戸の漢學者にして、友信と字し、信齋又風浪と號す、著書は此の外に「霞洞集」六巻あり。

ふうりうしかたまひ　風流仕形雛　五巻

都廻り以下風流なる仕形雛數番の畫にて、虚數浄瑠璃を附したり。寶永三年丙戌(一七〇六)の作。五巻一册に作る。

ふうりうしだうけんでん　風流志道軒傳　五巻　平賀　源内

江戸淺草の地内にあり、軍談を以て最も有名なりしといふ志道軒の傳記なり。其の談法は猥雑滑稽、手眞似、身振り、一として聽者を抱腹せしめざることなく、其の名高き事は、市川海老藏と共に江戸二人の名物とまで稱せられたりといふ。此の書は風來山人が風流奇骨の文を以て其の略傳を書き終りたる者なり。自序及び癸未冬日獨鈷山人の序あり。

◎平賀源内の傳は「風來六々部集」の下にあり。

ふうりうりやくげんじ　風流略源氏　一巻　鈴木　春信

横笛、野分、常夏、眞木柱、竹川、螢、梅枝、藤袴、行幸、篝火、柏木、藤の雫薬等の名のもとに彩畫を掲げ、各圖に應ぜる歌一首を頭書せり。

◎鈴木春信は江戸の浮世繪師なり。又兵衛と稱し、長春軒、湖龍齋等の號あり。西村重長に學び、明和の初め錦繪を創む。是れ錦繪の最初なり、其の畫く所世の持囃す所となる。明和七年庚寅(一七七〇)六月十五日、五十三歳にて歿せり。

ふうりんざつろく　風林雜錄　本一巻

寛文三年癸卯(一六六三)將軍日光參詣の時の記にして、内外の雑事、條令供奉人等を記し、巻末に寛永九年の仰出條目を載せたり。

ぶえいけいづ　武衛系圖　本一巻

從四位下刺官尾張守家氏より出でて大阪城に討死したる從四位上近治に至る系圖にして、「續群書類從」巻百十三、系圖部第八に收む。

ぶかうさんぶつし　武江產物志　一巻　岩崎　常正

江戸近郊に産する野菜、果物、薬草、木類、遊覧類、名木類、蟲類、鳥類、獣類等を記載したるものにて、文政六年癸未(一八二三)の作、同七年の自序を附して、横本小册子に作る。

◎岩崎常正の傳は「岩崎灌園遺稿」の下にあり。

ぶかうでんちうぎやうじき　武江殿中行事記　本一巻

寛文十一年辛亥(一六七一)甲の幕府の行事を記したるものなり。

ぶかうねんぺう　武江年表　八巻　齋藤　幸成

天正十八年庚寅(一五九〇)八月より、嘉永元年戊申(一八四八)十二月に至る江戸の年表誌なり。編者の凡例にも「此編に載るところは中人以下の耳目に觸るゝところにし地理の沿革、或は防間の風俗、事物の權輿に至るまで疲るに隙て誌す。薬より公邊の御事は倘ひ知るべきにあらず、たまゝ傳聞せることも憚り多ければ爰に漏すといへり。其の範圍の一般を見るべし。嘉永二年己酉(一八四九)目尾喩の序あり、同三年出版す。

◎齋藤幸成の傳は「東都歳事記」の下にあり。

ぶかうひしや　武江披沙　本四巻　太田　覃

江戸の地誌にして、第一巻を城東とし、馬場先御門より、葛飾郡永代浦築地までを記し、第二巻を城西とし、山の手より渋谷山東福寺までを記し、第三巻を城南とし、外櫻田より海晏寺までを記し、第四巻を城北とし、馬喰町より戸田の渡りまでを記せり。所在に散在せる見聞の事を、大島武好の「山城名勝志」に倣ひて作れるもの、如し。寛永の「晉要めぐり」、延寶の「江戸雀」、貞享の「江戸鹿子」、元禄の「江戸咄」、享保の「江戸砂子」、「續江戸砂子」、元文の「江戸名勝志」其の他寫傳の「葉一本」、「落穂集」等に漏れたるを拾集したりと。巻首に引用書目數十種を掲げたり。文化九年壬申(一八一二)冠石の序、文政元年戊寅(一八一八)の自序あり、四巻一册

に傳寫す。

◎太田覺の傳は「南畝叢書」の下にあり。

ふかうべんろん

不好辨論 本一卷

制札、法度、觸書等の法式を論ず。其の二二例を示せば、最初、制札の端に制札の事といふ題下に「二階堂行二云、禁札の札の端に禁制と書出すべし、竹非定輿云、制札とは禁制札の總名なり、端作には書くべからず」次に「高札の端に高札の事との題下に「行二云、高札は札の端に定と書出すべし、定輿云、高札とは總名なり、端作には書くべからず」等の如し、此の如く每條諸家の考物を集錄す。

ぶかうゆうくわんしりやく

武江遊觀志略 一卷 尋香

江戸の歲事記なり。社寺の祭禮法會、花鳥漁獵の季節等を、一年十二月に繫けて記したる袖珍案內書なり。安政六年己未(一八五九)の自序あり。

ふかがはしふ

深川集 一卷 濱田 洒堂(サイダウ)

深川花遊、草庵の留守、松の中、忘年背懷等の題にて、芭蕉及び其の門人洒堂、嵐蘭、卷水、杉風、曾良、其の他十數名の連吟したる俳諧を集めたるものなり。元祿五年壬申(一六九二)の編。翌三年京都の書肆井筒屋より發行し、寬政二年庚戌(一七九〇)再版。近年俳諧文庫第十編「元祿名家句集」の中に入れてまた發行す。

◎濱田洒堂は近江膳所の人にして通稱「道夕」初め

珍碩と號し、後に洒堂と號す。芭蕉門に俳諧を學び、蕉門は此の外に、ひさご集を著せり。元祿年代の人なり。

ふかくゑんくわうぜんじでん

普覺圓光禪師傳 本一卷

萬松山泉龍禪寺住職、普覺圓光禪師の履歷なり。「續群書類從」卷二百三十九、傳部第五十に入る。

ぶがくけいもう

武學啓蒙 一卷 力丸 彈正

武學の大要、泰公の注意、武士の心得等に關する要領を講說す。最初に武士の心得べき二十一箇條を掲げたり。子孫及び門生に傳へたるものにて、本書は其の初錄なり。享保元年辛酉(一七一六)著者の端書、同年門人吉川常の跋、文化元年甲子(一八〇四)紀信澄の序、同三年藤原則德の序等あり。

◎力丸彈正は遠前の人にして、之光と稱し、東山と號し、塾を青松塾といふ京都に寓し、夙に伏原の古學を學び、那波の性理を極め、かねて家學の武備を講ぜり、其の著すところに、青山先生文集、同近縣遊志略、人物志、國字答問書、劒學撮要、古今堂射考、續武學啓蒙、兵法集談、東山漫錄、學文小箋、古詩梯、詩組貫、武尖問對、武器考略、向君須知、其の他等あり。

ぶがくしふする

武學拾粹 本八卷 星野 常富

士操、要器、帶甲、陣營、戒功、探候、用馬の七編に分ち、更に數十の細目を立て、武器の圖式等をも論示したるものなり、文政五年壬午(一八二二)佐藤一齋の序、嘉永三年庚戌(一八五〇)林健の序、河田興の跋あり、同六年版行す。

◎星野常富は、信州高遠藩の世臣にして、伯有と字し、葛山と號す。寬政十二年庚申(一七九二)父の祿を襲ぎ、諸職を歷て郡代に進み、一時人の忌諱により斥けられたるも、再び仕へて、側用人となり、伴讀を掌せり、幼より學を好み、日夜倦むことなし、其の官に在りても、暇あれば必ず書を手にし、經史軍法律令に至るまで該通せざるものなし。著書は本書の外に、田制考その他あり、多くは有用經濟の書なり。

ふがくしやしん

富岳寫眞 一帖 小泉 斐

富士山の諸景色を寫圖したるもの。寬政七年乙卯(一七九五)親しく登嶽目瞻する所によりて描きたるものなるよし、弘化二年乙巳(一八四五)の自序に見ゆ。篠崎小竹の題字、安積信の序文等を載す。

ぶがくずゑふだいぜん

舞樂藥葉大全 七卷

第一卷に舞姿、面、衣裝、作物、道具等の圖解、鼉鼓、大小鼓等の說明を載せ、第二卷以下には譜五十種の譜を示したるものなり。元祿十二年己卯(一六九九)出版す。

ぶがくせいづ

舞樂正圖 本十六帖

各種の舞樂を圖して、舞樂名、左右人員等を記し、裝束の各部分、各樣樣等を一々指名したるもの也。

ぶがくせうろく

舞樂小錄 本一卷

舞樂の故實に關する事を輯錄す。裝束事、走舞人數事、以下諸樂を略說す、正和二年癸丑(一九七三)四月、賴成の奧書、天明六年丙午(一七八六)藤原眞幹の奧書等あり。

ぶがくだいぜん

舞樂大全 二十二卷 河合、利房

あらゆる舞能謠曲の大意作法を輯錄大成したるもの。貞享三年丙寅(一六八六)の序なり。著者河谷利房は愛水子と號す。

ふがくだんぺい

巫學談弊 本五卷 平田 篤胤

內題には「巫學談俗神道大意」とあり、「そ」の部に出でたる「俗神道大意」と同物にして、神佛習合などの俗神道說を辨破したるものなり。

◎平田篤胤の傳は「古史傳」の下にあり。

ぶがくづ

舞樂圖 一卷 高島 千春

舞樂を圖したるものにて、左方舞振鉾三節より、壹越調、平調、雙調、黃鐘調、盤涉調、大食調、三十九圖を掲げたり。文政六年癸未(一八二三)の自序あり。同十一年出版す。

◎高島千春の傳は「古圖類從」の下にあり。

ふかくづき

富嶽圖記 一卷 村田 允益

富士山絕頂圖及び全圖を掲げ、記は寬保二年壬戌(一七四二)二日授して東方隆と、ふものに記せしめたるものにて、允益の實察記一首、登嶽詩五首、服部子遷、鵜殿士寧の詩等を載す。同年徐承容の跋あり。附錄に、豐後臼杵松崎に建てたる禹穴合記碑圖記錄一卷を附したり。

◎村田允益は千藤と字し、姓を修して韭と稱せり。豐後臼杵の人にして稻葉氏に仕へたり。

ふかそぎかう

深曾木考 本一卷 安島 直圓

ふかそぎとは、小兒の髮を切る事にて、古くは髮ぎといひたりと今諸書を引きて此の事項を考證す。

◎屋代弘賢の傳は「古今要覽稿」の下にあり。

ふかふせんし

符合泉志 三卷 豐倉山孔章

宋代の錢列集して、養錢家の眞蒙を對分せり。文政十年丁亥(一八二七)の自序、田保眞の序等あり て、同十二年出版す。

ふかみどり

深綠 一卷 僧 忍鎧

香道の書にして、十炷、宇治、小島、小草、競馬、矢數、名所、花月、源氏、運理等の十種につきて方法茶式等を說けり。

◎忍鎧のことは「自讚歎管註」の下にあり。

ふかやうくすだいづ

深谷上杉系圖 本一卷

大織冠鎌足に祖系して、水戶黃門に仕へたる兵部憲國の子に及べり。「續群書類從」卷百五十四、系圖部第四十九に入る。著者を上杉憲孫と記したるもあり。

ぶかんしふりやく

武鑑輯略 本三卷

武家心得の要を記述す。十四門に分ち、往々口傳を添へて記せり。

ふきうさんぱふ

不朽算法 本二卷 安島 直圓

著者が當世の傑才を以て常に研究したる所の草稿堆を成す、氏沒して後、門人日下誠、其の亡滅せん事を惜み、師意を體さて撰拔編集して、二卷とし、之れを不朽に傳へんとす、故に題して「不朽算法」と曰ふ。門人等と相謀り釀金既に集り、將に上木せんとす、一人の狹猾あり、爲に成らずして止みぬ、惜むべきなり。然れども本書は當時に比なきを以て、人々に寫記して以て藏す。故に出版に及ばざれども、本書の名最高し。書中二次綴術を要するの算題あり、實に直圓の創めて發明する所とす。加之下卷に對數の解法あり、其の法直に普通對數を求むるものにして、西人の行ふ所の稱自爾對數より變化するものに非ず、實に稀世の算法と謂つべし。此の發明は算家すら知る者少し。本書は寬政十一年己未(一七九九)に成れり。

◎安島直圓は萬藏と稱し、南山と號す。元文四年を以て江戸に生れ、戸澤上總介に仕ふ。初め數學を中西流入江應忠に學び、後ち關流山路主住の門に入る。直圓、天性數理に長じ、新術を發すること多く、古人の久しく難んぜし所の竅題も直圓に至りて始めて明なり。圓理の如きは更に新法を發して、古來の解法を一新し、又二次以上の級術に關はる解法も直圓創めて之れを發す。蔽に斯道に一進歩を與へたり。而して點竄の解法も亦氏に至りて次に改良を加へ、全く古風を變ず。實に氏の如きは日本數學高尚の域に達するの大路を開きたるものと謂ふべし。寛政十年(一七九八)四月七日六十にて歿す。

ふきうだうひやくぜつ

不求堂百絕 一卷　**吉田　清**

著者の經歷百首を輯めたるもの。天保六年乙未(一八三五)男衆の厄、同七年朝川鼎の序、佐藤一齋の辨言、天鉾詩佛の序、池五山の序、南見龍の序等あり。同十四年江戸にて出版す。

◎吉田清は信濃の儒者にして、士庶と字し、豊八郎と稱し、蓬湖、靈風、不求堂等の號あり。著書は、孝經管解、國號異稱記、長夜談、江戸碑石纂、諏訪郡金石錄、諏訪郡八勝詩、奇談漫筆等あり。

ふきうてつじゆつ

不休綴術 本朝一卷　**建部　賢弘**

綴術は前來の諸神之術を極めて發明したるものにして、其の來るや久しと雖然れども支那及び日本の算家之れを難術として、隋唐以來、未だ嘗て之れを研究したる者なし。先に關孝和が綴術を發したる者は、神之綴術に非ず、實に氏が新に發したるものなり。賢弘も亦神之綴術を知るに非ざれども、潛心深思し、神之が意を臆測して、更に一の綴術を發したり。それを「不休綴術」と曰ふ。或ほ之れを「不休建部綴術」とも曰ふ。不休とは賢弘の號なり。同氏は此の法に依りて、圓周率を探り得たること、三、一四一五九二六五三五八九七九三二三八四六二六四三三八三二七九五〇二八四一九七一六、實に四十位以上を求めたるは之れを以て嚆矢とす。享保七年壬寅(一七二二)と記入あり。

◎建部賢弘は「發微算法演段諺解」の下に傳す。

ふきうらちんざゆらいき

吹浦鎭座由來記 本朝一卷　**廣瀨　嚴雄**

出羽國飽海郡吹浦村なる、大物忌神社、月山神社の祭神選座の次第、祭祀禁忌の事等を詳記したるものなり。

ふきうろくはう

普救類方 七卷　**林　良適**

邊鄙窮巷の醫藥に乏しきもの~爲めに、幕命によりて撰したる簡便處方なり。丹波正伯と共に作るところなり。享保十四年己酉(一七二九)幕親顧の序あり。同年出版す。

ふきかうしやう

武器考證 本朝二十卷　**伊勢　貞丈**

あらゆる本朝の武器を百六十部に類別し、更に數百種を列擧し、一々考證したるものなり。卷首に引用書を列擧して書名の假字順に排序せり。第二十卷の末に、「從明和五年戊子(一七六八)、至今年己亥、凡十二、每課出採摭所聞武器之語、而微塵爲山、適遇成海、其所抄寫者凡二十卷、更副目錄、號曰武器考證、以授子孫矣、孫孫傳受勿怠云爾、安永八年己亥(一七七九)春二月朔旦、愚從隱士伊勢平藏貞丈書」とあり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

ふきかうしやうぶるゐもくろく

武器考證部類目錄 本朝一卷　**伊勢　貞丈**

前に掲げたる「武器考證」二十卷百六十部の部類細目なり。該書の卷首に掲げたる部分を、單行したるものなり。

◎伊勢貞丈の傳は「安齋叢書」の下にあり。

ふきさんちつもくろく

無藥齋地圖目錄 本朝三卷　**無藥齋**

日本の各國及び其の國々の名所舊蹟を圖せる目錄なり。著者無藥齋のことは詳ならず。

ふきそでかがみ

武器袖鏡 三卷　**栗原　信充**

戎衣武器の數を盡して、考證圖說したるものなり。橫綴小本に作る。天保十一年庚子(一八四〇)同十四年等の自跋あり。

◎栗原信充の傳は「鞍鐙新書」の下にあり。

ふきづせつ

武器圖說 本朝十卷　**伊勢　萬助**

劍刀、甲冑、弓箭、鞍鐙、旌旗、矛楯、雜圖の七類に分ち、各出所を示し考語を附す。寛政八年丙辰(一七九六)閣老堀田攝津守の命によりて編輯するところなりといふ。

◎伊勢萬助の傳は「皮類考」の下にあり。

ふきにひやくづ

武器略圖 一卷　**小林　祐猷**

弓矢以下の武器二百種を圖したるものなり。其の體は大版一面を四四、十六に區劃し、前一行の四劃内に次の一行四劃内に收めたる名稱及び同種の數稱を記し、悉く振假名を施し、歪の部は一々彩色して一種若くは二種三種づつ一劃内に記せり。もと骨牌形に作りて小童の玩具とする趣意なりしを、そのまゝとりて印刻したるものと見ゆ。斯學の參考たるべきなり。嘉永元年戊申(一八四八)七月、著者の記したる凡例及び同八年山脇正準の序あり。

◎小林祐猷は奥濃國郡上の家臣なり。平素學を好み殊に武學に深く、また繪事に心あり、本書の繪圖はその自ら繪するところなりといふ。

ふきよせしふ

富貴寄集 本四卷　**立田　正賢**

見聞雜事を集錄したるものにて天保年間の作なり

◎立田正賢のことは「三泰行御書付」の下にあり。

ふくるかゞみ

福井鑑 本二卷

越前福井の領主秀康、忠直、忠昌、三代間の事歷を或問體に記したるものなり。

ふくるこうきやうじつ

福井侯行實 本一卷

天保九年戊戌(一八三八)十月、家督相續の越前福井侯松平慶永朝臣の事績を略記したるものなり。

ぶぐそうせつ

武具要說 二卷　**高坂　昌信**

本書は天文年間、武田信玄が、其の臣小幡山城守、原美濃守、横田備中守、多田淡路守、山本勘介の五人に命じて、武具の得失を考へ、其の所見を上申せしめたるものを、分類して輯錄したるものなりといふ。凡そ十三條あり。卷首には、「武道心鑑」一編を掲ぐ。天正五年丁丑(一五七七)三月八日の記、寛政六年甲寅(一七九四)東山逢の序あり。「群書類從」卷四百二十四、武家部第二十五にも收めたり。

◎高坂昌信の傳は「甲陽軍鑑」の下にあり。

ふくかるるしふ

服假類聚 本六卷

服忌に關する規例を考證詳記したるもの。卷一に一等親、二等親。卷二に三等親、四等親、五等親、本主、師。卷三に聞月服、假服相果、於遠所聞親族褒。卷四に傍親服或着姿方傍親服。卷五に給假、父母褒不給假、父母褒給假、養情從公、除服、遠忌目。卷六に無服殤假、七歲以下小兒假服有無事、改葬假等の事を載す。安政五年戊午(一八五八)孟冬の奥書あり。

ふくかるるしふ

服忌令 一卷

元祿六年癸酉(一六九三)に改定したる服忌令を擧げ、諸社通用神祇服忌令大成」を附記して、同八年乙亥春肆の發刊する所なり。

ふくきりやういれい

服忌令異例 本三卷

服忌令の規定外なる特別の場合に際したる服忌の實例を集錄したるもの。凡そ百六十條ありて、多くは享和より弘化までの事に係れり。

ふくきりやうこうあんしふせい

服忌令公案集成 本一卷

ふくきりやうじつきうけん

服忌養實早見 本一卷

養父母實方、實父母之實方、養子等の服忌の事を詳記したるものなり。

ふくきりやう

服忌令 一卷

父母、養父母、繼父母、以下二十五部に分ちて、各服忌の制裁を略說す。

ふくきべんらん

服忌便覽 本一卷

婚姻、家督相續等に關する伺指令を集錄したるもの。凡そ三十條ありて、弘化二年乙巳(一八四五)より、安政元年甲寅(一八五四)までの事に係れり。

ふくきたふひしふ

服忌答批集 本一卷

鈴玉葉

服忌に關する諸般の慣例を記したるもの。高祖父母、曾祖父母、祖父母、父母等より、七歳未滿、間忌、重る服忌、改葬等に至る服忌の事、服忌令無之雜事、穢之事等を載せたり。

ぶくきりやうしふせい

服忌令集成　三卷　度會　正兌

服假禁忌に關する法例を輯錄大成したるもの。太神宮に傳はる文保服假令、明應服忌令、永正記、常眞服忌令、朝雄服忌令、範尙服忌令、天和服忌令等を參輯し、更に大寶令、延喜式、養老律、法曹至要抄、北山抄、拾芥鈔等の古典に徵證して記したるものなり。其の項目は君、本主、師、父母等より、諸般の身分に就て記し、卷末には文保法目錄及び天和服忌令を附記せり。文政十二年己丑〔二四八九〕の自序あり。

ぶくきりやうしやうかい

服忌令詳解　写本一卷　遠山　景晋

元祿六年癸酉〔二三五三〕十二月に改定せられたる服忌令及び追和十六條、增補七條等を擧げて了解し易く衍義したるもの、文化八年辛未〔二四七一〕の自序あり。

◎遠山景晋は金四郞と稱す、幕府の官吏なり。文化元年露西亞の使節、長崎に來りし時、目付役にて應接の議に與り、同四年露人の蝦夷に寇するに方り、命を受けて之れに赴く。後長崎奉行、勘定奉行等を歷て、左衞門尉に任ず、著書は別に「西蝦夷日記」あり、曩きに蝦夷に行きたる時、村恒淡路守と共に作る所なり。天保七年丙申〔二四九六〕八月歿す。

ぶくきりやうせふけい

服忌令提徑　写本一卷　須知　尙秀

服忌令を平易簡明に注釋したるもの。嘉永元年戊申〔二五〇八〕四月の著なり。著者須知尙秀は通稱を善兵衞と云ふ。

ぶくきりやうせんちう

服忌令撰註　写本三卷　長山庄右衞門

父母、養父母、嫡母、繼父母、以下九族の服忌の令に略註を加へたるものなり。服忌令は寬永十五年戊寅〔二二九八〕の比より、撰用ありしも最簡なり、元祿六年癸酉〔二三五三〕に至りて十六箇條を加へ、元文元年丙辰〔二三九六〕に至りて大に改正し、十箇條を除き七箇條を追加す、本書は同年の制定に依て記せりといふ。安永十年辛丑〔二四四一〕の自序あり。著者長山庄右衞門は別に「服忌令明細集」一卷を著せり。

ぶくきりやうせんちうつゐほ

服忌令撰註追補　写本三卷

父母之部四、養父母之部十五、嫡母並繼母之部九、夫之部四、妻之部八、嫡子並末子之部八、養子並養女之部五十、祖父母之部二十、曾祖父母並高祖父母之部四、伯叔父姑之部二十五、兄弟姉妹之部十五、異父兄弟姉妹之部七、嫡孫之部末孫之部七、從父兄弟之部四、甥姪之部二、七歳未滿之部五、血荒流產之部一、服忌令箇條に無之雜事之部七十四、服忌眉方案文並產穢屆之部五十四。以上の條項につきて詳說せり。

ぶくきりやうせんちうぶんしやく

服忌令撰註分釋　写本三卷　加藤　次章

長山庄右衞門の「服忌令撰註」に分釋を加へて普通の便覽に供したるもの也。安永以後の作なるべし。

ぶくきりやうつゐか

服忌令追加　写本一卷

名の如く服忌令の追加として、養母、姉僕、嫡子、養女等より、嫡孫承祖、夫の父母、後妻等の事に至る、典例二十條を記したるものなり。

ぶくきりやうめいさいしふ

服忌令明細集　写本一卷　長山庄右衞門

「服忌令撰註」と大同小異の書。彼は三册に作り此は細書して、一册に作り、彼は略にして此は稍細なり。同じく安永十年辛丑〔二四四一〕同書を掲ぐ。

◎長山庄右衞門の事は「服忌令撰註」の下にあり。

ぶぐきんもうづゐ

武具訓蒙圖彙　五卷　湯淺　得之

甲冑弓矢の類を圖し、假名にて各品目を說したるものなり。天和四年甲子〔二三四四〕の自序を附し、同年出版す。著者湯淺得之は京師の人にして、雪任子と號せり。

ぶぐこでん

武具故傳　一卷　眞野　安代

一切武具の故實を國史中より考證したる者也。寬政三年辛亥〔二四五一〕の自序、山本正圭の跋あり。

ふくこめいしろく

復古明試錄　一卷　稻葉　正

著者の醫術に關する口授を、上方清謙、前田溫潤の編集したるものにて、全編片假名文にて記す。享和三年癸亥〔二四六三〕の自序及び諸葛蠡の序あり。

◎稻葉正は鹽水と字し、宗軒、また復古齋と號す。

ふくざつしよ

ふくざつしよ　一卷

多くの籤を設けて吉凶禍福の判詞を記し、適宜に身の上を卜占するやうに圖入して作りたる俗書なり、而かも安部晴明が淸水觀音に授かりし法などと記せり。貞享四年丁卯〔二三四七〕出版す。

ふくしうじつき

復讐實記　写本一卷

寬永年間伊賀上野に於ける渡邊數馬の復讐、山城日岡峠二宮櫂左衞門の復讐、延寶年間但馬村岡にて近藤源太兵衞主從の復讐せる始末を合錄したるものなり。天明五年乙巳〔二四四五〕十月二十八日の寫了。

ふくしうろく

復讐錄　写本一卷　廣井磐之助

安政二年廣井大六といふもの棚橋三郞の爲めに非命に死し、家名斷絕に及びたるを遺恨に思ひ、其子磐之助九年を經て復讐せる事あり本書は磐之助の日記なりとて、「土佐國群書類從」第七十一に收む。

ふくしうろん

復讐論　一卷　野村　公臺

赤穗義士の復讐可否を論じたるものなり。全編漢文にて記し、諸家の議論を取捨し、自ら斷じて「夫頁雄事、以春秋書法、則當書曰盜殺夾、安得以忠義目之乎」と斷言せり。其の所論の大要を知るべし。五井純禎、物茂卿等の論を附錄せり。安永五年丙申〔二四三六〕春三月の作にかゝる。

◎野村公臺の傳は「世說箋解」の下にあり。

ふくしまけいづ

福島系圖　写本一卷　北條　新藏

治安元年辛酉〔一六八一〕に卒去せる賴光を祖とし、寬永十五年戊寅〔二二九八〕なる孫九郞に至る。寬永十九年壬午〔二三〇二〕記して呈上せるを奧書せり。「續群書類從」卷百四十、系圖部第三十五に收めたり。著者北條新藏は正房と字す。

ふくしまたいふどのおんこと

福島大夫殿御事　一卷

慶長年間福島大夫左衞門正則の軍事始末を記したるものなり。「史籍集覽」に收む。

ふくしまたいふものがたり

福島大夫物語　写本一卷

此の書は版本「福島大夫殿事」と同物なり。

ふくしままさのりゑんるのき

福島正則遠流の記　写本一卷

元和五年己未〔二二七九〕六月二十三日、藝備兩國四十九萬八千石餘の領主從四位下侍從福島正則、領知を召し放され、出羽庄內へ流罪となり、最上源五郞義俊に預けらるゝにつき、廣島城引渡し受取の覺書なり。

ふくしままさのりかちうぶんげんちやう

福島正則家中分限帳　写本一卷

同分限帳にして、「續群書類從」卷七百十四、武家部第六十に入る。

ふくしままさのりき

福島正則記　写本一卷

福島大夫左衞門正則の一生事歷を記したるもの也

ふくじゆせつようぶんしやうゑんかい

福壽節用文章淵海　一卷

上層には、いろは字引を載せ、下層には通俗用の文例を載せたり。

ふくしようきらん

腹證奇覽　二卷　稻葉　克

腹中痾症の狀態を圖解し、其の治療法を記述したるものにして、寬政十一年己未〔二四五九〕の著なり。享和元年辛酉〔二四六一〕出版す。著者稻葉克は湖南の人、文禮と字す。

ふくしようきらんこうへん

服證奇覽後編　二卷　稻葉　克

前著「腹證奇覽」に續きて、腹痾治療法を圖說した

るもの。享和元年辛酉(二四六一)の著。文化六年己巳(二四六九)校刻す。

ふくしようきらんよく　服證奇覽翼　二卷　和久田　寅

稻葉克著「服證奇覽」及び同後編の遺闕を補翼したるもの。文化六年己巳(二四六九)の著。同年刊行せり。著者和久田寅は遠江濱松の人、叔虎と號す。

ふくしよくくわんけん　服飾管見　本朝十四卷　田安　宗武

服飾の故實典例等を考證したるもの。卷一、禮服始、禮冠、頭巾、表衣襲、表衣文色より、第十四の出衣、透衣、闕身、透襠、精巻刀、近世刀に至り、百十餘部の書を引證して記されたり。安永四年乙未(二四三五)藤原孝純、源清貫の序言あり。

◎田安宗武の傳は「八論餘言」の下にあり。

ふくしよくせふけん　服色提見　本朝一卷　水谷　敬典

表背、表濃背、背濃背、表背黒以下數十目、凡て服色の區別を記しているものなり。寛政二年庚戌(二四五〇)某の奥書に本書は大塚若梧の校合したるものの由を記せり。

ふくしよくづかい　服色圖解(前編)　一卷　本間　百里

冠衣以下一切の服色を圖解せり。文化十三年丙子(二四七六)九月、著者の奥書に、「此一册は當世式禮の服色を考輯し、横川重孝をして之れを圖せしめ、梓に上して竊に同好に與ふるものなり」といふ。

◎本間百里は遠藤興一、奥州一之關の藩士にして、文化十三年本間な八幡と改む、松岡辰方に有職故實を學ぶ。著書は本書の外に、類聚雜抄、有職問答、倚古鑑考、同鑑色一覽等あり。

ふくしよくづかい　服色圖解(後編)　一卷　本間　百里

「服色圖解」前編に續きて、烏帽子、末廣、直垂、狩衣、奴袴、布衣、裲襠、刀等の色彩を圖解したるもの。文化十三年丙子(二四七六)十一月の著なり。

◎本間百里の傳は「服色圖解」の下にあり。

ふくしよくづろく　服色圖錄　本朝一卷

此の書は服色を彩色圖したる古寫本なり。

ふくしよくぶるゐ　服色部類　本朝三卷

式服の色彩模様の事を諸書に徴して考説したるもの。着御之部、制服之部、神事之服部、喪服之部、着之部四十六品、冥之部廿九品、秋之部三十八品、冬之部十一品、雜四季通用部五十六品、正色間色之差別等と分ち記せり。天明二年壬寅(二四四二)八月の著なり。

◎大塚嘉樹の傳は「蒼梧遺筆」の下にあり。

ふくしよくぶるゐ　服儀部類　本朝二册

御幸行幸の服飾に關して、諸家の舊記より部類したるものなり。

ふくしんしよ　腹診書　二卷　堀井　元仙

腹部診察の事に關する醫書なり。上卷に腹診源流、腹診所據、據難經以解腹診之說。下卷を「法天爲範編」と題して、十二條を記す。寛保二年壬戌(二四〇二)竹田知鮮の序、同年の自序あり。

ふくせいえんかくかう　服制沿革考　一卷　屋代　弘賢

夏長以來の服忌令を詳に參考したるものなり。卷首には古代の沿革をも記す。寛政十年戊午(二四五八)十二月に作らる。

◎屋代弘賢の傳は「古今要聚稿」の下にあり。

ふくせいさんぱふ　福成算法　本朝一卷　神谷　定令

先に關流藤田定賢の「精要算法」二出したり、最上流會田安明先づ之れを非難して「改精算法」を著

したる以來、互に爭論數年に渉りて、後會田安明「算法非撥亂」を著したり。本書は之れを辨駁したる書にして、藤田方にて最終の論書なりとす。享和二年に成りたれども、終に上木せず、草稿の儘之れを會田に贈りたるものなり。

◎神谷定令の傳は「非改精算法」の下にあり。

ふくせいべん　復性辨　一卷　伊藤　長胤

人性もと善なれば人たるもの須らく其本性の初めに復るべきことを述べたり。唐李翺の「復性書」によって論じたるもの。寛永五年戊辰(一二二八八)の著。享保十四年己酉(一三九)平維章の跋を附して出版す。

◎伊藤長胤の傳は「蟹甘小錄」の下にあり。

ふくだいのはふ　伏題の法　本朝一卷　關　孝和

關流免許伏題の法なり。實に伏題目錄中最終に授る一書とす。年代記入なし。

◎關孝和の傳は「大成算經」の條に詳なり。

ふくだういかう　復堂遺稿　二卷　芳野　長毅

著者の遺稿。安政四年丁巳(二五一七)大久保忠邦、安井衡、龜谷世弘、秋月種樹、小笠原長行、增田貢、石井進、尾崎武等の序跋あり。

◎芳野長毅は伯仕と字し、純誠と稱し、復堂と號す。夙く儒學を好み最も易學を嗜む。龜田綾瀬に從學す。弘化二年(二五〇五)二月二十九日、年十六にして夭折す。

ふぐたんかづかう　武具短歌圖考　二卷　稻葉　通安

山鹿素行の「武具短歌」(武具、攻守、器械等の名稱を網羅し、一大長編の歌とし、幼學者の記誦に供したるもの)中の、實物を圖出したるものなり。凡そ二百種もあり。寛延三年庚午(一二四三)深井彪の序あり。著者稻葉通安は水戸藩の人にして、忍甫と字す。

ふくでんはう　福田方　十二卷　福田　有林

本書は「有林福田方」として、さいの部に解題せり。

ふくとみおぼえがき　福富覺書　本朝一卷　福富傳右衛門

諸人の覺書類數種を編輯したるもの。最初に「福富七郎兵衛覺書」を收めたり。

ふくへいしだい　復辟次第　本朝一卷

元祿二年己巳(一二四九)三月二十七日、東山院天皇へ藤原冬經復辟の時の次第を略記したるものなり。明治十四年德川昭武の藏本を謄寫したるものに據る橫綴小册子なり。

ふくやましれう　福山志料　本朝三十五卷　吉田　豐功

福山は備後十四郡中深津郡の四邊に在り城は元和六年庚申(一二一八〇)水野日向守源勝成の創築したるものなり。而して福山の所轄は深津、安那、品治、芦田、沼隈の五郡にて、本書は此の五郡の地誌なり。第一卷より第十卷まで總敍として、國郡名號、形勝、氣候、祥異、風俗、租調、名宦、人物等を掲ぐ。第十一卷より第二十六卷まで邑里として、福山治下、深津郡、安那郡、品治郡、芦田郡、沼隈郡中の各鄉邑村里を掲ぐ。第二十七卷を土産とし、第二十八卷より三十卷までを辨說として、寺社、名勝、雜事、古戰場を掲ぐ。第三十一卷より三十五卷までを附錄として、古文書、圖繪等を掲ぐ。凡て五部三十五卷あり。文化六年己巳(二四六九)福山城主阿部備中守正精の序あり。本書は吉田豐功、【助右衛門】中山光昭、【斧助】枝房盛(共に市)、鈴木圭(圭輔、菅晉師【太中】等五名、主命を奉じて撰定したるものなり。文化六年二月同人等の上啓あり。豐功は編集の總裁たり。

ふくろのき　袋之記　五卷

道德佛教等につきて一老翁の童子の問に答へたるものにて、凡て二百〇六項あり。元祿三年庚午(二三五〇)の出版なり。

ふくろのさうし　袋草紙　四卷　藤原　清輔

歌學評論の書なり。和歌會の作法より、諸式の故實六帖歌數の事、歌詩の難解等を說註したるものなり。流布する所は、貞享二年乙丑(二三四五)の刊行にて、「清輔袋草紙」と題するものなり。